

き こ ない ちょう
木古内町

おお ひら
大平遺跡(2)

—遺構編—

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

第1分冊

本文編

平成27年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



大平遺跡付近空中写真 1971年 国土地理院撮影



遺跡遠景 国土交通省北海道開発局函館開発建設部提供 NE → SW



H-23 検出状況 S→N



H-23 覆土6~8層 遺物出土状況 W→E



H-23 A-Bセクション W→E



H-23 C-Dセクション S→N



H-23 C-Dセクション東側 S→N



H-23 遺物出土状況 S→N



H-30 A-B セクション E→W



H-30 C-D セクション S→N



H-36 A-B セクション W→E

例 言

- 1 本書は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局が行う北海道新幹線建設工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成22・23年度に委託を受けて実施した、木古内町大平遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。
- 2 報告内容は、大平遺跡の平成22・23年度調査範囲(4,375㎡)の遺構と遺物である。今回は「遺構編」として竪穴住居跡・土坑・フラスコ状ピット・Tピット・桂穴状ピットの報告を行う。
- 3 大平遺跡の報告書は、平成21年度に発掘調査が行われた北海道新幹線建設工事埋蔵文化財発掘調査の報告書として、これまでに1冊が刊行されている。
- 4 調査は第2調査部第1調査課が担当した。
- 5 本書は、中山昭大、立川トマス、鈴木宏行、芝田直人、酒井秀治、佐藤和雄、熊谷仁志が執筆し、文末に執筆者を示した。編集は、熊谷が担当した。
- 6 遺物の整理は、土器等を熊谷、石器等を酒井が担当した。
- 7 現地調査および室内での写真撮影・整理は立川・中山が担当した。
- 8 基本基準杭設置については、平成22年度が株式会社光栄コンサルタント、平成23年度が函館土木調査株式会社に依頼した。
- 9 放射性炭素年代測定については、株式会社加速器分析研究所に依頼した。
- 10 胎土分析については、(株)第四紀地質研究所に依頼した。
- 11 種実同定については、パレオラボに依頼した。
- 12 土器・石器実測の一部については、株式会社トラスト技研に依頼した。
- 13 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導をいただいた。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、木古内町教育委員会、北斗市教育委員会、
知内町郷土資料館、市立函館博物館、七飯町歴史館、
北海道開発局函館開発建設部函館道路事務所
石井淳平(厚沢部町教育委員会)、右代啓視・鈴木琢也(北海道博物館)、
木元 豊(木古内町教育委員会)、高橋豊彦(知内町教育委員会)、
時田太郎(シン技術コンサルタント)、村本周三(北海道教育委員会)、
森 靖裕(北斗市教育委員会)、山田 央(七飯町歴史館)、横山英介(北海道考古学研究所)、
福田裕二・佐藤智雄・吉田 力・小林 貢(函館市教育委員会)、
成田滋彦・小田川哲彦・岩田安之(青森県埋蔵文化財調査センター)、
佐野忠史(青森県つがる市教育委員会)、村木 淳(青森県八戸市教育委員会)、
古屋敷則夫(青森県上北町教育委員会)

記号等の説明

1. 遺構の表記には以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付けた。
H：竪穴住居跡 HF：炉跡 HP：住居に伴う土坑・柱穴 HFC：住居に伴う剥片集中
HS：住居に伴う礫集中 HCb：住居に伴う炭化物集中 P：土坑 TP：Tピット
2. 遺構図等には真北を示す方位印を付した。図の天方向は、 $N-40^{\circ}-W$ である。遺構平面図の「+」は調査区または小調査区ラインの交点で、傍らの名称記号は右下の調査区を表す。また、小黑丸とその下の数字およびセクションレベルは標高（単位m）である。
3. 掲載した遺構・遺物の図は基本的に以下の縮尺にしている。ただし、遺構位置図、地形図、遺物出土状況図などは任意の縮尺であるため、各図にはスケールを付けてある。
遺 構 1：40（一部1：50） 復原土器 1：4 土器拓本 1：3
剥片石器・磨製石器 1：2 礫石器 1：3（一部1：4、1：5）
土製品・石製品 1：2
4. 写真図版では、復原土器は任意、土器拓本・礫石器はおおよそ1：3、石鏃はおおよそ1：1、剥片石器・土製品・石製品はおおよそ1：2で掲載している。石製品の一部分にはおおよそ1：3で掲載したものもある。
5. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深」（単位m）で示している。
6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字（I、II、III…）、遺構内の層序についてはアラビア数字（1、2、3…）を使用した。
7. 土層の色調は『新版標準土色帖29版』（小山・竹原2007）に準じた。
8. 火山灰は『北海道の火山灰』（北海道火山命名委員会1982）に準じ、以下の略号を用いた。
白頭山－苫小牧火山灰：B-Tm
駒ヶ岳_{d₂}火山灰：Ko-d₂
9. 遺物図右下の太ゴシックアラビア数字は掲載番号であり、これに後続する小文字アルファベット（a、b、c…）は同一個体を示す。
10. 石器の大きさは、図の最大長・最大幅・最大厚（単位cm）で示した。破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。
11. 石器の実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「|←→|」で範囲を示した。また、光沢部分、付着部分、被熱部分をドットのスクリーントーンで示した。アスファルト付着部分は黒塗りして示した。
12. 文中において「北埋調報」としているものは、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書もしくは公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書の略である。

目 次

【第1分冊】

口 絵
例 言
記号等の説明
目 次
挿図目次
表 目 次

I 緒言

1 調査要項	1
2 調査にいたる経緯	2
3 調査の経過	2
4 調査結果の概要	4

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境	7
2 周辺の遺跡	7

III 調査の方法

1 調査範囲	13
2 土工	15
3 測量と記録	15
4 整理の方法	15
5 保管	17
6 遺跡の土層	17
7 遺物の分類	17

IV 遺構

1 竪穴住居跡の調査	19
(1) 擦文文化期	19
(2) 縄文時代	26
2 土坑・フラスコ状ピット・Tピット・柱穴状ピットの調査	386
(1) 概要	386
(2) 土坑の調査	388
(3) フラスコ状ピットの調査	437
(4) Tピットの調査	528
(5) 柱穴状ピットの調査	530
一覧表	541

V 自然科学的分析

1 木古内町大平遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)	573
2 木古内町大平遺跡出土土器等の胎土についてのX線回折試験及び化学分析試験	578
3 木古内町大平遺跡出土の種実同定	593

VI まとめ	606
--------	-----

引用参考文献
報告書抄録

【第2分冊】

図版目次

写真図版

挿 図 目 次

I 緒言

図 I-1	大平遺跡の位置	2
図 I-2	大平遺跡遺構位置図	3

II 遺跡の位置と環境

図 II-1	遺跡の位置と木古内町の地形	9
図 II-2	木古内町の地勢図	9
図 II-3	木古内町内の遺跡	11
図 II-4	北海道新幹線概要図	12
図 II-5	北海道新幹線木古内町環境図	12

III 調査の方法

図 III-1	グリッド設定図・年度別調査範囲	15
図 III-2	発掘調査範囲と周辺の地形	15

IV 遺構

図 IV-1	竪穴住居跡位置図	21
図 IV-2	H-9	22
図 IV-3	H-9 セクション図 遺物出土状況図 遺物	23
図 IV-4	H-10	27
図 IV-5	H-11	30
図 IV-6	H-11 セクション図 遺物出土状況図	31
図 IV-7	H-11 遺物	32
図 IV-8	H-12	34
図 IV-9	H-12 遺物出土状況図 遺物	35
図 IV-10	H-13	36
図 IV-11	H-13 柱穴セクション図	37
図 IV-12	H-13 遺物出土状況図	38
図 IV-13	H-13 PO遺物出土状況図	39
図 IV-14	H-13 土器 (1)	40
図 IV-15	H-13 土器 (2)	41
図 IV-16	H-13 土器 (3)	42
図 IV-17	H-13 石器 (1)	43
図 IV-18	H-13 石器 (2) 土製品	44
図 IV-19	H-14	47
図 IV-20	H-14 PO遺物出土状況図 床、床直	48
図 IV-21	H-14 PO遺物出土状況図 覆土	49
図 IV-22	H-14 PO遺物出土状況図 垂直分布図	50
図 IV-23	H-14 土器 (1)	51
図 IV-24	H-14 土器 (2)	52
図 IV-25	H-14 土器 (3)	53
図 IV-26	H-14 土器 (4)	54
図 IV-27	H-14 土器 (5)	55
図 IV-28	H-14 土器 (6) 石器	56
図 IV-29	H-15・H-24	58
図 IV-30	H-15・H-24 セクション図 遺物出土状況図	59
図 IV-31	H-15 土器	60
図 IV-32	H-15 石器 (1)	61
図 IV-33	H-15 石器 (2) 土製品・H-24 土器	62
図 IV-34	H-16	64
図 IV-35	H-16 セクション図	65
図 IV-36	H-16 PO遺物出土状況図	66
図 IV-37	H-16 PO遺物出土状況セクション図	67
図 IV-38	H-16 その他遺物出土状況図	69
図 IV-39	H-16 土器 (1) 床、柱穴、床直上	72
図 IV-40	H-16 土器 (2) 覆土 3～5 層	73
図 IV-41	H-16 土器 (3) 覆土 1～2 層	74
図 IV-42	H-16 土器 (4) 覆土 1 層	75
図 IV-43	H-16 土器 (5) 覆土 1 層	76
図 IV-44	H-16 石器 (1)	77
図 IV-45	H-16 石器 (2)	78
図 IV-46	H-16 石器 (3)	79
図 IV-47	H-16 石器 (4)・土製品	80
図 IV-48	H-17	82
図 IV-49	H-17 セクション図 (1)	83
図 IV-50	H-17 セクション図 (2)	84
図 IV-51	H-17 土器出土状況図	85
図 IV-52	H-17 土器 (1)	87
図 IV-53	H-17 土器 (2)	88
図 IV-54	H-17 石器出土状況図	89
図 IV-55	H-17 石器 (1)	91
図 IV-56	H-17 石器 (2)	92
図 IV-57	H-17 石器 (3)	93
図 IV-58	H-17 石器 (4)	94
図 IV-59	H-17 石器 (5)・土製品	95
図 IV-60	H-18	96
図 IV-61	H-18 遺物出土状況図・遺物	97

図 IV-62	H-19 土器 (1)	98
図 IV-63	H-19 土器 (2)・石器	99
図 IV-64	H-20	101
図 IV-65	H-20 土器 (1)	102
図 IV-66	H-20 土器 (2)・石器	103
図 IV-67	H-21	105
図 IV-68	H-21 セクション図	106
図 IV-69	H-21 遺物出土状況図	107
図 IV-70	H-21 遺物	108
図 IV-71	H-22	110
図 IV-72	H-22 セクション図	111
図 IV-73	H-22 遺物出土状況図	112
図 IV-74	H-22 遺物	113
図 IV-75	H-23	115
図 IV-76	H-23 セクション図 (1)	116
図 IV-77	H-23 セクション図 (2)	117
図 IV-78	H-23 コンタ図 焼土など	119
図 IV-79	H-23 PO全体図	120
図 IV-80	H-23 PO全体図 垂直分布図	121
図 IV-81	H-23 PO出土状況図 A-Bセクションと土器	128
図 IV-82	H-23 PO出土状況図 C-Dセクションと土器	129
図 IV-83	H-23 土器 (1) 覆土 1 層	130
図 IV-84	H-23 土器 (2) 覆土 3 層	131
図 IV-85	H-23 PO出土状況図 覆土 4・5 層 縄文・直前段反撚	132
図 IV-86	H-23 PO出土状況図 覆土 4・5 層 自縄自巻・単軸絡条体の回転文	133
図 IV-87	H-23 PO出土状況図 覆土 4・5 層 垂直分布図 縄文・直前段反撚	134
図 IV-88	H-23 PO出土状況図 覆土 4・5 層 垂直分布図 自縄自巻・単軸絡条体の回転文	135
図 IV-89	H-23 土器 (3) 覆土 4・5 層	136
図 IV-90	H-23 土器 (4) 覆土 4・5 層	137
図 IV-91	H-23 土器 (5) 覆土 4・5 層	138
図 IV-92	H-23 土器 (6) 覆土 4・5 層	139
図 IV-93	H-23 土器 (7) 覆土 4・5 層	140
図 IV-94	H-23 土器 (8) 覆土 4・5 層	141
図 IV-95	H-23 土器 (9) 覆土 4・5 層	142
図 IV-96	H-23 土器 (10) 覆土 4・5 層	143
図 IV-97	H-23 土器 (11) 覆土 4・5 層	144
図 IV-98	H-23 PO出土状況図 覆土 6 層	145
図 IV-99	H-23 PO出土状況図 覆土 6 層 垂直分布図	146
図 IV-100	H-23 土器 (12) 覆土 6・7 層	147
図 IV-101	H-23 土器 (13) 覆土 6 層	148
図 IV-102	H-23 土器 (14) 覆土 6 層	149
図 IV-103	H-23 土器 (15) 覆土 6 層	150
図 IV-104	H-23 土器 (16) 覆土 6 層	151
図 IV-105	H-23 土器 (17) 覆土 6 層	152
図 IV-106	H-23 土器 (18) 覆土 6 層	153
図 IV-107	H-23 土器 (19) 覆土 6 層	154
図 IV-108	H-23 PO出土状況図 覆土 8 層 縄文	155
図 IV-109	H-23 PO出土状況図 覆土 8 層 単軸絡条体の回転文・直前段反撚	156
図 IV-110	H-23 PO出土状況図 覆土 8 層 垂直分布図 縄文	157
図 IV-111	H-23 PO出土状況図 覆土 8 層 垂直分布図 単軸絡条体の回転文・直前段反撚	158
図 IV-112	H-23 土器 (20) 覆土 8 層	159
図 IV-113	H-23 土器 (21) 覆土 8 層	160
図 IV-114	H-23 土器 (22) 覆土 8 層	161
図 IV-115	H-23 土器 (23) 覆土 8 層	162
図 IV-116	H-23 土器 (24) 覆土 8 層	163
図 IV-117	H-23 土器 (25) 覆土 8 層	164
図 IV-118	H-23 土器 (26) 覆土 8 層	165
図 IV-119	H-23 土器 (27) 覆土 8 層	166
図 IV-120	H-23 土器 (28) 覆土 8 層	167
図 IV-121	H-23 土器 (29) 覆土 8 層	168
図 IV-122	H-23 土器 (30) 覆土 8 層	169
図 IV-123	H-23 土器 (31) 覆土 8 層	170
図 IV-124	H-23 遺物出土状況図 土器 (32) 床面・柱穴状ビット	171
図 IV-125	H-23 石器 (1) 床	173
図 IV-126	H-23 石器 (2) 覆土 1～7 層	174

図IV-127	H-23 石器 (3) 覆土1~7層	175
図IV-128	H-23 石器 (4) 覆土8層	177
図IV-129	H-25	178
図IV-130	H-25 セクション図 (1)	179
図IV-131	H-25 セクション図 (2)	180
図IV-132	H-25 PO出土状況図	181
図IV-133	H-25 PO出土状況図 垂直分布図	182
図IV-134	H-25 遺物出土状況図	183
図IV-135	H-25 土器 (1)	185
図IV-136	H-25 土器 (2)	186
図IV-137	H-25 土器 (3)	187
図IV-138	H-25 土器 (4)	188
図IV-139	H-25 石器 (1)	189
図IV-140	H-25 石器 (2)	190
図IV-141	H-26	192
図IV-142	H-26 セクション図	193
図IV-143	H-26 遺物出土状況図	194
図IV-144	H-26 PO垂直分布図	195
図IV-145	H-26 土器 (1)	197
図IV-146	H-26 土器 (2)	198
図IV-147	H-26 土器 (3)・石器	199
図IV-148	H-27	201
図IV-149	H-28	203
図IV-150	H-28 セクション図 (1)	204
図IV-151	H-28 セクション図 (2)	205
図IV-152	H-28 PO出土状況図 垂直分布図	206
図IV-153	H-28 遺物出土状況図	207
図IV-154	H-28 土器 (1)	210
図IV-155	H-28 土器 (2)	211
図IV-156	H-28 土器 (3)	212
図IV-157	H-28 土器 (4)	213
図IV-158	H-28 石器・土製品	214
図IV-159	H-29	216
図IV-160	H-29 セクション図 (1)	217
図IV-161	H-29 セクション図 (2)	218
図IV-162	H-29 セクション図 (3)	219
図IV-163	H-29 遺物出土状況図	221
図IV-164	H-29 土器 (1)	222
図IV-165	H-29 土器 (2)	223
図IV-166	H-29 石器・土製品	225
図IV-167	H-30	227
図IV-168	H-30 PO出土状況図	228
図IV-169	H-30 遺物出土状況図 覆土1~3層	229
図IV-170	H-30 土器 (1) 覆土1~3層	233
図IV-171	H-30 土器 (2) 覆土1~3層	234
図IV-172	H-30 土器 (3) 覆土1~3層	235
図IV-173	H-30 土器 (4) 覆土1~3層	236
図IV-174	H-30 土器 (5) 覆土1~3層	237
図IV-175	H-30 遺物出土状況図 覆土4層	238
図IV-176	H-30 土器 (6) 覆土4層	239
図IV-177	H-30 土器 (7) 覆土4層	240
図IV-178	H-30 土器 (8) 覆土4層	241
図IV-179	H-30 遺物出土状況図 覆土5~7層	242
図IV-180	H-30 土器 (9) 覆土5~7層	243
図IV-181	H-30 土器 (10) 覆土5~7層	244
図IV-182	H-30 遺物出土状況図 覆土8層~床面	245
図IV-183	H-30 土器 (11) 覆土8層~床面	246
図IV-184	H-30 土器 (12) 覆土8層~床面	247
図IV-185	H-30 土器 (13) 覆土8層~床面	248
図IV-186	H-30 土器 (14) 覆土8層~床面	249
図IV-187	H-30 石器	251
図IV-188	H-31	252
図IV-189	H-31 遺物出土状況図	253
図IV-190	H-31 遺物	254
図IV-191	H-32	256
図IV-192	H-32 セクション図 遺物出土状況図 土器	257
図IV-193	H-32 石器	258
図IV-194	H-33	260
図IV-195	H-33 セクション図 遺物出土状況図	261
図IV-196	H-33 遺物	262
図IV-197	H-34	264
図IV-198	H-34 遺物出土状況図 土器	265
図IV-199	H-34 石器	266
図IV-200	H-35	268
図IV-201	H-35 セクション図	269
図IV-202	H-35 炭化物分布図 遺物出土状況図	270
図IV-203	H-35 遺物	271
図IV-204	H-36	273
図IV-205	H-36 遺物出土状況図	274

図IV-206	H-36 遺物出土状況図 PO土器	275
図IV-207	H-36 土器 (1)	277
図IV-208	H-36 土器 (2)	278
図IV-209	H-36 土器 (3)	279
図IV-210	H-36 土器 (4)	280
図IV-211	H-36 石器	281
図IV-212	H-37	284
図IV-213	H-37 セクション図	285
図IV-214	H-37 遺物出土状況図	286
図IV-215	H-37 土器 (1)	287
図IV-216	H-37 土器 (2)・石器 (1)	288
図IV-217	H-37 石器 (2)	289
図IV-218	H-38	293
図IV-219	H-38 セクション図	294
図IV-220	H-38 黄褐色土貼床範囲	295
図IV-221	H-38 遺物出土状況図 土器 (1)	296
図IV-222	H-38 土器 (2)・石器 (1)	297
図IV-223	H-38 石器 (2)・土製品	298
図IV-224	H-39	299
図IV-225	H-39 セクション図	300
図IV-226	H-39 遺物出土状況図 土器 (1)	301
図IV-227	H-39 土器 (2) 石器・土製品	302
図IV-228	H-41	304
図IV-229	H-41 セクション図	305
図IV-230	H-41 遺物出土状況図 (1)	306
図IV-231	H-41 遺物出土状況図 (2)	307
図IV-232	H-41 土器 (1)	310
図IV-233	H-41 土器 (2)	311
図IV-234	H-41 土器 (3)	312
図IV-235	H-41 石器 (1)	313
図IV-236	H-41 石器 (2)	314
図IV-237	H-41 石器 (3)・土製品	315
図IV-238	H-42	317
図IV-239	H-43	318
図IV-240	H-43 セクション図	319
図IV-241	H-43 遺物出土状況図	320
図IV-242	H-43 PO全層と垂直分布図	321
図IV-243	H-43 遺物出土状況図 垂直分布図 覆土下位~床直上	325
図IV-244	H-43 土器 (1)	326
図IV-245	H-43 土器 (2)	327
図IV-246	H-43 土器 (3)	328
図IV-247	H-43 遺物出土状況図 垂直分布図 覆土	329
図IV-248	H-43 土器 (4)	330
図IV-249	H-43 土器 (5)	331
図IV-250	H-43 土器 (6)	332
図IV-251	H-43 遺物出土状況図 盛土下	333
図IV-252	H-43 遺物出土状況図 垂直分布図 盛土下	334
図IV-253	H-43 土器 (7)	335
図IV-254	H-43 土器 (8)	336
図IV-255	H-43 土器 (9)	337
図IV-256	H-43 土器 (10)	338
図IV-257	H-43 遺物出土状況図 垂直分布図 盛土中~盛土下	339
図IV-258	H-43 土器 (11)	340
図IV-259	H-43 石器 (1)	341
図IV-260	H-43 石器 (2)	343
図IV-261	H-43 石器 (3)	344
図IV-262	H-43 石器 (4)	345
図IV-263	H-43 石器 (5)	346
図IV-264	H-43 石器接合資料 (1)	349
図IV-265	H-43 石器接合資料 (2)	350
図IV-266	H-43 石器接合資料 (3)	351
図IV-267	H-43 石器接合資料 (4)	352
図IV-268	H-43 石器接合資料 (5)	353
図IV-269	H-44	355
図IV-270	H-44 セクション図	356
図IV-271	H-44 遺物出土状況図 土器	357
図IV-272	H-44 石器	358
図IV-273	H-45	360
図IV-274	H-45 遺物	361
図IV-275	H-46	363
図IV-276	H-47	364
図IV-277	H-48	366
図IV-278	H-48 セクション図 遺物出土状況図	367
図IV-279	H-48 遺物	368
図IV-280	H-49	370
図IV-281	H-49 遺物出土状況図	371
図IV-282	H-49 土器 (1)	372

図IV-283	H-49 土器 (2)	373
図IV-284	H-49 石器	374
図IV-285	H-51	376
図IV-286	H-51 遺物	377
図IV-287	H-52	379
図IV-288	H-53	381
図IV-289	H-54	382
図IV-290	H-55	383
図IV-291	H-55 遺物出土状況図	384
図IV-292	H-55 遺物	385
図IV-293	土坑位置図	387
図IV-294	P-4・5	389
図IV-295	P-6・7・29	391
図IV-296	P-8・11	393
図IV-297	P-9・10	396
図IV-298	P-9・10 遺物	397
図IV-299	P-12・13	399
図IV-300	P-14・15	400
図IV-301	P-17	401
図IV-302	P-19	403
図IV-303	P-20・21・28	405
図IV-304	P-22・26・27	408
図IV-305	P-22・26・27 遺物	409
図IV-306	P-23・30	411
図IV-307	P-24・25・31	413
図IV-308	P-32・34・35	415
図IV-309	P-36・39	417
図IV-310	P-37・38	419
図IV-311	P-37・38 PO土器出土状況図 垂直分布図(1)	420
図IV-312	P-37・38 PO土器出土状況図 垂直分布図(2)	421
図IV-313	P-37・38 土器 (1)	423
図IV-314	P-37・38 土器 (2)	424
図IV-315	P-37・38 土器 (3)	425
図IV-316	P-37・38 土器 (4)	426
図IV-317	P-37・38 石器出土状況図 石器	427
図IV-318	P-40・41・51	429
図IV-319	P-52	431
図IV-320	P-55・58・59・61	433
図IV-321	P-65・68・77・87	435
図IV-322	P-96・104・114	437
図IV-323	P-250	439
図IV-324	遺構位置図	440
図IV-325	P-16	441
図IV-326	P-42	443
図IV-327	P-43	445
図IV-328	P-44	446
図IV-329	P-45	447
図IV-330	P-46	449
図IV-331	P-47・48	451
図IV-332	P-49	453
図IV-333	P-50・53	455
図IV-334	P-56・57	457
図IV-335	P-60	458
図IV-336	P-60遺物 (1)	459
図IV-337	P-60遺物 (2)・P-76	461

図IV-338	P-62	463
図IV-339	P-63	464
図IV-340	P-64	466
図IV-341	P-64 遺物	467
図IV-342	P-66・83	469
図IV-343	P-67	470
図IV-344	P-67 遺物	471
図IV-345	P-69・80	473
図IV-346	P-70	476
図IV-347	P-70 遺物	477
図IV-348	P-71・102	478
図IV-349	P-71・73・102 遺物	479
図IV-350	P-72	481
図IV-351	P-74	482
図IV-352	P-75・89	483
図IV-353	P-78	486
図IV-354	P-78 遺物	487
図IV-355	P-79	489
図IV-356	P-81	490
図IV-357	P-82・90	491
図IV-358	P-84・85	493
図IV-359	P-86・97	495
図IV-360	P-88	497
図IV-361	P-92	500
図IV-362	P-93・94	501
図IV-363	P-95・113	502
図IV-364	P-98	503
図IV-365	P-99	505
図IV-366	P-100	507
図IV-367	P-100 遺物	508
図IV-368	P-103	509
図IV-369	P-105・106	511
図IV-370	P-106 遺物	513
図IV-371	P-107	514
図IV-372	P-107 遺物・P-110	515
図IV-373	P-111	517
図IV-374	P-112	518
図IV-375	P-112 石器・P-115	519
図IV-376	P-117	521
図IV-377	P-117 遺物	523
図IV-378	P-122・150	525
図IV-379	P-157	526
図IV-380	P-158・182	527
図IV-381	TP-1・2	529
図IV-382	P-54・109・123・124・125・143・144・145	533
図IV-383	P-152～154・183・184・159・160・156	535
図IV-384	P-185・201・226・228・229・230	539
図IV-385	P-155・207～213・215・218～223	540

V 自然科学的分析

図V-1	暦年較正年代グラフ	577
図V-2	館層土壌サンプル採取位置図	582
図V-3	ダイヤグラム	583
図V-4	化学分析結果領域分布図	584

表 目 次

I 緒言

表I-1	年度別遺構数・遺物点数一覧	6
表I-2	出土土器点数一覧	6
表I-3	出土石器等点数一覧	6

II 遺跡の位置と環境

表II-1	木古内町の遺跡一覧	10
-------	-----------	----

IV 遺構

表IV-1	遺構規模一覧(竪穴住居跡)	541
表IV-2	遺構規模一覧(土坑)	541
表IV-3	遺構出土土器一覧	543
表IV-4	遺構出土石器等一覧	552
表IV-5	遺構出土掲載復原土器一覧	556
表IV-6	遺構出土掲載拓影土器一覧	559
表IV-7	遺構出土掲載石器等一覧	565
表IV-8	H-43接合資料一覧	572

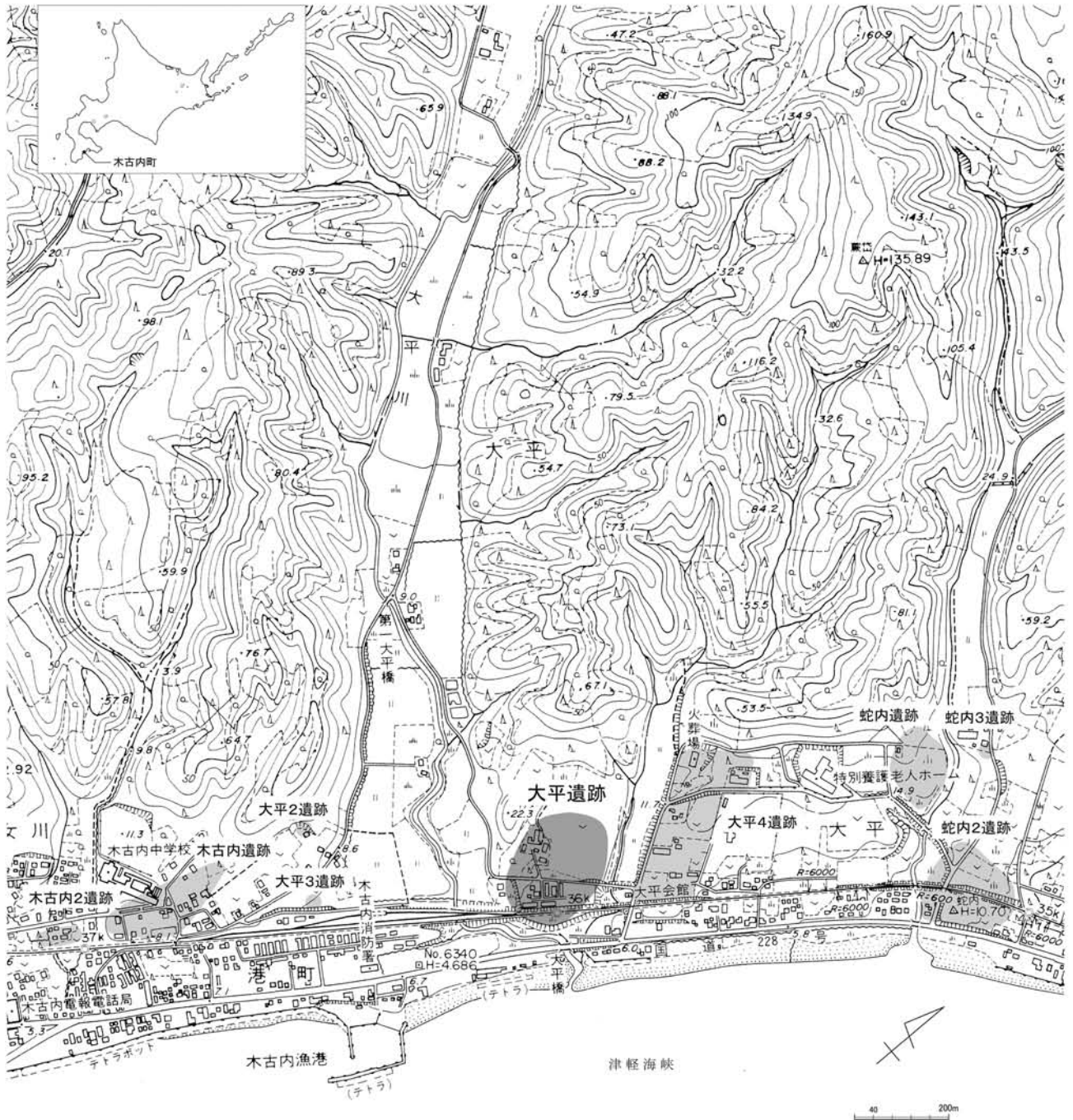
V 自然科学的分析

表V-1	放射性炭素測定結果	575
表V-2	放射性炭素年代測定結果	576
表V-3	胎土性状表	585
表V-4	化学分析表	587
表V-5	タイプ分類表	589
表V-6	組成分類表	591
表V-7	大平遺跡から出土した炭化種実 (1)～(15)	600
表V-8	大平遺跡から出土した炭化種実(16)	603

I 緒 言

1 調査要項

- 事業名** 北海道新幹線建設事業地区における埋蔵文化財包蔵地の発掘調査及びそれに関連する業務
- 事業委託者** 独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北海道新幹線建設局
- 事業受託者** 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
- 遺跡名** 大平遺跡（北海道教育委員会登録番号：B-05-07）
- 所在地** 上磯郡木古内町字大平63
- 調査期間** 平成22年5月6日～平成23年3月31日（発掘期間：平成22年5月6日～11月5日）
平成23年4月1日～平成24年3月31日（発掘期間：平成23年5月9日～11月11日）
平成24年4月1日～平成28年3月31日（整理期間）
- 調査面積** 4,375m²
- 調査体制**
- 理事長 坂本 均（平成22～27年度）
越田賢一郎（平成27年度）
- 副理事長 畑 宏明（平成24～26年度）
中田 仁（平成27年度）
- 専務理事 松本昭一（平成22年度）
中田 仁（平成23～26年度）
山田寿雄（平成27年度）
- 常務理事 畑 宏明（平成22・23年度）
千葉英一（平成24～26年度）
長沼 孝（平成27年度）
- 第1調査部 部長 千葉英一（平成22年度）
- 第2調査部 部長 三浦正人（平成23～27年度）
- 第1調査部第3調査課 課長 鈴木 信（平成22年度）
- 第2調査部第2調査課 課長 熊谷仁志（平成23年度）（平成23年度発掘担当者）
- 第2調査部第1調査課 課長 熊谷仁志（平成24・25年度）
中山昭大（平成26・27年度）
- 主査 立川トマス（平成22・23年度）（平成22・23年度発掘担当者）
- 主査 鈴木宏行（平成23年度）
- 主査 芝田直人（平成22・23年度）（平成22年度発掘担当者）
- 主査 酒井秀治（平成25～27年度）
- 主任 酒井秀治（平成22～24年度）（平成22・23年度発掘担当者）
- 主任 佐藤和雄（平成22・23年度）（平成22・23年度発掘担当者）
- 主任 熊谷仁志（平成26・27年度）



(平成6年日本鉄道建設公団札幌工事事務所が調製した1:10000図を加工して使用)

図 I - 1 大平遺跡の位置

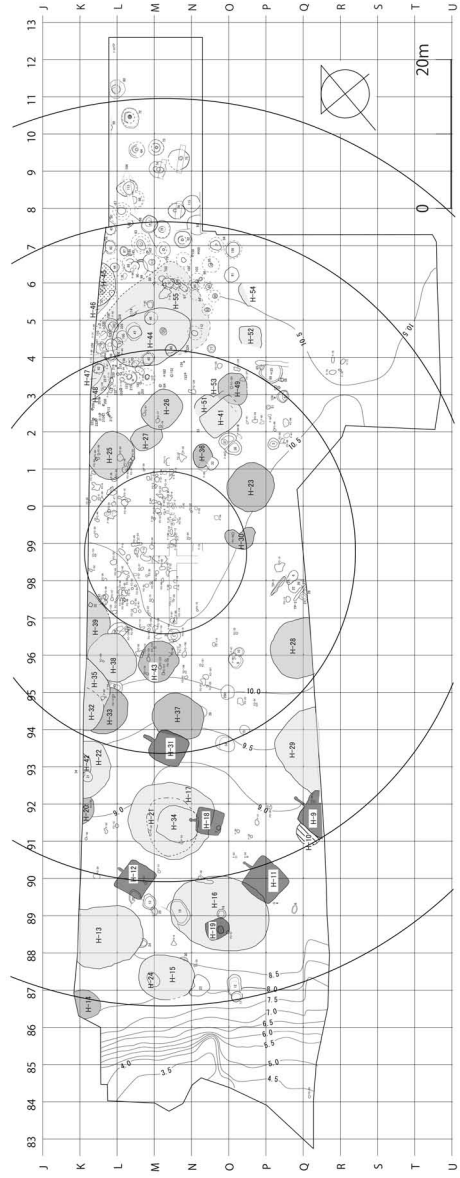
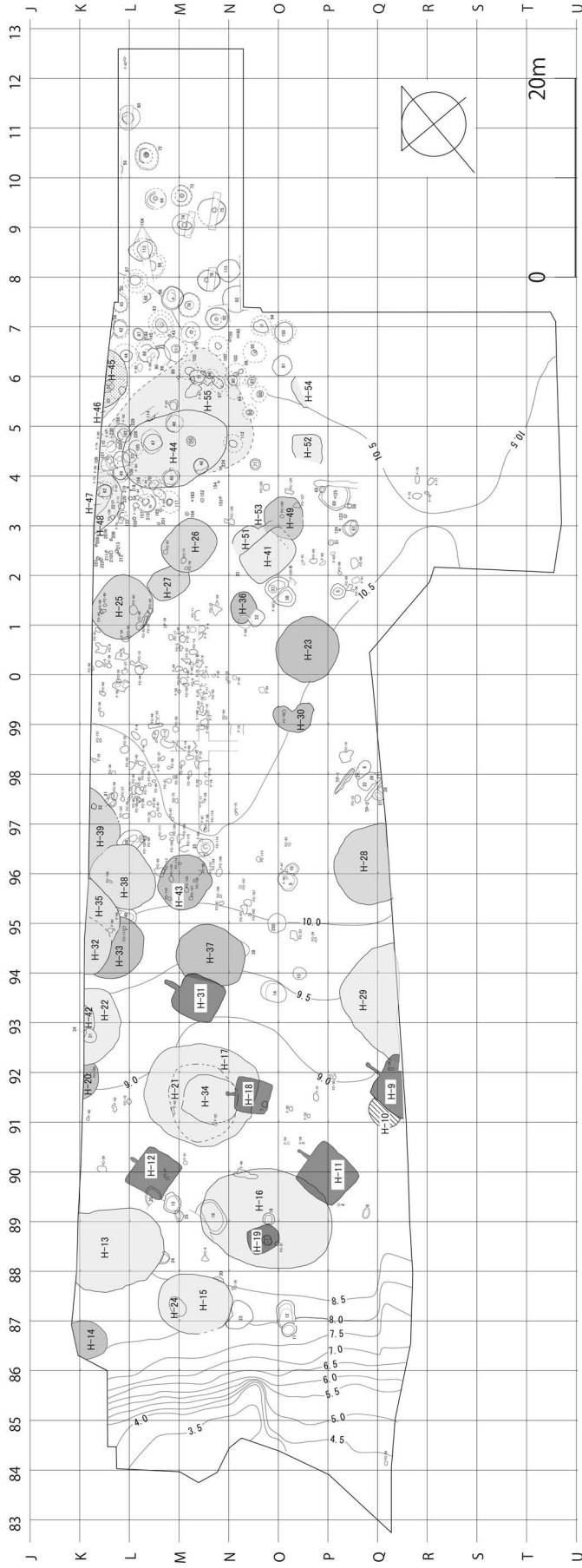


图 I-2 大平遺跡遺構位置图

2 調査にいたる経緯

「北海道新幹線」事業は、全国新幹線鉄道整備法（昭和45年法律第71号）に基づき、整備計画が定められている。平成10年1月には、政府・与党整備新幹線検討委員会において、新規着工区間として3線3区間の着工が認められ、平成12年12月の同委員会では、すでに着工している区間と新たに着工する区間を併せて、平成13年から3線6区間として整備を推進することとなった。平成17年4月27日、北海道新幹線・新青森－新函館間の工事实施計画認可が国土交通省から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、「鉄建機構」という）へ交付された。

鉄建機構は、北海道教育委員会（以下、「道教委」という）に北海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議書を提出した。それを受けて道教委は路線内および付帯施設建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、木古内町内では蛇内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、木古内遺跡、木古内2遺跡の5遺跡について工事計画の変更が困難な場合は発掘調査が必要とされた。木古内町内では、平成21～23年度にかけて（財）北海道埋蔵文化財センター（以下、「センター」という）により、5遺跡32,626㎡の発掘調査が行われた。

3 調査の経過

(1) 発掘経過

平成22年度：4月中旬より重機による表土除去を開始した。5月6日から調査を開始し、基準杭・方格杭打設を行う。93～97ラインは電柱が撤去されていなかったことから調査を行わず、撤去後にOライン以降の調査を行った。遺跡全体の堆積状況を把握するためB調査坑の再調査、北東－南西方向1本（Mライン＋2m）および北西－南東方向2本（88ライン＋2m・98ライン＋3m）に幅1mのトレンチ調査を行った。その結果、大型の竪穴住居跡や遺物が多量に出土する盛土遺構などが検出されることが判明した。このことから、平成22年度の調査予定範囲は2ラインまでの2,910㎡であったが、K～O93～97区の400㎡および97ライン以降の遺構調査範囲365㎡を平成23年度に行うこととして、養生等を行い11月5日に調査を終了した。平成22年度の調査終了面積は2,145㎡である。

平成23年度：5月9日から調査開始。基準杭・方格杭打設を行い、平成22年度に未了だった765㎡の調査から再開した。竪穴住居跡等の遺構が多数検出され、盛土遺構からは多量の遺物が出土した。2ライン以降の範囲は建物の撤去が8月上旬にずれ込んだため、8月下旬から調査を開始した。また、隣接するJR饋電区分所前の355㎡が追加となり、9月中旬から調査を開始した。地表面は削平され包含層はほとんど残っていなかったが、竪穴住居跡や多数のフラスコ状ピットなどを検出した。調査は11月11日に終了した。平成23年度の調査終了面積は2,230㎡で、2年間の調査面積は4,375㎡となる。

(2) 整理経過（遺構分）

平成22年度：現地調査中に遺物水洗、遺物一次分類、遺物台帳作成、遺物注記。11月から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理。

平成23年度：現地調査中に遺物水洗、遺物一次分類、遺物台帳作成、遺物注記。

4月1日から整理作業開始。遺物注記、破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理・撮影。

平成24～26年度：4月1日から整理作業開始。破片接合、土器復原、遺物実測・墨入れ、遺構素図作成、写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆。

平成27年度：4月1日から整理作業開始。写真整理・撮影、図版作成、原稿執筆、遺物収納。

4 調査結果の概要

遺跡は、JR木古内駅から北東へ約2 km、大平川と孫七川に挟まれた低位海岸段丘上に立地し、標高は8～11mである。遺跡の周知範囲はこの段丘の海側、約40,000m²の広さになる。周知範囲の中にはJR津軽海峡線が通っており、昭和5年に当時の上磯線が上磯駅から木古内駅まで延伸開業された際の建設工事によってこの範囲は削平されたと考えられる。

今回の調査報告範囲は周知範囲の南東側、JR津軽海峡線と町道大平2線に挟まれた場所になる。調査前は宅地、牛舎、鶏舎、倉庫として利用されており、地表面はこれらのために一部削平されていた。調査範囲東側のJR江差線近くは、海に向かってのぼる斜面を削平して平坦にしている。

北海道新幹線にかかる発掘調査は平成21年度に町道大平2線を挟んだ北側411m²の調査を行っており、平成22・23年度調査面積の4,375m²を加えると4,786m²になる。また、平成25年度には高規格幹線道路函館江差自動車道の建設に伴う発掘調査でJR津軽海峡線より海側の1,700m²の調査が行われている。これらを合わせた発掘調査完了面積は、周知範囲面積の約16%になる。

平成21年度の調査では、縄文時代前期後半の竪穴住居跡8軒、土坑2基、フラスコ状ピット1基を検出し、土器15,574点、石器等7,220点、合計22,794点が出土している。平成22年度に報告書が刊行されている（北埋調報280）。

平成22・23年度調査では、竪穴住居跡45軒、土坑50基、フラスコ状ピット63基、柱穴状ピット36基、Tピット2基、剥片集中130か所、礫集中2か所、焼土94か所、盛土遺構1か所を検出した。遺物は土器約120万点、石器等約56万点、合計176万点が出土している。今回は遺構編として竪穴住居跡、土坑、フラスコ状ピット、Tピット、柱穴状ピットの報告を行う。

竪穴住居跡は、擦文文化期6軒、後期前葉1軒、中期初頭1軒、前期後半37軒が確認されている。擦文文化期の竪穴住居跡では5軒でカマドが検出され、煙道が北西方向につけられている。8世紀中葉5軒、9世紀中葉が1軒である。木古内町において擦文文化期の竪穴住居跡が検出されたのは木古内遺跡に次いで2例目である。後期前葉は、石囲い炉のあるものが1軒検出されている。前期後半は、円筒土器下層b-c式期9軒、d₁式期が6軒、d₂式期が22軒である。特徴としてはベンチ状構造のあるもの13軒、周溝のあるもの4軒、外柱穴のあるもの7軒、葺土構造が確認できるもの7軒、火災住居2軒が検出されている。また、覆土中から大量の遺物が出土しているものが10軒確認されており、盛土遺構の形成に伴い埋められたと考えられる。土坑は、前期前半1基、前期後半35基、前期後半～中期前半7基、中期前半3基、晩期後葉2基、時期不明2基である。前期後半のP-9では異形石槍が出土している。フラスコ状ピットは、前期後半～末葉のもの54基、前期後半～中期前半のもの7基、中期初頭2基である。底面の直径が2m前後のものが多く、中心付近に小ピットを伴うものが33基確認されている。調査範囲の北東側に集中して検出され、平成21年度調査範囲の南東側からも1基が検出されている。柱穴状ピットは36基が検出されている。Tピットは2基が検出されている。いずれも溝状のものである。盛土遺構・焼土・剥片集中・礫集中については、盛土遺構・包含層編で報告を行う。

今報告の遺構出土遺物は土器等210,831点、石器等153,805点、合計364,636点である。土器は前期後半が大半を占め、中期前葉・後期前葉・晩期後葉・擦文土器などがわずかに出土している。前期後半はⅡ群B-3類土器が特に多く出土している。石器はスクレイパー、たたき石、すり石（北海道式石冠・扁平打製石器を含む）が多く出土し、次いで石鏃、石槍・ナイフ類、石斧、石錐、石核などが出土している。土製品は、有孔土製円板、焼成粘土塊などが出土している。石製品は、異形石器、異形石槍、垂飾、玦状耳飾り、有孔石製品、線刻礫、軽石製石製品（北海道式石冠状、すり石状、凹み石状、石斧状、石錘もしくは浮き、球状など）などが出土している。（酒井）

表 I - 1 年度別遺構数・遺物点数一覧

年度	調査面積 (㎡)	遺構名					遺構名	遺物点数				
		竪穴住居跡	土坑	フラスコ状ピット	Tピット	柱穴状ピット		土器	石器等	小計	合計	
平成21年度	411	8	2	1			遺構	7,473	2,645	10,118	22,794	
							包含層	8,101	4,575	12,676		
							小計	15,574	7,220			
平成22・23年度	4,375	45	50	63	2	36	遺構	竪穴住居跡	189,689	142,684	332,373	364,636
								土坑	16,543	6,924	23,102	
								フラスコ状ピット	4,438	4,086	8,454	
								Tピット	150	91	241	
								柱穴状ピット	11	20	466	
								小計	210,831	153,805		
合計	4,786	53	52	64	2	36	合計	226,405	161,025		387,430	

表 I - 2 出土土器点数一覧

遺構名	分類																		合計			
	IA	IB-3	IB-4	IIA	IIB	IIB-1	IIB-2	IIB-3	IIB-4	IIB-5	IIIA	IIVA	V	VA	VC	VII	焼成粘土塊	土製品		有孔土製門板	粘土	未焼成粘土塊
竪穴住居跡	1		48	411	78,401	287	11,392	64,010	18,034	13,056	2,209	264	48	4	811	421	210	1	72	7	2	189,689
土坑		3	15	19	5,275	397	837	6,158	1,100	2,581	14	1			113	7	21		2			16,543
フラスコ状ピット				1	1,532			120	267	1,988	517						11			2		4,438
Tピット				8	115					1		2					1					150
柱穴状ピット					4					6	12											11
合計	1	3	63	439	85,327	684	12,229	70,311	19,401	17,632	2,741	267	48	4	924	428	243	1	74	9	2	210,831

表 I - 3 出土石器等点数一覧

遺構名	分類																							合計							
	石鏃	石錐	石槍	ナイフ	石槍・ナイフ類	つまみ付ナイフ	スクレイパー	楔形石器	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	剥片	石斧	石のみ	擦り切り残片	たたき石	凹み石	台石	すり石	石皿	砥石	石鏝	石錘		石器	石核	加工痕ある礫	有意の礫	礫	礫片	石製品
竪穴住居跡	115	56	81	17		155	815	1	121	487	400	124,105	92	10	9	684	13	25	509	26	38	49	18	52	186	260	130	11,593	2,576	61	142,684
土坑	3	1	1	1		14	53		8	21	22	5,995	5	1		27	3	2	17	1				3	13	2		646	82	3	6,924
フラスコ状ピット	8	2	8	1	1	12	51	1	8	31	16	1,563	7		1	69	9	6	48	3	3	1		7	8	7		1,992	210	13	4,086
Tピット											2	55				1			1										29	3	91
柱穴状ピット								1				7							2										9		20
合計	126	59	90	19	1	181	920	2	137	541	438	131,725	104	11	10	781	25	33	577	30	41	50	18	62	207	269	130	14,269	2,871	78	153,805

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

大平遺跡の所在する上磯郡木古内町は、北海道南西部の渡島半島南側に位置する。津軽海峡に面し、亀田半島と松前半島の境目にあたる。北東側で北斗市、北側で厚沢部町、西側で上ノ国町、南西側で知内町と町界を接している（図Ⅱ－1）。函館市からは西へ約40kmである。町域はおよそ東西22.5km、南北17.7km、総面積は221.89km²、人口は平成28年2月末で4,515人である。南東側は津軽海峡に面し、北～北西側は300～700m級の渡島丸山、桂岳、梯子岳、瓜谷山、焼山、尖岳、袴腰岳などの山々に囲まれていて、町域の約9割（約199km²）が山岳・丘陵地帯である（図Ⅱ－1）。市街中心地は木古内川、佐女川河口周辺の平坦部に形成されている。平坦地は、海岸線の海岸段丘上と津軽海峡に注ぐ河川によって形成された河岸段丘上に帯状にある。地質図によると、これらの段丘は泥岩砂質シルト岩互層・砂岩及び酸性凝灰岩で形成された中新世後期の厚沢部層などや、礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物である（図Ⅱ－2）。この上に多くの遺跡が立地している。

木古内の地名は、アイヌ語の「リコナイ（高く昇る源）」、または「リロナイ（潮の差し入る川）」から転訛したものと言われている。しかし「リコナイ」の記述が明治以前にみられないことから「リロナイ」が語源と考えるのが正しいとされる（木古内町ホームページ）。角川日本地名大辞典によると、大平の地名は昭和4年につけられ、由来は江戸期の松浦武四郎『竹四郎廻浦日記』に「ヲヒラ川 ヌフケサワの川ノ名也」と見え、地内は初めヌフケサワと呼ばれ、そこに流れるヲヒラ川が大平に転じたものと思われる、とある。「ヲヒラ」はアイヌ語の地形地名「o-pira：（川）口にある崖」があてられる。遺跡の南側にある段丘崖を指すと考えられる。

大平遺跡は、JR木古内駅から北東へ約2km離れたところに位置する。大平川と孫七川に挟まれた海岸段丘上に立地している。調査範囲は海岸線からは約0.2km入っていて、標高は8～12mほどの平坦地にある。遺跡の指定範囲はおおよそ4万m²である。地質図によると、遺跡は礫・砂及び泥で形成された中位段丘堆積物の上に立地している（図Ⅱ－2）。遺跡からは南西側に松前半島の燈明岳、岩部岳、大千軒岳など、北東側には函館山や渡島丸山などが見え、天気の良い時は南東側に青森県の下北半島を望むことが出来る。

2 周辺の遺跡

木古内町内の遺跡は、海岸線に沿った段丘上に集中することが知られている。平成26年度末現在、木古内町内で周知されている遺跡は61か所である（図Ⅱ－3）。このうち、これまでに調査あるいは一部調査の行われた遺跡は31遺跡である（表Ⅲ－1）。近年、緊急発掘調査が増えており、農道整備事業で9遺跡、砂利採取事業で2遺跡、北海道新幹線建設事業で6遺跡、高規格道路建設事業で12遺跡の調査が行われている。大平遺跡の周辺に所在する遺跡は、大平2遺跡（21）、大平3遺跡（22）、大平4遺跡（29）、蛇内遺跡（8）、蛇内2遺跡（19）、蛇内3遺跡（20）、札苅遺跡（4）、札苅2遺跡（30）、木古内遺跡（3）、木古内2遺跡（28）がある。北海道新幹線建設関係で調査が行われた遺跡は、本遺跡のほか、木古内町市街地側に木古内遺跡・木古内2遺跡・新道4遺跡（27）、北斗市側に大平4遺跡・蛇内2遺跡である。（ ）は登載番号。上記のうち調査された遺跡について概略を記す。

木古内遺跡（3）：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は12,020m²である。主に縄文早期後半・前期後半・後期前葉・擦文文化期の遺構・遺物が確認されてい

る。遺構は、竪穴住居跡31軒、土坑152基などのほか、擦文文化期とみられる溝状遺構1か所がみつまっている（北埋調報304）。擦文文化期の竪穴住居跡を木古内町で初めて確認している。

札苅遺跡（4）：昭和46～48年度に学術調査353m²（北海道開拓記念館1976）、昭和48年度に国道拡幅に伴う調査789m²（木古内町教育委員会1974）、昭和60年度に津軽海峡線建設工事に伴う調査1,753m²（北埋調報34）が行われている。主に縄文晩期前葉～中葉の遺構・遺物が確認されており、竪穴住居跡2軒、土坑64基などがみつまっている。

大平遺跡（7）：平成21～23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は4,786m²である。主に縄文前期後半・晩期中葉・擦文文化期の遺構・遺物を確認している。平成21年度に調査を行った範囲については、報告書（北埋調報280）が刊行されている。平成22・23年度に調査を行った範囲は、本報告（北埋調報321）が遺構編、平成28年度報告が盛土遺構・包含層編となる。

高規格道路建設事業では、平成25年度に調査が行われた。本報告範囲の津軽海峡線を挟んだ海側にあたる。調査面積は1,700m²である。主に縄文後期後葉・晩期前葉・中葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、土坑8基、小ピット2基、焼土4か所である（「調査年報」25）。平成27年度現在、整理作業中である。

蛇内遺跡（8）：平成12年度に広域営農団地農道整備に伴い1,200m²の発掘調査が行われた。縄文前期・中期の遺構・遺物が確認されている。遺構は竪穴住居跡8軒、土坑39基、捨て場遺構などを確認されている（木古内町教育委員会1997）。

蛇内2遺跡（19）：平成21～23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は11,357m²である。縄文早期後半・前期・中期後半・後期前葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、竪穴住居跡15軒、土坑87基、フラスコ状土坑9基が確認されている（北埋調報281・292）。

新道4遺跡（27）：昭和59～61年度に津軽海峡線建設、平成25年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は15,778m²である。旧石器時代、縄文早期～晩期の遺構・遺物を確認している。竪穴住居跡64軒、土坑381基などのほか、後期前葉の盛土遺構がみつまっている（北埋調報33・43・52・320）。

木古内2遺跡（28）：平成22・23年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は1,280m²である。主に縄文前期後半・後期前葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は、縄文前期後半の竪穴式住居跡6軒、剥片集中1か所がみつまっている（北埋調報278・293）。

大平4遺跡（29）：平成21・22年度に北海道新幹線建設に伴う発掘調査が行われた。調査面積は3,183m²である。縄文早期後半・前期後半・晩期中葉の遺構・遺物を確認している。遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑28基、剥片集中14か所が確認されている（北埋調報280・292）。

高規格道路建設事業では、平成24～26年度に調査が行われた。調査面積は15,593m²である。遺構は、竪穴住居跡12軒、土坑22基、Tピット4基、焼土31か所、剥片集中15か所が確認されている（「調査年報」25・26・27）。平成27年度現在、整理作業中である。

（酒井）

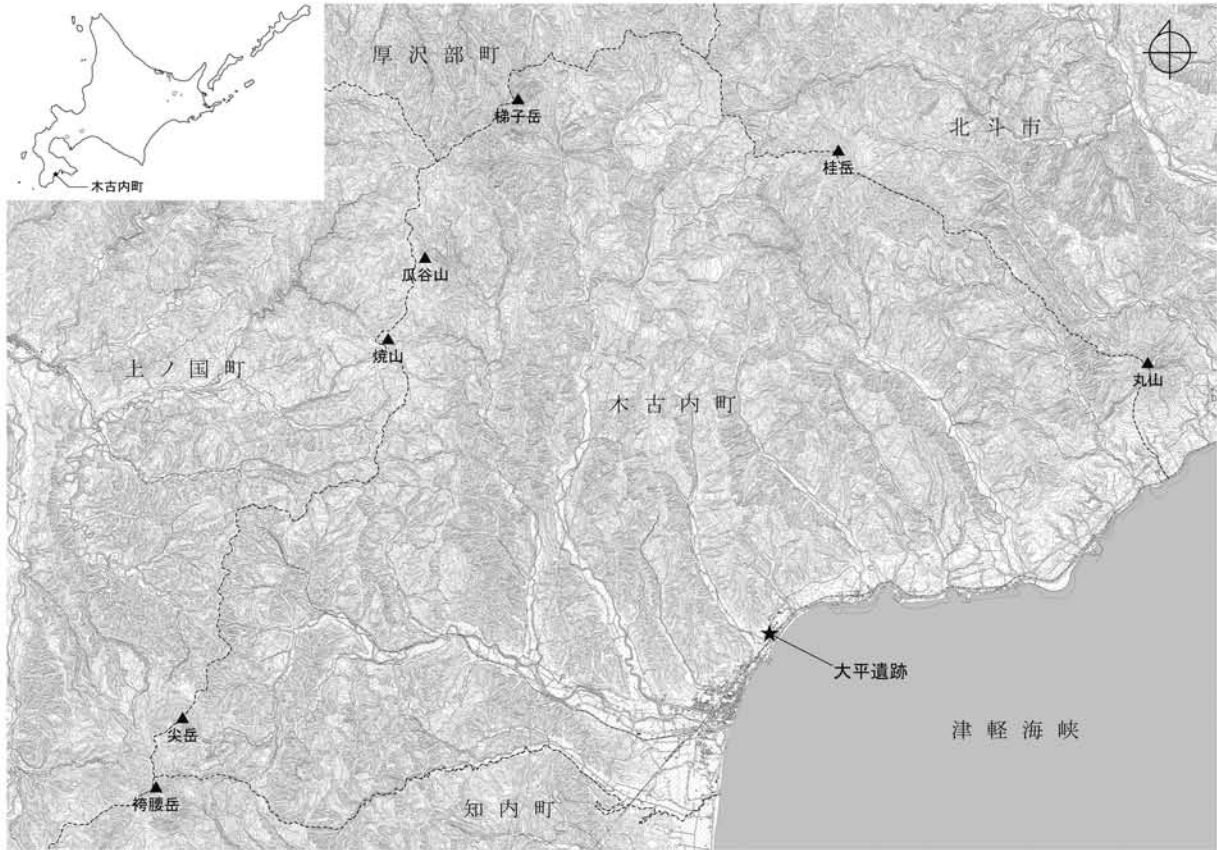


図 II - 1 遺跡の位置と木古内町の地形 (60万分の1) (平成18年国土地理院刊行の数値地図25000「函館」を加工して使用)

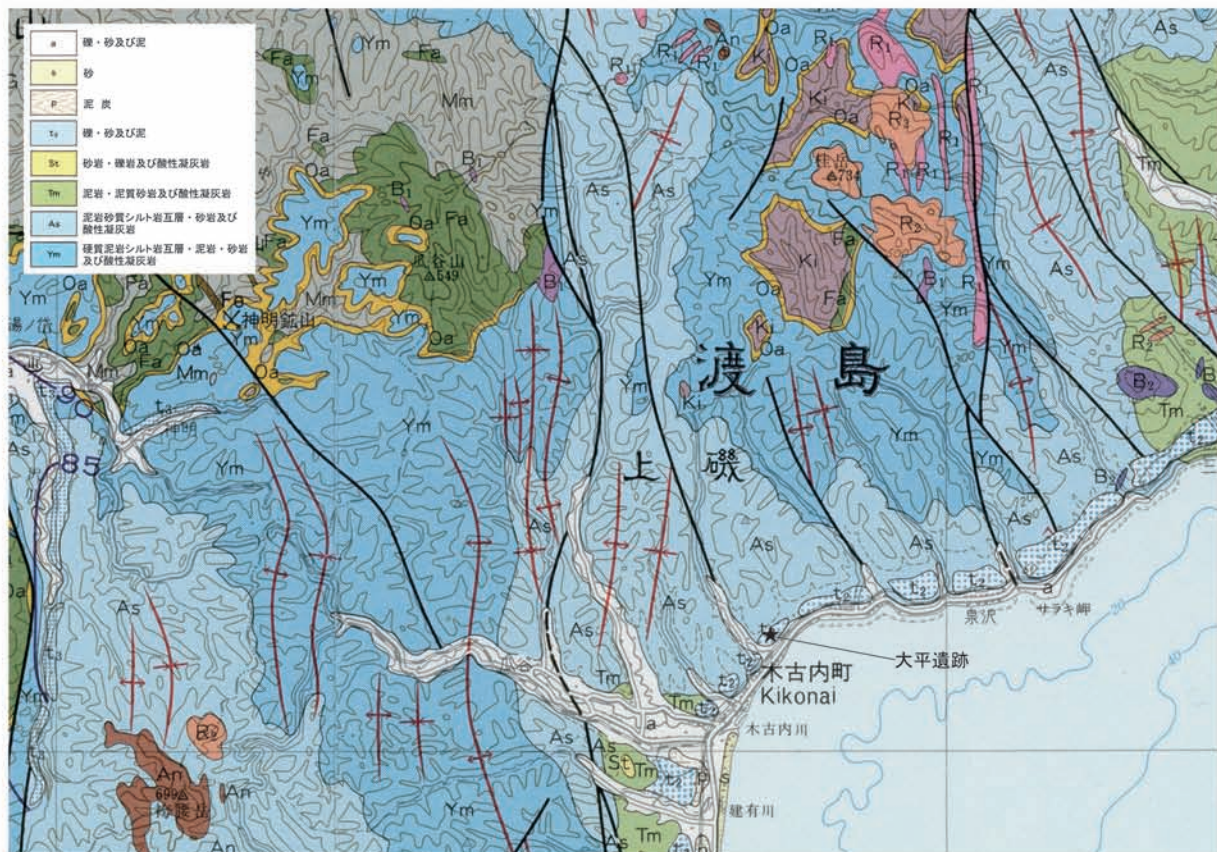


図 II - 2 木古内町の地質図 (60万分の1) (昭和59年通商産業省工業技術院地質調査所発行の1:200,000地質図「函館及び渡島半島」を加工して使用)

表Ⅱ－1 木古内町の遺跡一覧

登載番号	遺跡名	種別	主な時期	調査歴(報告年)
B-05-01	新道遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-02	大釜谷遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-03	木古内遺跡	集落跡	縄文(前期・中期)・擦文	2010・2011 道埋文(2013)
B-05-04	札苺遺跡	集落跡	縄文(晩期)・近世	1971・1972 北海道開拓記念館(1976)
				1973 町教委(1974)
				1983 道埋文(1986)
B-05-05	釜谷遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	1991～1993 町教委(1999)
B-05-06	泉沢遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-07	大平遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)・擦文	2009～2011・2013 道埋文(2011・2015本書)
B-05-08	蛇内遺跡	集落跡	縄文(前期～後期)	2000 町教委(2004)
B-05-09	新栄町遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-10	新道3遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	1996 町教委(1997)
B-05-11	新道2遺跡	集落跡	縄文(前期)	1997～2002 町教委(1999・2004)
B-05-12	中野A遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-13	中野B遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-14	瓜谷遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-15	大釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文(前期・中期)	
B-05-16	釜谷2遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-17	橋呉遺跡	遺物包含地	縄文・続縄文(前半期)	
B-05-18	幸連遺跡	遺物包含地	縄文(中期・後期)	
B-05-19	蛇内2遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	2009～2011 道埋文(2011・2012)
B-05-20	蛇内3遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-21	大平2遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-22	大平3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	
B-05-23	高校高台遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	
B-05-24	鶴岡遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-25	鶴岡2遺跡	遺物包含地	縄文(前期～後期)・続縄文	1988・1989 町教委(1989・1990)
B-05-26	建川遺跡	遺物包含地	縄文(早期～後期)	1984 道埋文(1986)
B-05-27	新道4遺跡	集落跡	旧石器・縄文(早期～晩期)・続縄文	1984～1986・2013 道埋文(1986・1987・1988・2015)
B-05-28	木古内2遺跡	集落跡	縄文(前期)	2010・2011 道埋文(2011・2012)
B-05-29	大平4遺跡	集落跡	縄文(早期～中期・晩期)	2009・2010・2012～2014 道埋文(2011・2012)
B-05-30	札苺2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-31	札苺3遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-32	札苺4遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-33	幸連2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-34	橋呉2遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-35	建川2遺跡	集落跡	縄文(前～晩期)	1985・1986 道埋文(1987)
B-05-36	釜谷3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-37	釜谷4遺跡	遺物包含地	旧石器・縄文(早期～後期)	1990 町教委(1991)
B-05-38	亀川遺跡	遺物包含地	縄文(晩期)	
B-05-39	亀川2遺跡	遺物包含地	縄文(中期～晩期)	1995 町教委(1998)
B-05-40	亀川3遺跡	集落跡	縄文(早期～後期)	1995 町教委(1998)
B-05-41	泉沢2遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)・擦文	1998～2001 町教委(2003・2004)
B-05-42	泉沢3遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	1996 町教委(1998)
B-05-43	亀川4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-44	釜谷5遺跡	集落跡	縄文(早期～晩期)	1993 町教委(1995)
B-05-45	釜谷6遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-46	釜谷7遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-47	大釜谷3遺跡	集落跡	縄文(前期～晩期)	2001 町教委(2003)
B-05-48	札苺5遺跡	遺物包含地	縄文(早期・前期・後期)	2011 道埋文(2012)
B-05-49	札苺6遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2011 道埋文(2013)
B-05-50	札苺7遺跡	集落跡	縄文(後期)	2013～2015 道埋文
B-05-51	釜谷8遺跡	遺物包含地	縄文(早期・中期・後期)	2011・2012 道埋文(2013)
B-05-52	釜谷9遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-53	泉沢4遺跡	遺物包含地	縄文	
B-05-54	亀川5遺跡	遺物包含地	縄文(後期・晩期)	2014 道埋文
B-05-55	泉沢5遺跡	集落跡	縄文(中期・後期)	2014 道埋文
B-05-56	札苺8遺跡	集落跡	旧石器・縄文(前期)	2014 道埋文
B-05-57	札苺9遺跡	遺物包含地	不明	
B-05-58	釜谷10遺跡	遺物包含地	縄文(後期)	
B-05-59	幸連3遺跡	遺物包含地	縄文(中期)	2015 道埋文
B-05-60	幸連4遺跡	遺物包含地	縄文(前期後半・中期後半～後期前葉)	2015 道埋文
B-05-61	泉沢6遺跡	遺物包含地	縄文(早期後半)	2015 道埋文

町教委：木古内町教育委員会、道埋文：北海道埋蔵文化財センター

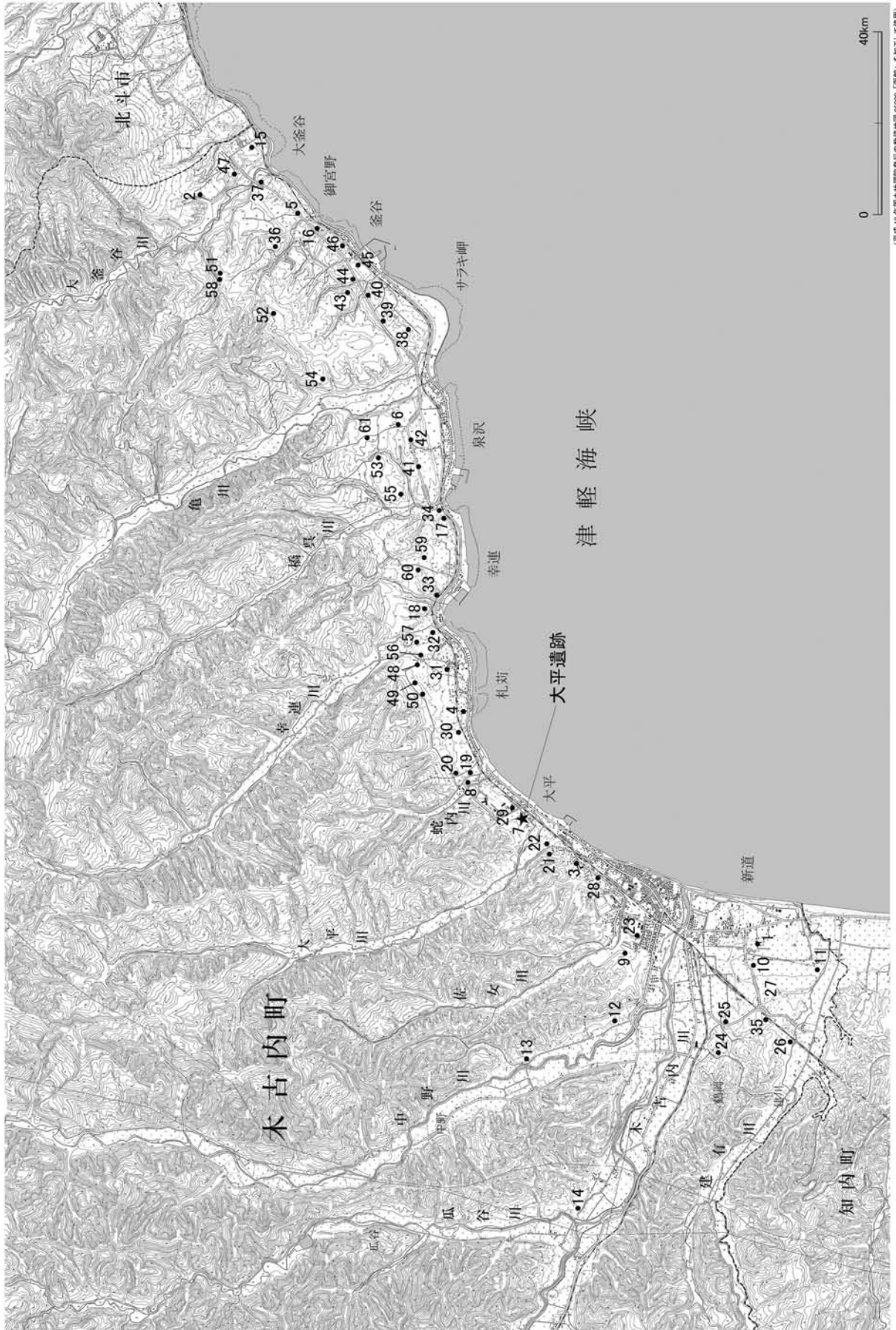


図 II-3 木古内町内の遺跡

III 調査の方法

1 調査範囲

(1) 調査区の設定と座標値

平成21年度調査の際に用いた調査区を踏襲して調査区の設定を行っている。

平成21年度調査の横ラインは、北海道新幹線のセンターラインを方格設定の基線とし、基線をMラインとして山側をLライン、海側をNラインとして順次5mごとにアルファベットを用いて平行にラインを設定していた。縦ラインは、方格設定の原点として115k300m（調査方格名称M40）を使用し、木古内駅側へ向かってアラビア数字で5mごとに基線に対して直角になるようにラインを設定していた。方格の間隔は5mとした。方格を区画する線にはアルファベット（北東－南西方向）とアラビア数字（北西－南東方向）を与え、調査区（グリッド）の名称は方格の北西角で交差する2つの線名を合わせて読む（例：M90）。さらに、5m方格を2.5m四方に分割して、反時計回りに西角からa・b・c・dと呼ぶ小調査区（小グリッド）を設置し、調査の便宜を図った。

平成22・23年度の調査区は平成21年度の調査区を木古内駅側に延長して設定した。調査範囲の方格設定に際し、横ラインはそのまま使用し、縦ラインは0よりも少なくなってしまうことから0の前を99とし、以降木古内駅側に向かって98、97、96…として設定した。

基線上の2点の平面直角座標は第X I系で、以下のとおりである。

基線上 M O 杭：115k100m X = -256493.998 Y = 16464.971
北緯41度41分26.55157秒 東経140度26分52.06337秒

基線上 M90 杭：115k050m X = -256532.385 Y = 16432.933
北緯41度41分25.30961秒 東経140度26分50.67402秒

この平面直角座標は「世界測地系」に基づいた「測地成果2000」の座標である。

2 土工

(1) 掘削

掘削作業には主に移植ゴテ、ねじり鎌を使用した。遺構・遺物の検出状況に応じて、竹べら・竹串を使用して遺構・遺物を傷つけること事のないように配慮して掘削した。精査・清掃の際には炉箒、ブラシなどを併用した。移植ゴテでは掘ることが困難な場所や、遺構・遺物の見られない範囲、攪乱などではスコップを併用した。

遺構は乾燥や降雨による流水によって崩壊しやすいため、ジョウロや噴霧器による適度な散水などの乾燥や降雨への対策をとりながら調査を進めた。また、黒色腐植土は水分を含むと滑りやすくなるため、排土場に到る道や通路に歩み板や麻袋を敷いて転倒防止に努めた。今回の調査は線路に隣接するため、風による遺物袋などの飛散には十分な注意をはらって行った。

(2) 埋め戻し

調査終了後に建設工事が行われることから、埋め戻しは行っていない。

3 測量と記録

(1) 測量・図化

5m×5m方眼の交点に打設した方格杭を平面測量の基準とした。20mごとに打設した基準杭にはそれぞれの杭に打たれた釘の標高を記入し、この標高を水準測量の基準とした。水準測量にはオートレベルと1mm目盛のアルミ製スタッフを用いて、基準杭の標高と測量対象の比高を直接観察した。平面測量は測量杭を基準として手測りによって行った。

遺構・遺物の出土状況等の実測図は、B3版セクションフィルムに基本的に1/20縮尺で記録した。遺物出土状況等の詳細図については1/10縮尺を用い、図版にはそれぞれスケールを付した。

(酒井)

(2) 現場での撮影

a 撮影方法

発掘現場での撮影は6×7インチ判と35mm判カメラを使用した。また、写真整理用としてデジタルカメラを使用した。基本的にモノクロ、カラーリバーサルとも2コマを同露出で撮影し、1セットとした。撮影の際は撮影方向、出土位置など出来るだけ多くの情報を入れることに留意した。

b 撮影機材

撮影機材・フィルムは下記を使用した。

カメラ：Mamiya RZ67PRO II (6×7インチ判)、ニコンF3 (35mm判)、

カシオEX-Z2000・EX-Z80・EX-H30 (デジタルカメラ)

フィルム：コダックT-Max100 (6×7判モノクロ)、フジフィルムネオパン100アクロス (6×7判カラーリバーサル)、フジフィルムプロビア100F (35mm判カラーリバーサル)

c 撮影データ

発掘現場での撮影データ (カットNo、撮影日、被写体、出土位置、層位、撮影方向、フィルム種類) を野帳に記入し、デジタルカメラの画像と照合して写真台帳を作成した。

(立川)

4 整理の方法

(1) 一次整理作業

遺跡内より出土した土器・石器等は、野外作業と並行して現地で水洗・乾燥を行った。水洗はボンドブラシや歯ブラシなどを使用して、遺物に付着した土を洗い落とした。乾燥は新聞紙等を敷いた乾燥かごに遺物を入れて、屋外もしくは屋内において行った。室内では除湿機などを用いて乾燥を促した。水洗・乾燥の終了した遺物は、収集の単位ごとに分類して遺物名と点数を決定し、それぞれに遺物番号を与えた後に遺物台帳に登録した。

遺物台帳は、土器・土製品と石器等に分けて作成している。B5判の様式を印刷して手作業で記入し、遺構・包含層を分けて全遺物を登録した台帳を作成した。台帳には出土遺構またはグリッド名のほか、遺物番号・取上日・層位・遺物名・分類・材質 (石器等の場合)・点数その他を記入した。台帳登録の終わった遺物は、台帳と同一の内容を記入した遺物カードと共に遺物番号ごとにチャック付ポリ袋に納めた。遺物カードは土器等と石器等で色を分けている。土器を「水色」石器等を「ピンク色」とした。

注記は手書きによって行った。注記対象は、土器片が微細なものを除く大多数、石器等が礫・礫片を除く狭義の石器である。注記できなかった遺物は、遺物番号ごとに「未注記」と記入したポリ袋に納め、注記済みのものと同封した。注記は、遺跡名の略号、遺構番号またはグリッド名、遺物番号、

出土層位の順に記した。遺跡の略号は「オ」とした。遺構名にはアルファベットと数字の間に「-」を入れ、グリッド名には入れていない。

注記例 遺 構：オ. H-1. 2. 床面

包含層：オ. M90. 3. II

遺物は、現地調査終了後に北海道埋蔵文化財センター（以後センター）へ搬送した。

なお、遺物台帳は手作業で紙へ記入したものを基にパソコン上で表計算ソフト（Microsoft Excel）に入力し管理している。整理作業の進捗により遺物の分類等に変更があった場合には、手書きの台帳とExcelのデータを同時に修正した。

（2）二次整理作業

図面等

遺構や遺物出土状況の原図は訂正などの作業を行った。訂正や変更があった場合はその箇所が確認できるように原図に書き込んでいる。その後、原図から1mm方眼の方眼紙に鉛筆で素図を作成している。素図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト（Adobe Illustrator CS6）により補正・加工して版下を作成した。（酒井）

土器の整理

土器については、地区ごとに分類の見直しと細分類を行いながら、接合作業を中心に整理を進めた。作業に当たっては遺構と包含層の接合、同一個体の破片を把握することに努めた。接合作業の結果は、分類・出土地点・遺物番号・点数・同一個体破片の有無などを接合台帳に記入した。接合関係が認められた個体は、接合の程度により立体復原、土器拓本、未掲載に分け、個体ごとに適宜判断し図化を行った。未接合の破片資料のうち、文様構成・器形のわかる口縁部・胴部・底部については、土器拓本を作成した。立体復原は、遺物台帳と破片の照合を行って復原台帳の作成→再接合→破片接着→樹脂充填の手順をとった。立体復原と拓本断面については人手による原寸実測を行い、立体復原は1/2、拓影は2/3縮尺素図をもとに墨入れを行った。墨入れ図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト（Adobe Illustrator CS6）により補正・加工して版下を作成した。接合・復元作業と並行して、集計表・分布図を作成した。（熊谷）

石器等の整理

石器については、分類の見直しを行いながら、破損品の接合作業を行った。遺構・包含層ごとに完形品を中心に人手による原寸実測を行い、剥片石器・磨製石器・石製品は原寸で、礫石器は2/3（一部1/2）縮尺素図をもとに墨入れを行った。墨入れ図をスキャナーで取り込み、パソコン上で描画ソフト（Adobe Illustrator CS6）により補正・加工して版下を作成した。これらの作業と並行して集計表・分布図の作成を行った。（酒井）

写真

a スタジオ撮影

撮影方法：光源はストロボを使用している。土器片や石器などの俯瞰撮影は、DP 3メリルを用いてトヨ無影撮影台を使用して撮影した。復元土器の立面撮影は、トヨビュー 45GXを用いて蛍光剤が少ないスーパーホワイトの背景紙を撮影台に垂らして行った。モノクロ、カラーリバーサルともに同露出で2コマ撮影し、1セットとした。

撮影機材：スタンド：トヨウェイトスタンド

カメラ：酒井マシンツール社 トヨビュー 45GXおよびシグマ社DP3メリル

レンズ：ニコン社 ニッコールAM ED210f5.6

ストロボ：コメット社 CS-2400T II、CBb-24X、CL25H、CLX-25miniH
 フィルム：フジフィルム ネオパン100アクロス（モノクロフィルム）、フジクロームプロビア100F（カラーリバーサルフィルム）

b 現像

フィルム現像：モノクロフィルムは自動現像機（ILFORD ILFOLAB FP40）を使用して、自家処理を行っている。

デジタル処理：デジタルカメラ撮影のRAWデータはシグマプロフォトでTIFFに変換し、アドビフォトショップCS6で調整した。フィルム撮影のものはリバーサルフィルムのをスキャナーハッセルブラッドフレックスタイトX5でデジタル化し、アドビフォトショップCS6で調整した。調整した画像から写真図版を作成した。

c 保管・管理

フィルムは1コマずつ番号をつけ、フィルム種類ごとの連番で管理している。フィルムに触れる時は手袋を着用し、油分からの変化・劣化・カビの発生を防いでいる。同露出で撮影した2コマのうち1コマはオリジナルフィルムとして使用していない。使用頻度や貸し出し依頼の多い写真は、デュープフィルムの作成やスキャニングによるデータ化で対応している。写真アルバムはすべての調査・整理作業が終了した後、常温・定湿の特別収蔵庫に保管される。（中山）

5 保管

今回の報告に関する出土遺物については、調査年度・遺跡名・遺物名・分類・収納番号等を記したラベルを貼ったコンテナに収納し、収納台帳を作成した。遺物は収納台帳と共に木古内町へ返却される予定である。図面等はすべてA2判図面ファイルに調査年度・遺跡名を付け収納している。図面等や写真フィルム等は、道立北海道埋蔵文化財センターにて保管される。（酒井）

6 遺跡の土層

平成21年度調査の土層を踏襲している。

I層：表土・耕作土など

II層：腐植土層：黒色シルト質土。縄文時代早期～晩期、擦文文化期の遺物を包含している。ところによっては、駒ヶ岳d降下火山灰（Ko-d、1640年降灰）、白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm、10世紀前半降灰）が斑状に確認できる。この火山灰より上をII上層、火山灰～盛土までをII中層、盛土より下をII下層とした。

III層：漸移層：II層とIV層の漸移層。

IV層：ローム質土層：黄褐色ローム質土。下部にはチャートや泥岩、頁岩、凝灰岩などの亜円礫を含むローム質土がある。（酒井）

7 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものをI群とし、以下前期をII群、中期をIII群、後期をIV群、晩期をV群とした。続縄文時代のものはVI群、擦文文化期のものはVII群である。また、A・B類に二分したものはA類が前半、B類が後半を意味する。同様にA・B・C類に三分したものはA類が前葉、B類が中葉、C類が後葉を意味する。さらに細分を必要とする場合は、アラビア数字の枝番号を付した。

I群 縄文時代早期に属する土器群

A類 貝殻・沈線文系土器群および条痕文系平底土器群

B類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの付された縄文系平底土器群

B-1類 東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に比定するもの

B-2類 コッタロ式に相当するもの

B-3類 中茶路式に相当するもの

B-4類 東釧路Ⅳ式に相当するもの

II群 縄文時代前期に属する土器群

A類 縄文の施された丸底・尖底の土器群

B類 円筒土器下層式土器群

B-1類 円筒土器下層a式に相当するもの

B-2類 円筒土器下層b式に相当するもの

B-3類 円筒土器下層c式に相当するもの

B-4類 円筒土器下層d₁式に相当するもの

B-5類 円筒土器下層d₂式に相当するもの

III群 縄文時代中期に属する土器群

A類 円筒土器上層a式・b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

B類 榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式などに相当するもの

IV群 縄文時代後期に属する土器群

A類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

B類 ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの

C類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

V群 縄文時代晩期に属する土器群

A類 大洞B式、大洞B-C式に相当するもの

B類 大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの

C類 大洞A式、大洞A'式に相当するもの

VI群 続縄文時代に属する土器群

VII群 擦文文化期に属する土器群

(熊谷)

(2) 石器等

石器は下記の分類を使用した。点数には破片を含む。

剥片石器群：石鏃、石槍、ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、両面調整石器、Rフレイク、Uフレイク、剥片

礫石器群：石斧、たたき石、凹み石、すり石、礫器または石核、加工痕のある礫、礫・礫片

土製品：有孔土製円板、焼成粘土塊など

石製品：異形石器、玦状耳飾り、垂飾、有孔石製品、軽石製石製品、線刻礫など

(酒井)

IV 遺構

1 竪穴住居跡の調査

(1) 擦文文化期

1. 概要

擦文文化期の住居跡が6軒検出された。調査区中央より西側、80ラインから90ラインの範囲から検出され、調査区の西側にまとまりをもつ。いずれも、火山灰の下位から検出されている。平面形は5軒がカマドをもつ隅丸方形である。もう1軒は五角形でH-16の覆土中に黒褐色土の落ち込み中から検出されている。

2. 住居跡

H-9 (図IV-2・3、図版1・44)

位置・立地：P・Q91・92区

規模：5.01 / (4.06) × 4.46 / (3.87) × 0.54m

確認・調査：調査区南側の標高9mほどの平坦面にH-10の縄文期の住居跡を壊して構築されている。II層を除去した段階で、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。西側はH-10の壁・床を壊して造られている。カマドと床面の土壌を採取してフローテーションを行い、オニグルミが得られている。

覆土：上位（覆土1・3・4・5層）は自然堆積層で、下位（覆土6層）は多量のローム粒や炭化物を含む層が床面まで堆積している。

平面形：本遺構のほぼ半分が調査区外にある。平面形は隅丸方形と思われる。

付属遺構：カマドは灰黄色の粘土を用いており、押し潰された状態で検出された。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式で煙出しに向かって傾斜し、先端部に掘り込みがある。柱穴は検出されなかった。

遺物出土状況：カマド周辺と床面西側から土器片・礫が出土した。床面直上・カマドからⅦ群土器など10点、石器等73点、覆土から土器108点、石器等253点が出土した。土器は17点がⅦ群土器である。

時期：出土したⅦ群の土器からみて、8世紀中葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器)1はⅦ群土器で甕の底部。やや張り出す。内外面ともにハケメ後ヘラミガキされる。

(石器)2・3は覆土2層出土。2は石錐。断面方形の棒状に加工され、下端に機能部が設けられている。頁岩製。3は両面調整石器。両面調整により紡錘形に加工されている。頁岩製。

H-11 (図IV-5～7、図版3・44)

位置・立地：O・P89・90区

規模：5.23 / 4.91 × 5.02 / 4.64 × 0.32m

確認・調査：II層を掘り下げた段階で、黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床は凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。西側はH-16の壁を壊して造られている。カマドと床面の土壌を採取してフローテーション作業を行ったが炭化種実の確認できなかった。

覆土：II層・火山灰・掘り上げ土が自然堆積している。

平面形：隅丸方形

付属遺構：北側の壁に造りつけのカマドがある。灰褐色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。袖石には扁平な礫と砂質の多孔礫が使われている。火床は掘り込みがある。煙道はトン

ネル式である。煙出しに向かって傾斜しており、先端部に掘り込みがある。

遺物出土状況：東側を除く床・覆土から土器片・礫が出土している。このうち南側の壁付近から潰れた状態で鉢と坏が出土した。床面・カマドからⅦ群土器など47点、石器等227点、覆土から土器228点、石器等166点が出土している。土器は136点がⅦ群土器出土である。

時期：出土したⅦ群土器からみて、8世紀中葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) いずれもⅦ群土器。1・2・6は甕。1は口縁部が外反し、頸部に沈線がつく。肩部に段をもつ。内外面ともに口縁部・頸部ナデ、体部はハケメ調整される。2は底部。強く張り出す。外面はハケメ後ヘラミガキされる。内面はハケメ調整される。底面に笹の圧痕と砂の付着がみられる。3は鉢、頸部から垂直に立ち上がり、口縁部で内傾する。肩部に段をもつ。体部上部がやや膨らみをもつ。外面は口縁部がナデ、体部がハケメ後ヘラミガキ、内面は横位にハケメ調整される。4・5は坏。4は口縁部が内彎し、体部下部に稜をもつ。平底。内外面ともにヘラミガキされる。内面は黒色処理される。5は口縁部が欠失している。平底。外面はカキメ、内面はヘラミガキ後、黒色処理される。6は口縁部。外反し、肩部に段をもつ。内外面ともに頸部はナデ、体部はヘラミガキされる。

(石器) 7は床面、8～10は覆土出土。7は縦長剥片の側縁に直線的な刃部が作出されたもの。使用痕とみられる光沢がみられる。頁岩製。8はすり石。円礫の表面全体がツルツルしており、すり面とみられる。側縁の一部に敲打痕がみられる。安山岩製。9・10は石皿。9は扁平な楕円礫の表面全体がツルツルしている。平坦面両面にはすり面とみられる光沢がある。安山岩製。10は扁平な楕円礫の平坦面にすり面があるもの。安山岩製。

H-12 (図IV-8・9、図版4・45)

位置：K89、L89・90、M90区

規模：4.43 / 4.06×4.34 / 3.96×0.36m

確認・調査：Ⅱ層を除去した段階で、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。東側の壁・床面の一部は家屋建設で壊されている。カマド煙道には木根による攪乱がみられる。カマドの土壌を採取してフローテーション作業を行い、タデ属の炭化果実片が出土している。

覆土：盛土・火山灰が流れ込む自然堆積である。

平面形：隅丸方形

付属遺構：北側の壁やや西よりに造りつけのカマドがある。黄褐色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。袖石には扁平な礫と砂質の多孔礫が使われている。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙だしに向かって傾斜している。

遺物出土状況：縄文時代の包含層を壊して住居が作られているため、覆土からは、縄文時代の土器・石器類が多く出土した。床面・カマドからⅦ群土器など62点、石器等42点、覆土からⅤ群C類土器など656点、有孔土製円板1点、焼成粘土塊1点、石器等537点が出土。Ⅶ群土器は139点である。

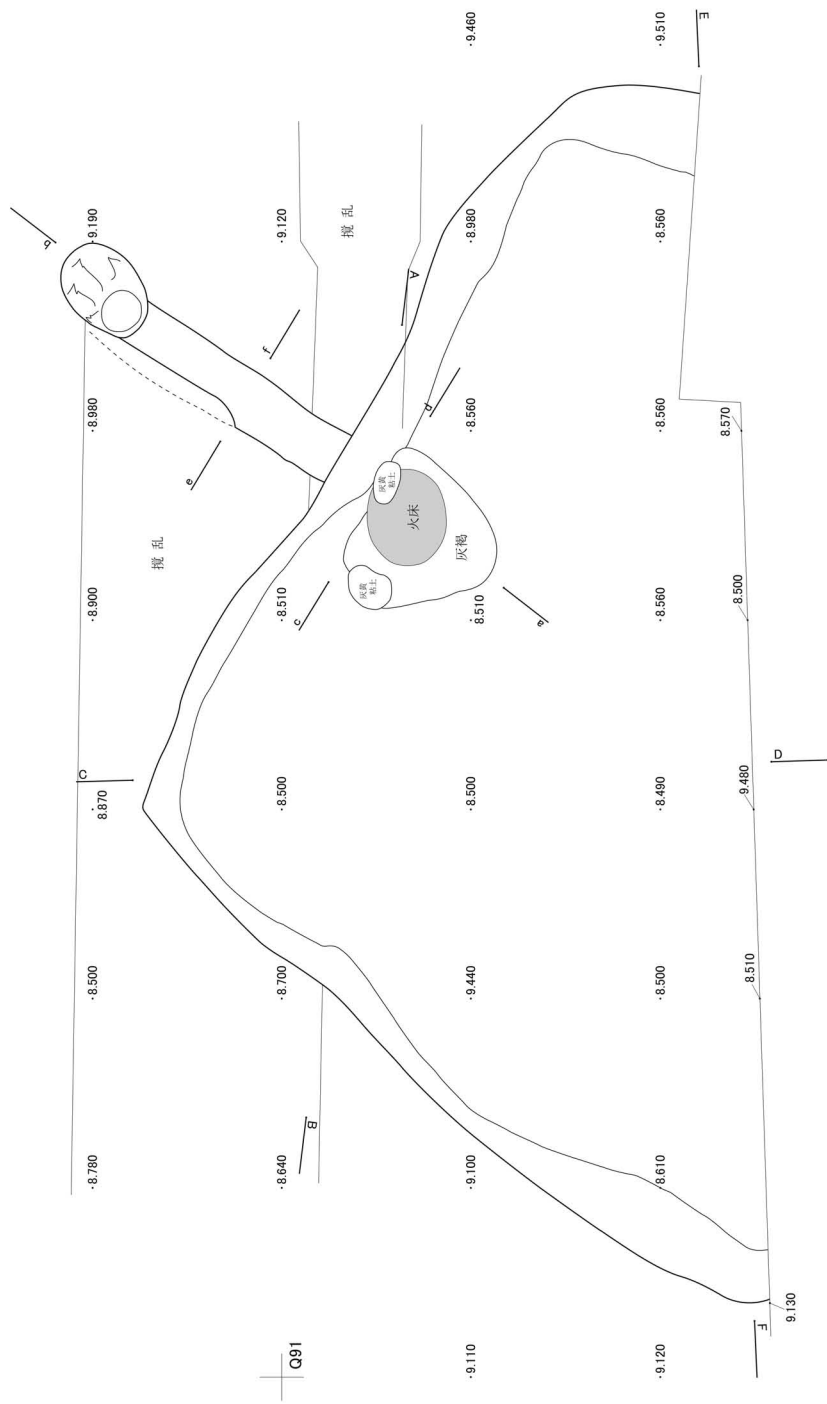
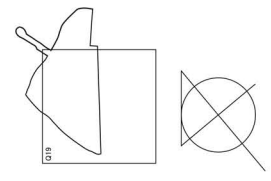
時期：出土したⅦ群土器からみて、8世紀中葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) いずれもⅦ群土器。1は甕の体部上半。口縁部は外反し、肩部に段をもつ。外面は口縁部と肩部ヘラミガキ、頸部ナデ調整される。内面はヘラミガキ、黒色処理される。2は甕。口縁部は外反する。肩部に段をもつ。胴上部が張り出す。底部はやや張り出す。外面は口縁部ナデ、肩部から底部にかけてハケメ調整される。内面はヘラミガキされる。3は甕の底部。内外面ともにヘラミガキされる。底面に多量の砂が付着する。4は坏。口縁部が外傾し、体部下部に稜をもつ。平底。

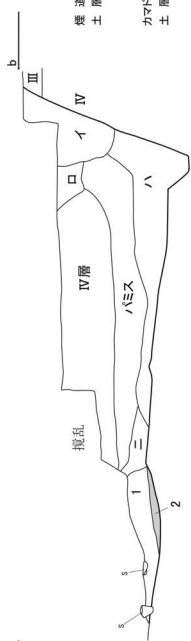


図IV-1 竪穴住居跡位置図

H-9



a 9.200



イ 灰赤褐色土 10YR4/2
ロ 褐灰色土 10YR1/1 雜まりなし
ハ 黒色土 10YR2/1 雜まりなし
ニ 黒褐色土 10YR3/2 ハミス含む

III
IV層
IV
ハミス
I
II
III
IV
カマド
土層

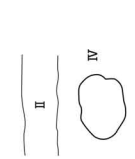
カマド
土層 { 1 灰赤褐色土 10YR4/2 ローム状・雜土埋没入
2 赤褐色土 5YR3/8 雜土(灰床)

c 8.700

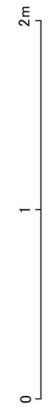


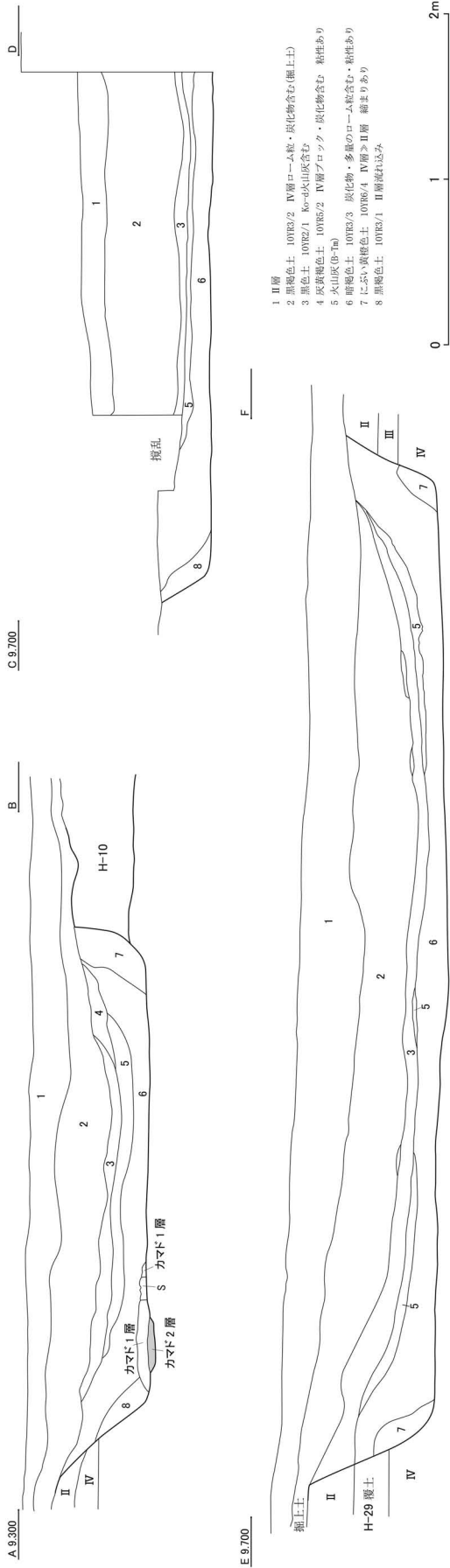
カマド
土層 { 1 灰赤褐色土 10YR6/2
2 褐灰色土 10YR5/1
3 赤褐色土 5YR3/8 雜土(灰床)

e 9.000

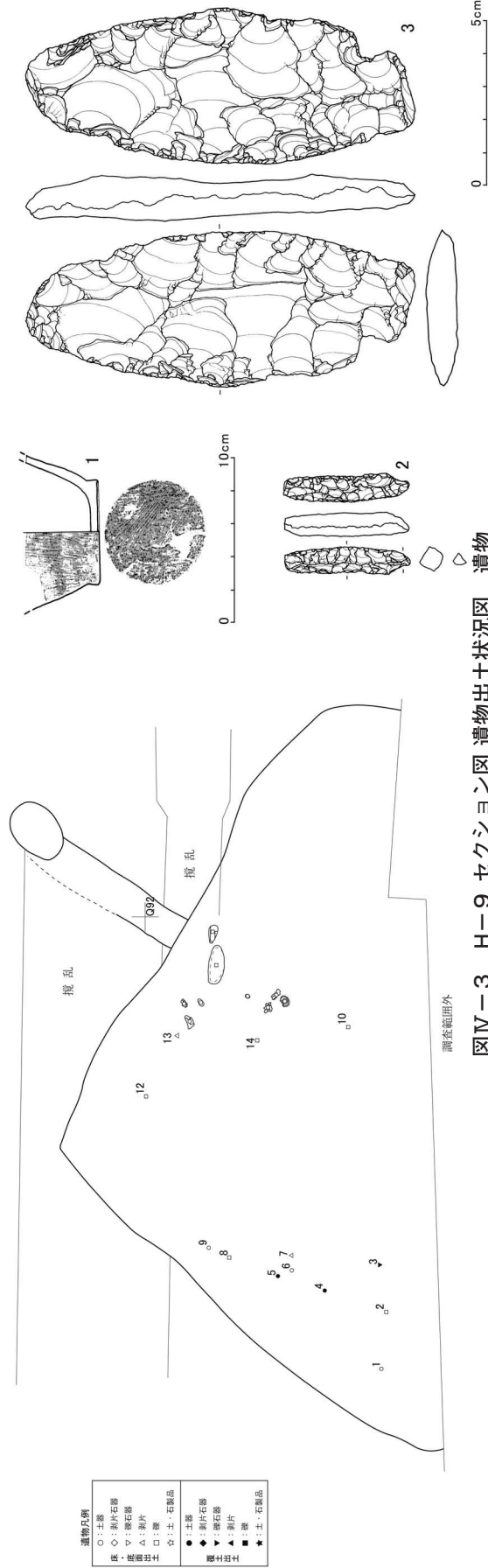


図IV-2 H-9





- 1 II層
- 2 黒褐色土 10YR3/2 IV層ローム灰・炭化物含む(細土)
- 3 黒色土 10YR2/1 K₂O・Ca₂山灰含む
- 4 灰黄褐色土 10YR5/2 IV層フロック・炭化物含む 粘性あり
- 5 火山灰(B-Tm)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 炭化物・多量のローム灰含む・粘性あり
- 7 におい・炭褐色土 10YR6/4 IV層>II層 粘まりあり
- 8 黒褐色土 10YR3/1 II層泥れ込み



図IV-3 H-9 セクション 遺物出土状況図 遺物

内外面ともにヘラミガキされる。内面は黒色処理される。5は甕の口縁部、外反し、口端部は凹む。頸部に段をもつ。内外面ともにヘラミガキされる。6甕の胴部。内外面ともにハケメ後ヘラミガキされる。7は須恵器の口縁部。9は有孔土製円板で、多軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-5類土器の破片を用いている。

(石器) 8は床面出土のたたき石。楕円礫の両端部に敲打痕がある。チャート製。

H-18 (図Ⅳ-60・61、図版11・65)

位置：M・N91区

規模：3.63 / 3.48×3.32 / 3.15×0.40m

確認・調査：Ⅱ層を除去した段階で、黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床は凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。北側の床・壁はH-17・21の覆土を掘り込んで造られている。カマドの土壌を採取してフローテーション作業を行い、キビ1粒、アワ1粒が検出されている。

覆土：1層は自然堆積層で、2層は多量のロームや炭化物を含む層が床面まで堆積している。

平面形：隅丸方形

付属遺構：北側の壁やや東に造りつけのカマドがある。褐灰色の粘土とパミスを用いており、押しつぶされた状態で検出された。袖石には砂岩の扁平礫が用いられている。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙出しに向かって傾斜しており、先端部に掘り込みがある。

遺物出土状況：縄文時代の遺構・包含層を壊して堅穴が作られているため、覆土からは縄文時代の土器・石器類が多く出土した。床面・カマドからⅦ群土器など47点、石器等78点、覆土から土器207点、石器等207点が出土している。土器は67点がⅦ群土器である。このうち覆土からはロクロ整形の坏が出土した。覆土下層の土壌をフローテーションしたところ鉄片が検出された。

時期：出土したⅦ群土器からみて、9世紀中葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) いずれもⅦ群土器。1は坏。口縁部が外傾し、体部中位が膨らむ。ロクロ整形。底部は回転糸切り未調整。2・3は甕。2は底部。内外面ともにハケメ後ヘラミガキされる。底面に多量の砂の圧痕がある。3は口縁部。外反し、頸部に沈線をもつ。外面は頸部ナデ、体部ハケメ後ヘラミガキ。内面はハケメ後ヘラミガキされる。

(石器) 5はカマド、4は覆土5層出土。4はたたき石。扁平な楕円礫の両端部と側縁の一部に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。5は砥石。板状礫の平坦面にすり面のあるもの。凝灰岩製。

H-19 (図Ⅳ-62・63、図版12・65)

位置：N・O88区

規模：3.25 / 2.53×3.06 / 2.45×0.38 m

確認・調査：H-16の覆土中に黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床はほぼ平坦で、中央部がやや低くなっている。壁は急角度で立ち上がる。焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行い、アワ少量・オニグルミが検出されている。炉跡から採取した炭化材の年代測定を行った。

覆土：覆土1・4層はⅡ層、覆土3・5層は火山灰の自然堆積層で、覆土2・6層はローム粒を含む人為的な堆積層である。

平面形：五角形

付属遺構：中央部で炉跡が検出された(HF-1)。地床炉である。

遺物出土状況：V群C類期の包含層を壊して住居跡が造られているため、覆土から同期のまとまった

土器片や石器等が出土した。覆土からV群C類土器など769点、石器等252点が出土している。土器は3点がVII群土器である。炉跡の土壌をフローテーションしたところ鉄製品が検出された。

時期：遺構の位置や覆土から出土したVII群土器から、8世紀中葉と考えられる。HF-1から検出した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行い、 $1,220 \pm 30 \text{yrBP}$ の測定結果を得た。(佐藤)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土である。9はIII群A類土器の口縁部破片。口唇には縄文が加えられ、器面には斜行縄文と綾絡文が認められる。3～8・10～17はV群C類土器。3は結節斜行縄文が施された口縁部破片である。3・5～17は鉢形。3は小型で、口縁部には沈線で文様帯が作出され、文様帯中位に粘土粒の貼り付けが加えられている。5・6は底部破片で、5の器面には沈線文が加えられている。7・8は「Y」字状の突起、10～12は「V」字状の突起である。13・14は同一個体、口唇部には横位の「S」字の沈線が、体部には沈線文が施されている。15は口縁部破片で、「V」字状の突起が欠失している。16・17は縄文のみのもので、17の口唇には貼り付けによる突起が加えられている。4は壺形。器面には丁寧なナデ調整が加えられている。これらのV群C類土器については周辺の包含層から器種の組成がわかる良好な資料が出土している。1・2はVII群土器。1は甕の胴部。内外面ともヘラミガキされる。2は坏の底部。内外面ともヘラミガキされ、内面は黒色処理される。

(石器等) 18～21は覆土6層出土。18は石錐。石鏃状の形状で先端部に機能部があるもの。使用による磨滅痕がみられる。頁岩製。19はスクレイパー。縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。使用痕とみられる光沢がある。頁岩製。20はたたき石。扁平な楕円礫の両端部と側縁の一部に敲打痕のあるもの。砂岩製。21は石皿。板状礫の平坦面に使用痕とみられるすり痕がみられる。安山岩製。22はV群C類土器の土器片を素材とする有孔土製円板の未成品で、穿孔途中のものである。

H-31 (図IV-188～190、図版24・113・114)

位置：L・M93区

規模：4.62 / 4.32×4.23 / 4.00×0.48m

確認・調査：暗褐色土層を除去した段階で、黒色土と火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。東側はH-37の壁・床を壊して造られている。カマドの土壌を採取してフローテーション作業を行い、キビ1粒、アワ5粒が検出されている。

覆土：覆土2・3層は自然堆積層、覆土4層は多量のロームや炭化物を含む層が床面まで堆積する。

平面形：隅丸方形

付属遺構：北側の壁やや西側に造りつけのカマドがある。灰白色の粘土を用いており、押しつぶされた状態で検出された。袖石には扁平礫が用いられている。火床は掘り込みがある。煙道はトンネル式である。煙出しに向かって傾斜しており、先端部に掘り込みがある。北側のカマドをはさんで2基(HP-3・4)、南側西寄りの壁際で2基(HP-1・2)計4基の土坑が検出された。平面形は隅丸方形と長円形のものがある。いずれも小型で、掘り込みは浅い。性格は不明である。

遺物出土状況：カマド周辺と東側の床面・覆土から土器片・礫が出土した。縄文時代の遺構・包含層を壊して作られているため、覆土から縄文時代の土器・石器類が多く出土した。床面・カマドからVII群土器など17点、石器等181点、HPからVII群土器5点、石器等1点、覆土からII群B類土器など304点、VII群土器27点、有孔土製円板1点、焼成粘土塊1点、石器等303点が出土している。

時期：出土したVII群土器からみて、8世紀中葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) いずれもVII群土器で、1・10・14は床面、2は床面直上、7はカマド下、他は覆土出土である。1・5・12は坏。1は口縁部が内傾し、体部中位がやや膨らむ。平底。内外面ともに

ヘラミガキされる。内面は黒色処理される。3は口縁部破片で、段をもつ。5・12は体部破片。12は段をもつ。いずれも内面は黒色処理される。2・6は鉢の底部破片。ササラ状工具によって器面調整が施されている。4・7～11・13・14は鉢の体部破片。ヘラミガキ・ササラ状工具による器面調整が施されている。

(石器等) 15はカマド、16・17は床面、18は覆土出土。15は凹み石。扁平な棒状礫の平坦面に断面円錐状の凹みと浅い凹みがあり、側縁の一部には敲打痕がある。凝灰岩製。16・17はすり石。扁平な楕円礫の平坦面にすり痕のみられるもの。被熱により割れている。安山岩製。18は有孔土製円板の未成品で、Ⅱ群B類土器の土器片を素材にしている。

(2) 縄文時代

1. 概要

縄文時代の住居跡は39軒 前期後半のⅡ群B-2・3類土器期9軒、Ⅱ群B-4類土器期6軒、Ⅱ群B-5類土器期22軒、中期初頭1軒、後期初頭1軒が検出された。

各時期の住居跡は、2～3つのグループからなり、今回の調査区の中央部(K98・99、L97～0、M97～0、N97・98区)に住居跡が認められない「広場」とも呼べる空間を取り囲む状態で検出されている。Ⅱ群B-2・3類土器期の住居跡は広場を中心に東西に隣接して立地、Ⅱ群B-4類土器期はⅡ群B-2・3類土器期の住居跡を一部壊して「広場」西～北側に隣接して立地、Ⅱ群B-5類土器期の住居跡はⅡ群B-2・3類土器期・Ⅱ群B-4類土器期の住居群の外側に立地している(図IV-1)。

Ⅱ群B-2・3類土器期～Ⅱ群B-5類土器期の住居跡の立地については規則性が想定できそうな状況で検出されている。

Ⅱ群B-2・3類土器期の住居跡は、覆土の堆積状況から葺土をもつ上屋構造のもの、壁際に周溝が巡るものなどが確認されている。Ⅱ群B-4類土器期の住居跡は、ベンチ構造をもつものとベンチ構造もたないものが確認されている。Ⅱ群B-5類土器期は長軸10m前後の大型のものとやや小型のもので構成され、ベンチ構造をもつものである。大平川河岸段丘縁辺では、入れ子の状態で検出されている。焼土は、調査西側の同期の住居跡では周堤が認められるものが多く、西側のグループとは違いが認められている。

後期初頭のⅣ群A類土器期のものは調査区南側から石組炉・出入口施設を伴う住居跡1軒が確認された。(熊谷)

2. 住居跡

H-10 (図IV-4、図版2・44)

位置：O・N12・13区

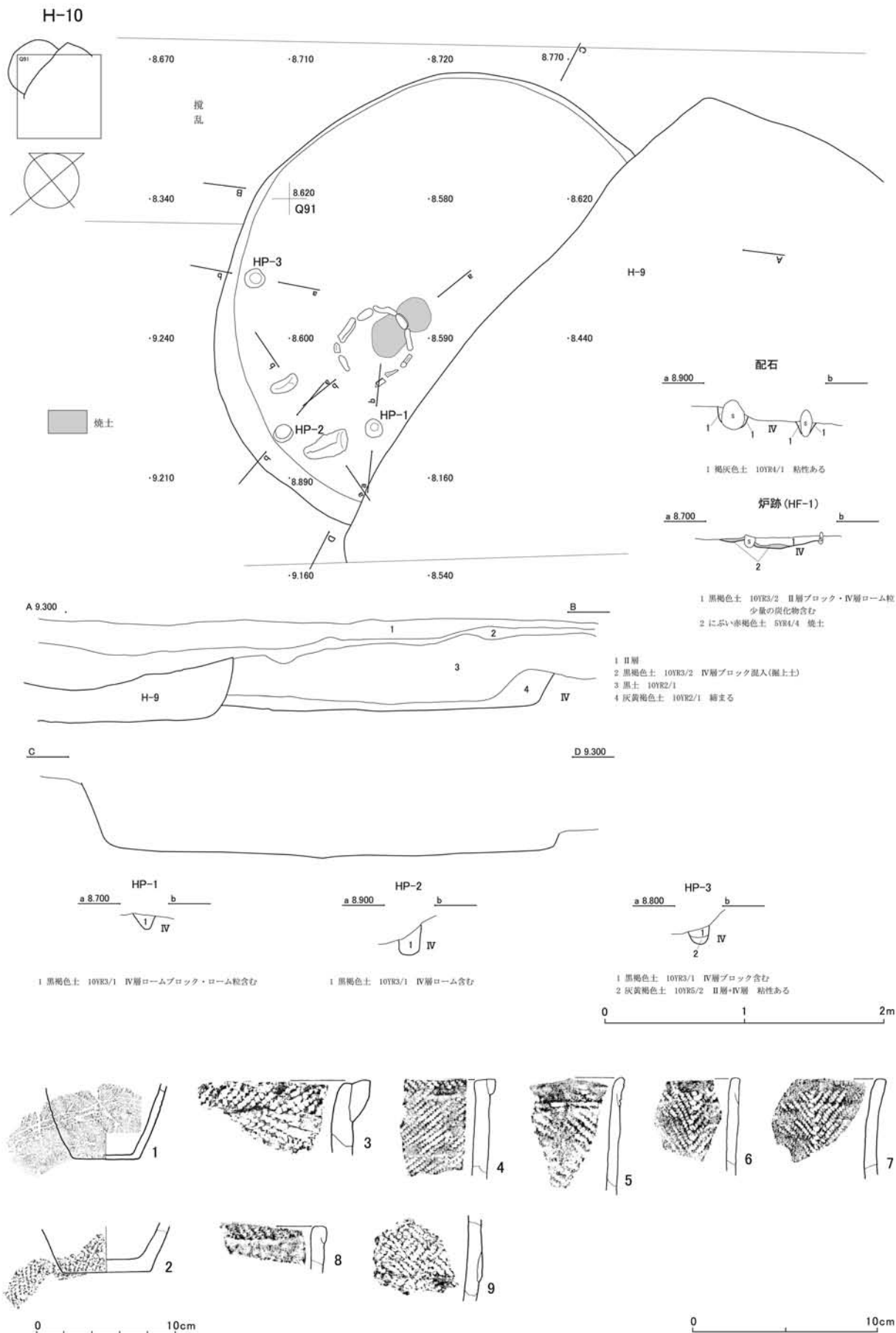
規模：3.40 / (1.86) × 3.18 / (1.78) × 0.45

確認・調査：Ⅰ層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床はやや凹凸がある。壁は急に立ち上がる。床・壁の東側はH-9構築時に壊されている。炉跡の土壌を採取してフローテーション作業を行い、コブシ1粒の炭化種子が検出されている。

覆土：覆土1・3層は自然堆積層で、覆土2・4層はロームを混入する人為的な層である。

平面形：平面形は円形と推定される。H-9と重複する。

付属遺構：炉跡(HF-1)が床面中央より南側で検出された。南側を除いて礫・礫片で囲まれている石組炉で、すり石・台石を含む227点が出土した。焼土は石囲いの中と外の2か所にある。柱穴は



図IV-4 H-10

3基検出された（HP-1～3）。この他に配石が一对、南側の壁付近の床面で確認された。出入り口施設と考えられる。

遺物出土状況：炉跡から石器等227点、覆土からIV群A類土器など126点、石器等166点が出土した。覆土2・3層からIV群A類土器片が多く出土している。

時期：出土したIV群A類土器からみて、縄文時代後期前葉と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：（土器）2は覆土5下層、1・3～9は覆土2層出土。

IV群A類土器（1～9）：1は小型土器の体部下半。無文地に細い沈線文で体部文様帯が区画され、沈線文が加えられている。3～8は口縁部破片。3・4は口縁部に貼り付けが施されたもの。5～8は折り返し口縁のもの。5の口縁部にナデ調整が加えられている。6・7は同一個体で縦位に縄文が施されている。8は口唇直下にナデ調整が加えられ、無文帯を作出している。2は斜行縄文が施された底部破片。9は胴部破片。貼付帯上の縄文は羽状に施されている。1・5はトリサキ式土器、他は余市式土器と思われる。

H-13（図IV-10～18、図版5・45～48）

位置：J・K・L87・88・89区

規模：(9.52) / 8.12×(7.40) / 5.52×(1.15) m

確認・調査：表土除去を行った際に、黒色土の落ち込みとして確認された。遺跡のメインセクションとして設定された88ライン+3mに土層観察用のベルトを設定し、黒褐色土を掘り下げたところ、しまりのある平坦な床面とベンチ構造、急角度に立ち上がる壁面を検出した。断面観察により、II下層上面から構築されている。柱穴の検討により、一度建て替えが行われていると考えられる。

覆土：覆土は6層に分けた。1～5層は掘り上げ土の流れ込み、6層は貼り床。覆土堆積後はくぼみにII中層以降の包含層が堆積している。HP-7・HP-40出土の土器内容の土壌のフローテーション作業を行ったが、同定できたものはなかった。

形態：一部調査範囲外であるが、平面形は隅丸長方形、長軸方向はN-63°-Wである。壁面は明瞭で、急角度に立ち上がる。床面は平坦でベンチ構造がある。柱穴・小柱穴42基、土坑4基を検出した。炉跡と考えられる焼土は確認できなかった。

付属遺構：HP-1～9・11・42は深さ0.5～1.3mのものでほぼ垂直に掘られており、主柱穴と考えられる。おそらく、HP-7～9・42を利用した4本柱もしくはHP-11を加えた5本柱で建てられたのち、HP-1～6を利用した6本柱の住居に建て替えられたと考えられる。HP-23・24・27～30・32・34～39・51・52は壁柱穴。直径10～20cmほどである。HP-53は床面中央に作られた土坑。平面形は径0.86mの亜円形で深さは0.70mである。周囲に非常に浅い掘り込みのHP-54～56が切り合っているが、HP-53と同時に埋められている。覆土には明褐色土のブロックが含まれており、炉跡であった可能性がある。

遺物出土状況：HP-40にはII群B-5類土器（PO-1）の底部が埋設され、正立して出土した。HP-7の上面にはIII群A類土器（PO-2）が正立して出土した。住居廃絶後のHP-7のくぼみに置かれたものと考えられる。覆土1層上面には土器集中（PO-3～11）が検出され、土器が復元されている。住居廃絶後のくぼみに土器を埋設したり廃棄したりしたものと考えられる。床面・貼床からII群B類土器など242点、石器等145点、HPから土器254点、有孔土製円板1点、石器等253点、覆土からII群B類土器など4,309点、有孔土製円板6点、石器等2,135点が出土した。石製品は垂飾1点、塊状耳飾り2点、軽石製石製品2点が出土した。

時期：HP-7覆土出土の炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、4,630±30yrBPという測定

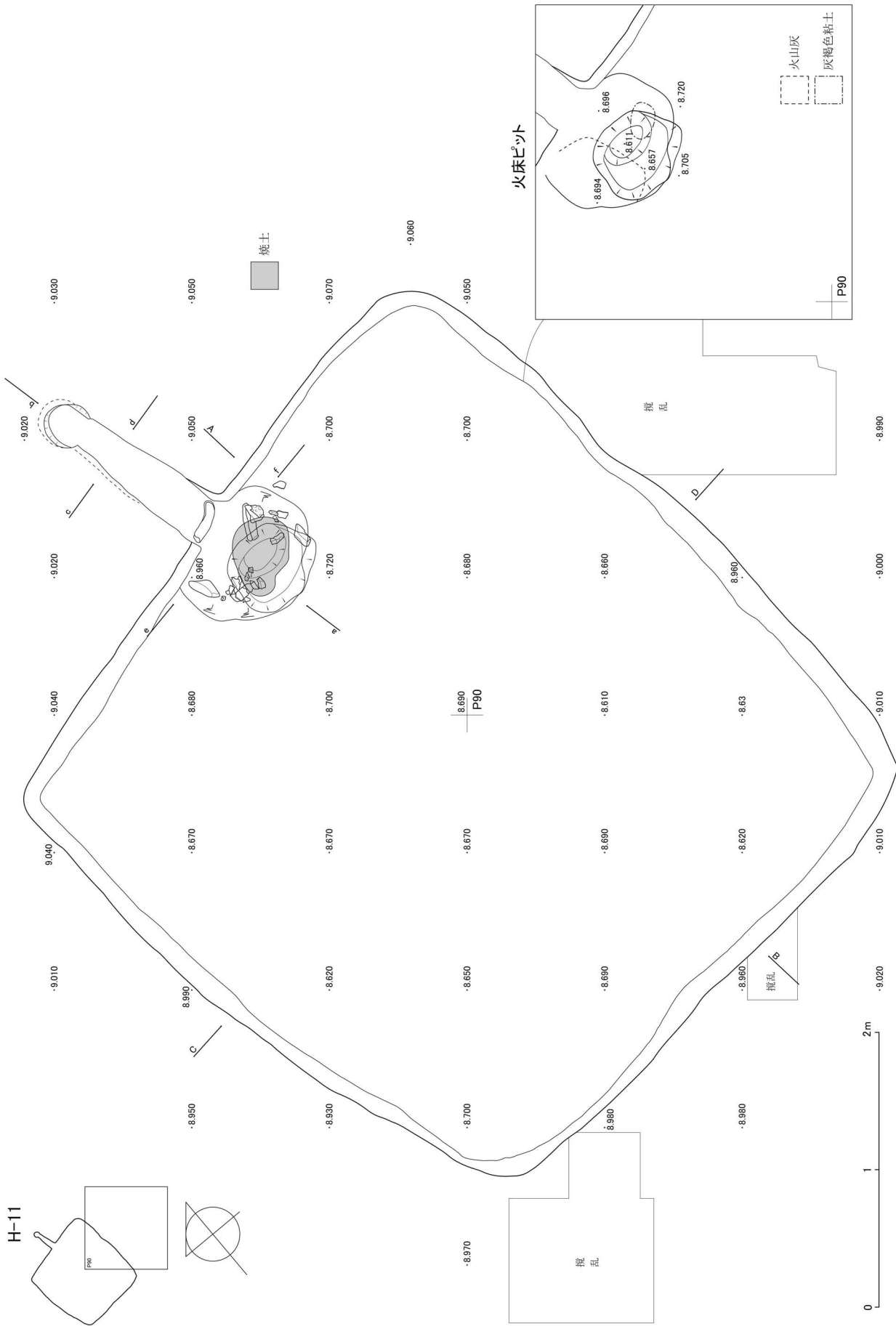
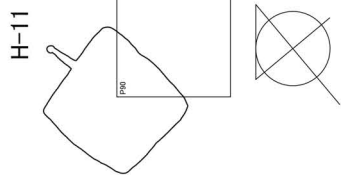
結果を得た。床面やHPの出土遺物とあわせて考えると、縄文時代前期後半のⅡ群B-4～5類土器の時期と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) 24・26～28・30～32・33～37は床面、25・40・41は貼床、9・12・15・17・29は柱穴状ピット(HP)、他は覆土出土である。

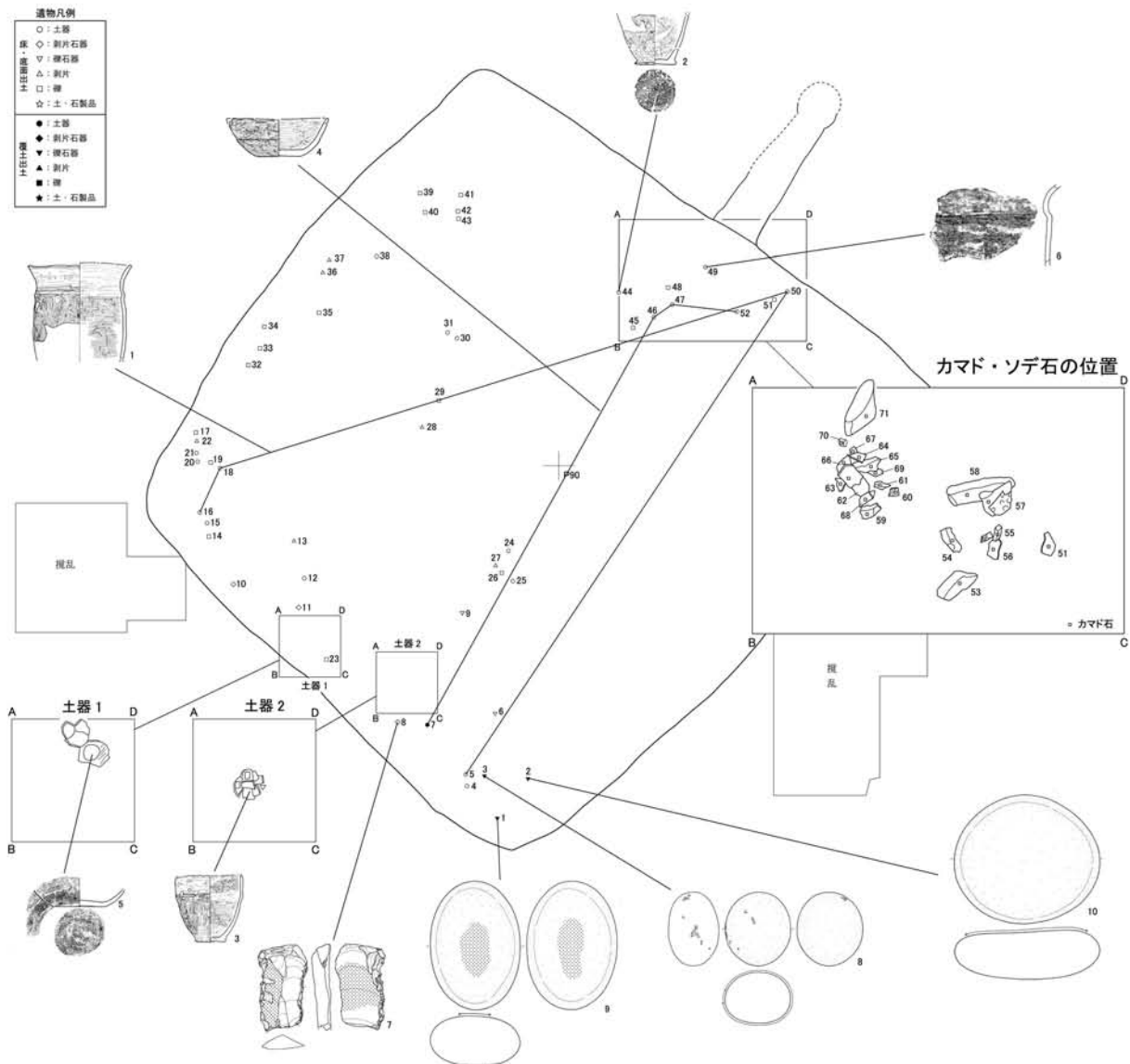
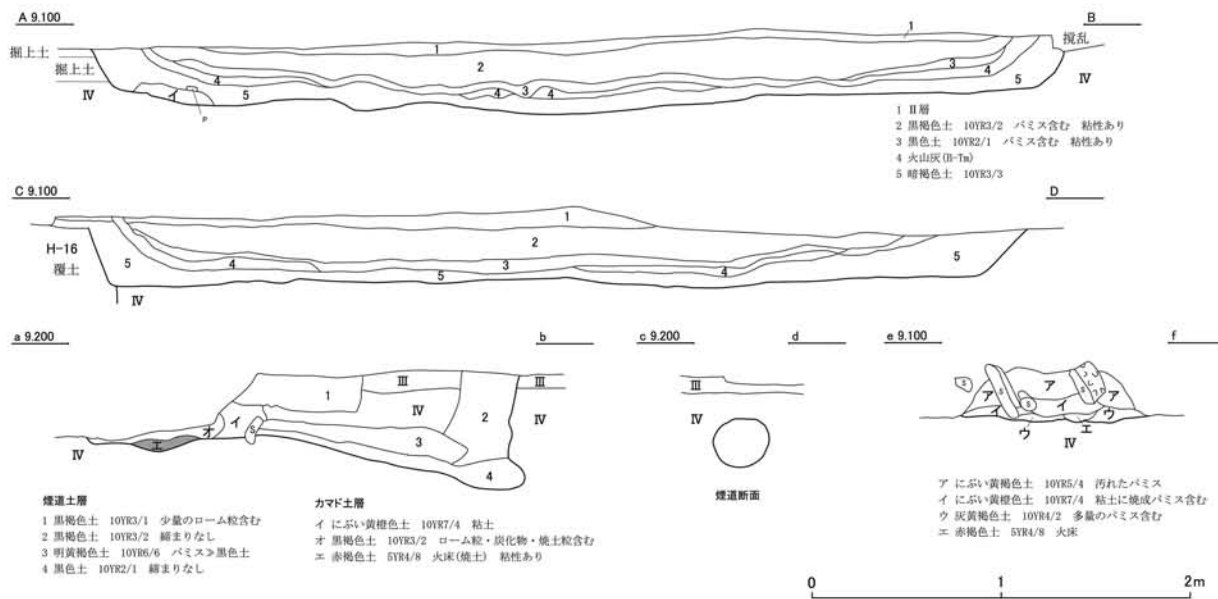
Ⅱ群B-3類土器(16・17・23～30・40)：16は器面に太めの単軸絡条体の回転文が施された底部。17は柱穴状ピット(HP-4)から出土した。口頸部に貝殻条痕文が施された口頸部破片である。23～27・30は直前段反撚による縄文が施された頸部から体部破片。25・27は頸部破片で、27は口頸部文様帯下端に縄線文が認められる。28は頸部破片、口頸部文様帯下端は刺突が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯には縄線文が施されている。体部は単軸絡条体の回転文である。29は太めの単軸絡条体の回転文が施されたものである。40は直前段反撚による縄文が施された底部。

Ⅱ群B-4類土器(18・31・41)：18は柱穴状ピット(HP-6)から出土した口縁部破片。体部に単軸絡条体の回転文を施文後、口縁部文様帯下端を区画する細い貼付帯を施した後、貼付帯直下には結束羽状縄文を、無文地の幅の狭い文様帯には縄線文を加えている。31は自縄自巻の原体による縄文と結束羽状縄文が施された体部破片。41は自縄自巻の原体による縄文が施された底部破片。

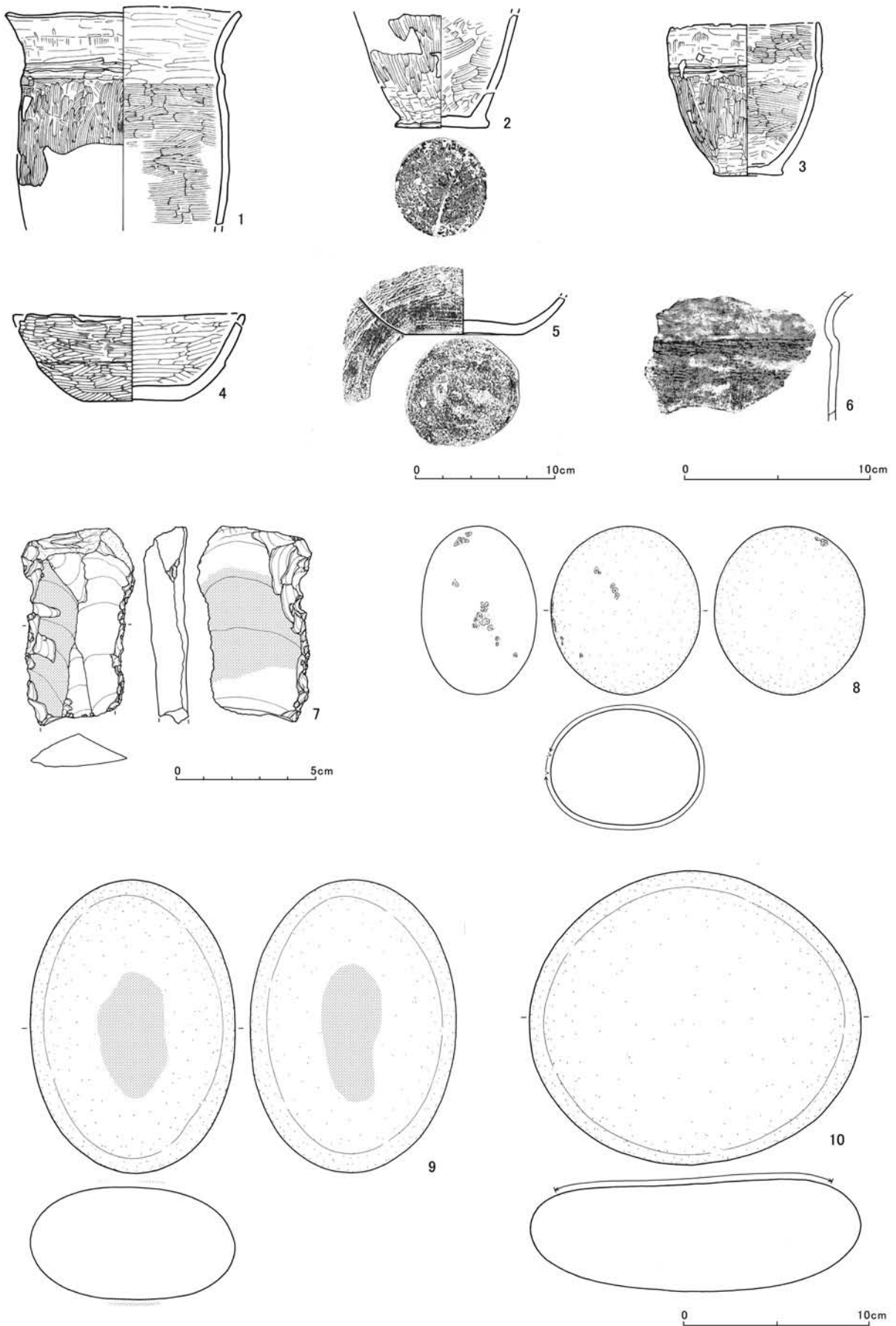
Ⅱ群B-5類土器(1～10・15・19～22・28・32～39・42)：1・4・5・8・33～35は体部に多軸絡条体の回転文が施されているもの。1の口頸部文様帯は無文地で、幅が狭い。文様帯には組紐状の縄線の圧痕が加えられている。Ⅱ群B-4類土器の可能性もある。4は平縁で、口唇及び口頸部文様帯下端の貼付帯には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。無文地の文様帯には2本一組の縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。5は口縁部・底部を欠失する。幅広の口頸部文様帯をもつもので、文様帯下端は肩をもつ。肩部分には刺突が加えられている。文様帯には弧状の縄線文と刺突文が施されているが文様構成は不明である。8は波状口縁で、波頂部は2個一組の小突起からなる。口唇部には縄の圧痕が加えられている。幅の狭い口頸部文様帯下端は刺突文で区画されている。無文地の文様帯には波状口縁に沿って2本一組の縄線文が施されている。33～35は多軸絡条体の回転文が施された体部破片、42は台付きの台部分である。2・3・6・32は体部に単軸絡条体の回転文が施されたものである。2は口縁部が肥厚するものである。緩やかな波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯には波状口縁に沿って縄線文が施され、斜位の短縄線が加えられ、文様は肥厚帯直下にも及んでいる。体部の単軸絡条体の回転文は横位に施文されている。3は平縁で、口唇・口頸部文様帯中央・口頸部文様帯下端を区画する貼付帯に刺突文が加えられている。無文地の文様帯には縄線が加えられている。体部は単軸絡条体第4類の回転文が施されている。6は底部を欠失する。片流れ突起をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯は幅広で、くびれる。無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。体部は複節の単軸絡条体の回転文である。32は単軸絡条体第1A類の回転文が施された体部破片である。7・9・10・15・36～39は体部に斜行縄文が施されたものである。7は幅広の口頸部文様帯がわずかに肥厚するものである。口頸部文様帯は外反し、文様帯には単軸絡条体の圧痕文が山形に施され、山形の低位に橋状把手が貼り付けられている。これらの文様構成から口縁は山形の頂点を波頂部とする波状口縁の可能性もある。9は大型の波状口縁、口唇に縄の圧痕が加えられる。無文地の文様帯には波頂部から垂下する橋状把手と縄線文が施されている。10は小型土器、2個一組の小突起が施されたもので、体部には複節の斜行縄文、口縁部に単軸絡条体の圧痕文が施されている。15は器面に斜行縄文が施された体部である。36～39は頸部から体部破片。37は貝殻条痕上に縄文が施文されている。38・39は体部に縦位の綾絡文が加えられたもので、38は頸部破片で、無文地の文様帯に2本一組の縄線文が加



図IV-5 H-11



図IV-6 H-11セクション図 遺物出土状況図



图IV-7 H-11 遺物

えられている。19～22は口縁部破片。19・20は肥厚気味の口頸部文様帯をもつものである。いずれも口唇に縄文が加えられ、無文地の文様帯に縄線文が施されたもの。20は2個一組の小突起による波頂部をもつ。21は波頂部に刻みが加えられ、口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。Ⅲ群A類土器の可能性もある。22は波頂部破片、台形の波頂部外面に弧状に貼付帯が施され、口唇・内外に縄の圧痕が加えられている。

Ⅲ群A類土器（11～14）：11・12は2個一組の小突起からなる波頂部をもつ波状口縁で、口唇・口頸部文様帯下端の貼付帯と波頂部から垂下する貼付帯に縄の圧痕が施されている。無文地の口頸部文様帯には3本一組の縄線文が施されている。11の体部には結束羽状縄文、12の体部には結束斜行縄文が施されている。13は波状口縁で、口唇に複節の縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画されている。波頂部には横位の粘土紐が貼り付けられ、波頂部下位に渦巻き状の縄の圧痕文と文様区画帯下端まで垂下する「Y」字状の貼り付けが加えられている。文様帯には単軸絡条体の圧痕文と刺突文が交互に施文されている。体部は複節の斜行縄文である。

（石器等）62・63は床面、43～59・61・66は覆土、60はHP-2、64はHP-6、65はHP-53出土。43・44はつまみ付ナイフ。縦型で片面調整のもの。頁岩製。43は下端部に抉りが作出されている。44は使用痕とみられる光沢がある。45～48はスクレイパー。頁岩製。45はへら状石器で下部に急角度の刃部を作出している。46・47は縦型剥片の側縁に刃部を作出したもの。48は長軸両端に抉りのあるもの。46・48は使用痕とみられる光沢がある。49は擦り切り残片。擦り切り痕とみられる直線状の溝がみられる。緑色泥岩製。50～56はたたき石。50～53は扁平な楕円礫の端部に敲打痕のあるもの。54は乳棒状礫の両端部に外彎した広い敲打面が作られている。擦り面のようにもみられるので、すり棒のようなものかもしれない。55は扁平な乳棒状礫の両端部に広い敲打面が作られているもの。56は扁平な円礫を敲打してそろばん玉状にしている。50・55は安山岩製、51・53・54は砂岩製、52はチャート製、56は頁岩製。57は凹み石。扁平礫の平坦面に断面円錐状の凹みと側縁に敲打痕がある。凝灰岩製。58はすり石で扁平打製石器。扁平な楕円礫の側縁を打ち欠いて半円形に整形し、弦の部分に幅の狭い機能部を作出したもの。一部被熱している。凝灰岩製。59は石鋸。扁平な礫片の側縁を加工して半円形に整形し、弦の部分に断面U字状のすり面を作出したもの。泥岩製。60は石錘。扁平な円礫の両側縁を打ち欠いて2か所の抉りを作出したもの。安山岩製。61・62は台石。61は扁平な亜円礫の平坦面に敲打痕のあるもの。安山岩製。62は板状礫の平坦面に敲打痕のあるもの。砂岩製。63は礫器。扁平な亜円礫の下半周縁の両面を打ち欠いて刃部を作出したもの。頁岩製。64～66は滑石製の石製品。64～66は玦状耳飾りの破損品。64・65は玦状耳飾りが破損したものを再加工して穿孔し、垂飾としたもの。全面を研磨によって整形・調整している。65は穿孔部分に糸ずれ痕が確認できる。64～66については産地分析を行い、松前産であることが報告されている。（分析結果は大平遺跡（3）に掲載する）67～73は有孔土製円板である。67・68は単軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-4類土器の土器片、69～73は多軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-5類土器の土器片を素材とするもの。72・73は未成品である。

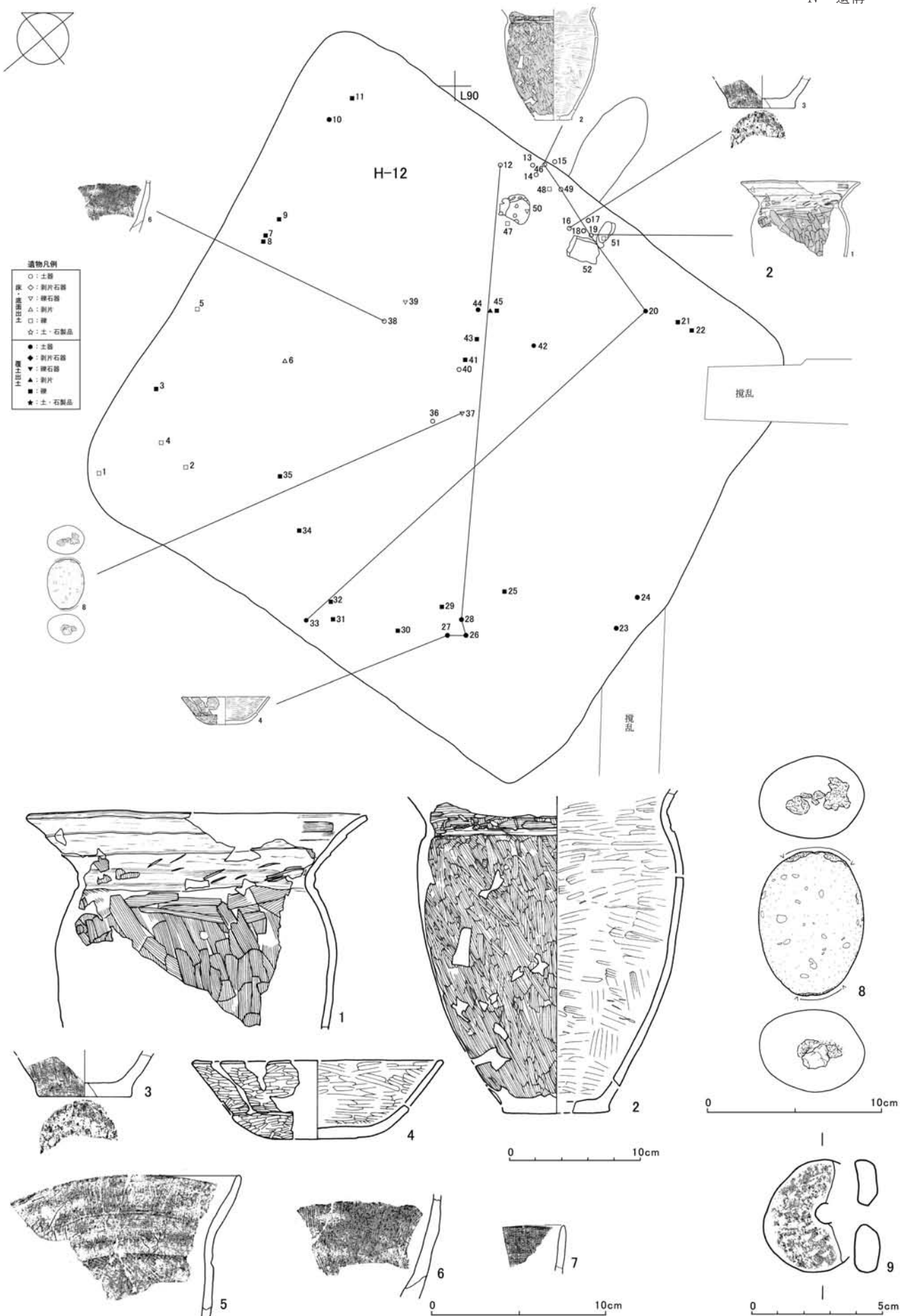
H-14（図IV-19～28、図版6・48～53）

位置：J・K86区

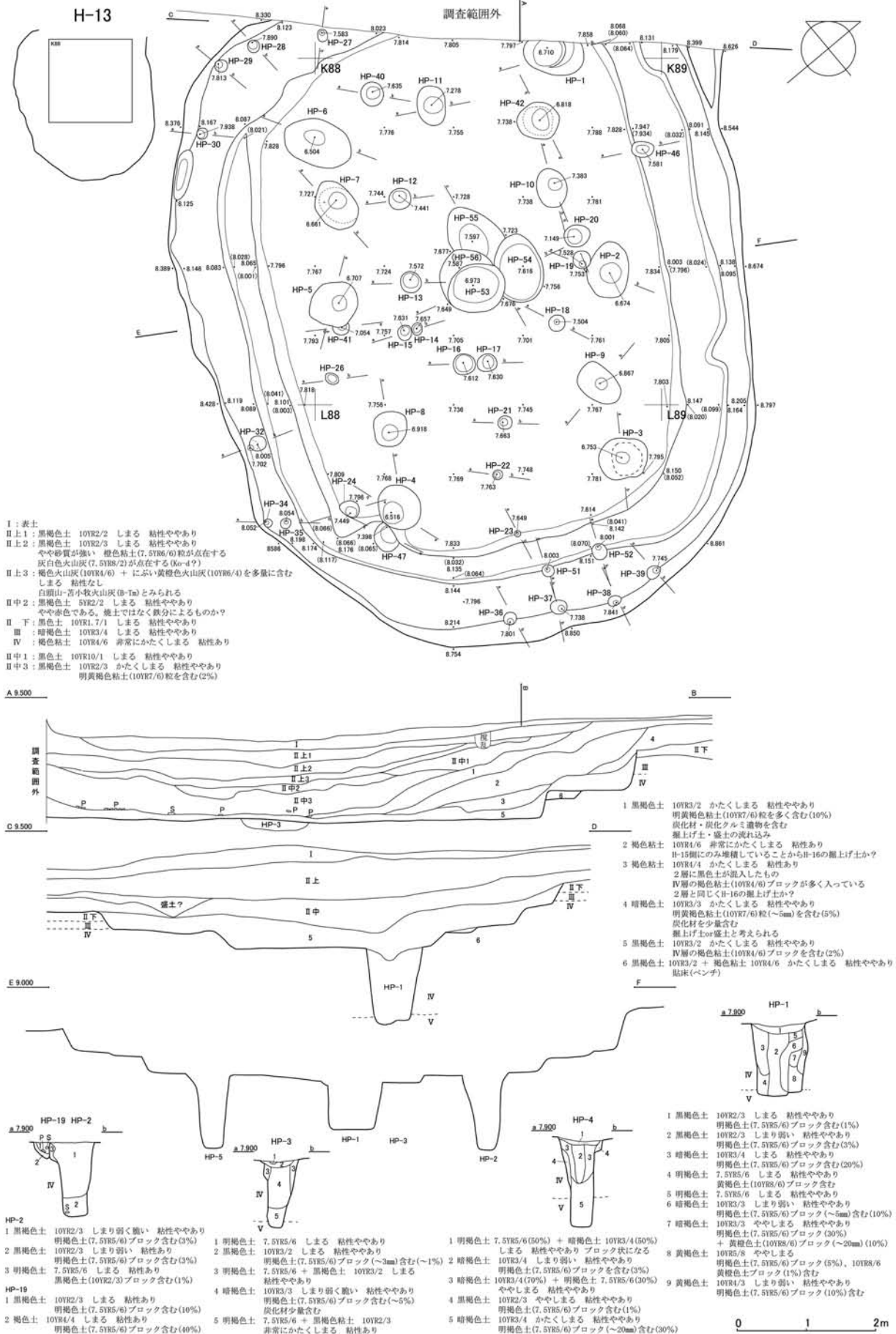
規模：3.90×（3.27）／3.68×（3.18）／0.33m

確認・調査：1層を除去した段階で、黒褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

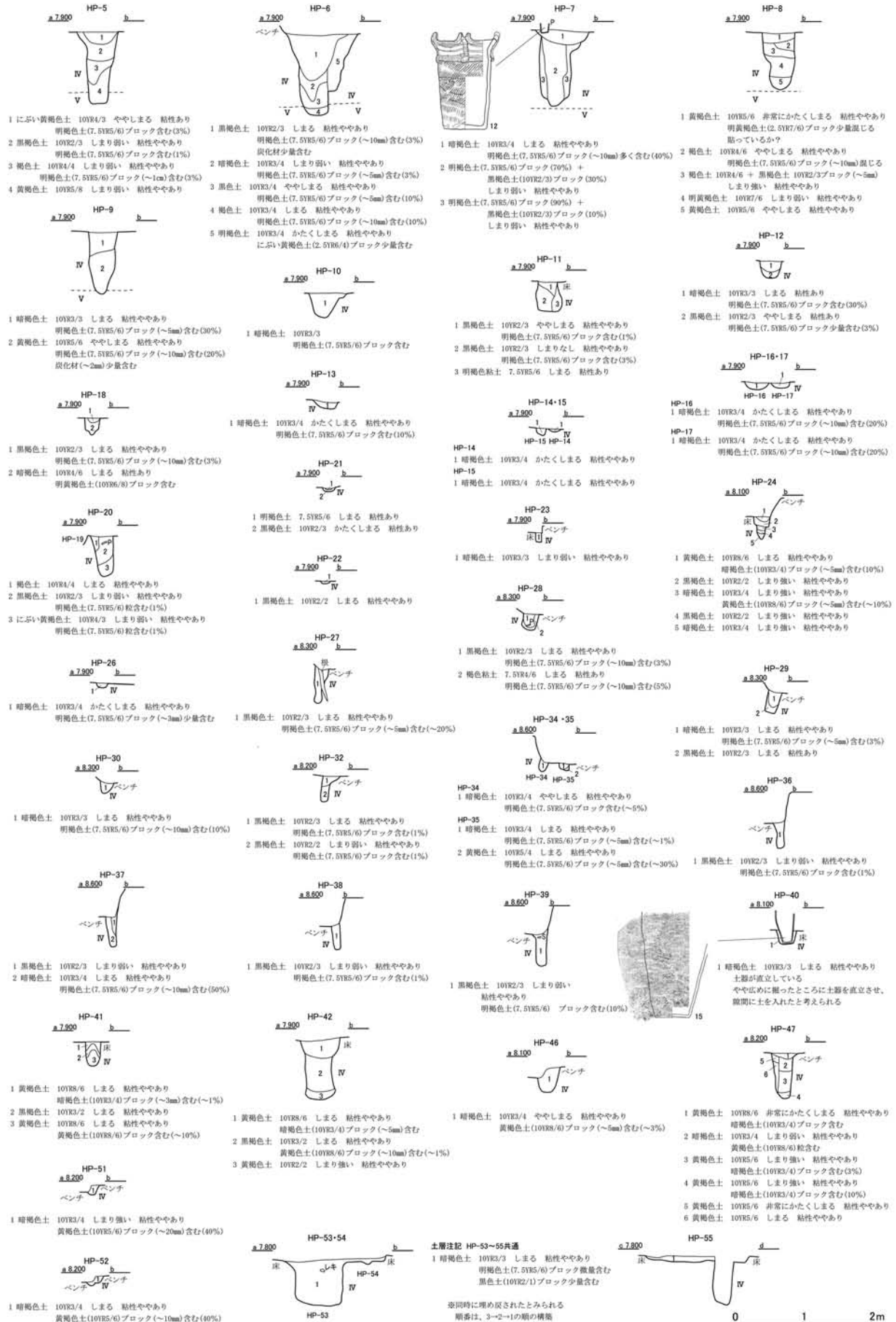
覆土：全ての層（覆土1～4層）が盛土や掘り上土の人為的な堆積層である。



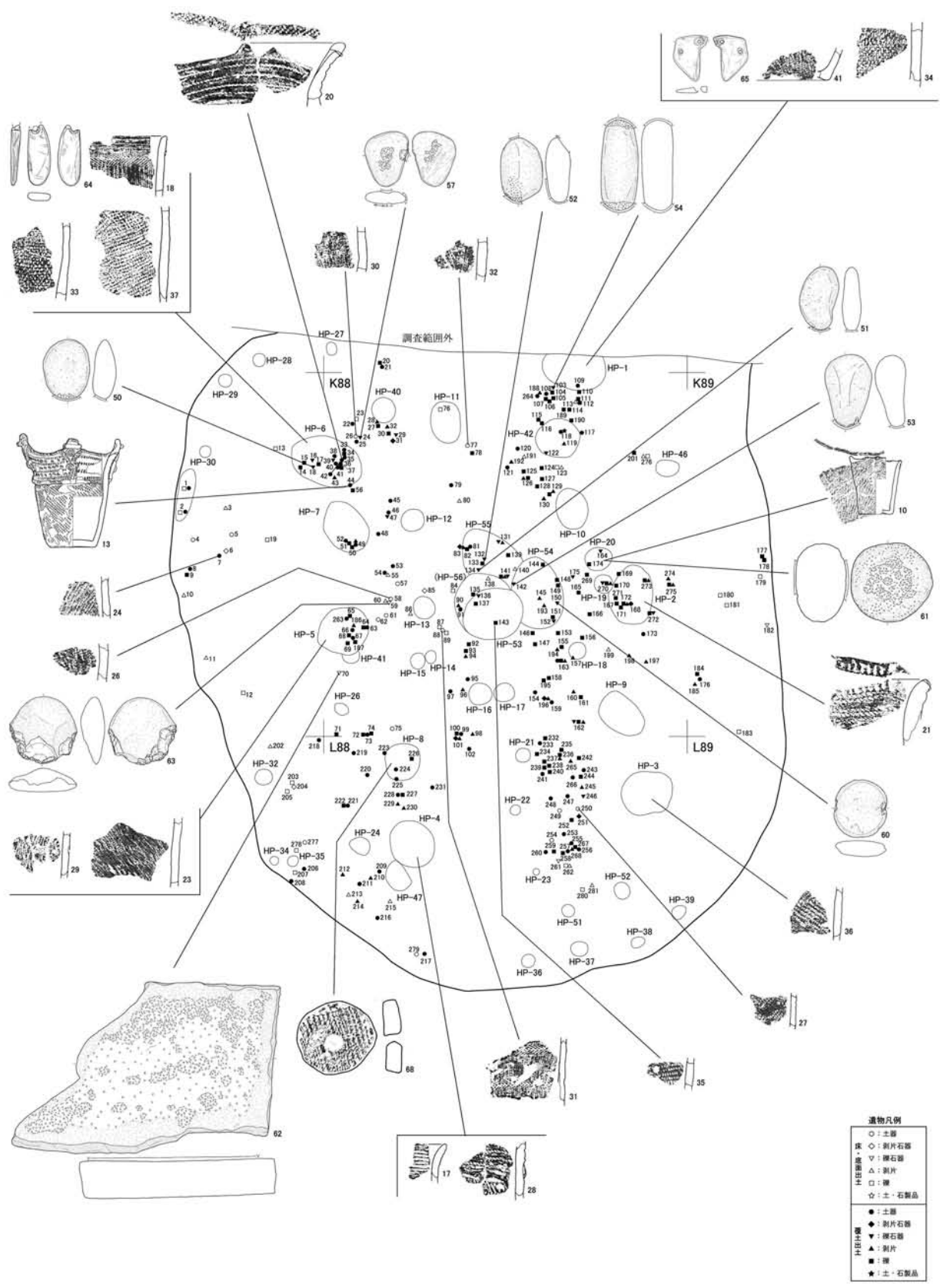
图IV-9 H-12 遺物出土狀況图 遺物



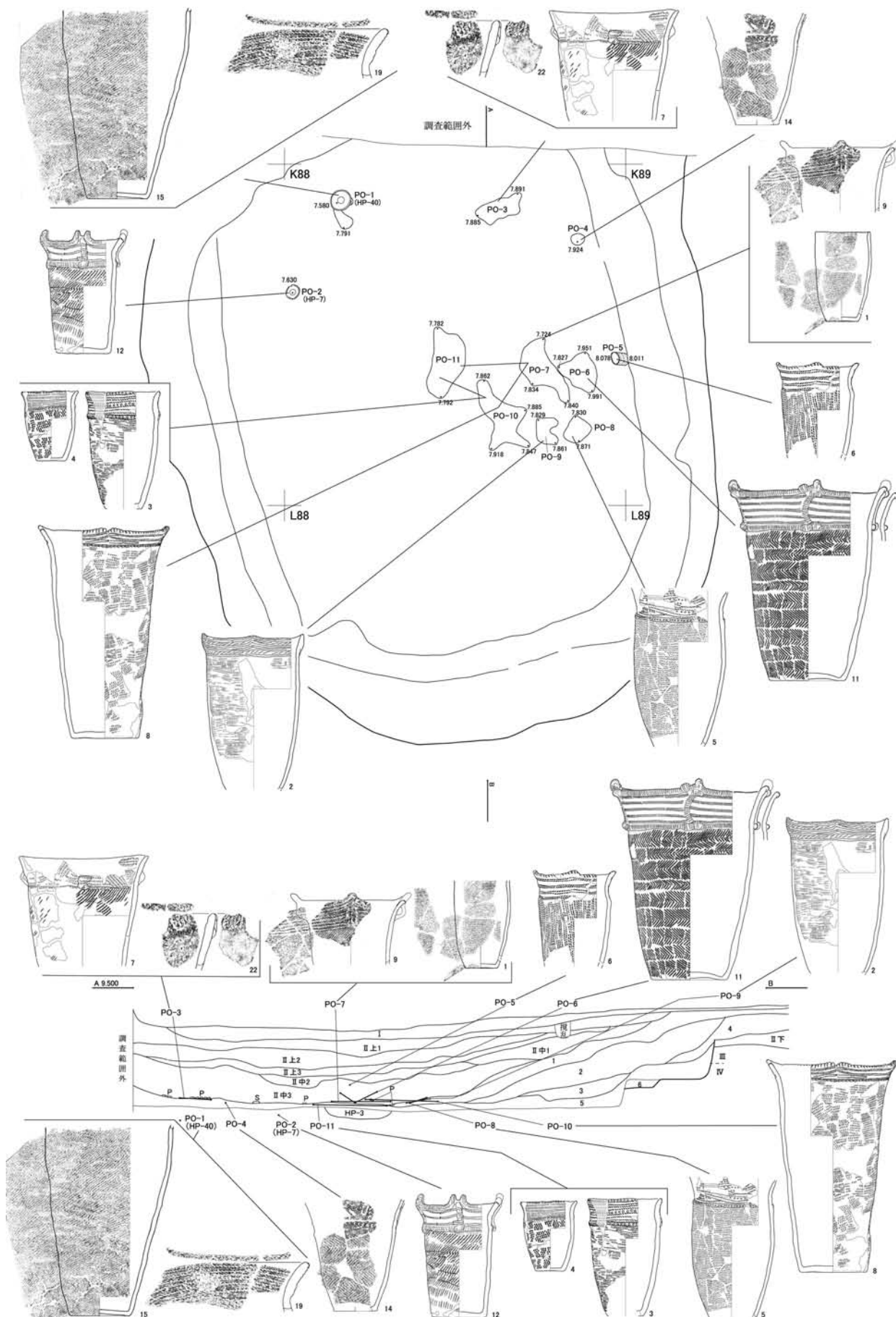
図IV-10 H-13



図IV-11 H-13 柱穴セクション図



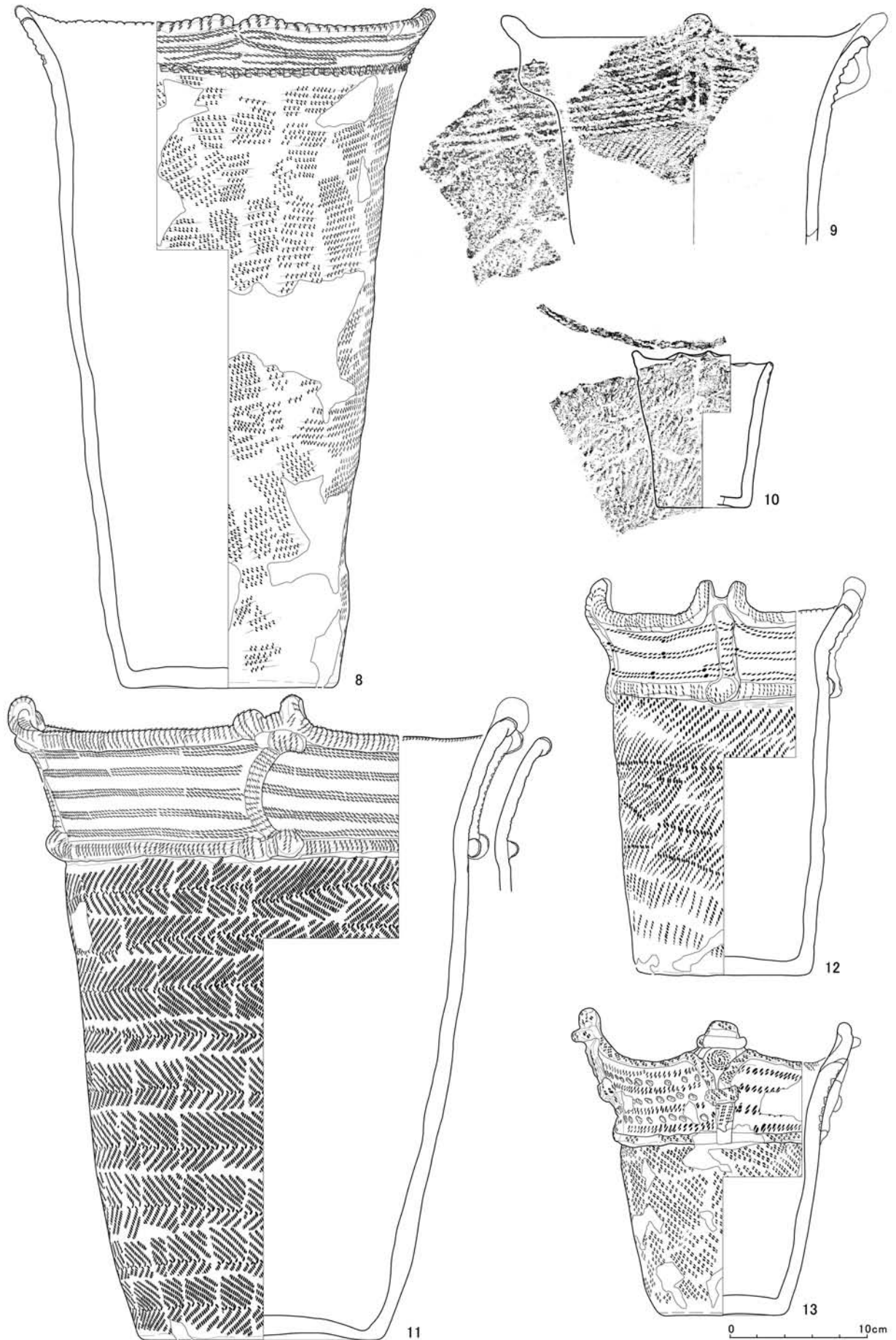
图IV-12 H-13 遺物出土狀況图



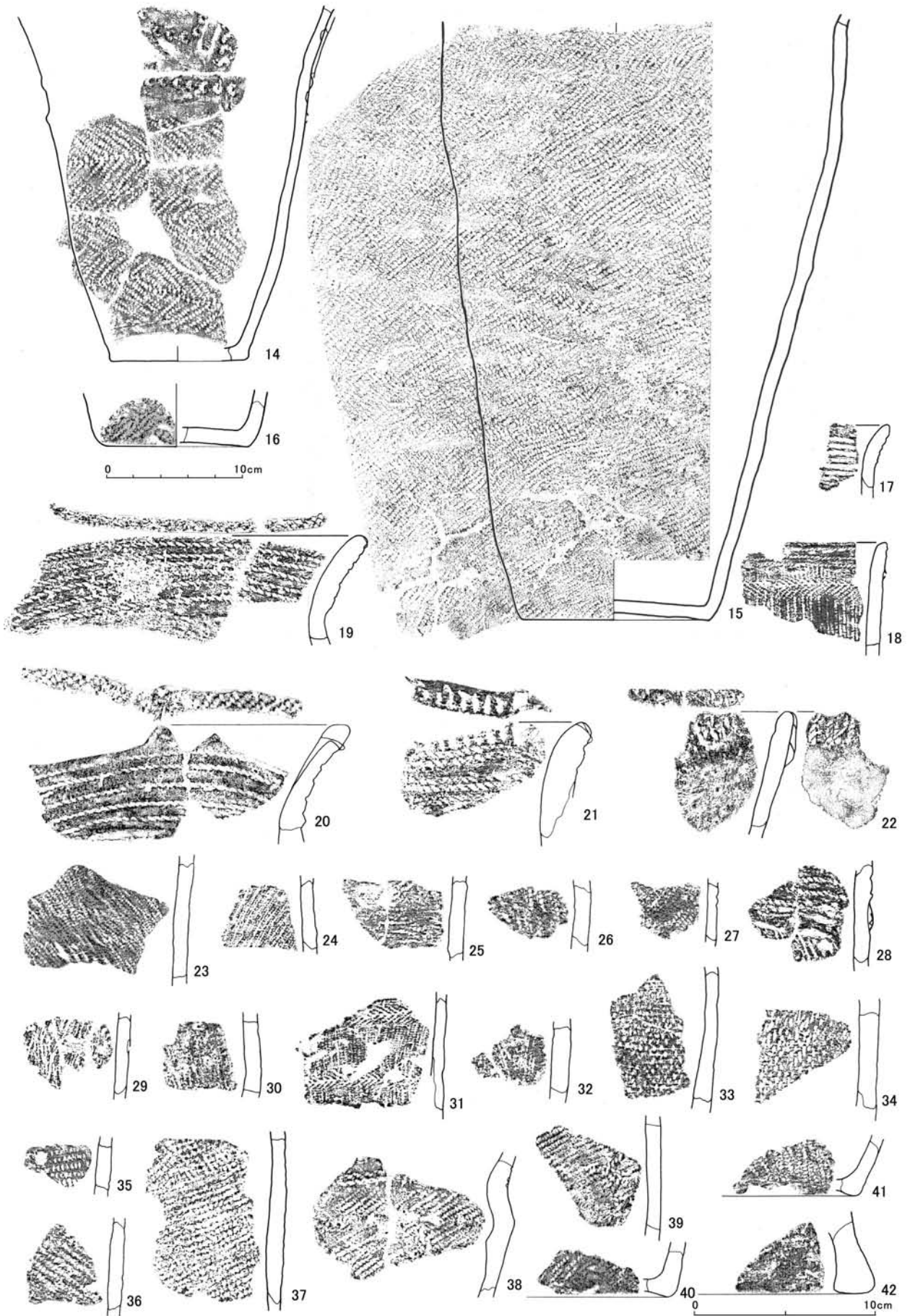
图IV-13 H-13 PO遺物出土狀況图



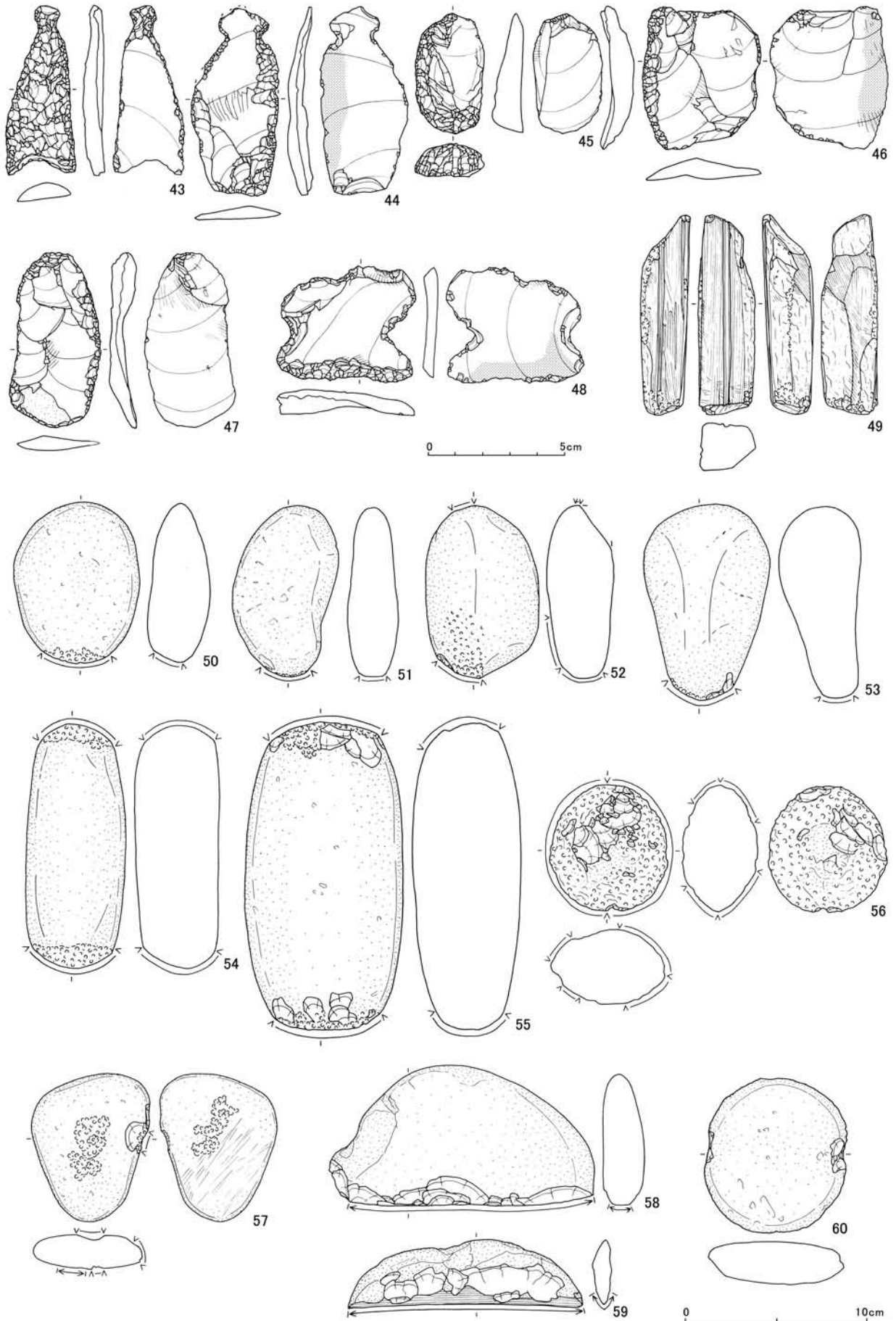
图IV-14 H-13 土器 (1)



图IV-15 H-13 土器 (2)



图IV-16 H-13 土器 (3)



图IV-17 H-13 石器 (1)



图IV-18 H-13 石器 (2) 土製品

平面形：円形と推定される。床は凹凸があり、北・西側に緩く傾斜している。壁は緩く立ち上がる。

付属遺構：北側と南側の床面から柱穴とみられる小ピットが検出された（HP-1・2）。

遺物出土状況：ほぼ中央部の床面から覆土中位にかけて、土器が潰れた状態で出土した。個体数は48個体になる。床面・床直上からⅡ群B-3類土器など5,047点、HPから土器32点、石器等10点、覆土からⅡ群B-3類土器など7,568点、石器等718点が出土した。石製品は線刻礫1点、軽石製石製品1点が出土している。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：（土器）出土状況から、床面・床面直上・覆土に分けて掲載した。

床面・柱穴（1～6）：1～6はⅡ群B-3類土器で、床面から復原土器5個体、柱穴（HP-2）から1個体得られた。体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの、自縄自巻の原体で施されたものがまとまって出土した。

Ⅱ群B-3類土器（1～6）：1は口頸部文様帯に単軸絡条体第5類の回転文が施されたもの。2は単軸絡条体第5類の回転文、3は単軸絡条体の回転文を施文方向を変えて、口頸部・体部に施文したもの。4は縄線で口頸部文様帯下端を区画し、文様帯には斜行縄文が施されている。5・6は体部に自縄自巻の原体による縄文が施されている。

床面出土資料には、体部文様として、単軸絡条体第5類の多用が認められる。そして、Ⅱ群B-3類土器の体部に多く認められる直前段反撚の原体による縄文が施されたものは出土していない。また、口頸部文様帯が区画文で区画されているものが少ない傾向が認められる。

床面直上（7～17）：7はⅡ群B-2類土器、8～17はⅡ群B-3類土器である。いずれも体部に単軸絡条体の回転文が施されたものである。

Ⅱ群B-2類土器（7）：7は口頸部文様帯に不整綾絡文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器（8～17）：8は単軸絡条体第5類の回転文が、口頸部文様・体部に施文方向を変えて施されたもの。9はバケツ型で、口頸部文様帯下端を2本一組の縄線で区画し、文様帯には横位の単軸絡条体の回転文が施されている。10は無文地の口頸部文様帯に縄線文が加えられているもの。11～14は口頸部文様帯に縄文が施されたもの。11は区画帯をもたず、口頸部文様帯には斜行縄文が施されている。12の口頸部文様帯下端は沈線が加えられた貼付帯で区画され、文様帯に斜行縄文を施されている。13は2本一組の縄線で口頸部文様帯を区画し、文様帯に斜行縄文を施した後、2本一組の鋸歯状の縄線文が加えられている。14は沈線で口頸部文様帯を区画し、文様帯には結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出している。15は文様帯下端を2本一組の縄線文で区画し、横位の単軸絡条体の回転文を施した後、縦位の2本一組の縄線文が加えられている。16は口頸部文様帯の上下を沈線で区画し、斜行縄文を施した後、2本一組の鋸歯状の沈線文が加えられる。17は口縁部破片、器面に単軸絡条体の回転文が施されている。

床面直上出土資料には、床面出土資料と同様に体部が単軸絡条体の回転文のものが多く認められた。口頸部文様帯には斜行縄文が施されたものが多く認められた。また、口頸部文様帯が区画文によって区画され、文様帯に沈線・縄線が加えられ文様構成をもつものも認められ、床面出土資料との違いが認められる。

覆土（18～42）：25・39はⅡ群B-2類土器、18～24・26～35・37・38・40～42はⅡ群B-3類土器、36はⅢ群A類土器。

Ⅱ群B-2類土器（25・39）：25は口頸部文様区画帯をもつもの。口頸部文様帯下端を縄線が加えられた貼付帯で区画し、文様帯に横位の単軸絡条体第5類の回転文が施されている。39は体部破片。

口頸部下端に貼付帯が加えられている。体部には大粒の多軸絡条体の回転文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(18～24・26～35・37・38・40～42)：18～31は体部に単軸絡条体の回転文が施されたものである。18～22は文様区画帯をもたないものである。18・19は筒形で、18の口頸部文様帯には不整綾絡文、19は無節の斜行縄文で菱目状の文様構成を作出している。20・21は無文地の文様帯に縄線文が加えられているもの。22の文様帯には斜行縄文が施されている。23・24・26・27は2～3本一組の縄線文を口頸部文様区画帯として用いているもの。23の文様帯には単軸絡条体の回転文が施され、縦位の縄線文が加えられている。24・26・27は文様帯に縄文が施されているもので、24・26は斜行縄文、27は結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出している。24の体部下半にも斜行縄文が認められる。27の文様帯には縦位の縄線文が加えられている。28～31は体部に単軸絡条体の回転文が施された底部で、28は単軸絡条体第5類の回転文である。32～35は体部に縄文が施されたもの。32は口頸部文様区画帯として貼付帯が施され、無文地の文様帯に縄線文が加えられている。33は器面に斜行縄文を施した後、口頸部文様帯下端に2本一組の沈線を加えている。34は小型土器。器面に斜行縄文が施されている。35は口頸部破片で、口頸部に斜行縄文が、体部には横走気味の縄文が施されている。37・38・40・41は体部に大粒の多軸絡条体の回転文が施されているもの。37aは幅広の口頸部に不整綾絡文が施された口縁部破片、37bは体部破片。38は口縁部破片で、口唇直下に縄線文が施されている。40・41は底部破片。42は体部に条痕文が認められる。

Ⅲ群A類土器(36)：36は体部破片。同一個体で多条の結束羽状縄文が施されている。

(小括)床面・床面直上出土の復原土器と覆土出土の復原土器では体部縄文に違いが認められた。床面の復原土器の体部文様は単軸絡条体の回転文・自縄自巻の回転文である。覆土の復原土器の体部縄文には新たに縄文・大粒の多軸絡条体の回転文が加わる。H-14の体部文様では出土層位から縄文・大粒の多軸絡条体の回転文が新しい要素と考えられる。さらに、他の遺構で多く認められる直前段反撚の原体による縄文が施された復原土器が得られていない。直前段反撚による縄文がさらに新しい文様要素であることを示唆している様に思われる。これらのことが本遺構の特徴といえる。

(石器)43～48は覆土出土。43は石鏃。円基。珪質頁岩製。44は石槍。有茎尖基。頁岩製。45は石錐。両面調整で棒状の機能部を作出している。被熱によるはじけがみられる。頁岩製。46はつまみ付ナイフ。縦型で両面調整。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。47は石斧。撥形で両刃の円刃。全面を研磨によって調整している。緑色泥岩製。48はすり石で扁平打製石器。板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に非常に幅の狭い機能部を作出している。長軸両端に打ち欠きによる抉りがある。安山岩製。49は軽石製石製品。すり面とみられる内彎する面がある。

H-15・24(H-15：図IV-29～33、図版7・53・54 H-24：図IV-29・30、図版16)

位置：L～N86・87区

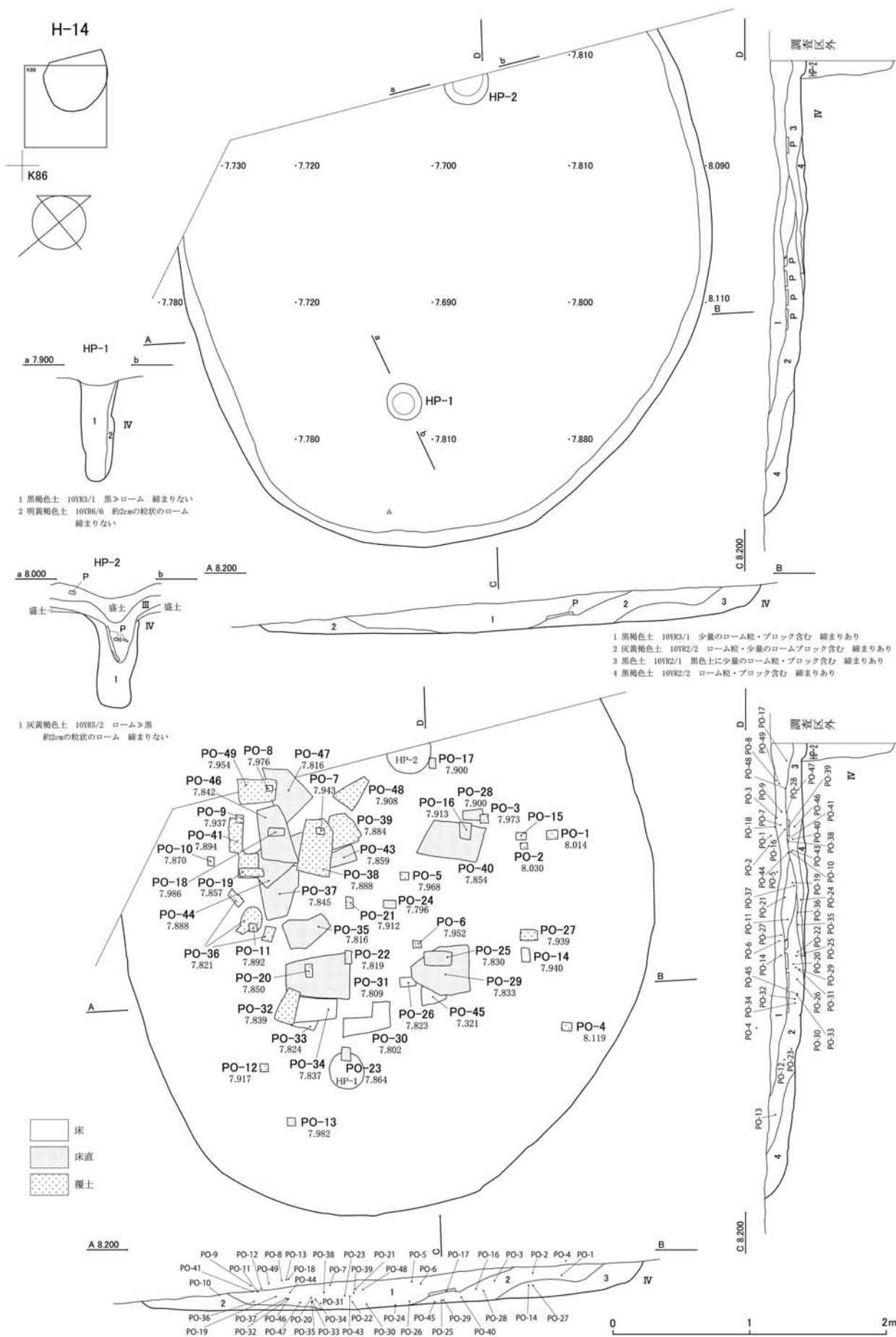
規模：H-15：7.48 / 6.00×5.08 / 4.00×0.97 m

H-24：2.12 / 1.14×1.88 / 1.24×0.05 m

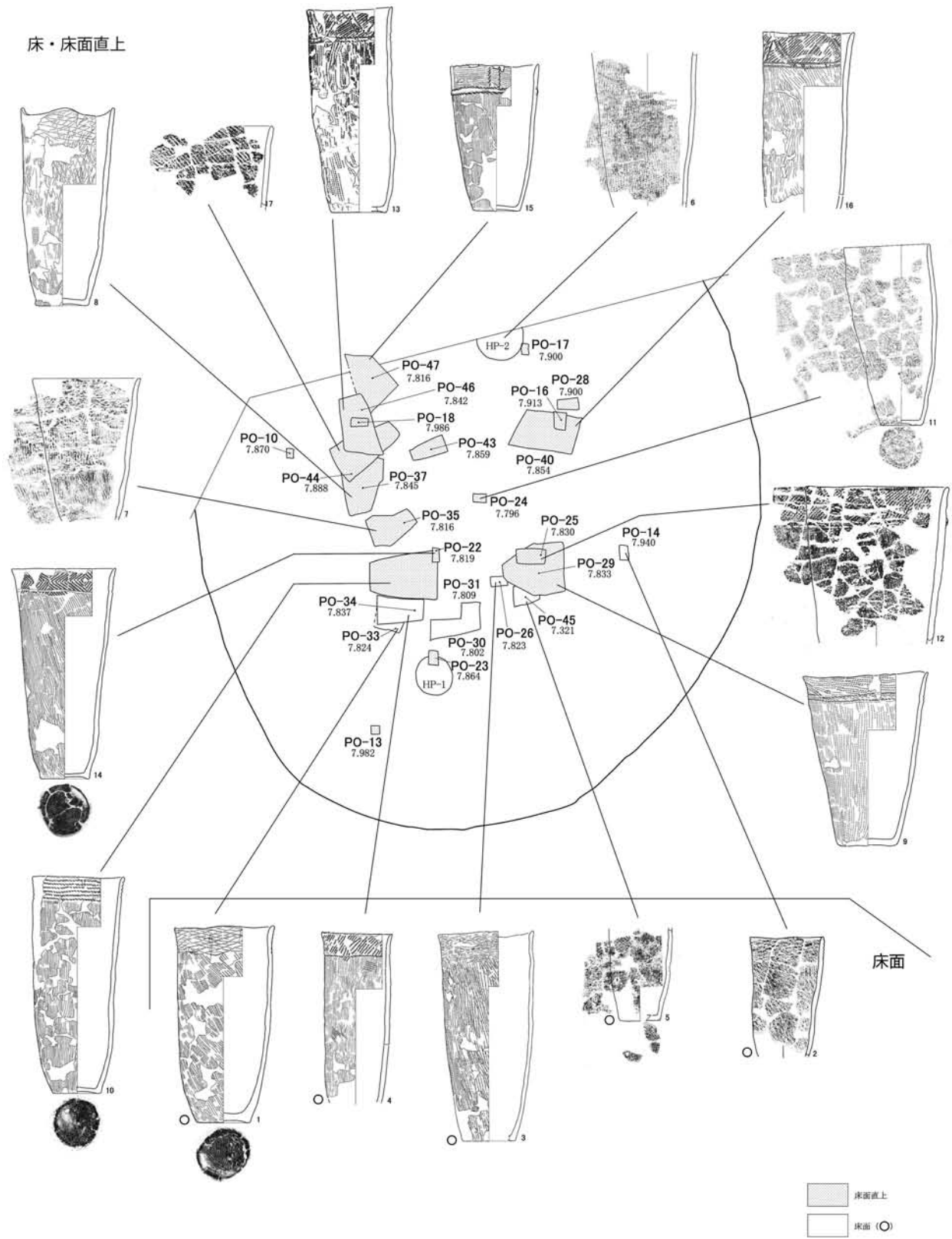
確認・調査：(H-15)表土除去を行った際に、暗褐色土の落ち込みとして確認された。遺跡東西方向メインレンチにM87区付近で暗褐色土の落ち込みを検出したことから、メインレンチと直交するベルトを設定して覆土の除去を行った。堅く締まる平坦な床面とベンチ状構造、急角度に立ち上がる壁面を検出した。床面は南西側へごく緩やかに傾いている。P-30を切って構築されている。

(H-24)H-15の北西側床面に暗褐色土の落ち込みとして検出された。覆土を除去したところ平坦な床面に周溝が廻ったことから住居としたが、土坑の可能性もある。

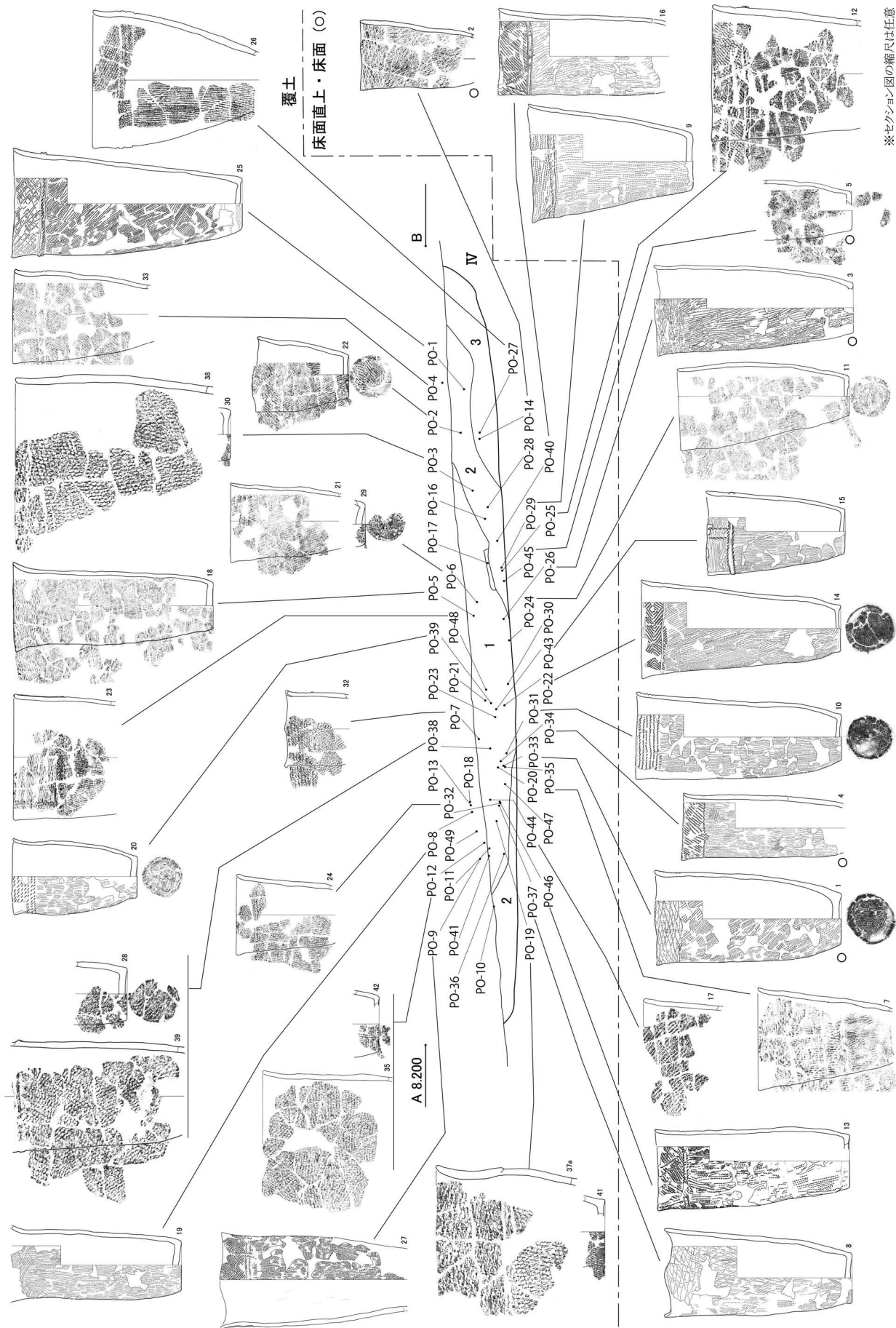
覆土：(H-15)覆土は8層に分けた。1～5層は流れ込み、6～8層は壁面崩落土。



図IV-19 H-14

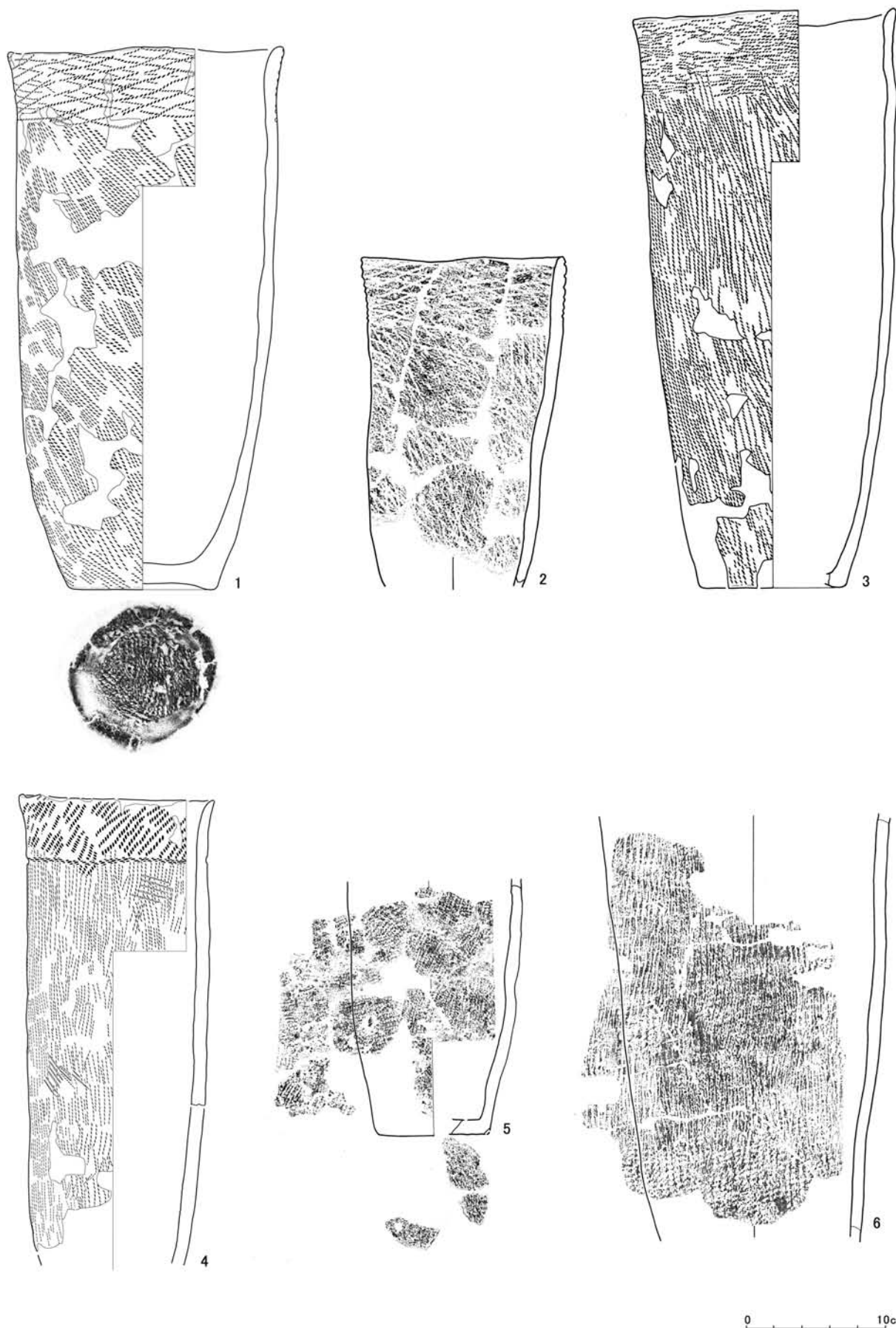


图IV-20 H-14 PO遺物出土狀況图 床、床直

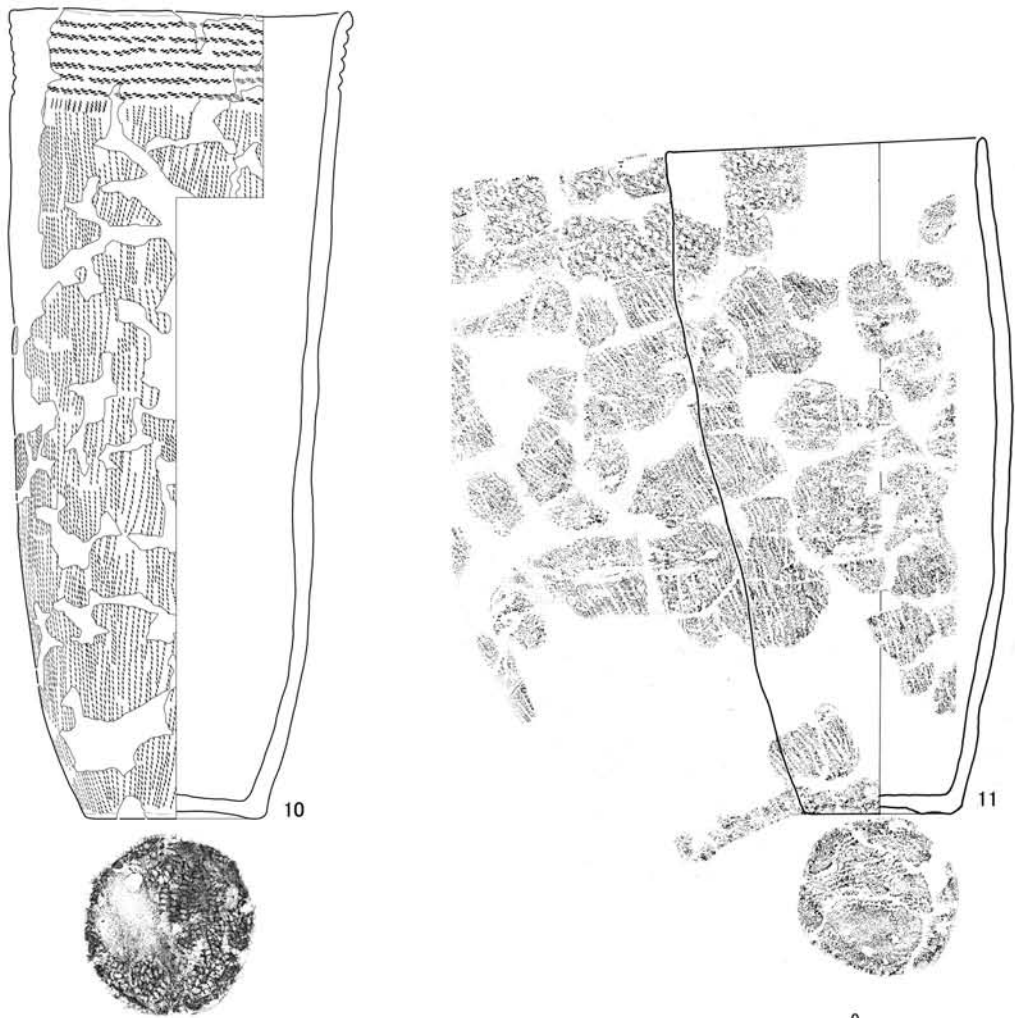
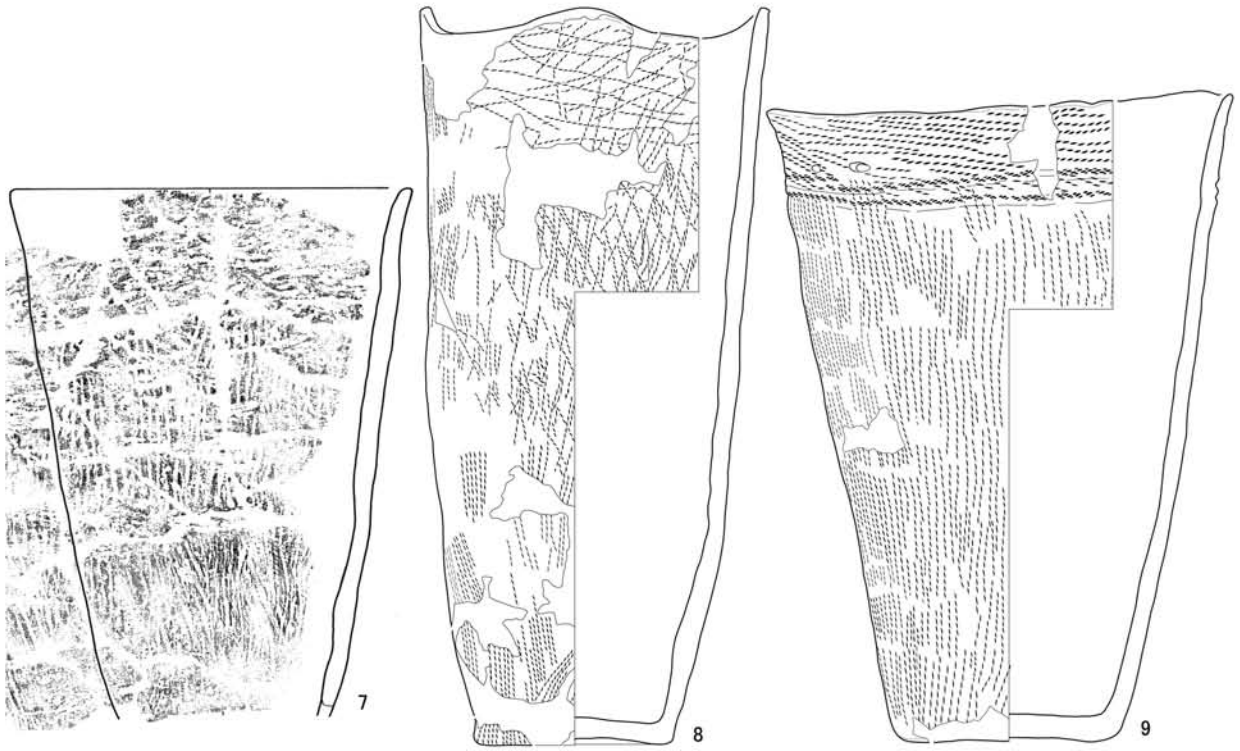


※セクション図の縮尺は任意

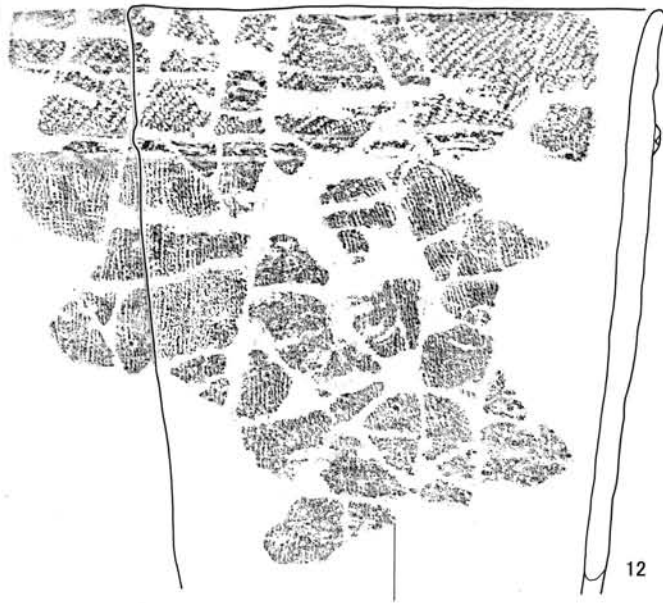
図IV-22 H-14 PO遺物出土状況図 垂直分布図



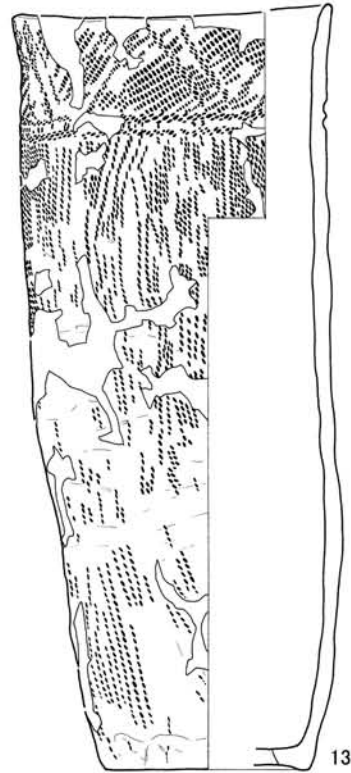
图IV-23 H-14 土器 (1)



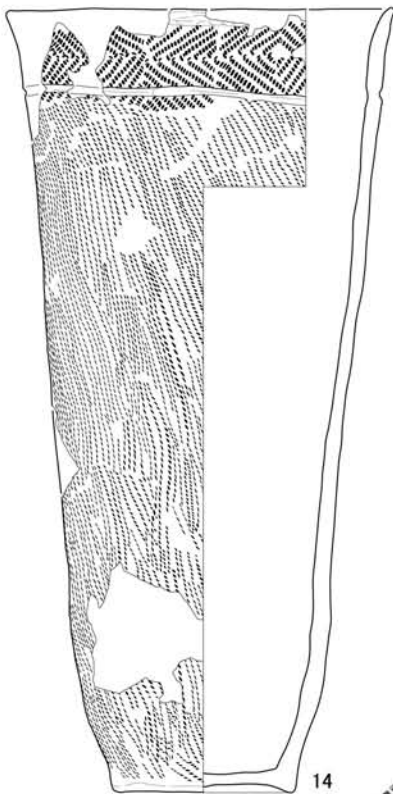
图IV-24 H-14 土器 (2)



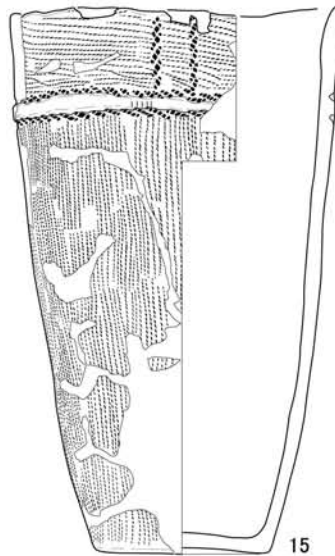
12



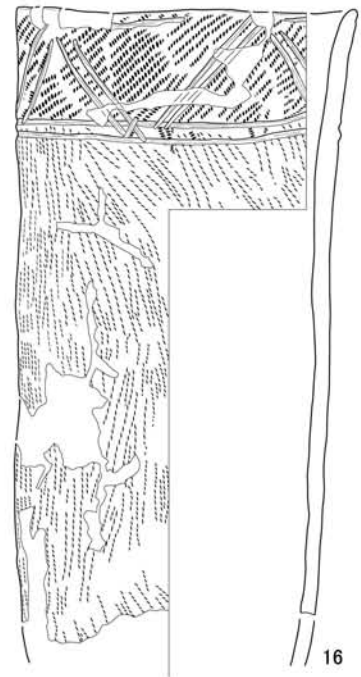
13



14



15



16

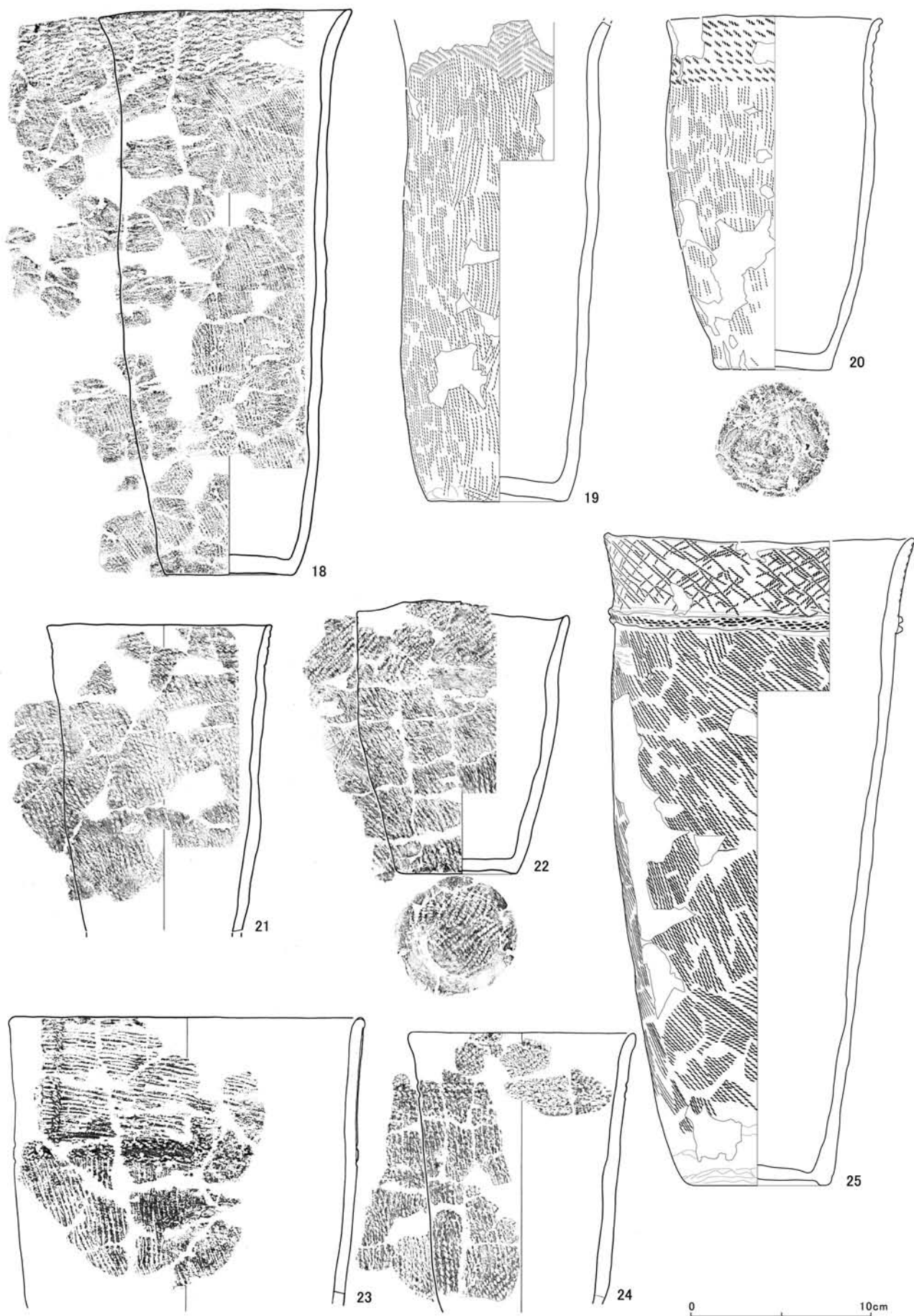
0 10cm



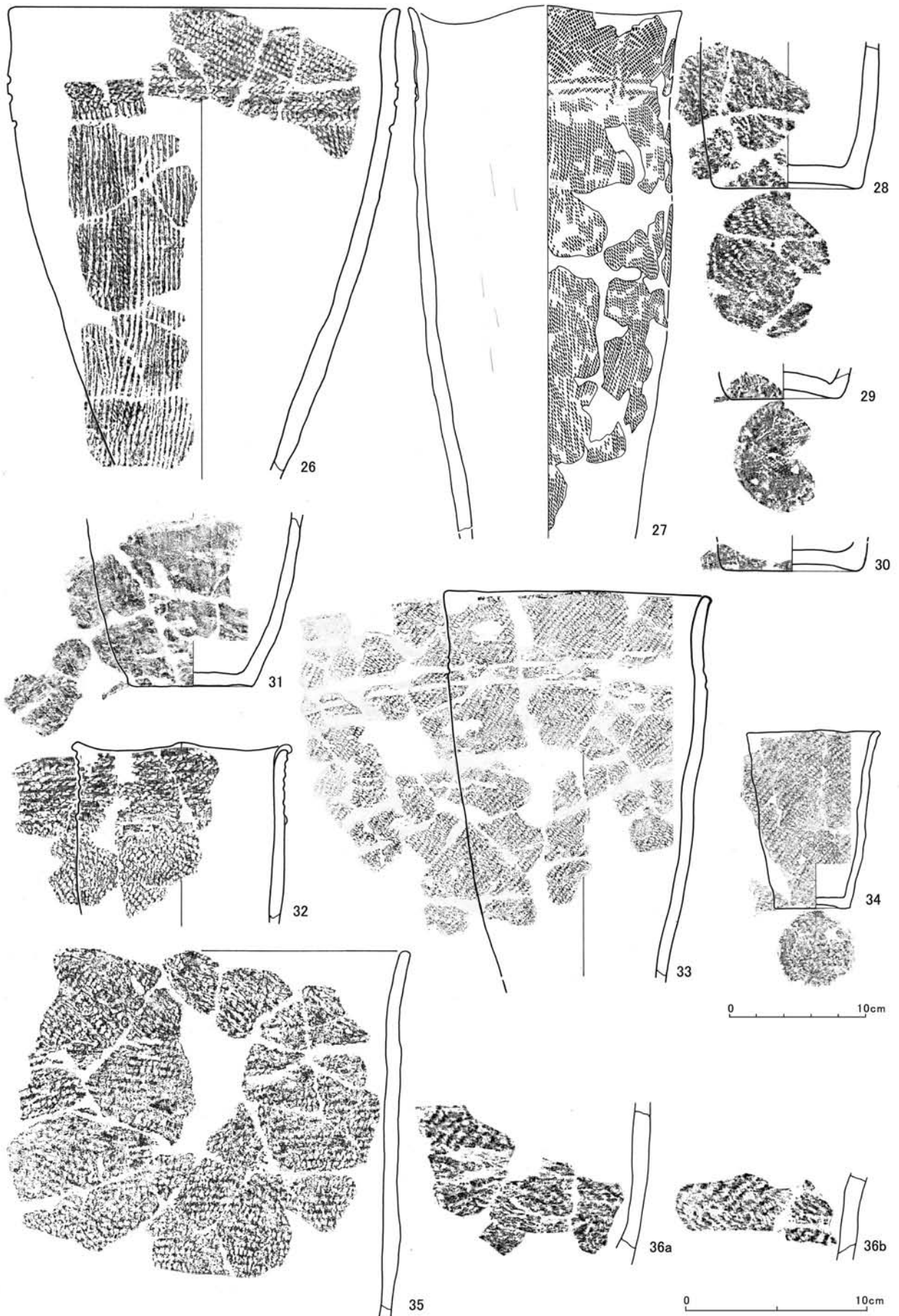
17

0 10cm

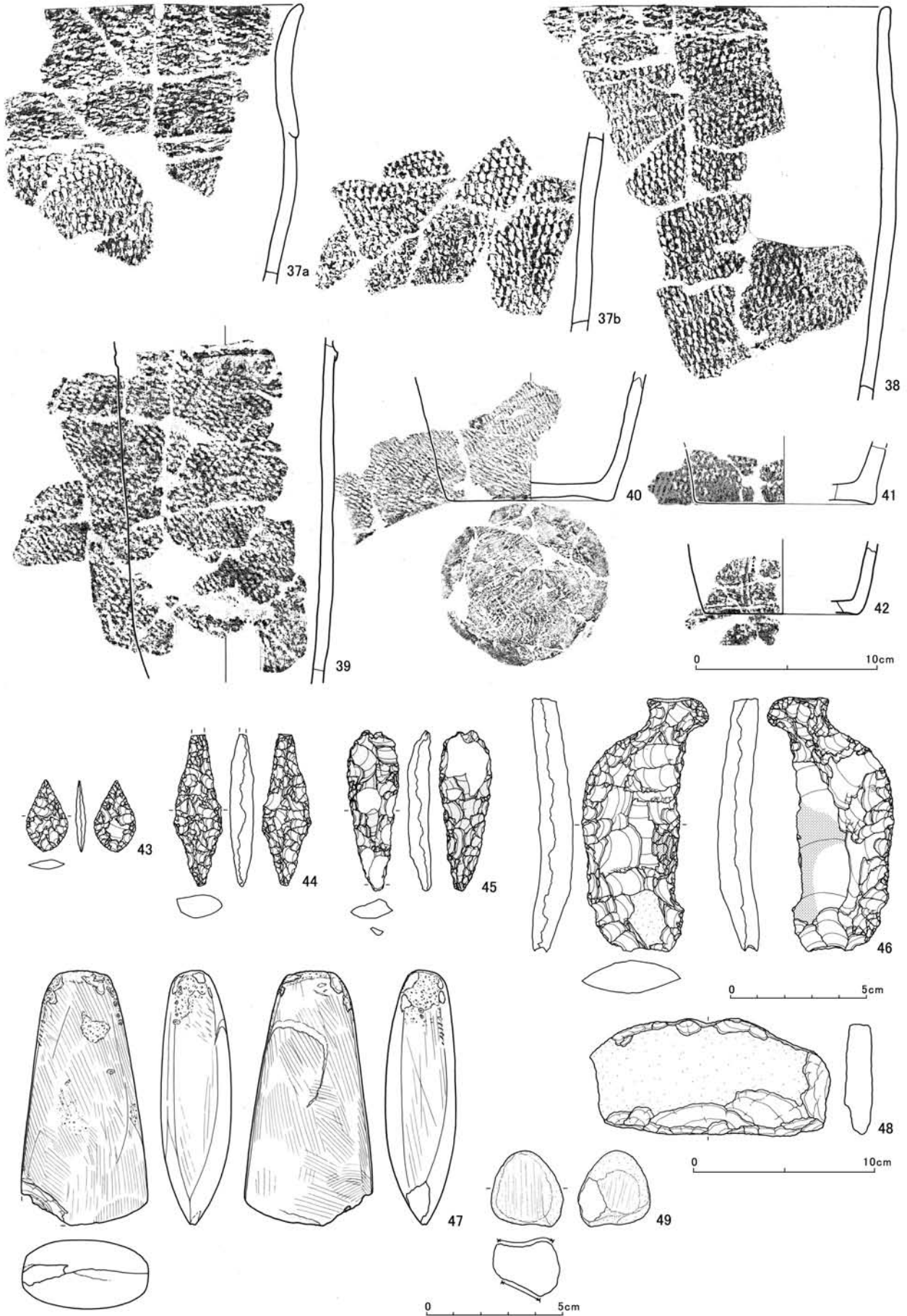
图IV-25 H-14 土器 (3)



图IV-26 H-14 土器 (4)



图IV-27 H-14 土器 (5)



图IV-28 H-14 土器 (6) 石器

形態：(H-15) 平面形は隅丸方形で、長軸方向はN-37°-Wである。4本柱でベンチ構造がある。土坑1基、柱穴・小柱穴21基が検出された。

(H-24) 平面形は楕円形で、長軸方向はN-1°-Eである。小柱穴4基と周溝が検出された。

付属遺構：(H-15) HP-1は床面ほぼ中央から検出された土坑。平面形は楕円形で長径0.56m、深さ0.7mほどで、坑底直上から多数の遺物が出土している。HP-2・4～8は深さ0.7～0.8mの主柱穴。まずHP-2・4・5・7で建てられ、その後HP-4・5・6・8の4本柱に建て替えられたと考えられる。HP-24～32は直径0.1～0.2mの壁柱穴。HP-20・34は溝状の小土坑。

(H-24) HP-15・16・35・36は小柱穴。周溝は床面壁際に幅10cm、深さ5cmほどの溝が廻る。

遺物出土状況：(H-15) 床面からⅡ群B類土器など125点、石器等92点、HPから土器41点、石器等119点、覆土からⅡ群B類土器など2,552点、石器等2,149点が出土している。HP-1では土器18点、石器等76点が出土し、底面近くから土器・石器等が集中して出土している。

(H-24) 床面からⅡ群B-5土器など4点、石器等14点が出土した。

時期：床面出土の遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(H-15) (土器) 1・2・11・12～16・26・29は床面、他は覆土1～5層及び覆土出土。5はⅠ群A類土器、6～9はⅠ群B-4類土器、1はⅡ群B-2類土器、10～12・16～18はⅡ群B-3類土器、2・20～25はⅡ群B-4類土器、3・4・19・26～29はⅡ群B-5類土器である。

Ⅰ群A類土器(5)：5は緩やかな波状の口縁部破片。無文地に貝殻腹縁文と刺突文が加えられたものである。物見台式に比定される。

Ⅰ群B-4類土器(6～9)：6～9は撚糸文と絡条体圧痕文が施された胴部破片である。

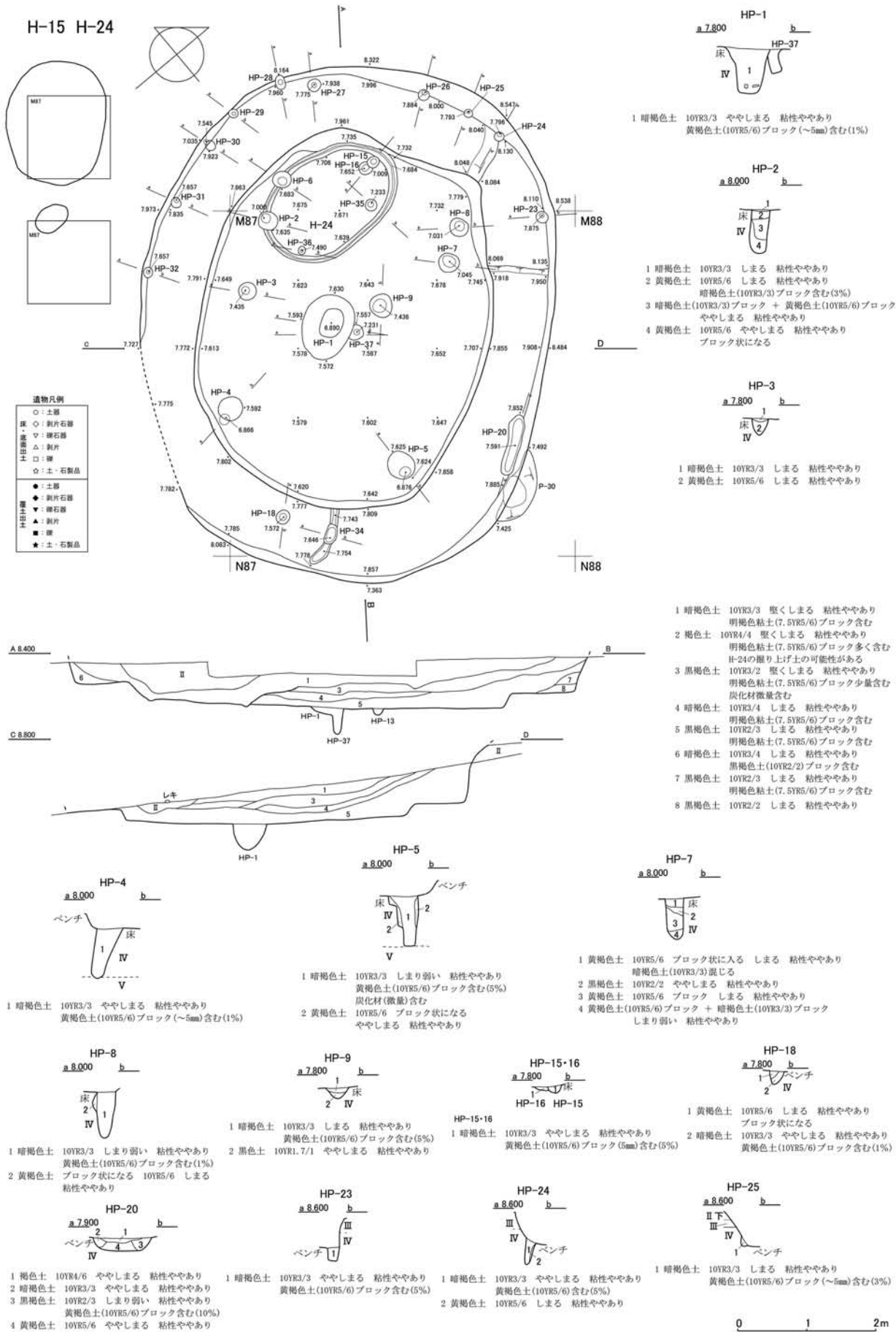
Ⅱ群B-2類土器(1)：1は平縁で、口頸部文様帯下端は刺突が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には不整綾絡文、体部には大粒の多軸絡条体の回転文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(10～12・16～18)：10は波頂部の口頸部破片。口頸部には斜行縄文が施され、口唇部直下に2本一組の縄線文が加えられている。11・12は口縁部破片。11は結束羽状縄文が、12には直前段反撚による縄文が施されている。16～18は体部破片。16には直前段反撚による縄文が、17は単軸絡条体の回転文が、18には斜行縄文が施されている。

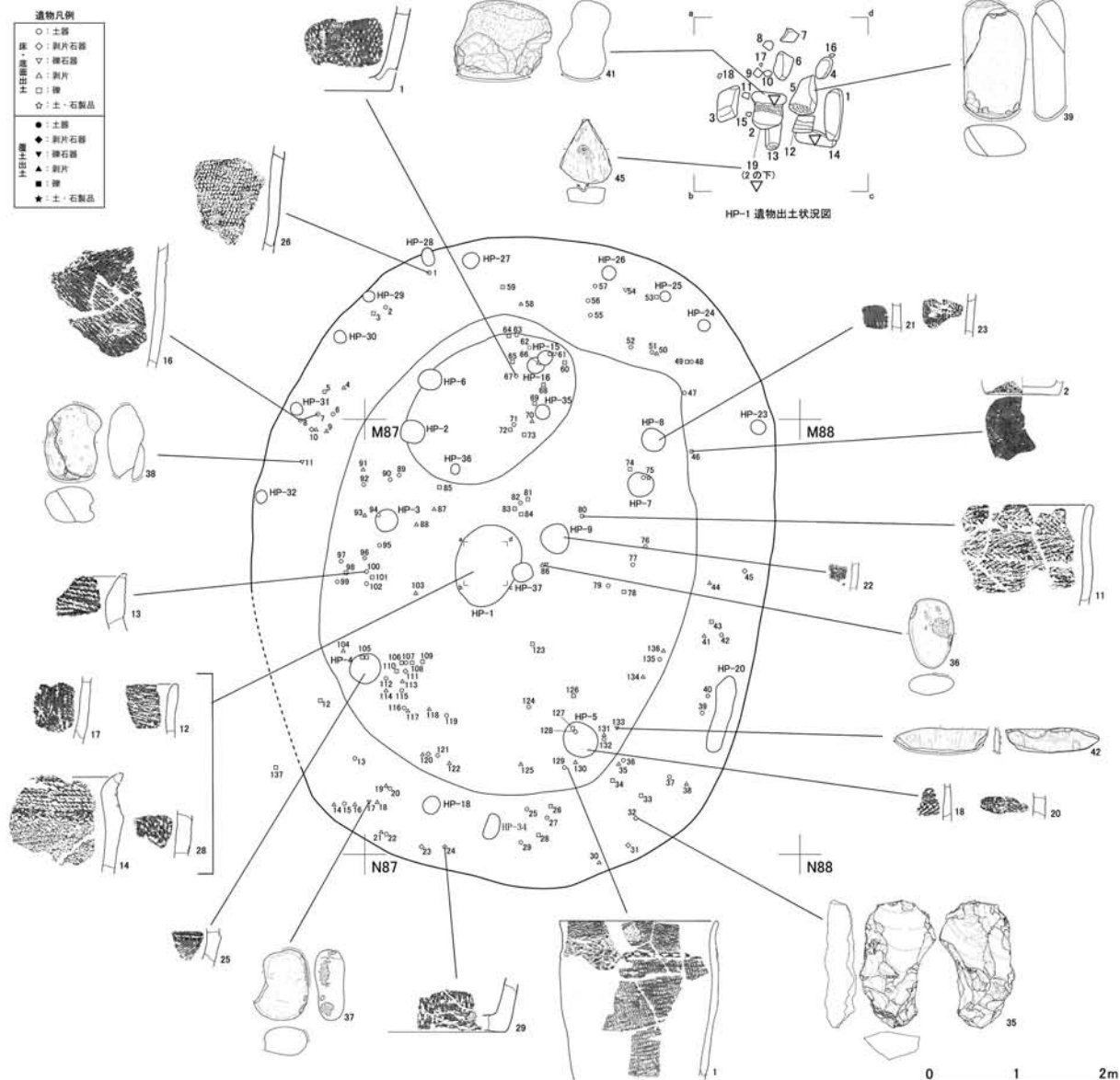
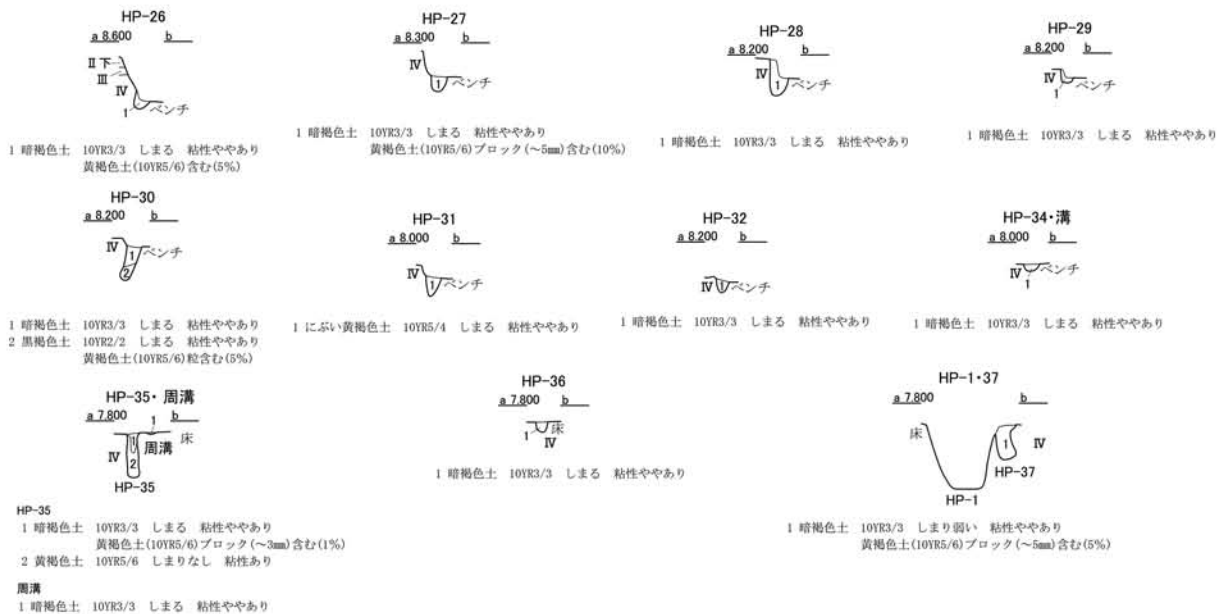
Ⅱ群B-4類土器(2・13～15・20～25)：2は撚糸文が施された底部。13～15は幅の狭い口頸部文様帯をもつもの。13・14は2本一組の縄線文が施されているもの。15は文様帯・肩部分には縄線文と刺突文が加えられている。14・15の体部には多軸絡条体の回転文が施されている。20～24は細い単軸絡条体の回転文が施されたもの。25は口頸部下端の肩部分。無文地の口頸部文様帯に細い撚糸圧痕文が加えられ、肩部分には斜行縄文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(3・4・19・26～29)：3・4・29は器面に多軸絡条体の回転文が施された底部。19は単軸絡条体第1A類の回転文が施されたもの。26～28は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。

(H-15) (石器) 35～38・42は床面、43は覆土2層、40は覆土3層、44は覆土5層、30～34は覆土、39・41・45はHP-1覆土1層出土。30は石鏃。円基。頁岩製。31はナイフ。有茎。茎部は折損している。裏面は主剥離面を残し周縁部を調整している。頁岩製。32・33は石錐。32は尖頭形で両端部に機能部を作出している。頁岩製。33は剥片の一部に棒状の機能部を作出している。機能部先端には原石面が残存する。黒曜石製。34はつまみ付ナイフ。縦型で片面調整のもの。左側縁には原石面が残存する。頁岩製。35は両面調整石器。剥片の周縁に2次加工を施している。頁岩製。36～39はたたき石。36は扁平な棒状礫の平坦面に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。37は扁平な亜円礫の周縁部に敲打痕のあ



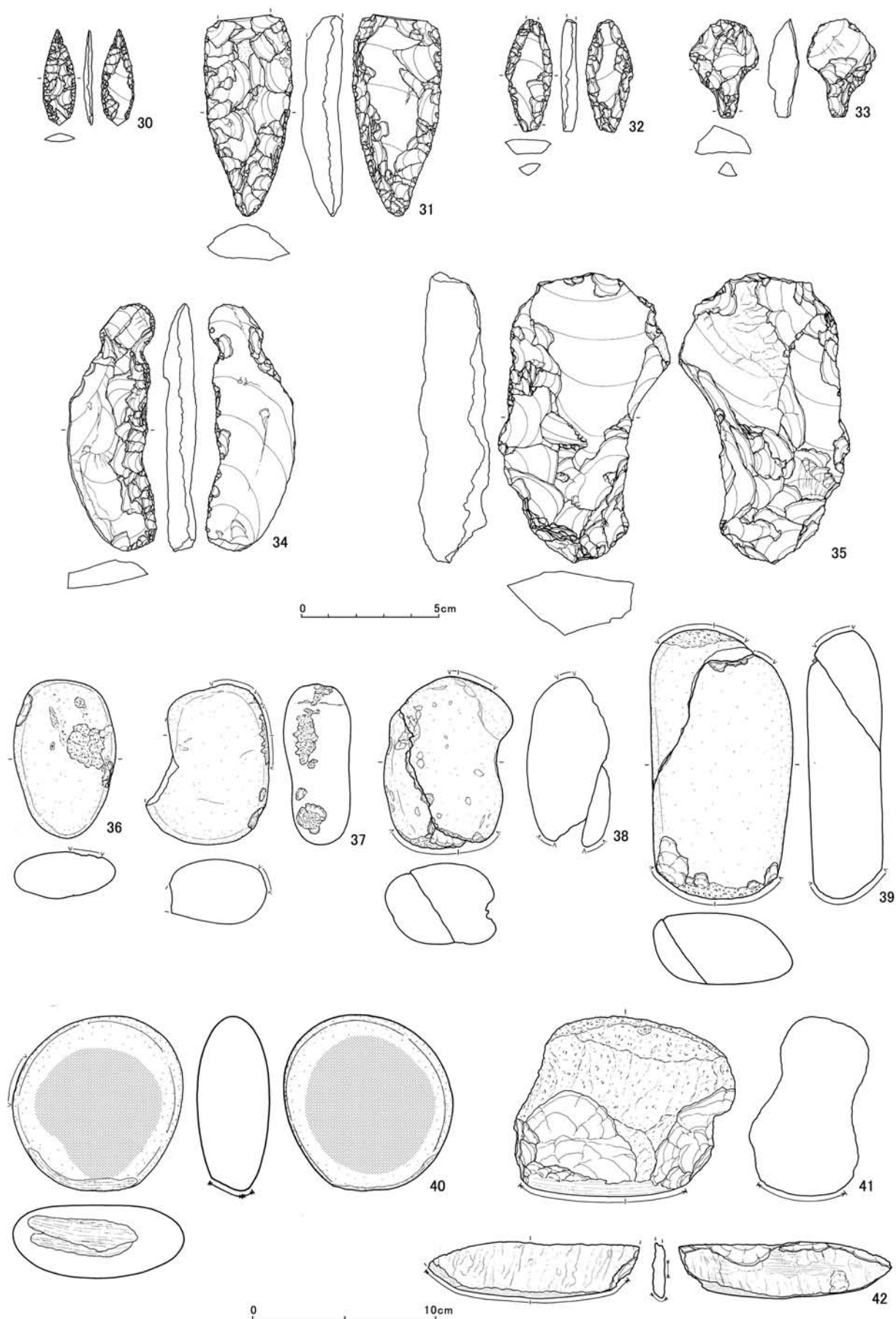
図IV-29 H-15・H-24



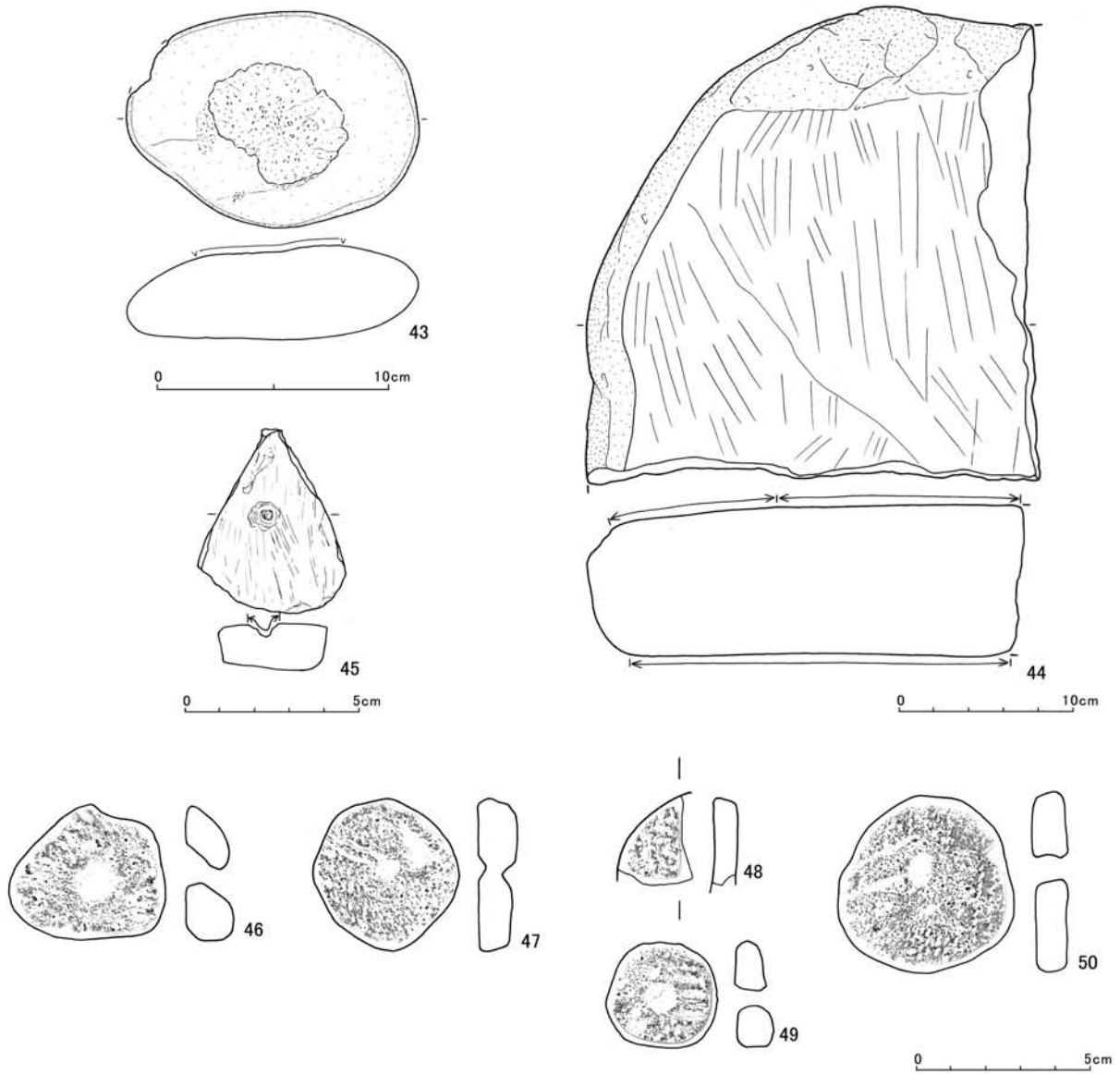
図IV-30 H-15・H-24 セクション図 遺物出土状況図



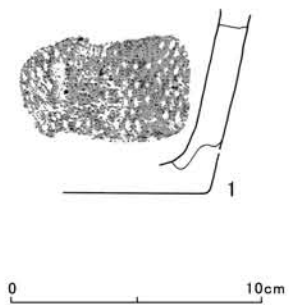
图IV-31 H-15 土器



图IV-32 H-15 石器 (1)



H-24



图IV-33 H-15 石器 (2) · 土製品 · H-24 土器

るもの。泥岩製。38は扁平な棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。花崗岩製。39は扁平な棒状礫の端部が広い敲打面になっているもの。砂岩製。40・41はすり石。40は扁平な円礫の下端にすり面があるもの。側縁には敲打痕がある。平坦面には使用痕とみられる光沢が両面に確認できる。41は北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は長軸・短軸ともに外彎し、短軸方向に傾いている。安山岩製。42は石鋸。U字状のすり面がある。粘板岩製。43は台石。扁平な楕円礫の平坦面に敲打によって平坦な面が作出されている。泥岩製。44は石皿片。板状礫の平坦面に平らなすり面がある。安山岩製。45は石製品。泥岩破片の割れ面に細い線刻がみられ、径6mm・深さ4mmほどの穿孔痕がある。46～50はⅡ群B類土器片を素材とする有孔土製円板である。

(H-24) (土器)：1は器面に多軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-5類土器の底部破片。

H-16 (図IV-34～37、図版8・55～61)

位置：M・N・O・P88・89、N90区

規模：13.36 / 9.90×13.13 / 9.64×0.94m

確認・調査：Ⅱ層を掘り下げた段階で、褐灰色土の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：上位(覆土1・2層)は掘り上げ土の自然堆積層で、下位(覆土3・4・5層)は炭化物・焼土粒を含む盛土や屋根の崩落土層が堆積している。

平面形：平面形は楕円形。ベンチ構造を持つ。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。南東側の壁の一部はH-11構築時に壊されている。支柱穴と重複あるいは隣接して柱穴がみられることから、建て替えや修復された可能性が高い。

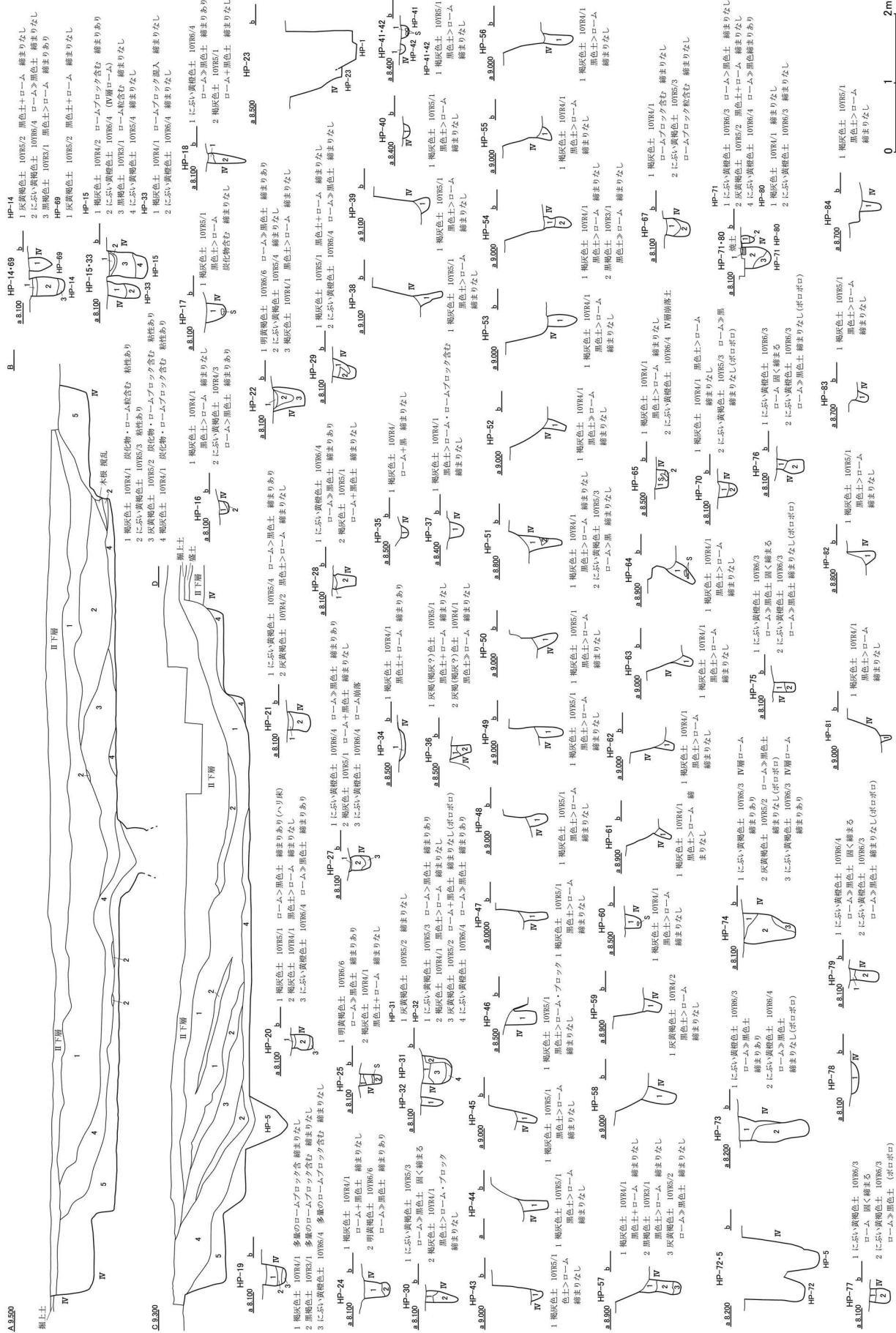
付属遺構：支柱穴は6本検出された(HP-1～6)。周溝は壁際の床面で断続的に巡る。溝には材留めの杭跡がみられる所がある。出入口は北西側と西側で2か所検出された。いずれもベンチの床面に張り床が施されている。張り床面は非常に固く締まっている。炉跡は床面南側と北側で検出された(HF-1・2)。いずれも地床炉である。

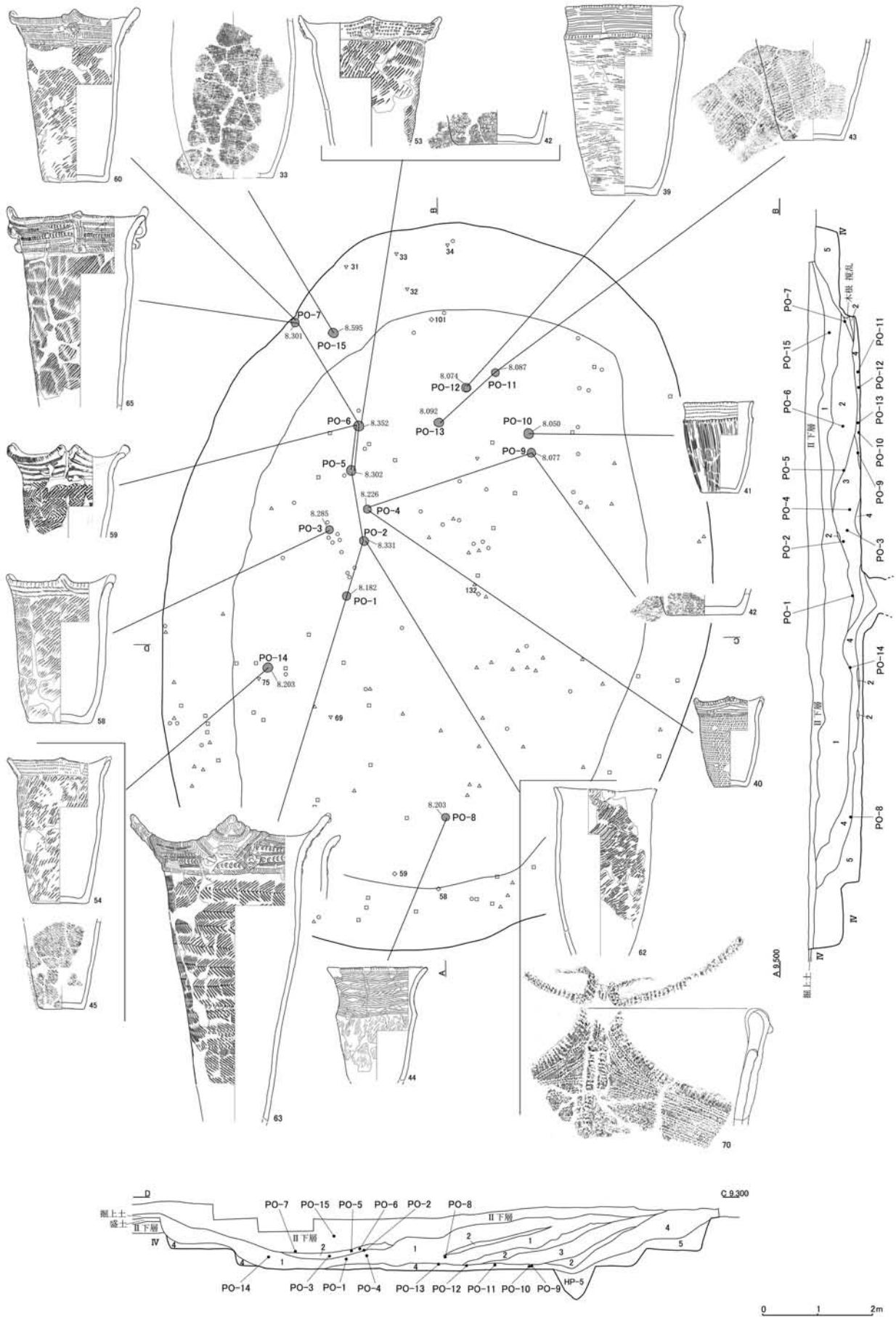
遺物出土状況：床面からまんべんなく出土した。覆土から15個体の土器が潰れた状態で出土した。床面・床面直上からⅡ群B-5類土器など376点、石器等129点、HPからⅡ群B類土器など179点、石器等182点、覆土からⅡ群B-5類土器など8,927点、石器等6,864点が出土している。石製品は異形石器1点、線刻礫2点、軽石製石製品2点、玦状耳飾り1点、有孔石製品1点、その他1点である。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

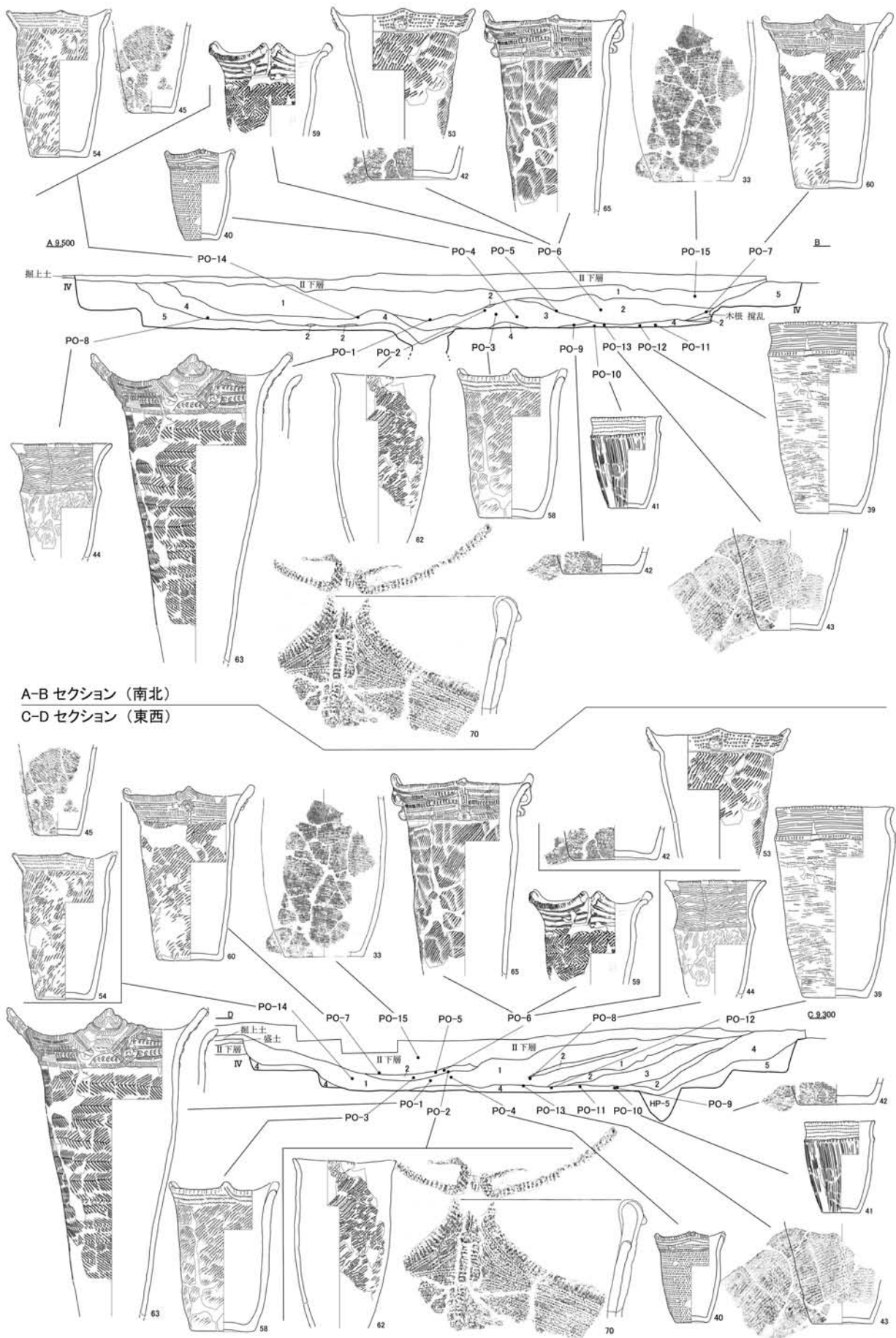
掲載遺物：(土器) 土器は出土状況が良好で取り上げ層位毎に掲載・記載する。

床面(1～32)：床面出土資料には床面出土のもの(1～6)と柱穴状ピット出土のもの(7～32)がある。1～6は床面出土。2はⅡ群B-3類土器の口頸部破片。縄文が施された口頸部上部に2本一組の縄線が区画帯として加えられている。1・3～6はⅡ群B-5類土器。1・3は肥厚する口縁をもつもので、口縁上には縄線文が加えられている。1の体部には単軸絡条体第4類の回転文が施されている。3は肥厚帯直下に綾絡文、体部に単軸絡条体第1A類の回転文が施されている。4は斜行縄文が施されたもの。5は体部破片で単軸絡条体の回転文が施されている。6は底部破片。単軸絡条体第1A類の回転文と思われる。7～32は柱穴状ピット出土。各時期の土器片が出土しているが、主体はⅡ群B-5類土器である。7はⅠ群B-4類土器、8～15はⅡ群B-3類土器、16～32はⅡ群B-5類土器である。7は綾絡文が施された体部破片。8は斜行縄文が施された口縁部破片。9・10は直前段反撚の縄文が施されたもので、9は体部破片、10は底部破片。11～13は自縄自巻の縄文が縦位に施されたもの。11には2本一組の綾絡文が加えられている。14は単軸絡条体の回転文が施され





图IV-36 H-16 PO遺物出土狀況图



図Ⅳ-37 H-16 PO遺物出土状況セクション図

たもの。15は結束羽状縄文上に組紐状の縄線文が加えられ、体部は自縄自巻の縄文が施されている。16～32はⅡ群B-5類土器である。16・17は口縁部破片。16は波状口縁で、波頂部は2個一組になるものと思われる。口唇に縄の圧痕文が加えられている。幅広の口頸部文様帯は複合し、口縁部の肥厚帯とその下位の頸部部分からなる。肥厚帯の断面は切り出し状で、肥厚帯には縄線文が施され、下端には半截竹管状工具による刺突文が加えられている。頸部の文様帯は無文地で、縄線文が施されている。17は口唇に縄の圧痕が加えられ、口頸部文様帯には縄線文と単軸絡条体の圧痕文が交互に押捺され、単軸絡条体の圧痕文が加えられた縦位の「逆T」字状の貼付帯が加えられている。18は口頸部下端部分の破片。無文地の文様帯には菱目状の縄線文が、肩部分には刺突文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。19～31は体部破片。19～30は多軸絡条体の回転文が施されたもの、31は条痕文が施されたもの。32は多軸絡条体の回転文が施された底部破片。

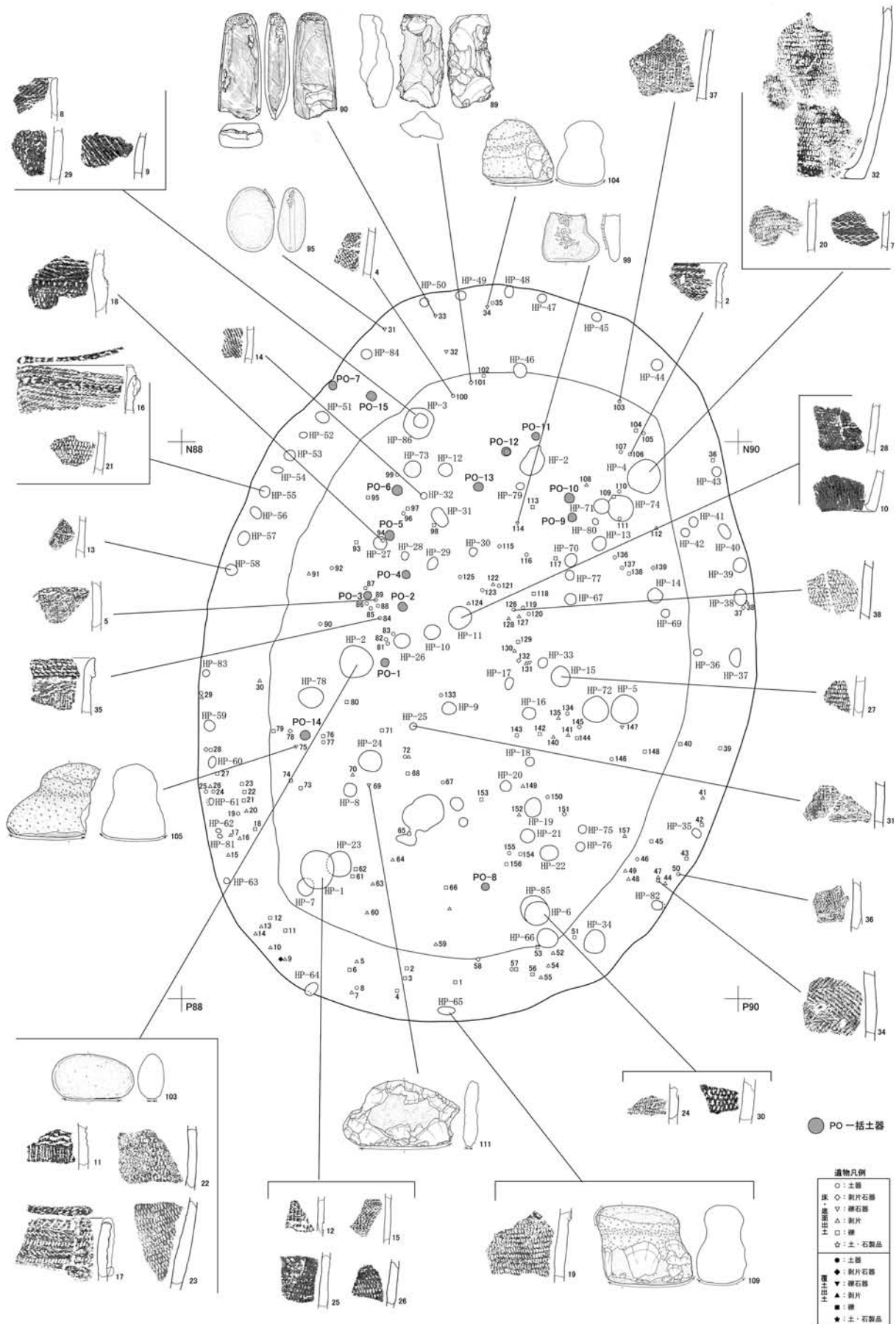
床面直上 (33～38)：34はⅡ群A類土器、36・37はⅡ群B-4類土器、33・35・38はⅡ群B-5類土器である。34は多条の羽状縄文が施された体部破片。36・37は単軸絡条体の回転文である。37は結束羽状縄文が加えられている。33は単軸絡条体第1A類の回転文が施された体部下半。35は口縁部破片。断面形は切り出し状に肥厚する。肥厚帯上には縄線文、肥厚帯直下には2条の綾絡文が施されている。体部は単軸絡条体の回転文である。38は多軸絡条体の回転文が施された体部破片である。

覆土5層 (39～43)：調査者によって「床面・覆土5層」・「床面直上・覆土5層」とされたものもあり、本遺構に伴った可能性がある。39～43はⅡ群B-5類土器である。39は平縁で、口頸部文様帯の上下端を縄の圧痕が加えられた貼付帯と口唇で区画され、無文地の文様帯には2本一組の縄線が6条施され、貼付帯下位にも縄線が加えられている。体部は単軸絡条体第4類の回転文である。40・41は小型土器。40は2個一組の波頂部をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯には口縁に沿って山形に縄線文が加えられ、体部は多軸絡条体の回転文である。41は平縁で、口頸部文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突が加えられた肩部分で区画され、無文地の文様帯内には縄線文が加えられている。体部は縦位の条痕文である。42は単軸絡条体の回転文が施された底部破片。43は体部下半部分で、多軸絡条体の回転文を施した後、縦位の綾絡文が加えられている。

覆土4層 (44)：44はⅡ群B-5類土器である。底部を欠失する。器形は平縁で、体部上半で大きくくびれ、強く外反する幅広の口頸部をもつ。口唇には縄の圧痕が加えられ、無文地の口頸部文様帯には3本一組の縄線と斜位の短縄線が交互に施文されている。体部は多軸絡条体の回転文である。

覆土3層 (45・46)：45はⅡ群B-3類土器である。体部下半で、体部には直前段反撚の原体による縄文が施されている。46はⅡ群B-5類土器である。底部からほぼ直立しながら立ち上がり、肥厚気味の口縁部付近で大きく外反する。波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の口頸部文様帯には複節の縄線文が加えられている。体部には無節の斜行縄文が施文されている。

覆土2層 (47～50)：49はⅡ群A類土器である。無文地に半截竹管状工具外面の刺突列が加えられている体部破片。47・48・50はⅡ群B-5類土器である。47・48は大型破片。波状口縁で、波頂部は2個一組の小突起からなる。口頸部文様帯は、幅広の口縁部とくびれをもつ複数の頸部からなる。47は無文地の口縁部は上下を刺突文で区画され、波頂部下位に瘤状の貼り付けが加えられ、2本一組の縄線が施されている。頸部下端は刺突を加えた貼付帯で区画され、2本一組の縄線が山形に施文され、波頂部下位に指頭の押圧文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。48の口唇には縄の圧痕が加えられる。口縁部は2本一組の縄線で上下を区画し、横位の短刻線が加えられている。口頸部にも2本一組の縄線と横位の短刻線が交互に加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。50は明確な時期がわからないため便宜的に本類に含めた。体部破片で、渦巻きの沈線文とそれに沿っ



図IV-38 H-16 その他遺物出土状況図

て半截竹管状工具内面の連続刺突文が加えられ、その上部に2本一組の縄線と刺突文が組み合わされて施されている。47・48は口頸部文様帯が幅広の口縁部文様帯と頸部文様帯の複数の文様帯からなる特徴的な文様構成である。あたかも床面・床面直上出土資料の3・16・35の進化形のように思える。

覆土1層 (51～70)：66はⅡ群A類土器である。口縁部破片。断面形は角形で、口唇には刻目文が加えられている。口縁部には縄端による幅の狭いループ文が帯状に施文されている。

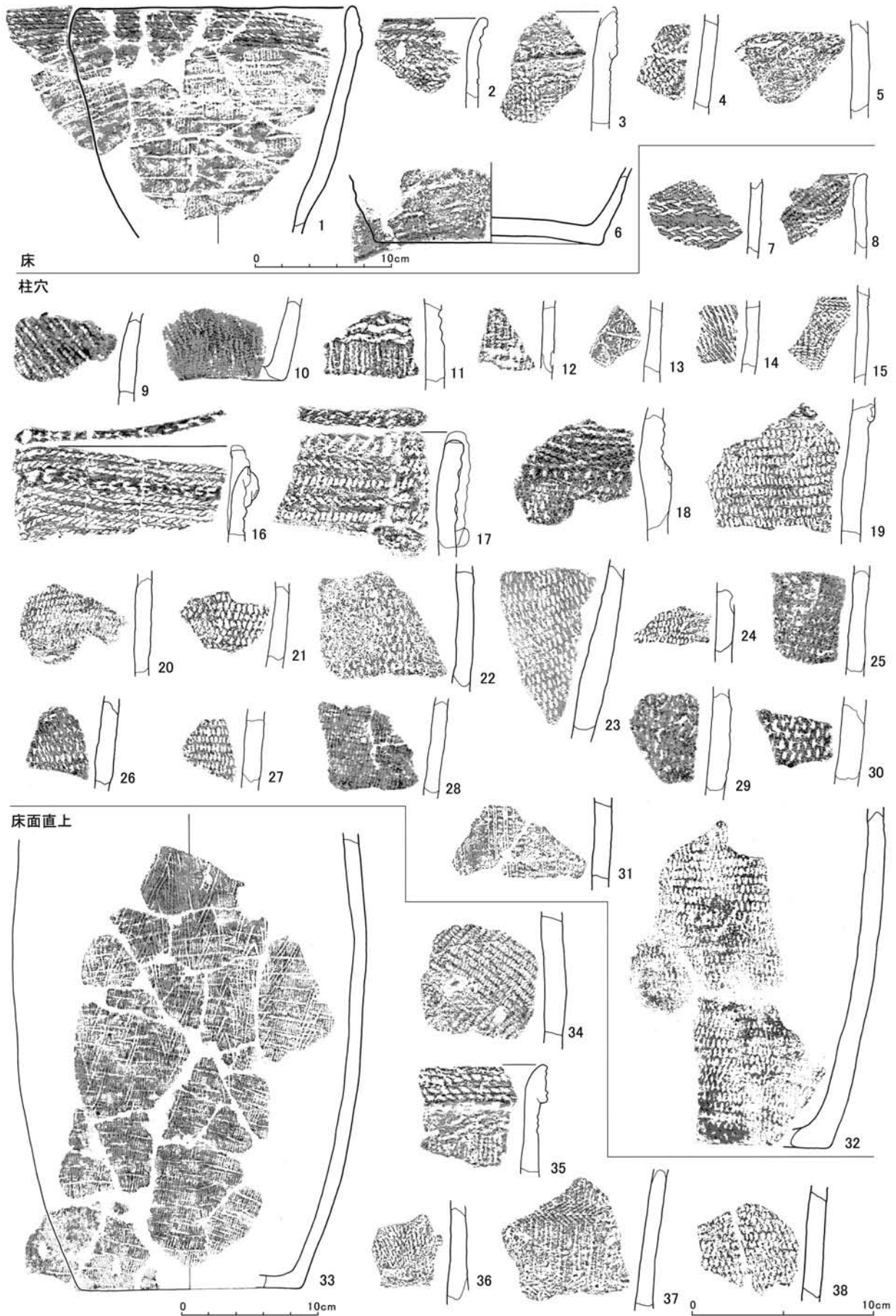
51～57・67～69はⅡ群B-5類土器である。51～56・67は幅広の口縁部を肥厚ないし肥厚気味に作り出し、頸部と共に複数の文様帯からなるもの。51は波状口縁。口唇に縄の圧痕が加えられ、口縁部及び肥厚帯直下に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体第4類の回転文である。52は口唇に刻目文が加えられている。口縁部には横位に、体部には縦位の条痕文が施され、肥厚帯直下にはナデ調整で無文帯が作出されている。53・54は厚帯直下に帯状のループ文が施されているもの。53の口縁部にはボタン状の貼付文と半截竹管状工具の刺突文が、54は単軸絡条体の圧痕文が施されている。体部はいずれも斜行縄文である。55は口縁部と頸部に縄線文が施されたもので、体部は斜行縄文である。56は口縁部の幅が狭く前者と異なるが、器面に自縄自巻の縄文を施した後、頸部にナデ調整で無文帯を作出している。口唇部には円形刺突文が加えられている。57は斜行縄文が施された体部下半資料。67は波頂部をもつ口縁部破片で、口唇に刺突文が加えられている。口縁部には横位に、肥厚帯直下には縦位に半截竹管状工具の刺突が施され、波頂部下位の頸部に円形の穿孔が加えられている。体部は斜行縄文である。68・69は底部破片。68は斜行縄文施文後、2本一組の縦位の綾絡文が施される。69は器面に多軸絡条体の回転文が施されたもの。

58～65・70はⅢ群A類土器である。58は片流れの小突起をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。無文地の幅の狭い口頸部文様帯には片流れの突起に沿って縄線文が加えられている。体部は斜行縄文である。59は体部下半を欠失する。波状口縁で、波頂部は2個一組の小突起からなる。口唇部には縄の圧痕が加えられている。幅広で、無文地の口頸部文様帯には2本一組の縄線文が施されている。体部は結束羽状縄文である。60は貼り付けによって作出された大小の2個一組の小突起からなる波状口縁で、口唇には撚糸の圧痕が加えている。口頸部文様帯下端は、薄い貼り付けが加えられ段を作出している。波頂部下位の文様帯には縄線文が加えられたドーナツ状の貼り付けと縦位の短縄線が施されている。無文地の文様帯には3本一組の縄線文と縦位の短縄線が組み合わされて施文される。文様帯直下にはループ状の縄文が認められ、体部には斜行縄文が施されている。61は波状口縁で、波頂部から体部下半まで垂下する貼り付けが施され、器面には斜行縄文が施される。62は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられる。器面には斜行縄文が施され、部分的に綾絡文が加えられている。63は底部を欠失する。大きな波頂部をもつ波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられる。縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画された文様帯には、3本一組の撚糸圧痕文と馬蹄形圧痕文が加えられている。体部は結束羽状縄文である。64・65は小突起をもつ口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。縄の圧痕文を加えた貼付帯で区画された文様帯には、3本一組の撚糸圧痕文と半截竹管状工具内面の刺突が加えられている。体部は斜行縄文である。65は波頂部下位の口頸部に橋状の貼付帯が加えられている。70は大きな波頂部をもつ口縁部破片。口唇に縄の圧痕が加えられている。波頂部は2個一組の突起からなり。波頂部下位には縄の圧痕を加えた2本一組の貼り付けが縦位に加えられている。文様帯には3本一組の撚糸圧痕文が施される。

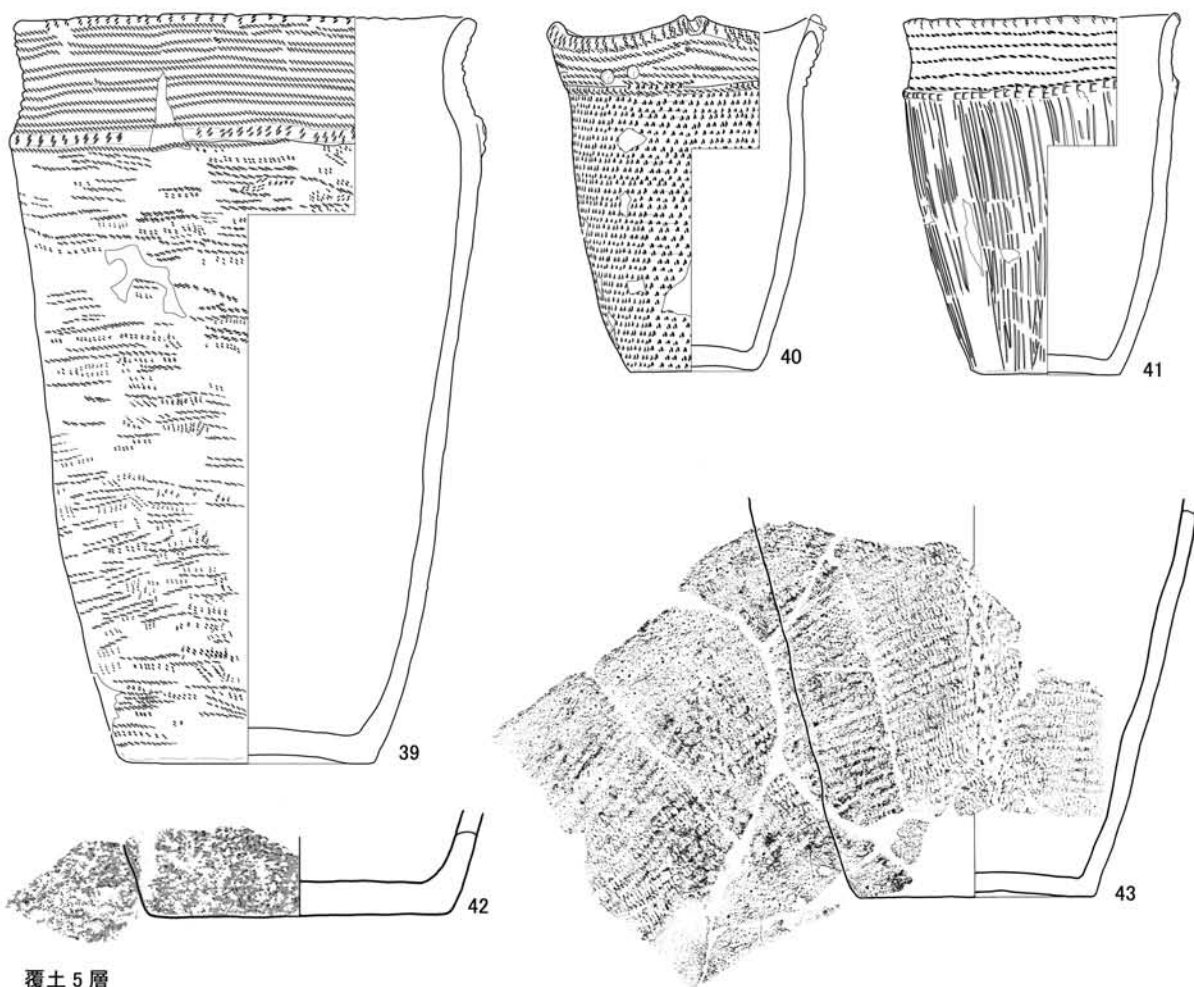
(小括) 覆土2層出土のⅡ群B-5類土器の口頸部文様帯は、「幅広の口縁部文様帯(肥厚帯)とくびれをもつ頸部文様帯からなる複合的な文様帯」である。覆土1層出土資料は幅広の口縁部文様帯をもつものの、頸部文様帯や口縁部肥厚帯下位に縄線文(51)・ナデ調整による無文帯(52、56)、ルー

ブ文(53, 54)などが施文・作出される傾向が認められる。それらは、あたかも覆土1層出土資料は、覆土2層出土資料の特徴である「複合的な文様帯」の省略形のような様相が窺える。この傾向はⅢ群A類土器にも認められ、60の文様帯下位のループ文、63・65のナデ調整・無文帯などに関連が想定できる。このことから本遺構の床面出土の資料から覆土1層までの出土状況は円筒土器下層d₁式の段階から円筒土器上層B式までの変遷を示すものかもしれない。

(石器) 89・90・95・99・104・105・111は床面、71～73・75・80・81・93・107・112・114・116・118～120・122は覆土1層、88・91は覆土2層、79・84・117は覆土3層、74・76～78・82・83・85～87・82・94・96～98・100～102・106・108・110・113・115・121は覆土5層出土。103はHP-2覆土、109はHP-65覆土出土。71～75は石鏃。71は無茎凹基、72は有茎凸基、73～75は尖基で菱形、76は円基で木葉形。71は黒曜石製で産地分析の結果、赤井川産と報告されている(分析結果報告については大平遺跡(3)に掲載する)。72～75は頁岩製。77～79は石錐。77は棒状に加工したものの端部に機能部のあるもの。下端部には幅7mmほどの使用によるすり痕・光沢がみられる。78・79は石鏃・石槍の形状をしたものの先端部に機能部のあるもの。いずれも頁岩製。80～82はつまみ付ナイフ。80は縦型で両面調整のもの。80は黒曜石製で産地分析の結果、所山産と報告されている(分析結果報告については大平遺跡(3)に掲載する)。81・82は縦型で片面調整のもの。いずれも頁岩製。83～87はスクレイパー。83・84はへら状石器。縦長剥片の下端部と側縁に刃部があるもの。使用痕とみられる光沢が確認できる。85～87は縦長剥片の側縁に刃部のあるもの。いずれも頁岩製。85・86は使用痕とみられる光沢が確認できる。88は両面調整石器。扁平礫の周縁を打ち欠いているもの。頁岩製。89はRフレイク。剥片の周囲の一部を二次加工している。頁岩製。90・91は石斧。短冊形で両刃の円刃。全面を研磨で調整している。基部に敲打痕がある。いずれも緑色泥岩製。92・93は石のみ。両端部に片刃の刃部を作出している。全面を研磨で調整している。いずれも片岩製。94～98はたたき石。94・95は扁平礫の周縁の一部に敲打痕のあるもの。94は凝灰岩製、95は緑色泥岩製。96は扁平な円礫の周縁全周に敲打痕のあるもの。一部すり痕のようになっているところもあることから、すり石の可能性もある。チャート製。97は乳棒状礫の両端部が広い敲打面になっているもの。砂岩製。98は扁平な楕円礫の両端部に敲打痕のあるもの。被熱している。砂岩製。99～101は凹み石。99・100は扁平礫の平坦面に浅い凹みのあるもの。101は垂円礫の平坦面に断面円錐状の凹みのあるもの。凝灰岩製。102～113はすり石。102は扁平礫の周縁に敲打によって幅の狭いすり面を作出したもの。砂岩製。103は扁平な楕円礫の側縁に敲打によって幅の狭いすり面を作出したもの。安山岩製。104～109は北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。104～106のすり面は平坦である。107～109のすり面は長軸・短軸ともに外彎し、短軸方向にやや傾いている。すべて安山岩製。110～113は扁平打製石器。110・111は板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出したもの。いずれも安山岩製。112は板状に剥離した礫片の周囲を打ち欠いて短冊状に整形し、側縁に幅の非常に狭い機能部を作出したもの。片岩製。113は扁平な楕円礫の側縁を打ち欠いて、幅の非常に狭い機能部を作出したもの。長軸両端部を打ち欠いている。両平坦面には敲打痕がみられる。砂岩製。114は台石。扁平な楕円礫の平坦面に敲打痕のあるもの。安山岩製。115・116は礫器。115は扁平な楕円礫の側縁を打ち欠いてV字状の刃部があるもの。頁岩製。116は礫を打ち欠いた石核状のものの一部に刃部があるもの。泥岩製。117～122は石製品。117は異形石器。両面調整で下半部が大きいX字状のもの。頁岩製。118・119は軽石製石製品。118は扁平な半円状に整形され、弦の部分にすり面のような平坦面があるもの。119は北海道式石冠のような握部とすり面のような平坦面がある作出されているもの。120は玦状耳飾りの破片。破損後に穿孔しようとした痕跡がみ



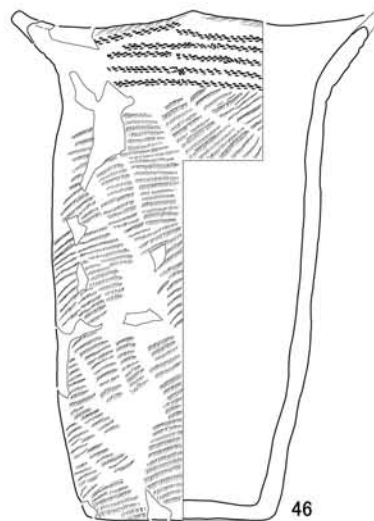
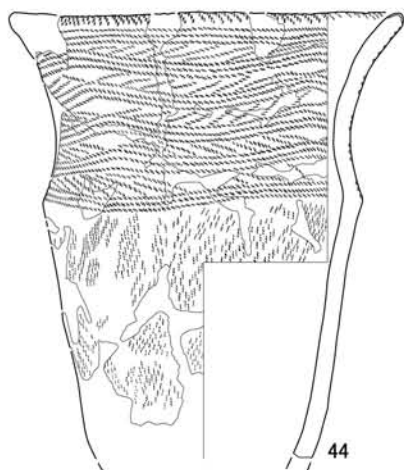
图IV-39 H-16 土器 (1) 床、柱穴、床直上



覆土 5 層

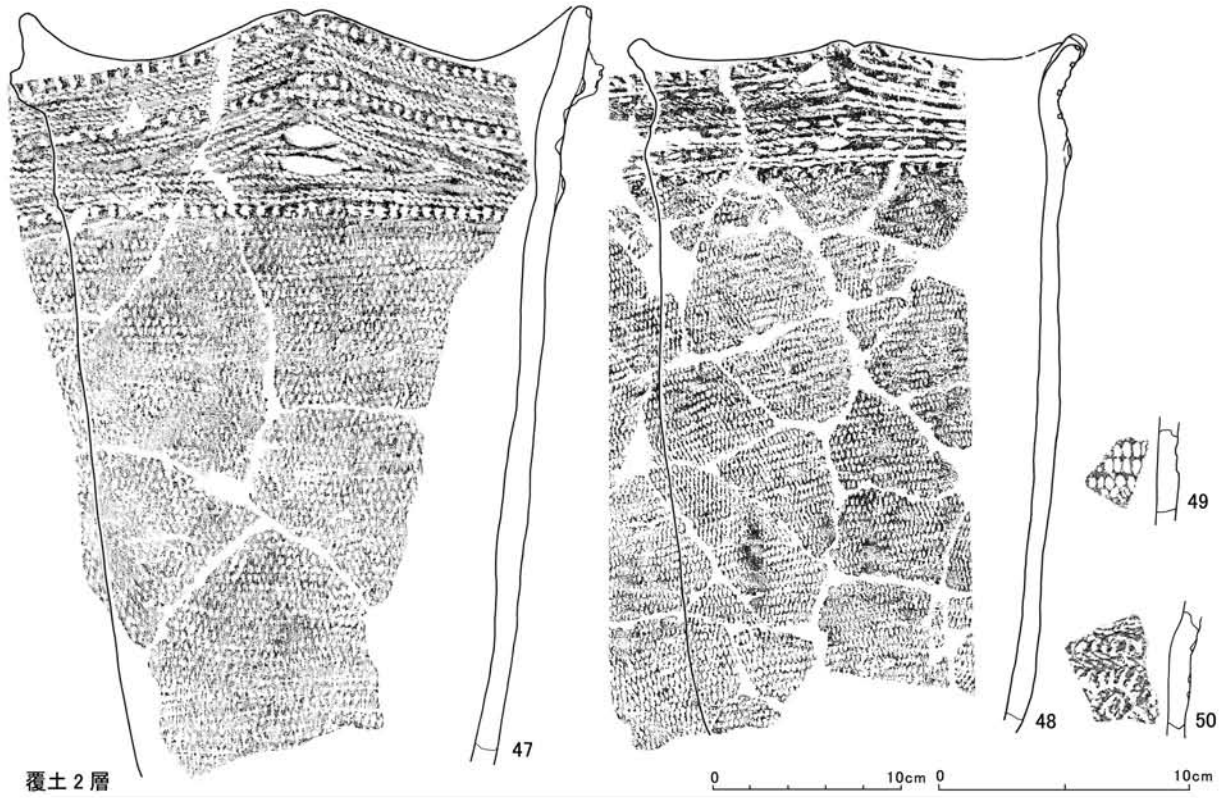
覆土 4 層

覆土 3 層



0 10cm

図IV-40 H-16 土器 (2) 覆土 3~5 層



覆土 1 層



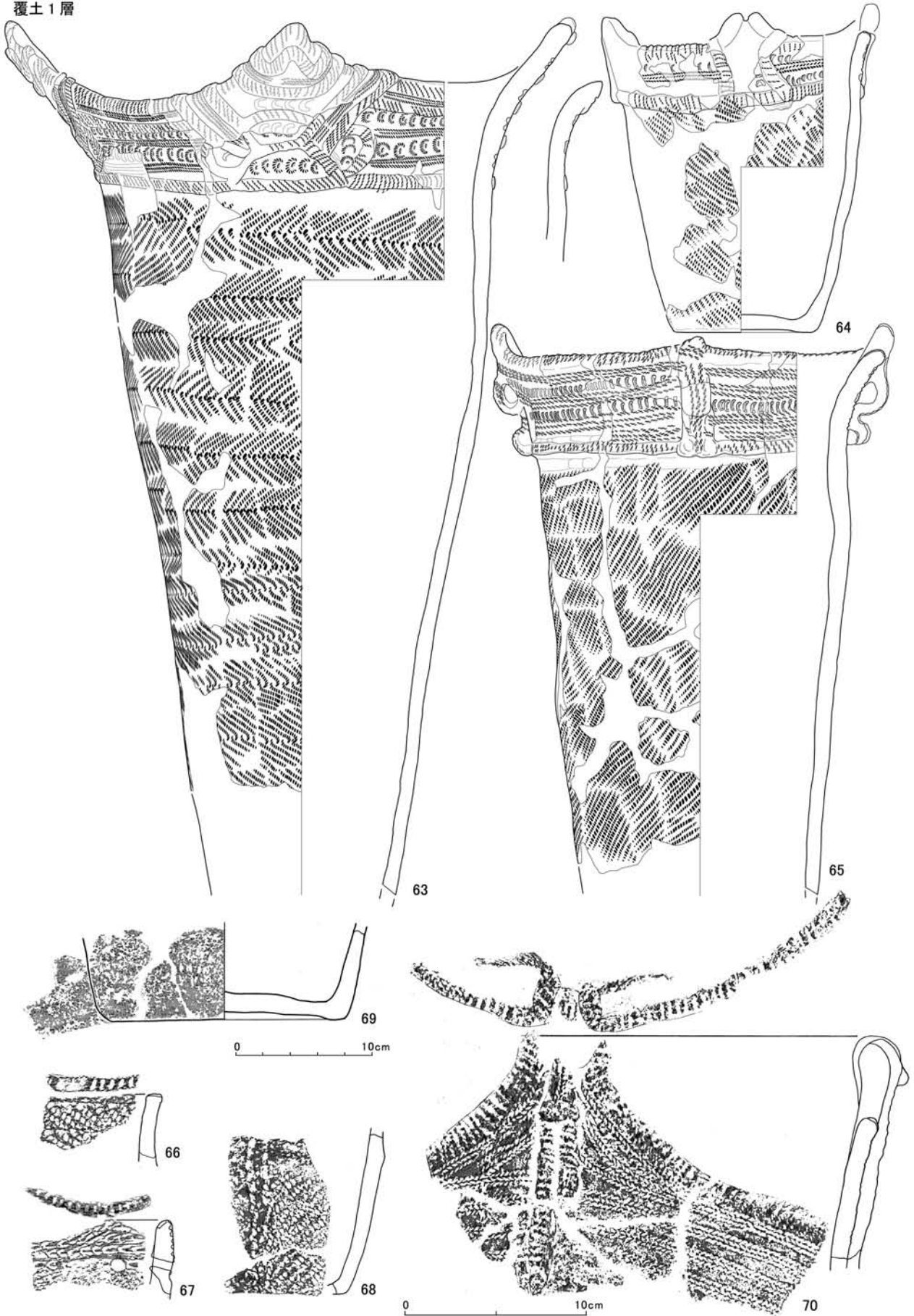
图IV-41 H-16 土器 (3) 覆土 1~2 層

覆土1層

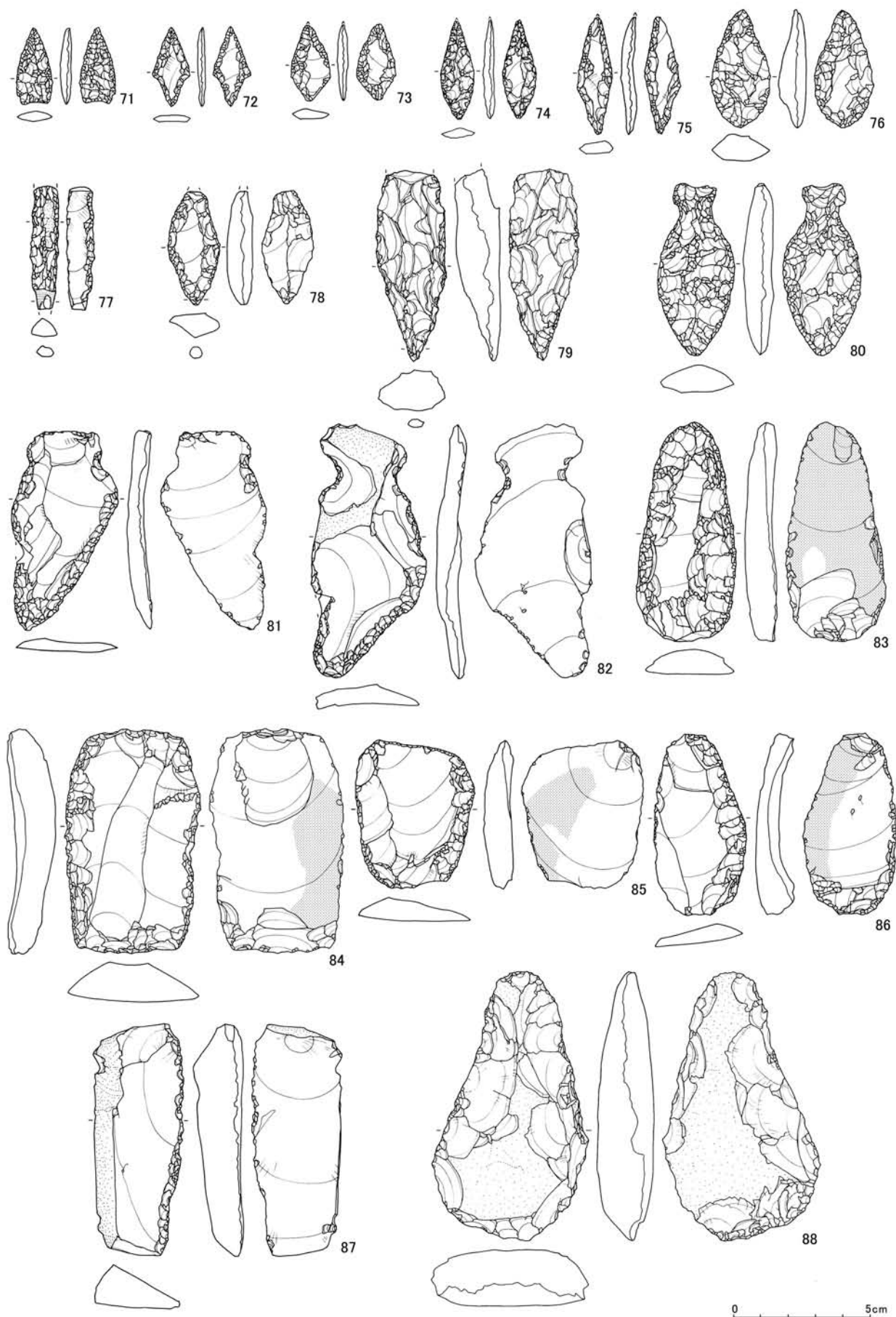


图IV-42 H-16 土器 (4) 覆土1層

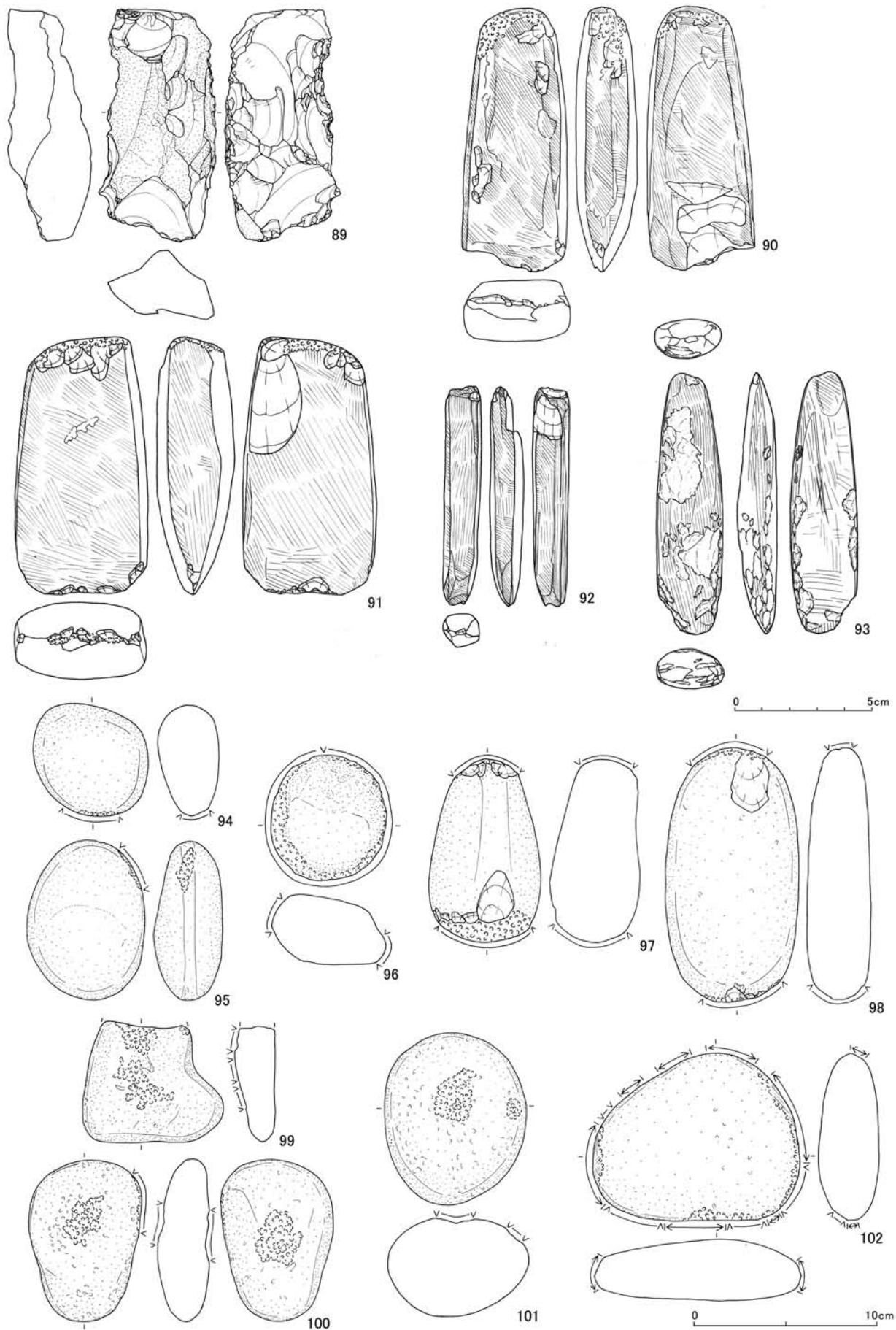
覆土1層



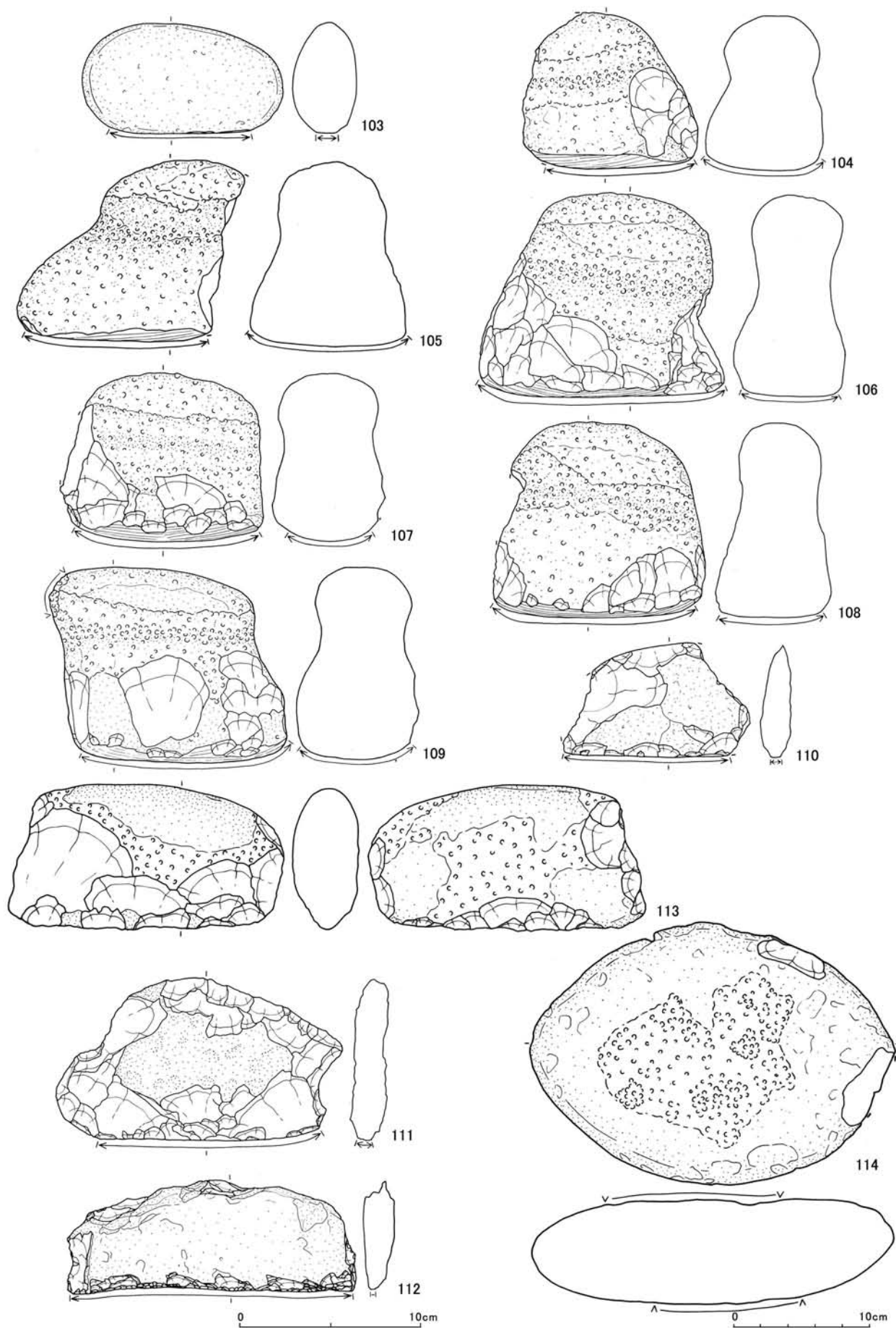
图IV-43 H-16 土器 (5) 覆土1層



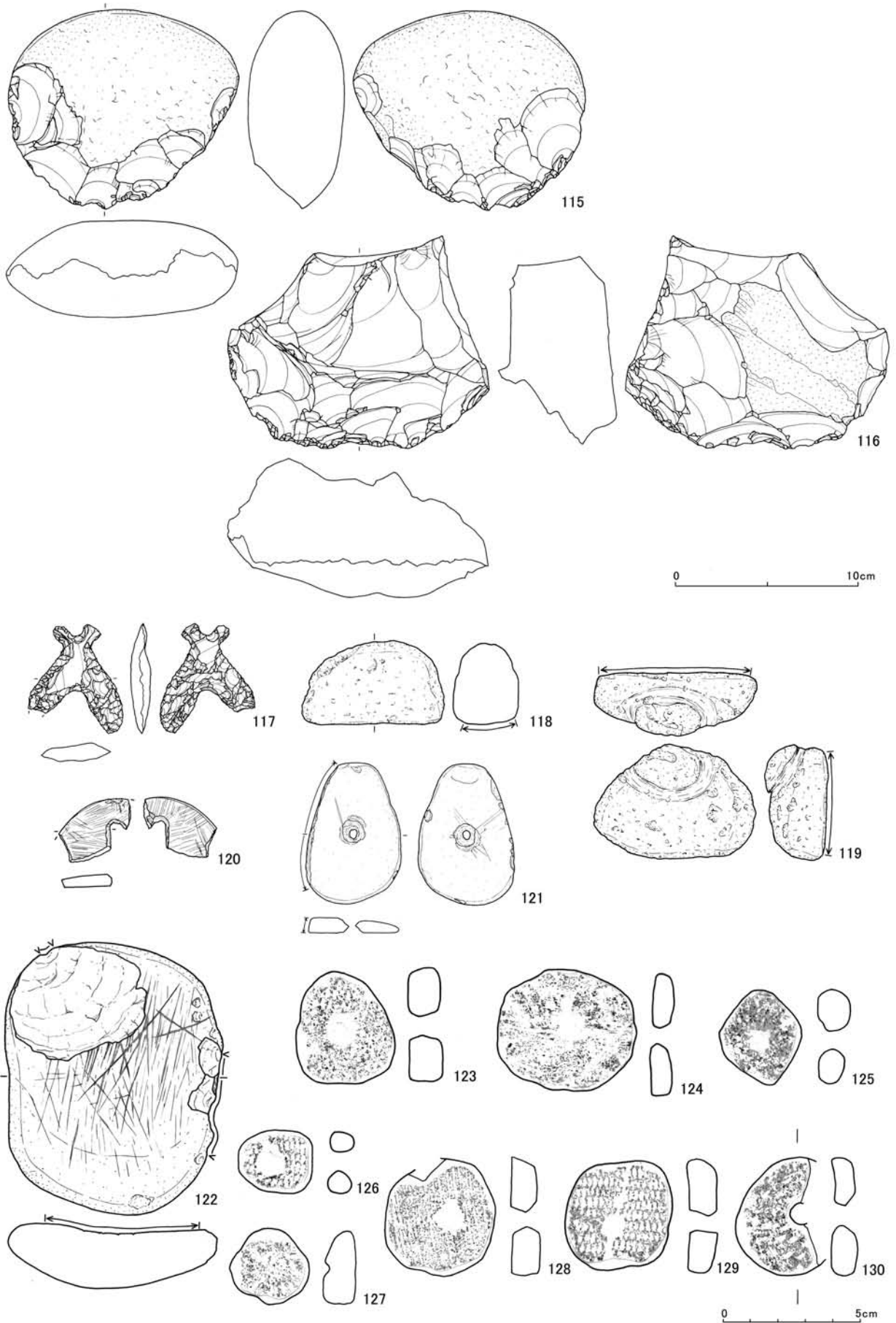
图IV-44 H-16石器(1)



图IV-45 H-16 石器 (2)



图IV-46 H-16 石器 (3)



图IV-47 H-16 石器 (4) · 土製品

られる。滑石製。岩石学的分析を行い、松前産であることが報告されている（分析結果報告については大平遺跡（3）に掲載する）121は有孔石製品。薄く扁平な楕円礫の平坦面中央に両面から穿孔されている。左側縁を研磨によって整形している。泥岩製。122は線刻礫。扁平礫の側縁に敲打痕があり、平坦面に細い線刻が多くされている。線刻に模様や法則性はみられない。凝灰岩製。123～130はⅡ群B類土器の土器片を素材とする有孔土製円板で、127は未成品ある。

H-17（図IV-48～59、図版9・10・61～64）

位置：L・M・N90・91・92区

規模：11.52 / 10.32×6.88 / 5.04×1.58m

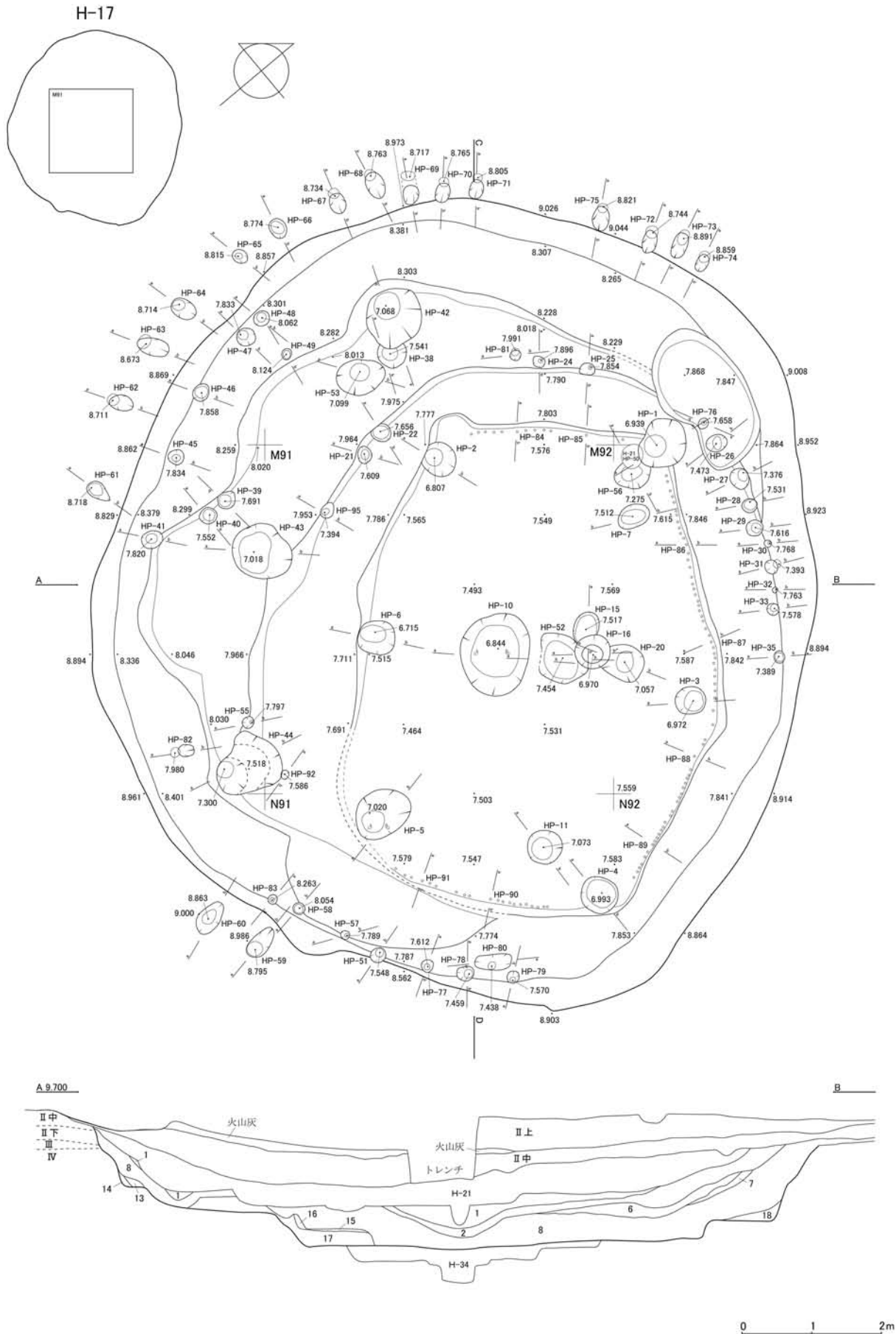
確認・調査：表土除去を行った際に、黒色土の落ち込みとして確認された。清掃したところH-18と切り合っていることが判明したため、先にH-18の調査を行った。その後、遺跡の東西メイントレンチの北西壁面を東西の土層観察用断面とし、これに直交するベルトを設定した。覆土を掘り下げたところ、しまりのある平坦な床面とベンチ構造、急角度に立ち上がる壁面を検出した。周辺の精査では外柱穴が検出された。ベンチは西側が3段になっていることを確認した。床面には中央に土坑（HP-10）を検出した。床面西側はH-34を埋め戻して貼床とし、ベンチ構造を復元した痕跡がみられる。床面のベンチ壁際には土留杭穴が巡る。床面やベンチには柱穴・小柱穴が多数検出された。断面観察や柱穴の検討により、この場で数度の建て替えが行われたと考えられる。おおよそ、H-17①（HP-11・20・43・44・53・56）→H-34→H-17②（HP-1～6）→H-17③（HP-1・3・4・42・43・44）の順番で建て替えられ、最後にH-17の埋没途中のくぼみを利用してH-21が作られている。H-17①とH-34は長軸方向が重なるので、同一遺構の可能性もある。

覆土：覆土は18層に分けた。1～9層は流れ込み、10～14・18層は壁面崩落土、15～17層は貼り床である。17層はH-34を埋め戻した後にベンチ構造を作るために盛られたもの。

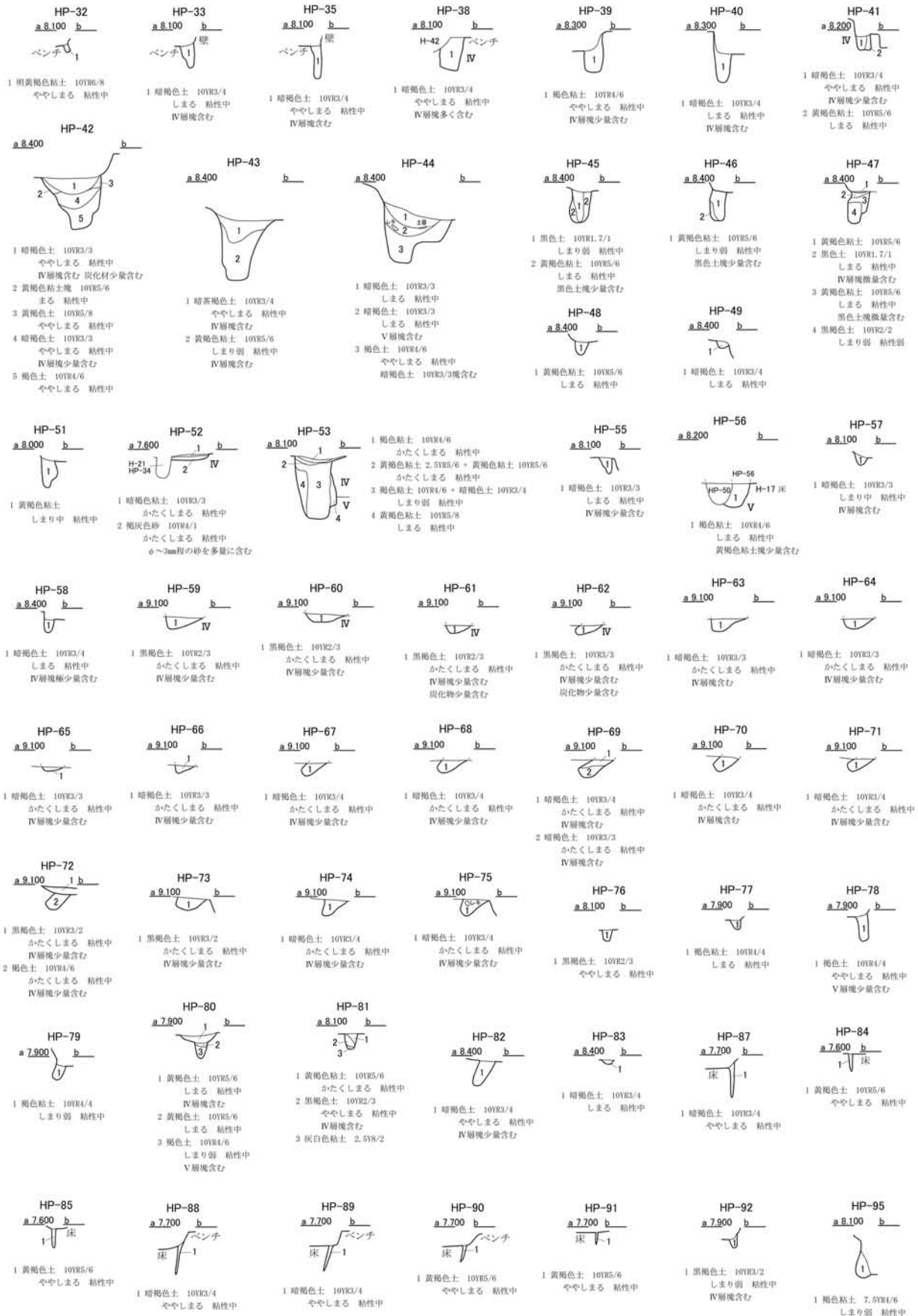
平面形：平面形は不整形で、床面は六角形状をしている。床面の長軸方向はN-48°-Wである。床面は平坦でベンチ構造があり、壁面は急角度に立ち上がる。床面には柱穴と土留杭穴、ベンチには柱穴と壁柱穴があり、基本的には6本柱と考えられる。床面中央には土坑がある。土坑1基、柱穴・小柱穴73基、土留杭穴97基を検出した。炉跡は確認できなかった。

付属遺構：HP-10は床面中央にある土坑。平面形は径1.2mの不整形で、深さは0.7mほどである。坑底面から多くの遺物が出土している。HP-1～6・11・16・20・42～44・53・56は深さ0.5～0.9mで支柱穴と考えられるもの。組み合わせは（HP-11・20・43・44・53・56）（HP-1～6）（HP-1・3・4・42・43・44）が考えられ、6本柱となると思われる。HP-21・22・24～33・35・39～41・45～48・51・55・57・58・76～79・81・83・92・95は径0.2～0.3mの壁柱穴。ほぼ垂直なものが多い。HP-59～75は外柱穴。住居中央に向かって30～37°の角度で傾いている。この角度で計算すると、床面から最も高い交点まで約5mあったことになる。HP-84～91は土留杭穴。径0.1mほどで先端が尖っている。0.1～0.2m間隔で床面壁際を北西～南側を巡る。南西側はH-34覆土の影響で確認できなかった。

遺物出土状況：床面やHPからたたき石や北海道式石冠、床面北西側とベンチ2段目に大型の石皿（90・91）が出土した。HP-5覆土から有孔土製円板や剥片、礫など11点がまとまって出土した。HP-10坑底から石錐、スクレイパー、両面調整石器、たたき石、すり石、剥片、礫など34点がまとまって出土した。床面・貼床からⅡ群B-5類土器など57点、石器等212点、HPから土器181点、石器等241点、覆土からⅡ群B類土器など3,325点、石器等3,790点が出土した。石製品は軽石製石製品1点、有孔石1点、その他2点である。

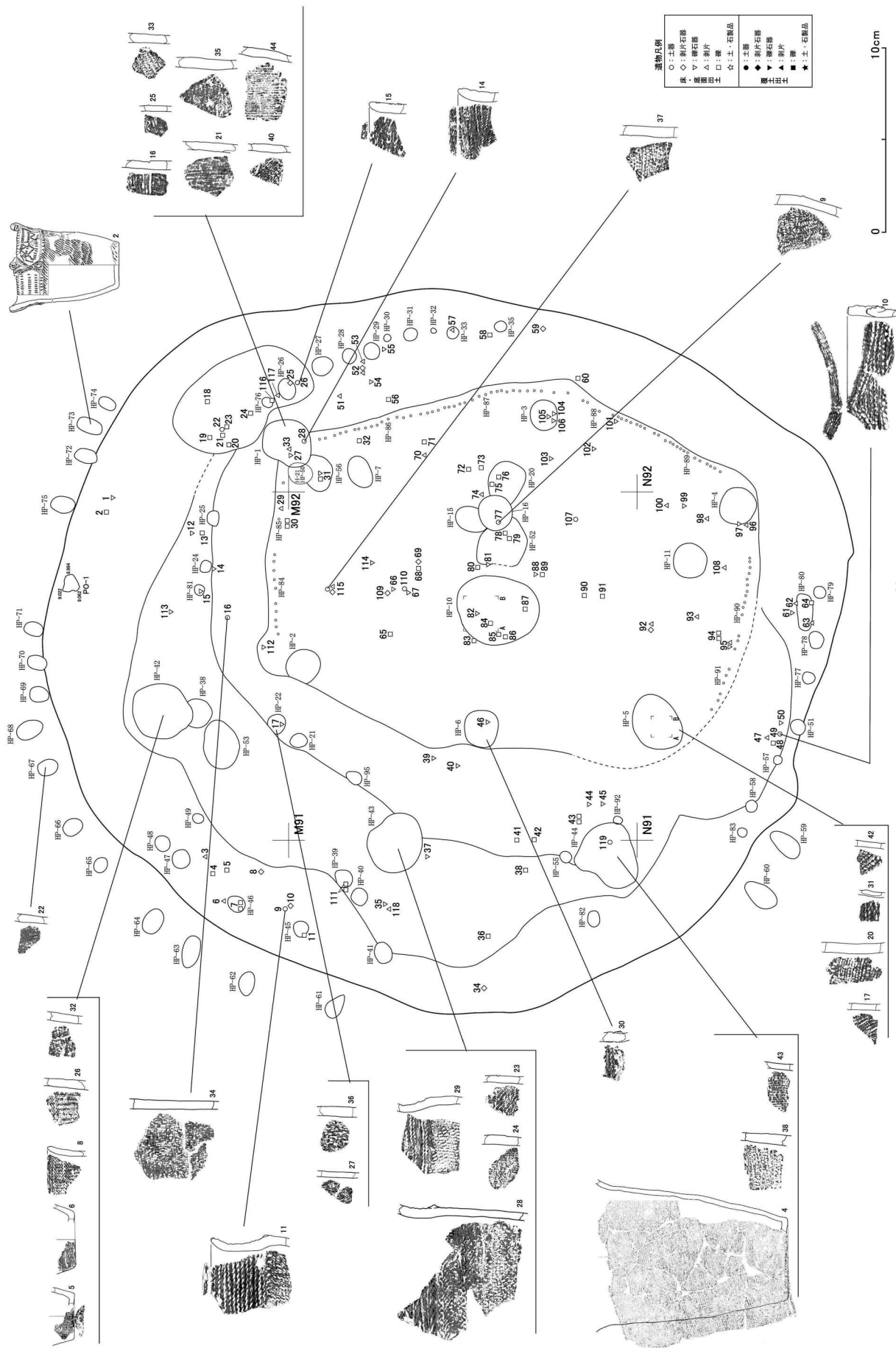


図IV-48 H-17



0 1 2m

図IV-50 H-17 セクション図 (2)



図IV-51 H-17 土器出土状況図

時期：床面出土遺物からみて縄文時代前期後半と考えられる。

(酒井)

掲載遺物：(土器) 4・9～11・14・15・34・37は床面出土、13・39は貼床出土、5・6・8・16・17・20～33・35・36・38・40～44は土坑・柱穴状ピット(HP)出土、1～3・7・12・18・19・45は覆土出土である。分類ごとに説明を加える。

Ⅱ群A類土器(9)：9は体部破片で、縄端のループ状の縄文が施されている。

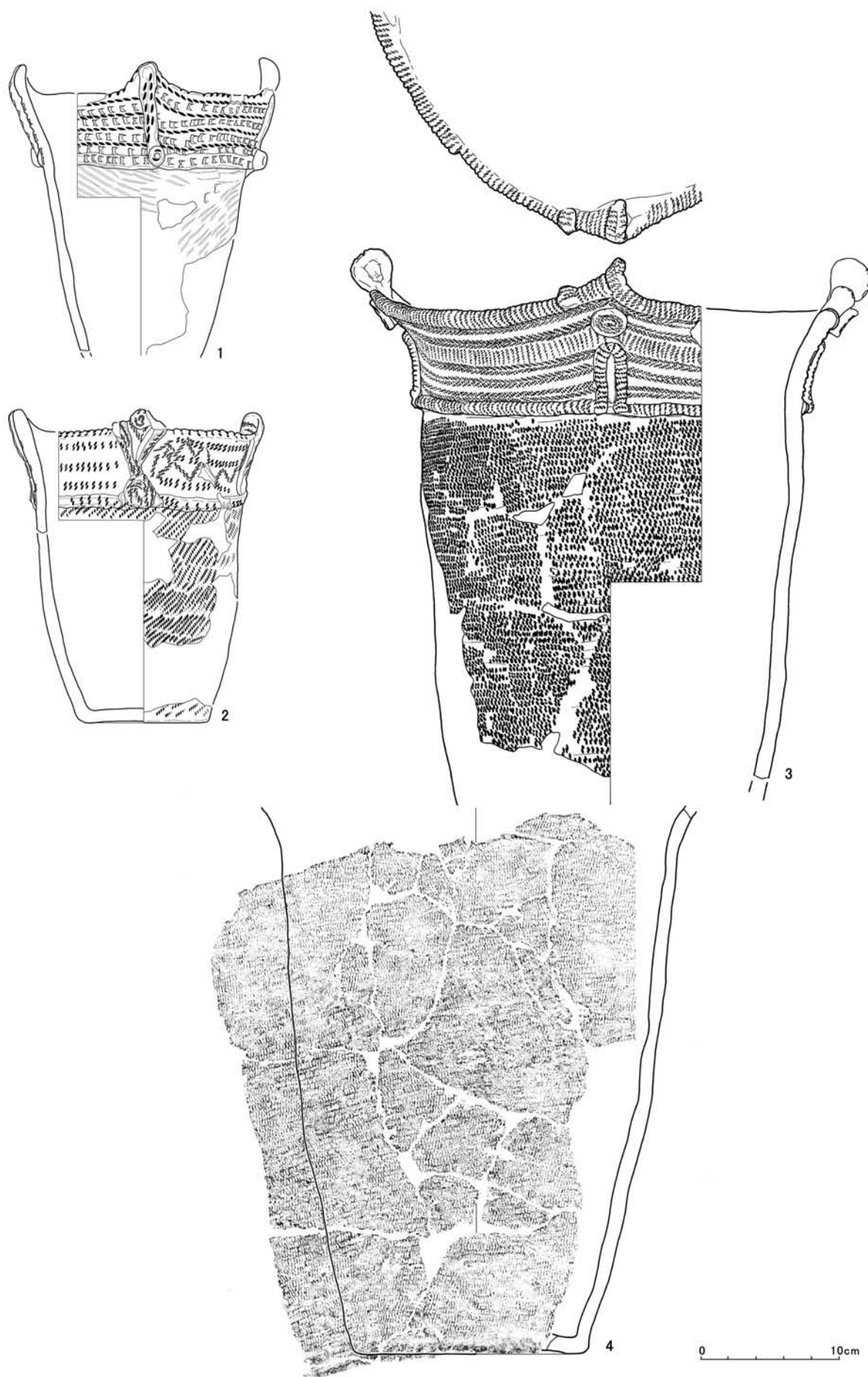
Ⅱ群B-3類土器(16～20・23・40・42)：16は口頸部文様帯下端を沈線で区画し、文様帯には横位に、体部は縦位の直前段反撚による縄文が施されている。17～20・42は複節の斜行縄文が施された体部破片。23は口頸部文様帯下端を縄線で区画し、体部には自縄自巻の縄文が施されている。40は無節と単節の結束羽状縄文が施されたものである。

Ⅱ群B-4類土器(5・8・11～14・21・22・24～27)：5は単軸絡条体の回転文が施された底部破片。8の口縁部は結束羽状縄文、体部は単軸絡条体の回転文である。11～14は口縁部破片。口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の口頸部文様帯には縄線文が加えられている。11・12の肩部分に縄の圧痕文が加えられている。21・22・24～27は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。24～26は2本一組の単軸絡条体の回転文が施されたもので、24・26には結束羽状縄文が加えられている。22・27は自縄自巻の縄文が施されているもの。

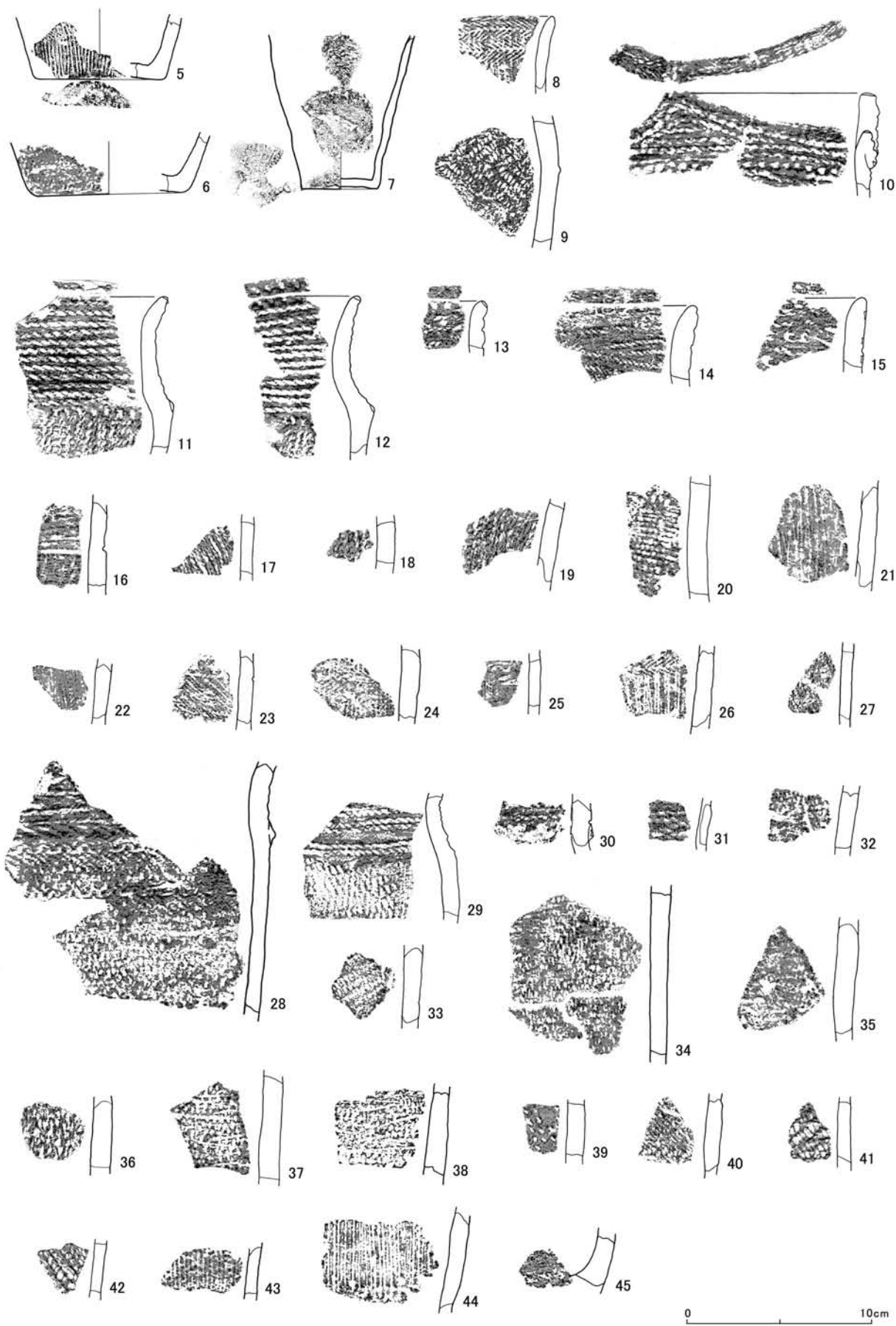
Ⅱ群B-5類土器(1・2・4・6・10・15・28～39・43～45)：1は小型土器。波状口縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突が加えられた貼付帯で区画、波頂部から垂下する縄線文が加えられた貼付帯と重ねて貼付され、その交点にボタン状の貼り付けが加えられている。無文地の文様帯には縄線と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施文されている。体部は無節の斜行縄文である。2は貼り付けによる小突起が加えられた口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は縄線文を加えた貼付帯で区画され、波頂部下位には縄線文を加えた「X」字状の貼り付けが施され、交点にはボタン状の貼り付けが加えられている。無文地の文様帯には縄の圧痕文と鋸歯状の縄線文が施されている。体部は斜行縄文である。4・6は多軸絡条体の回転文が施されたもので、4は体部破片、6は底部破片。10は肥厚する口縁部文様帯と頸部文様帯をもつ口縁部破片。波状口縁で、口唇には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。口縁部肥厚帯下端には棒状工具による刺突が、文様帯には2本一組の縄線文が波頂部に沿って山形に加えられている。頸部文様帯には縄線文が施される。15は無文地の口頸部文様帯に縄線文と刺突文が交互に施文されている。28・29は頸部破片。28の口頸部文様帯下端は縄の圧痕を加えた貼付帯で区画、無文地の文様帯には縄線文、肩部分の貼付帯直下には結節羽状縄文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。29の無文地の口頸部には2本一組の縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。30は刺突文が加えられた頸部破片。31は無文地に縄線文が加えられた頸部破片。32～39は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。43・44は条痕が施された体部破片。45は無文の底部。

Ⅲ群A類土器(3・7・41)：3は体部下半を欠失する。4か所の片流れの波頂部をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕を加えている。口頸部文様帯下端は縄の圧痕を加えた貼付帯で区画されている。波頂部下位の文様帯にはボタン状と「逆U字」状の貼付帯が加えられ、無文地の文様帯には2本一組の組紐状の縄線文と縦位の縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。7・41は斜行縄文が施されたもの。7は体部下半部、41は体部破片。

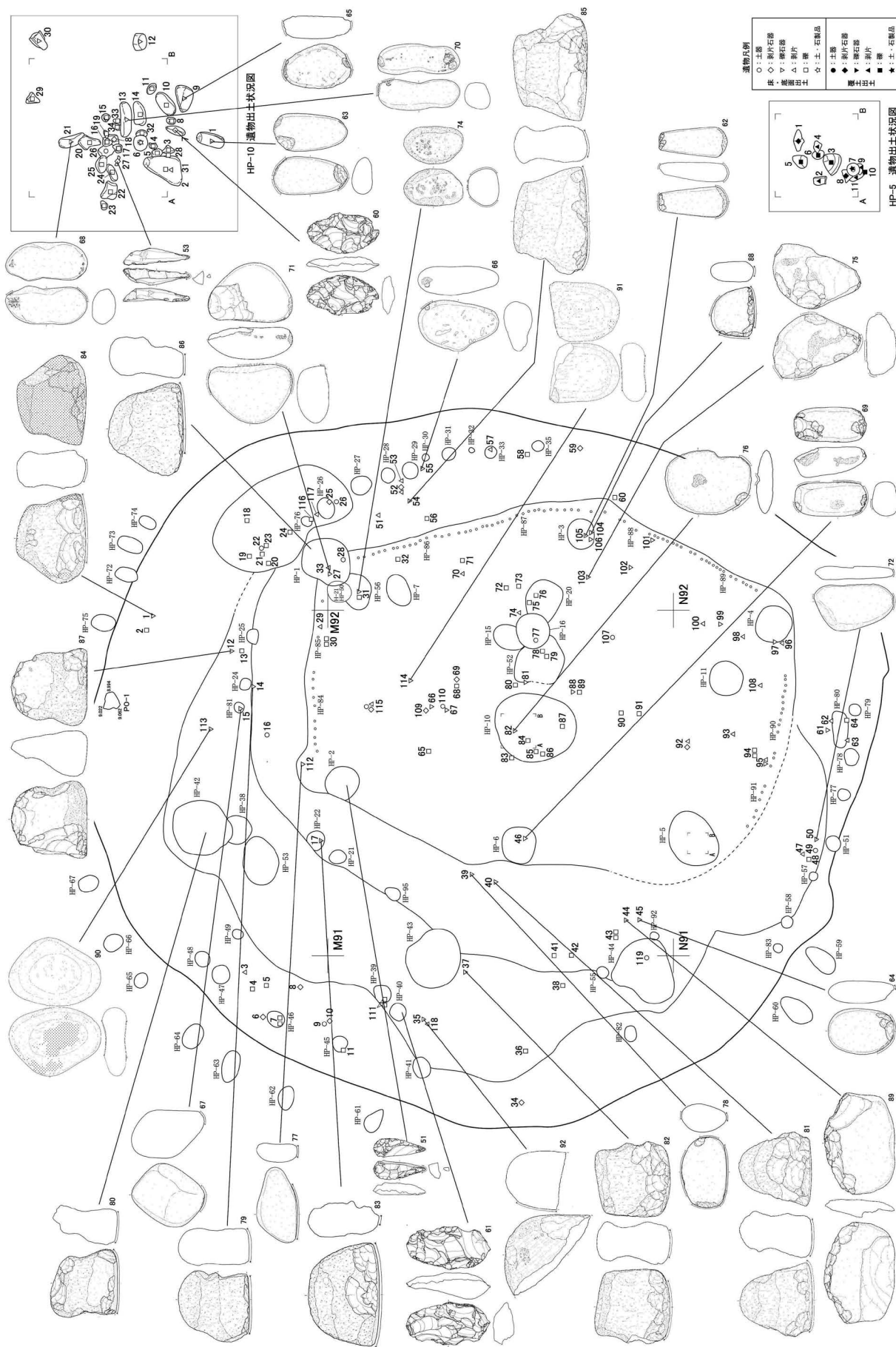
(石器等) 62・64・66・67・69・71～79・81～85・87～92は床面、55は貼床、46～50・52・54・56～59・61・92～94は覆土出土。53・60・63・65・68・70・86はHP-10、80はHP-42出土。46は石鏃。尖基のもの。頁岩製。47・48は石槍。47は有茎凸基。48は尖基で木葉形。いずれも頁岩製。49



图IV-52 H-17 土器 (1)



图IV-53 H-17 土器 (2)



図IV-54 H-17 石器出土状況図

～53は石錐。49は三叉状の形状で3か所の機能部があるもの。50はつまみ部があり、剥片の一部を両面加工して機能部を作出したもの。51・52は石槍形の尖頭部に機能部を作出したもの。53は棒状剥片の尖頭部に機能部を作出したもの。すべて頁岩製。54はつまみ付ナイフ。縦型で片面加工のもの。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。55～58はスクレイパー。55は縦型剥片の下端部と側縁に刃部を作出しているもの。56～58は縦型剥片の側縁に刃部を作出しているもの。57～59は使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。60・61は両面調整石器。60は紡錘形、61は楕円形である。いずれも頁岩製。62～76はたたき石。62は乳棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。下端部には外彎する広い敲打面が作出されている。砂岩製。63～66は扁平な楕円礫の端部に敲打痕のあるもの。63・64は砂岩製、65・66は珪岩製。67は垂角礫の頂部に敲打痕のあるもの。砂岩製。68は扁平な棒状礫の側縁の一部と上面部に敲打痕のあるもの。緑色泥岩製。69・70は棒状礫の端部と側縁の一部に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。71は扁平礫の端部と側縁に敲打痕のあるもの。砂岩製。72は扁平礫の端部と平坦面に敲打痕のあるもの。砂岩製。73は扁平な楕円礫の周縁と平坦面に敲打痕のあるもの。被熱している。74は垂角礫の周縁に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。75は扁平な垂角礫の平坦面と側縁の一部に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。76は凹み石。扁平な楕円礫のほぼ中央に断面円錐形の凹みのあるもの。安山岩製。77～88はすり石。77・78は扁平礫の側縁を敲打で整形し、幅の狭いすり面を作出しているもの。79は長軸両端部と側縁に敲打痕がある。いずれも安山岩製。79～87は北海道式石冠。全面を敲打で整形し、握部を作出している。79・80のすり面は平坦である。81～85のすり面は長軸・短軸ともに外彎し、短軸方向にやや傾いている。82・85は握部上面が平坦に整形されている。84は被熱しており、炭化物の付着がみられる。86・87は未成品。86はすり面の使用がされていない。87は整形途中のもの。82・84は砂岩製、87は凝灰岩製、その他は安山岩製。88は扁平打製石器の破損品を再利用したもの。破損面を利用してすり面としている。安山岩製。89は扁平打製石器の未成品。扁平礫を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分を打ち欠いた際に破損したと思われる。安山岩製。90～92は石皿。90は扁平礫の平坦面に緩やかに凹むすり面のあるもの。黒色の付着物が確認できる。91は扁平礫の平坦面に平坦なすり面のあるもの。92は破片。すべて安山岩製。93～95は石製品。93は軽石製石製品。北海道式石冠状の形状をしている。すり面は平坦で使用された形跡がある。94は線刻礫。棒状礫に細い線刻がみられる。上部側縁に横方向の短い線刻がある。泥岩製。95は扁平礫の周縁を打ち欠いて整形し、周縁を敲打したもの。たたき石や四辺に弱い凹みがみられるので石錘の可能性もある。頁岩製。96～101はⅡ群B類土器の土器片を素材した有孔土製円板。

H-20 (図Ⅳ-64～66、図版13・66・67)

位置：N・O10・11区

規模：3.65 / (1.62) × 3.61 / (1.53) × 0.32m

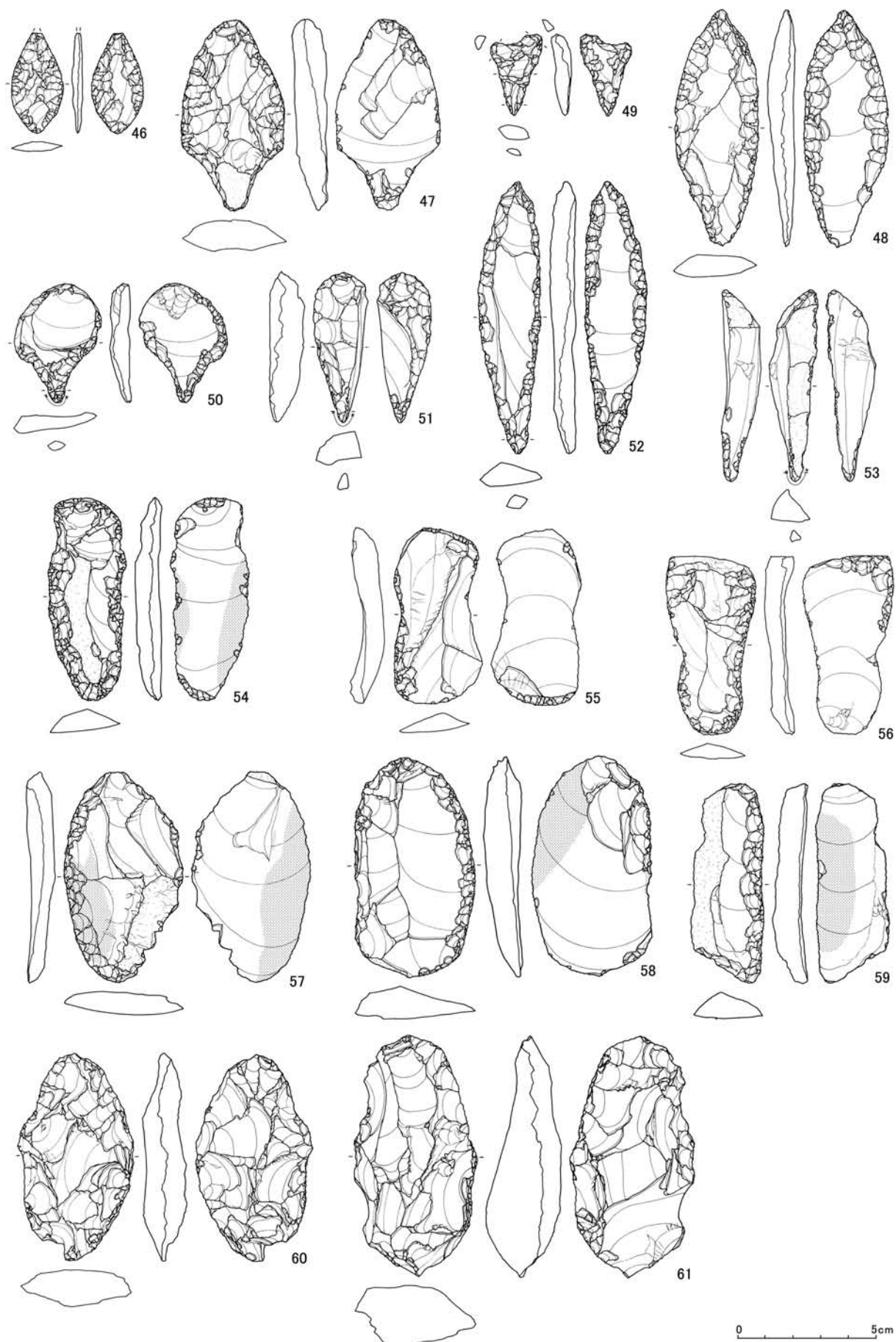
確認・調査：I層を除去した段階で、黒褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：覆土2・4・5層は自然堆積層で、覆土1・3層は周辺の住居跡の掘り上げ土である。

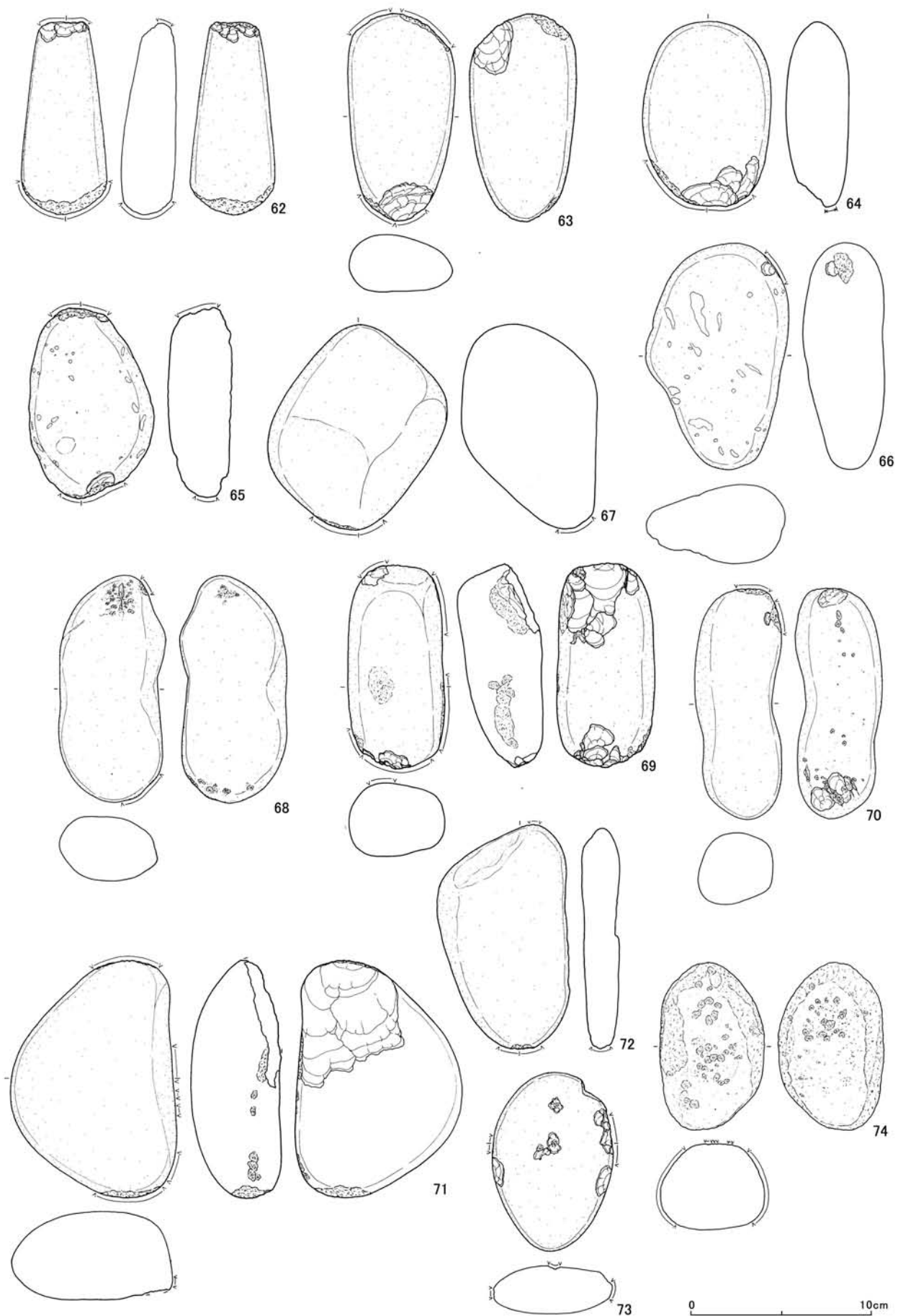
平面形：平面形は遺構の約三分の二が調査区外にあるため不明である。床はやや凹凸があり、西側に向かい低くなる。壁は急角度で立ち上がる。東側の壁の一部はH-22構築時に壊されている。

付属遺構：柱穴とみられる小ピットが検出された (HP-1)。

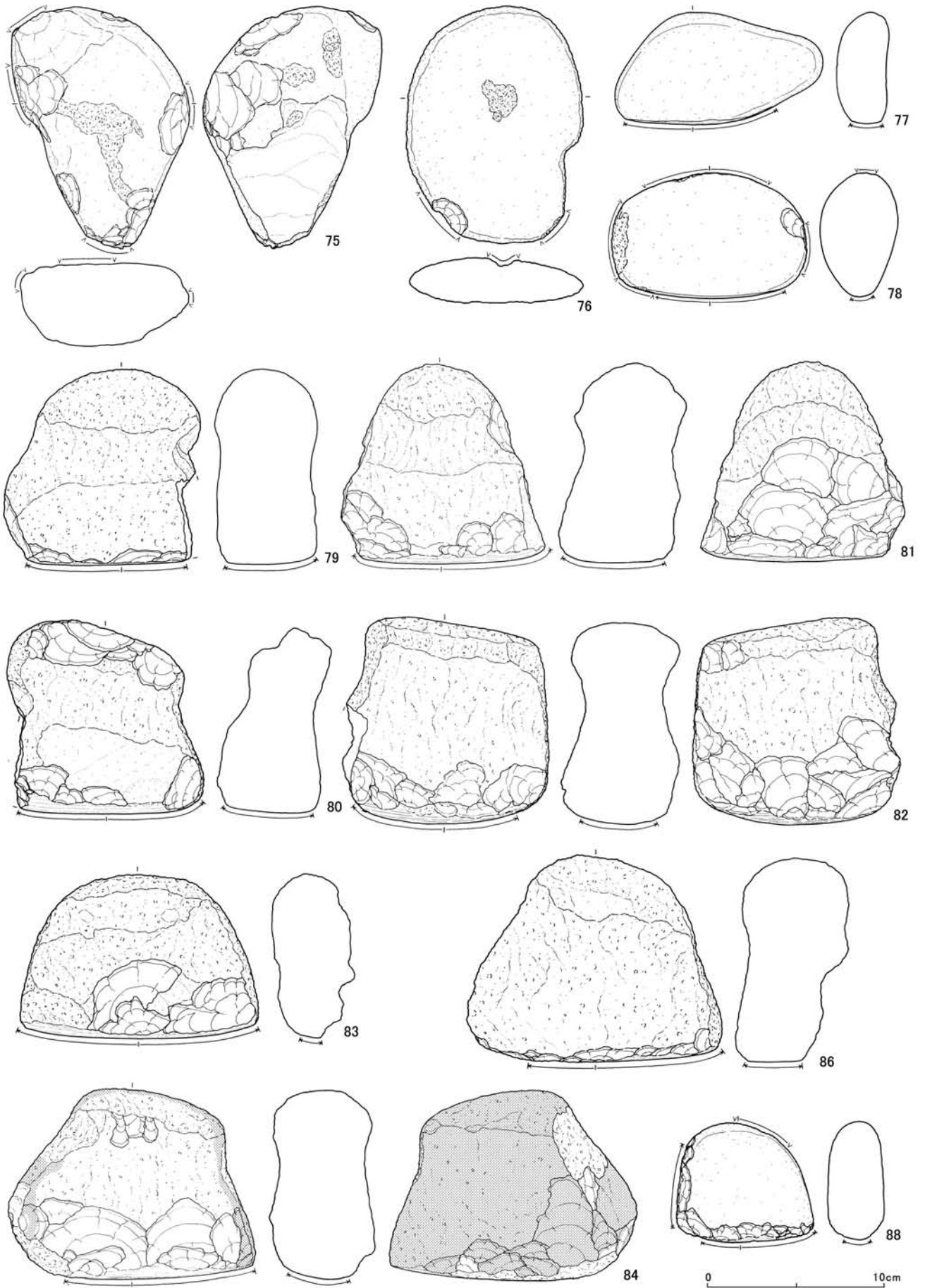
遺物出土状況：床面から石器等7点、覆土からⅡ群B類土器2,791点、石器等806点が出土した。床面から扁平打製石器が出土している。覆土下位からⅡ群B-2・3類土器片が出土している。石製品は軽石製石製品3点、線刻礫5点、有孔石1点、その他2点である。



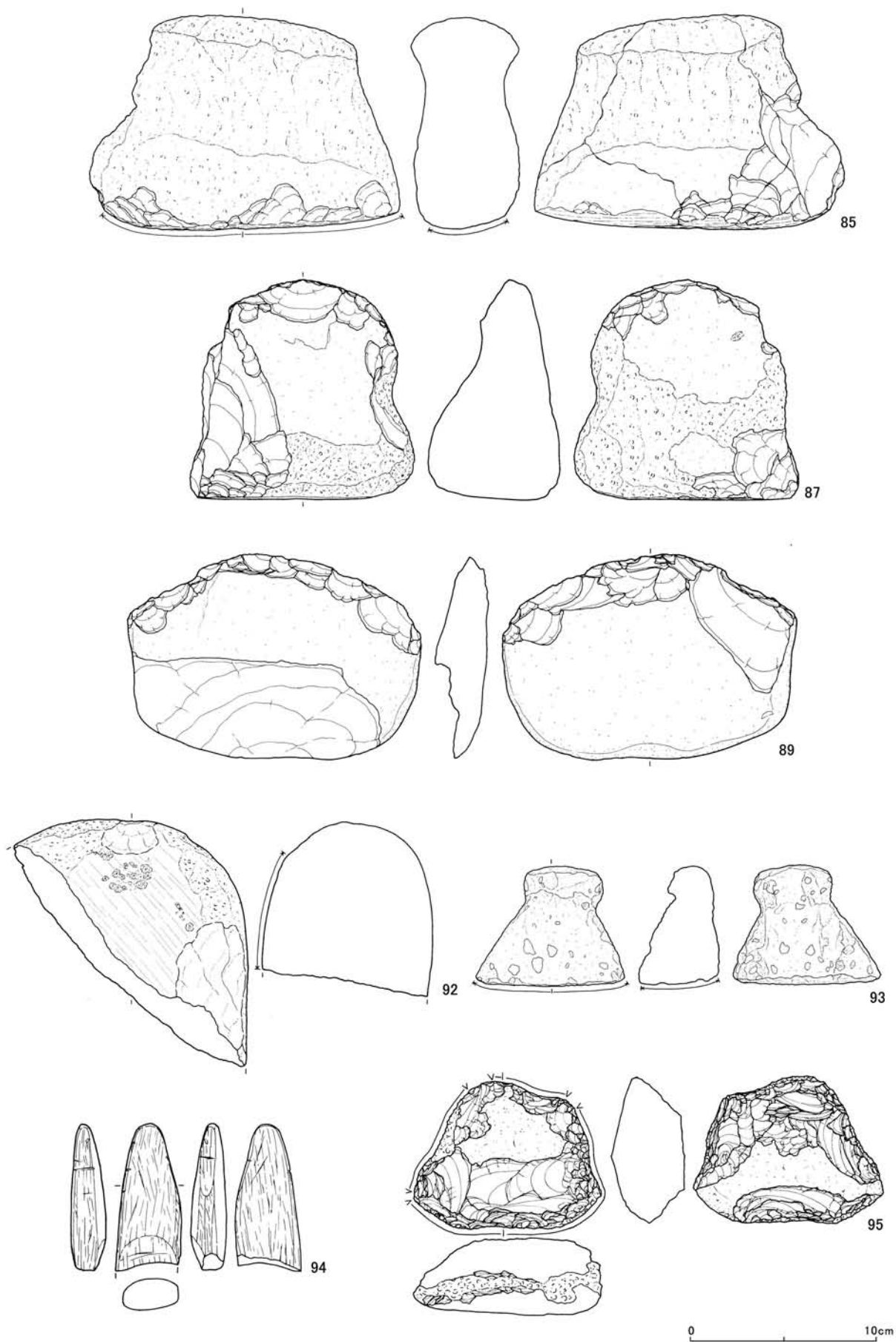
图IV-55 H-17石器(1)



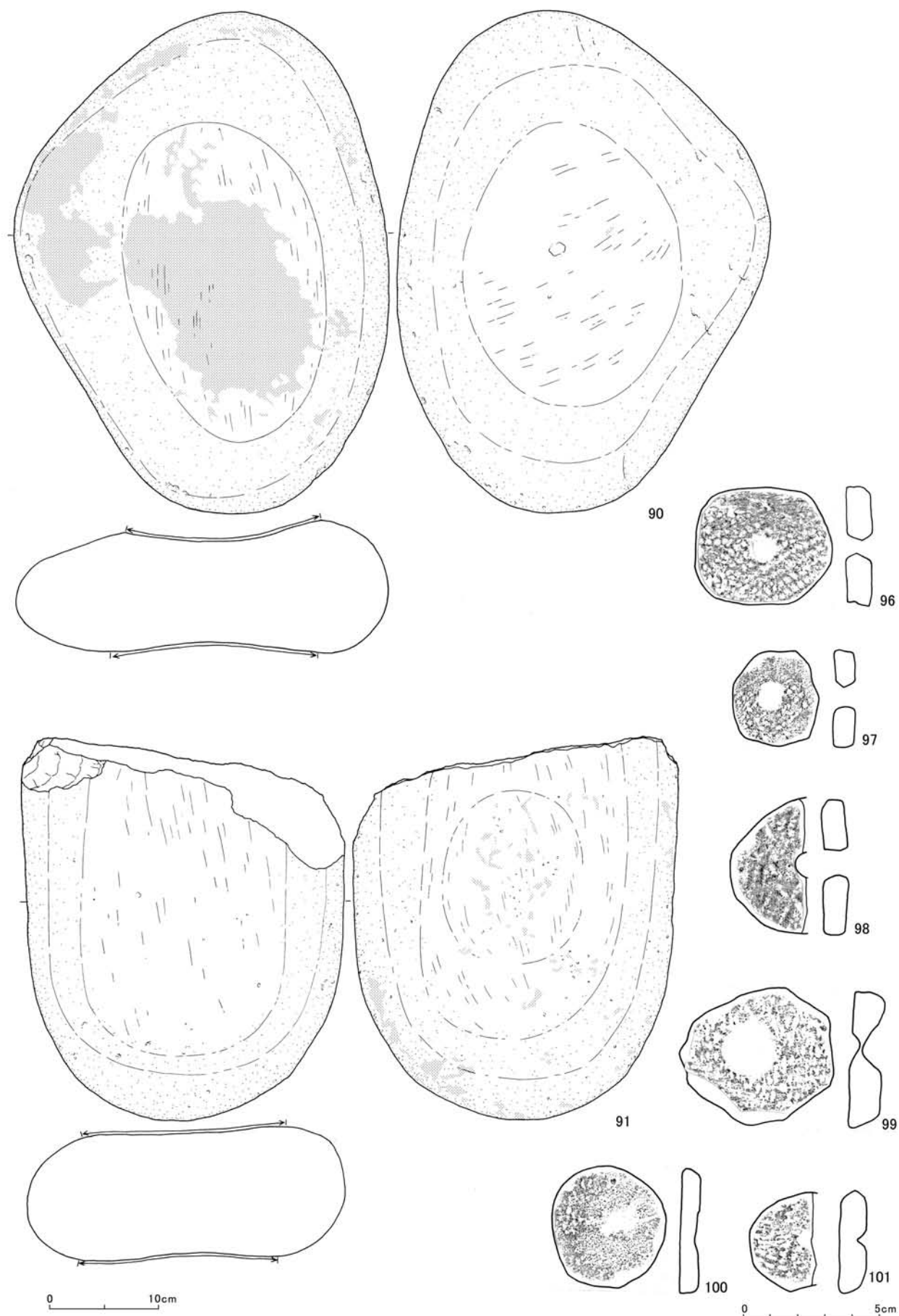
图IV-56 H-17 石器 (2)



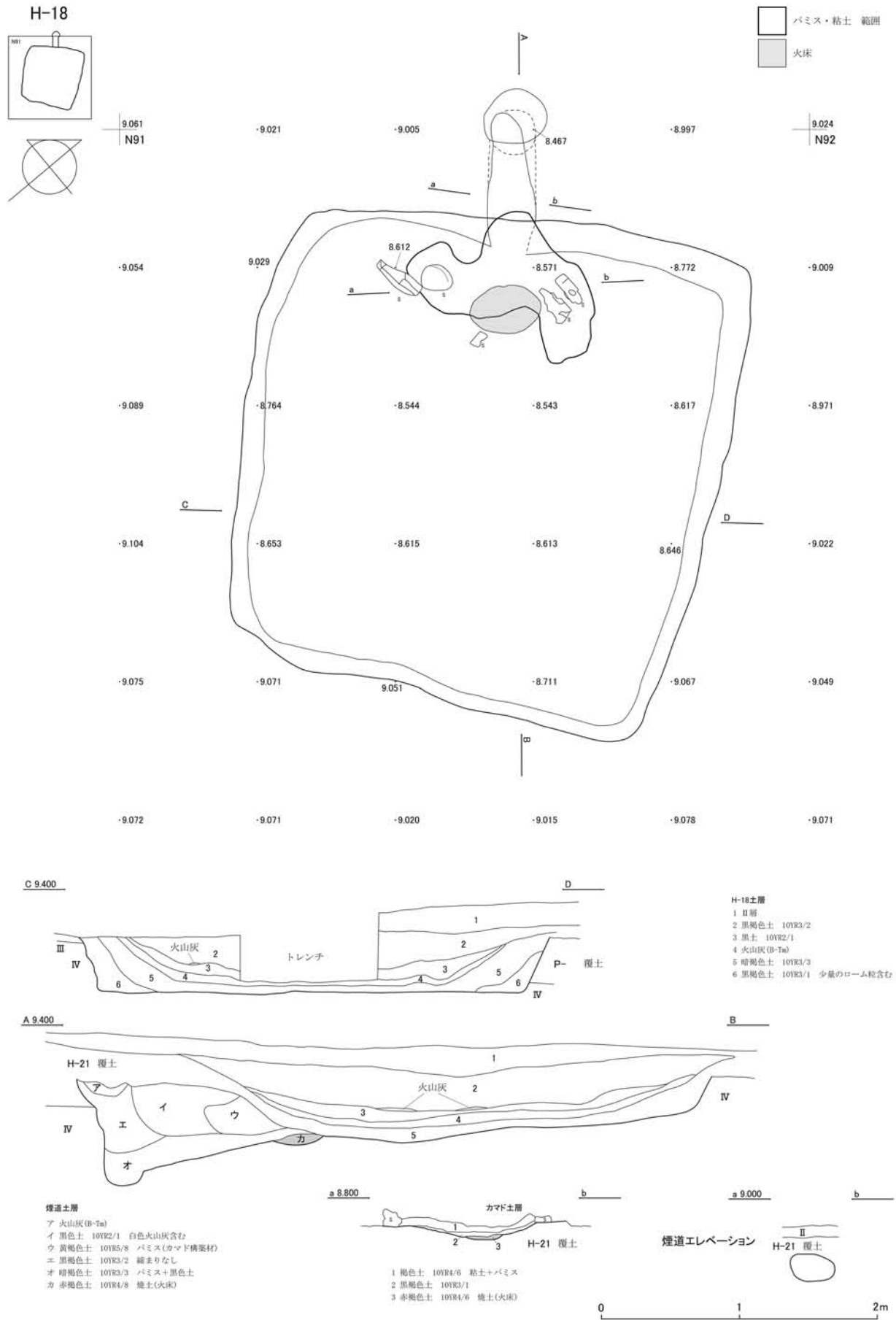
图IV-57 H-17 石器 (3)



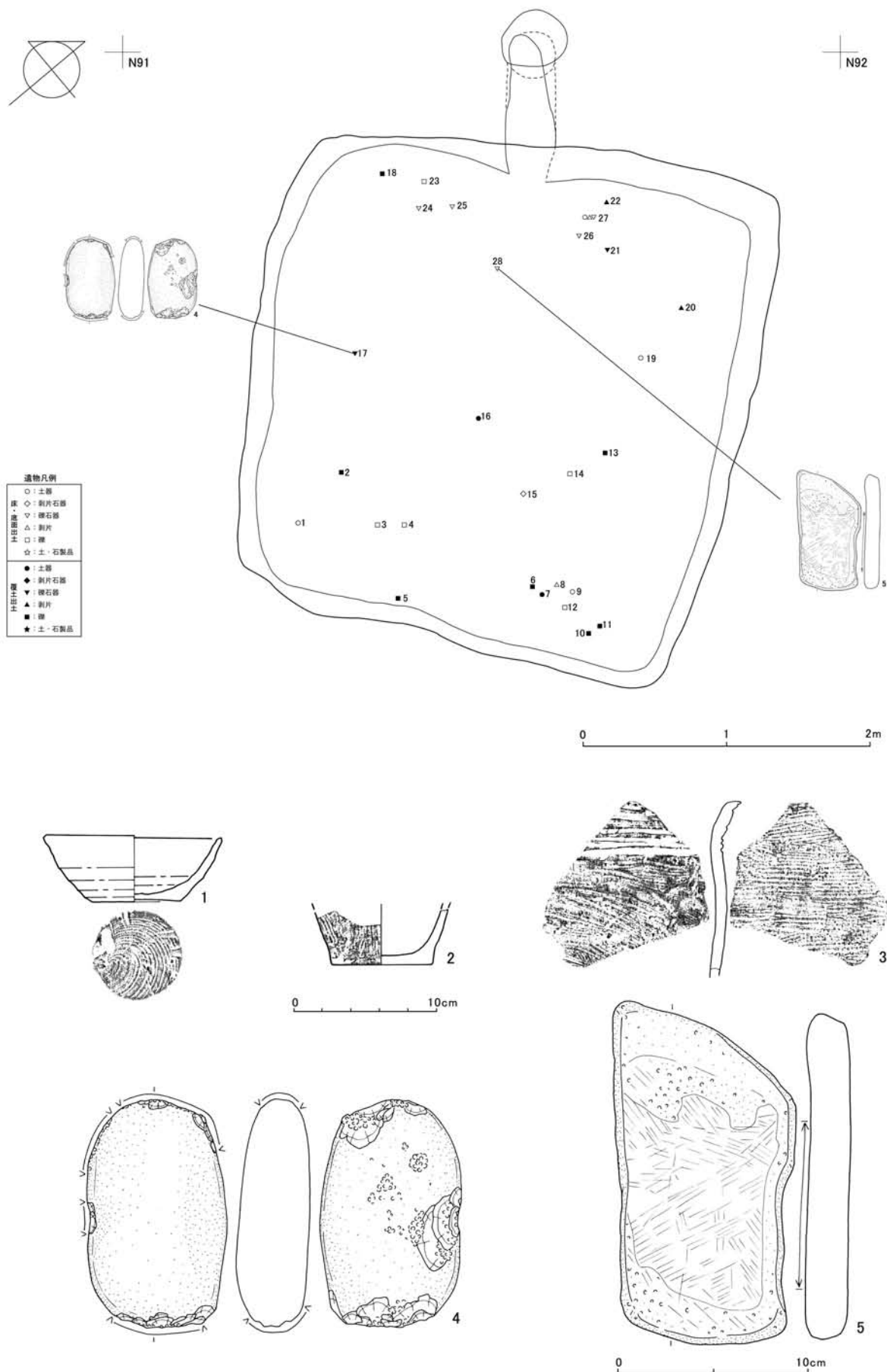
图IV-58 H-17 石器 (4)



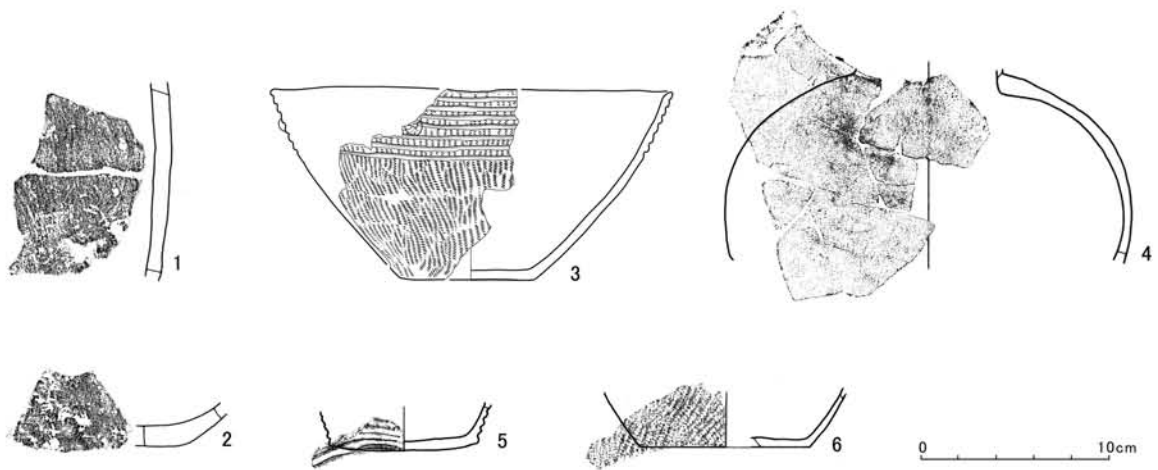
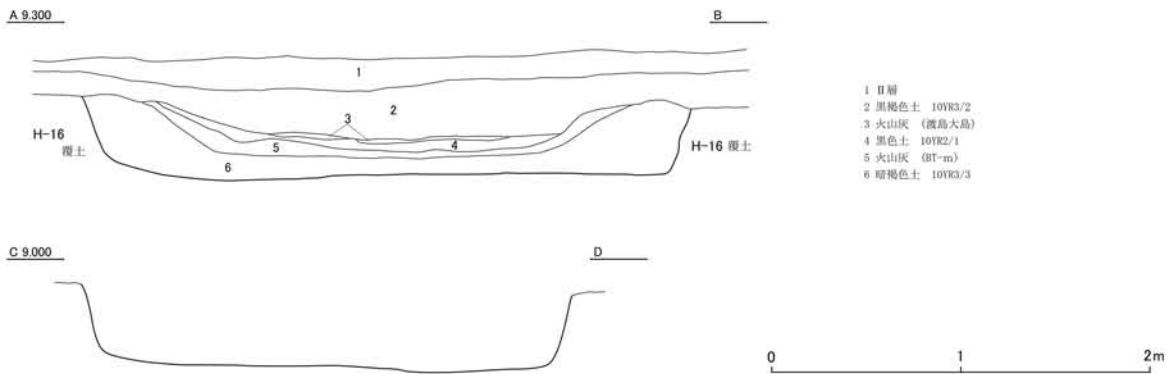
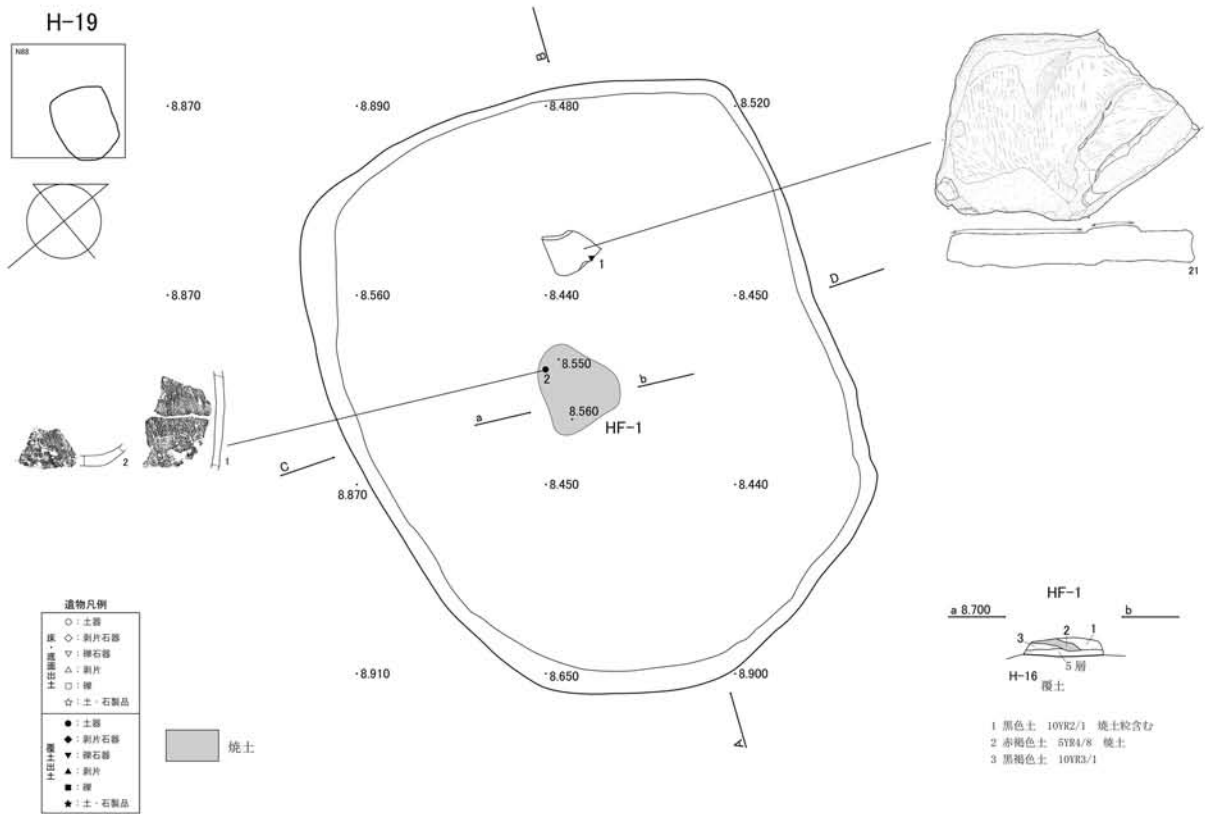
图IV-59 H-17 石器 (5) 土製品



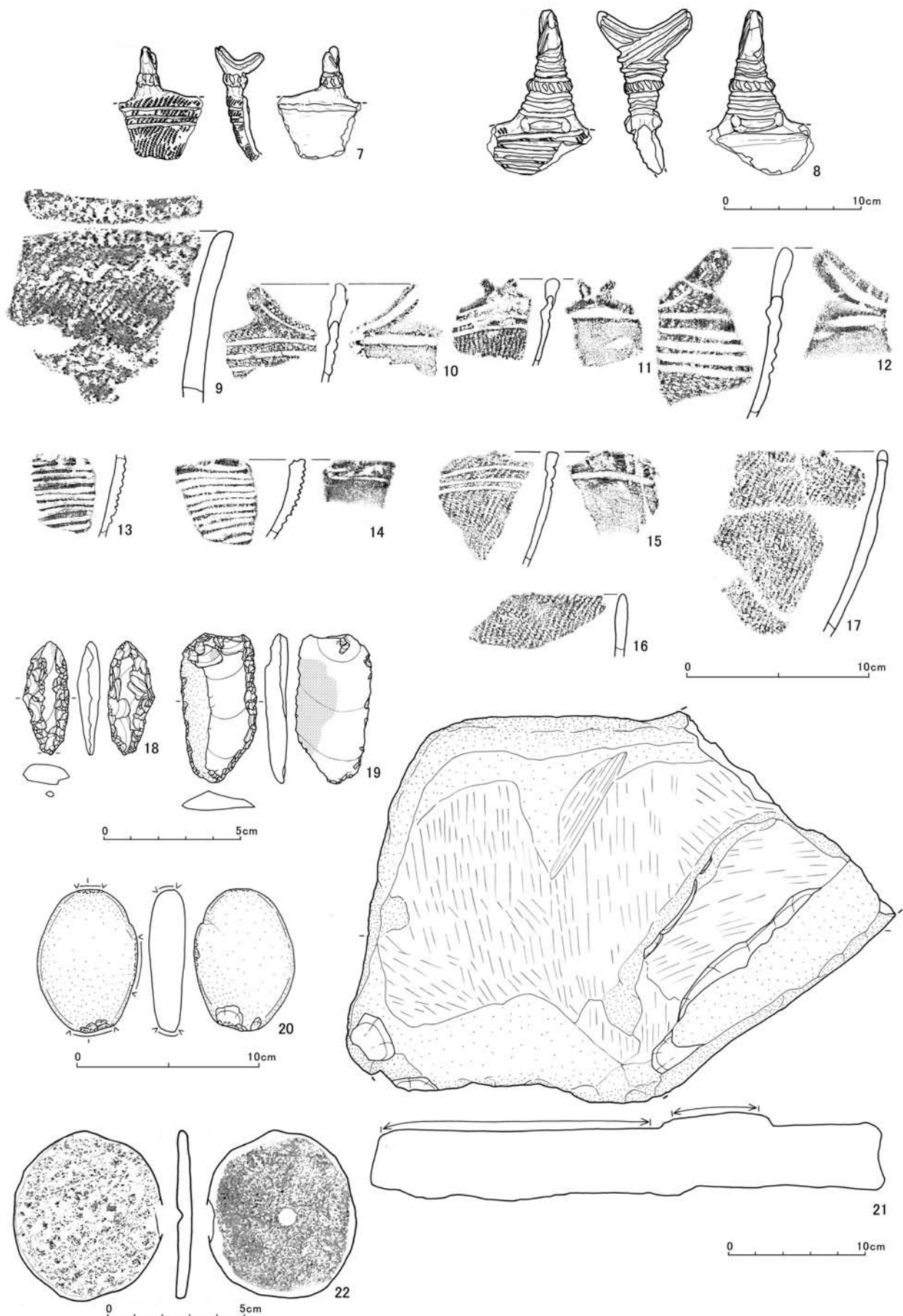
図IV-60 H-18



図IV-61 H-18 遺物出土状況図・遺物



图IV-62 H-19 土器 (1)



图IV-63 H-19土器(2)·石器

時期：出土したⅡ群B類土器から見て、縄文時代前期後半と考えられる。

(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1・2は当初、H-20を壊して構築されたH-22に伴うものとされていたものである。整理作業において両遺構の切り合い関係を見直した結果、H-22の時期がⅡ群B-4類土器～Ⅱ群B-5類土器の時期であることが判明した。1・2の出土層位がH-20の覆土3・4層に相当し、同層からⅡ群B-2類土器・Ⅱ群B-3類土器が出土していることから本遺構で扱うこととし、出土層位を便宜的に覆土3層出土とした。

いずれもⅡ群B類土器で、1～3・5・6はⅡ群B-2類土器、4・7～9・11～13はⅡ群B-3類土器、10はⅡ群B-4類土器である。1～9は覆土3層、10・11は覆土2層、12は覆土1層、13・14は覆土出土である。出土層位毎に説明を加える。

覆土3層 (1～9)：1は底部を欠失する。口頸部文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には付加縄文が施され、3本一組の縦位の縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文、下位には横走気味の縄文が施されている。2は器面に単軸絡条体の回転文が施され、口縁部に2条の沈線文が加えられている。3は波状口縁で、口頸部文様帯下端は2条の縄線で区画され、文様帯は単軸絡条体第6類の回転文、体部は単軸絡条体の回転文である。4は体部上半が大きくくびれる器形である。器面に複節の斜行縄文が施され、口頸部文様帯に6条の縄線文が横環する。5の口頸部文様帯下端は2本一組の縄線で区画され、文様帯には斜行縄文、体部は単軸絡条体の回転文が施されている。6は、底部を欠失する。波状口縁である。口頸部文様帯は縄線で区画され、波頂部から垂下する2本一組の縄線が施され、下端及び垂下する区画文には刺突文が加えられている。7は波状口縁で、口頸部文様帯には貝殻条痕文、体部には斜行縄文が施されている。8の口頸部文様帯の下端は2本一組の単軸絡条体の圧痕文で区画され、無文地の文様帯に縄線文を菱目状に加えている。体部は不規則な縄文である。9は口縁部を欠失する。口頸部文様帯下端は横位の短沈線で区画され、無文地の文様帯には単軸絡条体の圧痕文が施されている。体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されている。

覆土2層 (10・11)：10は口頸部を欠失する資料で、体部は単軸絡条体の回転文である。11は破片資料。体部には自縄自卷的な原体による縄文が施され、口縁部に3本の縄線文が加えられている。

覆土1層 (12)：12は緩やかな波状口縁である。口頸部に斜行縄文を施した後、口頸部の上下を縄線で区画し、口頸部文様帯を作出している。体部は単軸絡条体の回転文である。なお、接合関係を見ると覆土3層からも多く出土している。このことから本来は覆土3層に帰属する可能性がある。

覆土 (13・14)：13は口縁部に3段の結束羽状縄文が施され、体部には自縄自卷の縦走する縄文が施されている。14は口縁部破片。口縁部に結束羽状縄文が施され、組紐状の縄線文が加えられている。体部には自縄自卷の縄文が施されている。

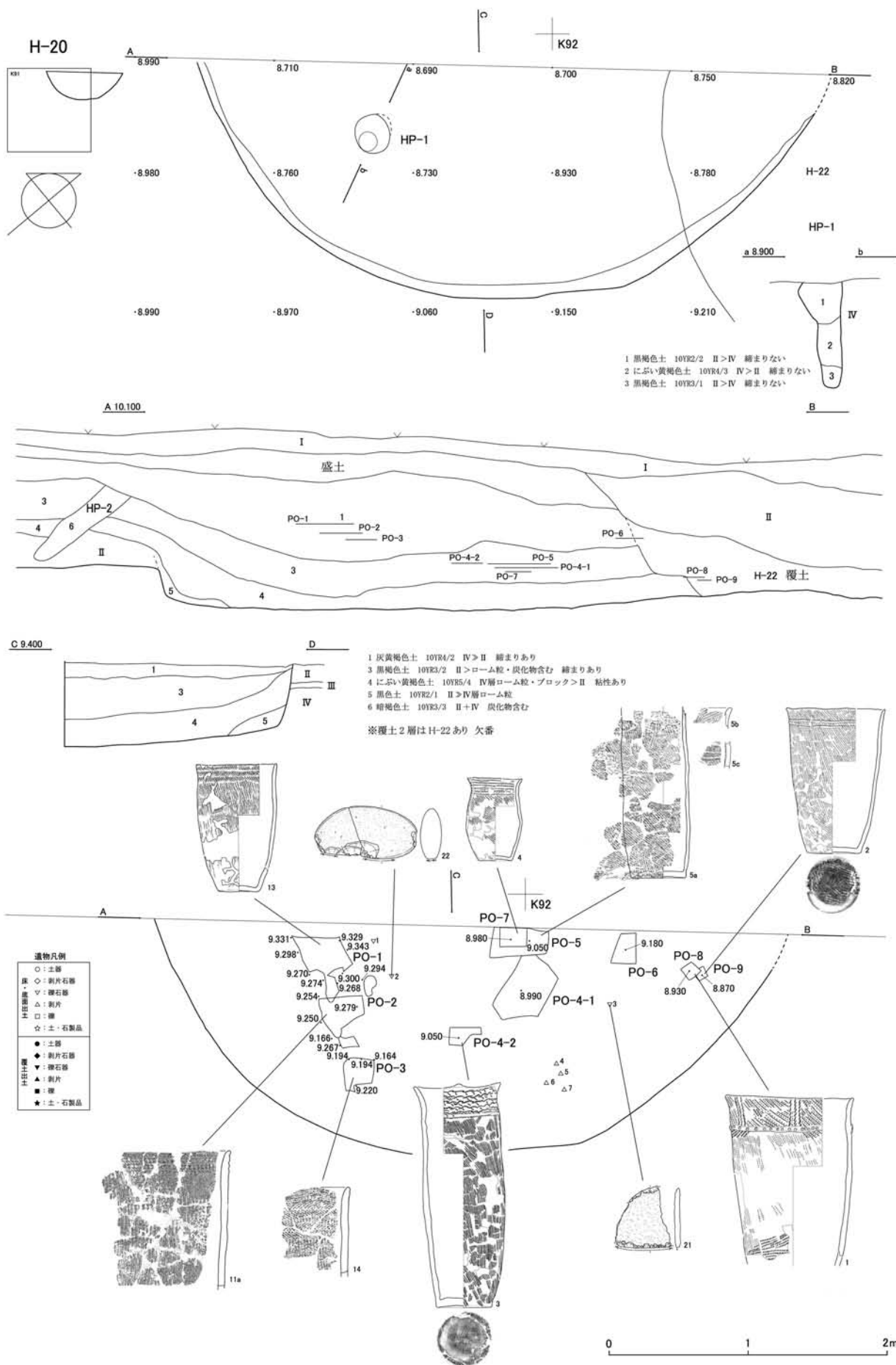
(石器) 21・22は床面、16・17・19・20は覆土3層、15は覆土4層、18は覆土出土。15～20はスクレイパー。15は横長剝片の側縁に刃部を作出したもの。16～20は縦長剝片の側縁に刃部を作出したもの。すべて頁岩製。21・22はすり石で扁平打製石器。21は板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出したもの。22は扁平な楕円礫の側縁を敲打して幅の狭いすり面を作出し、その一部を打ち欠いて幅の非常に狭い機能部を作出している。いずれも安山岩製。

H-21 (図IV-67～70、図版9・10・67・68)

位置：L・M・N90・91・92区

規模：(7.60) / (4.96) × (7.60) / (3.44) × (1.71) m

確認・調査：H-17のセクションに住居断面が確認されたことから、H-17のベルトに沿ってトレン

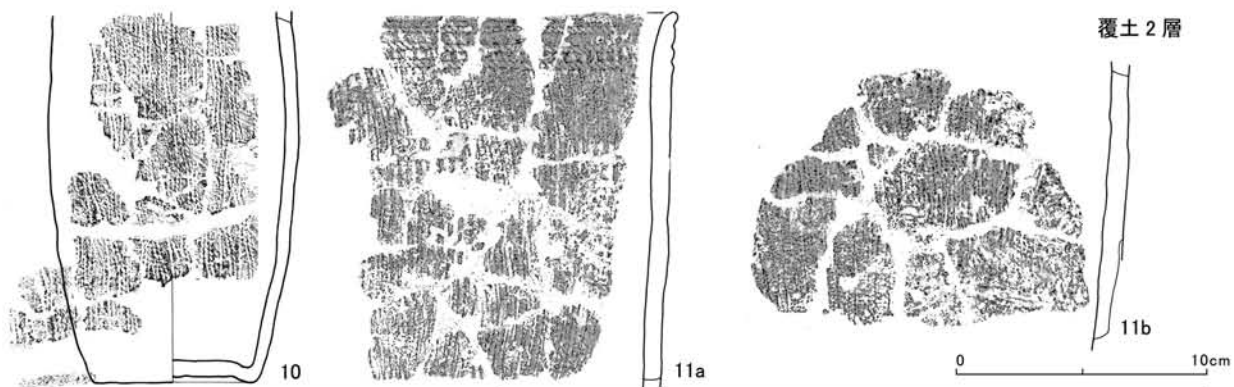


図IV-64 H-20

覆土 3 層

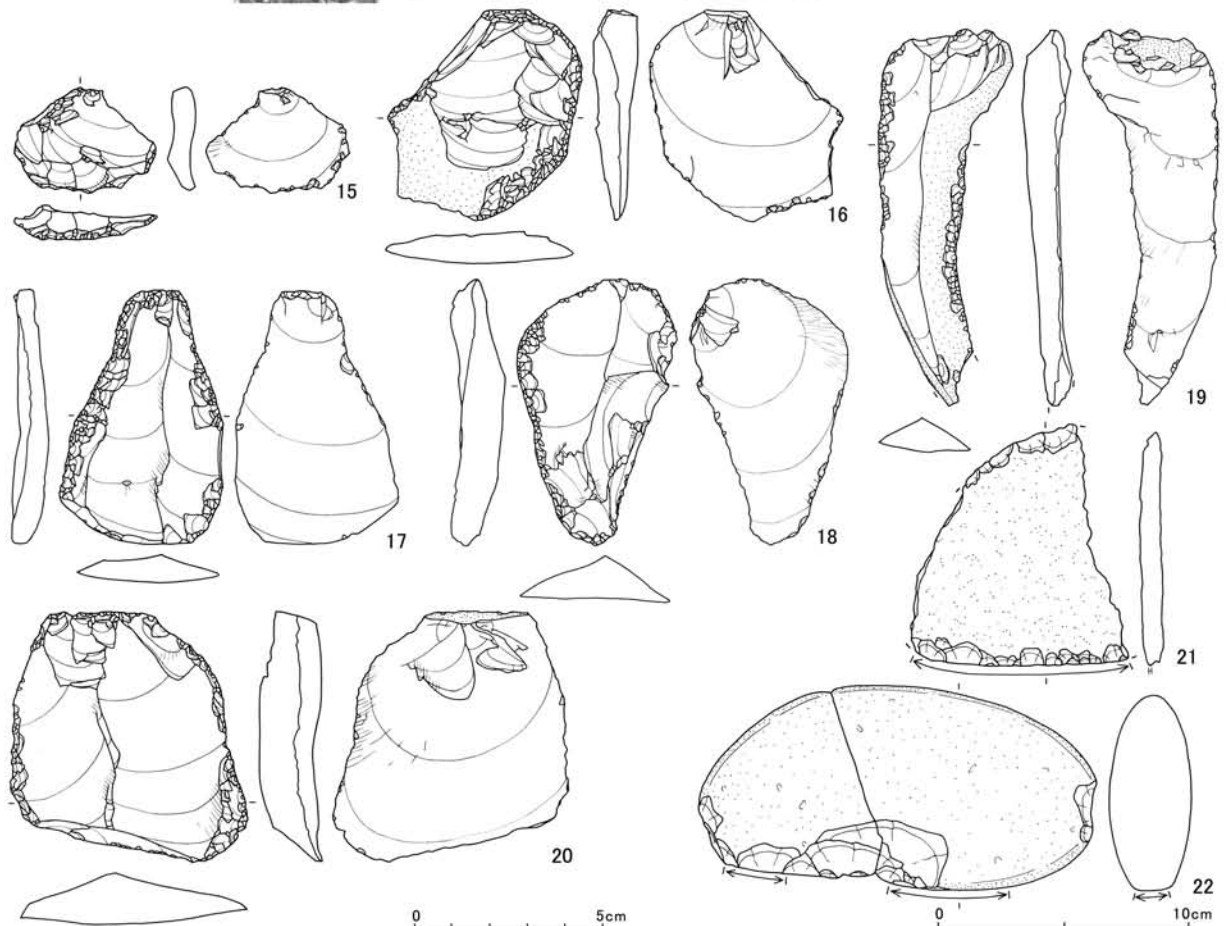
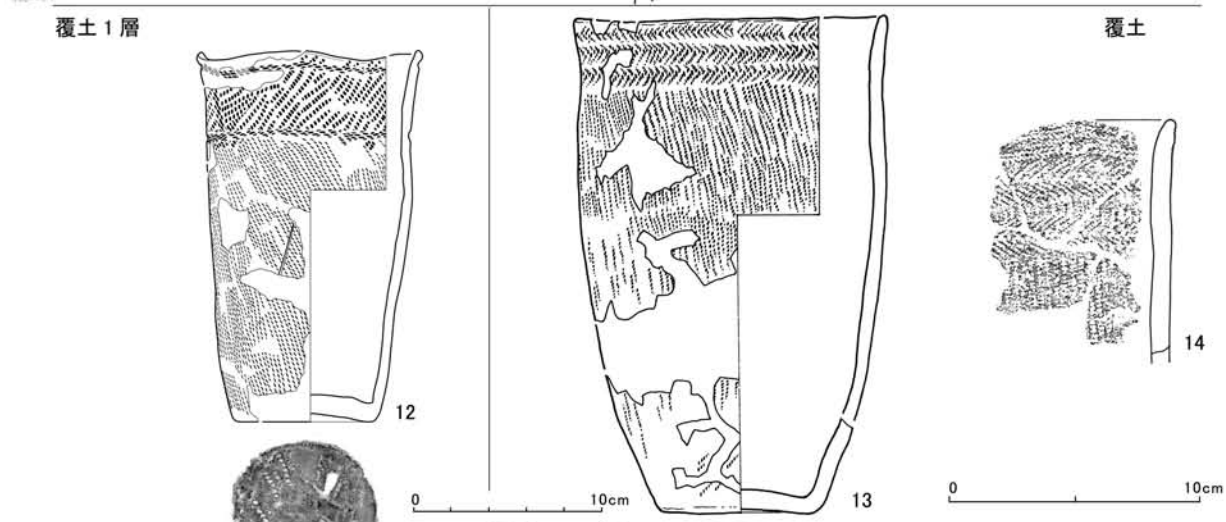


图IV-65 H-20 土器 (1)



覆土 1 層

覆土



圖IV-66 H-20 土器 (2) · 石器

チをいれ床面、ベンチ、壁面を確認した。平面ではベンチや壁の立ち上がりを確認できず、削平してしまっただけの場所が多い。床面やベンチから柱穴状ピットや焼土を検出した。

覆土：1層のみ。流れ込みと思われる。

平面形：平面形は壁面がはっきりしないためよくわからないが不整形で、床面は楕円形でベンチ構造がある。床面の長軸方向はN-75°-Eである。床面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴状ピット22か所、焼土2か所を検出した。

付属遺構：HP-1～3・5・8・9・36・37は柱穴状ピットと考えられる。HP-36から礫・礫石器がまとまって出土した。HF-1は床面長軸上東側にあり、よく焼けている。地床炉と考えられる。HF-2は床面長軸上西側にあり、焼土粒や炭化材を含み薄く堆積する。HF-1の廃棄と考えられる。

遺物出土状況：床面・焼土からⅡ群B-5類土器など12点、石器等23点、HPから土器33点、石器等26点、覆土からⅡ群B類土器474点、石器等561点、焼成粘土塊7点が出土している。HF-1脇の床面から石皿や凹み石が出土している。HP-36覆土3層から礫・礫石器13点がまとまって出土した。

時期：床面出土の遺物などから縄文時代前期後半と考えられる。HF-1検出の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行い、4,500±30yrBPの測定結果を得た。(酒井)

掲載遺物：(土器) 1・3～14はⅡ群B類土器。3・4はⅡ群B-3類土器、1・5～7はⅡ群B-4類土器、8～14はⅡ群B-5類土器である。9・10は床面、1・3～8・11～14は柱穴状ピット(HP)から出土した。2はⅣ群A類土器で、包含層Ⅱ層中位から出土した。

3・4は同一個体の可能性がある。3は口縁部破片、4は体部破片。斜行縄文が施される。胎土はきめが細かい。1・5～7は自縄自巻の縄文が施されたもの。1は底部、5～7は体部破片。6は結束斜行縄文が加えられている。8は波頂部分で、肥厚する。口唇には縄の圧痕が加えられている。波頂部から垂下する貼り付けが加えられ、無文地の文様帯には組紐状の縄の圧痕文が加えられている。9～13は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。14には擦痕文が施されている。

(石器) 15・18・20は床面、17はHF-1、16・19はHP-36覆土3層出土。15はスクレイパー。縦長剥片の側縁から下端まで刃部を作出したもの。頁岩製。16はたたき石。棒状礫の端部と側縁の一部に敲打痕がある。頁岩製。17は凹み石。扁平礫の平坦面に断面半円形の凹みがある。安山岩製。18・19はすり石で北海道式石冠。全面を敲打で整形し、握部を作出している。すり面は短軸方向に外彎し、傾いている。安山岩製。20は台石。扁平礫の平坦面に敲打痕と弱いすり痕がみられる。安山岩製。

H-22 (図IV-71～74、図版13・14・68)

位置：N10区

規模：7.50 / (3.95) × 7.26 / (3.68) × 0.53m

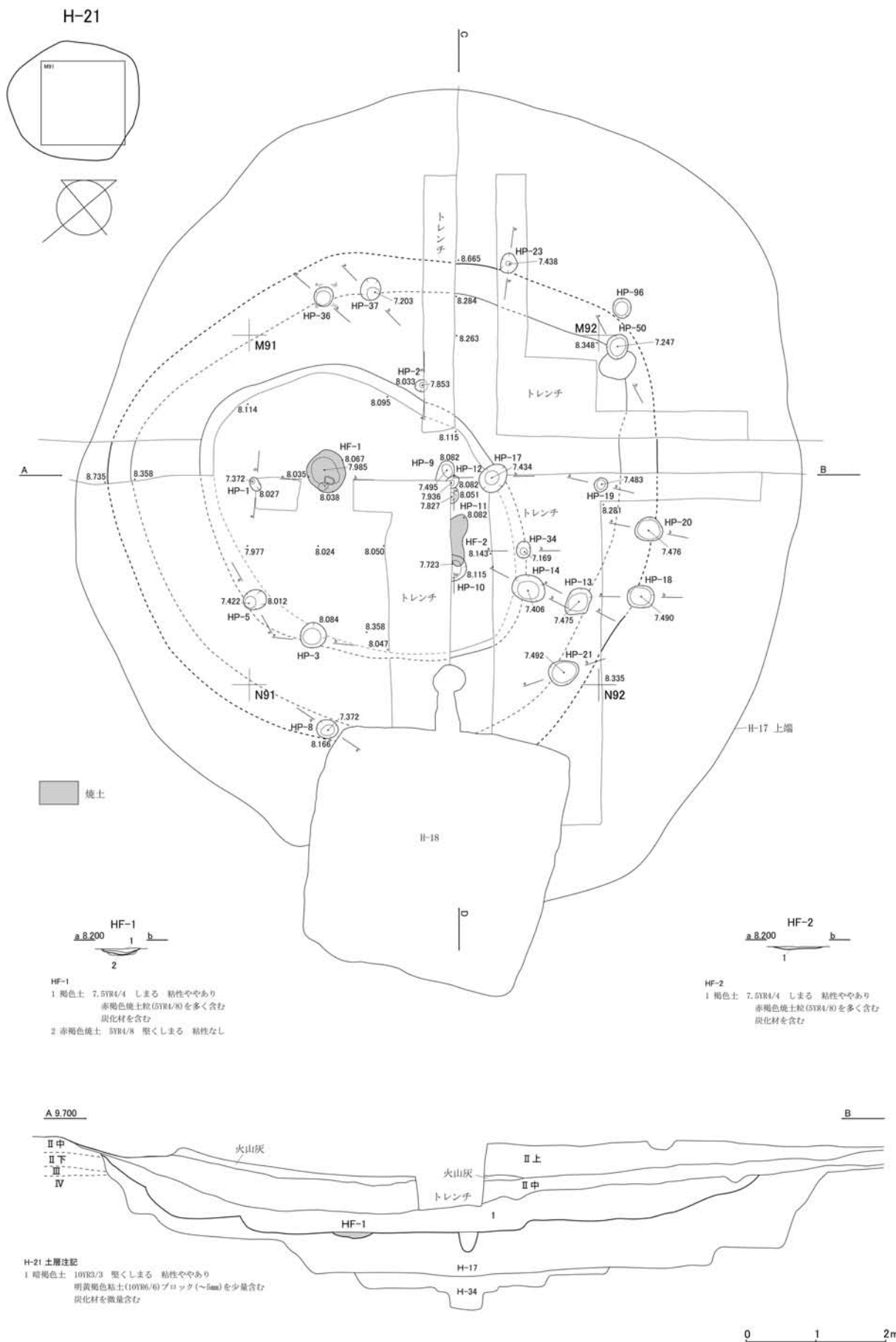
確認・調査：1層を除去した段階で、褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。炉跡の土壌を採取してフローテーションを行った。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

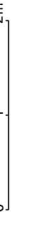
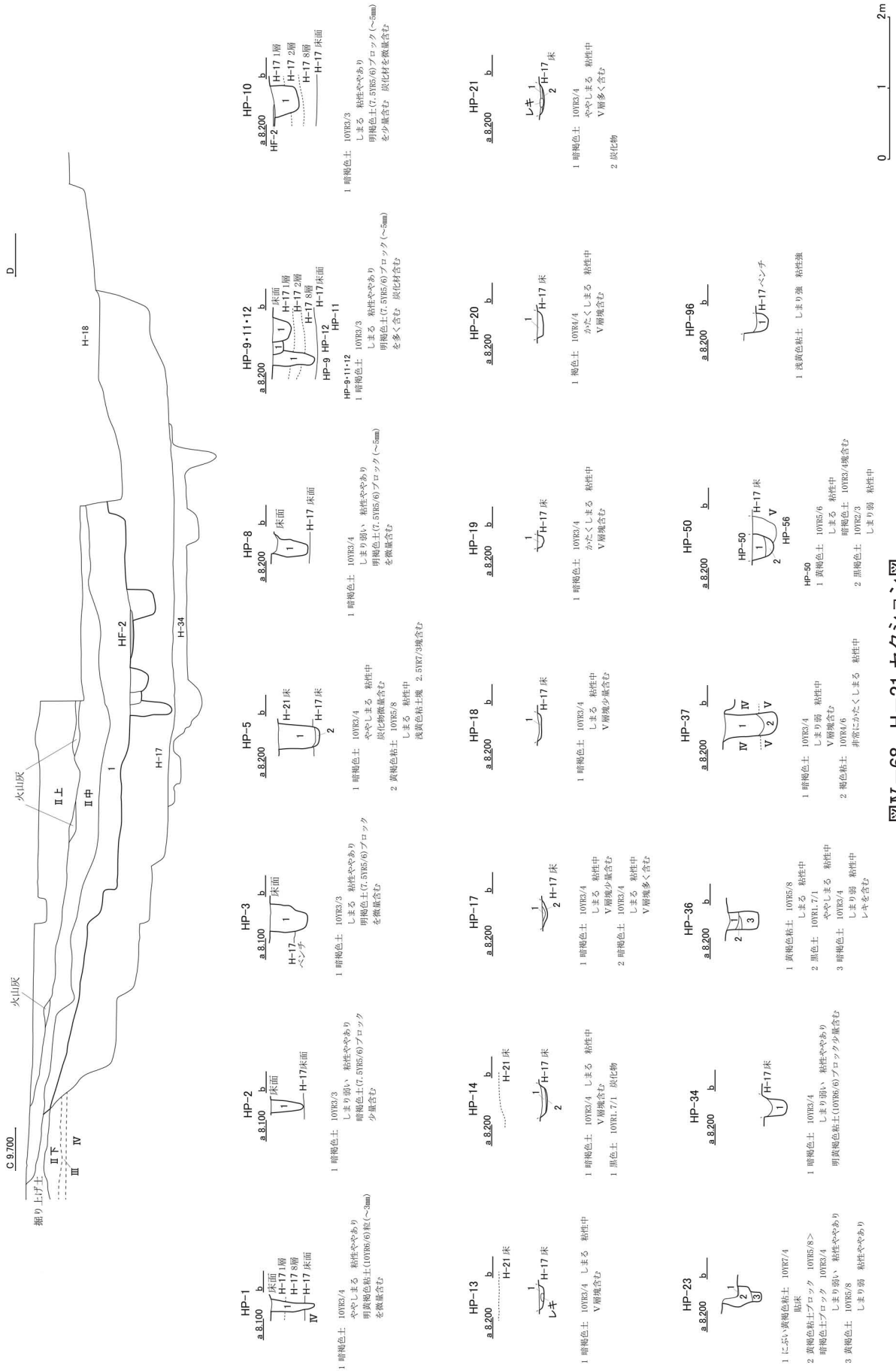
平面形：平面形は遺構の約二分の一が調査区外にあるため、詳細は不明だが五角形の可能性が高い。ベンチ構造を持つ。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。西側の壁の一部はH-20の壁を壊して作られている。

付属遺構：主柱穴は4本検出された (HP-1・2・4・18)。柱穴の位置からみて、調査区外の未検出のものも含め6本柱と推定される。炉跡は床面の東側で検出された (HF-1)。地床炉である。

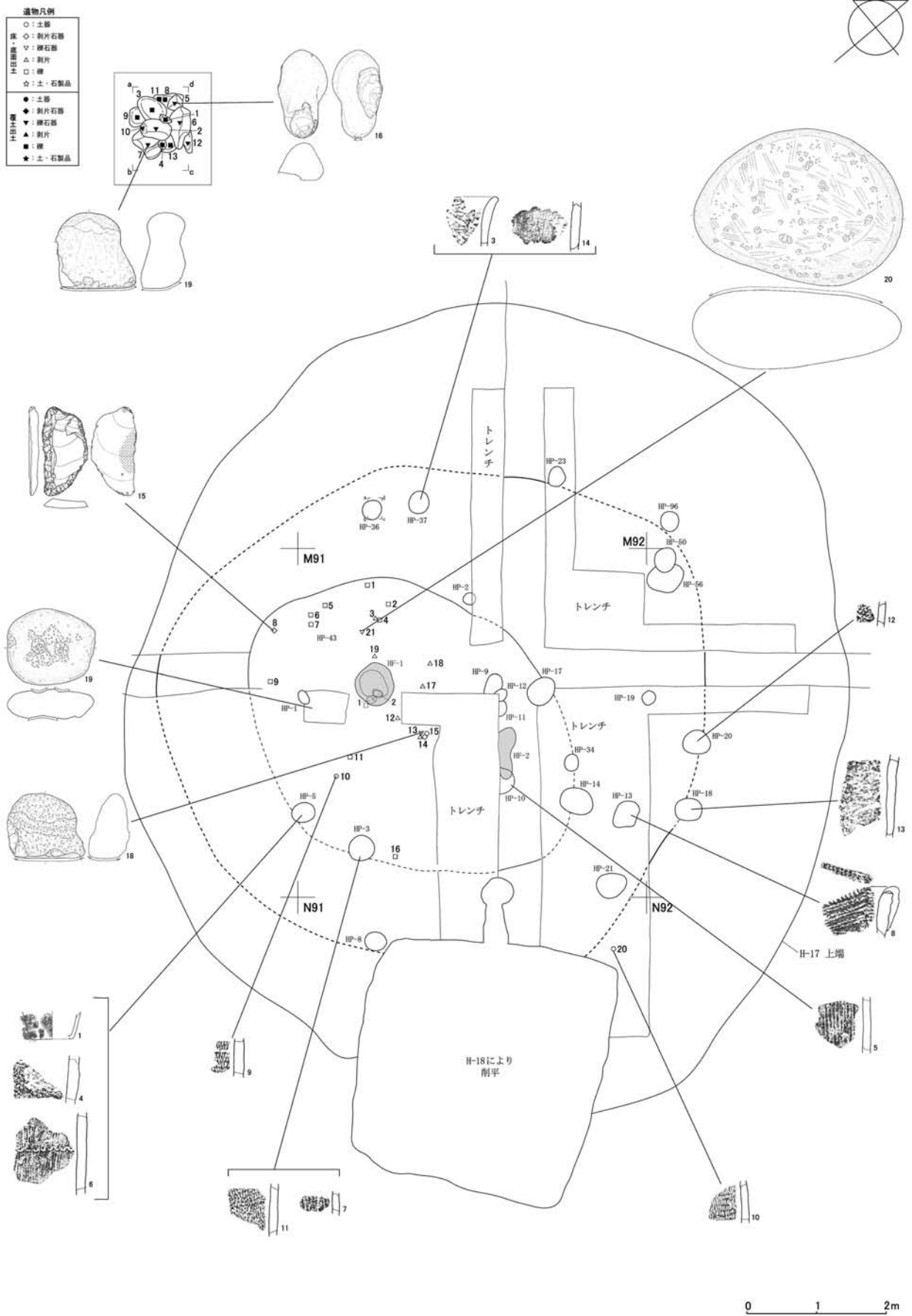
遺物出土状況：床面・床面直上からⅡ群B類土器など12点、石器等60点、HFから土器1点、HPから



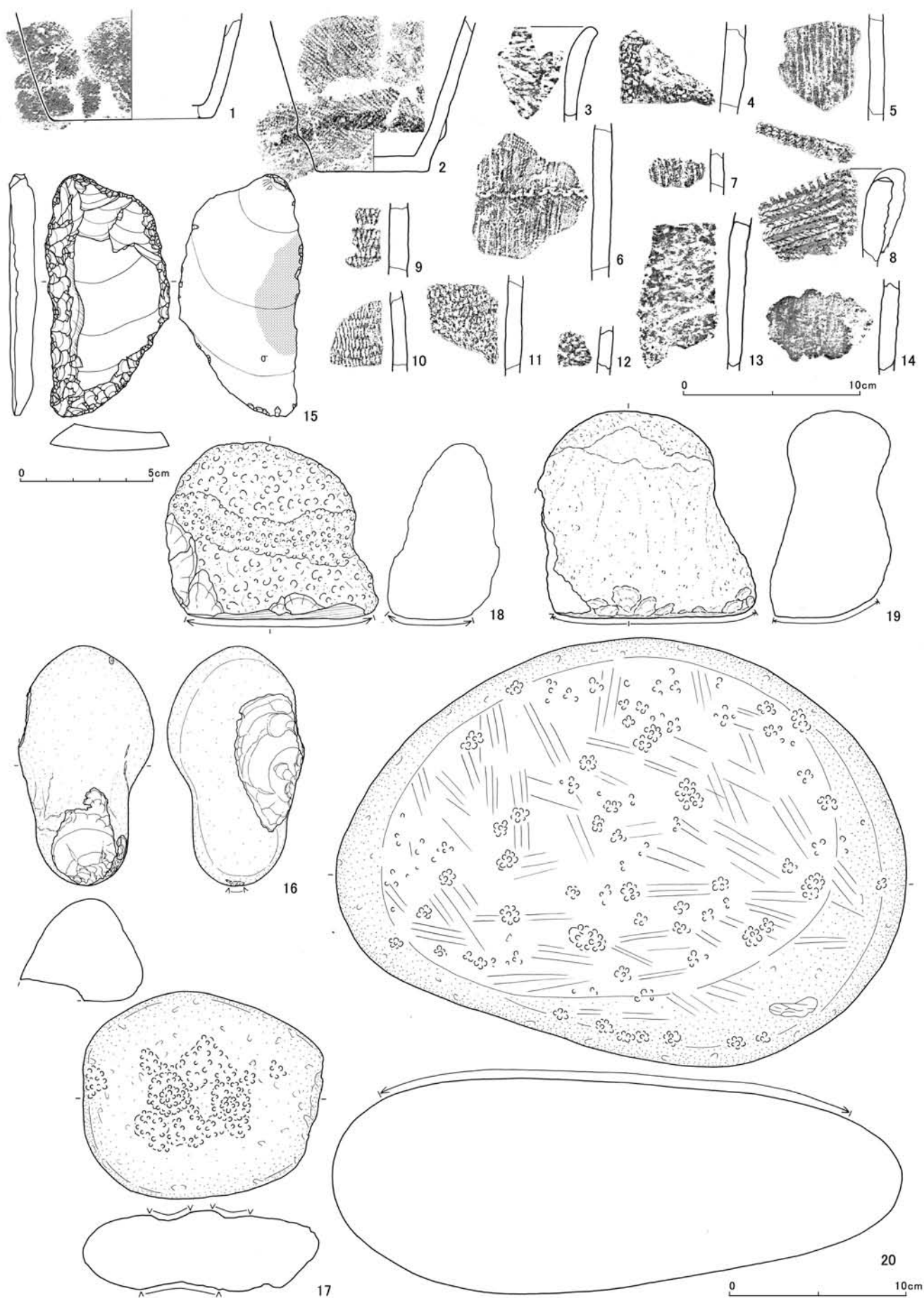
図IV-67 H-21



図IV-68 H-21 セクション図



図IV-69 H-21 遺物出土状況図



图IV-70 H-21 遺物

土器63点、石器等114点、覆土からⅡ群B類土器など879点、石器等1,234点が出土した。床面からⅡ群B-5類の土器片と多量の礫に混ざり、スクレイパー・石錐・石核・すり石・たたき石が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 4・7・8・12は床面、1～3・5・6・9～11・13～19は柱穴状ピット(HP)出土。19はⅡ群A類土器、1～18はⅡ群B類土器で、10・17はⅡ群B-3類土器、1～5・14・15はⅡ群B-4類土器、6～9・11～13・16・18はⅡ群B-5類土器である。出土層位毎に説明する。

床面(4・7・8・12)

Ⅱ群B-4類土器(4)：4は単軸絡条体の回転文が施された体部破片である。

Ⅱ群B-5類土器(7・8・12)：7は口縁部破片。口唇には単軸絡条体の圧痕が加えられている。口頸部文様帯には内面から表面にかけての細かい貼付帯が加えられ、単軸絡条体の圧痕文が施されている。8・12は体部破片。8は多軸絡条体の回転文が、12は斜行縄文が施されている。

柱穴状ピット(1～3・5・6・9～11・13～19)

Ⅱ群A類土器(19)：19は底部破片。器面に篋状工具による押引文が3段施されている。

Ⅱ群B-3類土器(10・17)：いずれも体部。10は直前段反撚の縄文、17は自縄自巻の縄文である。

Ⅱ群B-4類土器(1～3・5・14・15)：1・2は口縁部破片。1は口唇に縄の圧痕文が加えられている。口縁部には縄線文が、体部に単軸絡条体の回転文が施されている。2は口縁部が肥厚するもの。3・5は単軸絡条体の回転文である。14・15は細かな斜行縄文が施されたもの。

Ⅱ群B-5類土器(6・9・11・13・16・18)：6は単軸絡条体第4類の回転文である。9は縄文が施されたもの。11・16は多軸絡条体の回転文である。13は斜行縄文が施されたもの。18は擦り痕が施されたもの。

(石器) 20～31は床面出土。20は石錐。つまみ部がある。剥片の一部を加工して機能部を作出している。頁岩製。21・22はスクレイパー。21は剥片の側縁に刃部を作出したもの。22は剥片の周縁に刃部を作出したもの。いずれも頁岩製。23～29はたたき石。23～25は棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。23は砂岩製、24・25は泥岩製。26は扁平な垂角礫の端部に敲打痕のあるもの。安山岩製。27は扁平な楕円礫の周縁の一部に敲打痕のあるもの。泥岩製。28は垂円礫の一部に敲打痕のあるもの。珪岩製。29は垂角礫の平坦面に敲打痕のあるもの。砂岩製。30はすり石で北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は平坦で、短軸方向にやや傾いている。安山岩製。31はⅡ群B類土器を素材とする有孔土製円板である。

H-23(図IV-75～128、図版14～16・69～91)

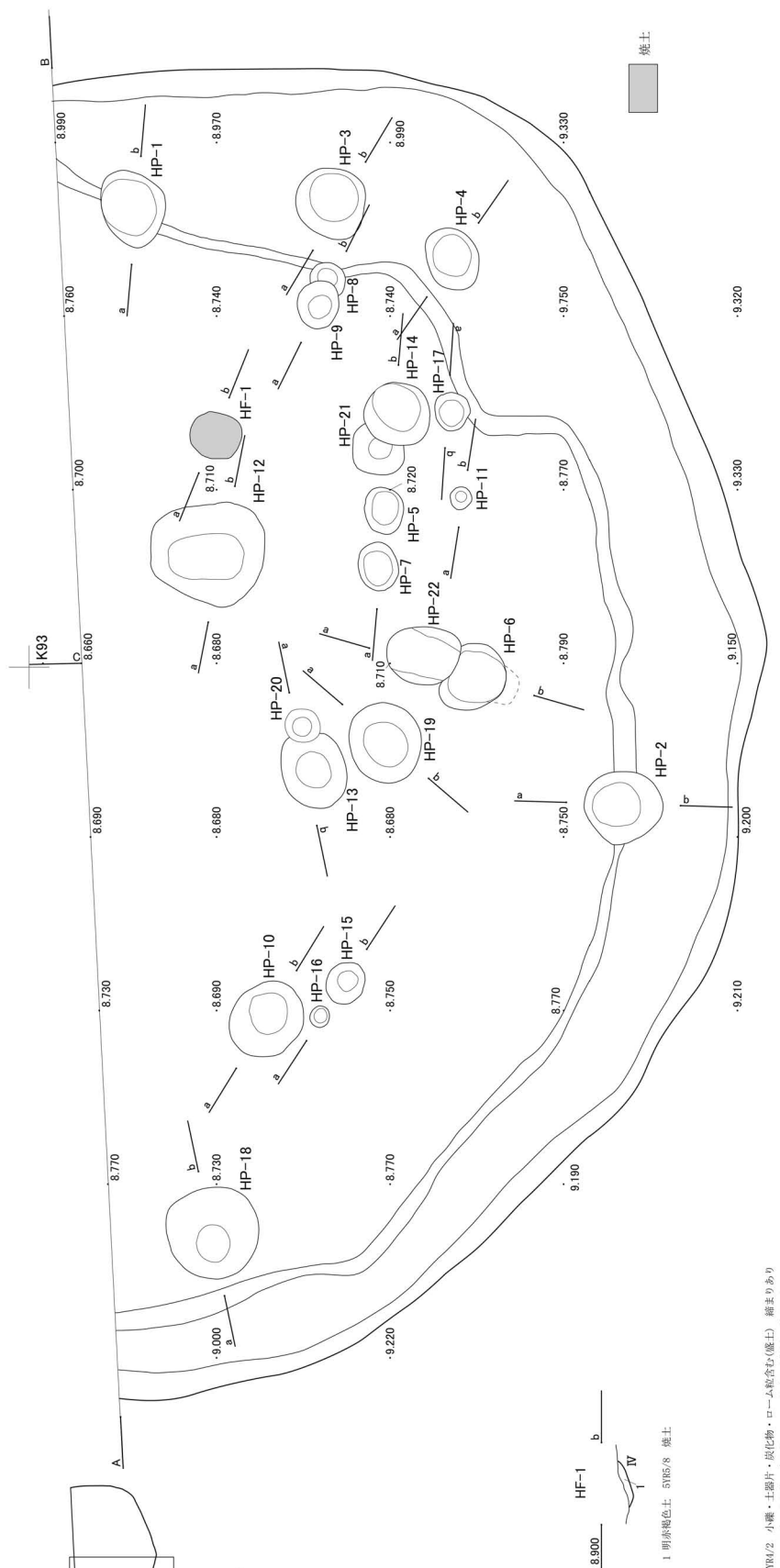
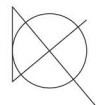
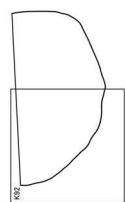
位置：N 0、O99・0・1、P 0・1区

規模：6.50 / 6.02×5.80 / 5.41×0.71m

確認・調査：調査は2か年にわたって実施された。平成22年度、Ⅱ層・盛土の調査中に、O 0区及びその周辺に多量の遺物が混じる盛土層である黄褐色土～黒褐色土の落ち込みを確認した。周辺を掘り下げた結果、直径6mほどの円形ないし隅丸方形の落ち込みであることを確認した。落ち込みの覆土は大きく中央部の暗黄褐～黒褐色土、縁辺部の放射状・棘状に突き出す黄褐色土の2つに分けられた。平成22年度の調査は遺構を確認して終了した。

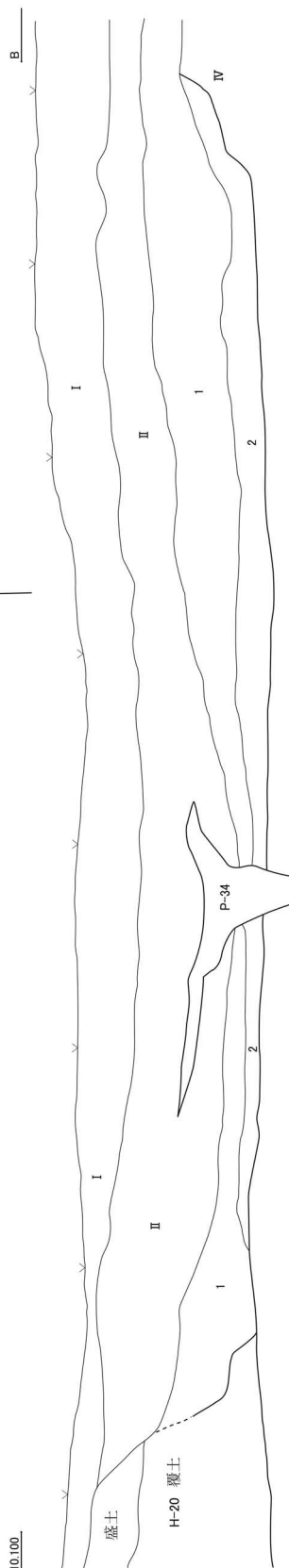
平成23年度の調査再開とともに、南-北と東-西の土層観察用のトレンチを設定し、堆積状況の確認を行った。トレンチ調査の結果、Ⅳ層に掘り込まれた床面と壁の立ち上がりを確認すると共に、覆土に多くの土器が折り重なる状態で出土することを確認した。調査はトレンチ調査で確認した層位毎に掘り下げ、その都度、層位毎に遺物の出土状況を作図し取り上げを行った。覆土9層は遺物を含ま

H-22



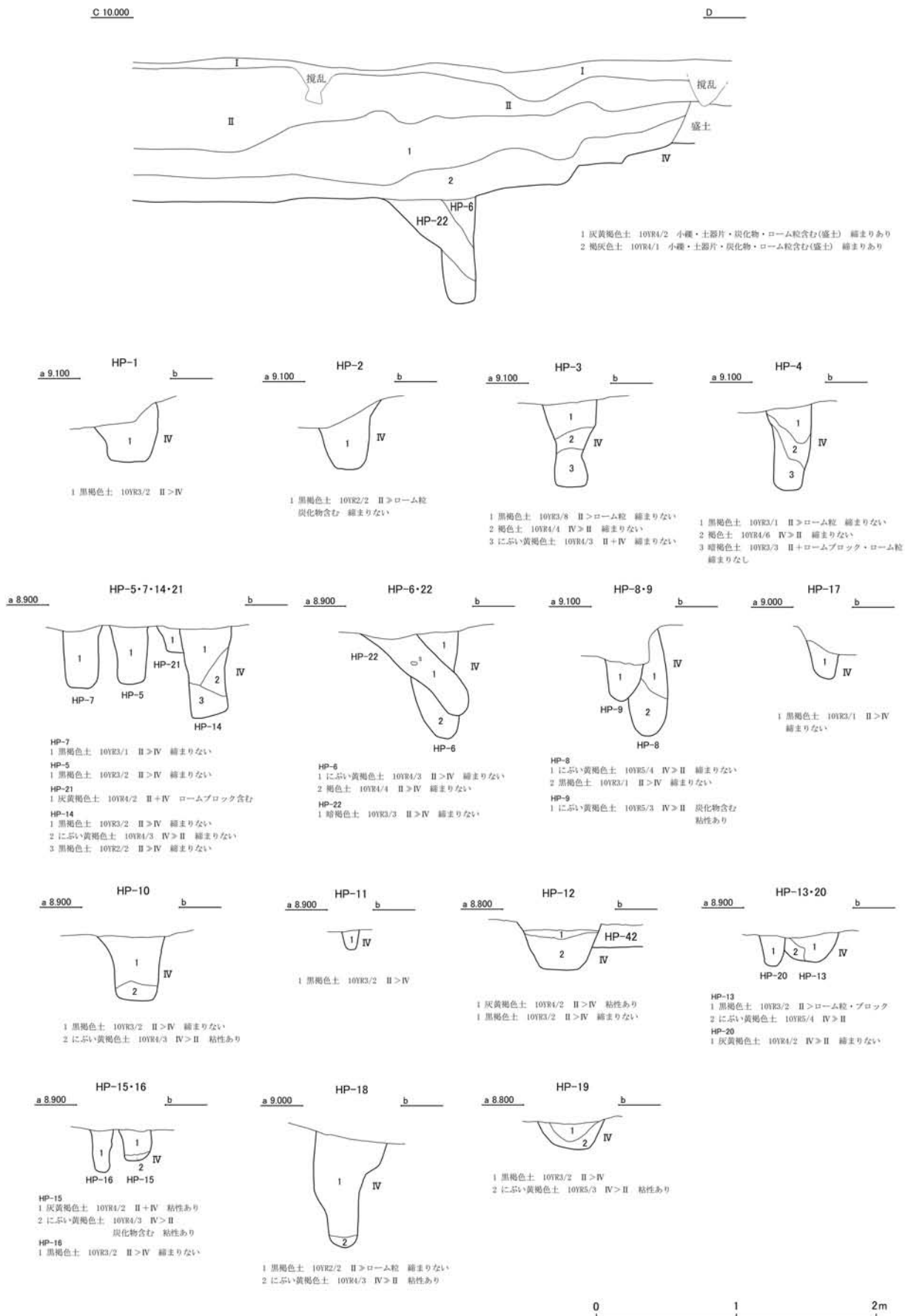
A 10.100

- 1 灰質褐色土 10YR4/2 小礫・土器片・炭化物・ローム配合石(盛土) 締まりあり
- 2 褐色土 10YR3/1 小礫・土器片・炭化物・ローム配合石(盛土) 締まりあり

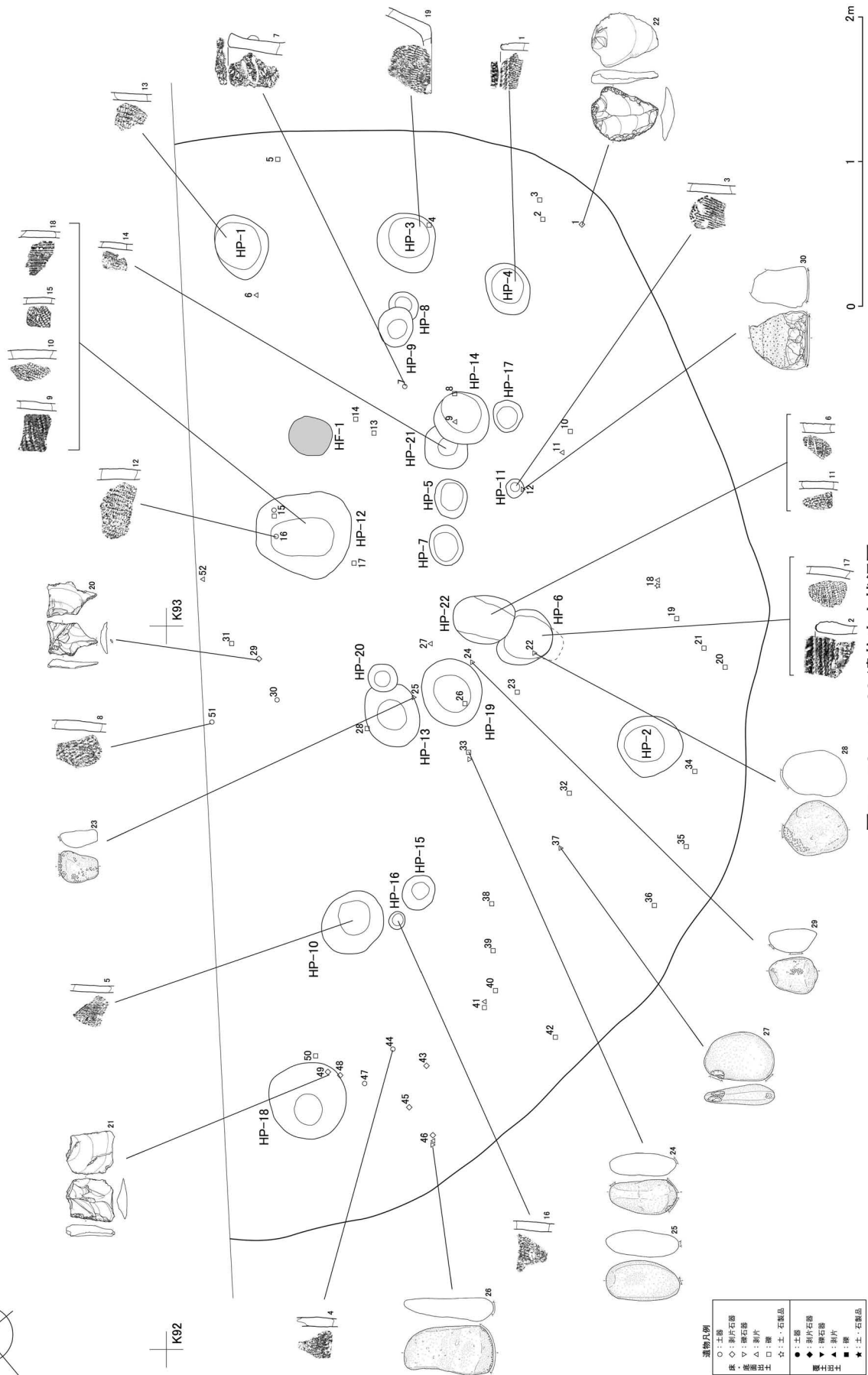
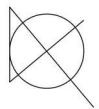


0 1 2m

図IV-71 H-22

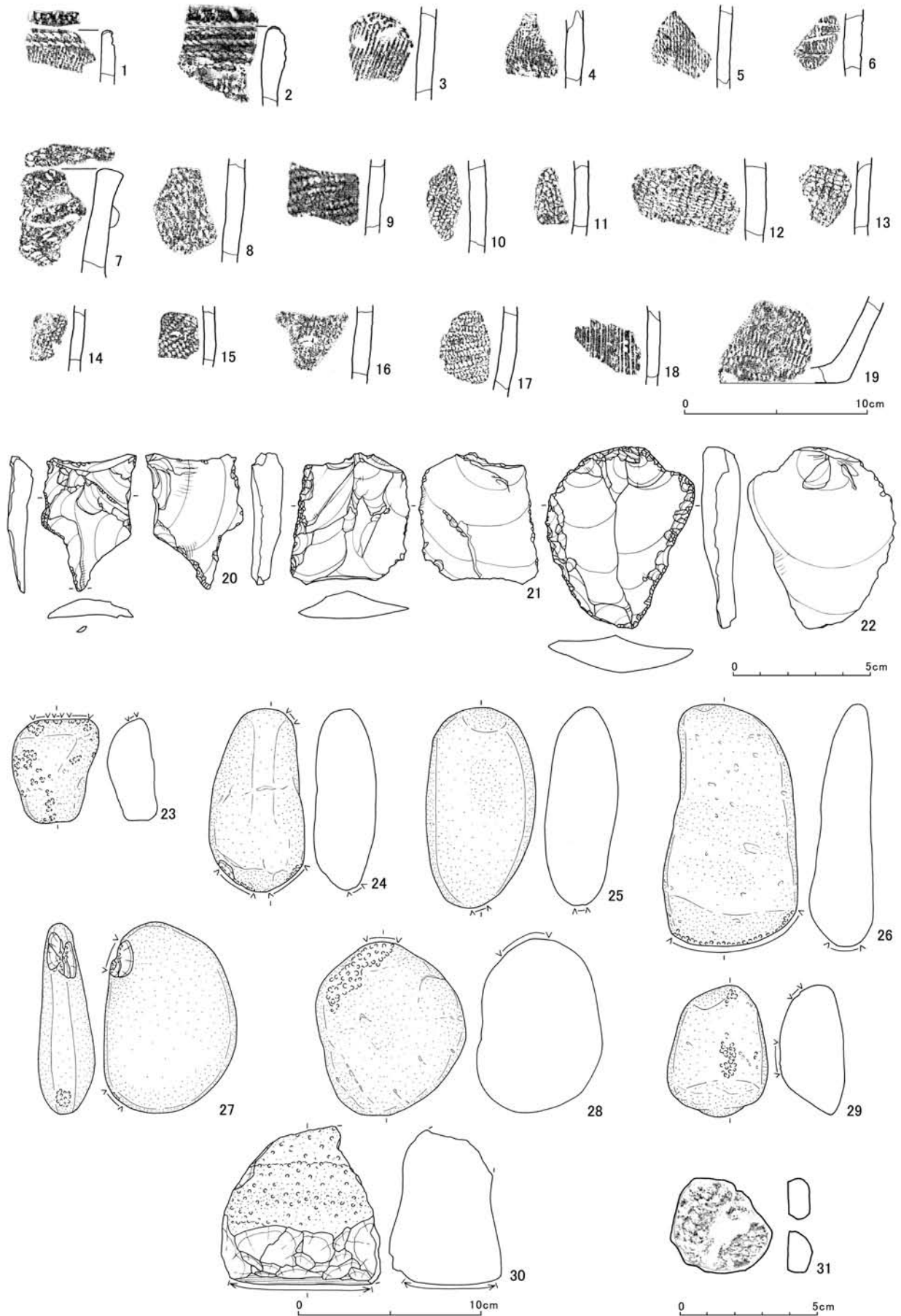


図IV-72 H-22 セクション図



图IV-73 H-22 遺物出土状况图

遺物凡例	
○	土器
◇	陶片石器
▽	漆器
△	漆片
□	土、石製品
☆	土、石製品
●	土器
◆	陶片石器
▼	漆器
▲	漆片
■	漆
★	土、石製品



图IV-74 H-22 遺物

ない層であることから、上屋に葺土構造をもつ住居を想定し調査を実施した。縁辺部の放射状・棘状の落ち込みは住居の外周をめぐる柱穴状ピットを想定して調査を実施した。その結果、住居内から柱穴状ピット11基（HP-1～11）を検出し、うち6か所（HP-1～4・8・11）が主柱穴である。西側に2本（HP-1・4）、東側に4本検出し、HP-3・11、HP-2・8が隣接して確認した。中央部に炉跡（HF-4）、東・西・北の壁立ち上がり部分から周溝（周溝1～5）を検出した。

本住居跡は、HP-3・11の検出状況・切り合い関係から、小規模な減築がされたことを示している。上屋については葺土構造をもつものであったと思われる。出入口部分については付属施設を確認することができなかった。しかし、住居の南側は周溝が検出されておらず、葺土と考えられる覆土9層の堆積状況が他に比べ少なく、大きく内湾する。床面出土遺物の分布では南側が薄く、北側が濃い。また、出土した遺物についても南側からほとんど出土していない各種の石器類が北側から多く出土している。そのため南側部分と他の部分との住居内での機能の違いが想定できる。これらのことから住居の南側は他のとは異なった性格・機能をもったことが想定され、この異なった性格・機能が出入口部分であったと考えられる。

覆土：覆土は9層確認した。覆土5層・覆土7層・覆土9層を除き覆土1層から覆土8層は多量の遺物と共に埋め戻された盛土の堆積層である。覆土5層・覆土7層は少量の炭化物を含むものの、他覆土とは異なり焼土粒・焼骨片を含まないもので、自然堆積層と思われる。遺物も極めて少なく、遺物の時間差を示すものと考えている。覆土9層は床面直上に堆積し、ほとんど遺物を含まない層で、壁周辺は厚く、中央部で薄くなる。葺土が短時間で崩落して堆積したのと考えられる。その堆積が短時間で生じたため上部の覆土のような多量の遺物の混入が生じなかったと思われる。このことから、本住居跡の上屋については葺土構造をもつものと考えられる。覆土・床面・柱穴状ピット（HP）の土壌を採取してフローテーションを実施した。その結果、ブドウ・ササ属・オニグルミ・クリ・マタタビ等と共にヒエ6粒が検出されている。

平面形：隅丸方形

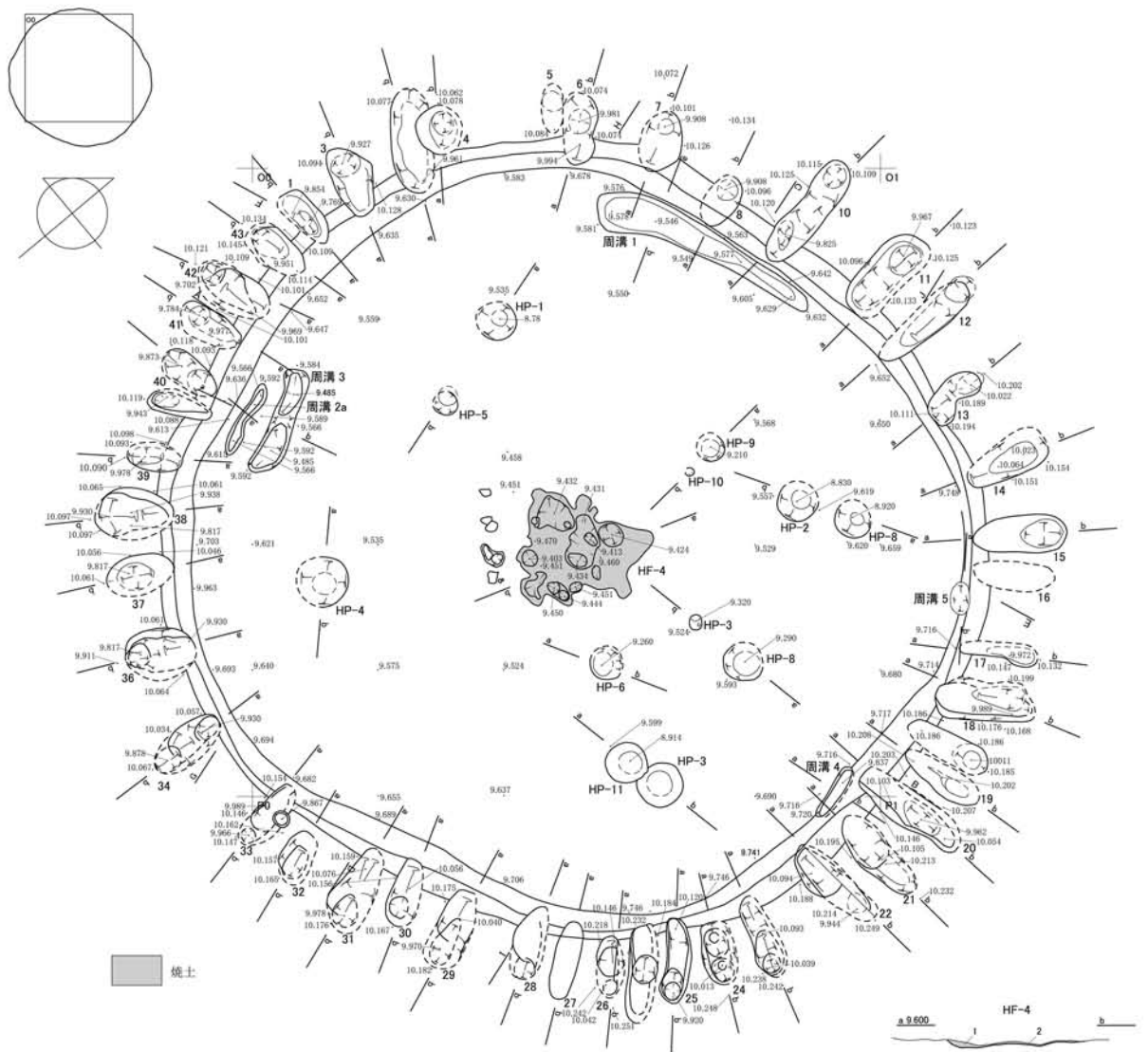
付属遺構：主柱穴は6本検出されたが本来は4本柱穴で、東側での小規模な建て替えが認められる。炉跡は中央部で確認した。建て替えが行われたにもかかわらず炉跡の移動の痕跡が確認されていない。このことは建て替えが小規模であったことを示している。焼土は発達不十分でわずかに赤色化が認められたにすぎない。上面に炭化物を含む薄い砂層によって覆われて、炉床には面浅い凸凹が認められた。周辺から砂が入った小ピット（HP-10）やいわゆる砂ピットと呼ばれるもの（HSA-1～5）が確認されている。住居外柱穴44か所が確認され、水平角度30～50°の傾斜で設置されている。

遺物出土状況：覆土5層・覆土7層・覆土9層を除く各層から多量の遺物が出土した。各層から土器が潰れた状態で折り重なるように出土している。床面からは土器片・石器類が出土し、多くの遺物が出土した北側と遺物が少ない南側で分布の違いが認められている。床面からⅡ群B類土器など22点、石器等246点、柱穴状ピット・焼土などから土器30点、石器等22点、覆土からⅡ群B-3類土器など66,060点、石器等16,125点が出土した。

時期：縄文時代前期後半のⅡ群B類土器、Ⅱ群B-2類土器～Ⅱ群B-3類土器の時期。検出した炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行った。覆土1層：4,600±30yrBP、覆土4層：4,570±30yrBP、覆土5層：4,670±30yrBP、覆土6層：4,590±30yrBP、覆土8層：4,730±30yrBP、HF-4周辺小ピット：4,650±30yrBP、HP-1：4,730±30yrBPの測定結果を得た。

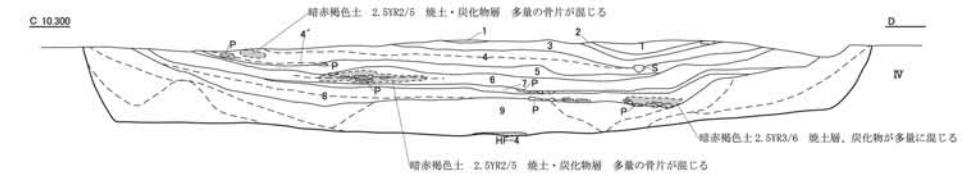
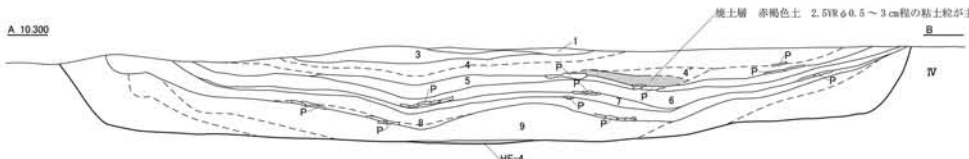
掲載遺物：（土器）遺物が少ない覆土5層・覆土7層・覆土9層を挟んで各層から多量の土器が出土し、150個体を超える復原土器を得た。しかし、時間的制約から復原できなかったものも多かった。

H-23



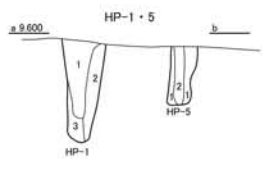
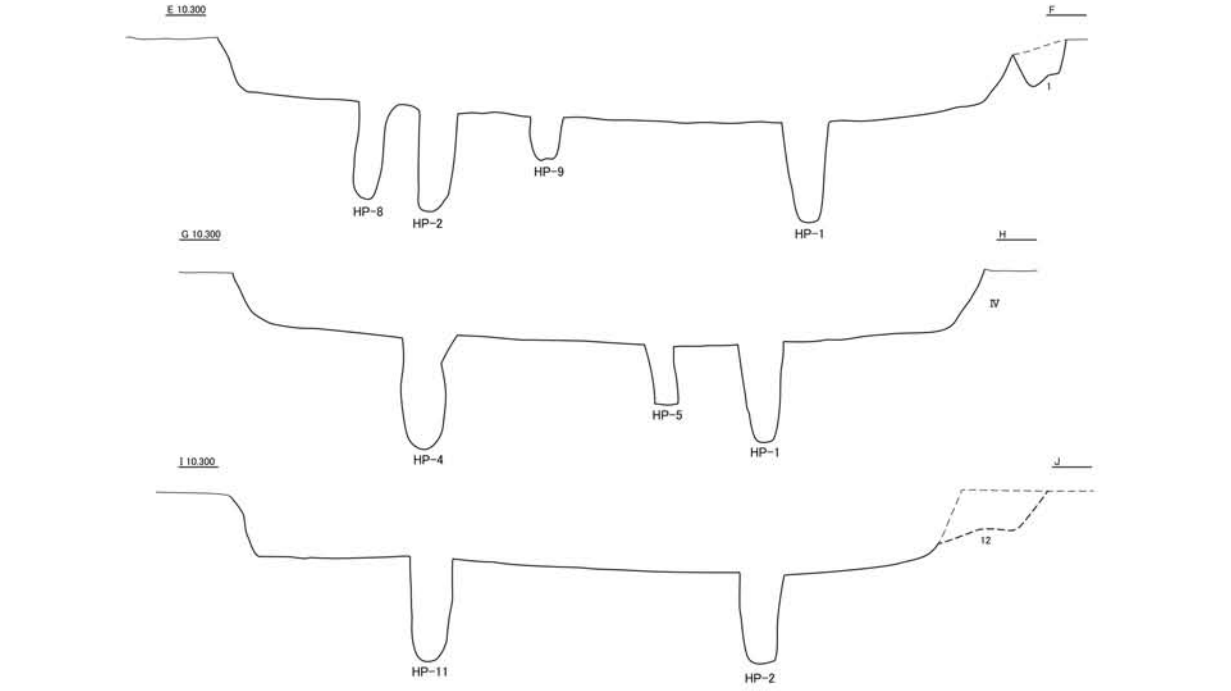
焼土

- 1 灰黄褐色粘土 10YR6/2 砂質土で少量の炭化物が混じる
- 2 黒褐色砂質土 10YR2/3 砂・炭化物からなる 少量の粘土が混じる

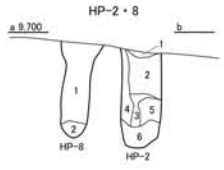


- 1 にぶい赤褐色土 5YR4/4 しまり良い 細かいローム多量を含む 少量の炭化物を含む
- 2 黒褐色土 5YR3/1 しまり良い 粘性強い ϕ 1~2cmの炭化物が多量に混じる 焼土粒少ない
- 3 にぶい赤褐色土 5YR4/4 1層に類似する 大形の炭化物・ローム粒が混じる 少量の遺物が認められた
- 4 暗赤褐色土 5YR3/2 しまり良い 細かいローム粒が混じる 多量の遺物が出土
- 4' 暗赤褐色土 2.5YR3/2 しまり良い 4層に類似するがやや黒味が強い ϕ 0.5~1cmの炭化物・ローム粒が混じる 焼土粒や焼骨を含む
- 5 明褐色土 7.5YR4/6 しまり良い 粘性が強い 1cmを超える大粒のローム粒・炭化材を含む 多量の遺物が出土
- 6 褐色土 7.5YR4/4 多量の遺物が出土 部分的に焼土粒層(二次堆積)が認められる 細かいローム粒・炭化物(大形1cm以上)が多く含まれ、焼骨片も認められる 多量の遺物が出土
- 7 黒褐色土 5YR2/1 しまり良い 粘性が強い 炭化物・焼土・ローム粒を含まない
- 8 褐色土 7.5YR4/4 6層に類似する 9層の上面から8層下位にかけて多量の遺物が出土 多量の炭化材・焼骨片が混じる 砂粒も多く含む 部分的に焼土(二次堆積層)が認められる
- 9 明褐色~黒褐色土 7.5YR5/8~7.5YR3/2 竊土構造をもつ尾根状の陥落土である 炭化物・焼土粒は認められない ほとんど無遺物層である

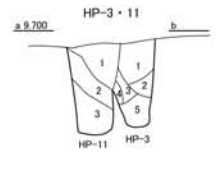
図IV-75 H-23



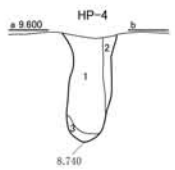
- HP-1**
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 ぼそぼそ 多量の炭化物砂粒が混じる
 - 2 明褐色土 7.5YR5/8 しまり良く粘りが強いロームである 大きくクラックが入る
 - 3 黒褐色土 7.5YR3/2 1に類似するがロームが多くしまり良い 少量の炭化物が混じる
- HP-5**
- 1 暗褐色土 10YR3/4 ぼそぼそ 粘状なし 砂粒多い
 - 2 黄褐色粘質土 10Y5/8 ローム 砂粒混じり まじりなし



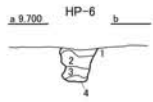
- HP-2**
- 1 黒褐色粘質土 10YR2/3 ぼそぼそ 粘性弱い ブロック状の粘土
 - 2 褐色粘質土 10YR4/4 粘性強い ややしまり悪い 少量の炭化物が混じる
 - 3 暗褐色土 10YR3/4 ぼそぼそ
 - 4 暗褐色土 10YR3/4 3に類似
 - 5 黄褐色粘質土 10YR5/6 粘土 しまり良い (崩落土?)
 - 6 暗褐色土 10YR3/4 3, 4に類似するがやや黄色みが強い ぼそぼそ
- HP-8**
- 1 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒、黒褐色土に同量まじる ぼそぼそ 多量の炭化粒、炭化物がまじる
 - 2 黄褐色土 10YR5/6 しまり良く粘性強い



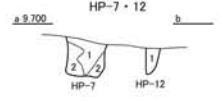
- HP-3**
- 1 暗褐色土 10YR3/4 ぼそぼそ 少量の炭化物が混る 砂粒が多い
 - 2 褐色砂質土 10YR4/6 ぼそぼそ
 - 3 暗褐色土 10YR3/4 1に類似する
 - 4 褐色砂質土 10YR4/6 2層に類似する
- HP-11**
- 1 褐色粘質土 10YR4/6 しまり良い 少量の暗褐色土が混じる
 - 2 褐色粘質土 10YR4/4 1に類似する ブロック状を呈する ぼそぼそ
 - 3 褐色粘質土 10YR4/4 2に類似するが黒褐色土が多く混入 さらさらである



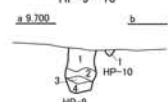
- HP-4**
- 1 暗褐色粘質土 10YR3/4 砂粒、炭化物、炭化粒が交互に混じる
 - 2 褐色粘質土 10YR5/6 ブロックのロームに黒褐色土が混じる しまり良い
 - 3 黄褐色粘質土 10YR5/6 大きなブロック状のロームに少量の黒褐色土が混じる しまり良く粘性強い



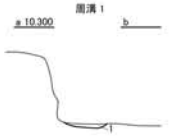
- HP-6**
- 1 青褐色土 10YR5/6 大きなブロック状のロームの混入 ローム粒が混じる しまり良い
 - 2 灰オリーブ 10YR5/2 砂にローム粒が混じり、しまり良い 1より混入量少ない
 - 3 灰オリーブ 10YR5/2 ほとんどローム粒の混入なし しまり良い
 - 4 灰オリーブ 10YR4/2 2層に類似 2層に比べローム粒が大きい しまり良い



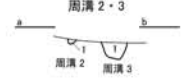
- HP-7**
- 1 褐色粘土 10YR4/4 しまり良い 混入物なし
 - 2 褐色粘質土 10YR4/4 1と類似するがφ1~2mm程度の塊状に分離する
- HP-12**
- 1 褐色土 10YR4/4 φ1~2mm程度の塊状に分離する



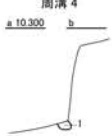
- HP-9**
- 1 暗褐色土 7.5YR3/4 褐色土とローム粒が混じり、砂粒が多い さらさら
 - 2 明褐色土 7.5YR5/8 ボール状にかたまっている ぼらぼら 破砕部分に黒色土の混入あり
- HP-10**
- 1 黒褐色砂質土 10Y2/3 砂粒多い 少量のローム塊 しまり良い



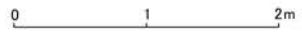
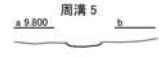
- 周溝 1**
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ1~2mm程度のローム粒が混じる しまり良い



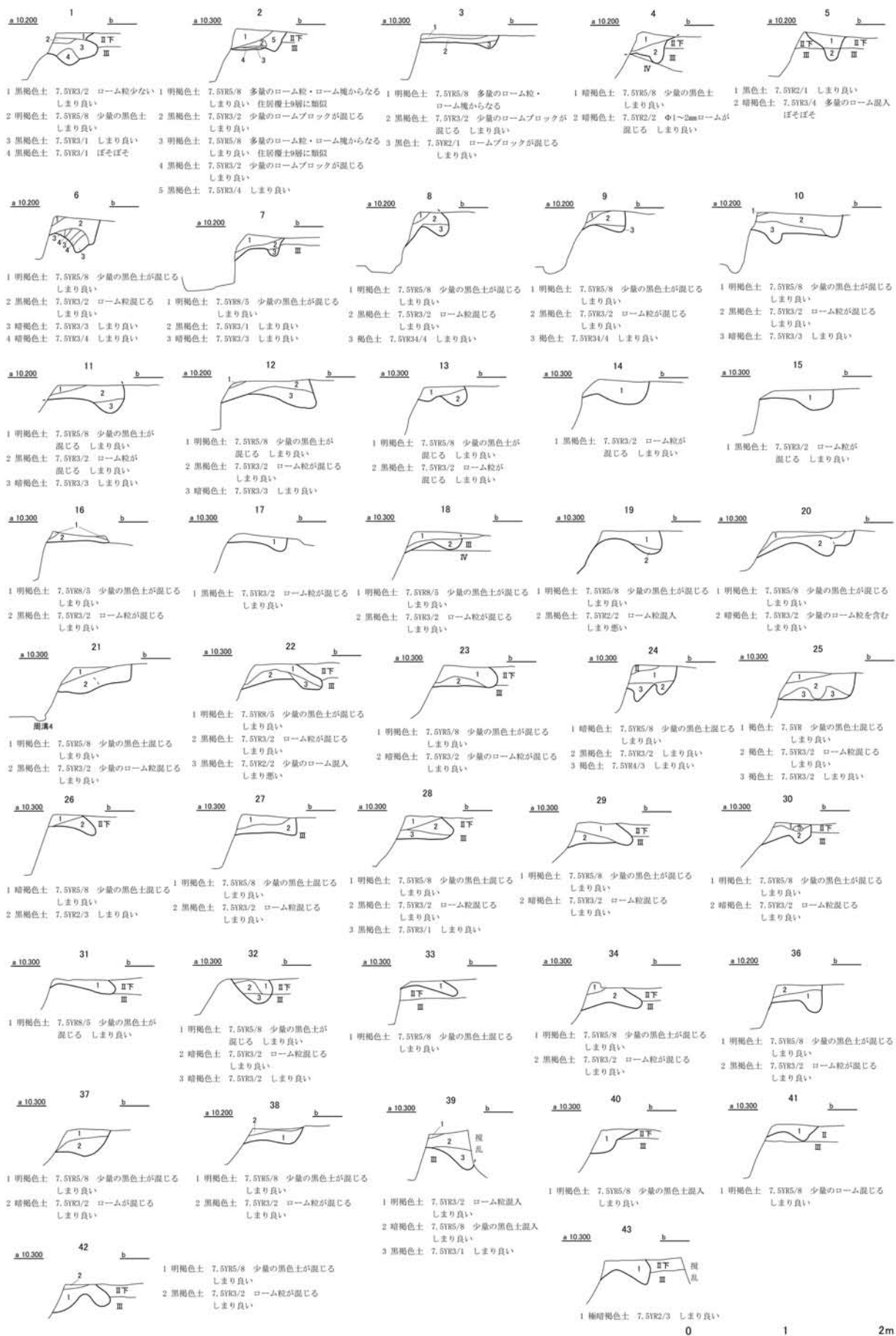
- 周溝 2・3**
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ1~2mm程度のローム粒が混じる しまり良い



- 周溝 4**
- 1 暗褐色粘質土 7.5YR3/3 しまり良い φ0.5~1mm程度のローム粒が混じる



図IV-76 H-23 セクション図 (1)



図IV-77 H-23 セクション図 (2)

出土状況の良好なものについてはPOと呼称し、平板測量・やり方測量で位置・出土状況（範囲）・出土レベルを記録し、写真撮影を行った後、PO番号を付けながら取り上げた。PO番号が付されたものは基本的には1個体としたが、数個体を一括して取り上げたもの、周辺の小さなまとまりも含め取り上げたものも少なくない。詳細な出土状況（範囲）図については、現地で作成した出土範囲に撮影した写真をのせて作成した。したがって、周辺の小さなまとまりや破片資料は作図には反映できなかった。垂直分布図は現地で記録した出土状況（範囲）の端点レベルを位置座標としてPO毎にパソコンに入力して測量ソフトを用いて作成した。垂直分布図と土層断面図との対照した結果、現地での遺物取り上げ際に、出土層位の誤認があったことが判明した。この出土層位の誤認は、覆土1～3層として取りあげたものに多く認められ、そのほとんどが覆土4層に帰属すべきものであることが判った。このことから位置・レベルのわかる覆土1～3層出土をはじめ各層とされたPOについて見直しを行い、出土層位の変更を行った。報告にあたって各層の特徴を明確にするために層位毎に掲載・記載する。なお、復原土器が多いことから、掲載は復原土器を中心に行わざるを得なかった。記載は覆土1層、覆土3層、覆土4・5層、覆土6層、覆土7層、覆土8層、床面の順序で記載した。そして各層毎に体部の地文で細分を加えている。なお、床面からは小破片資料のみで復原土器は得られていない。

覆土1層（1～7）

Ⅱ群B-3類土器（4～6）：4は底部から開き気味に立ち上がる器形で、器面には結束羽状縄文が施されている。5は底部を欠失する。器面には斜行縄文が施されている。6は筒形の体部破片で、器面には複節の斜行縄文が施されている。

Ⅱ群B-4類土器（1～3）：1～3は緩やかな波状口縁である。1・2の口縁部文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、体部は単軸絡条体の回転文である。1の文様帯には2条の組紐状の縄線が、2は縄線が加えられている。3は口縁部文様帯区画文をもたないもの。口縁部文様帯には組紐状の縄線文が施され、縄線間に2段の綾絡文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。

Ⅱ群B-5類土器（7）：7は斜行縄文が施された底部破片。Ⅱ群B-3類土器の可能性もある。

覆土3層（8～13）

Ⅱ群B-3類土器（8～12）：8・9は波状口縁である。8は口頸部文様帯の上端を縄線、下端を半截竹管状工具内面の刺突文で区画した文様帯中位に2列の2本一組の縄線文を加え、波頂部から垂下する刺突列が加えられている。体部・口頸部文様帯は直前段反撚の縄文である。9は口頸部破片。文様帯上端は縄線、下端は貼付帯で区画され、幅広の無文地の文様帯には横位の縄線が施され、斜位の縄線文が加えられている。10は幅広の口頸部文様帯に貝殻条痕文が、体部には単軸絡条体の回転文と斜行縄文を組み合わせて施文している。11は大型の口縁部破片。口頸部文に結束羽状縄文を施した後、組紐状の縄線文で幅広の口頸部文様帯を作出している。体部は自縄自巻の縄文である。12は口頸部を欠失する。口頸部下端を3本一組の縄線で区画され、波頂部からの垂下する縄線文が加えられている。体部上半は斜行縄文、下半は直前段反撚の縄文である。

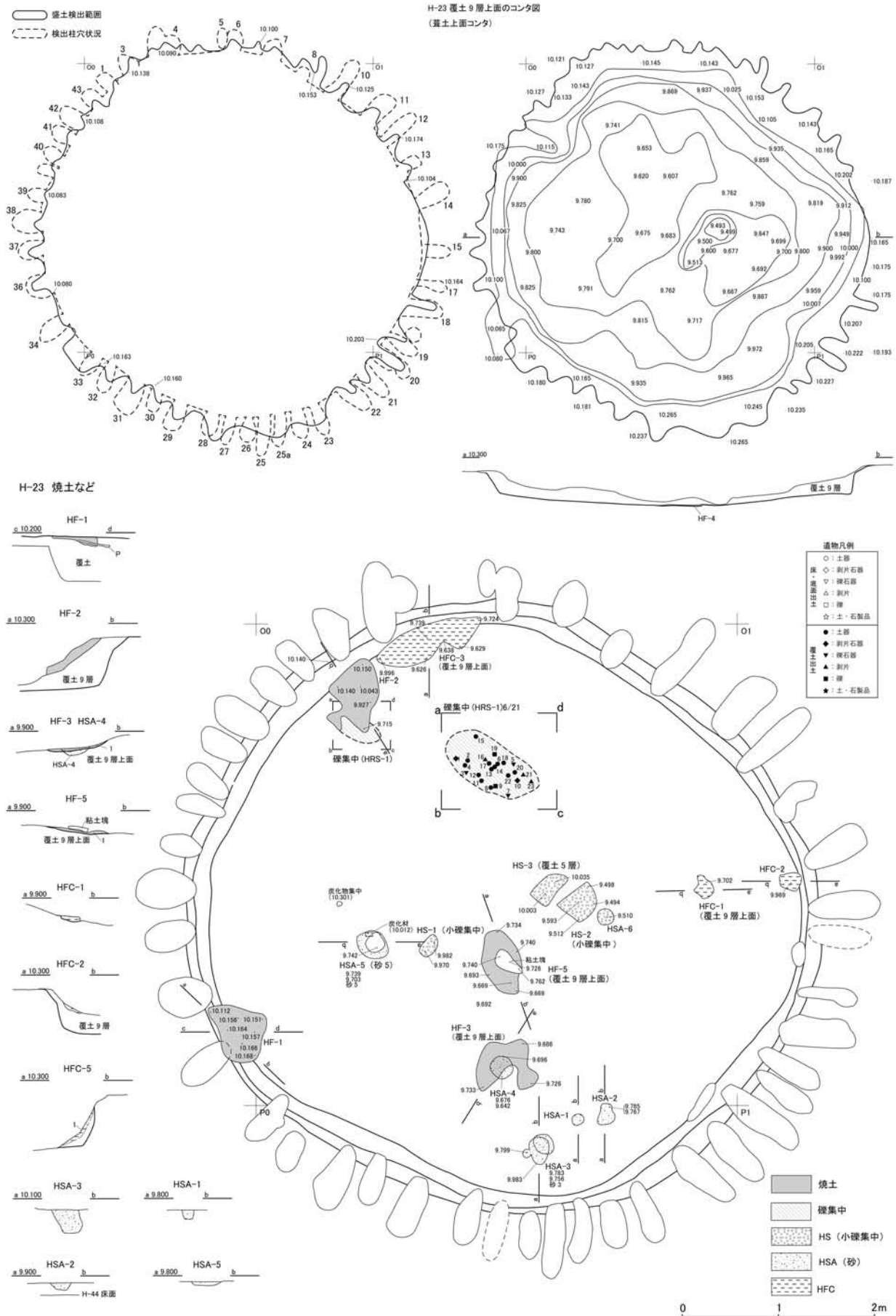
Ⅱ群B-4類土器（13）：13は緩やかな波状口縁で、口頸部文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、無文地の文様帯には口縁に沿って組紐状の縄線文が施され、波頂部下位に円形刺突文が加えられている。体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせて施文している。

覆土4・5層（14～80）

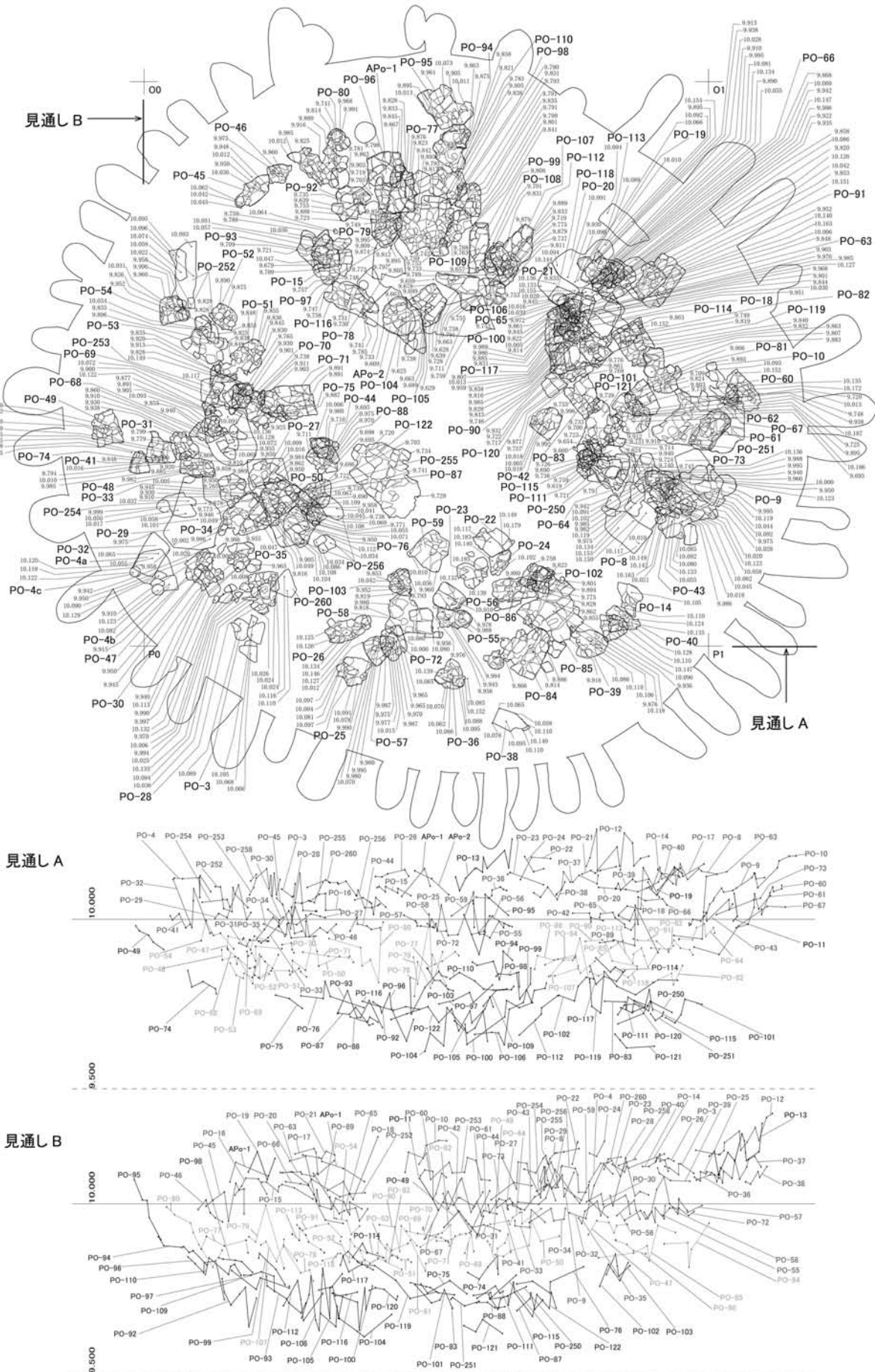
体部に縄文が施されているもの（14～24・67・68・71・76）

Ⅱ群B-2類土器（14・15）：14・15は口頸部文様帯に不整綾絡文、体部に斜行縄文が施されたもの。

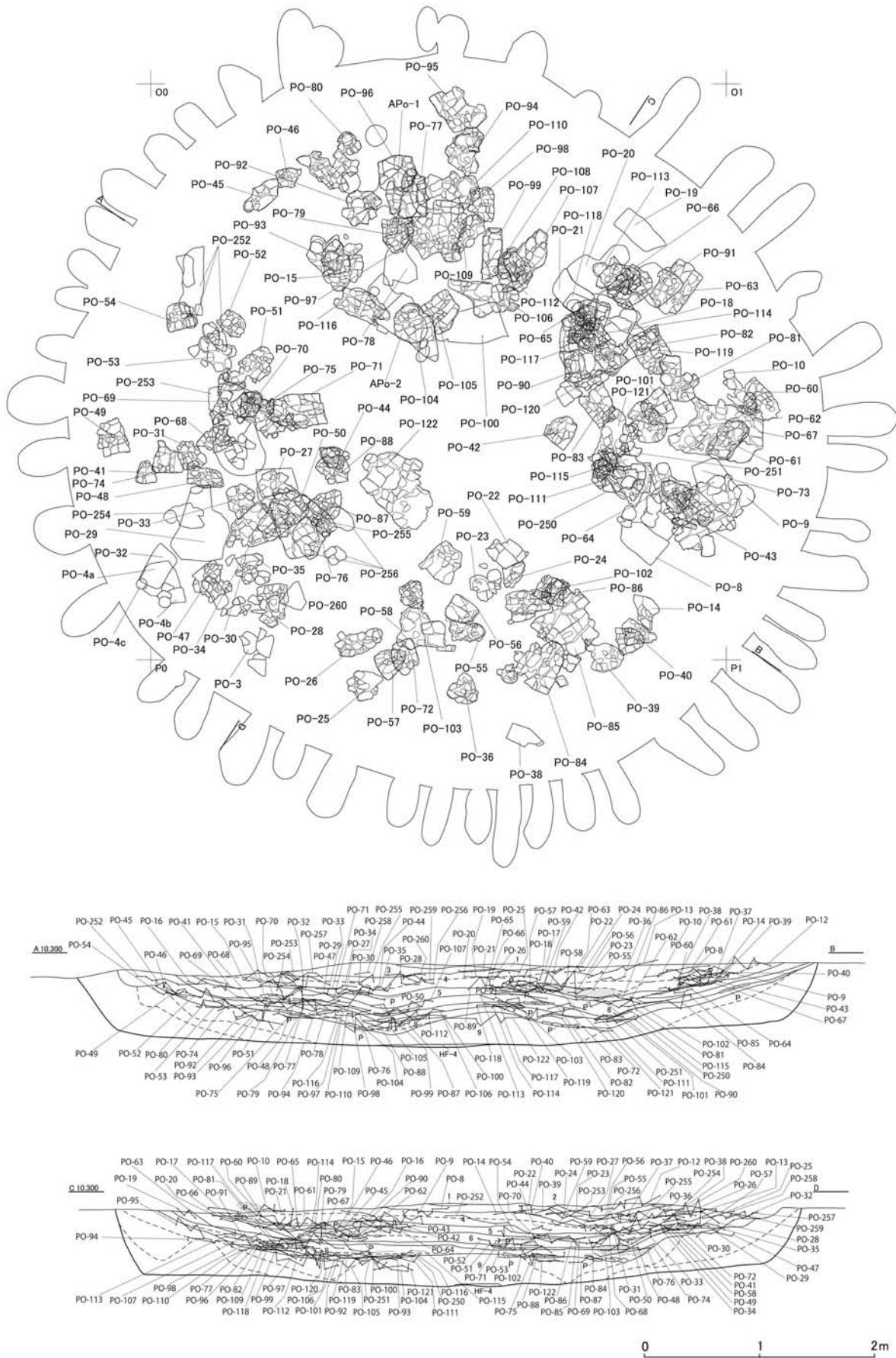
Ⅱ群B-3類土器（16～24・67・68・71・76）：16・17は無文地の口縁部文様帯に縄線が施された



図IV-78 H-23 コンタ図 焼土など



図IV-79 H-23 PO全体図



图IV-80 H-23 PO全体图 垂直分布图

もの。16の体部は横走気味の縄文である。17の体部上位には結束羽状縄文、中位に単軸絡条体の回転文、下位には直前段反撚の縄文が施されている。18は底部を欠失する。平縁で、口頸部文様帯の上下は2本一組の縄線で区画されている。口縁から垂下する「U」字状の縄線文が加えられている。口頸部には結束羽状縄文、体部には斜行縄文が施されている。19～23は縄文のみのもの、19・20・22は口頸部文様帯と体部に施文方向を変え施文されているもの。21は器面に結束羽状縄文が施されたもの。23は斜行縄文が施されたもの。24は縦走気味の縄文が施されたもの。67は体部に複節の縄文が縦位に施され、文様帯には貝殻条痕文が施されている。68の器面に結束羽状縄文が施され、口頸部を縄線文で区画している。71は斜行縄文が施されたもの。76は器面に結束羽状縄文が施されたもの。

体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの (25～33・35～41・43・69・78)

Ⅱ群B-2類土器(30):30は波状口縁である。口頸部文様帯下端は段をもつ。文様帯には不整綾絡文、体部は単軸絡条体第5類による縄文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器:(25～29・31～33・35～39):25・26は大きく開く器形の小型土器。26の口縁には3条の縄線が加えられている。27は体部上部でくびれる器形で、口縁部には付加条の縄文が施されている。28・29は口頸部文様帯に結束羽状縄文が施されたもの。31は口頸部文様帯下端が単軸絡条体の圧痕文で区画されているもの。文様帯には複節の斜行縄文が施されている。32・33は組紐状の縄線文で口頸部文様帯の上下を区画したもの。32は直前段反撚による縄文を地文とする口頸部文様帯を組紐状の縄線で区画し、縦位の組紐状の縄線文と交点に円形刺突文が加えられている。33は結束羽状縄文を地文とする口頸部文様帯の上下を3本一組の縄線で区画、波頂部から垂下する組紐状の縄線文と交点に円形刺突文が加えられている。35・36は口頸部文様帯区画帯をもたないもの。35は波状口縁で、口頸部文様帯には3本一組の組紐状の縄線文で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出し、さらに波頂部から垂下する3本一組の組紐状の縄線文が加えられている。36は無文地の口縁文様帯に3条の組紐状の縄線文が加えられている。37～39は文様帯の下端を結束羽状縄文で区画しているもの。37は無文地の文様帯に3条の組紐状の縄線文が加えられている。38の文様帯は3条の組紐状の縄線文によって区画され、文様帯には単軸絡条体の回転文が横位に加えられている。39の狭い口縁部文様帯には組紐状の縄線文が加えられ、交点に円形刺突文が加えられている。

Ⅱ群B-4類土器(40・41・43・69・78):40・41は口縁部に結束羽状縄文で区画された狭い無文地の口縁文様帯をもち、文様帯には縄線文が加えられている。41の体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されている。43は体部下半の資料。69は幅広の口頸部文様帯の下端は2本一組の縄線で区画され、文様帯には結束羽状縄文が施されている。78の幅の狭い口縁部文様帯の下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯には縄線文、体部には単軸絡条体第1A類の回転文が施されている。

体部に自縄自巻の縄文が施されたもの (34・42・75・77・80)

Ⅱ群B-3類土器(34・42・75・72・77・80):34の幅の狭い無文地の口頸部文様帯には組紐状の縄線が3本施されている。42の口縁部には結束羽状縄文が2段施されている。75は幅広の口頸部に結束羽状縄文が4段施されている。77は2列の綾絡文で区画された幅の狭い口頸部文様帯には組紐状の圧痕文が、体部には自縄自巻の縄文と結束羽状縄文を組み合わせで施文している。80は自縄自巻の縄文と結束羽状縄文を組み合わせで施文した体部破片。

体部に結節羽状縄文が施されたもの (44)

Ⅱ群B-3類土器(44):44は小型土器。2か所の波頂部をもつ波状口縁。体部上半で大きくくびれ、幅広の口頸部文様帯を作出している。体部・口頸部には結節斜行縄文が施されている。口頸部文様帯の波頂部下位に円形の穿孔が加えられ、波状口縁に沿って組紐状の縄線が加えられている。

体部に直前段反撚の縄文が施されたもの (45～66・70～74・79)

Ⅱ群B-2類土器(45)：45は大型破片。口頸部文様帯の下端は刺突が加えられた細い貼付帯で区画され、文様帯には不整綾絡文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器 (46～66・70・73・74・79)

区画帯をもたないもの(46・47・74)：46は口頸部に貝殻条痕文が施されているもの。47は口頸部に直前段反撚による縄文が方向を変えて施文されたもの。口頸部は横走気味に、体部は縦走気味に施されている。74は幅広の口頸部に結束羽状縄文が3段施され、波頂部から垂下する2本一組の縄線文が加えられている。体部上半と下半で施文方向を変えている。

口頸部文様帯が区画帯によって区画されているもの(48～64・73)：48・49は口頸部文様帯下端に区画帯をもつもの。いずれも直前段反撚による縄文が方向を変えて施文されている。48は3条の縄線文で、49は単軸絡条体の圧痕文で区画されている。54はさらに縦位の絡条体の圧痕文が加えられたもの。55は波頂部間に斜位の単軸絡条体の圧痕文が加えられ、口縁に波頂部を頂点とする鋸歯状の文様構成を作出している。50は口頸部文様帯の上下端に区画帯をもつもの。直前段反撚による縄文が方向を変えて施文されている。59は小波状口縁。無文地の文様帯に2本一組の単軸絡条体の圧痕文で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出し、さらに上下2段に分割される横環する圧痕文が加えられている。51～53・56～58は口頸部文様帯の上下を区画し、波頂部から垂下する縄線が加えられているもの。体部・口頸部文様帯に直前段反撚による縄文が方向を変えて施文され、区画帯として縄線文と単軸絡条体の圧痕文が用いられている。51・52は縄線で区画されたもの。53の区画帯は縄線文と単軸絡条体の圧痕文が組み合わされているもの。交点に円形刺突文が加えられている。56～58は単軸絡条体の圧痕文で区画されたもの。52・53・57の交点には円形刺突文が加えられている。60の口頸部は直前段反撚による縄文を地文とし、幅広の口頸部文様帯には縄線文と円形刺突文が加えられている。61の口頸部は直前段反撚による縄文を地文とし、縄線間に結束羽状縄文が加えられた2本一組みの縄線が3段施されている。62は口頸部文様区画帯及び文様帯に、結束羽状縄文と2列の半截竹管状工具内面の刺突列が施されたもの。63・64は波状口縁で、口頸部文様帯に結束羽状縄文が施されたもの。63の文様帯下端は縄線で区画され、波頂部直下に円形刺突文が加えられている。64は横環する直前段反撚の縄文で文様帯下端が区画され、体部に縦位の結束羽状縄文が加えられている。73は口頸部文様帯の上下を縄線文で区画し、波頂部から垂下する縄線が加えられている。

65・66は文様帯をもたないもので、器面に直前段反撚による縄文が施されている。70の口頸部下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯・体部には直前段反撚による縄文は方向を変えて施文されている。79は体部破片。口頸部文様帯の下端は2本一組の縄線文間に円形刺突文が加えられた縄線文で区画され、口頸部には結束羽状縄文が施されている。72は口頸部破片。直前段反撚による縄文が施されている。体部の文様構成は不明である。

覆土6層 (82～132)**体部に縄文が施されているもの (82・85～100・125～127)**

Ⅱ群B-2類土器(82～87)：82・83は口頸部文様帯に不整綾絡文が施されたもの。82の体部には複節の斜行縄文、83の体部上半には合撚り縄文、下半には単軸絡条体第5類の回転文が施されている。84～87は口頸部文様帯の区画が貼付帯のもの。84の貼付帯には縄線文と爪形文が加えられている。85は3か所の波頂部をもつ波状口縁。貼付帯には刺突が加えられている。86は波状口縁。貼付帯には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられ、波頂部から垂下する縄線が加えられている。87の幅広の口頸部文様帯は、指頭圧痕が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯には入れ子の弧状の縄線を

組み合わせて波頂部を頂点とした菱目状の文様構成を作出している。体部には縦走気味の縄文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(88～99・126・127)：88は体部上半にLRの斜行縄文、下半にRLの斜行縄文が施されたもの。口頸部文様帯には貝殻条痕文が加えられている。89は器面に斜行縄文が施されたもの。頸部下端に縄線文が加えられ、体部と区画している。90は波状口縁である。器面に斜行縄文が施され、波状口縁に沿って口頸部に縄線文が施されたもの。91～96は縄文のみが施されたもの。91～93は斜行縄文、94・95は結束羽状縄文、96は合撚りの縄文が施されたもの。94・95は複節である。97・98は縄文と他の縄文とを組み合わせているもの。97は斜行縄文と直前段反撚の原体による縄文が組み合わせて施文している。文様帯には単軸絡条体第5類による縄文が施されている。98は単軸絡条体の回転文と組み合わせたもので、口縁部には入れ子の弧状の縄線文が施されている。99は体部下半である。126は器面に複節の斜行縄文を施した後、口頸部下端を沈線で区画している。127は口頸部に直前段反撚の原体による縄文、体部に複節の斜行縄文を施した後、頸部に沈線文と刺突文が加えられている。

体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの(100～104・128)

Ⅱ群B-2類土器(100～103)：100～103の体部は単軸絡条体第5類の回転文である。100・101は波状口縁で、口頸部文様帯下端は縄線文で区画され、波頂部から垂下する縄線が加えられている。文様帯は不整綾絡文である。102は器面全面に単軸絡条体第5類の回転文が施されたもの。103は底部破片。

Ⅱ群B-3類土器(104・128)：104の口頸部には斜行縄文が施され、体部は単軸絡条体第1類の回転文である。128は口頸部破片。口頸部には単軸絡条体第1類の回転文を地文とし、斜行縄文・縄線文が加えられている。

体部に直前段反撚による縄文が施されたもの(105～123・129～132)

Ⅱ群B-2類土器(105・106)：105・106は頸部下端に縄文が加えられた貼付帯が施されたもの。波状口縁ある。口頸部と体部に直前段反撚による縄文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(107～123・129～132)：107は波状口縁で、器面に直前段反撚による縄文を施した後、頸部下端に2条の沈線が加えられている。108の口頸部文様帯下端は2条の縄線で区画され、文様帯・体部に直前段反撚による縄文が施されている。109～112は口頸部文様帯下端に区画文が施され、文様帯には縦位に区画文が加えられているもの。109・110は沈線文によるもの。111は縄線によるもの。112の文様帯の地文は貝殻条痕文で、文様帯区画文は微隆起帯、3本一組の縄線が波頂部から垂下するもの。110の体部下半には斜行縄文が加えられている。113・114は波状口縁である。器面には直前段反撚による縄文が施されている。口頸部文様帯は縄線文で区画され、波頂部から垂下する縄線文が加えられている。113の文様帯下端の区画文に円形刺突文が加えられている。114の文様帯に縄線文が加えられ、波頂部を頂点とする菱目文が作出され、さらに頸部中位を横環する縄線文、交点に円形刺突文が加えられている。115は波状口縁で、器面に直前段反撚による縄文を施した後、口頸部文様帯に8条の縄線文が施され、波頂部から垂下する3本一組の縄線が加えられている。116は口頸部文様帯下端を上下に縄線が加えられた貼付帯で区画され、3本一組の山形の縄線文と横位の縄線文が加えられている。117は小型土器で波状口縁。口頸部文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には体部と異なる方向のものが施文され、波頂部から3本一組の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。118・119は口頸部文様構成が類似するもので、118は鉢、119は筒形のものである。波状口縁、口頸部文様帯は2本一組の単軸絡条体の圧痕文で区画され、波頂部から垂下する圧痕文と斜位・横位の圧痕文を組み合わせ山形の文様構成を作出している。120の口頸部文様帯下

端は、刺突が2列加えられた貼付帯と単軸絡条体の圧痕文で区画され、入れ子の単軸絡条体の圧痕文が波頂部を頂点とする山形に、体部上半は斜位に、下半は縦位に施文されている。121は波状口縁である。器面に直前段反撚による縄文を施した後、口頸部文様帯は貼付帯と3本一組の単軸絡条体の圧痕文で区画され、文様帯には単軸絡条体の圧痕文で波頂部を頂点とす菱目状の文様構成を作出している。122は筒形の器形で、器面に直前段反撚による縄文を施した後、口縁部に縄線文が加えられたもの。123は器面に直前段反撚による縄文が施されたもの。130は口頸部破片。口頸部文様帯上下が単軸絡条体の圧痕文で区画されたもの。129は方向の異なる直前段反撚の縄文が施され、口頸部文様帯下端に爪形文が加えられた2本一組の縄線文で区画され、波頂部から3本一組の縄線が加えられている。131・132は頸部破片。131には口頸部文様帯下端を区画する2本一組の縄線文が認められる。132の口頸部文様帯の下端は単軸絡条体の圧痕文が加えられた貼り付けによって区画され、直前段反撚の縄文を地文とする文様帯には単軸絡条体圧痕文が加えられている。尚、117・120・121・132については貼付帯が認められることからⅡ群B-2類土器に類似する。しかし、文様構成から本類で扱った。

体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの (124)

Ⅱ群B-3類土器 (124・125) : 124は体部に多軸絡条体の回転と斜行縄文が施され、無文地の口頸部文様帯には貝殻条痕上に単軸絡条体の圧痕文が施されている。

体部の縄文が不明なもの (125)

Ⅱ群B-3類土器 (125) : 125の口頸部文様帯下端は縄線によって区画され、文様帯には不整綾絡文が施されている。

覆土7層出土 (81)

Ⅱ群B-3類土器 (81) : 81は平縁。口頸部文様帯には不整綾絡文、体部は直前段反撚による縄文である。

覆土8層出土 (133～206)

体部に縄文が施されたもの (133～165・199・204・206)

Ⅱ群B-2類土器 (133～145・199) : 133は口頸部下端を2条の縄線で区画され、口頸部文様帯に不整綾絡文が施されたもの。134～136・199は口頸部文様帯下端に区画文をもたないもの。口頸部文様帯に不整綾絡文が施されている。136は6か所の波頂部をもつ。134・136は複節の斜行縄文である。199は破片資料で、体部に複節の縄文が不規則に施文されている。137～145は貼付帯によって区画されているもの。137～140は文様帯に不整綾絡文が施されている。137の貼付帯には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。140は波状口縁で、波頂部から垂下する3本一組に縄線文が加えられている。138の体部には合撚りによる縄文が施されている。141は文様帯に無節の結束羽状縄文が施され、貼付帯には指頭圧痕文が加えられている。142・143は波状口縁で口頸部文様帯には斜行縄文が施されたもの。142の貼付帯上に綾絡文が加えられている。144は波状口縁である。円形刺突文で区画された頸部文様帯には縄線で鋸歯状の文様構成を作り出している。体部は貝殻条痕文と不規則な斜行縄文が施されている。145は波状口縁である。口頸部文様帯の下端は縄線文が加えられた貼付帯で、上端は口縁部に沿って縄線が加えられている。

Ⅱ群B-3類土器 (146～148・105～165・204・206) : 146・147の口頸部文様帯は縄線が加えられた低い貼付帯で口頸部下端を縄線で上端を区画し、文様帯には単軸絡条体の圧痕文で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出した後、頸部中央部に横環する圧痕文が加えられている。148・154は低い貼付帯で口頸部文様帯を区画し、幅広の無文地の文様帯を区画しているもの。148の文様帯には垂下する3本一組の縄線、2本一組の連弧文風の縄線文、横環する縄線文が加えられている。体部は複

節の斜行縄文が施されている。154の無文地の文様帯には6条の横環する縄線と波頂部から垂下する5本一組の縄線文が加えられている。146～148・154は貼付帯で文様帯が区画されたもので、本来Ⅱ群B-2類土器として扱うべきものかもしれないが文様帯の文様構成から本類で扱った。149は口縁部に3条の縄線文が施されたもの。体部上半に斜行縄文、下半に合攪りによる縄文が施されている。150は縄線文で口頸部文様帯を区画し、波頂部及び波頂部中間から垂下する2本一組の縄線文が加えられている。151・152は口頸部文様帯の上下を縄線文で区画したもの。151は斜行縄文、152は文様帯に無節と単節の結束羽状縄文が菱目状に施されている。153は口頸部文様帯の上下を縄線文で区画し、垂下する縄線が加えられたもの。155は縄端の圧痕で区画された文様帯及び体部下半に単軸絡条体第5類の回転文が施されている。156～158は無文地の口頸部文様帯に縄線文が加えられたもの。156は体部に結束斜行縄文、157は体部に不規則な縄文が施されている。158は結束羽状縄文と単軸絡条体の回転文を組み合わせて施文している。159・160・163は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施されたもの。159は3か所の波頂部をもつ。160の体部は複節の斜行縄文と単軸絡条体の回転文を組み合わせて施文している。163は底部・口縁を欠失する資料。体部に複節の斜行縄文が施されている。161・162は縄文のみもの。161は複節の斜行縄文を施文方向を変えて施している。162は体部上半に斜行縄文、下半に単軸絡条体の回転文が施文されている。164・165は底部破片。164は斜行縄文と単軸絡条体の回転文が施文されている。165は斜行縄文が施されたもの。204は口縁部破片。器面に斜行縄文が施されている。206は結束羽状縄文が施された体部破片。

体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの（166～183・200・205）

Ⅱ群B-2類土器（166・170～173・181・200・205）：166・200は口頸部文様帯下端に貼付帯が施されたもの。166は底部から開く器形で、幅広の口頸部文様帯は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には不整綾絡文、体部には単軸絡条体第5類の回転文が施されている。200は破片資料。縄の圧痕文が加えられた貼付帯で口頸部文様帯が区画されている。文様帯には不整綾絡文、体部には無節の単軸絡条体の回転文が施されている。170～173・181は体部に単軸絡条体第5類の回転文が施文されているもの。170・171は口頸部文様帯に単軸絡条体第5類の回転文が施されている。170は波状口縁である。口頸部文様帯下端を2条の縄線文で区画され、波頂部から3本一組の縄線文が加えられている。171は区画帯をもたないもので、口縁部には不整綾絡文が施されている。172は波状口縁で、口頸部文様帯下端を縄線文で区画し、横位に単軸絡条体第5類の回転文が施文されている。173は口頸部文様帯の下端を貼付帯と単軸絡条体圧痕文で区画し、斜行縄文を地文とする文様帯に単軸絡条体圧痕文が加えられている。181は底部である。205は単軸絡条体第5類の回転文が施されている体部破片。上部は横位に、下位は縦位に施文されている。

Ⅱ群B-3類土器（167～169・174～180・182・183）：167～169は口頸部文様帯下端に貼付帯が施され、体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの。167・168は口頸部文様帯に不整綾絡文が施されている。167は文様帯には筒形、口頸部文様帯は上下に縄線文が加えられた貼付帯で区画されている。168は文様区画帯直下及び文様帯に斜行縄文が加えられ、文様帯には綾絡文が加えられている。169は波状口縁である。無文地の口頸部文様帯は指頭の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には波頂部を頂点とする鋸歯状の縄線文が施され、横走する縄線が加えられている。これはⅡ群B-2類土器の可能性もある。174・175は口頸部文様帯に斜行縄文が施されたもの。175は底部付近に斜行縄文が加えられている。176は波状口縁で、口頸部文様帯に斜行縄文を施した後、文様帯下端に2条の縄線文が加えられている。177は波状口縁で、口頸部文様帯に斜行縄文を施した後、文様帯には口縁部に沿って6条の縄線文が施され、波頂部から垂下する5条の縄線文が加えられている。178

は無文地の口頸部文様帯に3本一組の鋸歯状の縄線文を施した後、横位の縄線文が加えられている。179は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施されたもの。体部には無節の単軸絡条体の回転文が施されている。180は口頸部文様帯にくびれをもち、下端に肩をもつ器形で、肩部分に4条の縄線文が加えられている。182・183は器面に単軸絡条体の回転文が施文された体部下半である。

体部に直前段反燃による縄文が施されたもの（184～197）

Ⅱ群B-2類土器（184～187）：184～187は口頸部文様帯が貼付帯で区画されているもの。184～186の貼付帯は上下に縄線文が加えられている。184・185の文様帯には不整綾絡文が施されている。186の口頸部文様帯は上下を縄線で区画され、無文地の文様帯に入れ子の鋸歯状の縄線文が施されている。187は指頭の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、口頸部文様帯には貝殻条痕文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器（188～197）：188は口頸部文様帯の下端部に体部の縄文と異なる方向に施文された縄文がわずかに認められ、文様帯には貝殻条痕文が施されている。貼付帯の有無を除き器形・文様構成は187に類似する。189は口頸部文様帯に体部と異なる方向の縄文が施され、文様帯下端に馬蹄形圧痕文状の圧痕文が加えられている。190・191は波状口縁で、口頸部文様帯下端部が区画され、口縁部から垂下する文様が加えられたもの。190は縄線、191は単軸絡条体の圧痕で施文されている。192～196は口頸部文様帯の上下が区画され、口縁部から垂下する文様が加えられたもの。192・193・195は区画文のみが施されている。195は文様帯下端の区画文に円形刺突文が加えられている。194・196は文様帯内に「X」字状の文様構成が加えられている。192・194は縄線文で、193・195・196は単軸絡条体の圧痕文で施文されている。192は体部下半に複節の縦走する縄文が加えられている。197は口頸部文様帯下端が3本一組の縄線で区画され、口縁部から垂下する縄線文が加えられたもの。

体部に多軸絡条体の回転文が施されたもの（198・203）

Ⅱ群B-2類土器（198）：198の口頸部文様帯は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯の上端は縄線文で区画され、無文地の文様帯内に入れ子の鋸歯状の縄線文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器（203）：203は口頸部破片。無文地の口頸部文様帯に縄線文が施され、体部に斜位の多軸絡条体の回転文が施されている。

体部文様が不明のもの（201・202）

Ⅱ群B-3類土器（201・202）：201は口頸部文様下端を縄線によって区画され、文様帯には不整綾絡文が施されている。202の同一個体が覆土6層（128）から出土している。

床面及び柱穴状ピット等（207～216）：208・209・211・213・215・216は床面、207・210・212・214は柱穴状ピット（HP）出土である。207・208はⅡ群A類土器、他はⅡ群B-2類土器である。

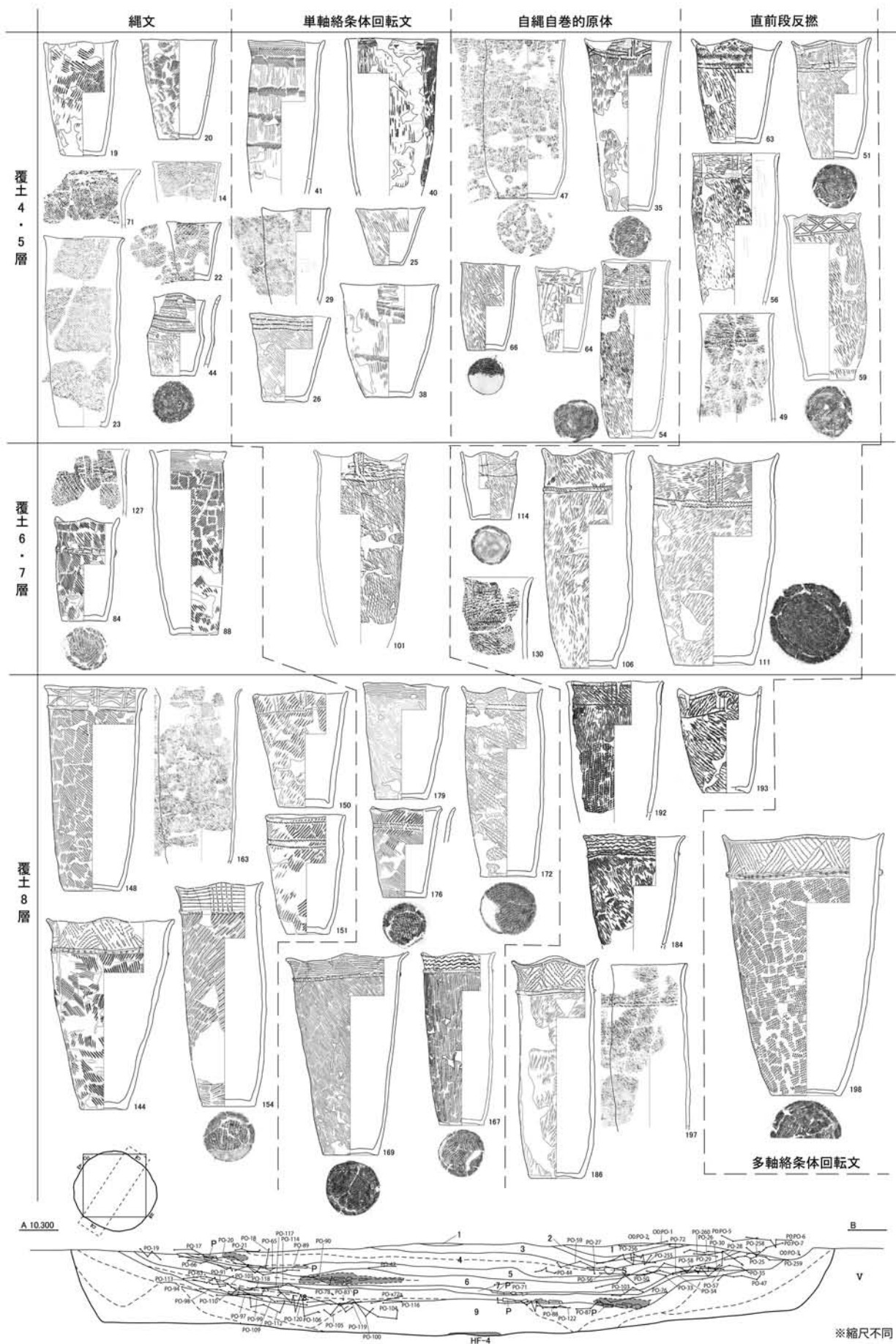
Ⅱ群A類土器（207・208）：207は口縁部破片。口唇の断面は外斜で、刻目文は加えられている。器面には縄端によるループ文が施されている。208は縄端によるループ文が施された体部破片。

Ⅱ群B-2類土器（209～216）：209～211は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。212は多軸絡条体の回転文が施されもの。213・215は複節の斜行縄文、214は単節の斜行縄文が施されもの。216単軸絡条体の圧痕文が施された体部破片。

（小括）覆土1層から得られた資料は少ない。出土したⅡ群B-4類土器は口頸部文様帯が結束羽状縄文で区画され、幅の狭い文様帯に縄線・組紐状の縄線で、体部は単軸絡条体の回転文が加えられたものを主体とする。覆土3層から得られた資料は少ない。覆土1層に類似したⅡ群B-4類土器とⅡ群B-3類土器が出土した。覆土4・5層からは多くの資料が得られた。Ⅱ群B-3類土器が主体である。Ⅱ群B-3類土器の中にはⅡ群B-4類土器への変遷の過程を辿ることのできるような資料（35～39・60～64）もまとまって出土している。覆土6・7層からは多くの資料が得られた。Ⅱ群B-

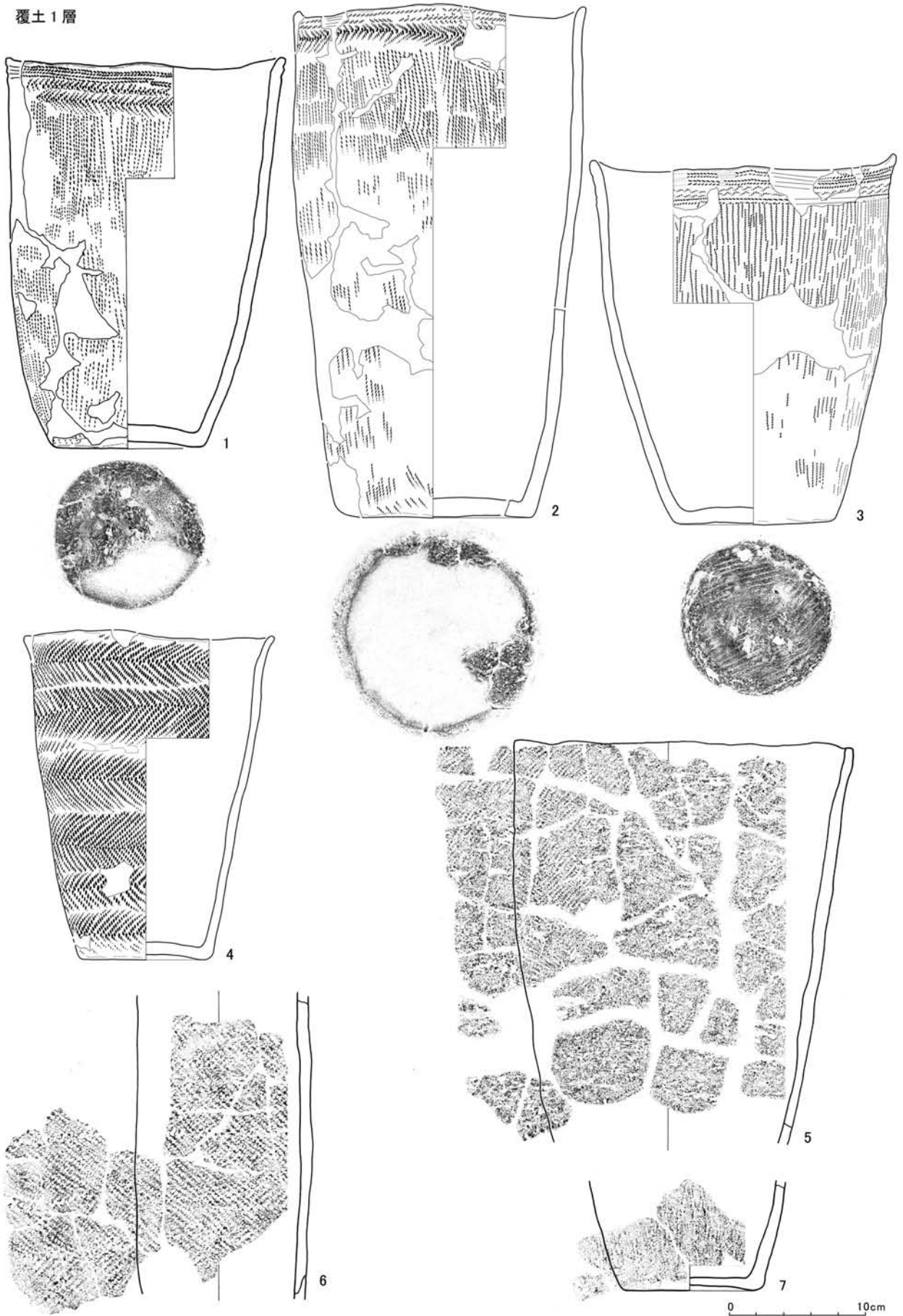


図IV-81 H-23 PO出土状況図 A-Bセクションと土器



図IV-82 H-23 PO出土状況図 C-Dセクションと土器

覆土 1 層

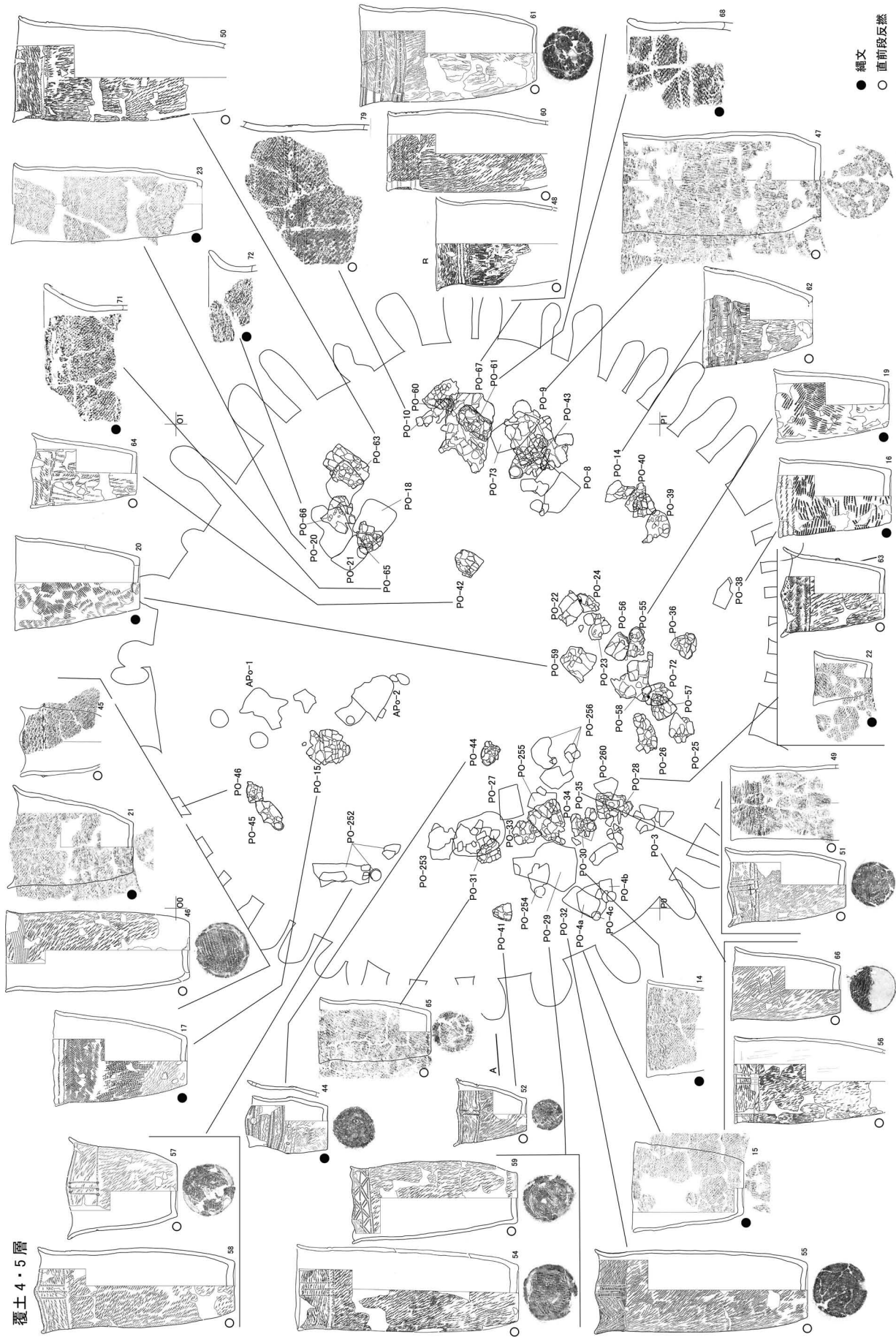


图IV-83 H-23 土器 (1) 覆土 1 層

覆土3層



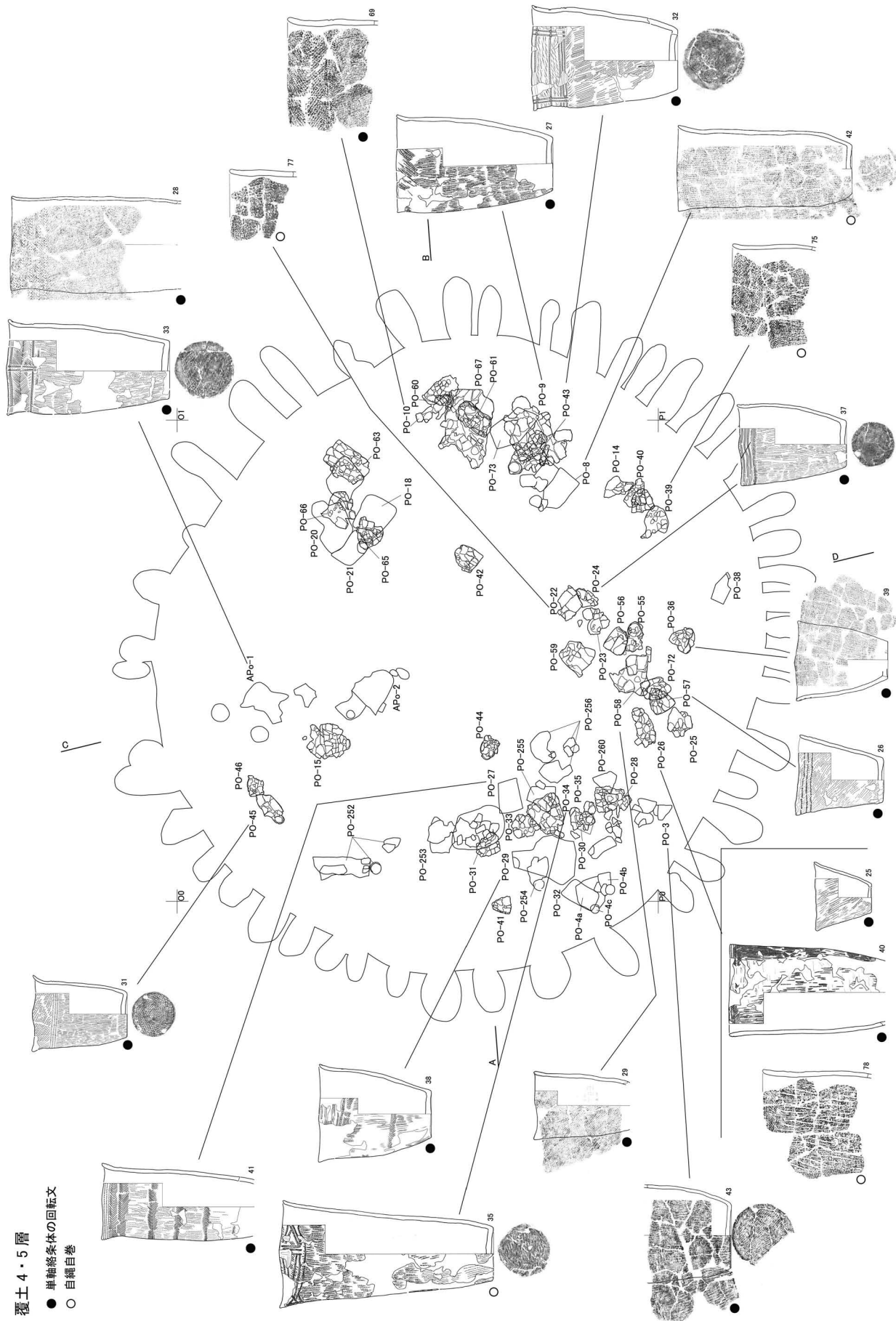
图IV-84 H-23 土器 (2) 覆土3層



图IV-85 H-23 PO出土状况图 覆土4・5層 縄文・直前段反燃

覆土4・5層

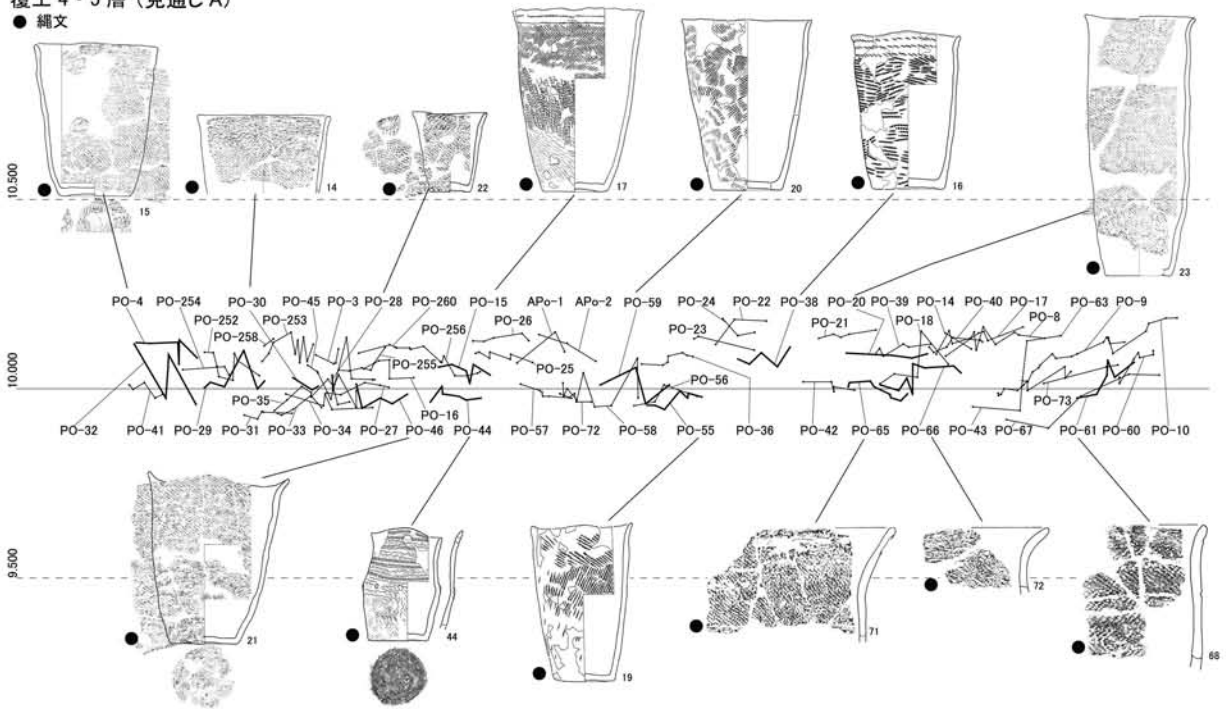
- 単軸絡糸体の回転文
- 自縷自卷



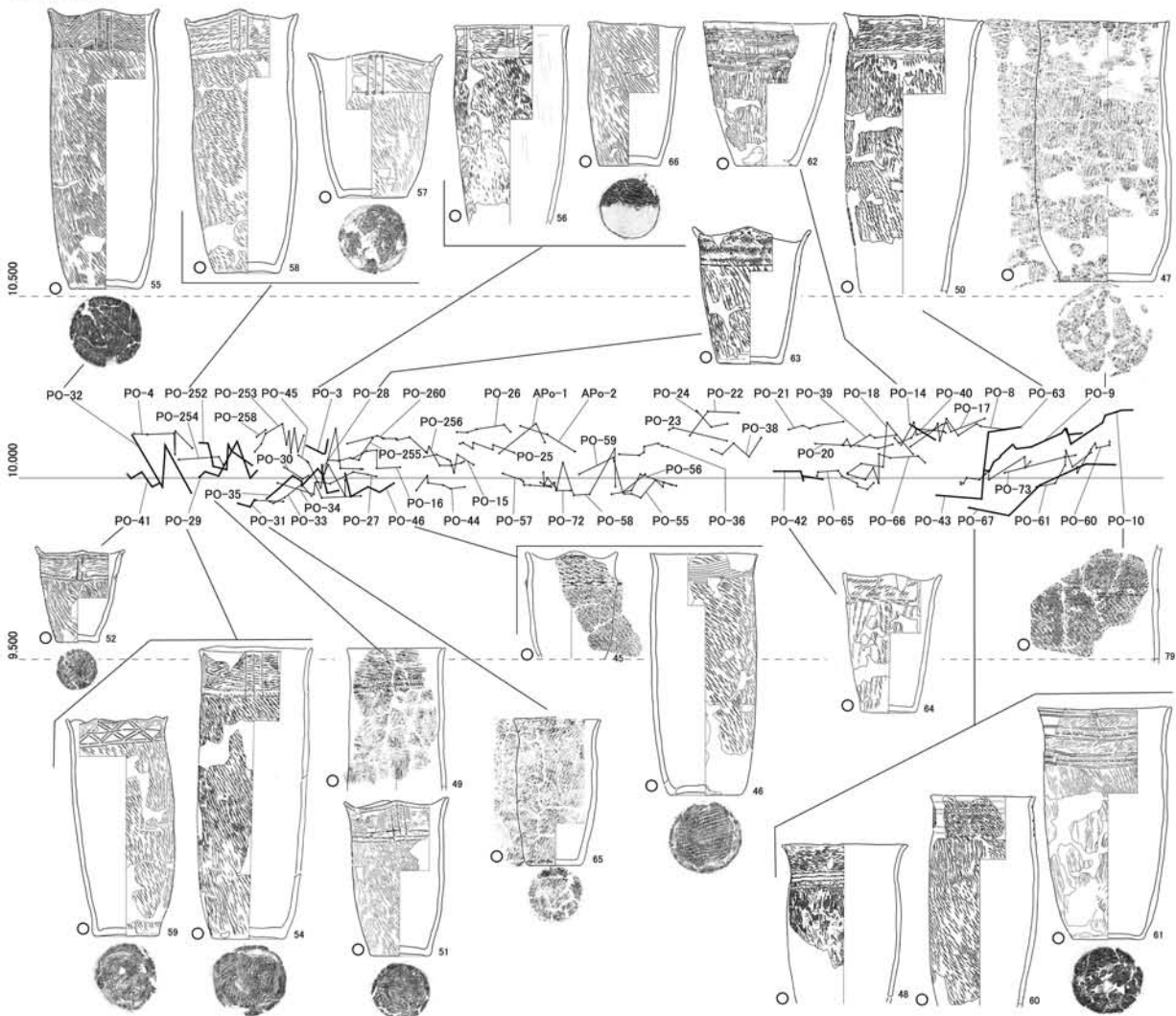
図IV-86 H-23 PO出土状況図 覆土4・5層 自縷自卷・単軸絡糸体の回転文

覆土 4・5層 (見通しA)

● 縄文



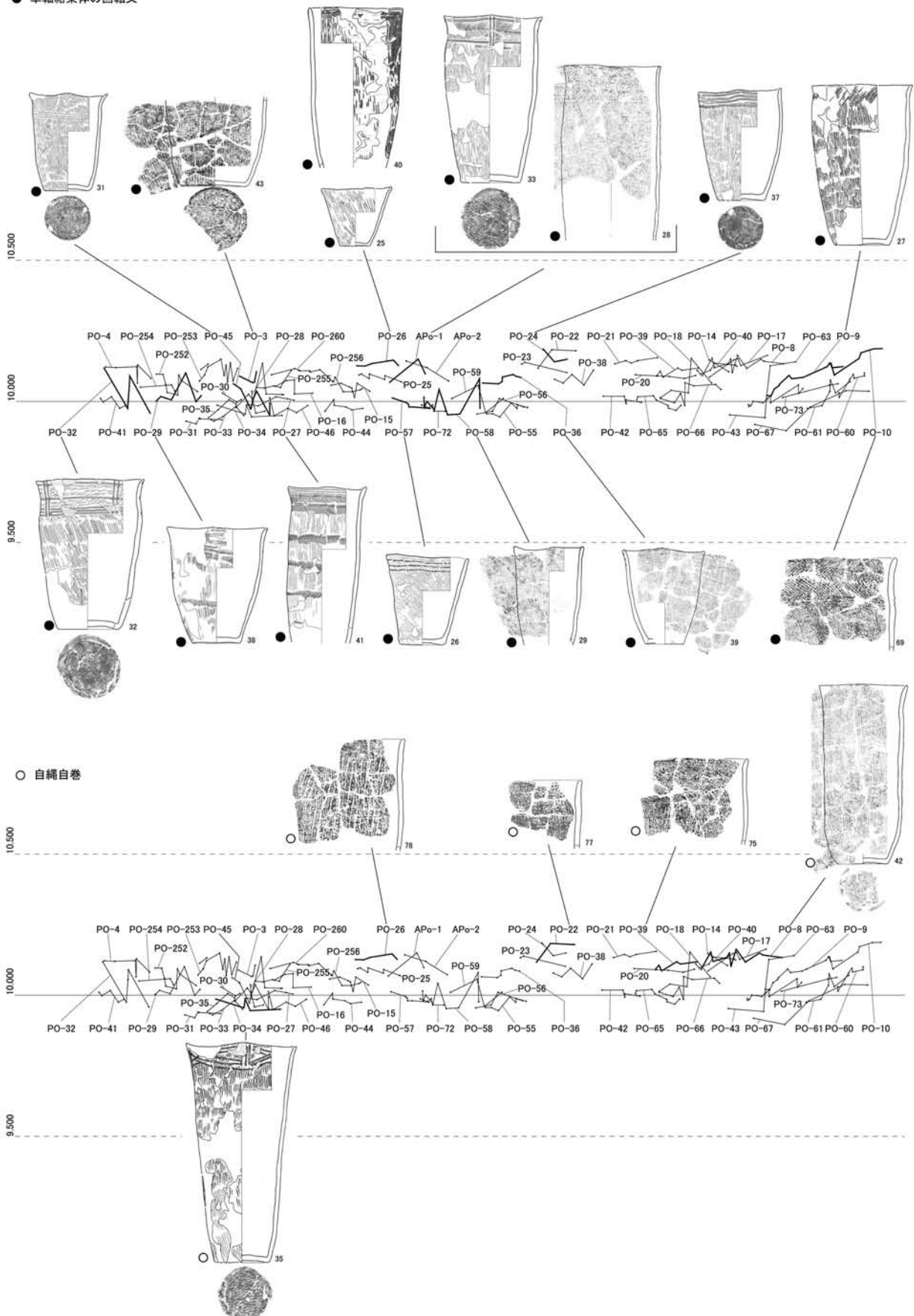
○ 直前段反燃



図IV-87 H-23 PO出土状況図 覆土 4・5層 垂直分布図 縄文・直前段反燃

覆土 4・5層 (見通しA)

● 単軸絡条体の回転文



図IV-88 H-23 PO出土状況図 覆土4・5層 垂直分布図 自縄自巻・単軸絡条体の回転文

覆土 4·5 層



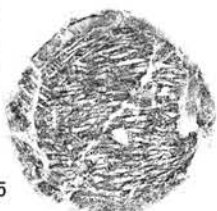
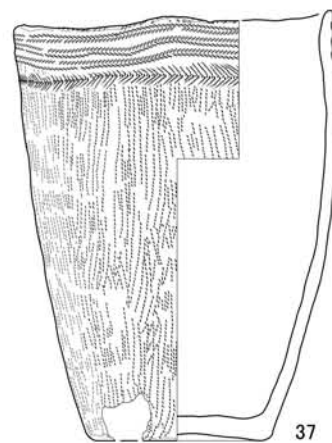
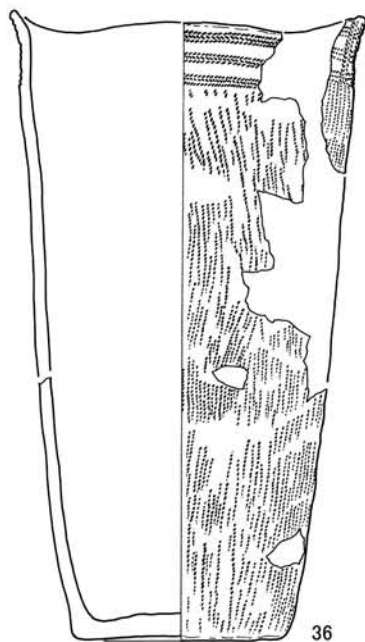
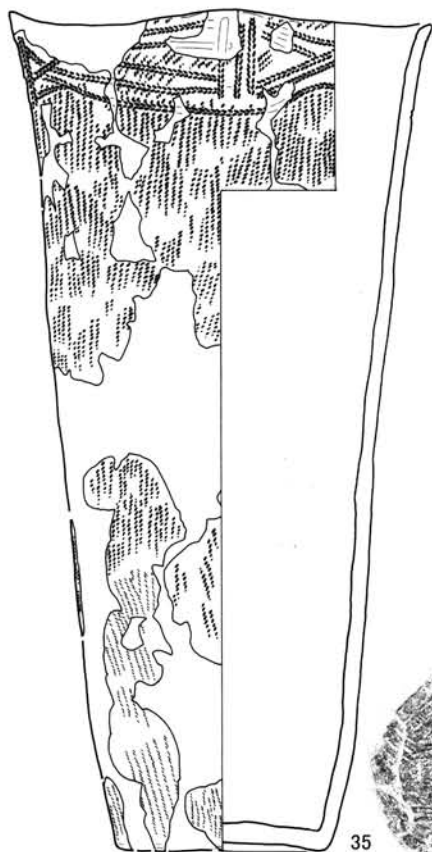
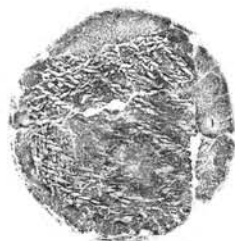
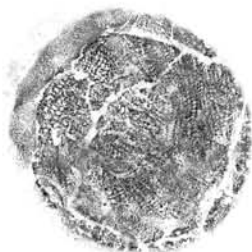
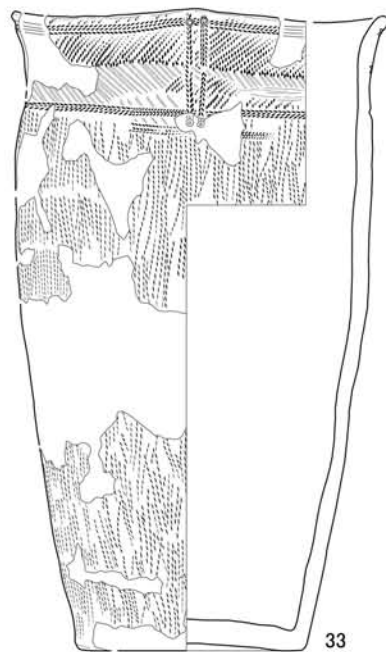
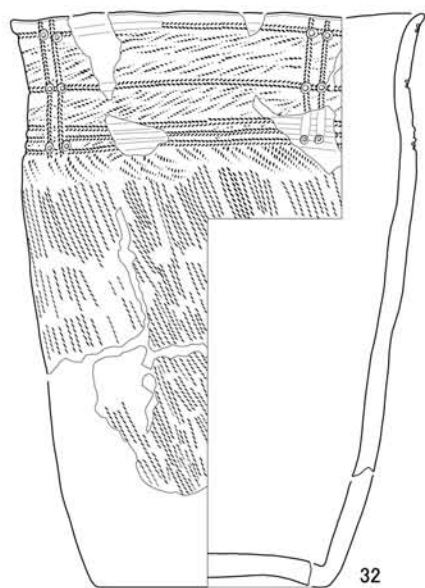
图IV-89 H-23 土器 (3) 覆土 4·5 層

覆土 4・5層



图IV-90 H-23 土器 (4) 覆土 4・5層

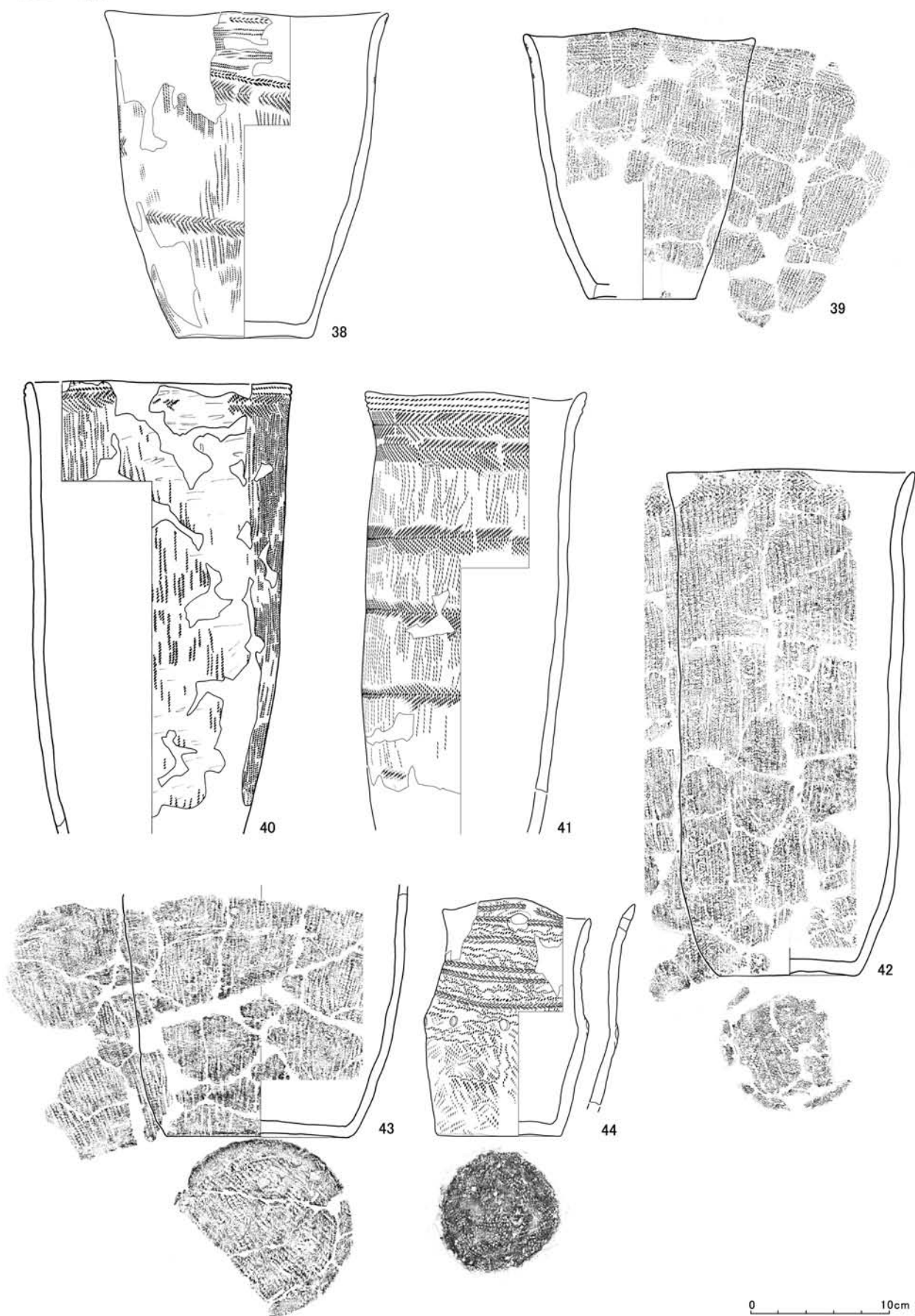
覆土 4·5 層



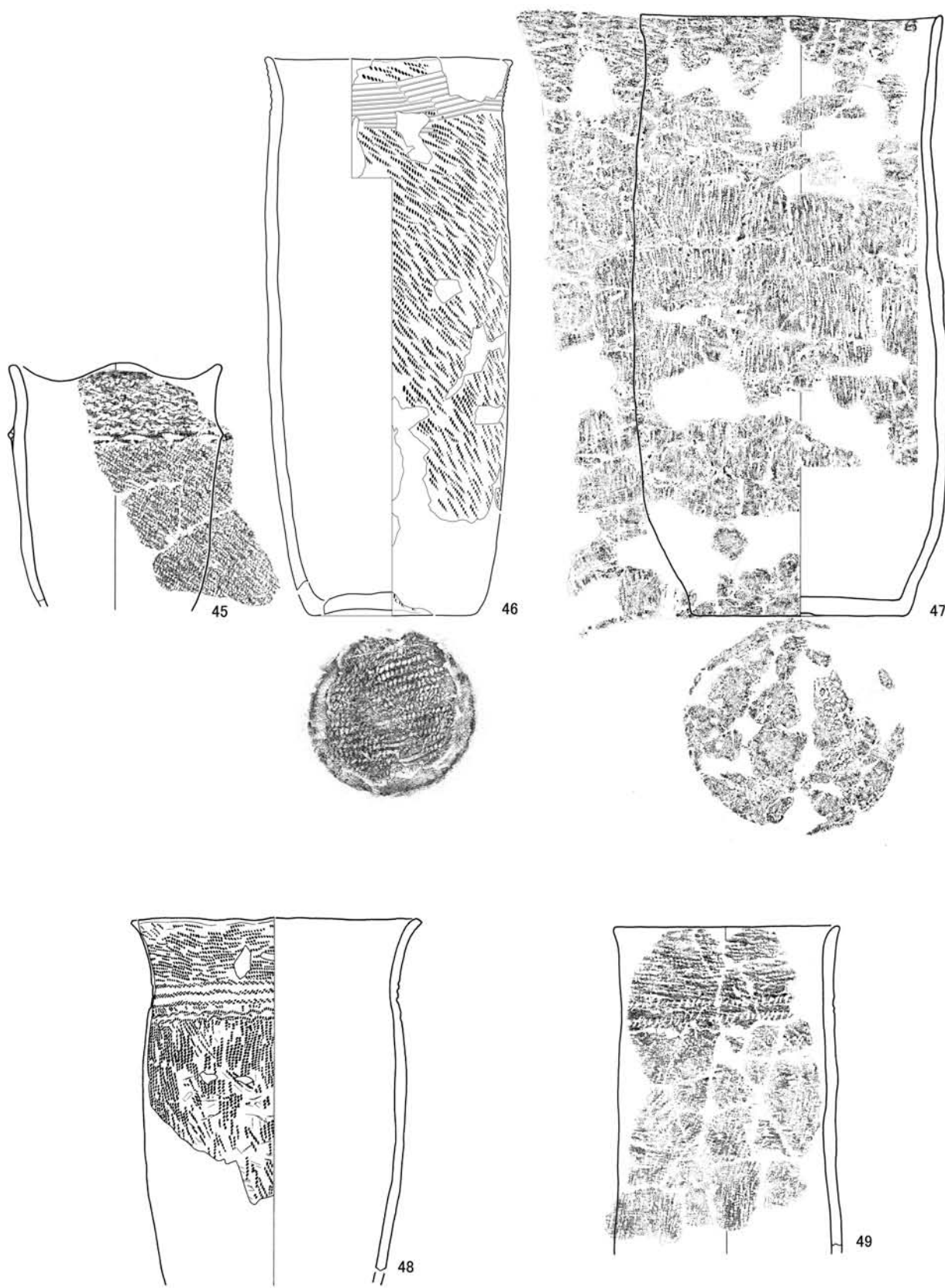
0 10cm

图IV-91 H-23 土器 (5) 覆土 4·5 層

覆土 4・5層

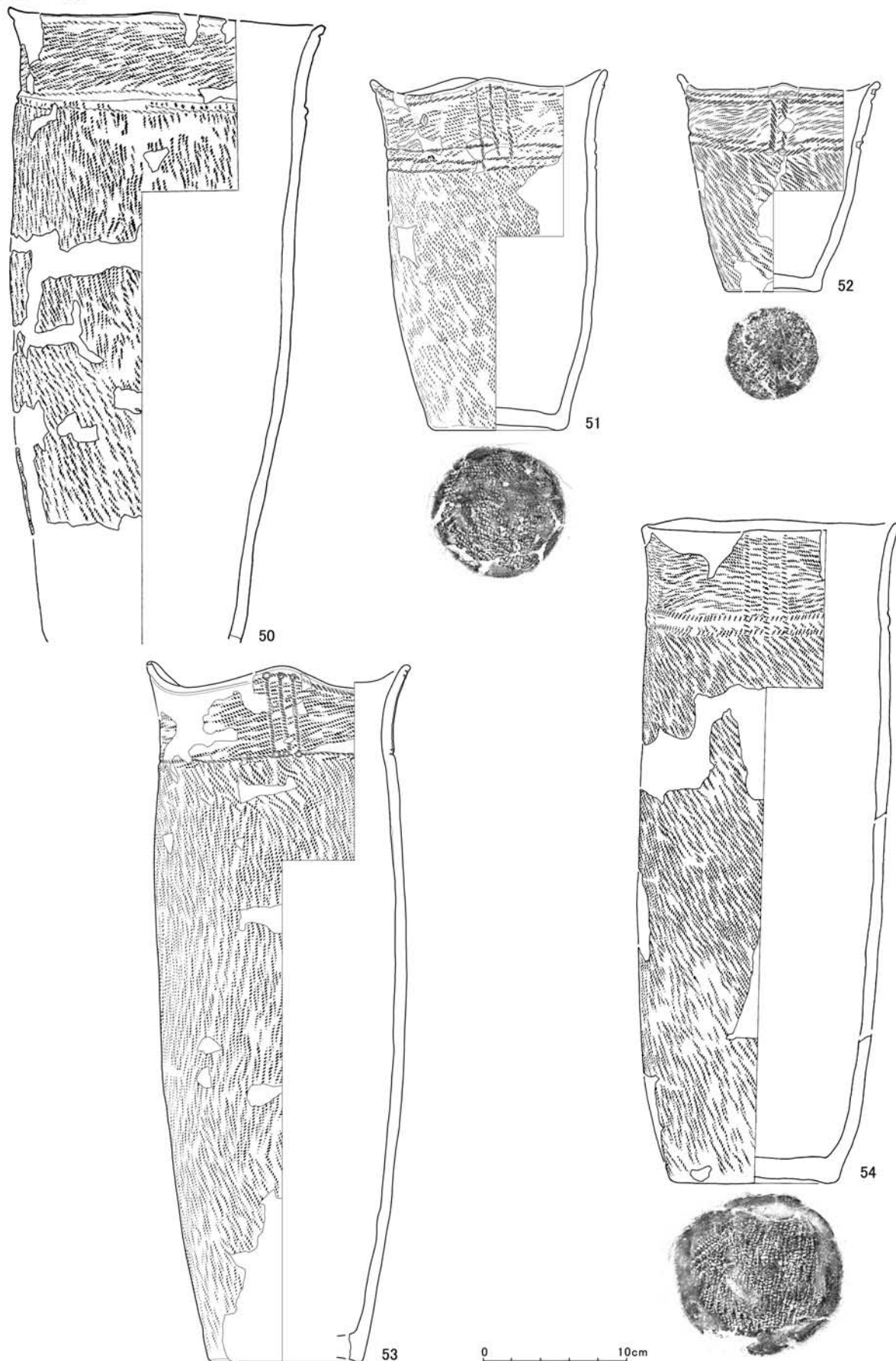


图IV-92 H-23 土器 (6) 覆土 4・5層



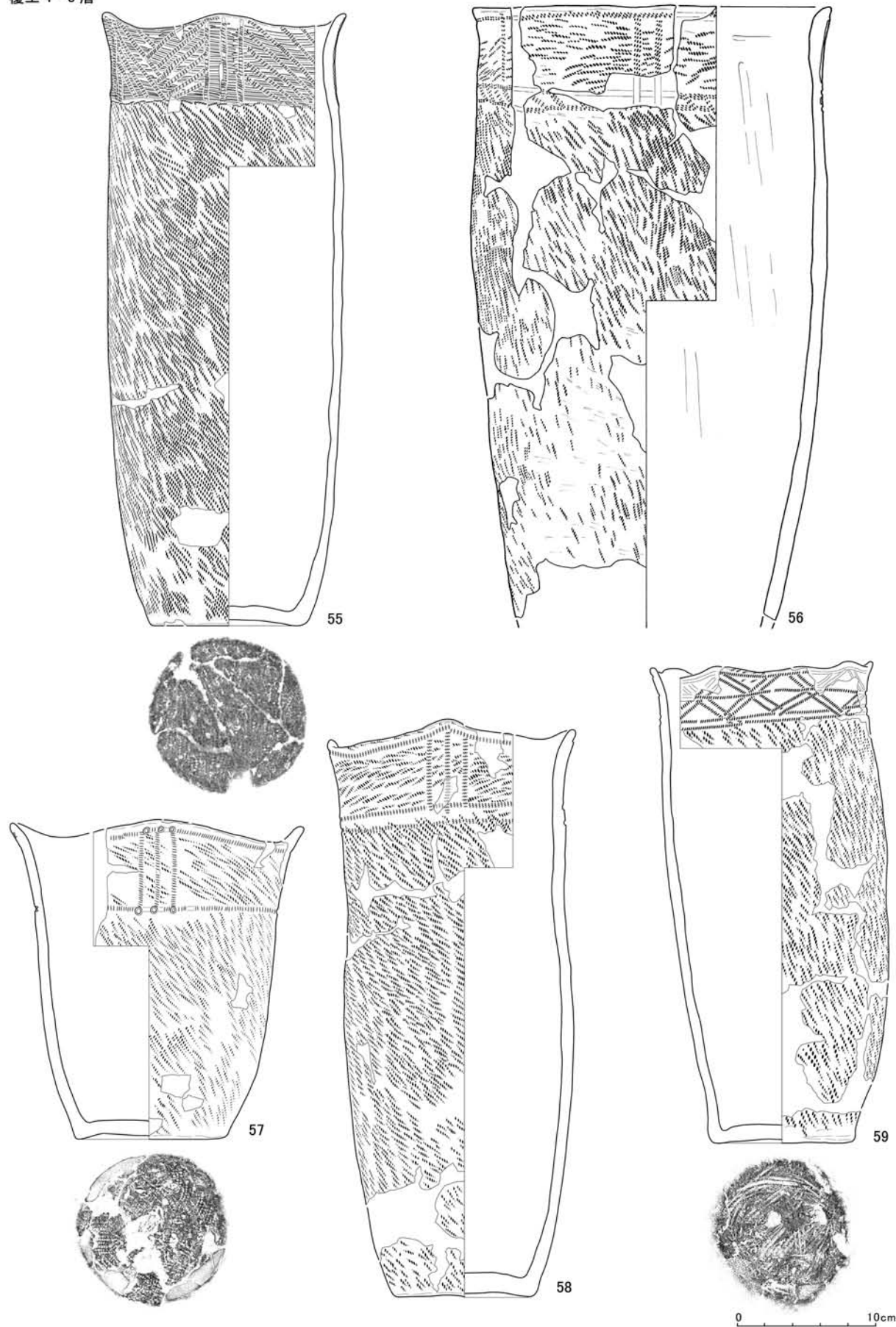
图IV-93 H-23 土器 (7) 覆土4·5層

覆土 4・5層



图IV-94 H-23 土器 (8) 覆土 4・5層

覆土 4·5 層



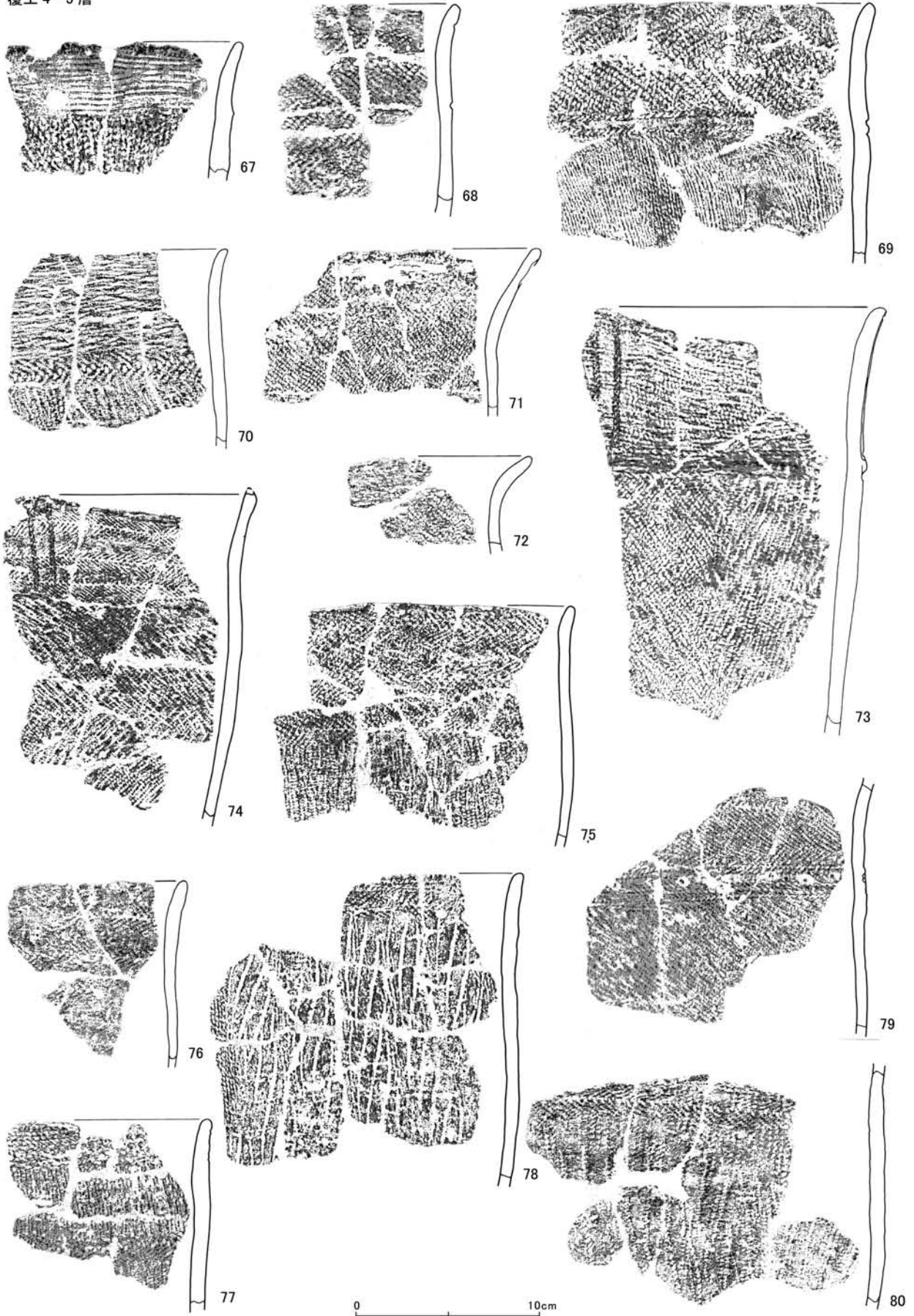
图IV-95 H-23 土器 (9) 覆土 4·5 層

覆土 4·5層



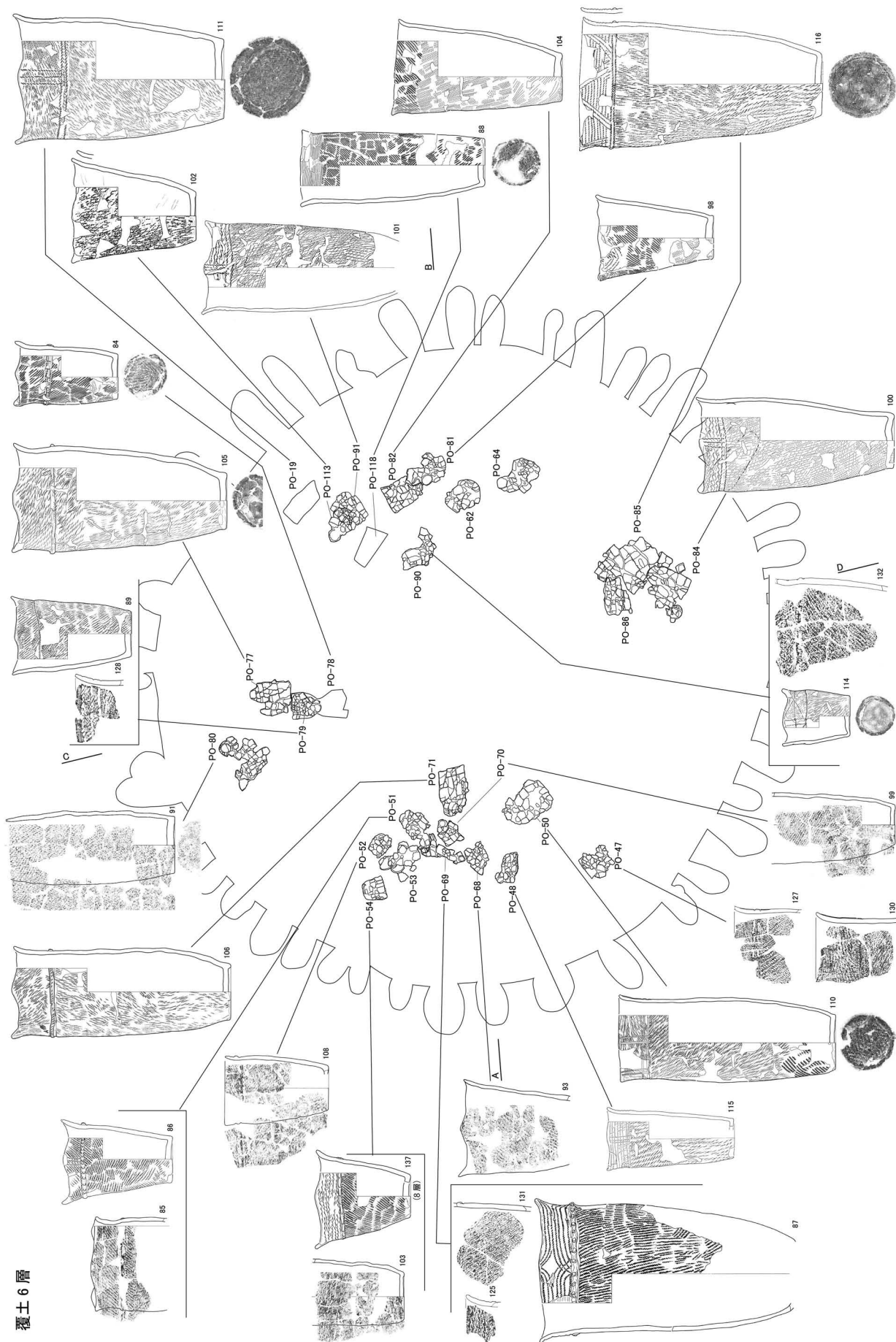
图IV-96 H-23 土器 (10) 覆土 4·5層

覆土4·5層

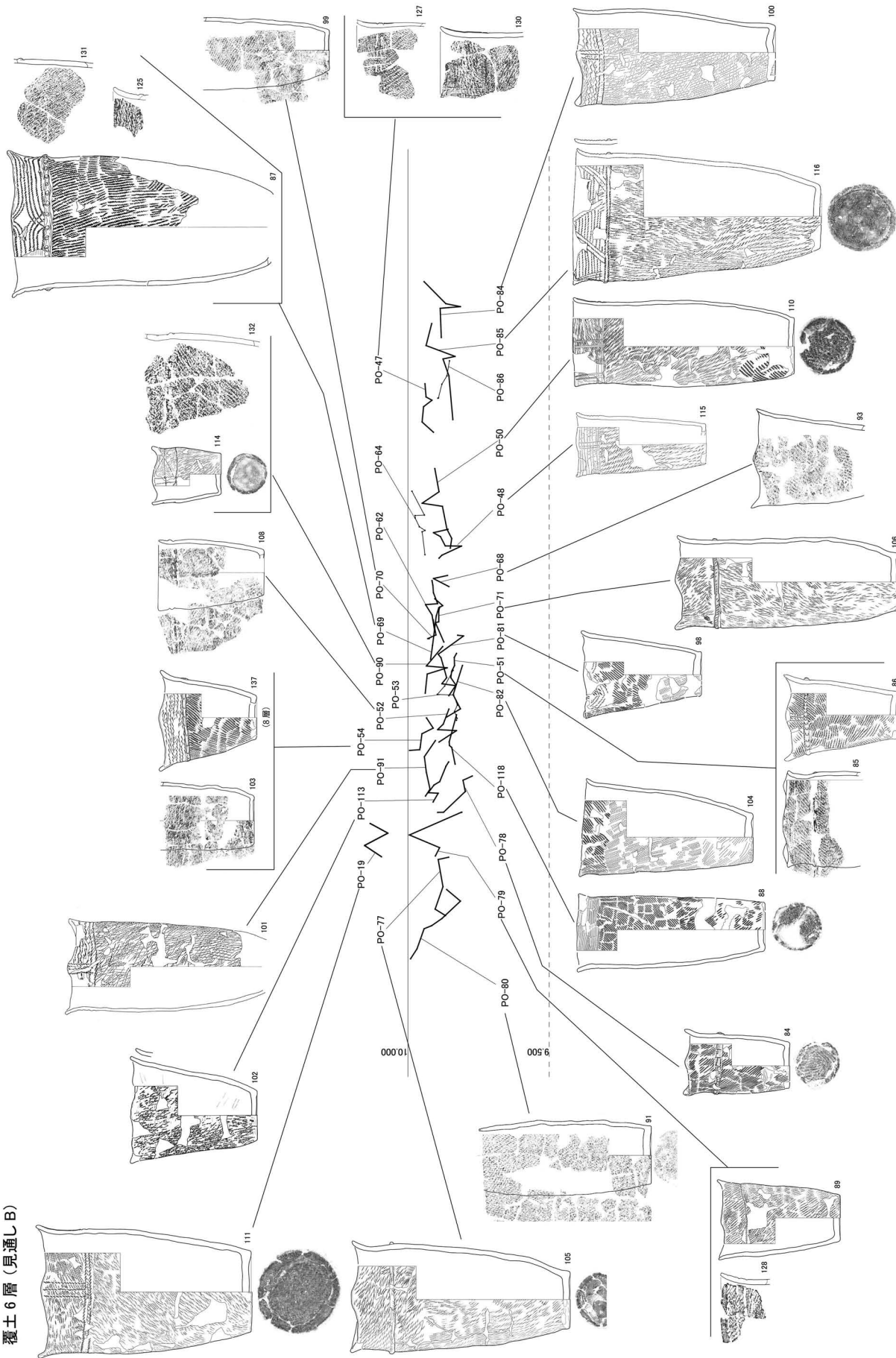


图IV-97 H-23 土器 (11) 覆土4·5層

覆土6層

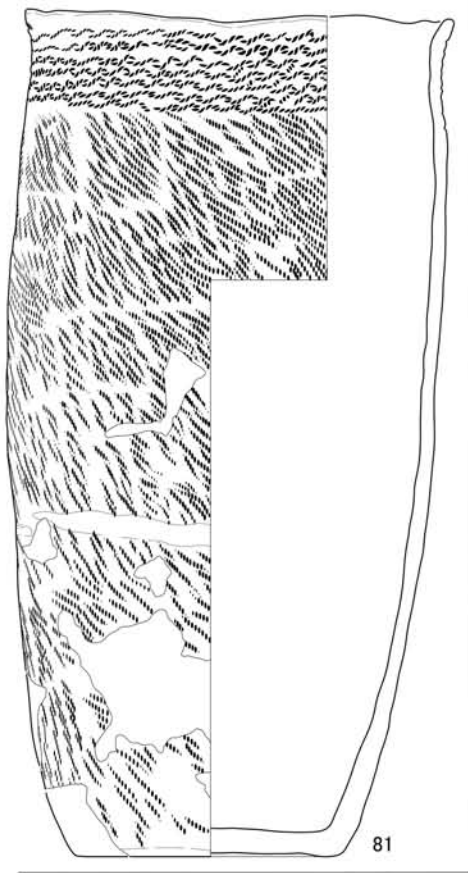


图IV-98 H-23 PO出土状况图 覆土6層

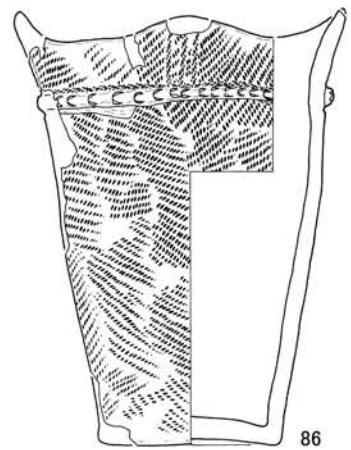
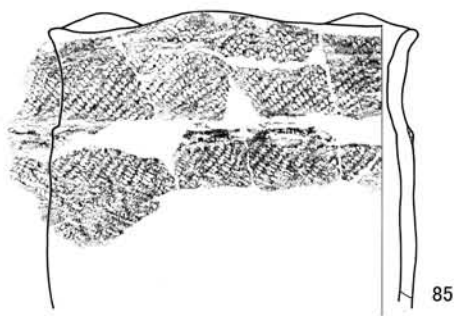
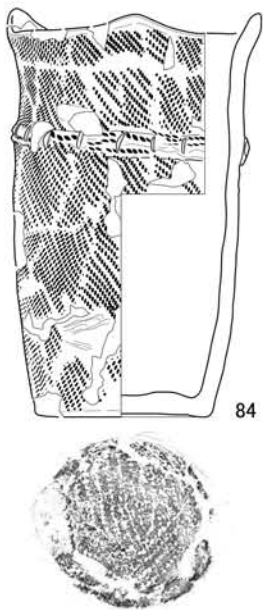
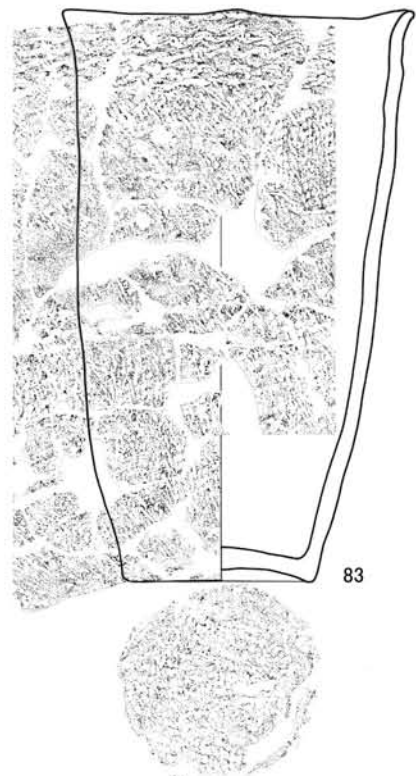
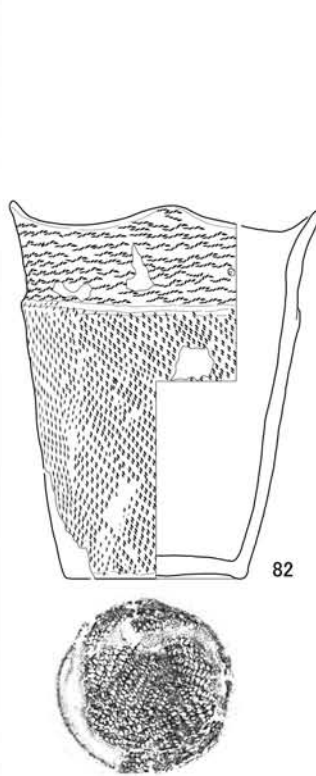


図Ⅳ-99 H-23 PO出土状況図 覆土 6 層 垂直分布図

覆土 7 層



覆土 6 層



0 10cm

図IV-100 H-23 土器 (12) 覆土 6・7 層

覆土6層



图IV-101 H-23 土器 (13) 覆土6層

覆土6層



图IV-102 H-23 土器 (14) 覆土6層

覆土 6 層



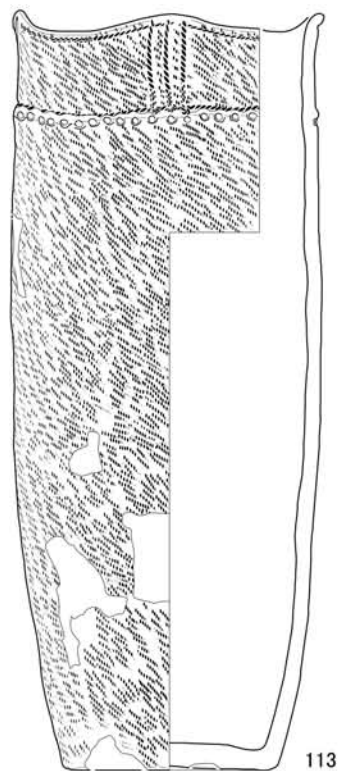
图IV-103 H-23 土器 (15) 覆土 6 層

覆土 6 層

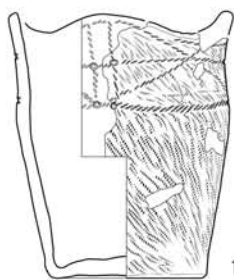


图IV-104 H-23 土器 (16) 覆土 6 層

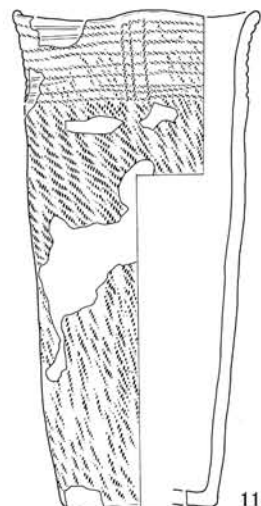
覆土6層



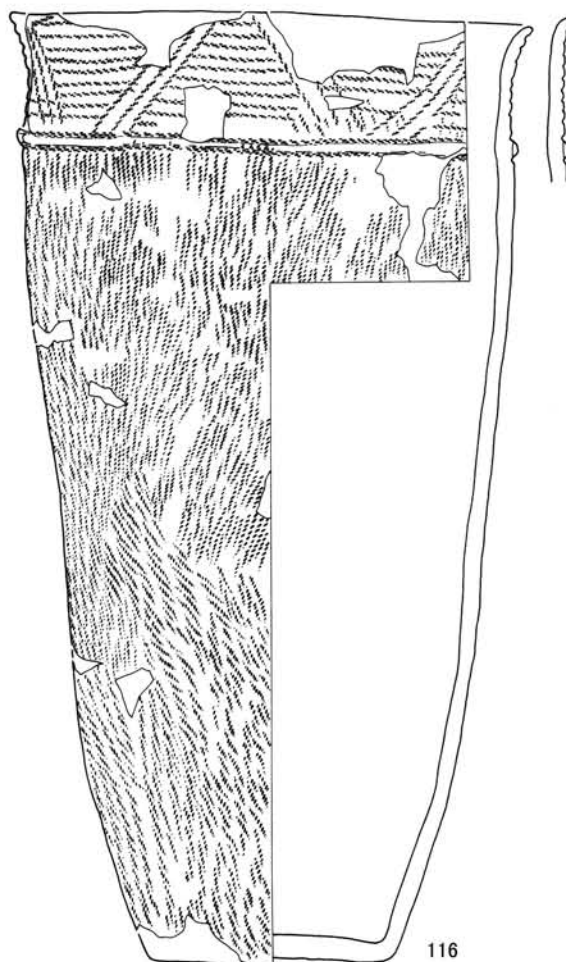
113



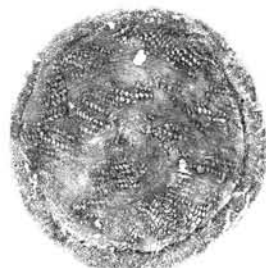
114



115



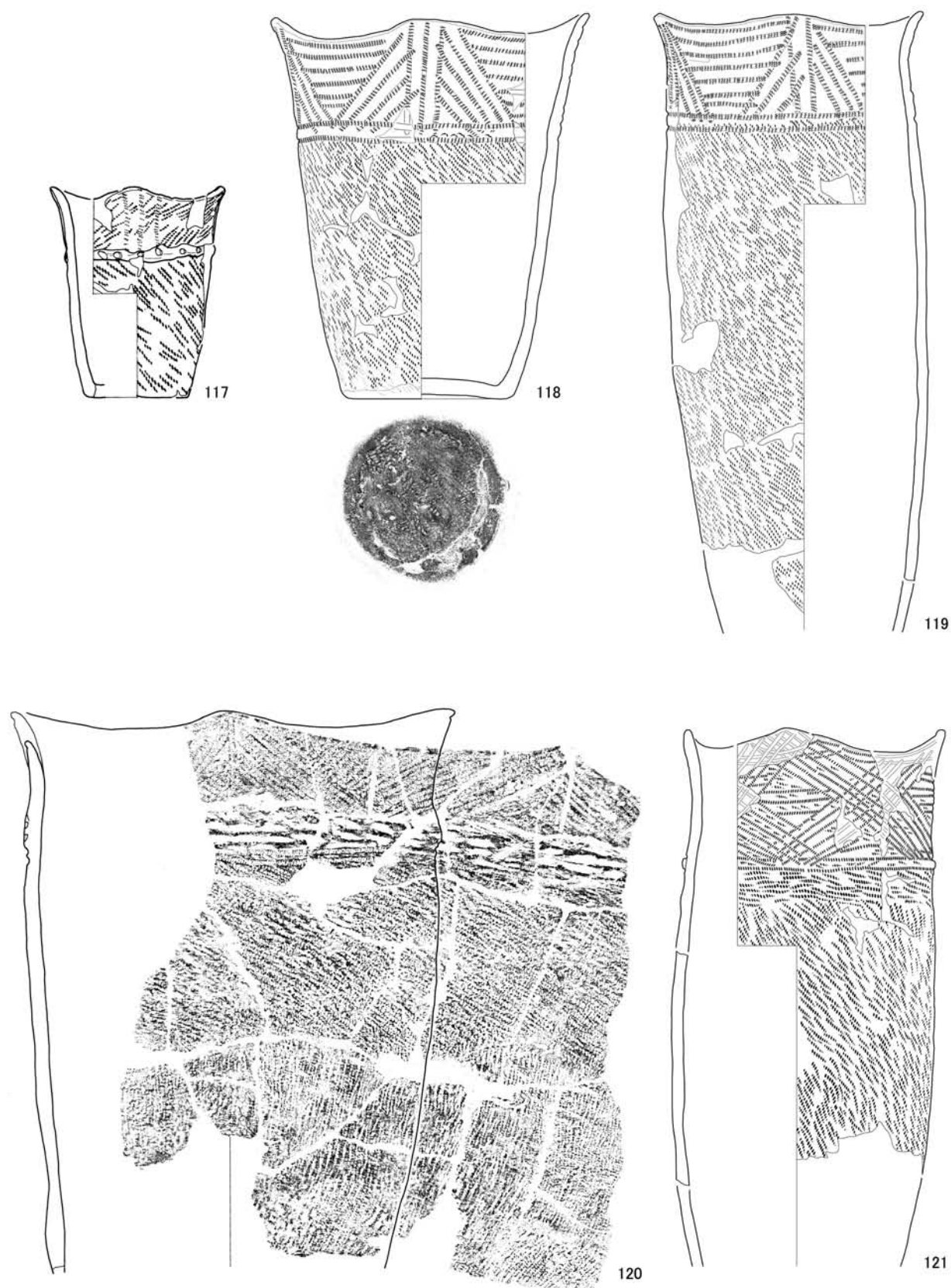
116



0 10cm

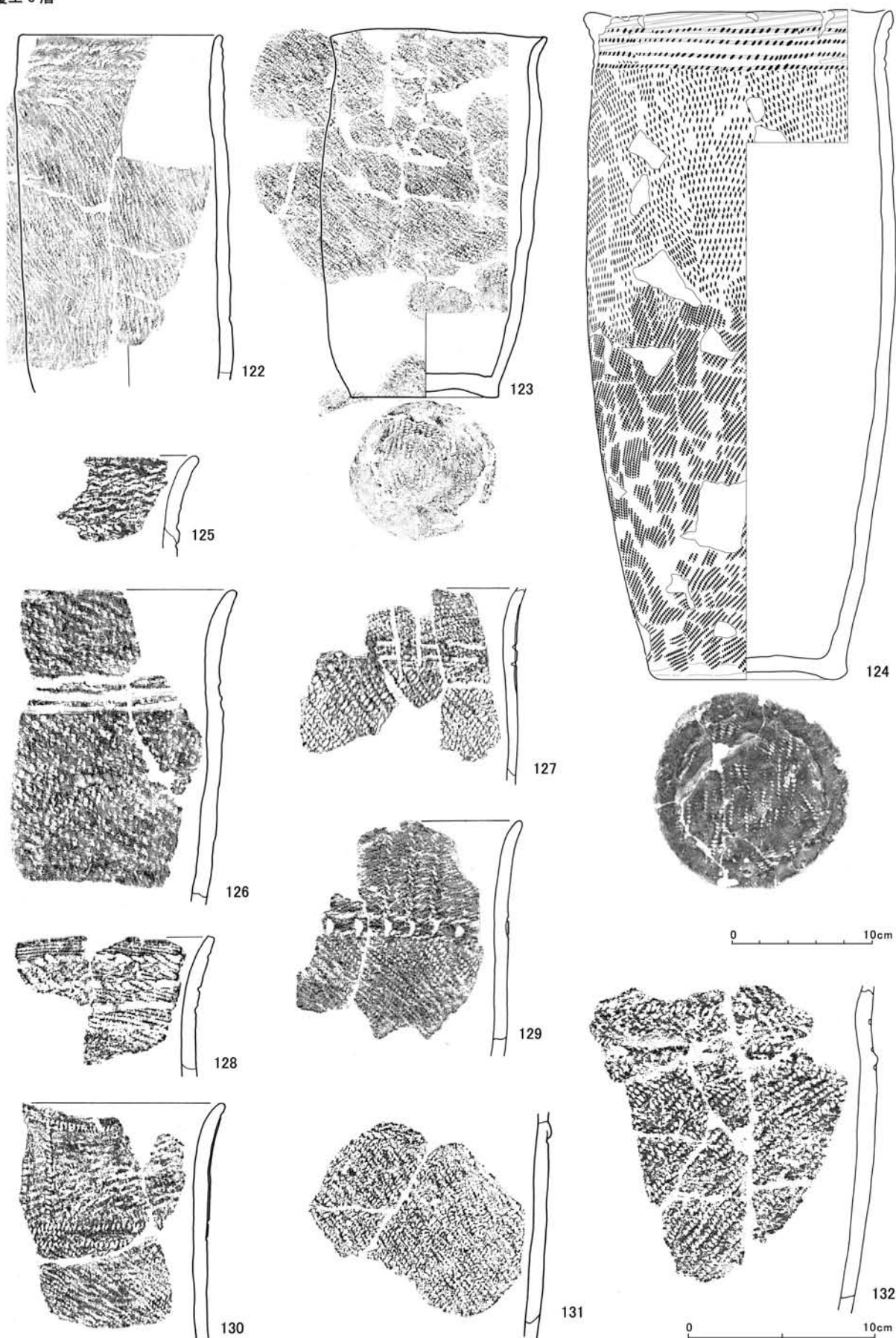
图IV-105 H-23 土器 (17) 覆土6層

覆土 6 層



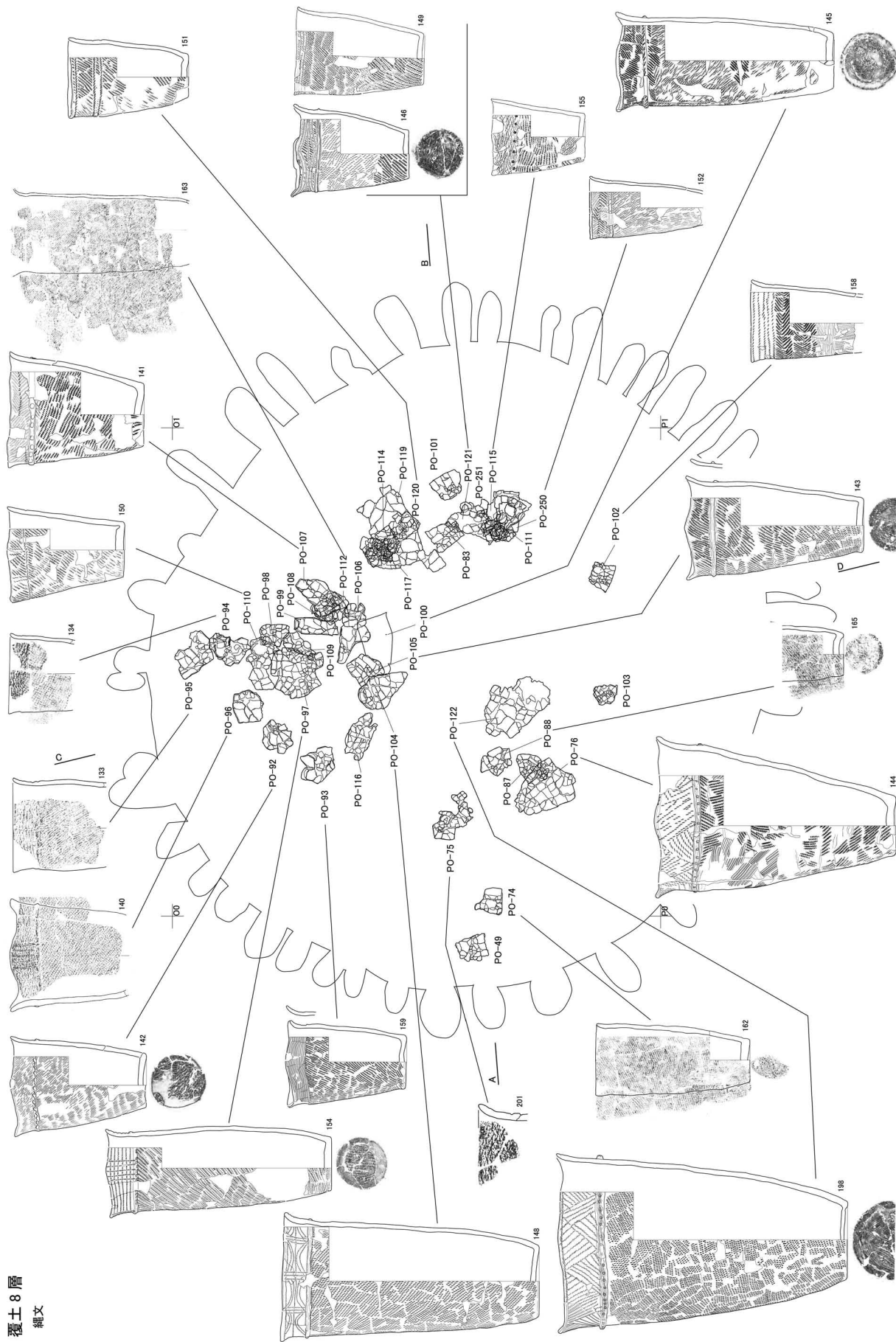
图IV-106 H-23 土器 (18) 覆土 6 層

覆土6層



图IV-107 H-23 土器 (19) 覆土6層

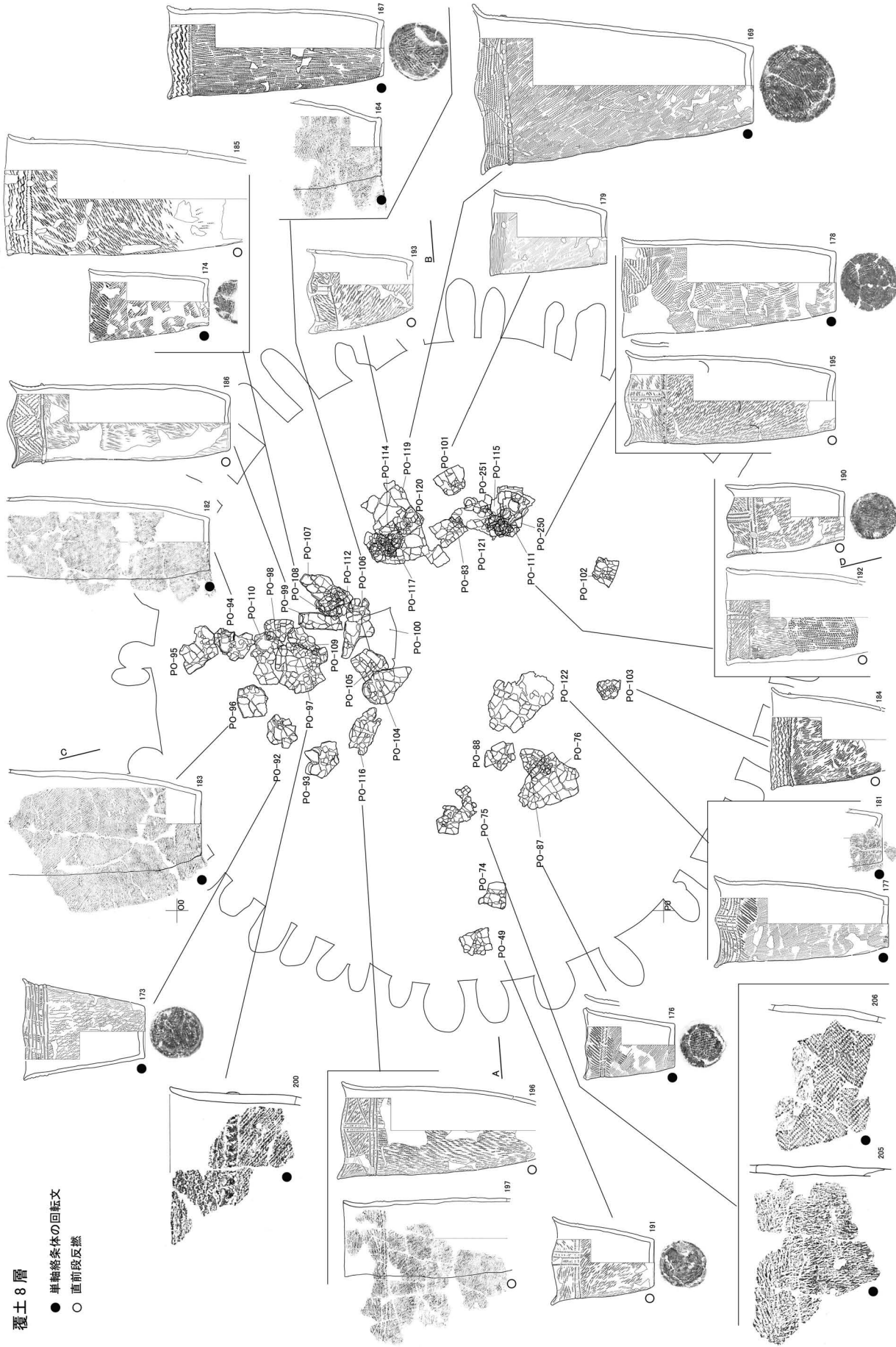
覆土8層
細文



图IV-108 H-23 PO出土状况图 覆土8層 繩文

覆土 8 層

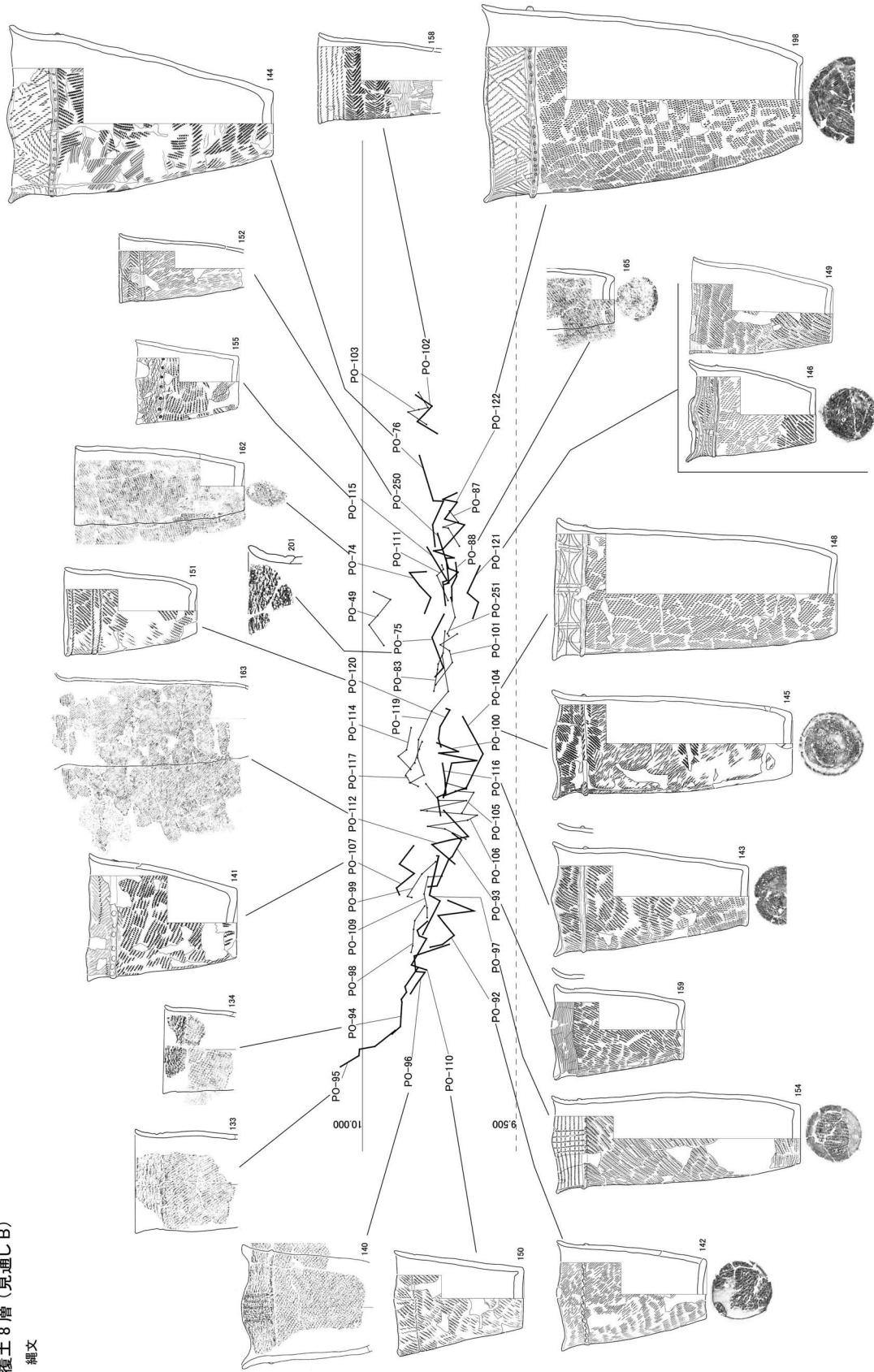
- 単軸綫条体の回転文
- 直前段反燃



図IV-109 H-23 PO出土状況図 覆土 8 層 単軸綫条体の回転文・直前段反燃

覆土8層(見通しB)

縄文

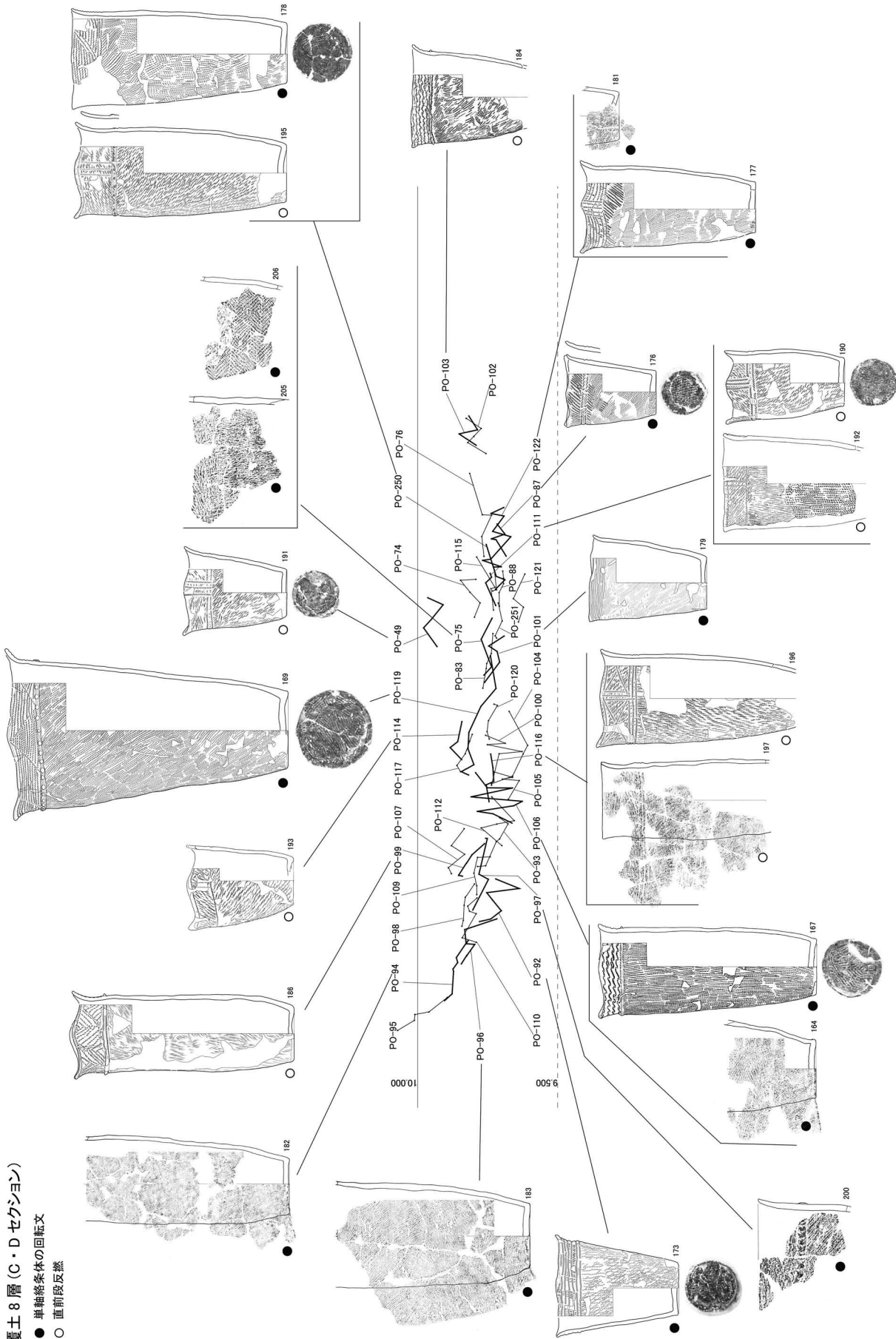


図IV-110 H-23 PO出土状況図 覆土8層 垂直分布図 縄文

覆土8層 (C・Dセクション)

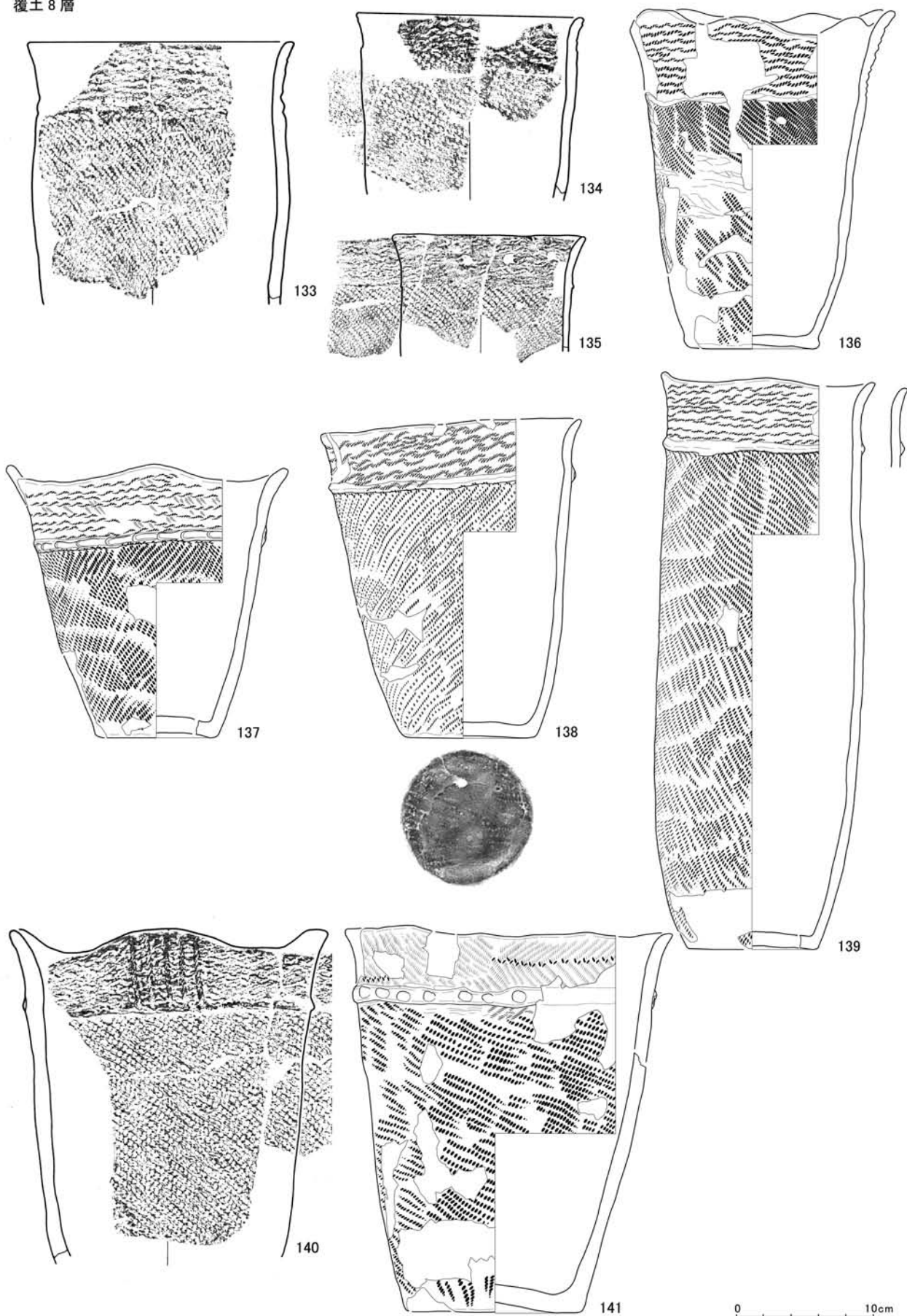
● 単軸綫糸体の回転文

○ 直前段反燃



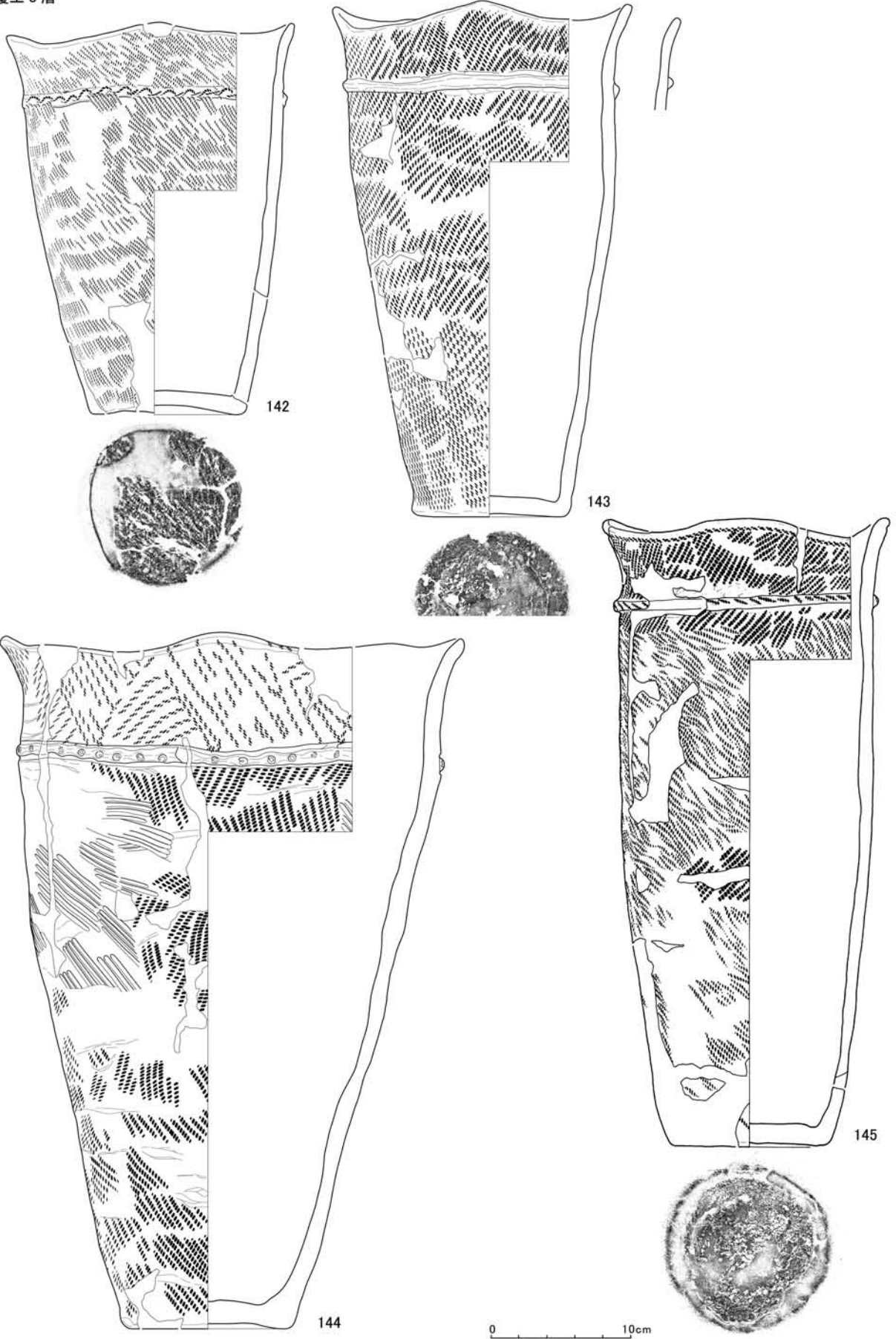
図IV-111 H-23 PO出土状況図 覆土8層 垂直分布図 単軸綫糸体の回転文・直前段反燃

覆土 8 層



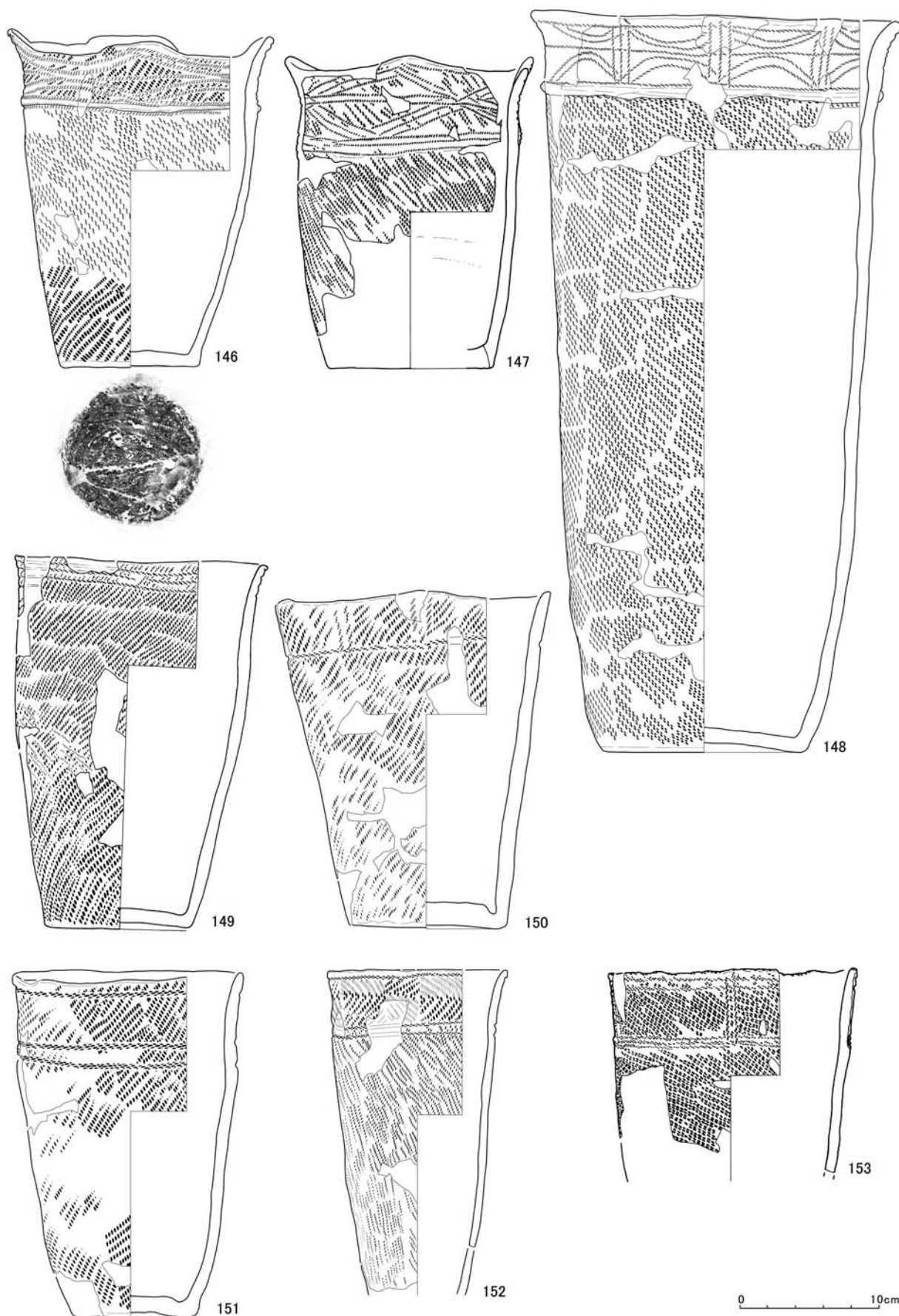
图IV-112 H-23 土器 (20) 覆土 8 層

覆土 8 層



图IV-113 H-23 土器 (21) 覆土 8 層

覆土 8 層



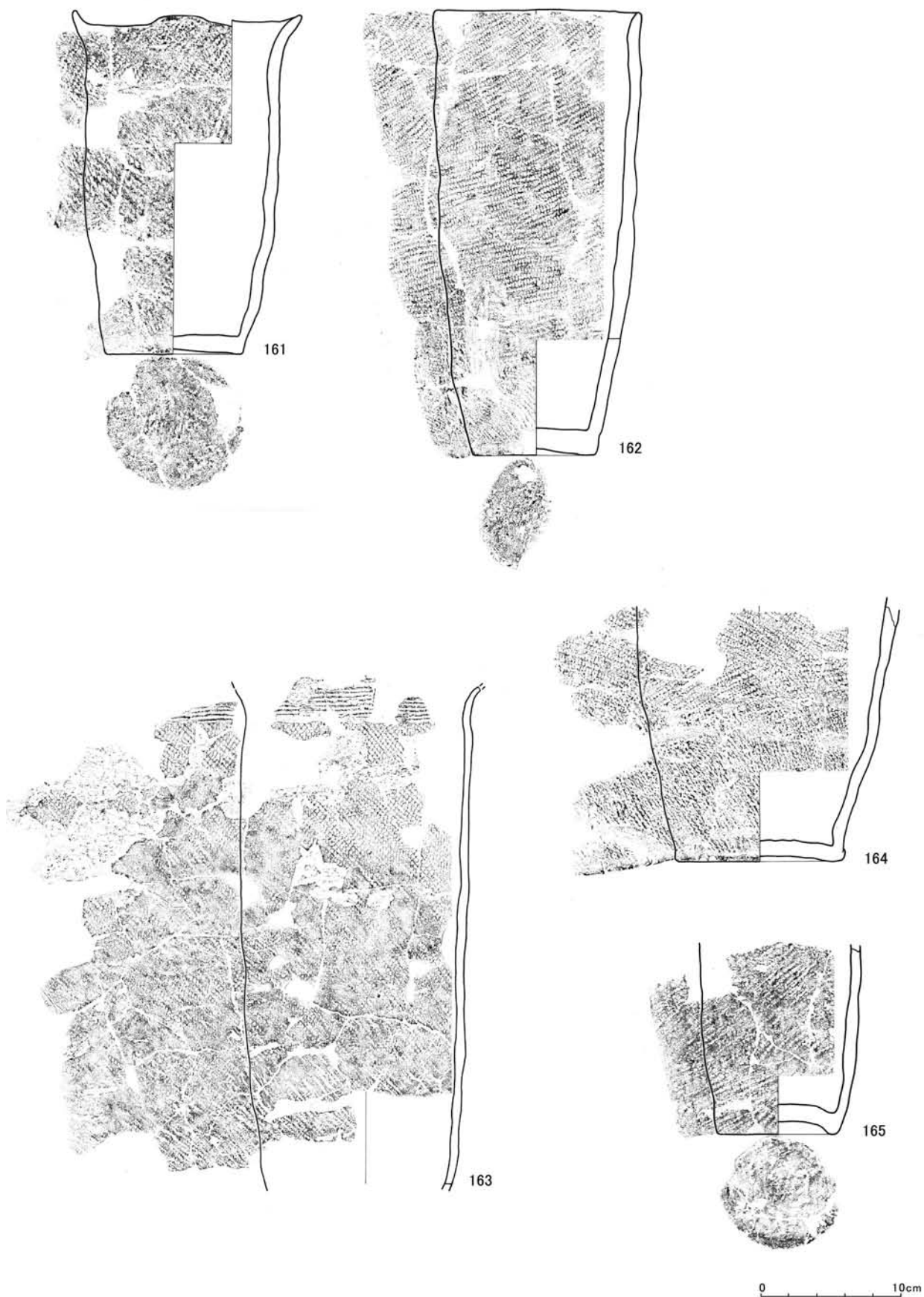
图IV-114 H-23 土器 (22) 覆土 8 層

覆土 8 層



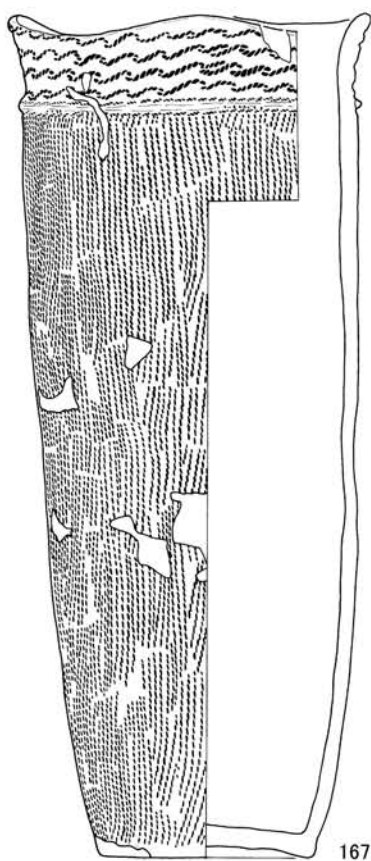
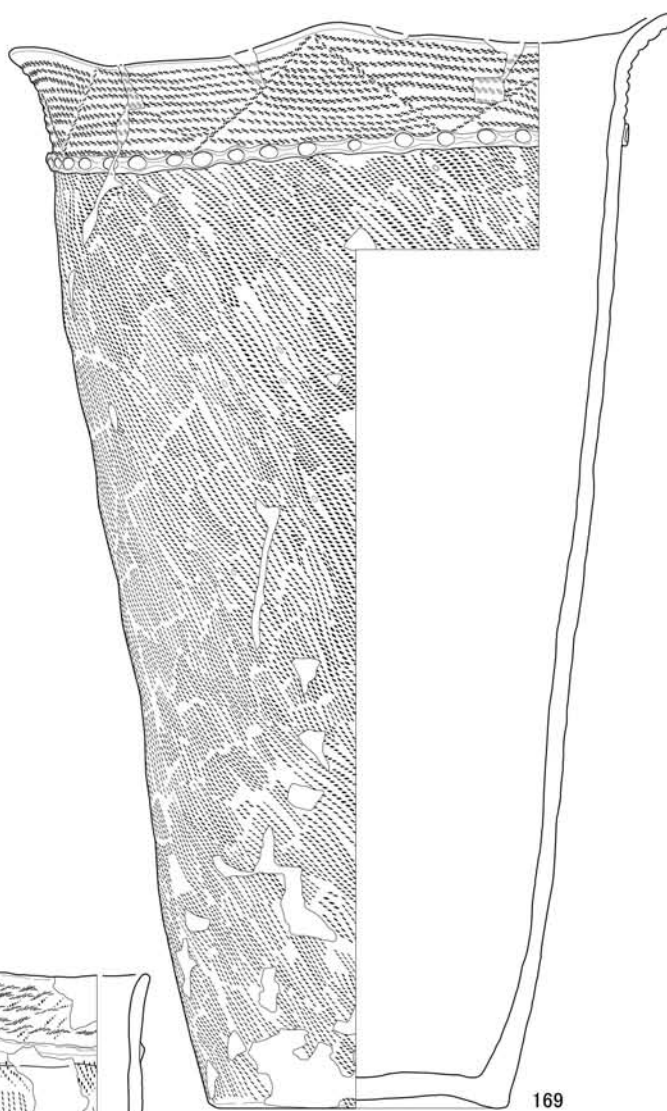
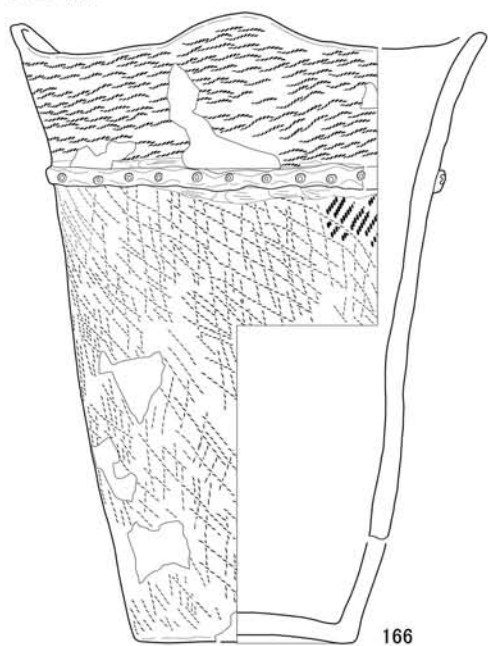
图IV-115 H-23 土器 (23) 覆土 8 層

覆土 8 層



图IV-116 H-23 土器 (24) 覆土 8 層

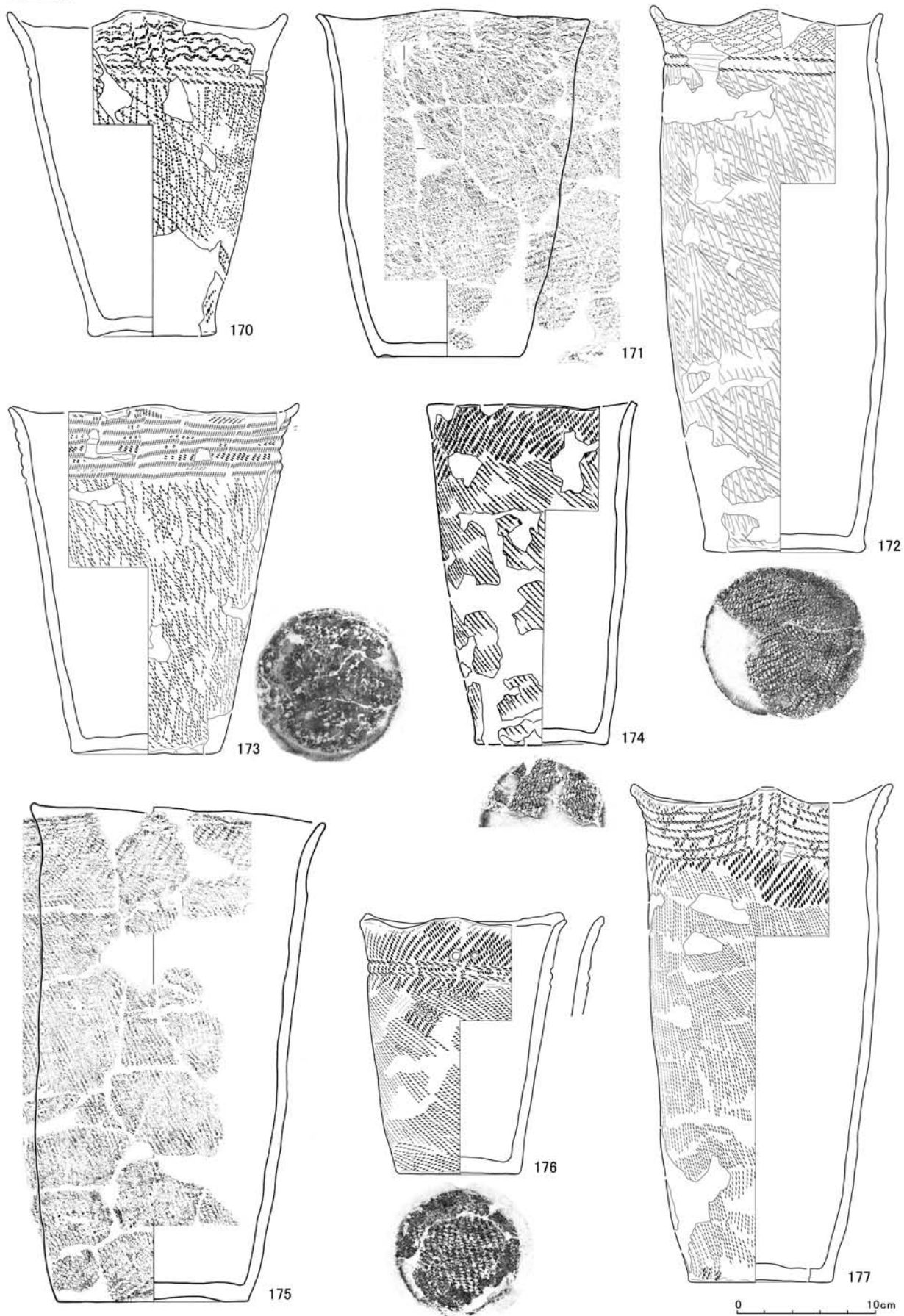
覆土 8 層



0 10cm

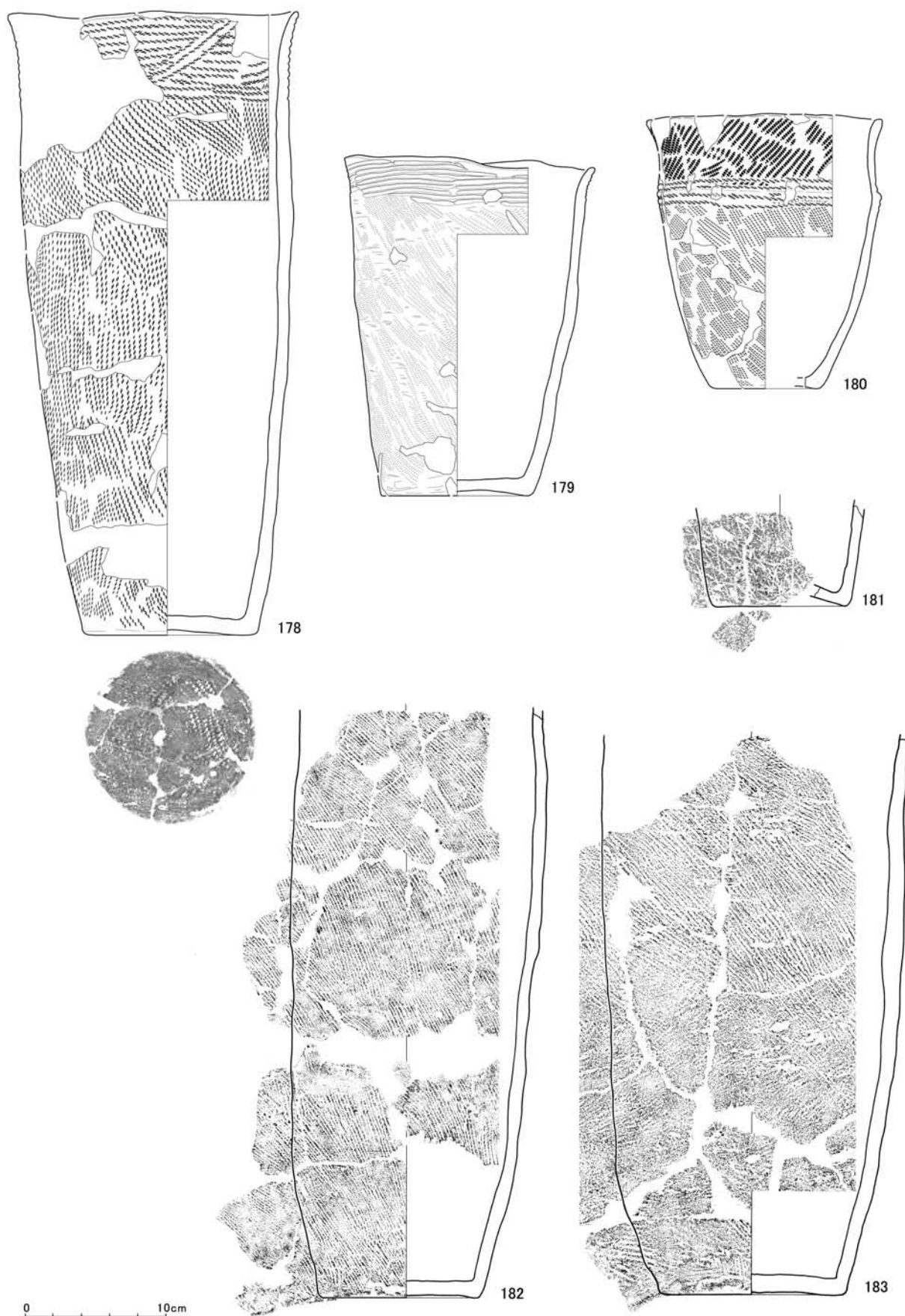
图IV-117 H-23 土器 (25) 覆土 8 層

覆土 8 層



图IV-118 H-23 土器 (26) 覆土 8 層

覆土 8 層

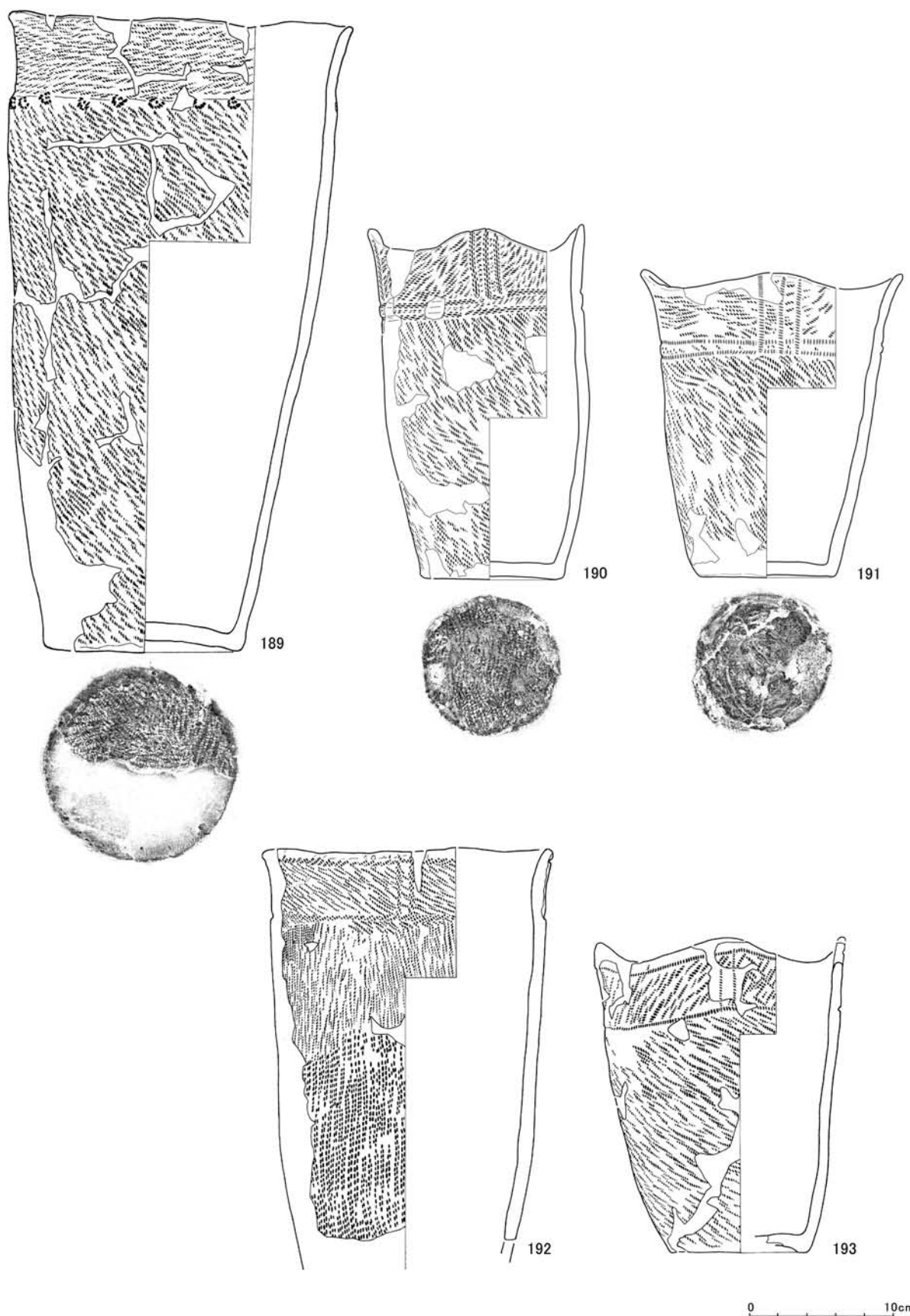


图IV-119 H-23 土器 (27) 覆土 8 層

覆土 8 層

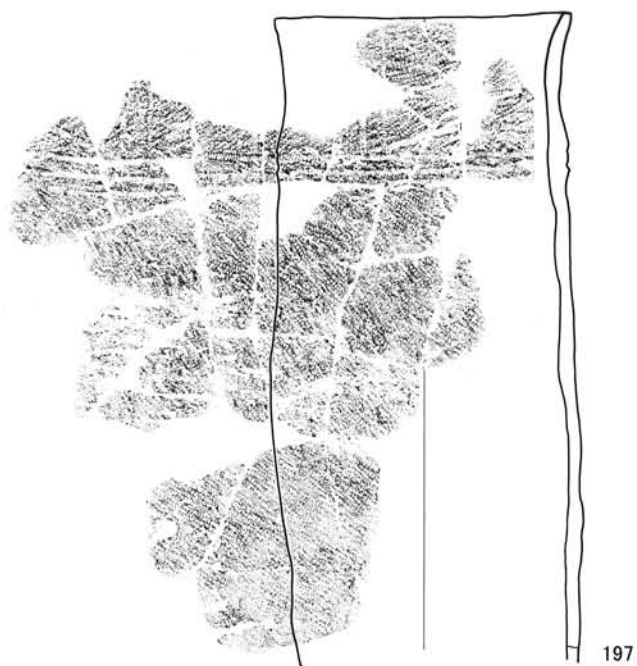
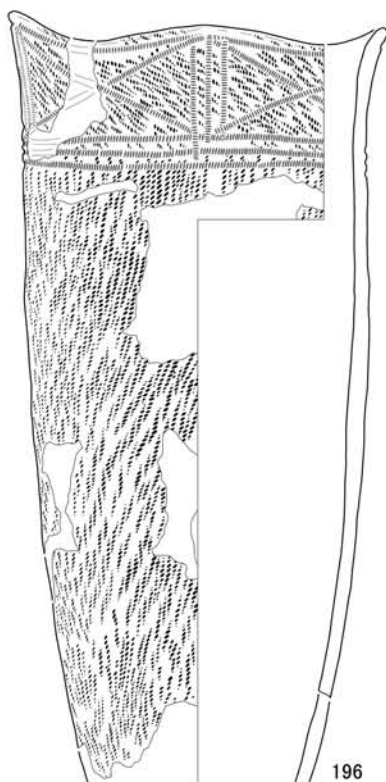
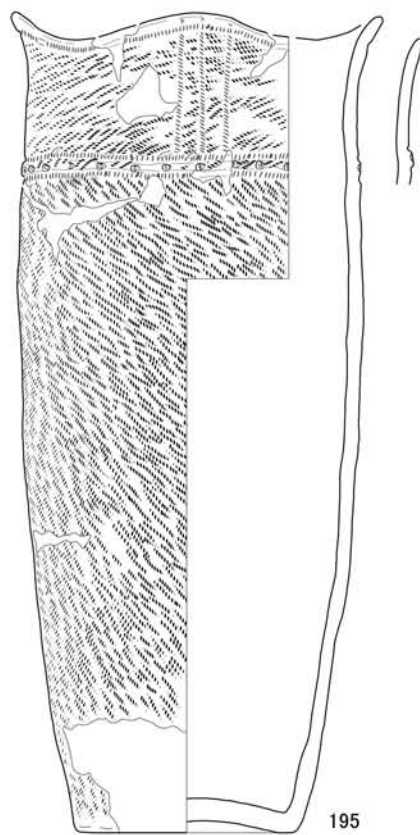
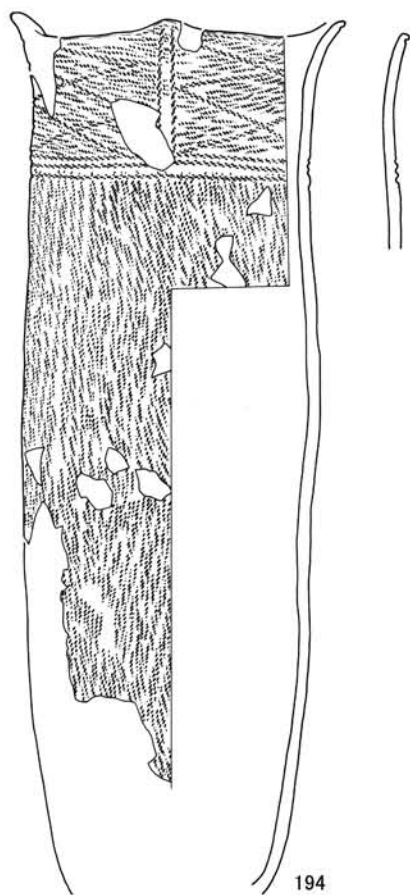


图IV-120 H-23 土器 (28) 覆土 8 層



图IV-121 H-23 土器 (29) 覆土 8 層

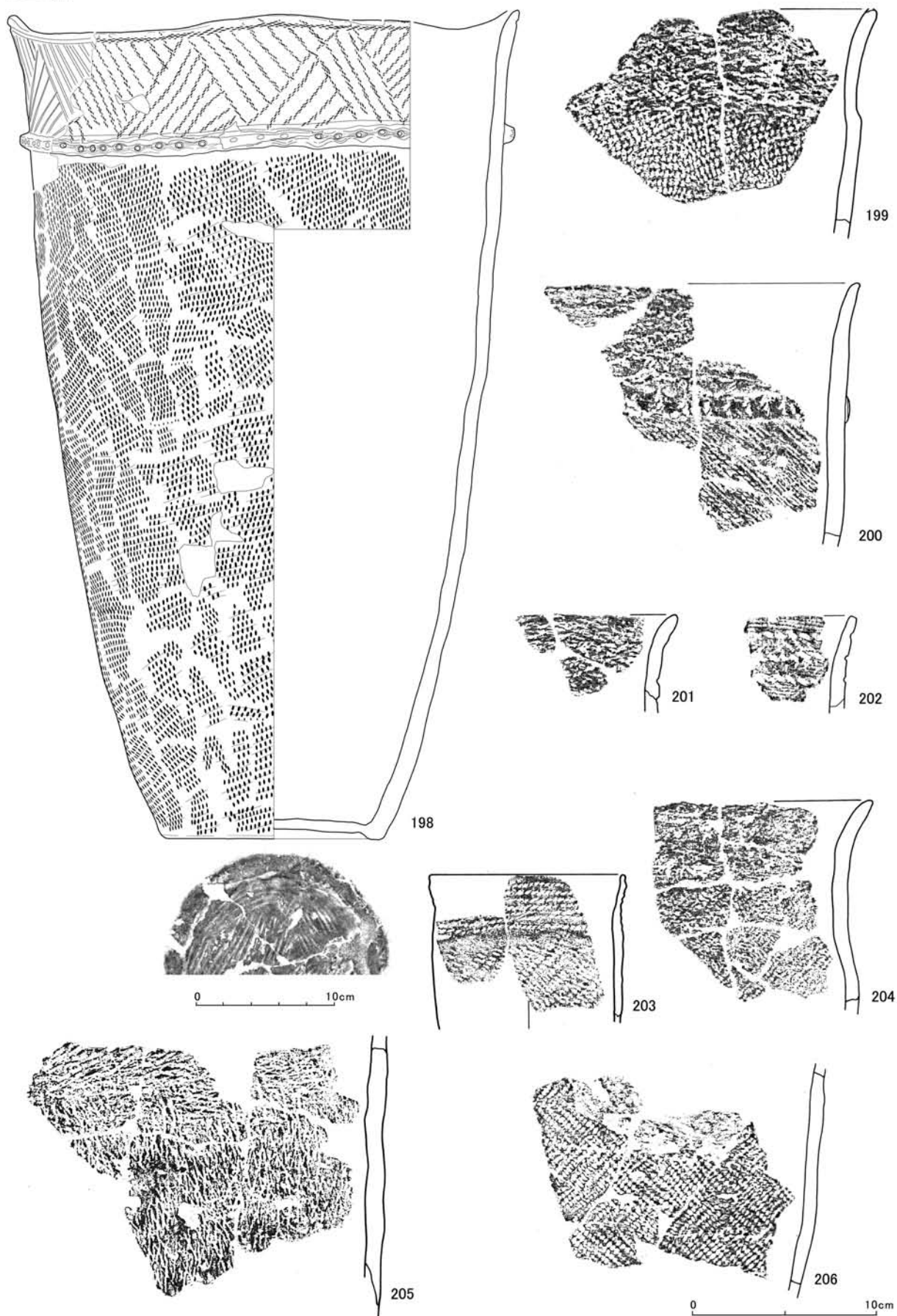
覆土 8 層



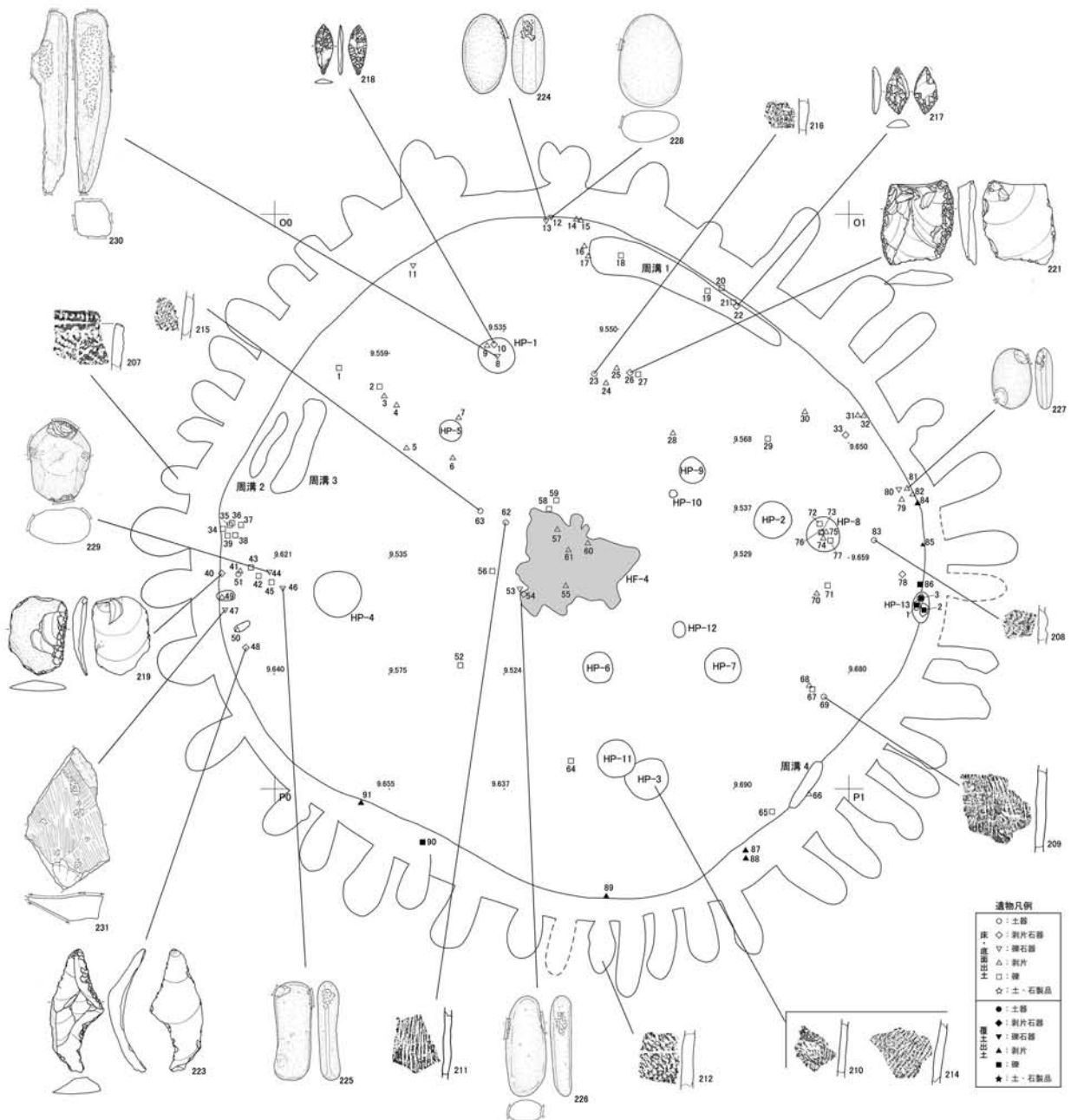
0 10cm

图IV-122 H-23 土器 (30) 覆土 8 層

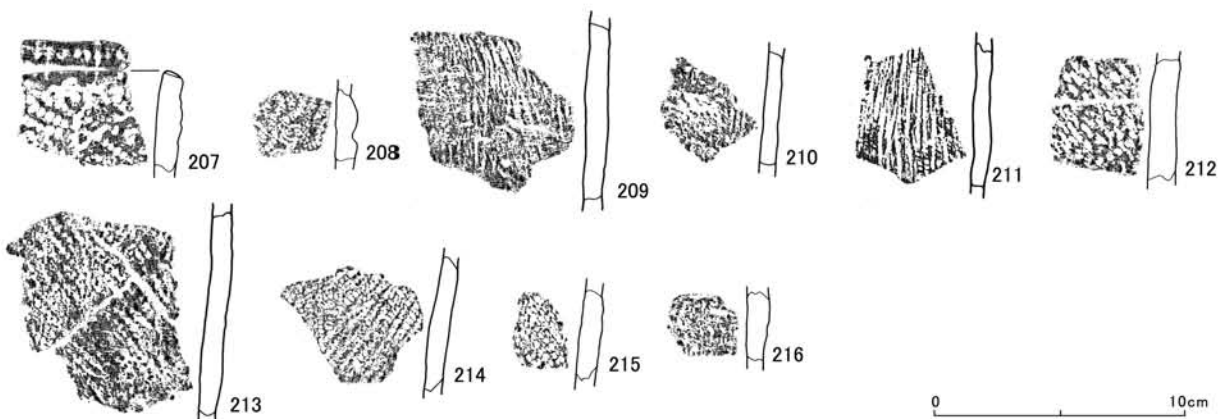
覆土 8 層



图IV-123 H-23 土器 (31) 覆土 8 層



床面・柱穴状ピット (HP)



図IV-124 H-23 遺物出土状況図 土器 (32) 床面・柱穴状ピット

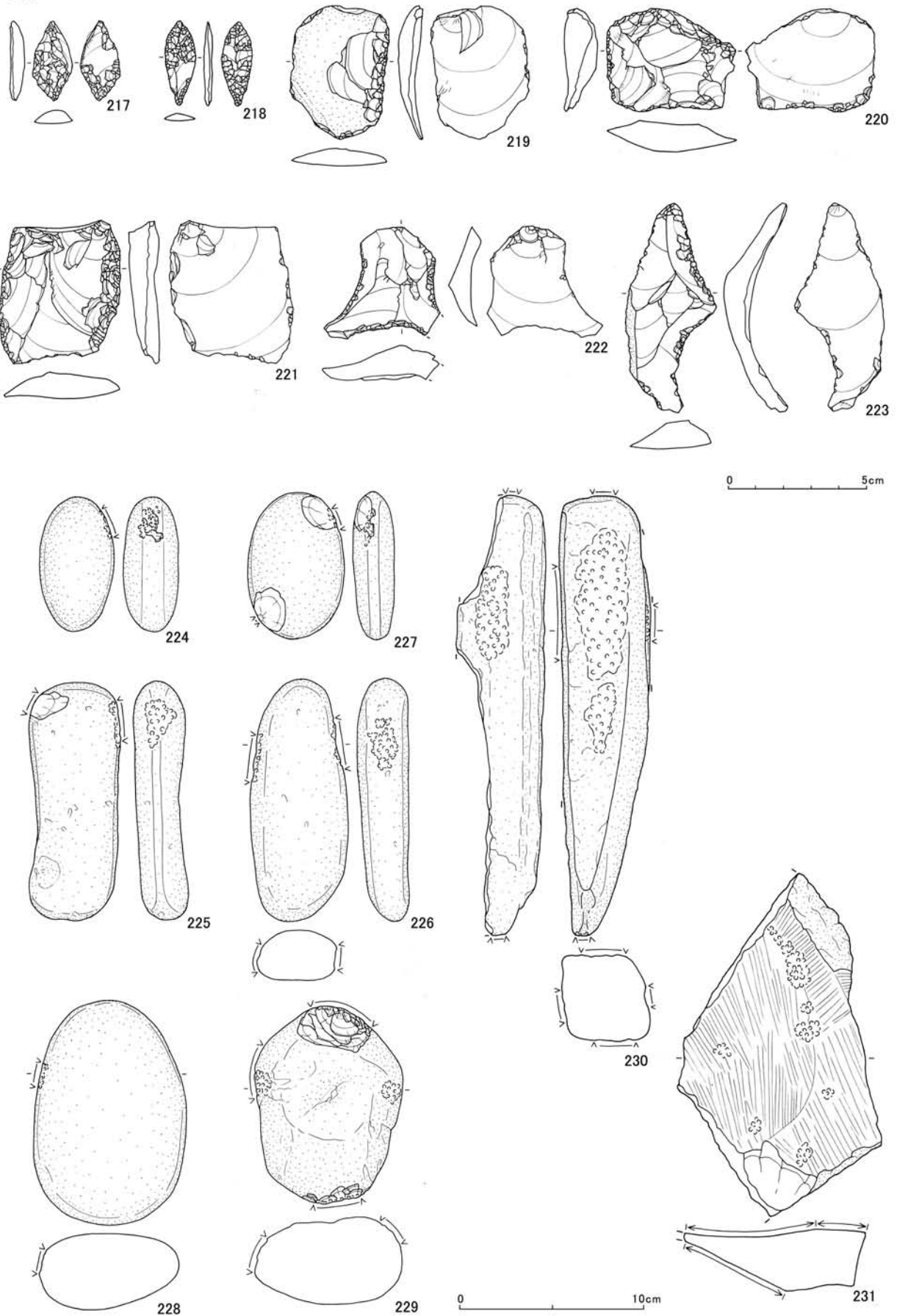
3類土器が主体である。Ⅱ群B-3類土器には体部文様として、単軸絡条体の回転文・直前段反撚の縄文の多用が認められる。口頸部文様帯には、直前段反撚の縄文を地文とし、縄線・単軸絡条体の圧痕文で区画されたものが多く、不整撚絡文は少ない。覆土6層の貼付帯には上下に縄線が加えられたものが多い。覆土8層からはⅡ群B-3類土器からⅡ群B-2類土器に含まれる多くの資料が得られた。体部文様では縄文・単軸絡条体第1類・単軸絡条体第1A類・直前段反撚の縄文等が認められ、縄文・単軸絡条体第1類・単軸絡条体第1A類の出現と多用が認められる。文様区画帯として貼付帯の多用が認められる。口頸部文様帯には縄線文・貝殻条痕文・単軸絡条体の圧痕文・不整撚糸文・単軸絡条体第1A類等が認められる。うち不整撚糸文が覆土8層の特徴的な文様要素といえる。また、文様帯が無文地のものも多い傾向が認められる。床面には器形・文様要素のわかる資料はない。粗い単軸絡条体の回転文・多軸絡条体の回転文・斜行縄文等が施された資料が出土している。覆土8層から単軸絡条体の回転文が施された資料がまとまりをもって出土していることから、床面と覆土8層出土の資料には時間差がないものと思われる。

以上のように各層毎に異なる特徴が看取できる。このようなことから本遺構の出土状況はⅡ群B-2類土器・Ⅱ群B-3類土器からⅡ群B-4類土器までの変遷を知る手掛かりとなるものと考えられる。

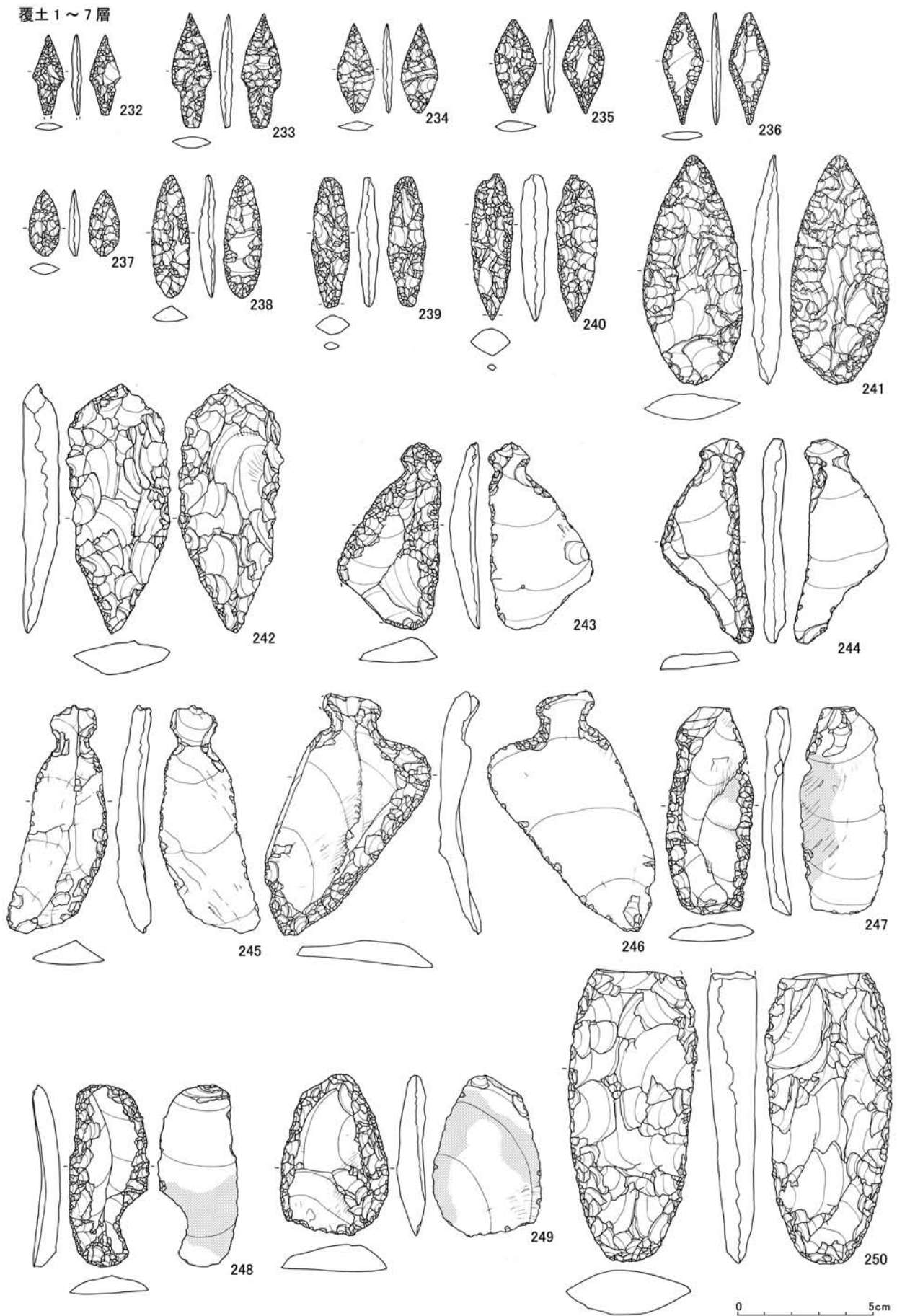
(石器)床面(217～231):217・218は石鏃。217は尖基で菱形。218は尖基で柳葉形。いずれも頁岩製。219～223はスクレイパー。219～221は剥片の側縁に刃部を作出したもの。222・223は内彎する刃部を作出したもの。すべて頁岩製。224～230はたたき石。224～226は扁平な棒状礫の側縁の一部に敲打痕のあるもの。225は上部に被熱痕がみられる。227・228は扁平な楕円礫の側縁の一部に敲打痕のあるもの。229は扁平な亜円礫の端部と側縁の一部に敲打痕のあるもの。230は棒状の亜角礫の平坦面と端部に敲打痕のあるもの。224・227・228は泥岩製、225・226は安山岩製、229は頁岩製、230は砂岩製。231は砥石。板状礫の両平坦面に広く凹んだすり面があるもの。砂岩製。

覆土1～7層(232～265):232～238は石鏃。232・233は有茎凸基。234～236は尖基で菱形。237・238は円基で柳葉形。237は黒曜石製、その他は頁岩製。239・240は石錐。両面加工で棒状に整形し、先端部に機能部を作出したもの。いずれも頁岩製。241は石槍。有茎で両面加工の木葉形。頁岩製。242はナイフ類。有茎で両面加工。刃部は錯行剥離で作出している。頁岩製。243～246はつまみ付ナイフ。縦型で片面周縁加工。243・244の下半部は切り出し状になる。244はチャート製、その他は頁岩製。247～249はスクレイパー。247・248はへら状のもの。下端部に急角度の刃部が作出されている。248は側縁下部に抉りがある。249は縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。すべて頁岩製で、使用痕とみられる光沢が確認できる。250・251は紡錘形の両面調整石器。250は先端部を欠損している。いずれも頁岩製。252～254は石のみ。252は短冊形で片刃の円刃。表面は研磨によって調整しているが、裏面は剥離面になっている。裏面の下半のみ研磨調整して刃部を作出していることから、石斧の破損品を再加工したものと考えられる。緑色泥岩製。253・254は薄い短冊状板状礫の下端部に刃部のみ加工して作出している。片刃の直刃。253は片岩製、254は凝灰岩製。255～258はすり石。257は扁平な楕円礫の側縁に幅の狭いすり面を作出したもの。すり面の一部には打ち欠いて非常に幅の狭いすり面を作出している。長軸両端には敲打による整形がみられる。256～258は扁平打製石器。256は板状の亜角礫の側縁を打ち欠いて非常に幅の狭い機能部を作出している。長軸両端部を打ち欠いて整形している。257は板状礫の側縁を打ち欠いて短冊状に整形し、非常に幅の狭い機能部を作出している。258は板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に非常に幅の狭い機能部を作出したもの。すべて安山岩製。259～265は石製品。259は異形石器。縦長剥片の側縁に内彎する刃部を作出している。頁岩製。260は軽石製石製品。涙滴状に整形されている。261～264は線刻礫。261は石のみ状の形状

床面

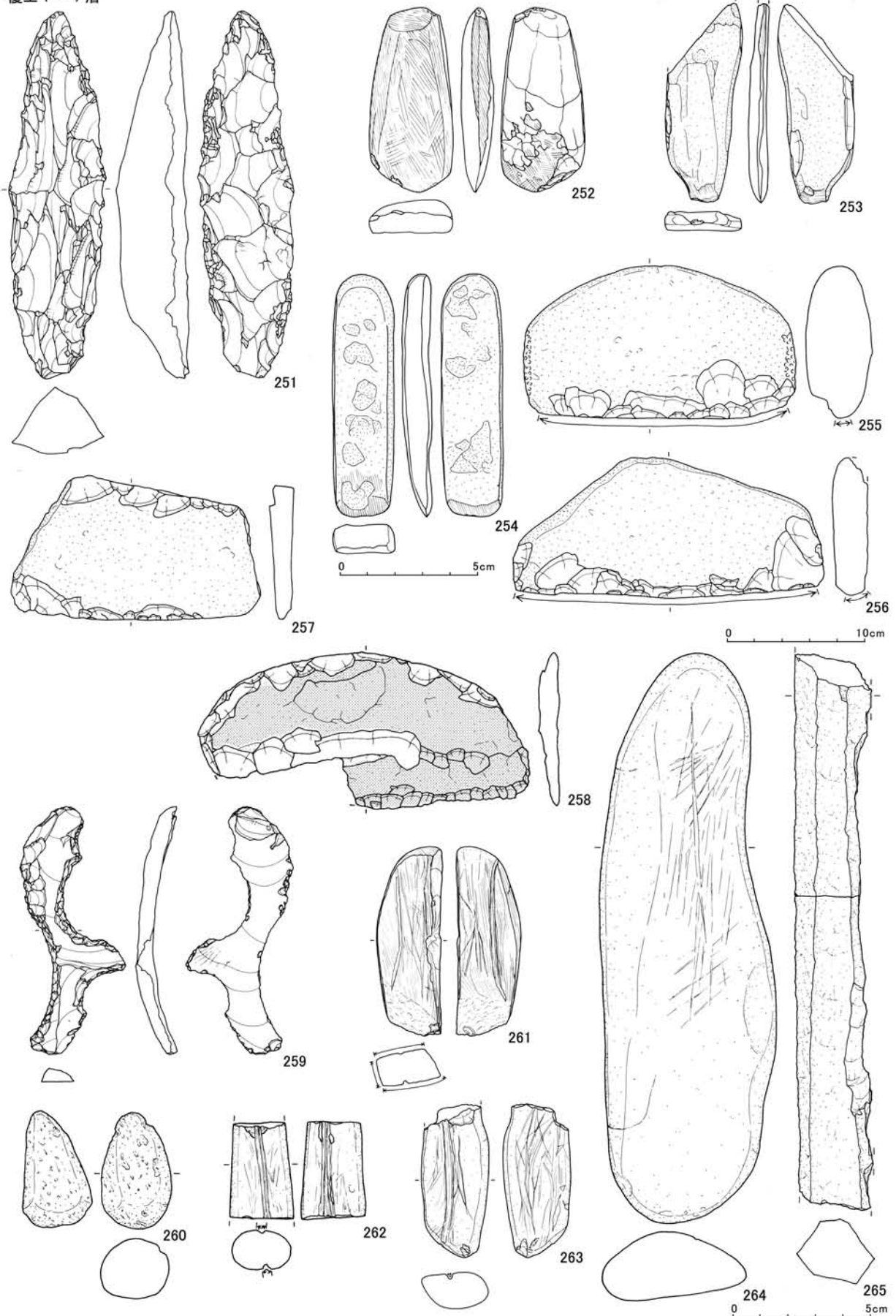


图IV-125 H-23 石器 (1) 床面



图IV-126 H-23 石器 (2) 覆土 1 ~ 7 層

覆土1~7層



図IV-127 H-23石器(3)覆土1~7層

で両刃直刃の刃部が作出されている。平坦面には太い線刻と非常に細かい線刻がみられる。太い線刻はすり切り痕の可能性もある。262・263は棒状礫に太い線刻がみられるもの。264は扁平な棒状礫の平坦面に非常に細かい線刻がされているもの。線刻に特別な規則性はみられない。すべて凝灰岩製。265は石棒の一種と考えられる。柱状節理の棒状礫で、被熱による弾けがみられる。接合しないが同一個体のものがN96区から出土している。玄武岩製。

覆土8層 (266～279)：266～269は石鏃。266は有茎平基。267・268は尖基のもの。269は尖基で柳葉形。すべて頁岩製。270は石錐。両面加工で棒状に整形し、尖端部に機能部を作出したもの。頁岩製。271～273はつまみ付ナイフ。271は縦型で両面全面加工のもの。272は縦型で片面周縁加工のもの。273は縦型で片面全面加工のもの。すべて頁岩製。274～276はスクレイパー。274は横長剥片の側縁に刃部を作出したもの。275・276は縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。274・275は使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。277・278は両面調整石器。277はへら状、278は楕円形の形状をしている。いずれも頁岩製。279は軽石製石製品。涙滴形の形状で上部に周回する沈線が施されている。有溝石錘や浮きのようなものの可能性がある。

H-25 (図IV-129～140、図版17・19・92～95)

位置：K 0～2、L 0・1区

規模：6.36 / 6.03×5.57 / 5.34×0.97m

確認・調査：IV層上面における標高9.8m前後の平坦面に立地する。K・L 0～2区でⅡ・Ⅲ層を掘り下げたところ、IV層上面で黒色土の落ち込みを確認した。落ち込みの長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げた。その結果、IV層上面で深さ1m程で床面と思われる平坦面と壁の立ち上がりを確認した。このため住居跡と判断し調査を継続した。北西側の一部が、調査区外に位置する。HF-1の焼土層の土壌を採取してフローテーションを行い、ヒエ15粒が検出された。

覆土：北側の床面から壁にかけてⅡ層黒色土の流れ込みによる堆積がみられる。これ以外はすべて、盛土か盛土主体のもので、流れ込みによる自然堆積である。

平面形：確認された形状から見て、隅丸長方形と推定される。深さは1m程である。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所と柱穴35基を確認した。焼土は住居跡のほぼ中央に位置し、浅い皿状の掘り込みをもつ。掘り込みの壁に被熱がみられることから、炉と考えられる。35基の柱穴のうち18基が住居跡内で、7基が住居跡の外周に位置する。住居跡内の柱穴は、太くて深いもの(HP-5～8・15・20)、太くて浅いもの(HP-1～4・10・11・18)、細くて深いもの(HP-16・17・22・23・25)、細くて浅いもの(HP-9・12～14・19・21・24・26～28)である。このうち主柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から4本柱の住居と考えられるが、南側の柱穴は2本1組のような配列になっていることから、建て替えあるいは拡張の可能性がある。また、南西壁側で検出された柱穴列(HP-16・17・22・23)はその配列から、出入り口の可能性がある。さらに、南側で2基、北東側で5基の柱穴が住居跡外周に沿うように位置している。屋根材を支える柱穴の可能性がある。

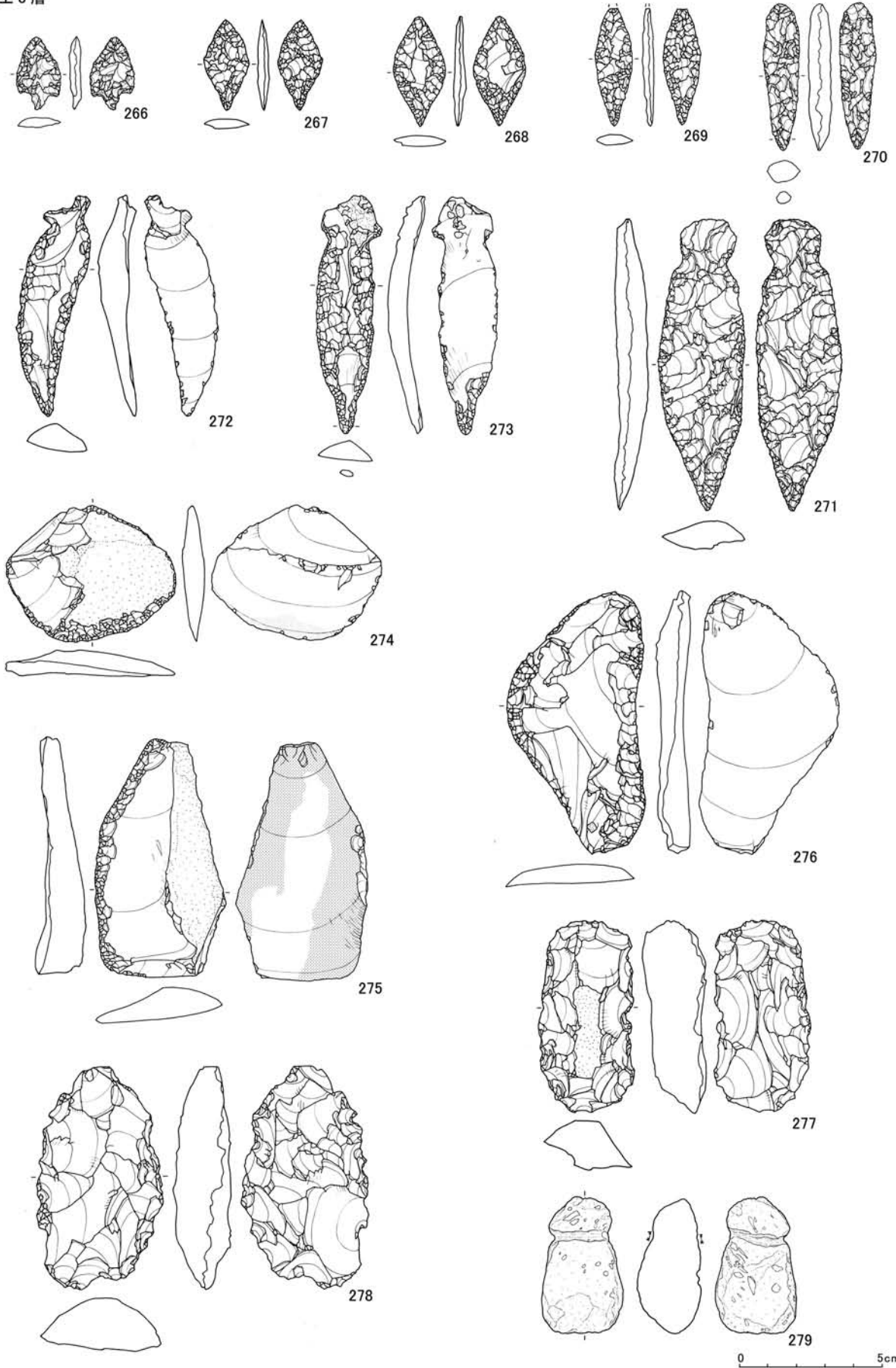
遺物出土状況：床面からⅡ群B-4類土器など144点、石器等140点、HPから土器31点、石器等12点、覆土からⅡ群B類土器など10,896点、石器等5,370点が出土した。石製品は軽石製石製品が1点出土した。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。(立川)

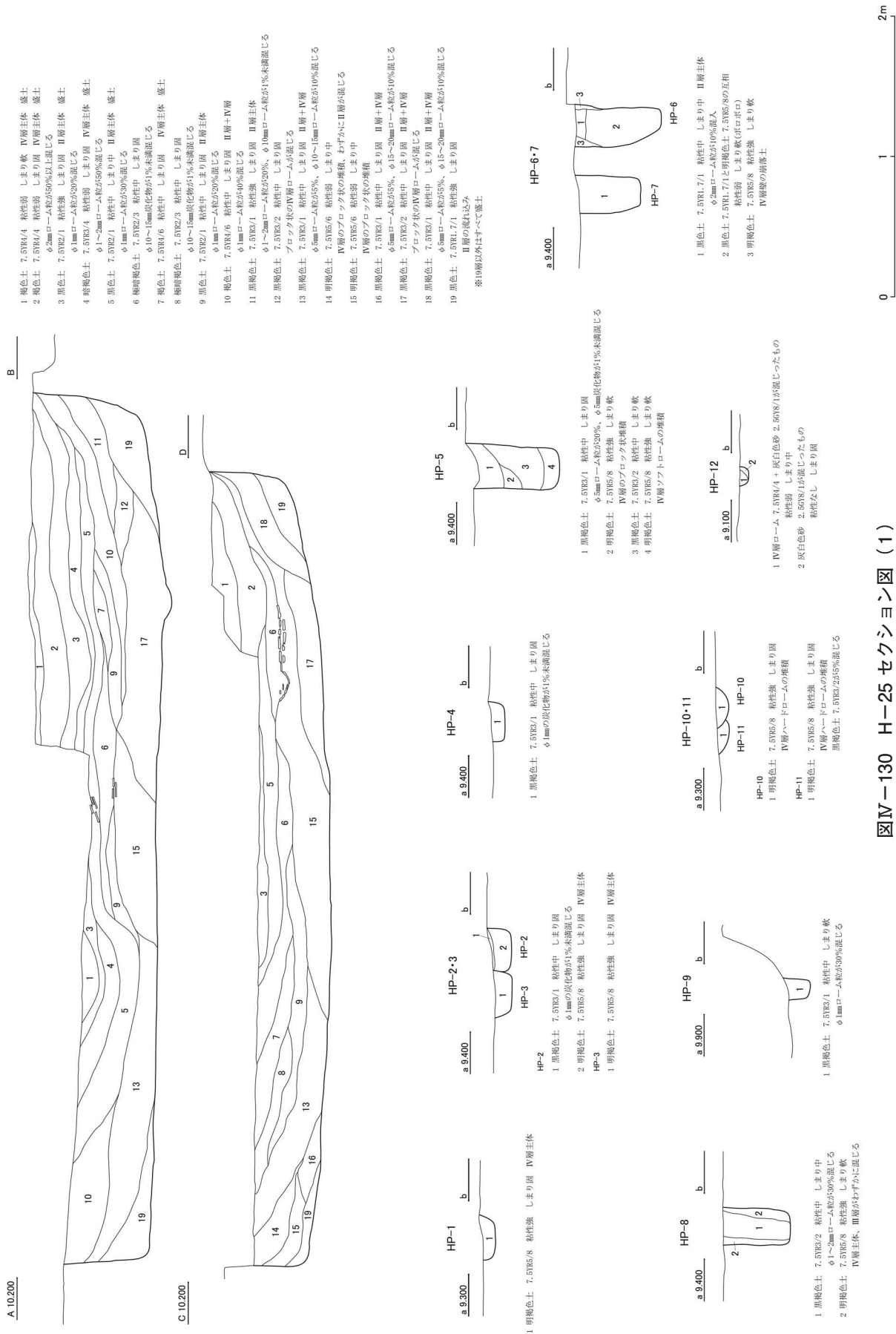
掲載遺物：(土器)土器は床面・柱穴状ピット・覆土から出土し、覆土は覆土下層(覆土下位)・覆土中層(覆土中位)、覆土に分層して取り上げられた。分類ごとに説明を加える。

Ⅱ群A類土器(21～29)：21～26は押引文が施されたもの。21は押しきりで区画された無文地の口

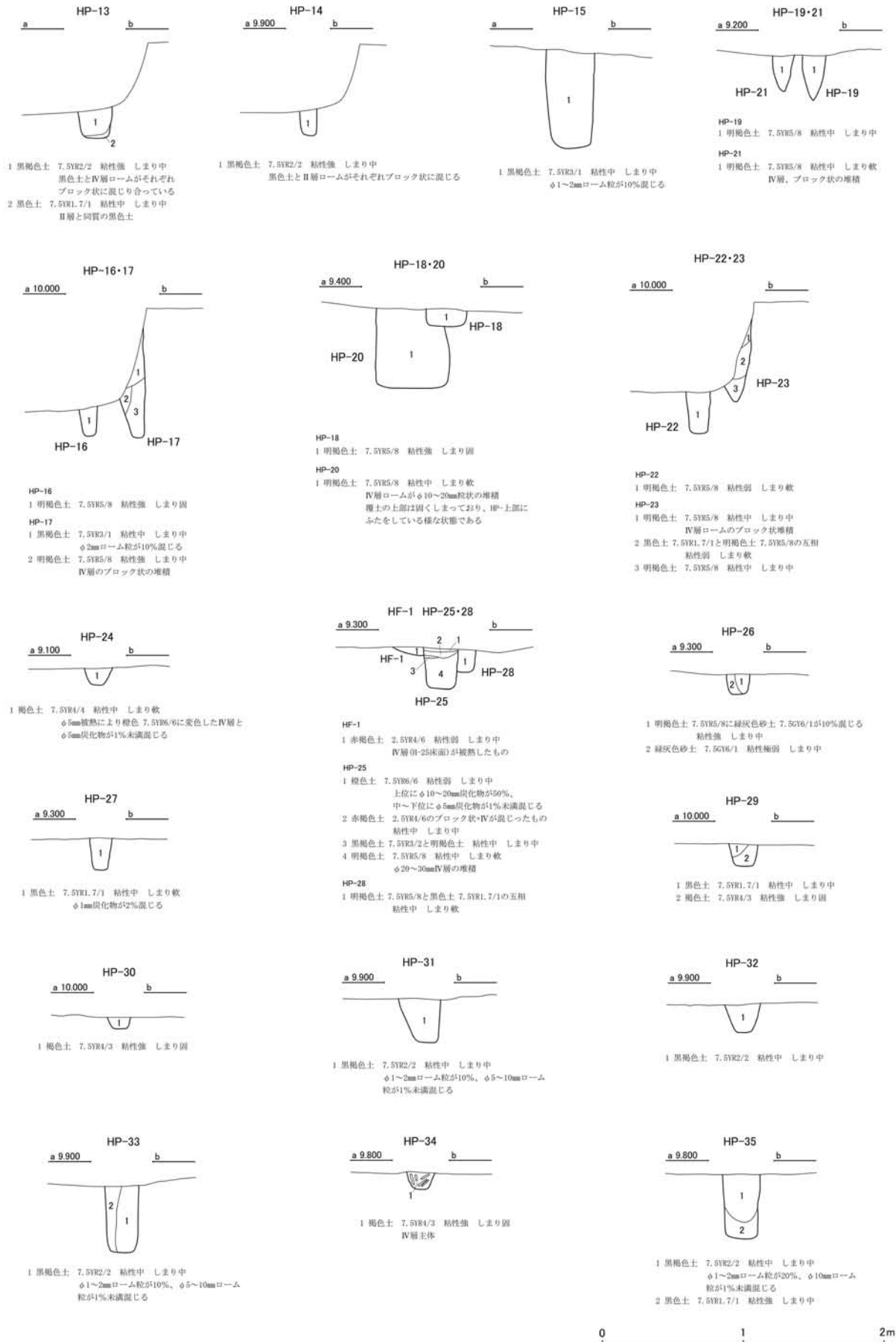
覆土 8 層



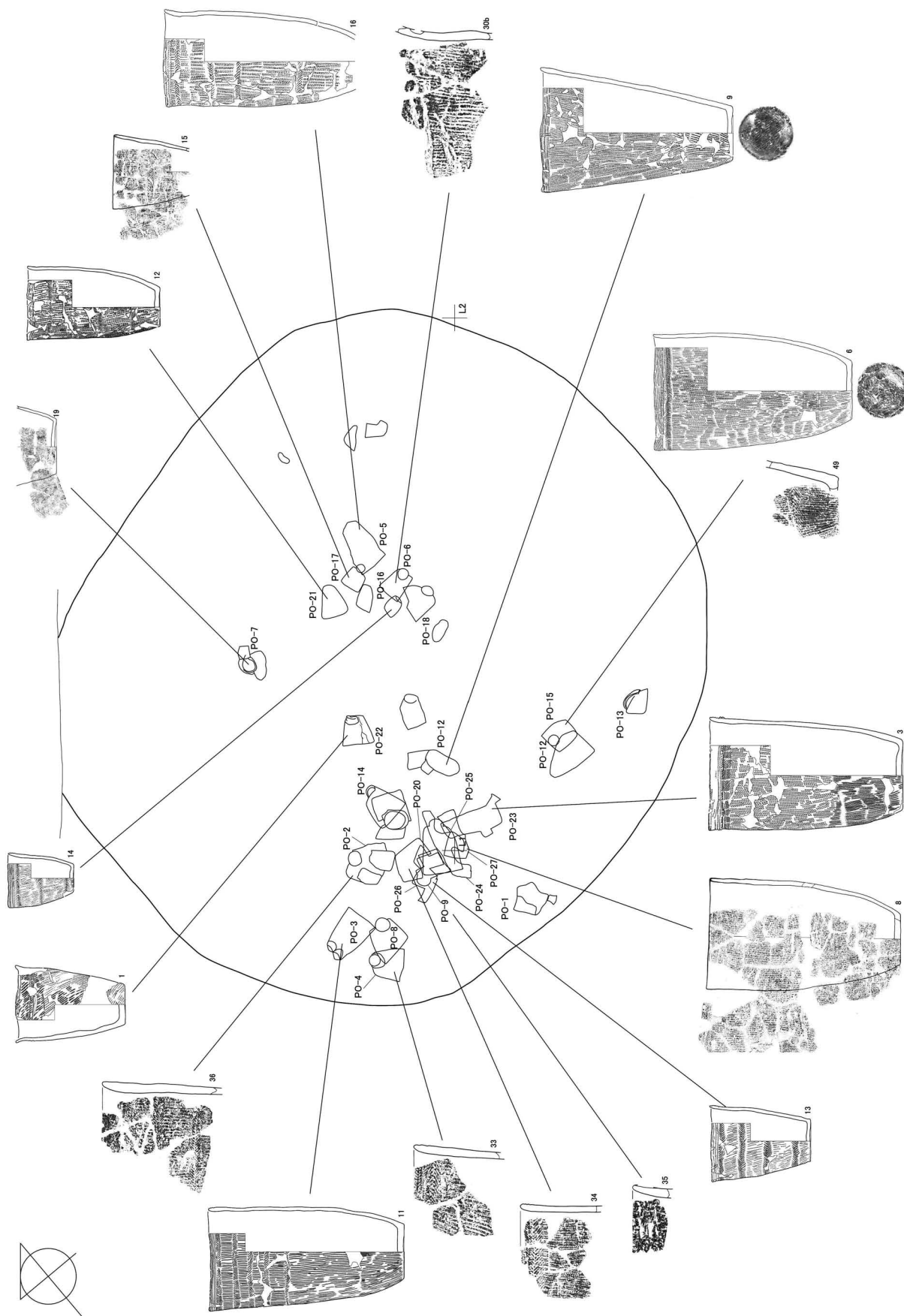
图IV-128 H-23 石器 (4) 覆土 8 層



図IV-130 H-25 セクション図 (1)

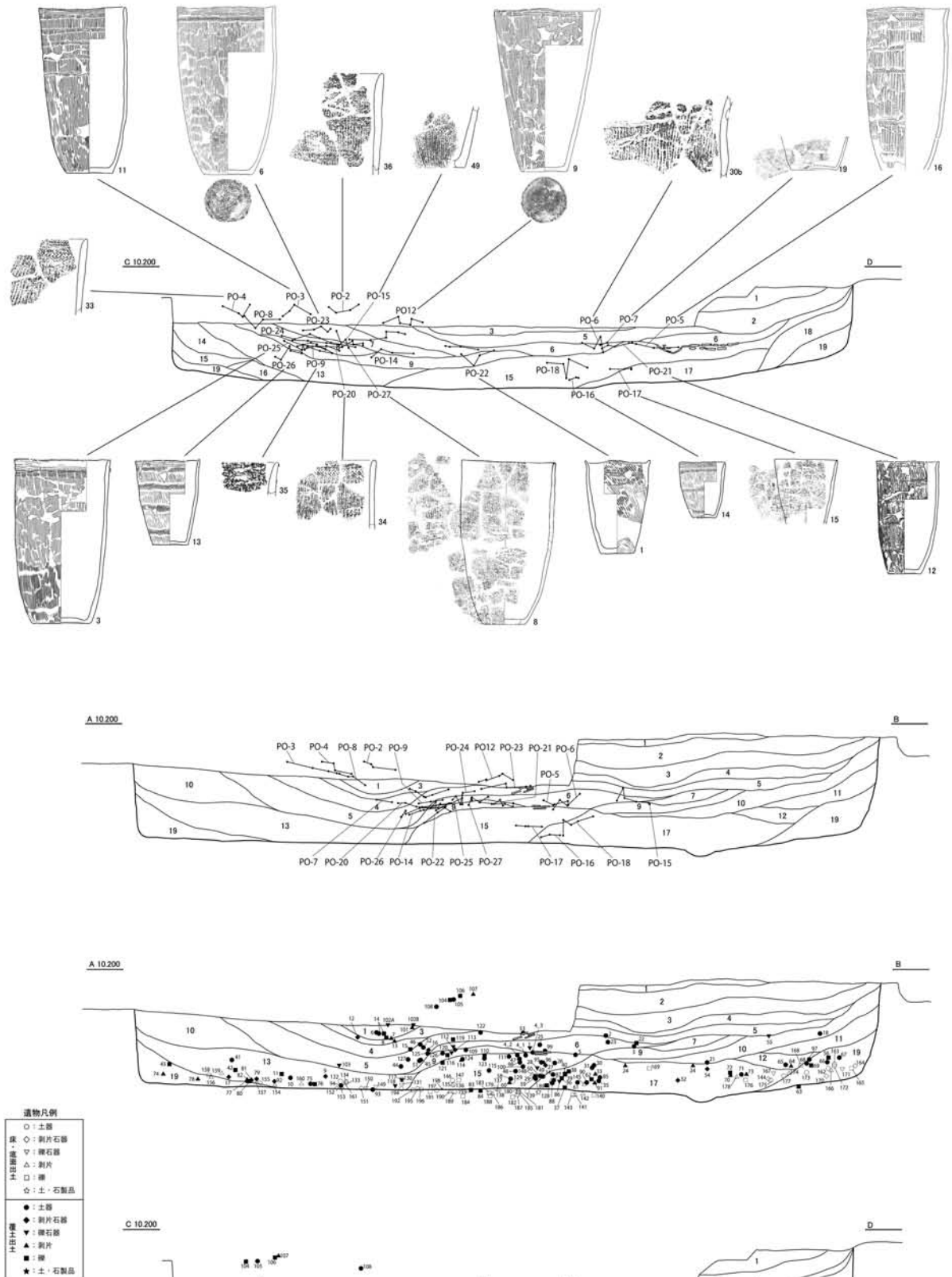


図IV-131 H-25 セクション図 (2)

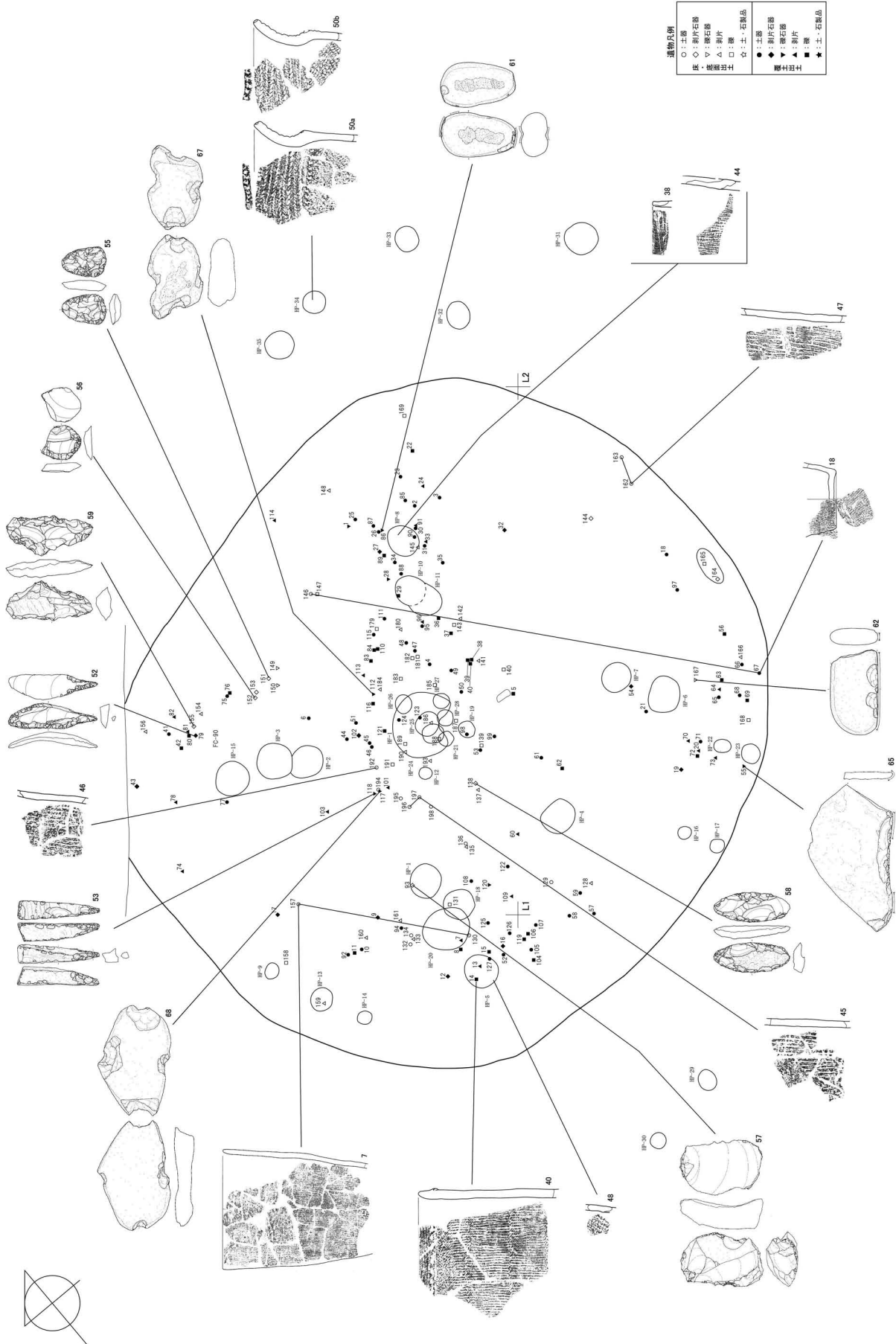


図IV-132 H-25 PO出土状況図

H-25 遺物垂直分布圖



圖IV-133 H-25 PO出土狀況圖 垂直分布圖



図IV-134 H-25 遺物出土状況図

頸部文様帯に曲線状の押引文が加えられている。27～29は縄端によるループ文が施されたもの。

Ⅱ群B-2類土器(30・31)：30は口縁部破片。平縁で、口頸部文様帯下端を2本一組の縄線で区画されている。文様帯には斜行縄文、体部には単軸絡条体の回転文が施されている。31は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

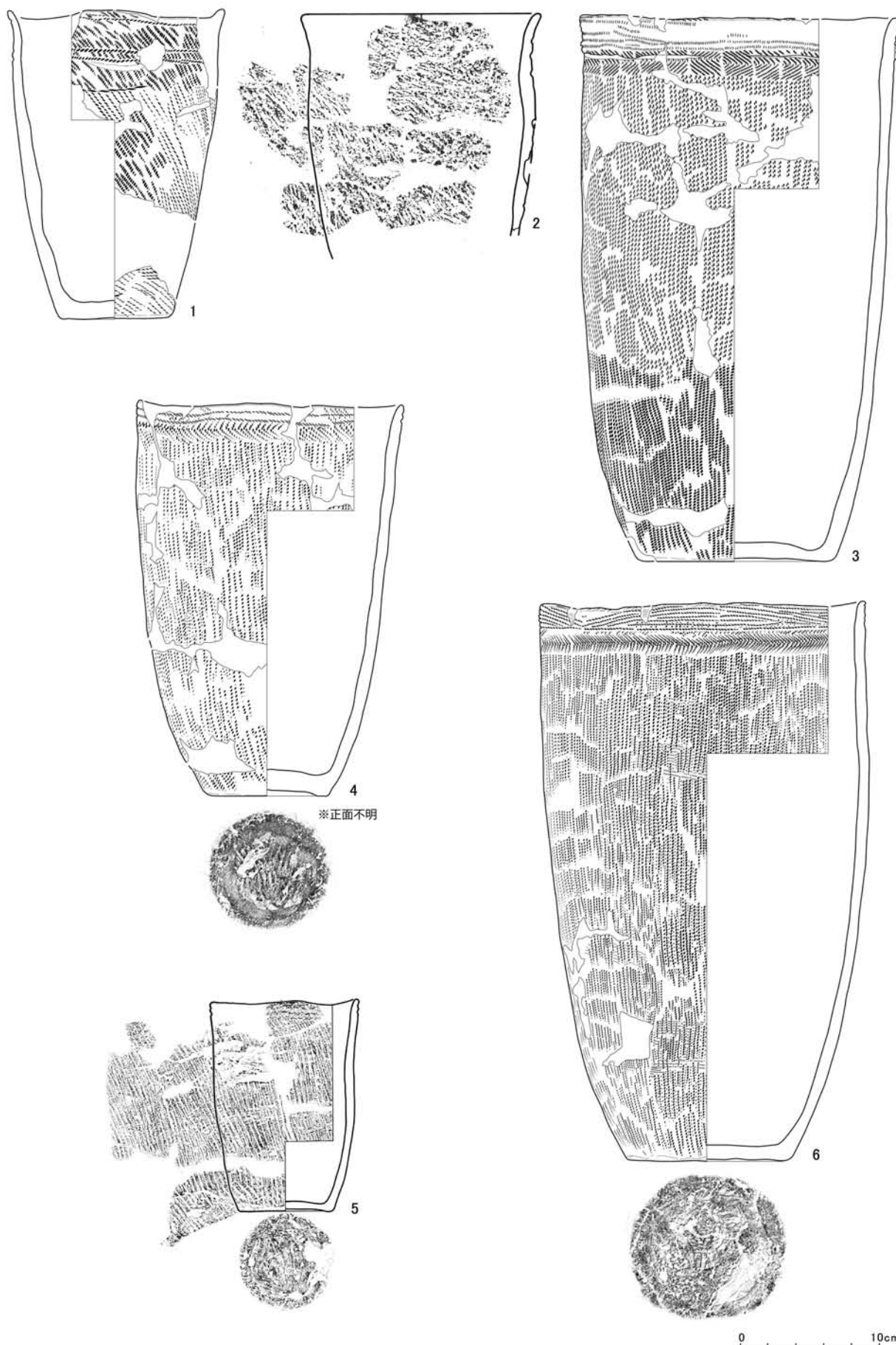
Ⅱ群B-3類土器(1・2・32・35・42)：1は波状口縁である。口頸部に斜行縄文が施され、口頸部文様帯の上下は縄線文で区画されている。体部には単軸絡条体の回転文と斜行縄文が施されている。2は器面に直前段反撚の縄文が施され、頸部は縄線文で区画されている。32は幅広の口頸部文様帯に結束羽状縄文が2段施文され、体部は単軸絡条体の回転文である。35は口縁部破片。縄線文で口頸部文様帯が区画され、文様帯に縄文が加えられている。42は頸部破片。無文地の文様帯に組紐状の縄線文が加えられ、体部には自縄自巻の縄文が施されている。

Ⅱ群B-4類土器(3～20・33・34・36～40・43～49)：3は口縁部文様帯下端を貼付帯と結束羽状縄文で区画され、文様帯には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。体部上半は複節、下半は単節の自縄自巻の原体の回転文が施されている。4～8・33・34は口縁部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に縄線文が加えられ、体部には自縄自巻の縄文が施されている。6の文様帯はやや幅広で、縄線文は山形に施文されている。9は緩やかな波状口縁で、無文地の文様帯に2本一組の縄線文が施され、波頂部から垂下する2本一組の縄線が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。10は体部下半を欠失する。緩やかな波状口縁である。器面に自縄自巻の縄文を施文した後、結節羽状縄文で文様帯下端を区画し、文様帯には縄線文が加えられている。11・13・15・16は口縁部下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせで施文しているもの。14・36・37は口縁部下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に縄線文が加えられている。体部は自縄自巻の縄文と結束羽状縄文を組み合わせで施文している。12は文様帯区画帯をもたないもの。幅の狭い文様帯には縄線文が加えられ、体部にはやや太めの単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせで施文している。17～20は単軸絡条体の回転文が施された底部。38・39は無文地の口頸部文様帯に縄線文が施されたもの。39の口頸部文様帯下端は貼付帯と結束斜行縄文によって区画されている。やや幅広の文様帯には縄線文で山形の文様構成を作出している。体部は単軸絡条体の回転文である。40は文様帯下端を刺突文が加えられた貼付帯・結束羽状縄文・2段の綾絡文で区画し、幅の狭い無文地の文様帯には縄線文が加えられている。44～48は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。43・49は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されたもの。43は体部破片、49は底部。

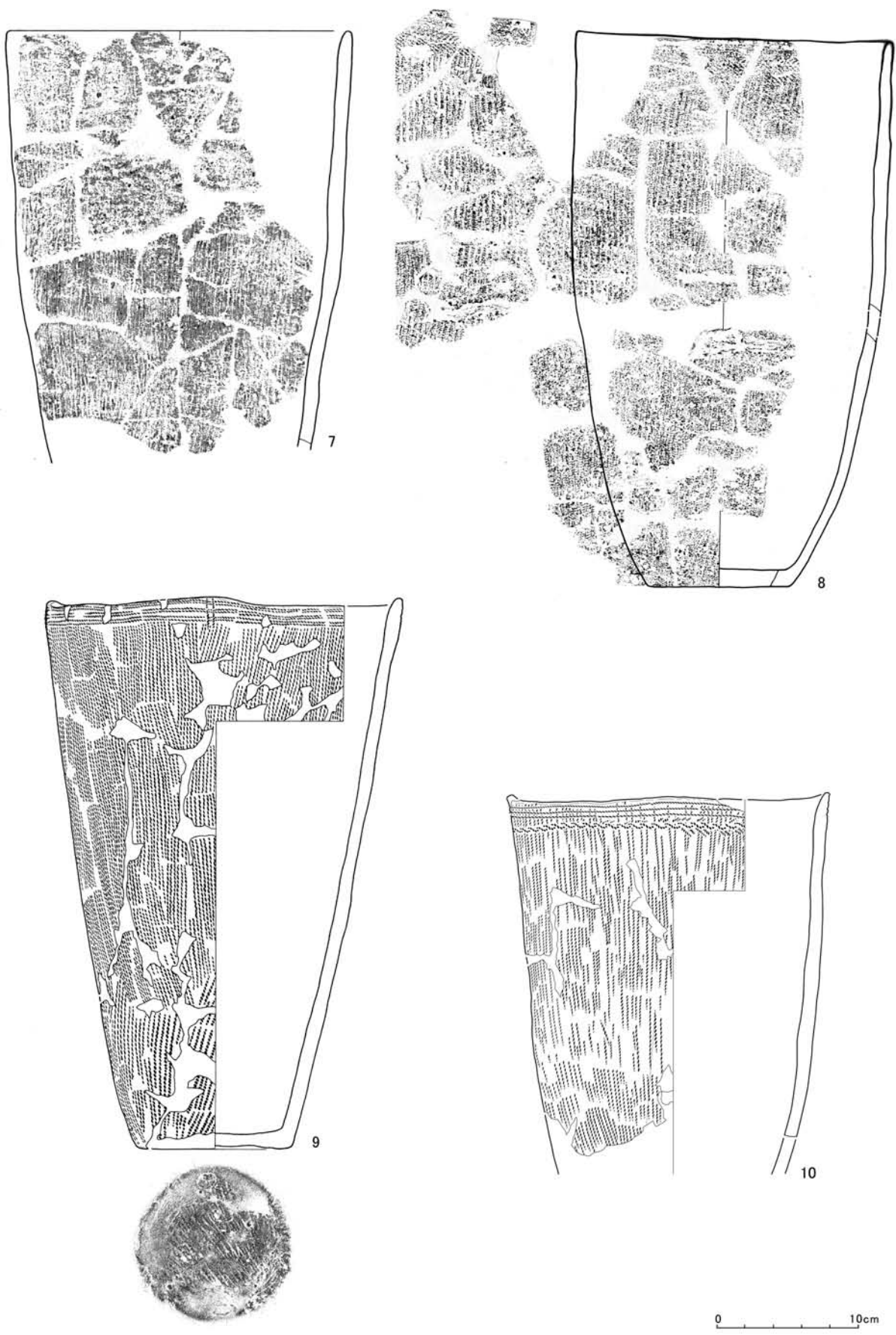
Ⅱ群B-5類土器(41・50)：41は幅広の大きくくびれる口頸部。文様帯下端は肩をもつ器形で、肩部分には細い棒状工具の刺突文で区画されている。無文地の文様帯には重層の菱目状の撚糸文が施されている。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせで施文している。50は幅広の大きくくびれる口頸部。文様帯下端は肩部分をもち、半截竹管状工具内面の刺突文で区画されている。無文地の文様帯には縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。

(小括) 本遺構からⅡ群B-4類土器の復原土器14個体が得られた。口頸部文様の文様構成が類似するものが多い。体部の縄文は「自縄自巻の縄文」と「単軸絡条体の回転文」が認められた。これらの特徴・相違点は以下のようにまとめられる。

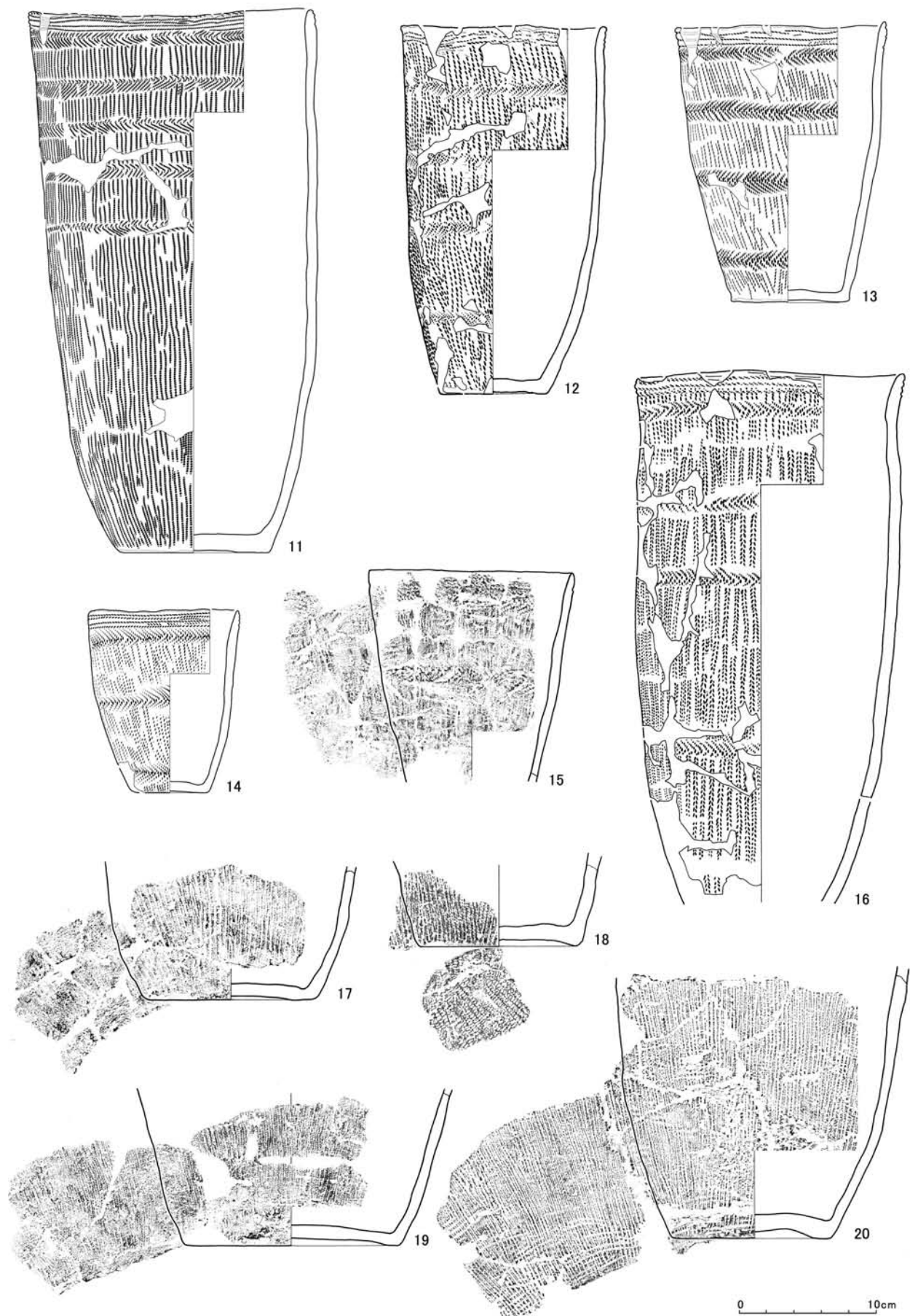
前者の体部文様は「自縄自巻の縄文」のみで施文され、後者は結束羽状縄文と組み合わせで施文しているものが多い傾向が窺えた。また、口頸部文様帯は、前者はやや幅広で、文様構成をもつものも認められる。後者は幅の狭い文様帯に縄線文のみが加えられているものが多い。後者の口唇断面は前者



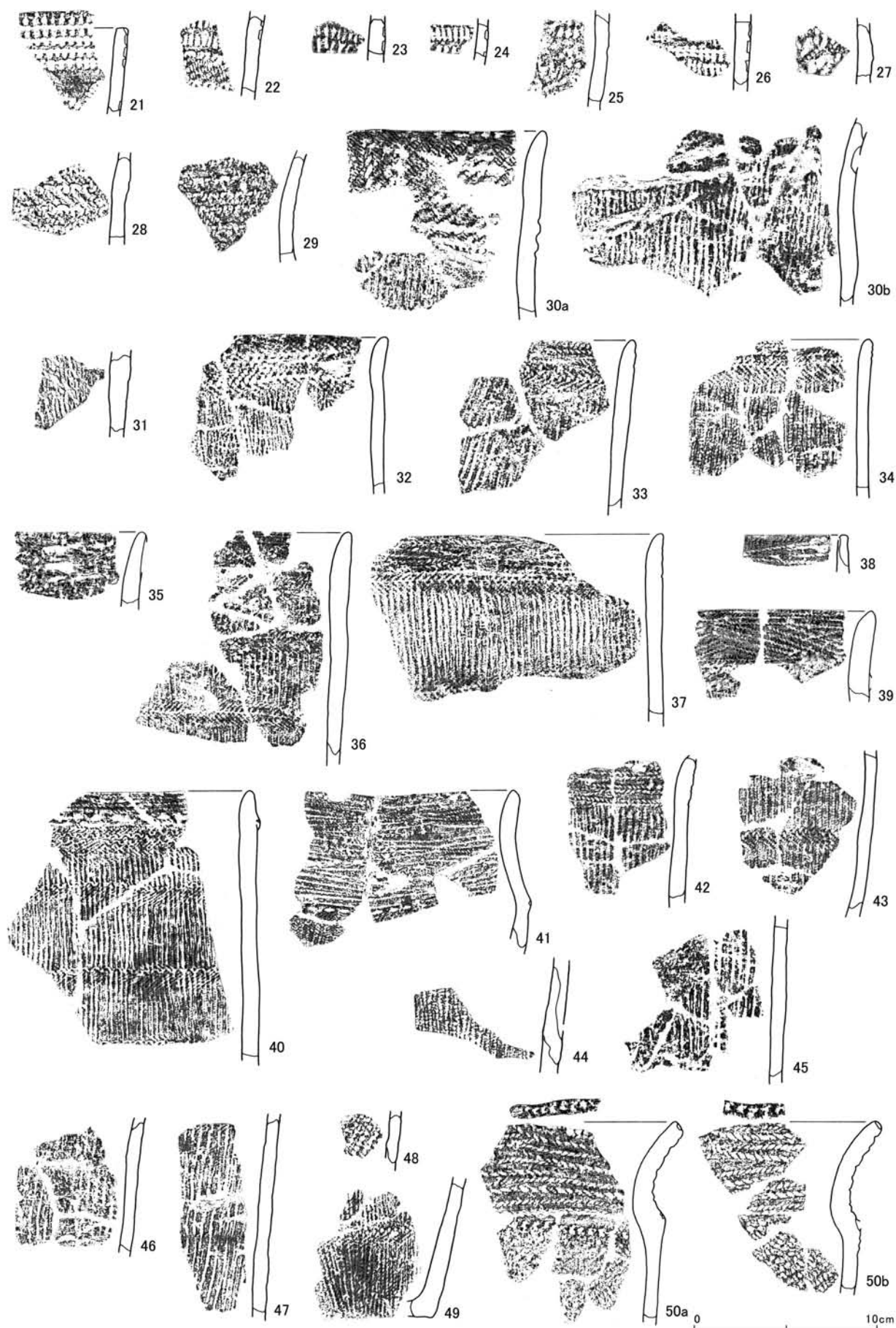
图IV-135 H-25 土器 (1)



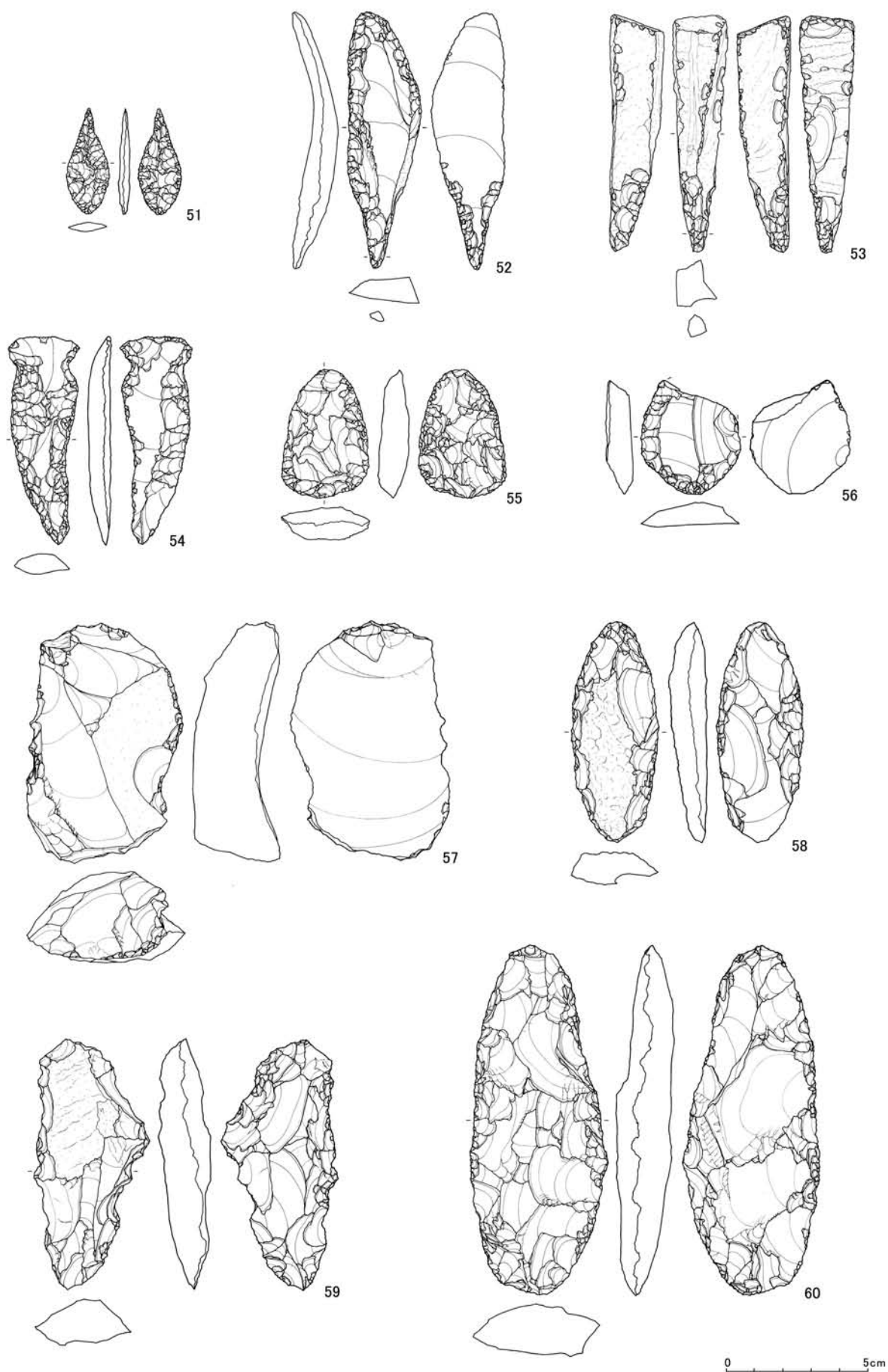
图IV-136 H-25 土器 (2)



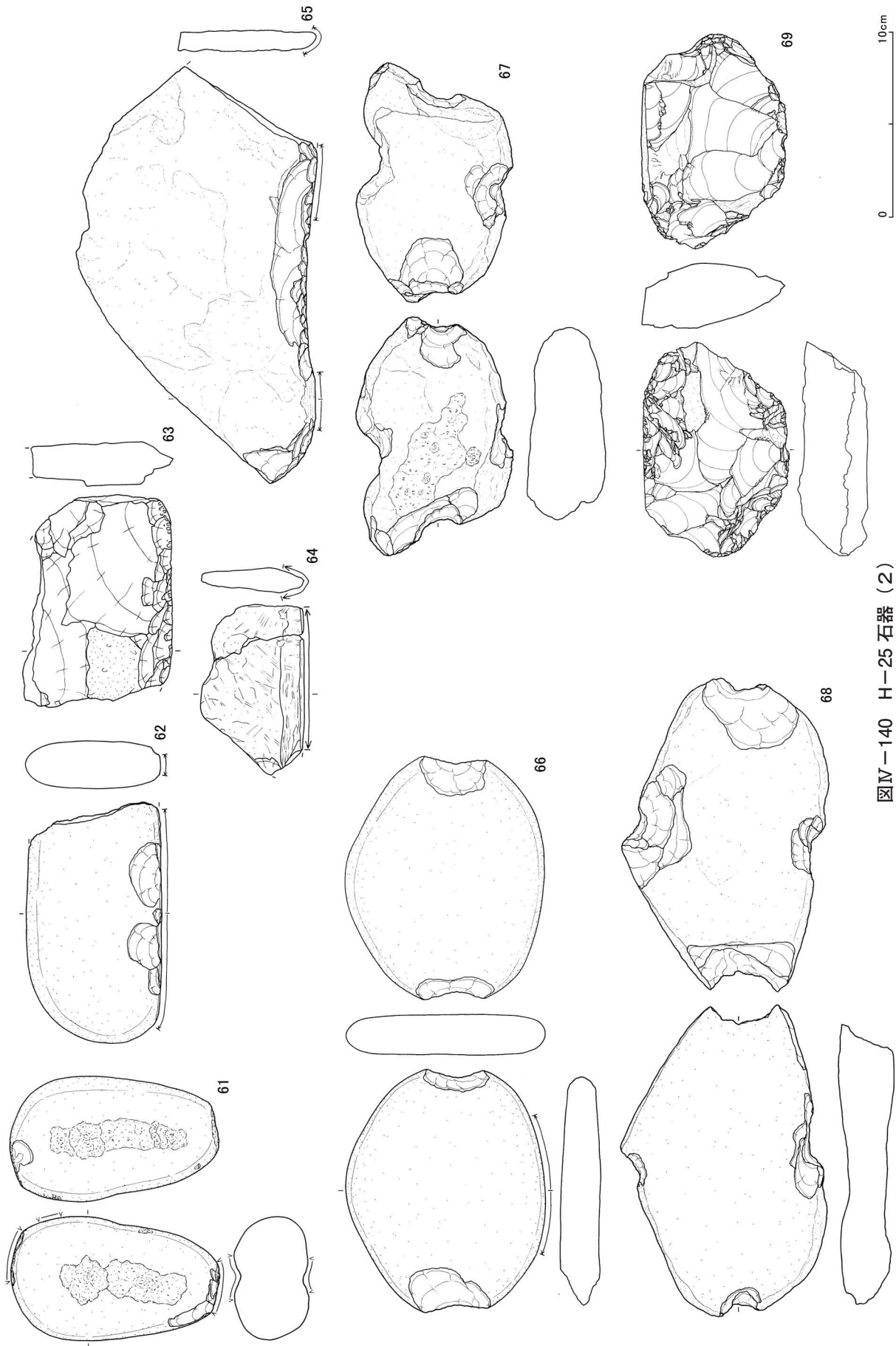
図IV-137 H-25 土器 (3)



图IV-138 H-25 土器 (4)



图IV-139 H-25 石器 (1)



图IV-140 H-25 石器 (2)

に比べやや肥厚する傾向が認められる。この様な違いが認められるが、時間差を示す層位的な違いは、本遺構では確認することができなかった。

(石器) 55・56・58・59・62～64は床面、54・60・69は覆土中、51・52・57・61・65は覆土下、53・66～68は覆土出土。51は石鏟。円基で涙滴形。頁岩製。52・53は石錐。52はつまみ部があり、縦長剥片の下部に両面加工で機能部を作出している。53は棒状原石の下部に機能部を作出している。いずれも頁岩製。54はつまみ付ナイフ。縦型で両面加工。頁岩製。55～57はスクレイパー。55は両面加工のへら状石器。56・57は側縁から下端まで刃部を作出しているもの。56は上半部を欠失している。すべて頁岩製。58～60は両面調整石器。58・60は紡錘形、59は不定形のもの。58・59は原石面が残存している。すべて頁岩製。61は凹み石。扁平な棒状礫の平坦面に断面円錐状の凹みがあるもの。両端部には敲打痕があり、たたき石との併用が考えられる。62・63はすり石。62は扁平な楕円礫の側縁に敲打によって幅の狭いすり面を作出している。砂岩製。63は扁平打製石器で長方形のもの。板状礫を長方形に整形し、長辺に幅の非常に狭い機能部を作出している。安山岩製。64・65は石鋸。板状礫の側縁に断面U字状のすり面がある。65は使用面を再加工して扁平打製石器のような非常に幅の狭い機能部を作出しようとしている。64は砂岩製、65は凝灰岩製。66～68は石錘。66は扁平な楕円礫の長軸両端を打ち欠いた2塊のもの。砂岩製。67・68は扁平な直角礫の四辺を打ち欠いた4塊のもの。67は平坦面に敲打痕がみられる。いずれも凝灰岩製。69は礫器。下部にV字状の刃部がある。石核の可能性もある。頁岩製。

H-26 (図IV-141～147、図版18・96～98)

位置：L・M 2・3区

規模：5.54 / 5.40×4.57 / 4.34×0.62m

確認・調査：IV層上面における標高10.00m程の平坦部に立地する。L・M 2・3区でII・III層を掘り下げたところ、IV層上面で東西に長く広がる黒色土の落ち込みを確認した。本遺構は、東側の黒色土の広がりである。長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、深さ0.6m程で床面と思われる平坦面と壁を確認した。このため住居跡と判断し調査を継続したところ、住居跡西側でH-27と切り合っていた。H-27の土層断面から、H-27が本住居跡を切っていることが判明した。PO-9の封土を採取してフローテーションを行ったが炭化種子は検出できなかった。

覆土：II下層中から掘りこまれている。すべて盛土が主体のもので、流れ込みによる自然堆積である。

平面形：楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

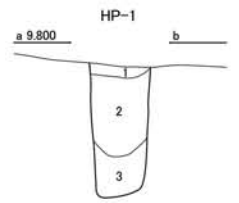
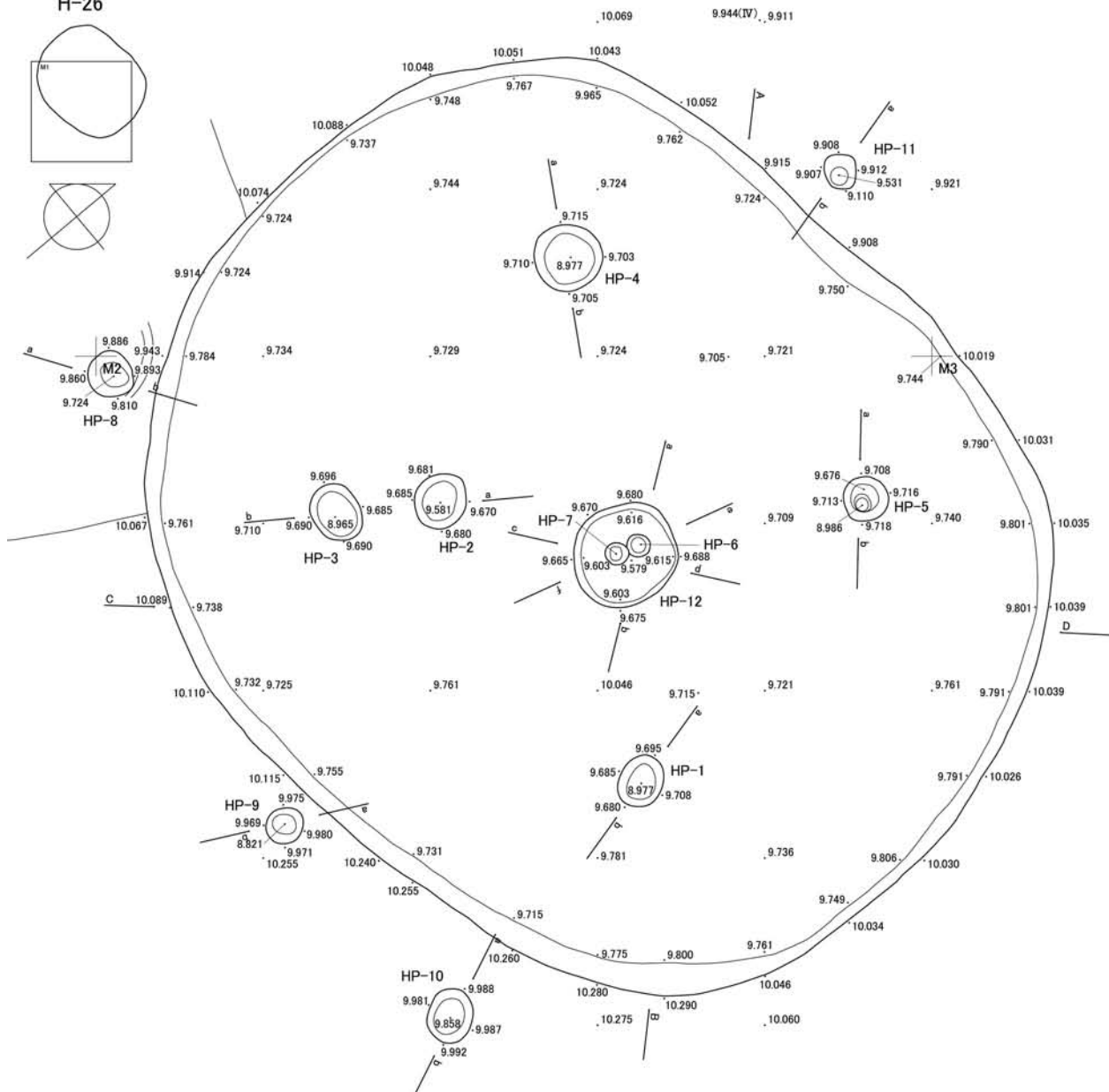
付属遺構：土坑1基(HP-12)と柱穴11基(HP-1～11)を確認した。土坑はほぼ中央に位置する。坑底は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がり覆土中にわずかだが炭化物が混じる。11基の柱穴のうち7基が住居跡内である。住居跡内の柱穴は、太くて深いもの(HP-1・3～5)、太くて浅いもの(HP-2)、細くて浅いもの(HP-6・7)である。このうち主柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から4本柱の住居と考えられる。また、住居跡外周に沿うように西～南側で3基、北側で1基の柱穴が確認された。屋根材を支える柱穴の可能性はある。炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：床面から石器等3点、HPから土器32点、石器等18点、覆土からII群B-4類土器など4,359点、石器等546点が出土している。

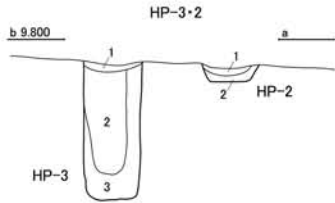
時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。(立川)

掲載遺物：(土器)柱穴状ピット(25・27・30)、覆土下(4・7・9・10・13・15・16・23・26・29)、覆土中(1～3・5・6・8・11・12・19～21・32)、覆土上(14・33)、覆土(18・22・24・28・31)から出土した。明確な床面出土の資料は認められなかった。

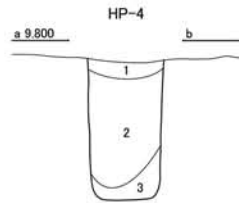
H-26



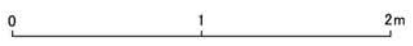
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり中
φ2mmローム粒が20%、φ2mm炭化物が1%
混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり中
1層とほぼ同質だが、IV層ロームがブロッ
ク状に混じる
- 3 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり軟
φ2mmローム粒が20%、φ2mm炭化物が1%
未混混じる。1層に類似する



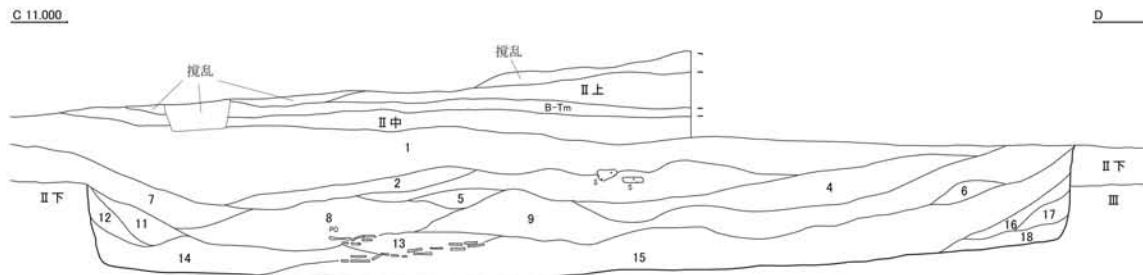
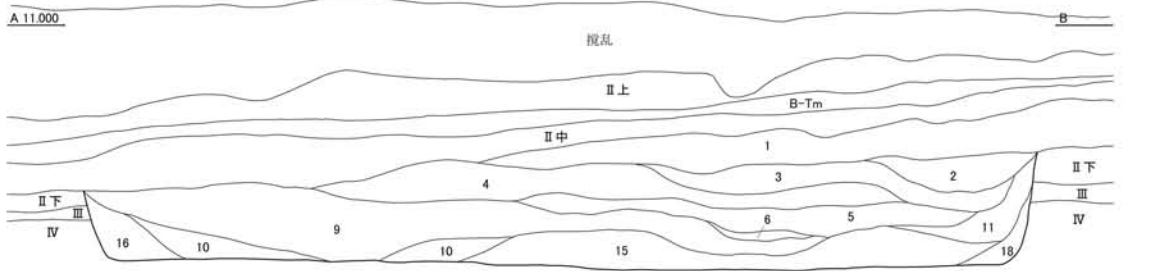
- HP-2
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり中
φ2mmローム粒が20%、φ2mm炭化物が1%
混じる
- 2 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 しまり固
IV層主体 わずかにII層が混じる
φ1mmの炭化物が1%混じる
- HP-3
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり中
φ2mmローム粒が20%、φ2mm炭化物が1%
混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり軟
1層とほぼ同じもの、わずかに色調が暗い
- 3 明褐色土 7.5YR5/8 IV層ソフトロームが主体
粘性弱 しまり軟
φ20mmローム粒が50%混じる



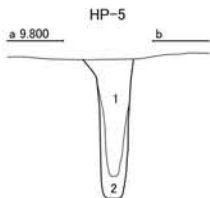
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり固
φ5炭化物が1%混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり軟
1層と同質だが、炭化物が混じらない
- 3 明褐色土 7.5YR5/8 粘性中 しまり軟
IV層ローム



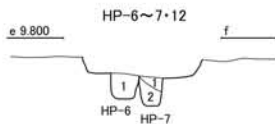
図IV-141 H-26



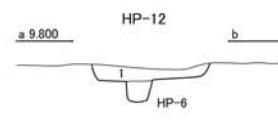
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中(盛土)
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中
1層よりIV層が多く混じる(盛土)
- 3 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ10~20mm程のロームブロックが5%混入 粘性強 しまり固
φ2~5mmの炭化物が5%混入
- 4 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中(盛土)
1層に類似するがII層が多く混じる
- 5 明褐色土 7.5YR5/6 IV層ローム主体 粘性強 しまり固(盛土)
- 6 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が25%混入 粘性中 しまり中
- 7 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中(盛土)
- 8 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中
φ10~20mmの炭化物が2%混入(盛土)
- 9 極暗褐色土 7.5YR2/3 φ10~20mm程のロームブロックが5%混入 粘性強 しまり固
φ2~5mmの炭化物が5%混入
- 10 黒褐色土 7.5YR2/2 φ2mm程のローム粒が2%, φ1~2mmの炭化物が1%未混入 粘性中 しまり中
- 11 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中(盛土)
- 12 黒色土 7.5YR1/7/1 II層の流れ込み 粘性中 しまり弱
- 13 褐色土 7.5YR4/4 IV層ローム主体 φ5~10mm程の炭化物1%混入 粘性強 しまり中
- 14 黒褐色土 7.5YR3/2 φ1mm程のローム粒が20%混入 粘性中 しまり中
- 15 黒褐色土 7.5YR5/6 4層と同じもの
- 16 極暗褐色土 7.5YR3/2 12層と類似 ローム粒がわずかに多く混じる 粘性中 しまり中(盛土)
- 17 黒褐色土 7.5YR5/6 15層と同じもの
- 18 黒褐色土 7.5YR3/2 14層と同じもの



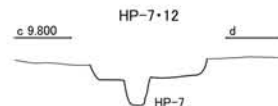
- 1 黒色土 7.5YR2/1 粘性中 しまり軟
φ1~2mmローム粒が10%混じる
- 2 明褐色土 7.5YR5/6 粘性中 しまり軟
IV層と同質



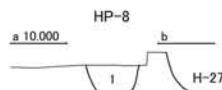
- HP-6**
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり軟
φ2mmローム粒が20%, φ2mm炭化物1%
未混入
- HP-7**
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり軟
φ2mmローム粒が20%, φ2mm炭化物1%
未混入
- 2 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 しまり固
φ2mmローム粒が30%, φ10~20mmローム
粒が10%, φ5mm炭化物が2%混入



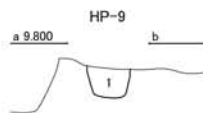
- HP-12**
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 しまり固
φ2mmローム粒が30%, φ10~20mmローム
粒が10%, φ5mm炭化物が2%混入



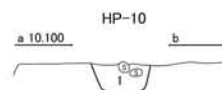
- HP-7.12**
- 1 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 しまり中
φ10mmローム粒が5%混じる



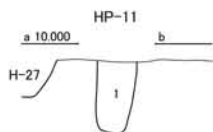
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性強 しまり固
φ10mmロームが10%, φ5mm炭化物が1%未
混入



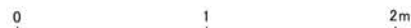
- 1 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 しまり中
φ10mmローム粒が5%混じる



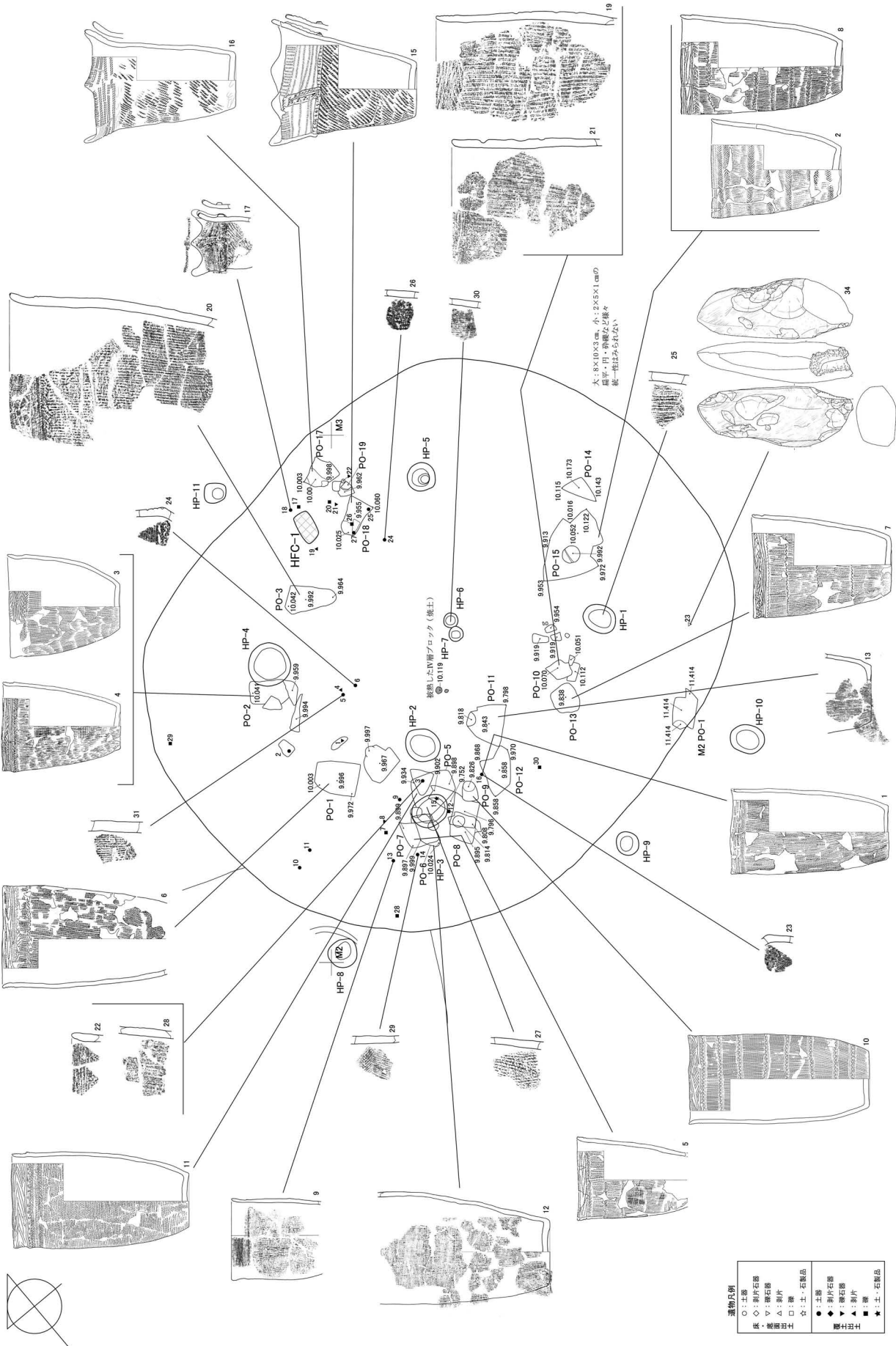
- 1 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 しまり中
φ10mmローム粒が5%混じる



- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 しまり軟
φ1~2mmローム粒が20%混じる

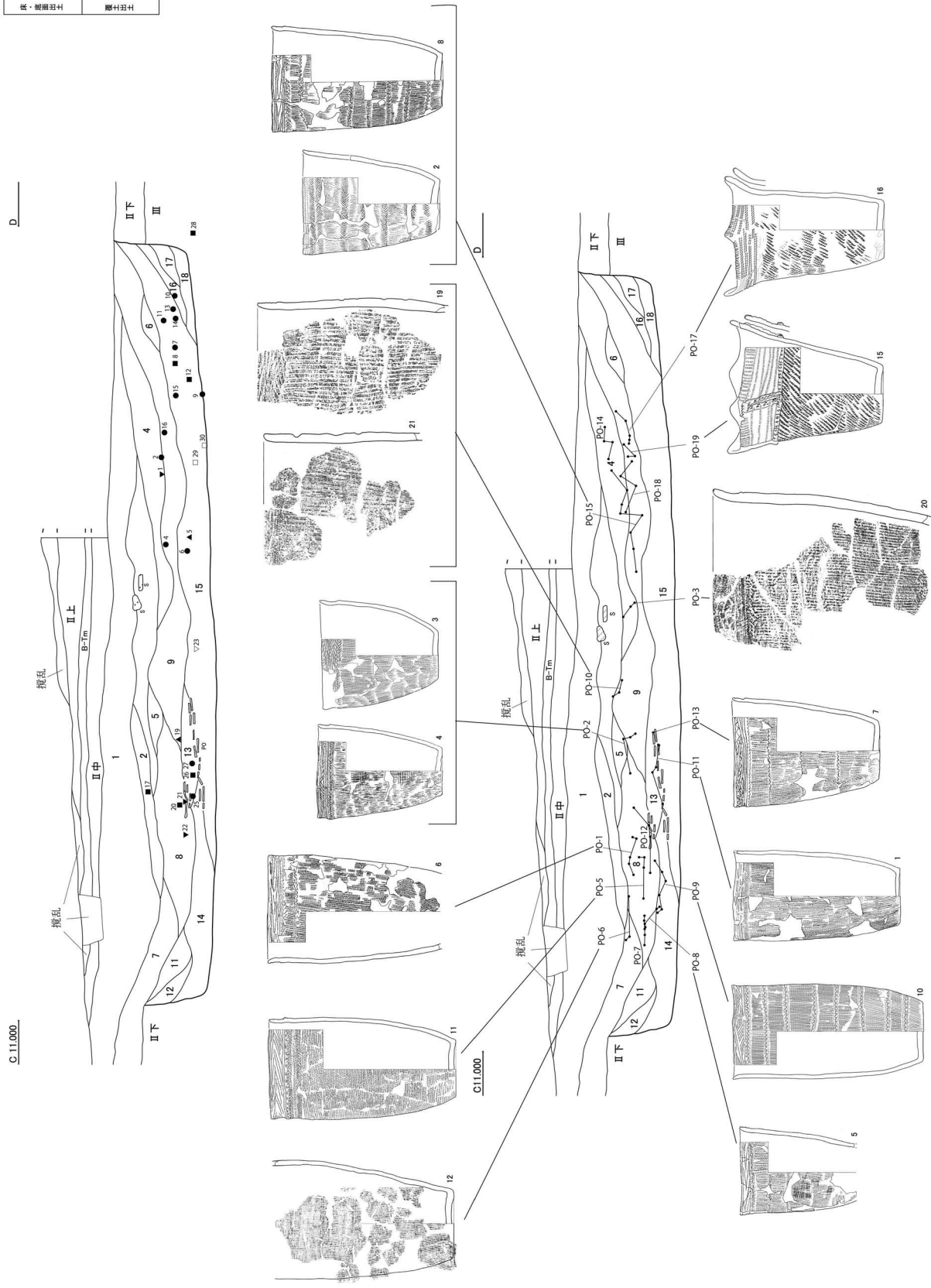


図IV-142 H-26 セクション図



図IV-143 H-26 遺物出土状況図

- 遺構凡例
- ：土器
 - ◇：陶片石路
 - ▽：礫石路
 - △：陶片
 - ：溝
 - ：土器
 - ◆：陶片石路
 - ▼：礫石路
 - ▲：陶片
 - ：溝
 - ★：土器石路品



図IV-144 H-26 PO垂直分布図

18はⅡ群A類土器、1～14・19～33はⅡ群B類土器で、1～13・19～32はⅡ群B-4類土器、14・33はⅡ群B-5類土器、15～17はⅢ群A類土器である。

Ⅱ群A類土器(18)：18は全面に篋状工具による押し文が施された体部破片。

Ⅱ群B-4類土器(1～13・19～32)

口頸部文様帯の下端が結束羽状縄文で区画されているもの(1・2)：いずれも体部は単軸絡条体の回転文である。1は口縁文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に縄線文が加えられている。2は口縁文様帯下端を2段の結束羽状縄文で区画し、文様帯には縄線文が加えられる。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせて施している。

結節羽状縄文で区画されているもの(3～8・10・20～22)：3・4・20・21は体部に結節羽状縄文が無いもの。3・20の体部は単軸絡条体の回転文である。4の体部には自縄自巻の縄文が施されている。いずれも口頸部文様帯がやや幅広で、1～2本一組の縄線で菱目状ないし山形の文様構成が作出されている。21の体部は組紐的な単軸絡条体の回転文が施されている。5～8・10は体部に単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせているもの。5・6の体部には組紐状の原体による単軸絡条体の回転文である。いずれも無文地の文様帯に矢羽状の縄線文が施されている。7・8・10は単軸絡条体の回転文である。22は結節羽状縄文で文様帯が区画され、文様帯に縄線文が加えられているが、体部は不明である。

縄線が加えられた肩部分で文様帯が区画されているもの(9)：9は縄線が加えられた肩部分で文様帯が区画され、無文地の文様帯に弧線状の縄線文が施される。体部は単軸絡条体の回転文である。

結節羽状縄文と貼付帯で文様帯が区画されているもの(11)：11の口頸部文様帯は、刺突の加えられた貼付帯と下位の結節羽状縄文で区画され、無文地の文様帯には矢羽状の縄線文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。

区画帯をもたないもの(19)：19の口縁部は斜位に、体部は縦位に単軸絡条体の回転文が施されているものである。

12・13は体部下半で、口頸部の文様構成が不明なもの。12は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文、13は単軸絡条体の回転文が施されている。23～32は頸部から体部にかけての破片資料。23・24は口頸部下端の肩部分。23は結節羽状縄文、24は刺突文と結節羽状縄文が施されている。25は体部破片。自縄自巻の縄文と結束羽状縄文を組み合わせたもの。26～32は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。25・26・29は結束羽状縄文が加えられている。

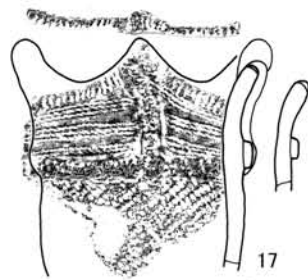
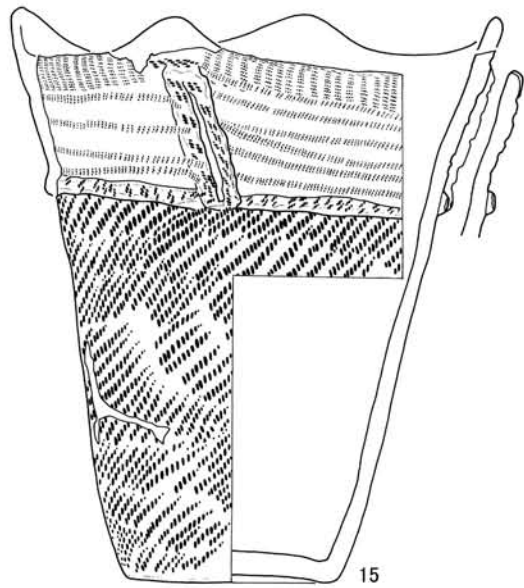
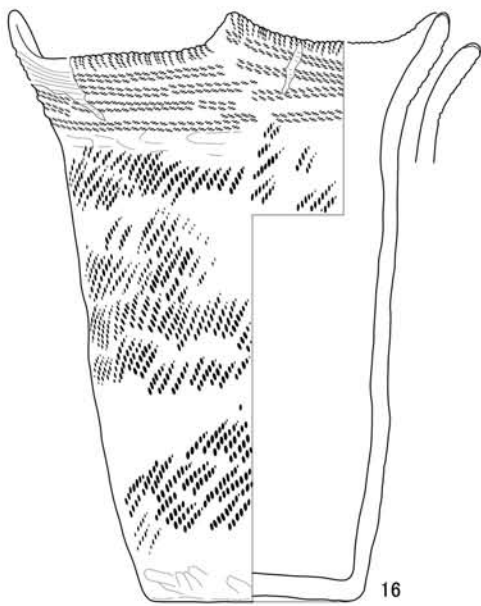
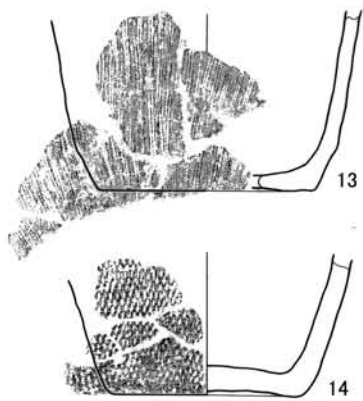
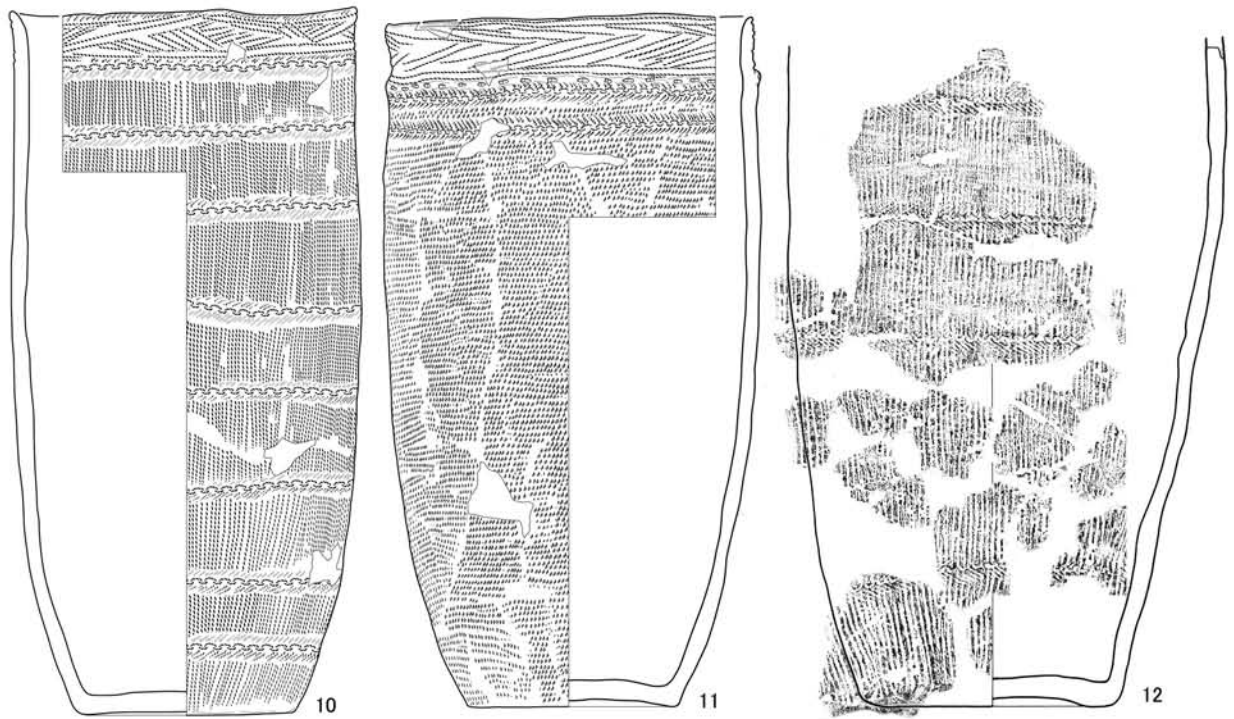
Ⅱ群B-5類土器(14・33)：14・33は多軸絡条体の回転文が施されているもの。14は底部、33は体部破片で、結節羽状縄文が加えられている。Ⅱ群B-4類土器の可能性もある。

Ⅲ群A類土器(15～17)：15は波状口縁で、口唇外面に単軸絡条体の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端を縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画し、無文地の文様帯を作出している。文様帯には波頂部から垂下する縄の圧痕が加えられた2本一組の貼り付けと単軸絡条体の圧痕文が加えられている。体部は斜行縄文である。16は片流れの波頂部をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。無文地の口頸部文様帯には片流れの波頂部に沿って2本一組の縄線文が加えられている。縄線文施文後、下位にナデ調整が加えられ、無文帯を作り出している。体部は斜行縄文である。17は波状口縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画し、無文地の文様帯には波頂部から垂下する縄の圧痕が加えられた貼付帯と3本一組の縄線文が加えられている。体部は斜行縄文である。

(小括) 本遺構出土のⅡ群B-4類土器の特徴は

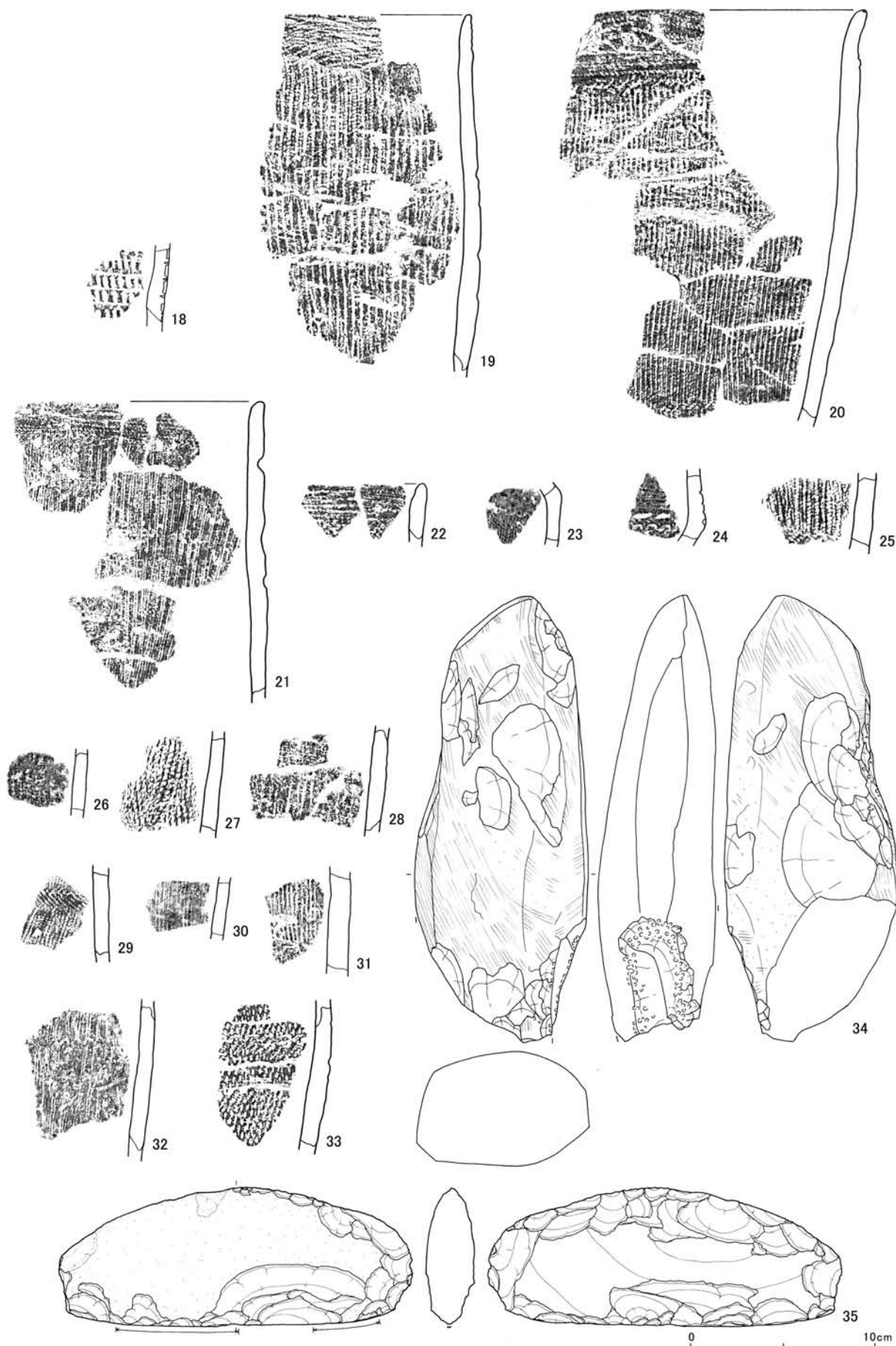


图IV-145 H-26 土器 (1)



0 10cm

图IV-146 H-26 土器 (2)



图IV-147 H-26 土器 (3) 石器

- ・口頸部文様帯下端の「区画帯として結節羽状縄文」が用いられたものが多い。
- ・文様帯も比較的幅広で縄線で矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文が施されている。
- ・体部は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせで施文しているものが多い。
- ・結節羽状縄文と刺突文を区画帯とし、体部に多軸絡条体の回転文が施された例を伴う。

以上のようにまとめられる。Ⅱ群B-4類土器はH-25から14個体の復原土器が得られている。そのうちH-26のⅡ群B-4類土器の特徴である「区画帯として結節羽状縄文」のものは1個体で、結束羽状縄文が多用され、貼付帯も認められる。そして、文様帯が狭く、文様帯には横環する縄線文が施文されたものや文様構成をもたないものが多い。体部は自縄自巻の縄文が多く認められる。これらには時間差が想定される「まとまり」と考えることができそうである。

(石器) 34は床面直上、35は覆土出土。34は石斧。刃部を折損している。打ち欠いて整形したのち全面を研磨している。砂岩製。35はすり石で扁平打製石器。楕円礫を打ち割って薄くしたのち、周縁を打ち欠いて半円状に整形している。弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出している。長軸両端に打ち欠きがある。安山岩製。

H-27 (図IV-148、図版19・98)

位置：L・M 1・2区

規模：(4.25) / (4.11) × 3.04 / 2.94 × 0.18m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高10.10m前後の平坦面に立地する。L・M 1・2区のⅡ・Ⅲ層を掘り下げたところ、Ⅳ層上面で東西に長く広がる黒色土の落ち込みを確認した。本遺構は、西側の黒色土の広がりである。長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、深さ0.2m程で床面と思われる平坦面と壁を確認した。このため住居跡と判断し調査を継続したところ、東側でH-26と切り合った。土層断面から、本住居跡がH-26を切っていることが判明した。

覆土：覆土1・2層は、盛土主体のものである。3層はⅡ層主体のものであるが、多量のⅣ層ローム粒が混じる。わずかだが炭化物が混じる。いずれも流れ込みによる自然堆積である。

平面形：楕円形と推定される。Ⅱ下層中から掘りこまれている。深さ0.18mである。床面はⅣ層を浅く掘り込んでおり、遺構中央部でわずかに起伏が見られるがほぼ平坦である。壁は、緩く立ち上がる。残存部分については全周で明瞭に確認できる。

付属遺構：土坑1基(HP-5)と柱穴4か所(HP-1~4)を確認した。HP-5は東側にあり、北東側に位置するHP-4と南東側に位置するHP-3の間に位置する。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴は、太くて深いもの(HP-3)、太くて浅いもの(HP-1)、細くて深いもの(HP-2・4)である。確認された位置と配列からいずれも主柱穴と考えられ、4本柱の住居と考えられる。炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：HPからⅡ群B-4・5類土器など9点、石器等64点、覆土からⅡ群B-4・5類土器など163点、石器等395点が出土している。

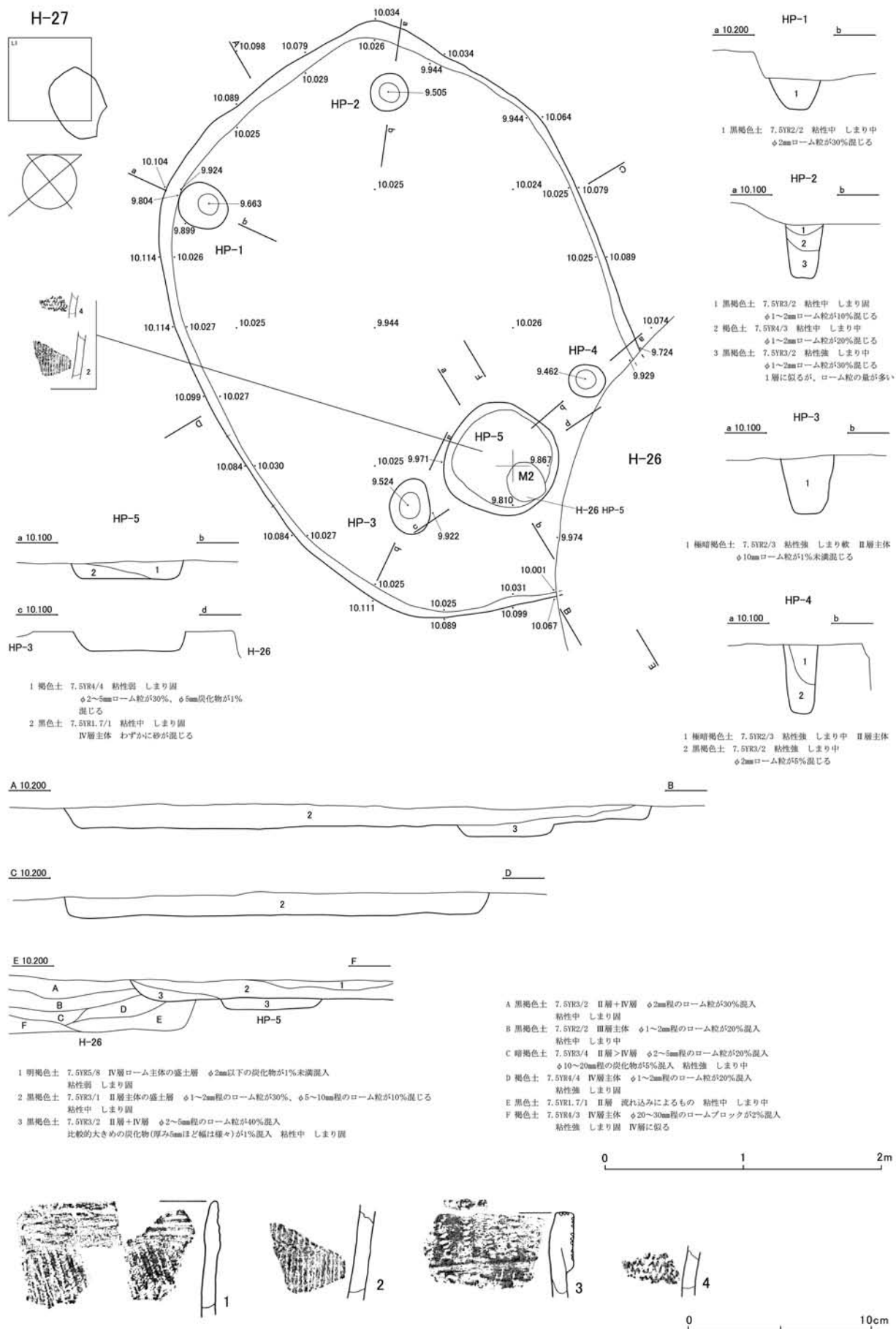
時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。

(立川)

掲載遺物：(土器) 2・4はHP-1出土、1・3は覆土出土である。

Ⅱ群B-4類土器(1・2)：1は口縁部破片。切り出し状に肥厚した口縁部に貝殻条痕文、体部に自縄自巻の縄文を施している。2は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせた体部破片。

Ⅱ群B-5類土器(3・4)：3は口縁部破片。口唇と口縁部肥厚帯に単軸絡条体の圧痕文が、体部に条痕文が施されている。4は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。



図IV-148 H-27

H-28 (図IV-149～158、図版20・98～101)

位置：P95・96、Q95～97区

規模：(5.87) / (5.89) × 7.84 / 7.70 × 0.93m

確認・調査：IV層上面における標高9.8m前後の平坦面に立地する。P・Q95～97区のⅡ・Ⅲ層を掘り下げたところ、IV層上面で調査区東側境界と接する半円状の黒色土の落ち込みを確認した。そのため調査区境界の壁とそれに直交するように土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、深さ1.0m程で床面と思われる平坦面と壁を確認した。このため住居跡と判断し調査を継続した。東側の半分ほどが調査区外に位置する。

覆土：覆土上位はⅡ層、下位は盛土を主体とするもの。いずれも、流れ込みによる自然堆積である。

平面形：確認された形状から隅丸方形ないし楕円形と推定される。深さは、1.0m程である。Ⅱ下層中から掘りこまれている。床面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構：土坑1基(HP-21)、20か所の柱穴、3か所の焼土、1か所の炭化物のまとまりを確認した。土坑(HP-21)は住居跡のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈する。坑底は平坦、壁は比較的急角度で立ち上がる。柱穴は、太くて深いもの(HP-2・8・12・15・16・18)、中くらいで深いもの(HP-3～5・9・11・13・14・17)、中くらいで浅いもの(HP-6・7)、細くて深いもの(HP-10・20)、細くて浅いもの(HP-1・19・20)である。このうち主柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から、6本ないし8本柱の住居と考えられる。また、東側の半分ほどが調査区外に位置するため、柱穴の数はこれ以上に多いと思われる。3か所の焼土のうち、HF-2・3は柱穴中からの検出で下位に被熱層がみられないことから、投棄によるものと思われる。HF-1は床面に被熱がみられることから炉の可能性はある。ただし、HP-13によって切られている。炭化材のまとまりは、径5～10mm程の炭化物で下位に被熱層はみられない。このため、炉に伴うものではないと考えられる。

遺物出土状況：床面からⅡ群B-4類土器など34点、石器等13点、HPからⅡ群B-4類土器など297点、石器等39点、覆土からⅡ群B-5類土器など3,883点、有孔土製円板2点、石器等1,642点が出土している。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。(立川)

掲載遺物：(土器) 29・31・37・39・48は床面出土、他は覆土出土である。1・24・25はⅡ群A類土器、34はⅡ群B-2類土器、26・27はⅡ群B-3類土器、2～8・28～31・35～45・49はⅡ群B-4類土器、9～23・32・33・46～48・50～55はⅡ群B-5類土器である。

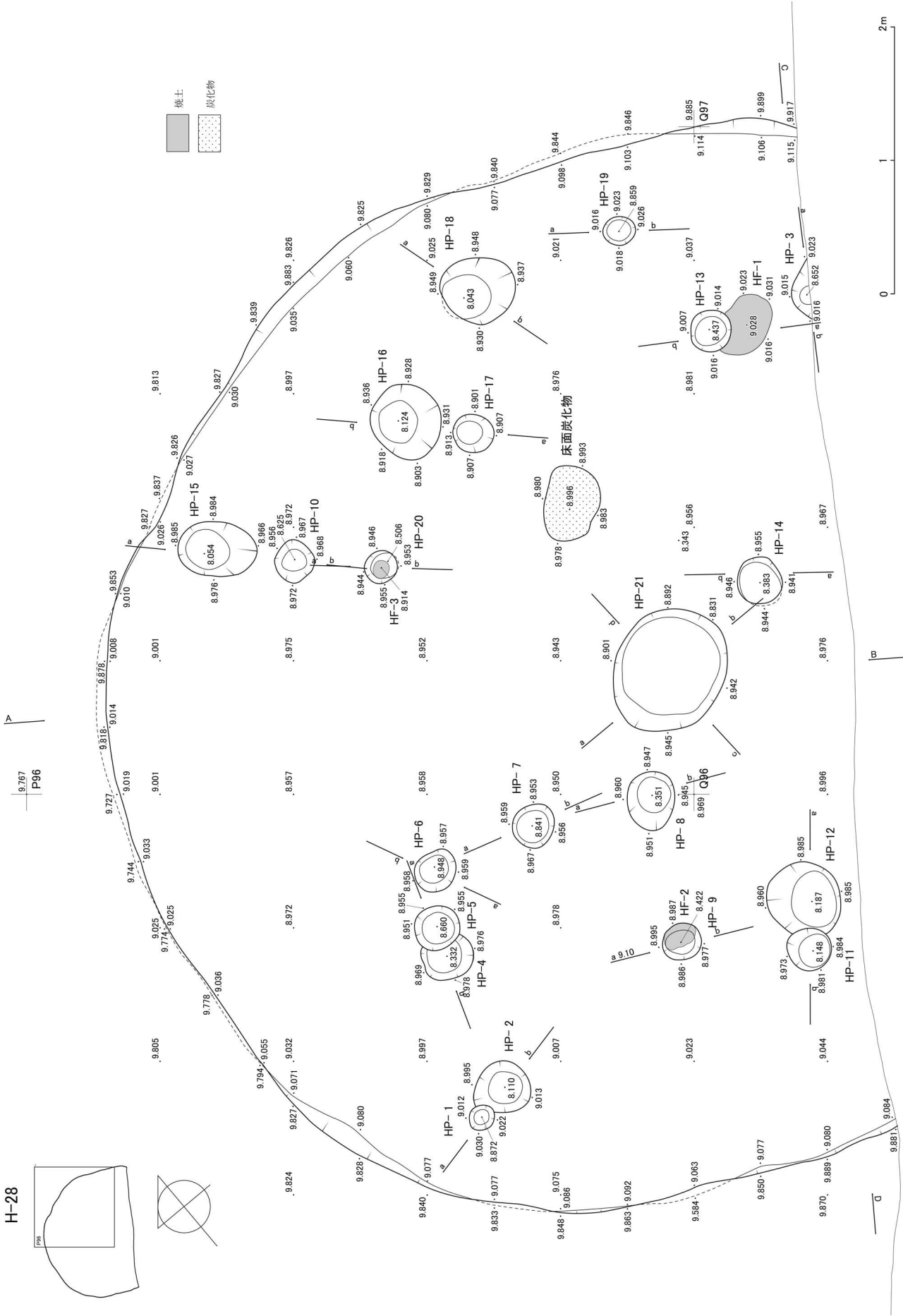
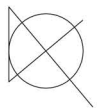
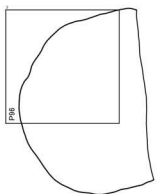
Ⅱ群A類土器(1・24・25)：1は底部下端に押引文が施された底部。24・25は同一個体で、口縁部の上下を2本一組の押引文で区画し、口縁部文様帯を作出している。文様帯には「ワラビ」状の押引文が加えられている。体部は羽状縄文である。

Ⅱ群B-2類土器(34)：34は頸部破片。文様帯下端の肩部分が大きく張り出す器形である。肩部分には刺突文が加えられている。頸部には直前段反撚による縄文、体部には単軸絡条体の回転文が施されている。

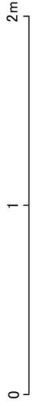
Ⅱ群B-3類土器(26・27)：26は口縁部破片。口頸部に貝殻条痕文、体部には直前段反撚ないし単軸絡条体第5類の回転文が施されている。27は口頸部破片。文様帯には綾絡文が施されている。

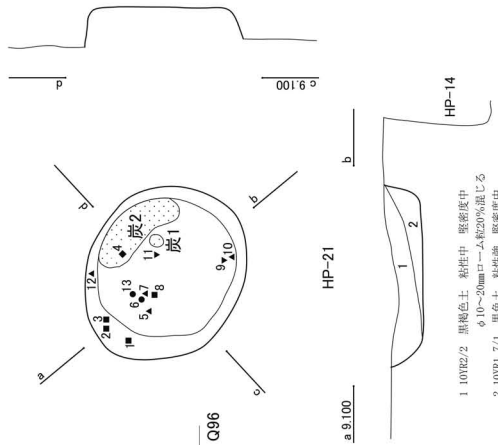
Ⅱ群B-4類土器(2～8・28～31・35～45・49)：2は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施された体部下半。3は自縄自巻の縄文と縦位の結束羽状縄文が施された体部破片。4・5は体部下半。4は自縄自巻の縄文と結束羽状縄文、5は単軸絡条体の回転文である。6・7は底部破片。6は自縄自巻の縄文、7は単軸絡条体の回転文である。8は底部を欠失する。口頸部文様帯下端が結節羽

H-28



IV-149 H-28



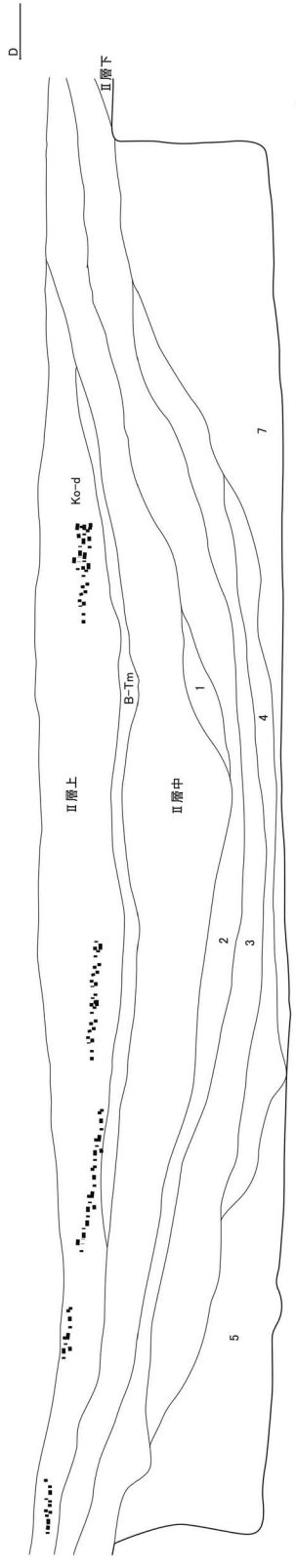
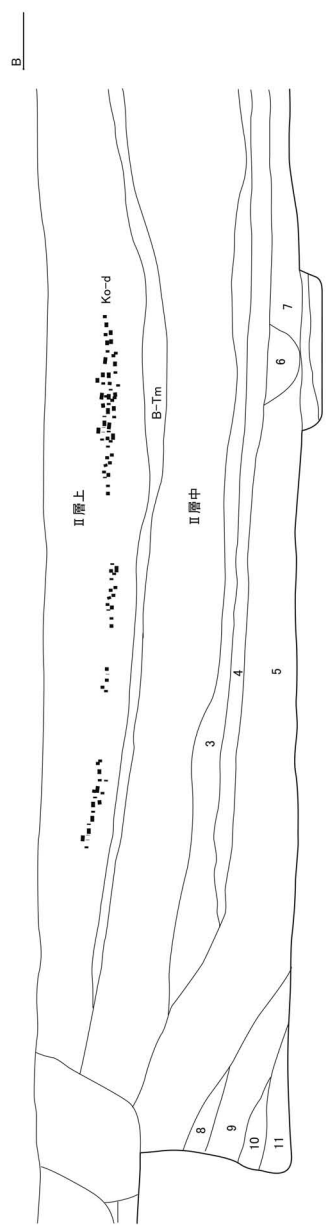


遺物凡例

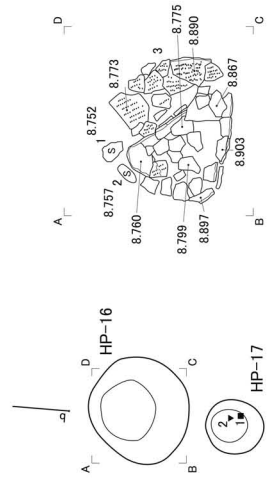
○:土器	●:土器
◇:海片石器	▼:海片石器
▽:海石器	▲:海石器
△:海片	□:海片
○:土・石製品	■:土・石製品
●:土器	▼:海片石器
◇:海片石器	▲:海石器
▽:海石器	△:海片
○:土・石製品	■:土・石製品

1 10YR2/2 黒褐色土 粘在中 堅密度中
φ10~20mmローム粒が5%混じる

2 10YR1.7/1 黒色土 粘性强 堅密度中

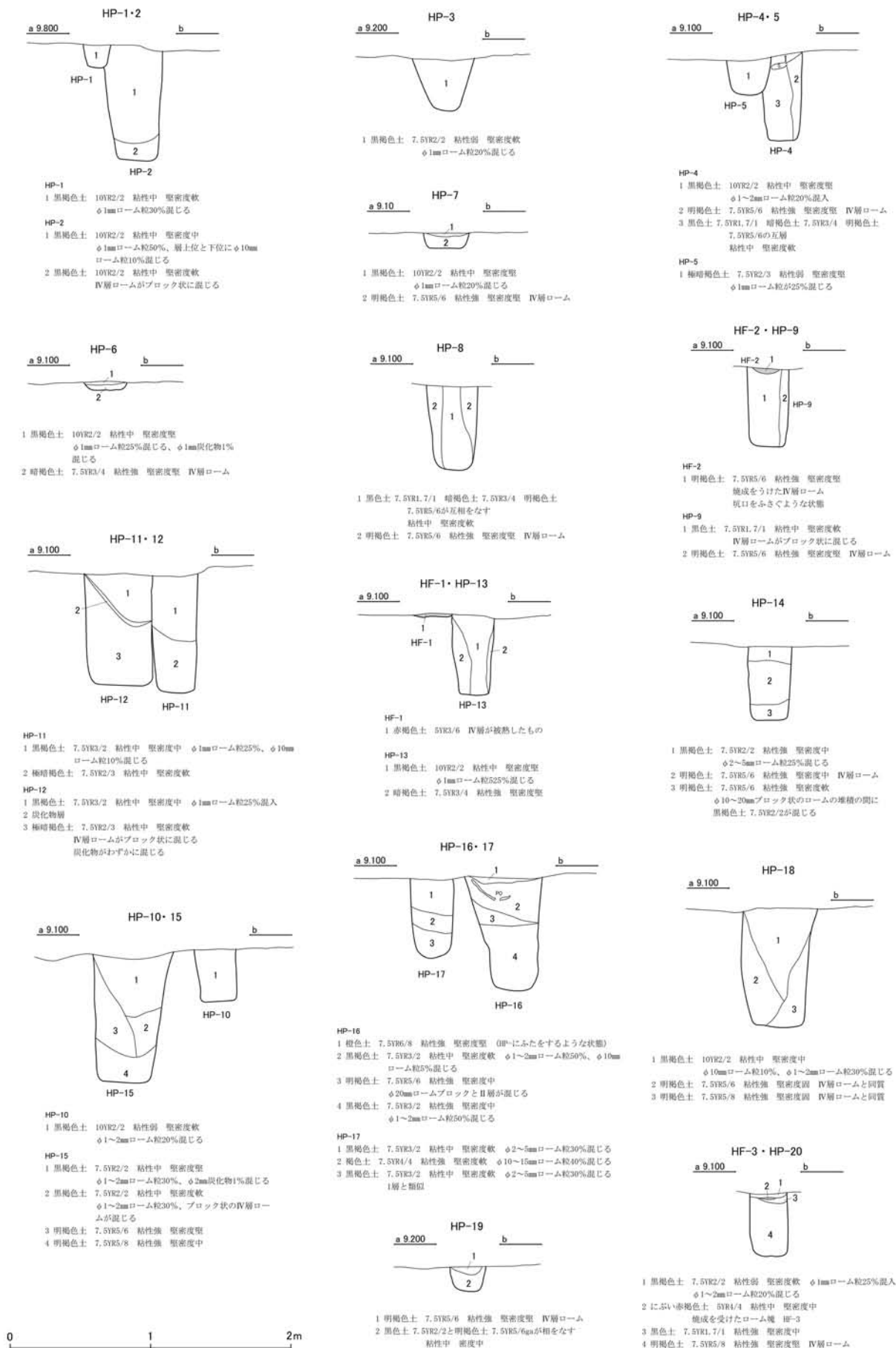


- 1 黒褐色土 7.5YR2/2 粘在中 堅密度堅
φ1mmローム粒が1%混じる
III層の混入量が多く、色調的に明るい
- 2 黒褐色土 7.5YR2/2 粘在中 堅密度堅
φ5mmローム粒が5%混じる
I層より色調的に暗い
- 3 黒色土 7.5YR2/1~黒褐色土 7.5YR3/1
粘在中 堅密度堅
φ5~10mmローム粒が5%混じる
- 4 黒色土 7.5YR1.7/1 粘在中 堅密度中
φ5~10mmローム粒が5%混じる
- 5 暗褐色土 7.5YR3/3 粘性强 堅密度中
φ5~10mm土体
多量のローム粒が50%以上混じる
盛土の混れ込み
ローム主体に黒色土(II層)が混じる
- 6 褐色土 7.5YR4/4 粘性强 堅密度堅
盛土の混れ込み
ローム主体に黒色土(II層)が混じる
- 7 褐色土 7.5YR4/6 粘性强 堅密度中
III層に類似するがローム粒の混入量が多い
盛土の混れ込み
- 8 黒色土 7.5YR1.7/1 粘在中 堅密度中
φ5~10mmローム粒が5%混じる
- 9 暗褐色土 7.5YR3/3 粘性强 堅密度中
φ5~10mm土体
多量のローム粒が50%以上混じる
盛土の混れ込み
- 10 黒色土 7.5YR1.7/1 粘在中 堅密度中
φ5~10mmローム粒が5%混じる
- 11 暗褐色土 7.5YR3/3 粘在中 堅密度中
φ5~10mm土体
多量のローム粒が50%以上混じる
盛土の混れ込み

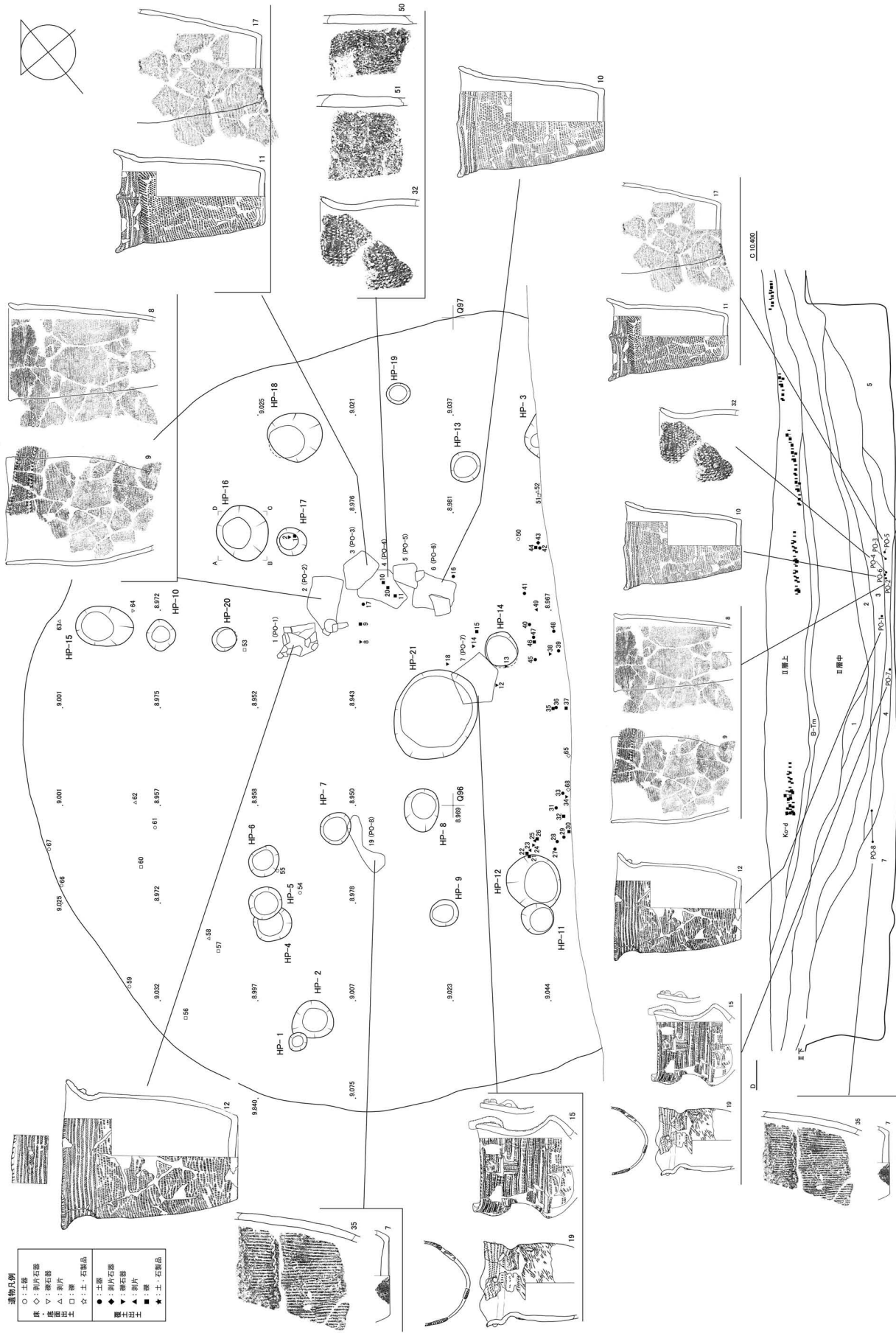


HP-16 土器出土状況 1/10

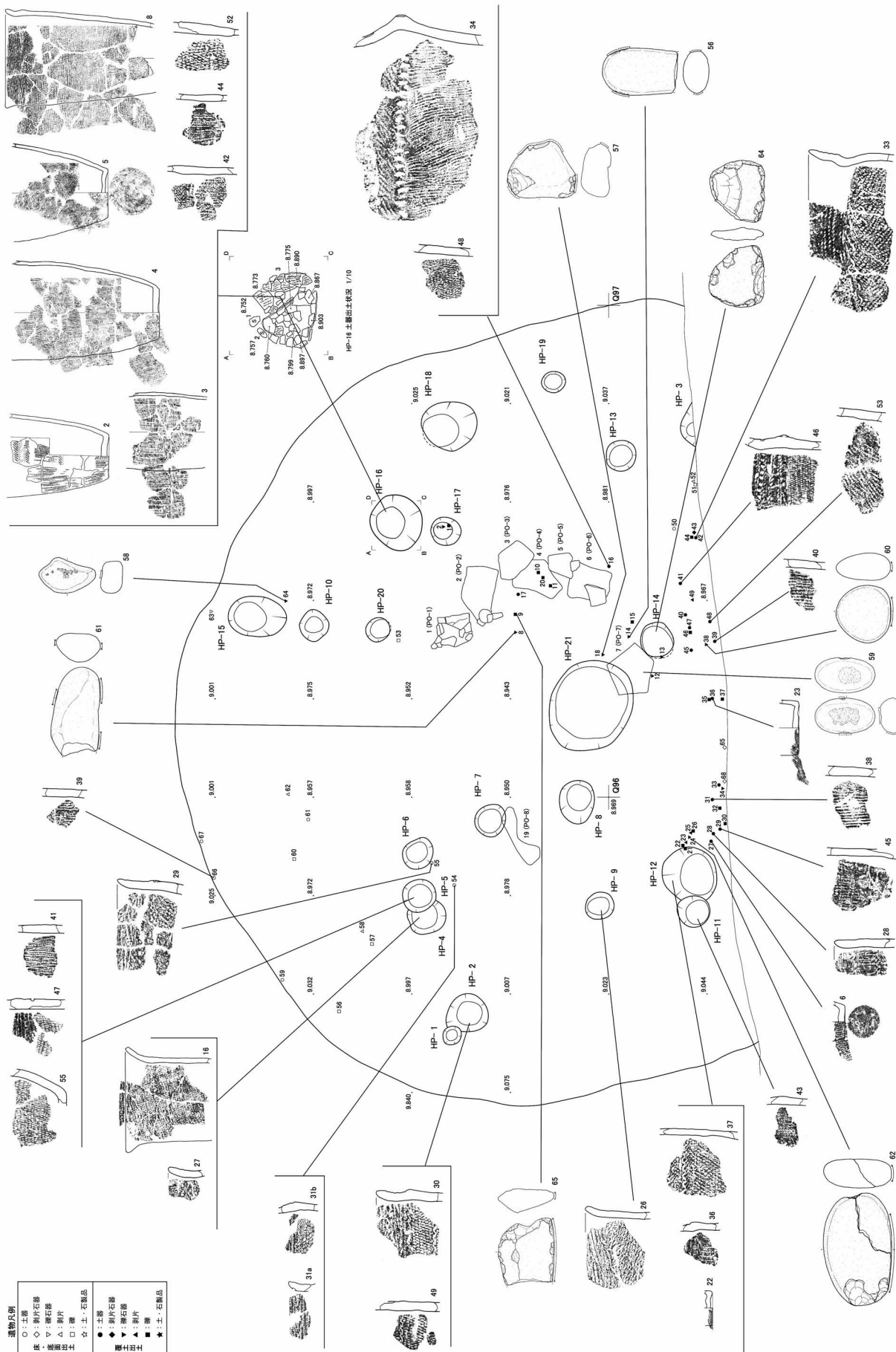
図IV-150 H-28 セクション図 (1)



図IV-151 H-28 セクション図 (2)



图IV-152 H-28 PO出土状况图 垂直分布图



図IV-153 H-28 遺物出土状況図

状縄文で区画されたもの。無文地の文様帯には矢羽状の縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。28は口縁部破片。幅の狭い文様帯は結束羽状縄文で区画され、文様帯には縄線文、体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されている。29～31・49の体部は多軸絡条体の回転文である。やや幅の広い無文地の文様帯には縄線文が加えられている。29は刺突文が加えられた貼付帯と結節羽状縄文で区画されたもの。30は結節羽状縄文で区画され、体部にも結節羽状縄文が加えられている。31は羽状縄文によって口頸部文様帯下端が区画されている。49は綾絡文と組み合わせている。35～45は体部破片。35～41は単軸絡条体の回転文である。35・37は結節羽状縄文と組み合わせたもの。42～45は自縄自巻の縄文が施されたもの。42・44は結束羽状縄文と組み合わせたもの。

Ⅱ群B-5類土器（9～23・32・33・46～48・50～55）：9は幅広で肥厚気味の口縁部文様帯をもつもの。緩やかな波状口縁である。口縁部文様帯上端は縄の圧痕文で、下端は半截竹管状工具内面の刺突文で区画され、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。10・11・15・19・20・33は、幅広の肥厚気味の口縁部文様帯と肥厚帯直下の頸部文様帯の2つの複合的な文様帯をもつもの。10は緩やかな片流れ状の波頂部をもつ波状口縁である。口縁部文様帯は無文地で、口縁部に沿って2本一組の縄線文が施されている。肥厚帯直下には粗いナゲ調整が加えられ無文帯を作出している。体部は多軸絡条体の回転文である。11は緩やかな片流れ状の波頂部をもつ波状口縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口縁部文様帯は無文地で、文様帯には2本一組の縄線文で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出し、波頂部から垂下する2本一組の縄線文が加えられている。肥厚帯直下には斜行縄文が施され、文様帯が作出されている。体部は多軸絡条体の回転文である。15は底部を欠失する。2か所の波頂部をもつ口縁部で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口縁部肥厚帯には2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施され、波頂部から垂下する縦位の貼付帯やドーナツ状の貼付文が加えられている。肥厚帯下位には下端が刺突文で区画された幅広の頸部文様帯が作出され、文様帯には2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施される。肥厚帯直下には橋状の貼り付けが加えられている。頸部から下半の体部はソロバン玉状の器形である。19は山形の3か所の波頂部をもつ。体部下半を欠失する。口縁部文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突文で区画されている。無文地の文様帯には縄線文が施され、波頂部下位の文様帯下端には2個一組の貼り瘤が加えられている。頸部文様帯は大きくくびれ、下端には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。文様帯には斜行縄文が施され、横環する縄線文が加えられている。体部は不規則な斜行縄文である。20は4か所の波頂部をもつ波状口縁と思われるもので、口唇には縄の圧痕が加えられている。口縁部文様帯上部は無文地で、縄線文が加えられている。下位は膨らみをもち斜行縄文が施されている。ふくらみの直下には縄端によるループ文が施されている。体部は斜行縄文で、波頂部から体部下半まで垂下する2本一組の綾絡文が加えられている。33は口縁部～頸部にナゲ調整、無文地の口縁部文様帯に縄線文が施され、大きくくびれた頸部下端には結節羽状縄文が加えられている。体部は斜行縄文である。12は体部上半にくびれをもつ器形である。平縁で、口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は肩状の器形で区画されている。無文地の文様帯には2本一組の縄線文が施され、文様帯の中ほど1か所に長さ5cm程の粘土紐が横位に貼り付けられている。この貼り付けは波頂部から垂下する「逆T」字状や縦位の貼り付けとの関連するものと思われる。体部は多軸絡条体の回転文である。13は体部上半にくびれをもつ器形である。平縁で、口唇には刻目文が加えられている。口頸部文様帯下端は刻目文が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯には2本一組の縄線文、体部には多軸絡条体の回転文が施されている。14は口唇及び口唇直下に半截竹管状工具内面の押引文が加えられたもので、体部は多軸絡条体の回転文

である。16・32は大型破片で器面に多軸絡条体の回転文が施されたもの。口縁部が大きく外反し、口唇には単軸絡条体の圧痕が加えられている。17は単軸絡条体の回転文が施された体部下半。18は体部上半でくびれる器形である。口縁部が肥厚するもので、平縁である。口頸部にナデ調整を施した後、口唇外面には縄の圧痕が、頸部には2本一組の縄線文が加えられている。体部は櫛歯状工具による条痕文である。21は皿形の器形である。口縁部には2個一組の突起を、5～6か所もつものと思われる。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口縁部文様帯には縄線文が加えられ、文様帯下端から下半に向かって刺突文が加えられた橋状の把手が貼り付けられている。体部は斜行縄文である。46～52は体部に多軸絡条体の回転文が施されている頸部～体部の破片資料。46は複合的な文様帯をもつもので、頸部下端が貼り付けによって区画され、無文地の頸部には2本一組の縄線文と刺突文が施されている。47の無文地の頸部には縄線文が施されている。49は結節羽状縄文が加えられている。55は単軸絡条体の回転文が施された底部破片。53・54斜行縄文が施された体部破片。54は縦位及び横位に綾絡文が加えられたもので、短冊状に切断されたものの可能性がある。22・23は斜行縄文が施された底部破片。

(小括) 本遺構から口縁部肥厚し、口頸部文様帯が複合的に構成されるものが比較的まとまって出土した。これらには体部が多軸絡条体の回転文のもの(15)と斜行縄文が施されているもの(10・11・18～20)がある。いずれも文様帯に縄線文が多用されている。類例は、H-16の覆土2層・覆土1層から出土している。覆土2層出土資料(47・48)は明瞭な複合的文様帯をもち、体部は多軸絡条体の回転文である。覆土1層出土資料(51～54・56)は複合的な文様帯をもちながらもやや省略化が認められ、肥厚帯上や肥厚帯直下に縄線・多軸絡条体の圧痕文、刺突文・ループ文・無文帯など多様な文様要素が施されたものである。15は覆土2層の資料に類似する。10・11・18～20は覆土1層出土の資料に類似する。しかし、H-16覆土1層出土資料の文様要素は多様で、縄線文が多用される本遺構の資料とはやや趣を異にするように思える。

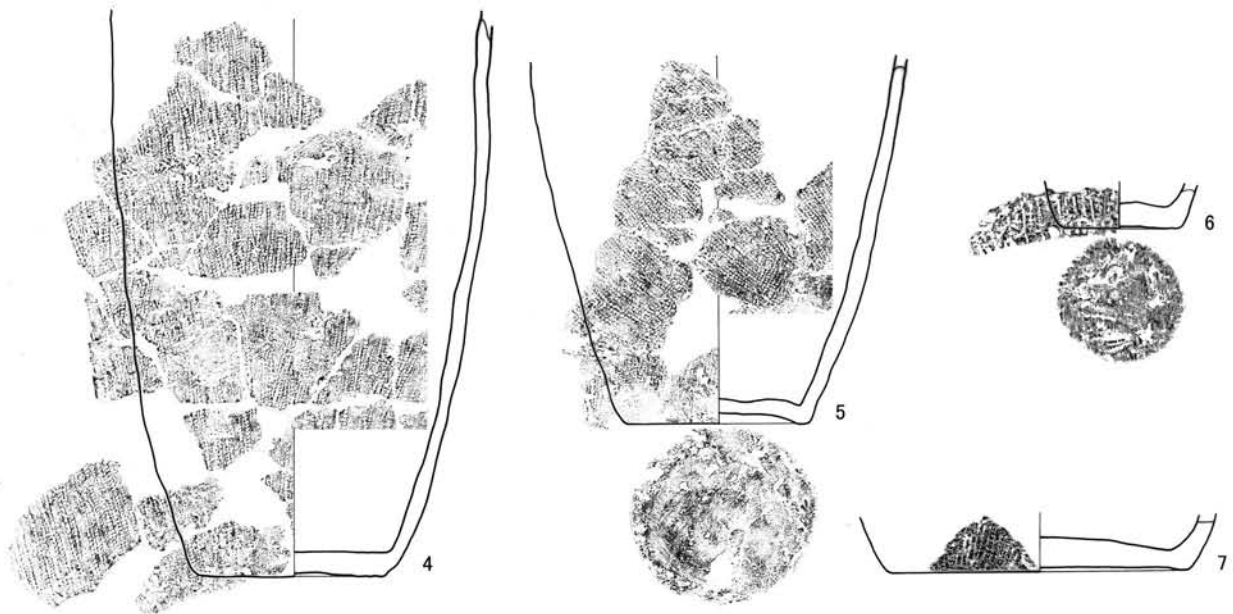
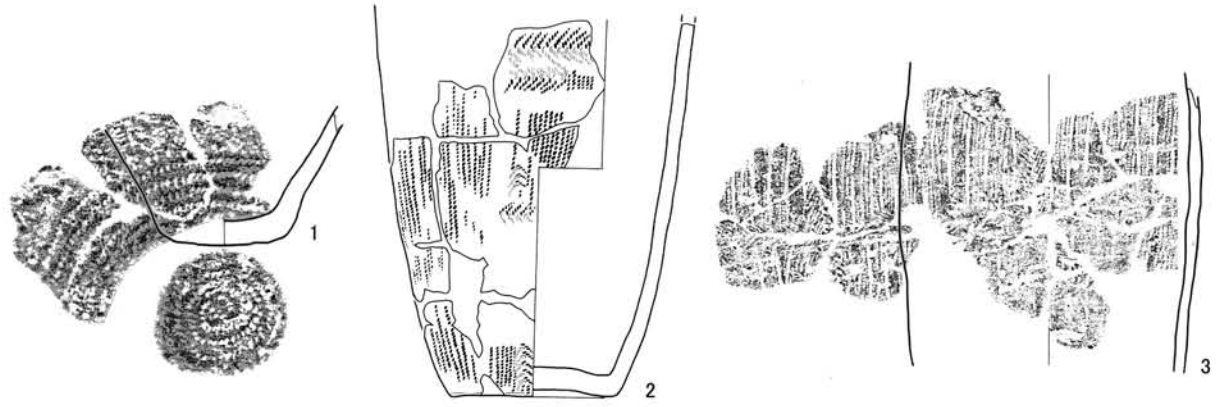
(石器等) 58は床面、56・57・59～64・66は覆土、65はHP-1覆土出土。56～58はたたき石。56は扁平な棒状礫の側縁の一部に敲打痕のあるもの。安山岩製。57は三角形の扁平礫の頂点に敲打痕のあるもの。珪岩製。58は垂角礫の平坦面に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。59は凹み石。扁平な楕円礫の平坦面に断面円錐状の凹みのあるもの。安山岩製。60～65はすり石。60は扁平な円礫の側縁の一部に幅の狭いすり痕のあるもの。平坦面に敲打痕がみられる。砂岩製。61は棒状礫の側縁に幅の狭いすり面のあるもの。砂岩製。62は扁平な楕円礫の側縁に幅の狭いすり面があるもの。長軸両端には打ち欠きによる抉りがある。閃緑岩製。63は北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は長軸・短軸ともに外彎している。砂岩製。64・65は扁平打製石器。64は板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出している。安山岩製。65は破片。板状礫を打ち欠いて短冊状に整形し、側縁に幅の非常に狭い機能部を作出している。長軸端部を打ち欠いて抉りを設けている。安山岩製。66は砥石。扁平礫の平坦面両面に幅の広い凹みのあるすり面を作出している。凝灰岩製。67は有孔土製円板、II群B-5類土器の破片を素材としているもの。

H-29 (図IV-159～166、図版21・102・103)

位置：P・Q92～94区

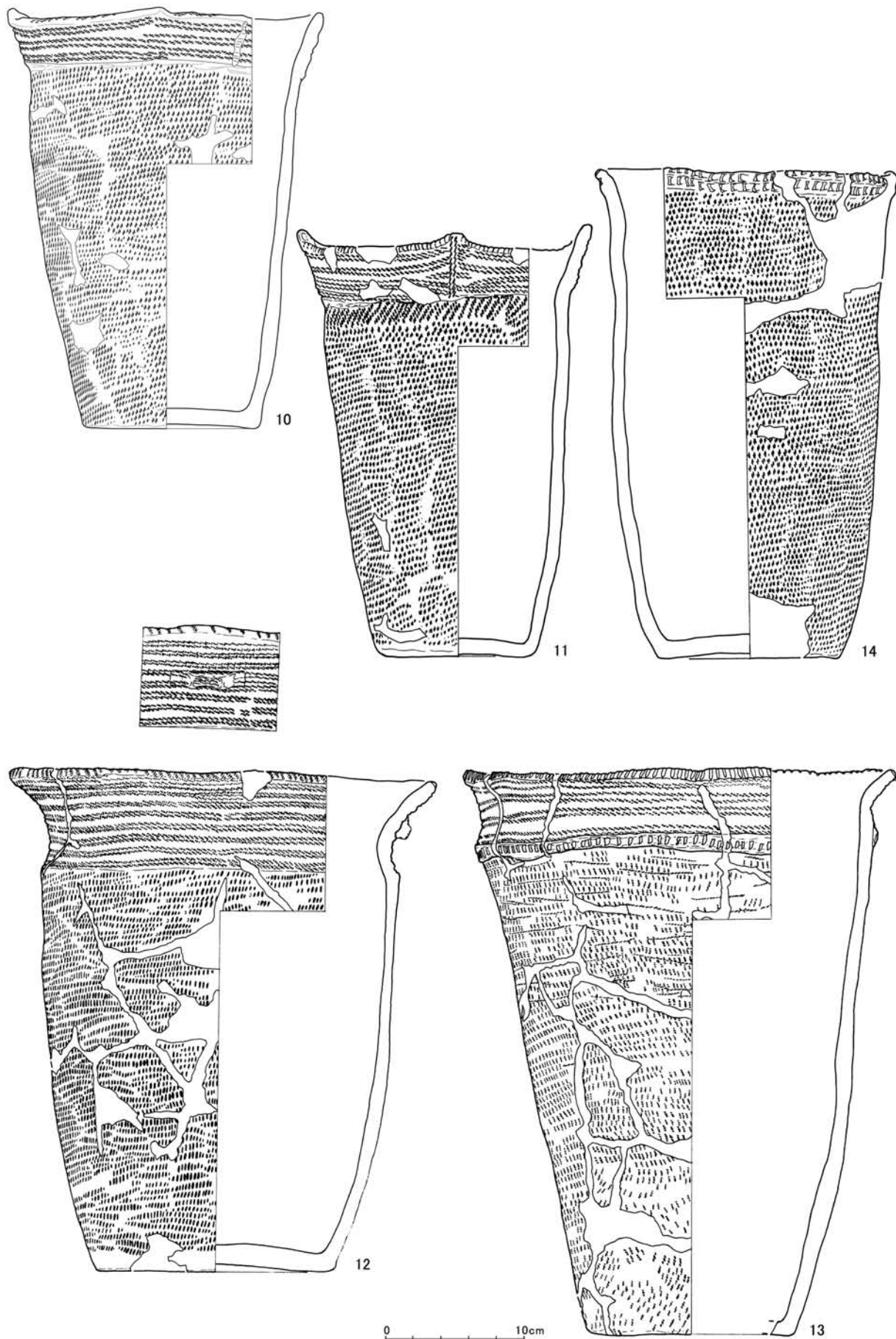
規模：(5.70) / (5.60) × (7.28) / 7.20×1.00m

確認・調査：IV層上面における標高9.1～9.8mの緩やかに傾斜する斜面に立地する。P・Q92～94のII・III層を掘り下げたところ、IV層上面で調査区東側境界と接する半円状の黒色土の落ち込みを確認した。そのため調査区境界の壁とそれに直交するように土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、IV層上面から1.0m程の深さで床面と思われる平坦面とベンチ、壁を確認した。このため住

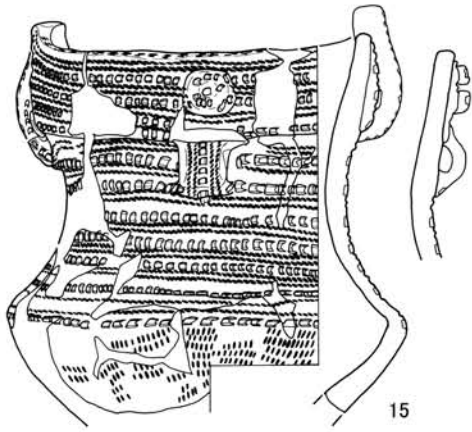


0 10cm

图IV-154 H-28 土器 (1)



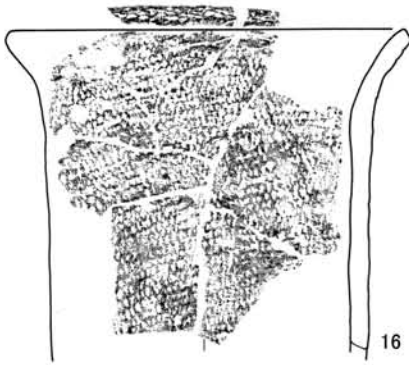
图IV-155 H-28 土器 (2)



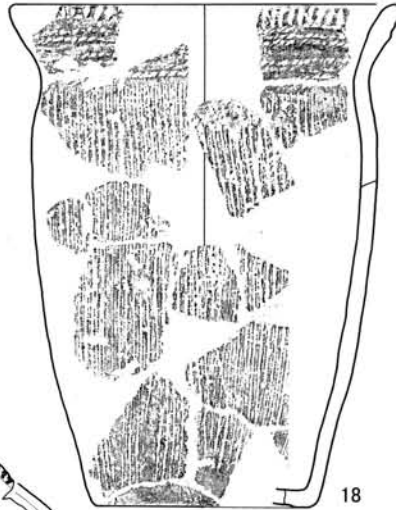
15



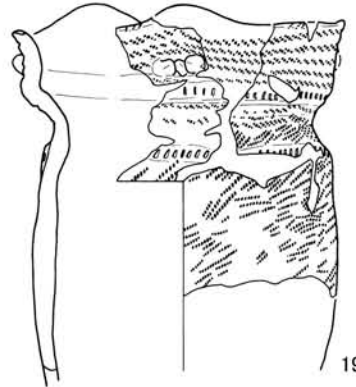
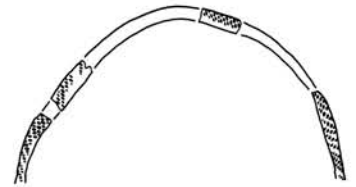
17



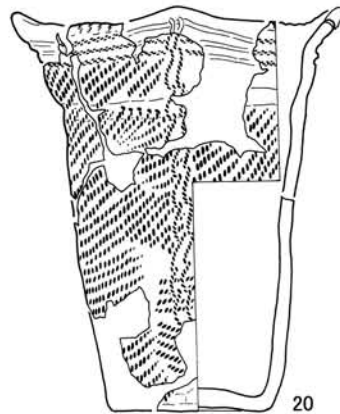
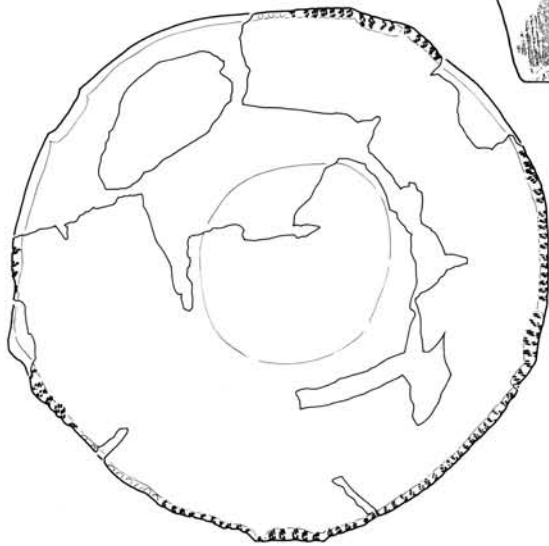
16



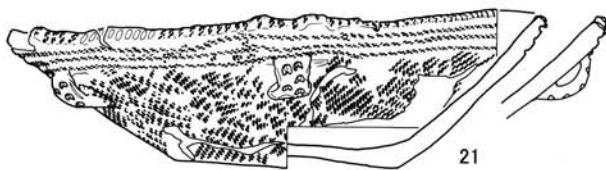
18



19



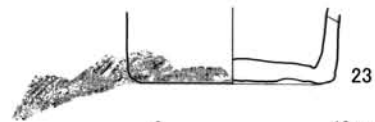
20



21



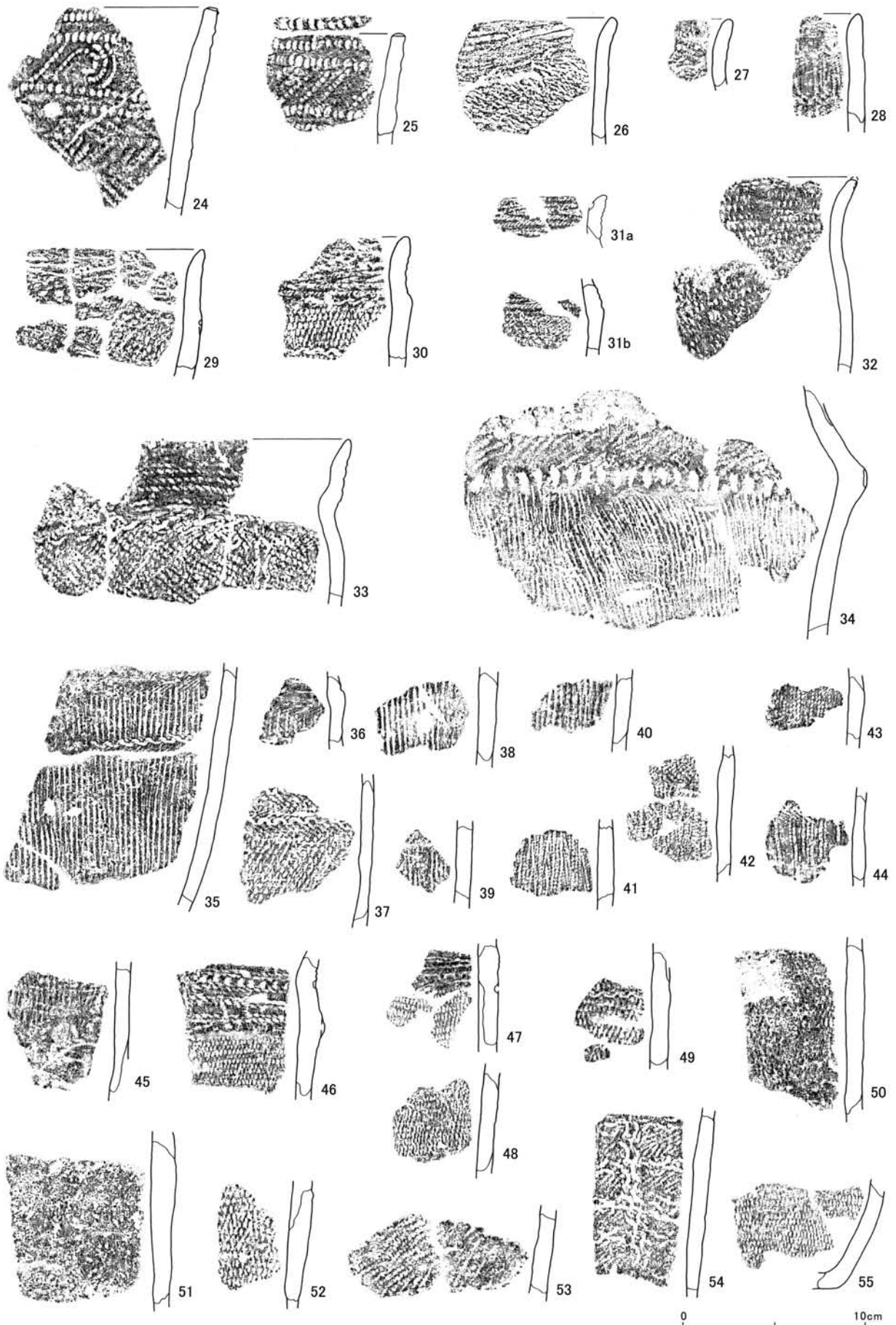
22



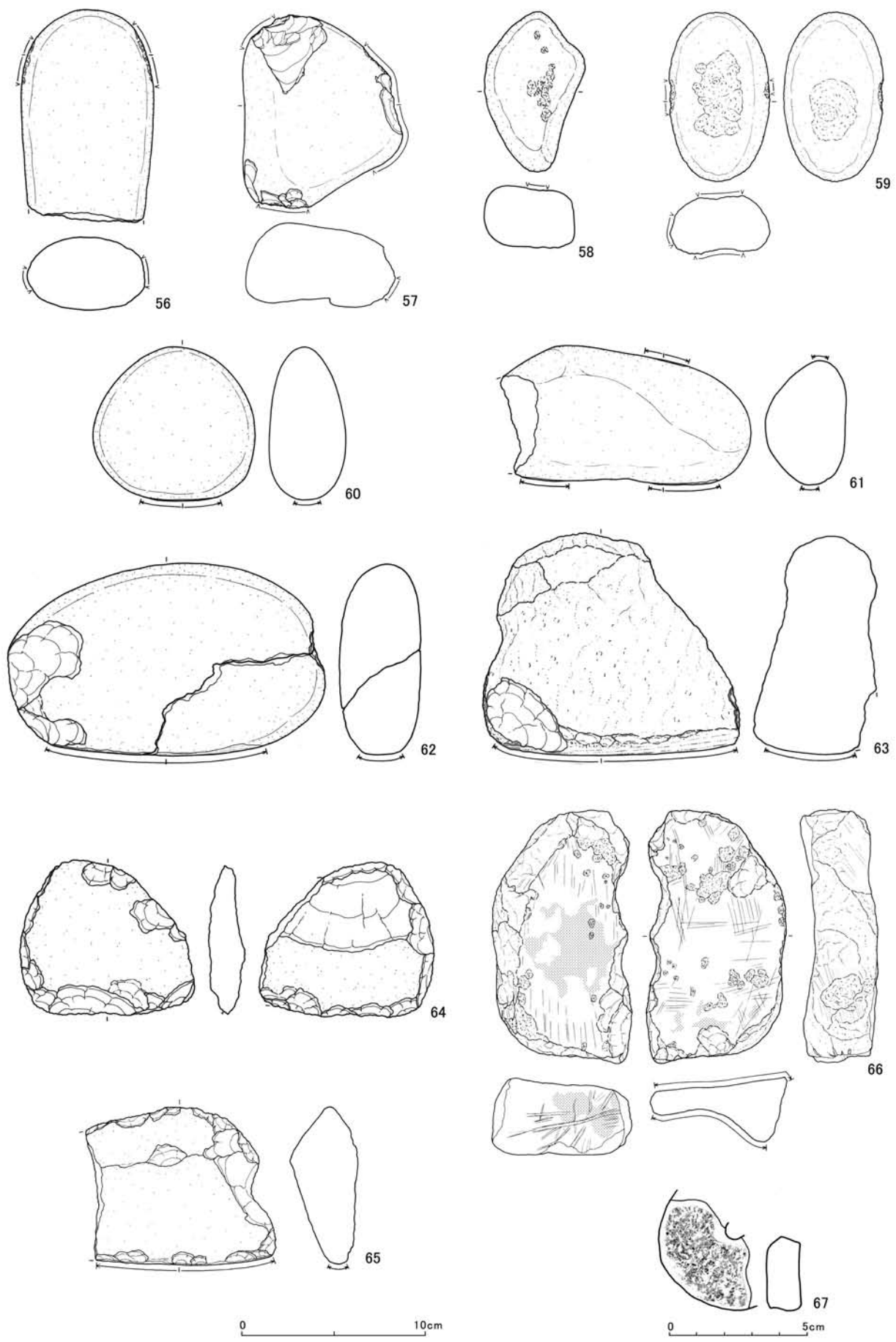
23

0 10cm

图IV-156 H-28 土器 (3)



图IV-157 H-28 土器 (4)



图IV-158 H-28 石器 土製品

居跡と判断し調査を継続した。東側の半分ほどが調査区外に位置し、南西側で擦文文化期の住居跡H-9に切られる。HF-6の焼土を採取してフローテーションを行ったが炭化種子は検出されなかった。

覆土：覆土上位はⅡ層を、下位は盛土を主体とする。いずれも、流れ込み等による自然堆積である。

平面形：楕円形と推定される。深さは1.0m程である。Ⅱ下層中から掘りこまれている。北側に比高差25cm、奥行き1.1m程のベンチ構造をもつ。ベンチ部の床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面の中央部から南西側にかけて炭化材が検出された。炭化物は、幅10～20cmで、厚さ2～3cm程の板材らしきものと直径10cm程の丸太状のものである。検出状況から見て屋根材の可能性があることから、被災住居と考えられる。

付属遺構：土坑2基（HP-25・26）、柱穴（HP）24基、焼土（HF）5か所、剥片集中（HFC）1か所を確認した。HP-25は、北東側のベンチ際に位置する。平面形は、隅丸方形に似た形状を呈する。坑底はわずかに起伏があるもののほぼ平坦、壁は比較的急角度で立ち上がる。覆土中に炭化物が混じる。HP-26は、ほぼ中央に位置する。平面形は、東側のほぼ半分が調査区外に位置するため、確認された形状から楕円形と推定される。坑底は平坦、壁は床面から巾着状に立ち上がり中段から外反する。柱穴は、太くて深いもの（HP-8・16・18）、中くらいで深いもの（HP-1・2・9・10・12・13・19・20・24）、中くらいで浅いもの（HP-3～5・21・22）、細くて深いもの（HP-15・23）、細くて浅いもの（HP-6・7・11・14・17）である。このうち主柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から、6本柱の住居と考えられる。また、住居跡東側の半分ほどが調査区外に位置するため、柱穴の数はこれ以上に多いと思われる。HF-1～4は焼土下位に被熱層がみられないことから、投棄によるものと思われる。HF-5は焼土下位の床面に被熱がみられることから炉の可能性はある。ただし、HP-26によって切られている可能性がある。小規模な剥片集中は西側壁の立ち上がり際に検出された。23点の剥片等が出土した。剥片の石質はすべて頁岩である。

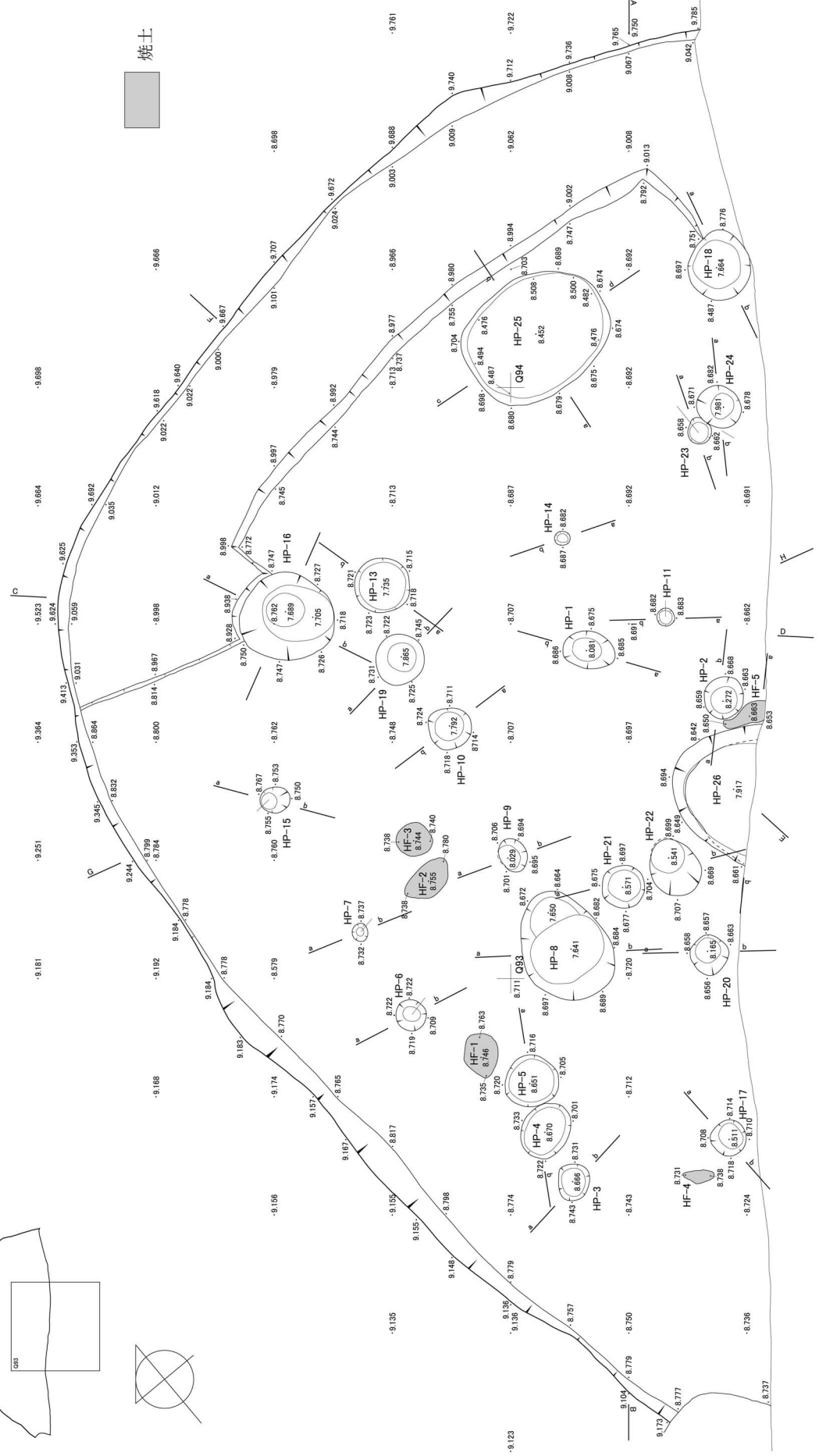
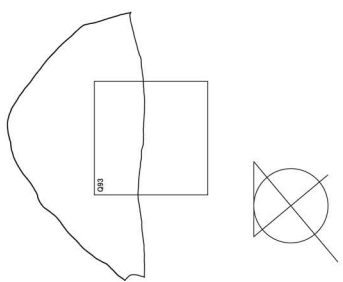
遺物出土状況：床面からⅡ群B-5類土器など50点、石器等27点、HPから土器20点、石器等19点、HFCから石器等23点、覆土から土器3,233点、有孔土製円板2点、焼成粘土塊3点、石器等2,430点が出土した。石製品は軽石製石製品3点、珧状耳飾り1点、有孔石1点が出土した。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。（立川）

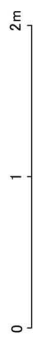
掲載遺物：（土器）2はベンチ部分床面、3・16はHP-16、21・22はHP-26、他は覆土出土。

Ⅱ群A類土器（1・9）：1は尖底の底部破片。半截竹管状工具外面による押引文が施されている。9は口縁部に上下を2本一組の押引文で区画し、文様帯内には「ワラビ」状ないし鋸歯状の押引文が加えられている。H-28の24・25と同一個体と思われる。

Ⅱ群B-4類土器（2～5・10～12・21・23～25）：2～4・11・25は文様帯下端が結節羽状縄文で区画されたもの。2はベンチ部分からまとまって出土した。平縁で、口唇に縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は結節羽状縄文で区画され、無文地の文様帯には2本一組の縄線と斜位の短縄線、体部に多軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施される。3は緩やかな波状口縁で、口縁部は幅広で肥厚し、肥厚帯下端に刺突文が加えられている。無文地の文様帯には縄線文が施され、波頂部下位に2段の横位の短刻文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。4は平縁で、口唇外面に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は縄の圧痕で区画され、無文地のやや幅広の文様帯には縄線文が加えられている。肩部分に結節羽状縄文が2段施されている。体部には単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせで施文している。11は波状口縁で、口頸部文様帯下端を縄線と結節羽状縄文で区画し、文様帯には密な縄線文で菱目状の文様構成を作出、波頂部下位に横位の楕円形の押圧文を加えている。体部には単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されている。5は口

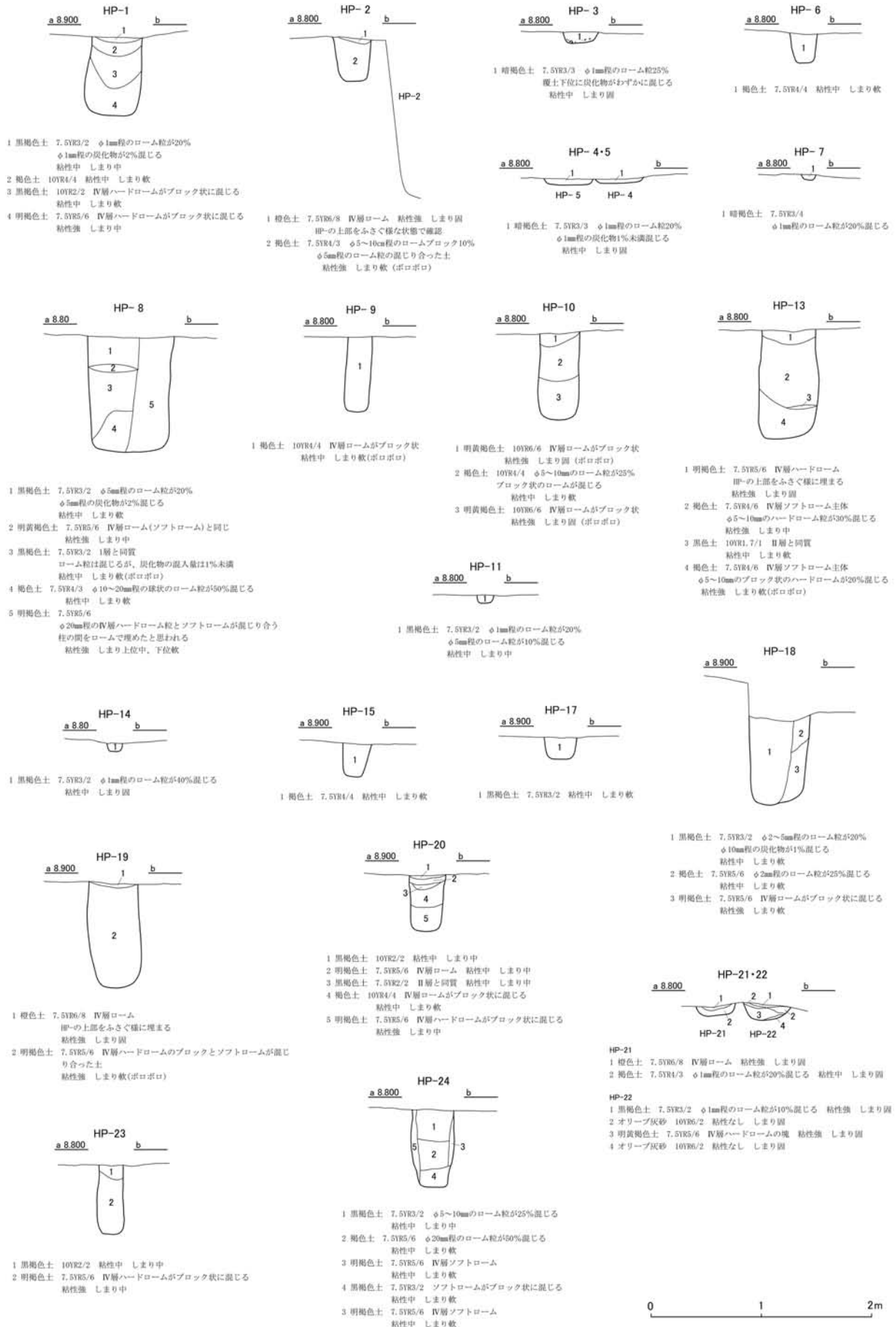


IV-159 H-29



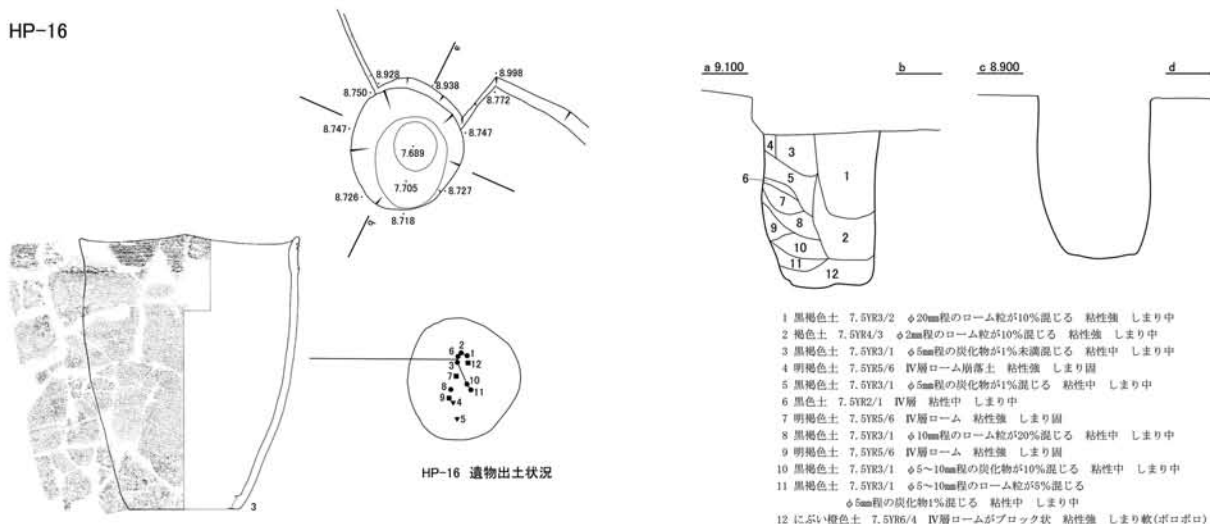


図IV-160 H-29 セクション図(1)

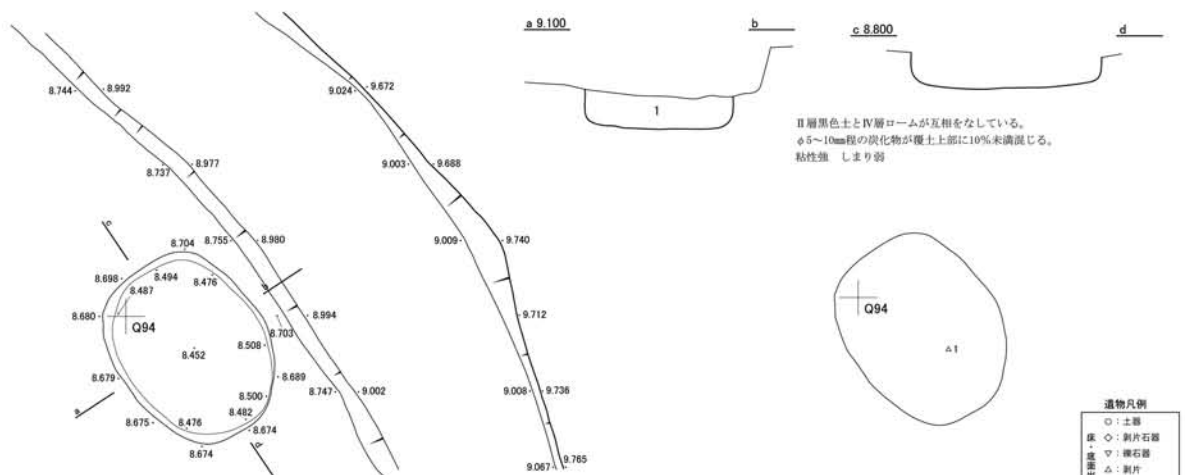


図IV-161 H-29 セクション図 (2)

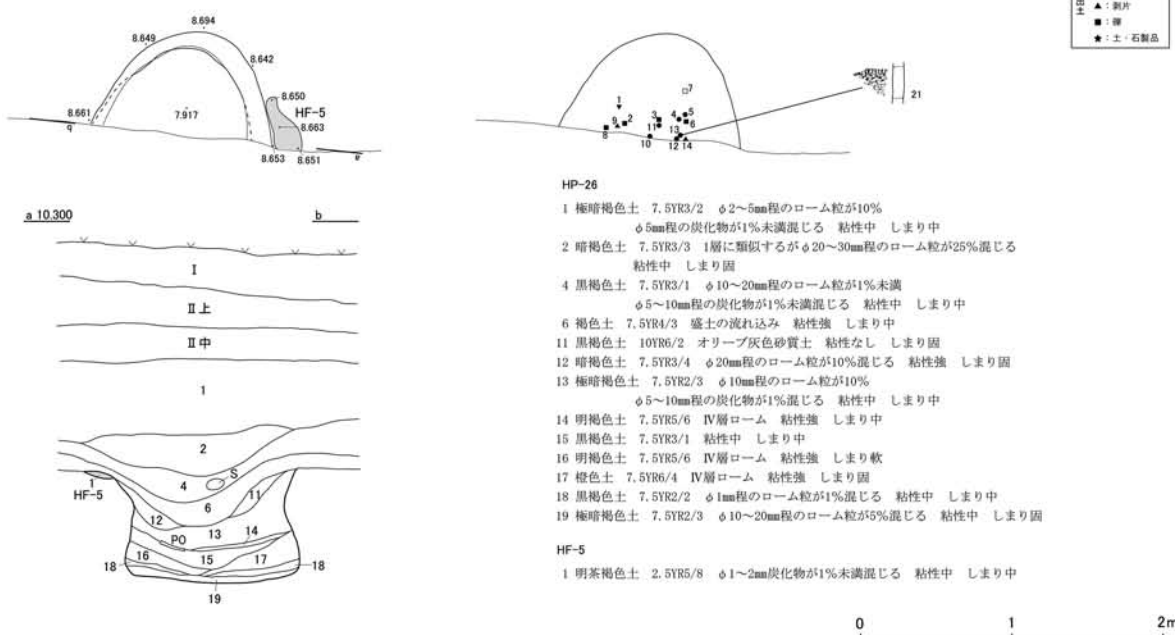
HP-16



HP-25



HP-26



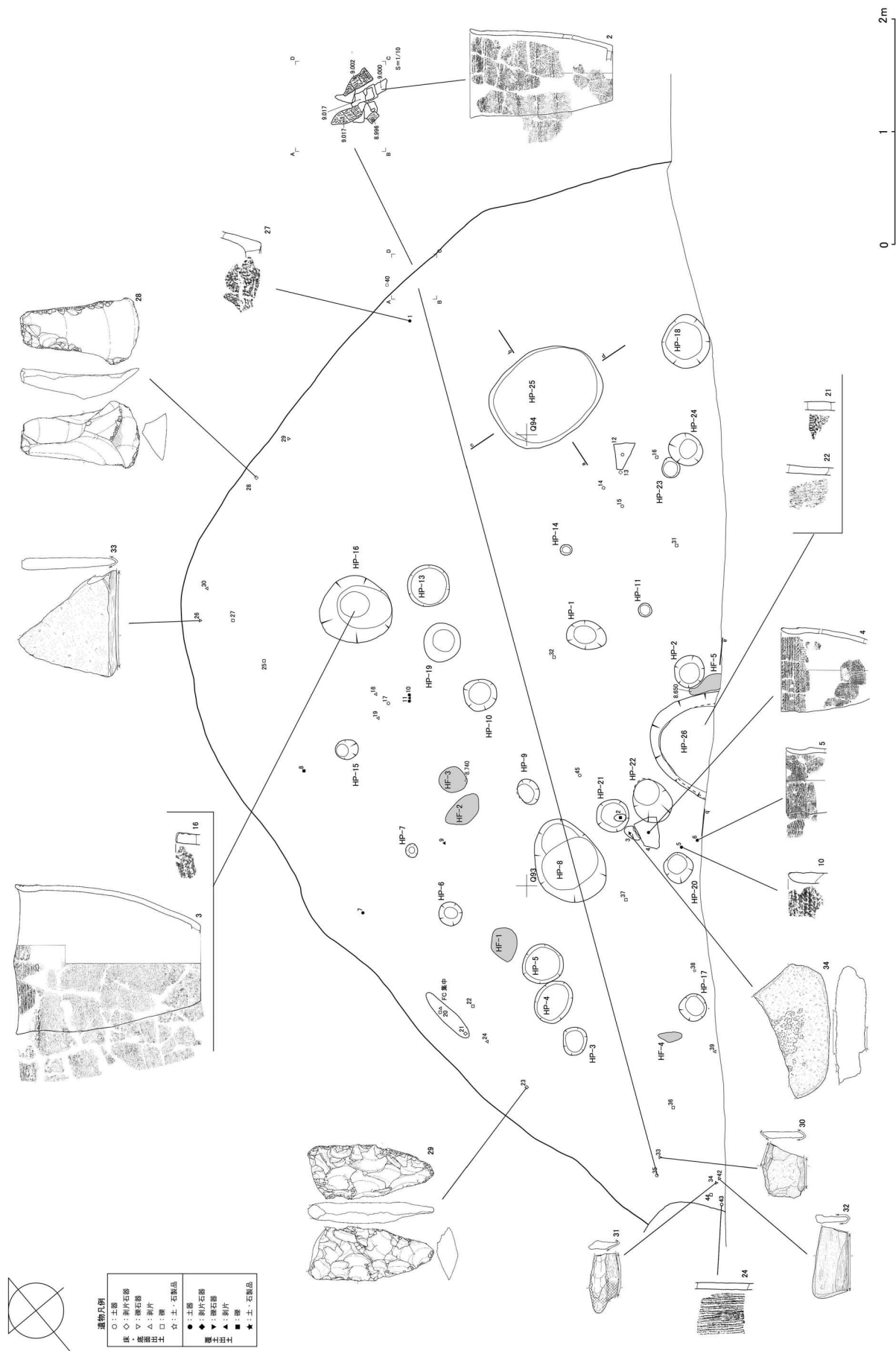
遺物凡例	
○	土器
△	土・石製品
◇	割片石器
▽	礫石器
▲	割片
□	礫
☆	土・石製品
●	土器
◆	割片石器
▼	礫石器
▲	割片
■	礫
☆	土・石製品

図IV-162 H-29 セクション図 (3)

頸部破片。幅広で、無文地の口頸部文様帯は2本一組の縄線文で区画され、文様帯には縄線で菱目状の文様構成を作出している。体部は単軸絡条体の回転文である。25の体部は多軸絡条体の回転文である。12は口唇外面に縄の圧痕が加えられている。肩部分と縄の圧痕文で口頸部文様帯を区画し、幅広で無文地の文様帯に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。10は口唇に縄の圧痕文、無文地の文様帯には縄線文が加えられている。21は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されたもの。22は単軸絡条体第1A類の回転文が施された体部破片。23は自縄自巻の縄文が施されている。24は単軸絡条体の回転文である。

Ⅱ群B-5類土器(6~8・13~20・22・26・27):6・7・13・14は口縁部が肥厚帯ないし張り出しすもの。6は片流れの波頂部をもつ波状口縁で、口唇には単軸絡条体の圧痕文が加えられている。口縁部文様帯はやや肥厚気味に張り出し段をもつ。半截竹管状工具外面による刺突文が文様帯中央を横環し文様帯を上下に二分する。上部は波状口縁に沿って、下位は横位に単軸絡条体の圧痕が施され、波頂部から垂下する2本一組の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。7は体部上半の大型破片。平縁で、口縁部に円柱状の貼り付けで突起を作出し、根元部分に粘土紐が巻き付けられている。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口頸部は肥厚気味で、口頸部文様帯の上半はくびれ、下半は大きくふくらみ、段をもつ。無文地の文様帯は2本一組の縄線文で上下を区画され、文様帯には入れ子の山形ないし鋸歯状の縄線文が施されている。突起直下には縦位の橋状の把手が加えられている。文様帯下半から体部下半には斜行縄文が施され、橋状把手下端から体部下半まで垂下する綾絡文が加えられ、さらに口頸部文様帯下端のふくらみの下にも横環する綾絡文が加えられている。13・14は肥厚する口縁部文様帯をもつもの。13の口唇・文様帯下端には縄の圧痕文が施され、文様帯及び肥厚帯直下に2本一組の縄線文が施されている。14の口唇・文様帯下端には半截竹管状工具内面の刺突文、文様帯には波頂部に沿って山形に縄線文、肥厚帯直下には貝殻条痕上に多軸絡条体の回転文が施されている。17~20は複合する口頸部文様帯をもつもの。17は口縁部破片。波頂部に楕円形の面をもち、波頂部下位には弧状・ドーナツ状の貼り付けが施される。器面・貼付帯には半截竹管状工具内面の刺突文が加えられている。18は波頂部の口縁部破片。文様帯は口縁部文様帯と頸部文様帯に分けられる。幅の狭い口縁部文様帯は半截竹管状工具の刺突文で下端を区画し、波頂部外面に縄の圧痕が加えられた短い縦位の貼り付けと2本一組の縄線文が加えられている。下位の頸部文様帯には2本一組の縄線文が施されている。19は片流れの波頂部をもつ口縁部破片。波頂部から単軸絡条体の圧痕文が加えられた「逆T」字状の貼付帯が垂下する。文様帯には単軸絡条体の圧痕文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施文されている。下端にはナデ調整が加えられている。20は口唇の断面形が切り出し状の口縁部破片。2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施文され、肥厚帯直下にも縄線文が加えられている。8は体部上半部の大型の口縁部破片。波頂部は2個一組の小突起からなり、器面には斜行縄文が施されている。15は口頸部文様帯下端を貼付帯で区画し、口唇には縄文、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が施されている。16は2個一組の波頂部をもつ波状口縁で、口唇に単軸絡条体の圧痕を加えられている。文様帯には単軸絡条体の圧痕文が施されている。22は単軸絡条体第1A類の原体で施文したもの。26・27は底部破片。26の底部内面に径3.2cm・厚さは2~3mmの円形の圧痕が認められる。圧痕面の断面形は丸く、あたかも半截竹管状工具外面で描いたような形状をもつ。施文具は不明であるが、実験的に「イタドリ」の茎の断面を粘土で押捺したところ同様の大きさ・厚さを再現できた。なお、Ⅱ群B-5類土器としたが、Ⅴ群C類土器の可能性もある。27は多軸絡条体の回転文が施された底部破片。

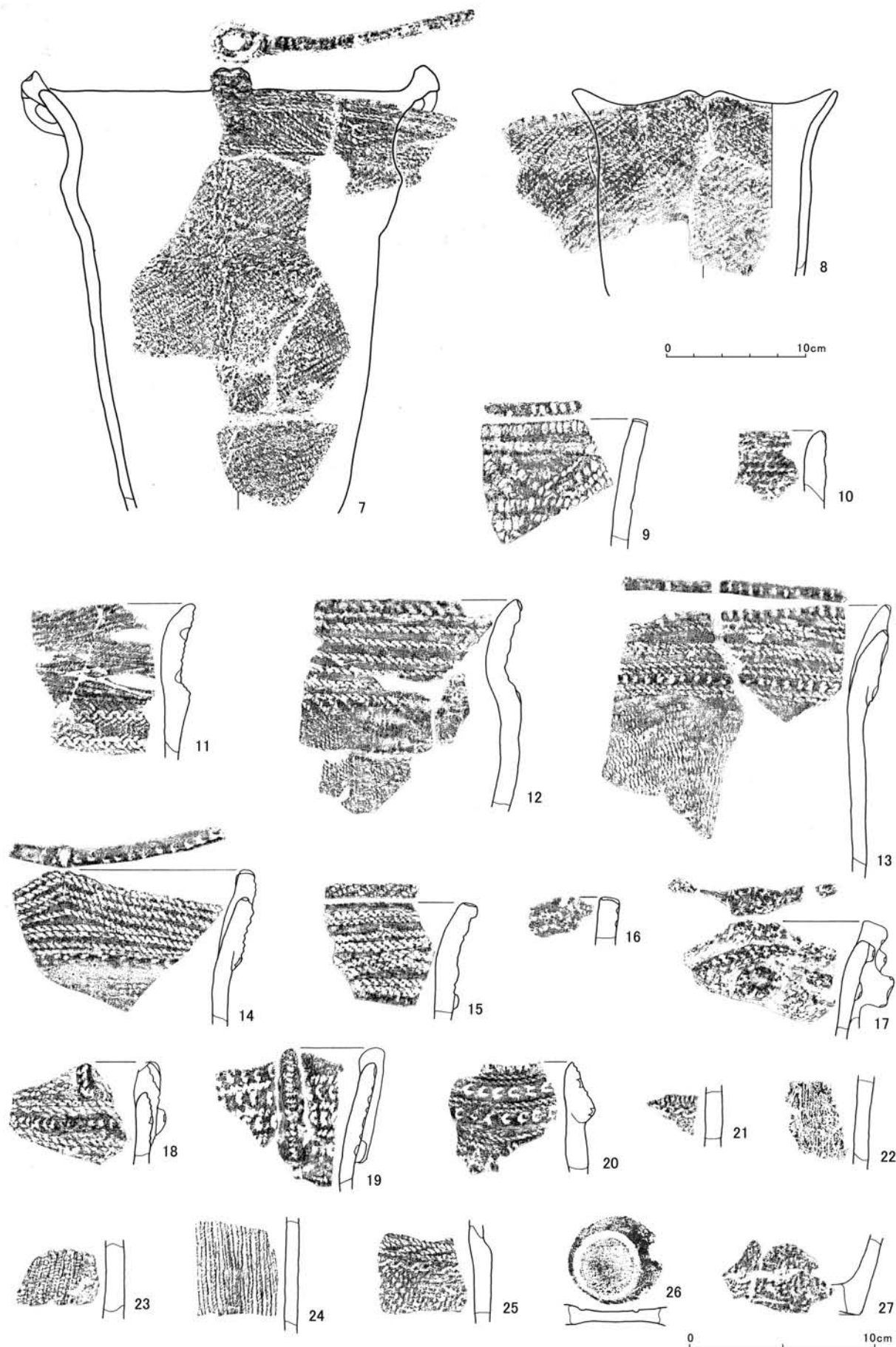
(小括) H-29から文様帯下端が結節羽状縄文で区画されたⅡ群B-4類土器(2~4・11・25)と



図IV-163 H-29 遺物出土状況図



图IV-164 H-29 土器 (1)



图IV-165 H-29 土器 (2)

複合した口頸部文様帯をもつⅡ群B-5類土器(6・7・17～26)が出土した。Ⅱ群B-4類土器の類例はH-26から出土している。これらの文様帯はやや幅が狭く、文様構成も単純・簡素なものが多い。また、体部も単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文がほとんどである。これに対し、H-29は、体部に多軸絡条体の回転文が多い傾向が窺える、文様帯が幅広で、菱目・山形などの文様構成をもつなど違いが認められる。Ⅱ群B-5類土器の類例はH-16・H-28から出土している。本遺構出土資料は半截竹管状工具の押引文と縄線文が多用されるH-16覆土2層出土資料に類似する。

(石器) 28～34は床面、35～38は覆土出土。28はスクレイパー。へら状で側縁と下端に刃部が作出されている。頁岩製。29は両面調整石器。紡錘形のもので上部が折損している。頁岩製。30～33は石鋸。30は板状礫の側縁に断面U字状のすり面があるもの。安山岩製。31は扁平礫の側縁を打ち欠いて薄くしたのち、断面U字状のすり面を作出している。凝灰岩製。32は扁平礫を打ち割って薄くしたのち、断面V字状のすり面を作出している。凝灰岩製。33は板状礫の側縁に断面U字状のすり面を作出している。安山岩製。34は凹み石。扁平礫の平坦面に断面円錐状の凹みと浅い凹みのあるもの。凝灰岩製。35～38は石製品。35は塊状耳飾りの破片。全面を研磨で調整している。もともとは三角形の塊状耳飾りと考えられる。滑石製。岩石学的分析で松前産であることが報告されている(分析結果報告は大平遺跡(3)に掲載する)。36～38は軽石製石製品。36は北海道式石冠の形状を模しているように、握部を沈線で表現している。すり面は平坦である。37・38は礫の中央に沈線が施されているもの。有溝石錘や浮きのようなものの可能性がある。37は沈線が周回する。39・40は有孔土製円板、いずれもⅡ群B類土器が素材としたもの。39は多軸絡条体の回転文を施されたⅡ群B-5土器、40は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されたⅡ群B-4類土器を素材としている。

H-30 (図IV-167～187、図版22・23・104～113)

位置：M・O98・99区

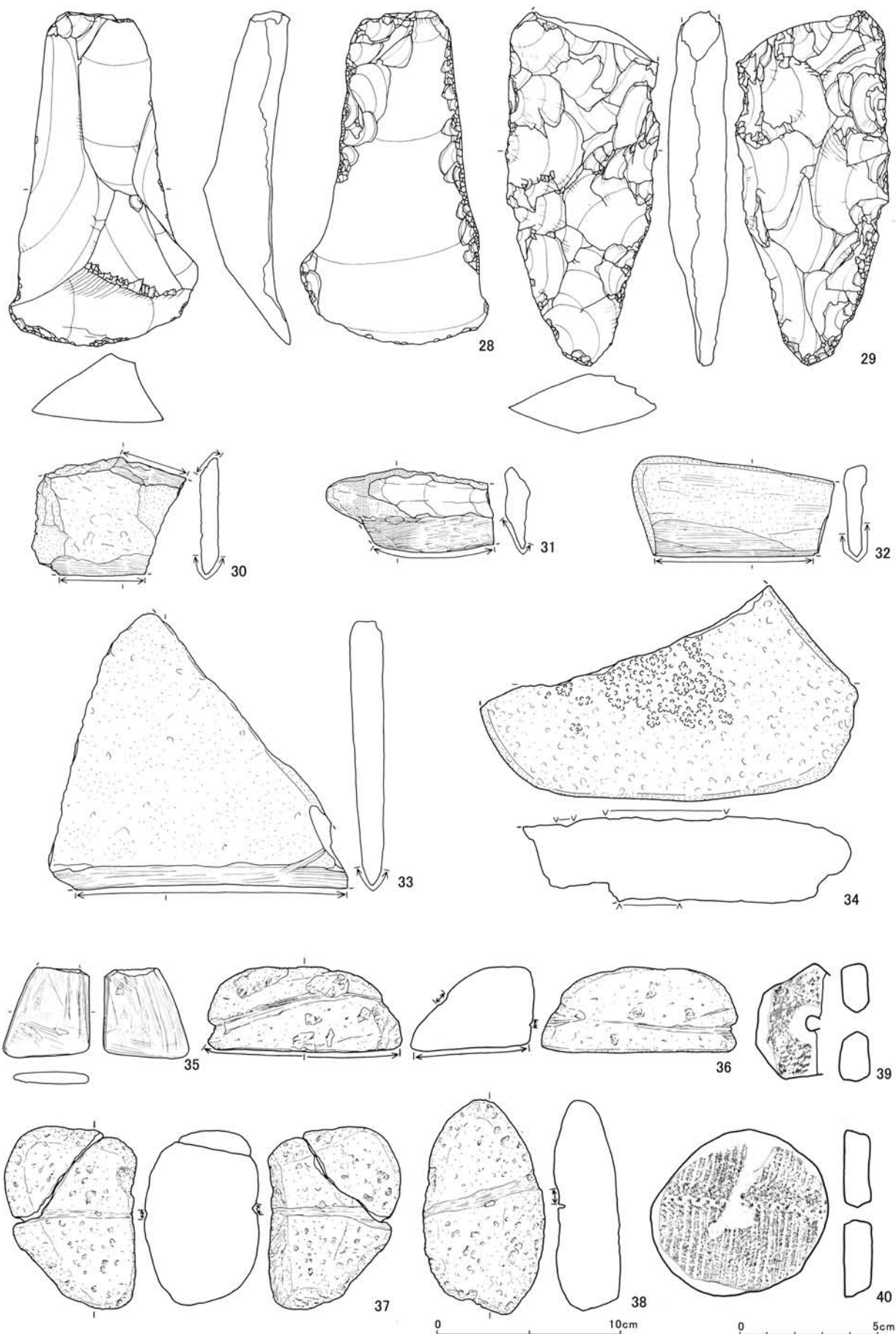
規模：4.08 / 3.55×2.51 / 1.88×0.64m

確認・調査：調査は21・22年度の2か年に亘って調査を実施した。平成21年度には上部の盛土部分の調査を実施、盛土部分を取り除いた後、M・O98・99区のⅢ層上面で黒色土～明褐色土の盛土の落ち込みと共に、調査区O98・99区の盛土中に正立土器(PO-31)と倒立土器(PO-33)の土器を検出、また、南側と東側が範囲確認調査でほぼ方形に攪乱されていることが判明した。平成21年度の調査は攪乱部分を開掘・除去して終了した。平成22年度は周辺・上面の精査から再開した。調査は南北に長軸をもつ隅丸方形住居跡を想定し、南-北・東-西にベルトを設定し、掘り下げを開始した。覆土の盛土中から床面まで多量の土器が出土し、図化しながら掘り下げた。検出した床面は凸凹で、平面形も不整形で、あたかも複数の土坑の集合体の様な形状であった。壁は西側・南側は攪乱のため不明だが、北側や西側はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は検出できなかった。床面が凸凹であることから土坑の切り合い関係を想定したが、確認できなかった。同様の検出結果はH-35・P-33やP-37・38でも確認されている。本遺構を住居跡としたが他の用途を想定すべきかもしれない。覆土8・16層などの土壌を採取してフローテーションを行い、ヒエ・マタタビ・キハダ等の炭化種子が検出されている。

覆土：覆土1～9層は盛土で、多量の土器と共に人為的に投棄されたもの、または周辺の盛土の流れ込みと考えられる。これらには焼土粒・炭化粒・焼骨片・ローム粒を含むものが多い。

平面形：不整形

付属遺構：床面からやや浮いた状況で焼土2か所が検出された。HF-1は覆土8層中から、HF-2は覆土9層中の炭化物・炭化材集中に挟まれて検出された。下位に薄い砂層を検出した。HFC-1は覆土8層で検出され、剥片が2,209点出土した。柱穴は確認されなかった。



图IV-166 H-29 石器·土製品

遺物出土状況：覆土上面から正立・倒立の2個体を検出した。遺物は覆土各層から土器が折り重なった状態で出土した。床面からⅡ群B-3類土器など1,370点、石器等15点、HFCから剥片2,209点、覆土からⅡ群B-3類土器など15,233点、石器等2,856点が出土した。石製品は軽石製石製品2点、線刻礫1点、その他1点である。

時期：縄文時代前期後半のⅡ群B-2類土器の時期である。検出した炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行った。覆土1層PO-33内部：4,590±30yrBP、覆土2層：4,700±30yrBP、覆土3層：4,750±30yrBP、覆土7層：4,610±30yrBP、覆土8層：4,610±30yrBP、覆土8層PO-110：4,650±30yrBP、覆土16層：4,730±30yrBP、の測定結果を得た。

掲載遺物：(土器) 覆土・床面直上・床面から多くの復原土器が得られた。記載にあたって出土層位毎の土器の特徴を明確にするため、覆土1～3層、覆土4層、覆土5～7層、覆土8層～床面の大きく4つに分けて記載することとした。

覆土1～3層 (1～27)

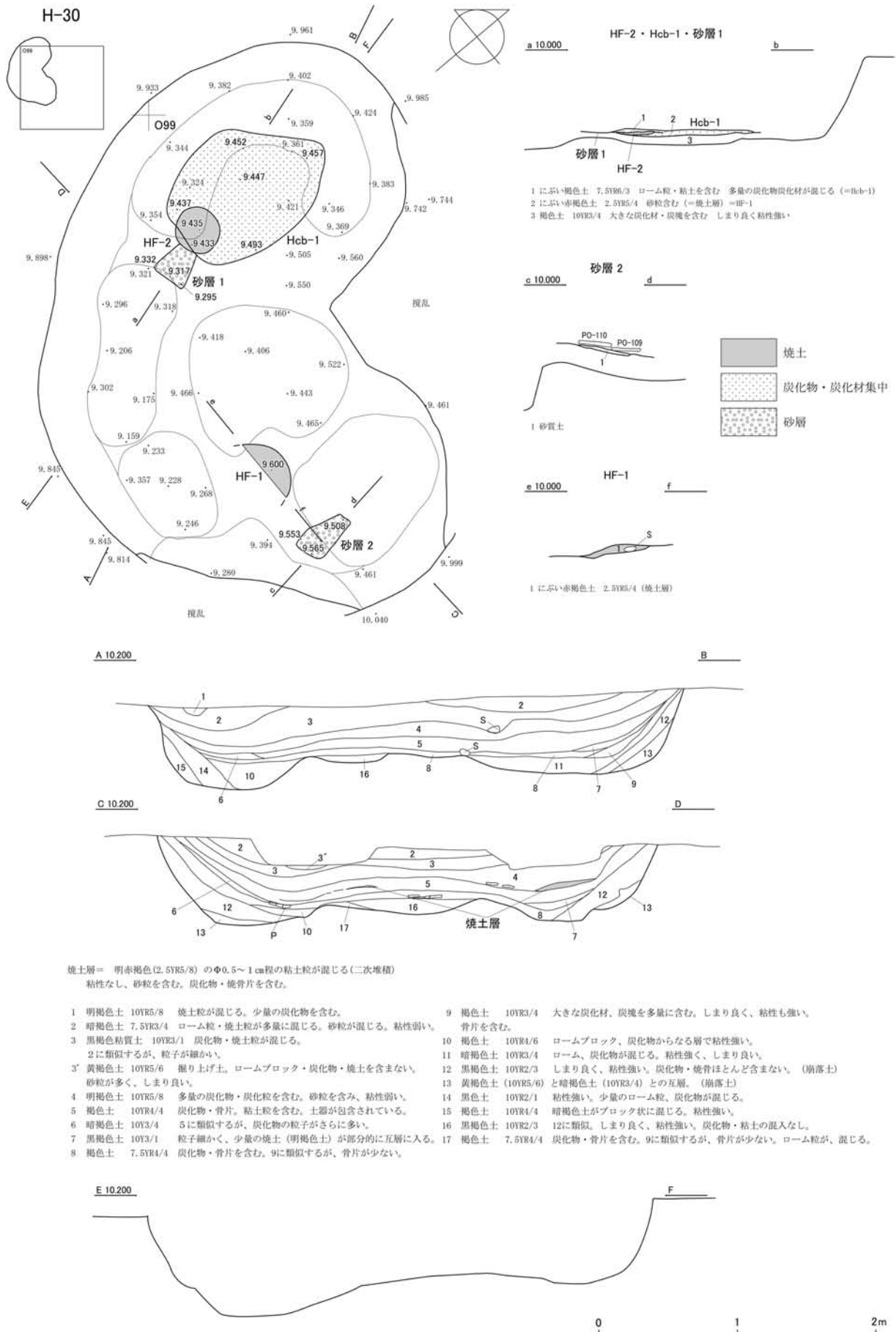
Ⅱ群B-3類土器 (1～13)：1～3は口頸部文様帯下端が2本一組の縄線・沈線の区画帯で区画されているもの。文様帯は、1・3は幅が狭く、2は幅広である。1は縄線文で区画され、器面に直前段反撚の原体による縄文が施されている。2は沈線で区画され、文様帯には横走気味、体部には縦位の直前段反撚の原体による縄文が施されている。3は縄線で区画され、文様帯には結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出し、体部は直前段反撚による縄文・結束羽状縄文・複節の斜行縄文を組み合わせで施文している。4・5は口頸部文様帯下端が2本一組の縄線で区画され、さらに縦位に縄線文が加えられているもの。4は直前段反撚による縄文が、文様帯は横走気味に、体部は縦位に施文される。5の文様帯には直前段反撚による縄文、体部には直前段反撚による縄文と斜行縄文を組み合わせで施している。6・7は口頸部文様帯の上下端及び波頂部からの縦位の区画文が施されたもの。器面には直前段反撚による縄文が施される。6の文様帯内は横走気味に、体部は縦位に施されている。7の文様区画帯には綾絡文と半截竹管状工具による刺突文が加えられている。8・9は口頸部文様区画帯をもたないもので、8の文様帯には結束羽状縄文、体部には直前段反撚の原体による縄文が施されている。9は文様帯には貝殻条痕文、体部にはやや節が大きい直前段反撚によると思われる縄文が施されている。10は、文様帯をもたないもので、体部上半に結束羽状縄文、下半は単節の斜行縄文と複節の斜行縄文が施されている。11は、体部上半が斜行縄文、下半が直前段反撚による縄文が施されたもの。12は器面に直前段反撚の原体による縄文が施されている。13は体部で、口頸部・底部を欠失する。体部は複節の斜行縄文である。

Ⅱ群B-4類土器 (14～22)

口頸部文様帯の下端が結節羽状縄文で区画されているもの (14～16・18・19・21・22)：体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの、体部に多軸絡条体の回転文が施されているもの、口頸部文様帯下端に刺突文が加えられた肥厚帯ないし貼付帯で区画されているものに分けられる。

体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの (14・15)：14の無文地の文様帯には縄線文が施される。15の文様帯は結束羽状縄文を地文とし、縄線文が加えられている。体部には単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせで施文している。

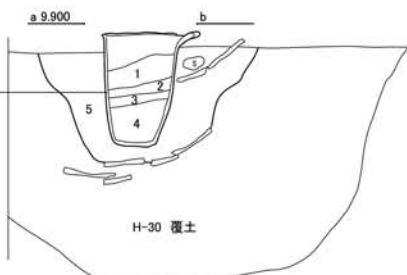
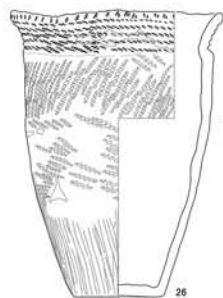
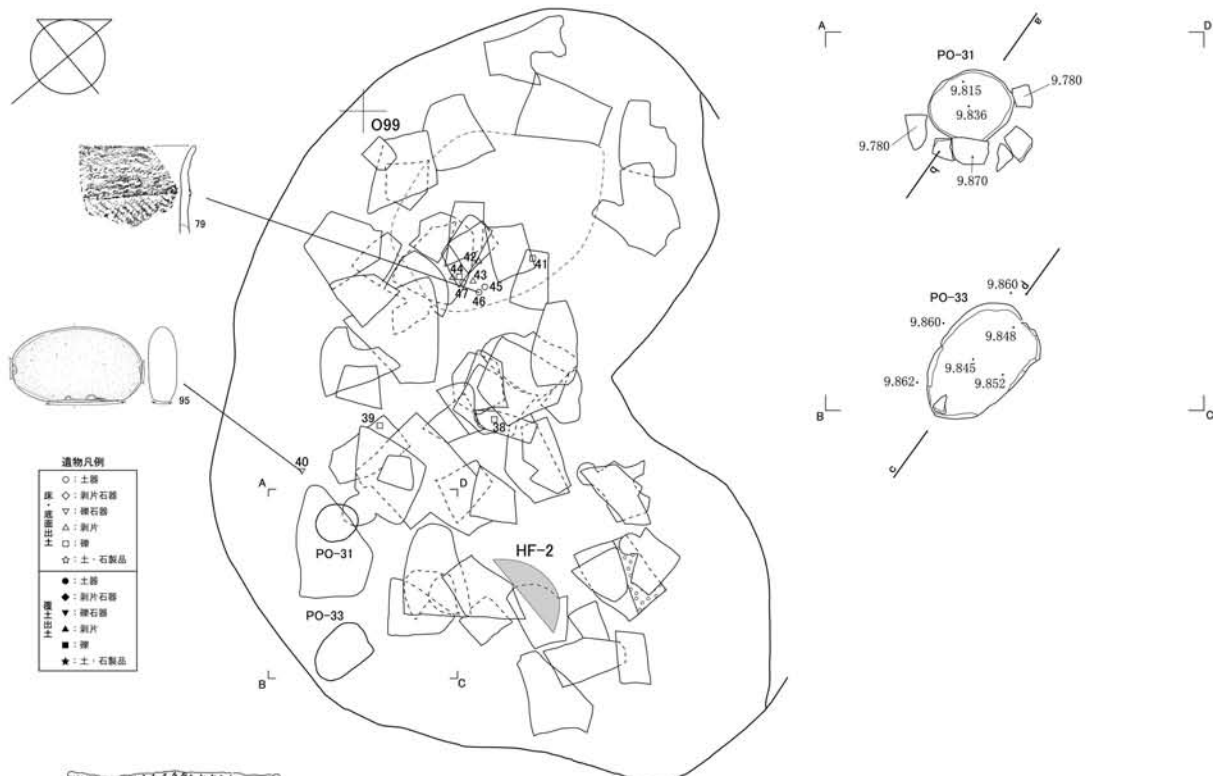
体部に多軸絡条体の回転文が施されているもの (19・21・22)：19の口頸部文様帯には縄線で鋸歯ないし菱目状の文様構成を作出され、短縄線が加えられている。体部には多軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせで施文している。21の無文地の文様帯には山形の縄線文が施される。22は入れ子の菱目状の縄線文が施される。



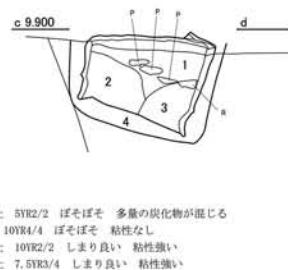
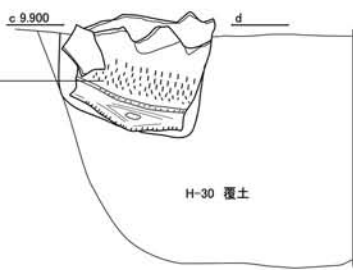
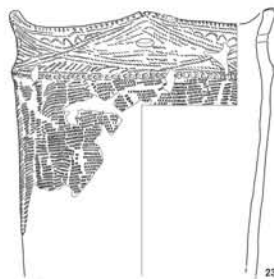
焼土層= 明赤褐色(2.5YR5/8)のΦ0.5~1cm程の粘土粒が混じる(二次堆積)
 粘性なし、砂粒を含む。炭化物・焼骨片を含む。

- | | |
|--|---|
| 1 明褐色土 10YR5/8 焼土粒が混じる。少量の炭化物を含む。 | 9 褐色土 10YR3/4 大きな炭化材、炭塊を多量に含む。しまり良く、粘性も強い。骨片を含む。 |
| 2 暗褐色土 7.5YR3/4 ローム粒・焼土粒が多量に混じる。砂粒が混じる。粘性弱い。 | 10 褐色土 10YR4/6 ロームブロック、炭化物からなる層で粘性強い。 |
| 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭化物・焼土粒が混じる。2に類似するが、粒子が細かい。 | 11 暗褐色土 10YR3/4 ローム、炭化物が混じる。粘性強く、しまり良い。 |
| 3' 黄褐色土 10YR5/6 掘り上げ土。ロームブロック・炭化物・焼土を含まない。砂粒が多く、しまり良い。 | 12 黒褐色土 10YR2/3 しまり良く、粘性強い。炭化物・焼骨ほとんど含まない。(崩落土) |
| 4 明褐色土 10YR5/8 多量の炭化物・炭化粒を含む。砂粒を含み、粘性弱い。 | 13 黄褐色土(10YR5/6)と暗褐色土(10YR3/4)との互層。(崩落土) |
| 5 褐色土 10YR4/4 炭化物・骨片。粘土粒を含む。土器が包含されている。 | 14 黒色土 10YR2/1 粘性強い。少量のローム粒、炭化物が混じる。 |
| 6 暗褐色土 10Y3/4 5に類似するが、炭化物の粒子がさらに多い。 | 15 褐色土 10YR4/4 暗褐色土がブロック状に混じる。粘性強い。 |
| 7 黒褐色土 10Y3/1 粒子細かく、少量の焼土(明褐色土)が部分的に互層に入る。 | 16 黒褐色土 10YR2/3 12に類似。しまり良く、粘性強い。炭化物・粘土の混入なし。 |
| 8 褐色土 7.5YR4/4 炭化物・骨片を含む。9に類似するが、骨片が少ない。 | 17 褐色土 7.5YR4/4 炭化物・骨片を含む。9に類似するが、骨片が少ない。ローム粒が、混じる。 |

図IV-167 H-30



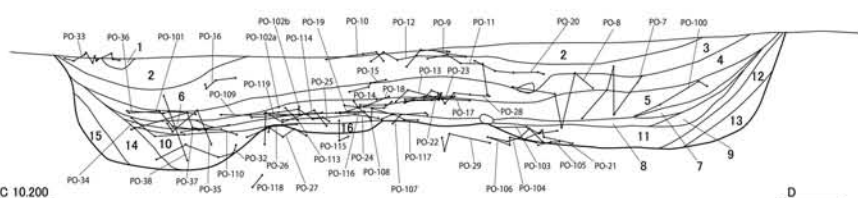
- 1 明褐色砂質土 10YR5/6 細かい砂質気味の粘土塊が混じる
- 2 黒褐色土 10YR2/3 細かくしまり良い
- 3 明黄褐色土 10YR6/6 極めて細かい粘土塊が混じる(砂質)
- 4 黒褐色土 10YR2/3 ぼそぼそ 炭化材を含む
- 5 暗褐色土 7.5YR3/4 しまり良い 粘性強い



- 1 黒褐色土 5YR2/2 ぼそぼそ 多量の炭化物が混じる
- 2 褐色土 10YR4/4 ぼそぼそ 粘性なし
- 3 黒褐色土 10YR2/2 しまり良い 粘性強い
- 4 暗褐色土 7.5YR3/4 しまり良い 粘性強い

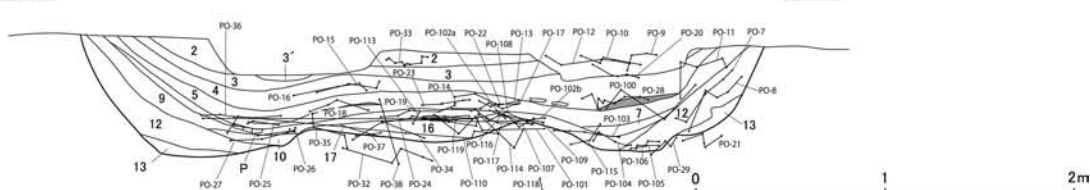
A 10.200

B



C 10.200

D



図IV-168 H-30 PO出土状況図

覆土 1 ~ 3 層



図IV-169 H-30 遺物出土状況図 覆土 1 ~ 3 層

口頸部文様帯下端に刺突文が加えられた肥厚帯ないし貼付帯で区画されているもの (16・18) :
16・18は緩やかな波状ないし平縁で、無文地の文様帯に整然とした山形・鋸歯状の縄線文が施され、縄線間に斜位の短縄文が加えられる。体部には単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせて施文している。

区画帯が結束羽状縄文と組み合わされたもの (17) :17の文様帯は格子目状の文様構成で、体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせて施文しているもの。20は肩部分で口頸部文様帯が区画され、無文地の文様帯には鋸歯状の縄線文が施され、縄線間に短縄線が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器 (23～27) : 23・24の体部は多軸絡条体の回転文である。23は覆土上部で倒立して出土した。体部下半は欠失する。波頂部に刻目が加えられた波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。幅広で、無文地の口頸部文様帯の下端は刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には波頂部を頂点とする入れ子の菱目状の縄線文と連続する「逆U」字状の縄線文が加えられている。波頂部下位に長軸2cm程の楕円形の穿孔が加えられている。24は体部下半。25の体部は条痕文である。波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。幅広で、無文地の口頸部文様帯下端は縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には波頂部を頂点とする入れ子の山形の縄線文が加えられている。26は肩部分で口頸部文様帯を区画、無文地の文様帯には縄線文が施され、体部上半には節の大きい斜行縄文、下半は条痕文が施されている。27は台付きであるが、台部分を欠失する。口縁部文様帯は肥厚し、上下を縄の圧痕文で区画し、無文地の文様帯には2本一組の縄線文が加えられている。体部は斜行縄文である。

(小拵) 口頸部文様帯下端が結節羽状縄文で区画されているものはH-26でまとまって出土している。本遺構出土の資料は、H-26に比べて文様帯がわずかに幅広で、刺突文が加えられた貼付帯が加わる。文様帯の文様構成も「矢羽状・鋸歯状・山形・菱目状の縄線文」・「波頂部を頂点とする山形・鋸歯状の縄線文」・「縄線間に斜位の短縄文」と違いが認められる。文様構成は整然とし、本層出土のⅡ群B-5類土器にスムーズに移行するように思われる。

覆土4層 (28～42)

Ⅱ群B-2類土器 (28～30・33)

口頸部文様帯下端が貼付帯で区画されているもの (28～30・33) : 28の口頸部文様帯下端は半截竹管状工具外面による刺突が加えられた貼付帯によって区画されている。文様帯には単節と無節の結束羽状縄文が菱目状に施されている。体部には斜行縄文が施され、波頂部下位の体部には結束羽状縄文が縦位に加えられている。29・30・33は幅広の口頸部文様帯下端が横位の短刻線が加えられた貼付帯で区画されているもの。29は口頸部文様帯上端を単軸絡条体の圧痕文、下端を上下に単軸絡条体の圧痕が加えられ、短刻線が加えられた貼付帯で区画されている。無文地の文様帯は単軸絡条体の圧痕文が鋸歯状に施されている。30は文様帯・体部に施文方向が異なる直前段反撚の縄文が施されている。33は波状口縁である。口縁部文様帯下端は押引文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯には貝殻条痕文上に縄線文が加えられ、波頂部下位に2本一組の沈線が2本加えられている。

Ⅱ群B-3類土器 (31・32・34～42)

体部に斜行縄文が施されているもの (31・35・41) :31は波状口縁、器面上半に複節の斜行縄文、下半は単節の斜行縄文は施され、口頸部文様帯の下端は短刻線で区画されている。35は無文地の口頸部文様帯には横位の単軸絡条体の圧痕文が加えられ、さらに2本一組の単軸絡条体圧痕文が縦位に加えられている。体部には単節の斜行縄文・複節の斜行縄文・単軸絡条体の回転文が施されている。41は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施され、体部は斜行縄文である。

体部に単軸燃糸文の回転文が施されているもの (39・40)：いずれも文様区画帯をもたないもの。39の口頸部文様帯には斜行縄文、体部は単軸絡条体第4類の回転文である。40の口頸部文様帯には複節の斜行縄文、体部は単軸絡条体の回転文である。

体部に直前段反撚による縄文が施されているもの (32・34・36～38・42)：32・34は口頸部文様帯下端を沈線文によって区画し、文様帯には垂下する沈線文が加えられているもの。32は口頸部文様帯下端を刺突文と2本一組の沈線文によって区画され、文様帯と体部には施文方向が異なる直前段反撚の原体による縄文が施され、波頂部から垂下する3本一組の沈線文を加えている。34は平縁で、口頸部文様帯下端を2本一組の沈で区画、文様帯と体部には施文方向をかけた直前段反撚による縄文が施され、波頂部から垂下する3本一組の沈線文を加えている。36～38は文様区画帯をもたないもの。36は緩やかな波状口縁、無文地の口頸部文様帯には縄線文と波頂部を頂点とする3本一組の鋸歯状の縄線文を加えている。37は筒形で、体部下半を欠失する。平縁で口縁部の無文帯に縄線文を加えている。38は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施される。42は体部下半である。

(小括) 覆土4層から得られた復原土器を見る限りⅡ群B-4類土器・Ⅱ群B-5類土器の復原個体が得られていない。また、出土量も少ない。体部に直前段反撚による縄文が施されたⅡ群B-3類土器が多く認められた。

覆土5～7層 (43～56)

Ⅱ群B-2類土器 (43・44・50)：43・44は筒形で、口頸部文様帯下端が貼付帯で区画されているもの。43の無文地の文様帯には不整綾絡文と合撚りの圧痕文が、体部は単軸絡条体の回転文である。44は縄線文が上下に加えられた貼付帯で口頸部を区画している。口頸部・体部に斜行縄文が施されている。体部には部分的に貝殻条痕が加えられている。50は破片資料で、波状口縁である。口頸部文様帯には不整綾絡文が加えられ、体部は単軸絡条体第5類の回転文である。

Ⅱ群B-3類土器 (45～49・51～56)

体部に縄文が施されているもの (49・51・54・56)：49は無節の斜行縄文が体部に施される。口頸部文様帯は貝殻条痕文である。51は底部・口縁部を欠失する。無文地の頸部には縄線文が加えられている。体部上半は斜行縄文、下半は横走気味の縄文である。54・56は底部破片。斜行縄文が施される。

体部に直前段反撚による縄文が施されているもの (45～48・52・53)：45・46は口頸部文様帯下端が区画されているもの。45は半截竹管状工具内面の押引文で、46は2本一組の縄線で区画されている。いずれも口頸部文様帯には直前段反撚の原体による縄文が方向を変えて施文される。47は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施され、文様帯の上下を単軸絡条体の圧痕文で区画し、波頂部から垂下する3本一組の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。48は筒形、無文地の口頸部文様帯には不整綾絡文が施される。52は器面に直前段反撚による縄文が施される。53は体部下半を欠失する。体部上半が大きく開く器形である。口頸部文様帯下端は半截竹管状工具外面による刺突で区画され、文様帯には3本一組の縄線文と綾絡文が加えられている。器壁が薄く、文様構成はⅡ群B-4類土器に類似する。Ⅱ群B-3類土器の中にあっても新しいものと思われる。

体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの (55)：55は上半が欠失した底部破片。器面に粗い単軸絡条体の回転文が施されている。

覆土8層～床面 (57～80)：58・59・62・63・68・79は床面出土である。

体部に縄文が施されたもの (57・61～64・68・69・79・80)

Ⅱ群B-1群土器 (57)：57の体部は複節の斜行縄文である。口頸部は大きく外反する。口頸部文様帯は不整綾絡文である。60・76と共に出土している。

Ⅱ群B-2群土器(79):79の口頸部文様帯は貼付帯で区画され、文様帯に不整綾絡文が施される。

Ⅱ群B-3群土器(61~64・68・69・80):61は器面に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出している。62は体部上半に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出し、下半には斜行縄文である。63は小突起が施された口縁部。器面に斜行縄文が施され、口頸部上端に1条、下端に2条の区画文が加えられている。64の体部には斜行縄文と多軸絡条体の回転文を組み合わせで施文している。口頸部文様帯には斜行縄文が施され、下端を2本一組の縄線で区画し、縦位の縄線文が加えられる。68の体部には縦走する縄文が施され、口頸部には貝殻条痕文が施される。69の口頸部文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画される。文様帯には貝殻条痕文が施され、波頂部から垂下する2本一組の沈線文が加えられる。69は口頸部の文様構成からⅡ群B-3群土器としたがⅡ群B-2群土器の可能性もある。80は2本一組の沈線文で口頸部文様帯下端を区画し、文様帯には結束羽状縄文が施される。

体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの(60・65~67・71)

Ⅱ群B-2群土器(60・66):60の口頸部文様帯下端は撚糸文が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には不整綾絡文が施される。66の口頸部文様帯は刻目文が加えられた貼付帯で区画され、口頸部には斜行縄文が施される。

Ⅱ群B-3群土器(65・67・71):65・67は区画帯をもたないもの。65の口頸部文様帯には斜行縄文が施される。67の体部は単軸絡条体第5類の回転文が斜行縄文と組み合わせで施文している。71の口頸部文様帯は斜行縄文を地文とし縄線文が加えられる。体部は単軸絡条体第5類の回転文である。

体部に直前段反撚による縄文が施されたもの(59・72~78)

Ⅱ群B-2群土器(59):59は波状口縁である。口頸部文様帯の区画文をもたないもの。口頸部文様帯には不整綾絡文が施される。体部上半は複節の斜行縄文、下半は直前段反撚による縄文である。

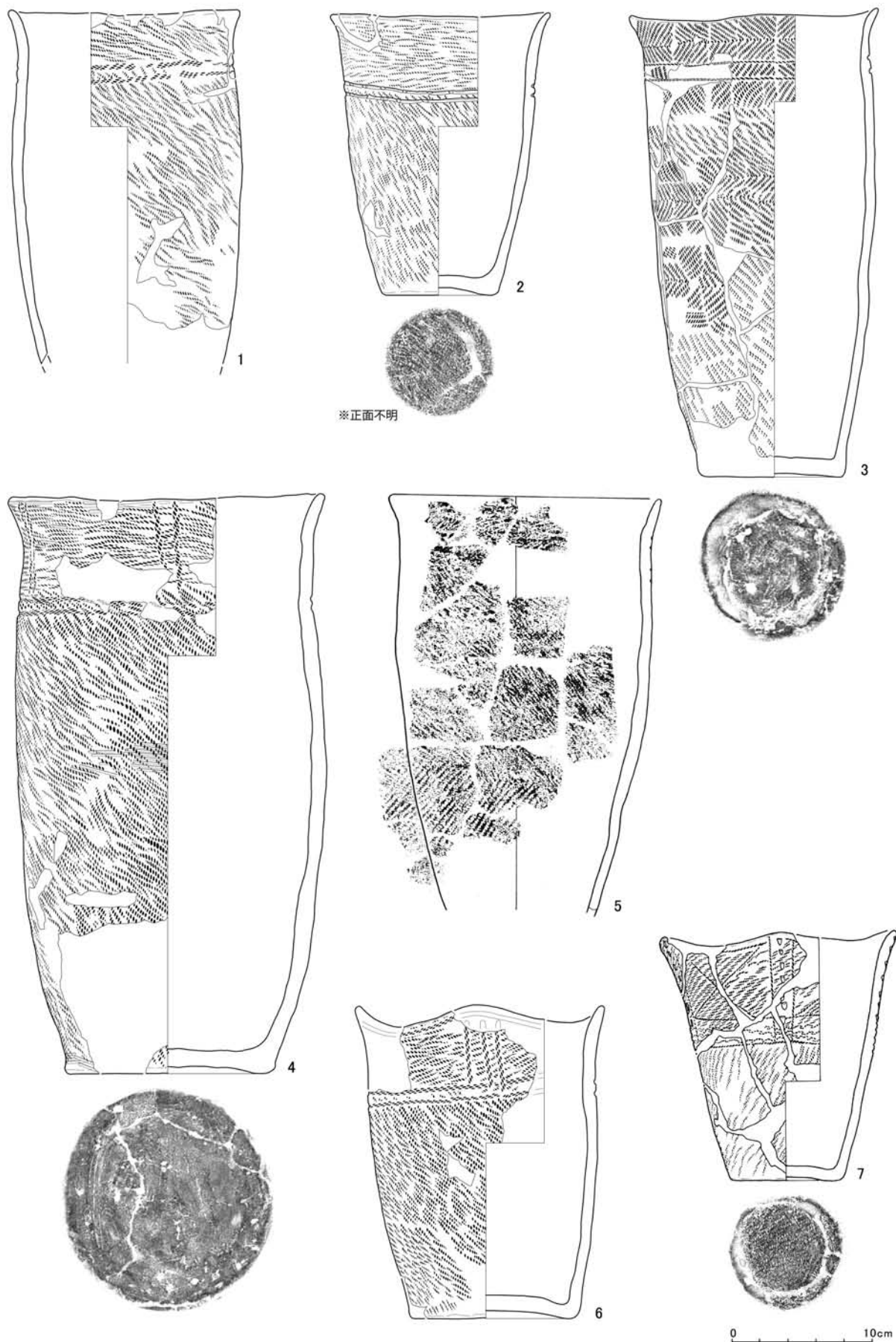
Ⅱ群B-3群土器(72~78):72は口縁部を欠失する。口頸部文様帯下端は貼付帯によって区画され、無文地の文様帯に縄線文と縦位の沈線文が加えられる。73は口頸部文様帯下端を2本一組の縄線で区画し、文様帯には直前段反撚による縄文が横走気味に施される。74は口頸部文様帯下端を2本一組の縄線で区画している。文様帯には直前段反撚による縄文が横走気味に施され、波頂部からの3本一組に縄線文が加えられる。75の口頸部文様帯には横走気味の直前段反撚による縄文が施される。76~78は器面に直前段反撚による縄文が施されるもの。78は体部下半の資料。

体部に多軸絡条体の回転文が施されているもの(58・70)

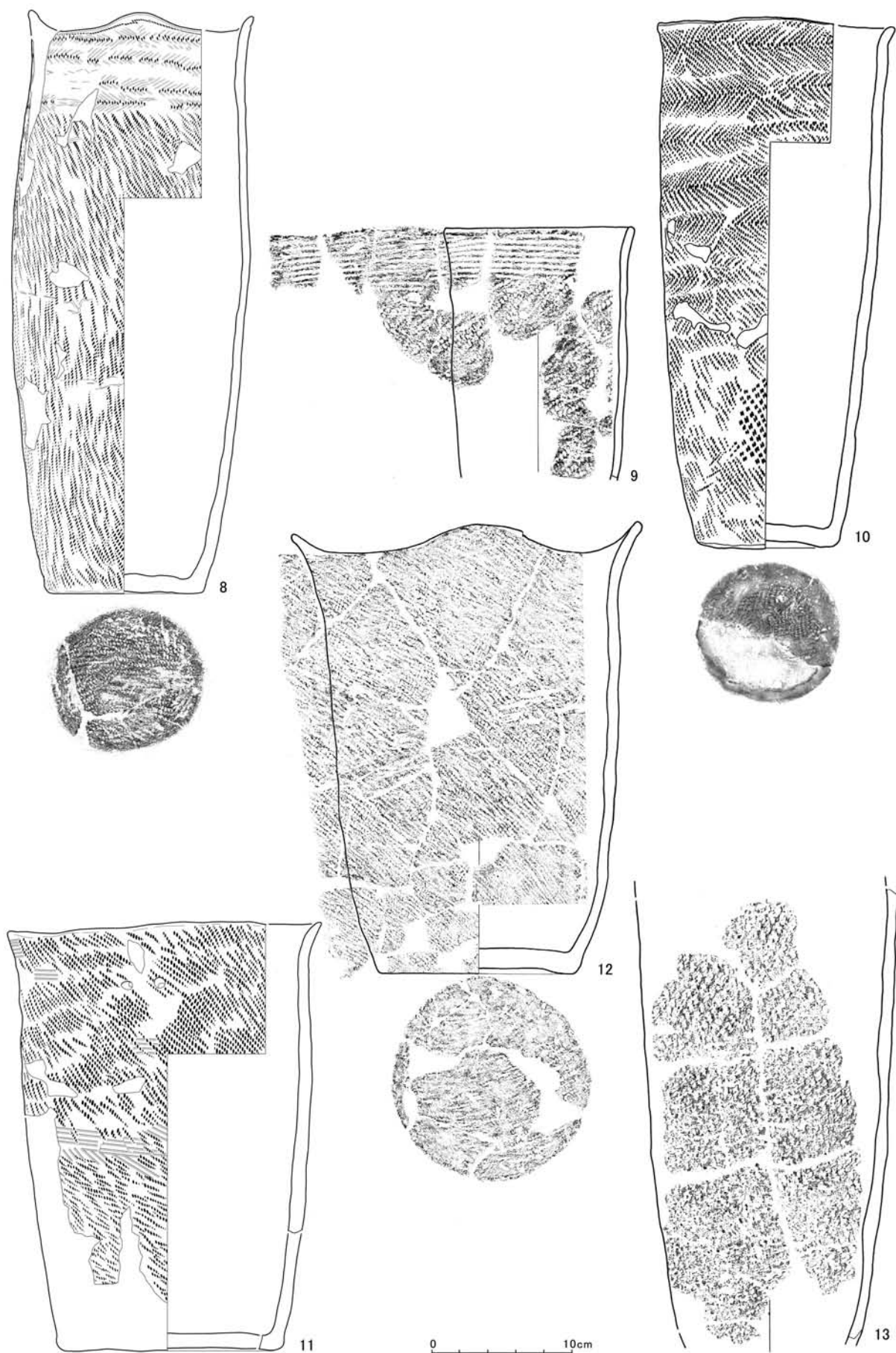
Ⅱ群B-2群土器(58・70):58は波状口縁で、口頸部文様帯下端は縄線文で区画される。文様帯上半には不整綾絡文が施され、下半は無文帯である。70は波状口縁で、口頸部文様帯下端は貼付帯によって区画されている。無文地の文様帯には入れ子の鋸歯状の縄線文が施される。

(小括)覆土1~3層のⅡ群B-4群土器の区画帯(区画文)は、「結節羽状縄文と刺突文が加えられた貼付帯と組み合わせられたもの」と「結節羽状縄文のみのもの」が認められた。前者は体部に単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文との組み合わせ、後者は体部に多軸絡条体の回転文と組み合わせで施文される傾向が認められる。前者の類例はH-26で1個体が後者の類例とともに出土している。しかし、H-26後者の類例の体部文様は単軸絡条体の回転文、単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されたもので、体部に多軸絡条体の回転文が施されたH-30の資料、体部文様の違いが認められる。また、口頸部文様帯においても本遺構出土資料が、やや幅広で整然とした文様構成をもつものに対し、H-26は幅が狭く、文様構成も「初源的な様相」ないし「崩れた様相」を示し、時間差が想定できそうである。

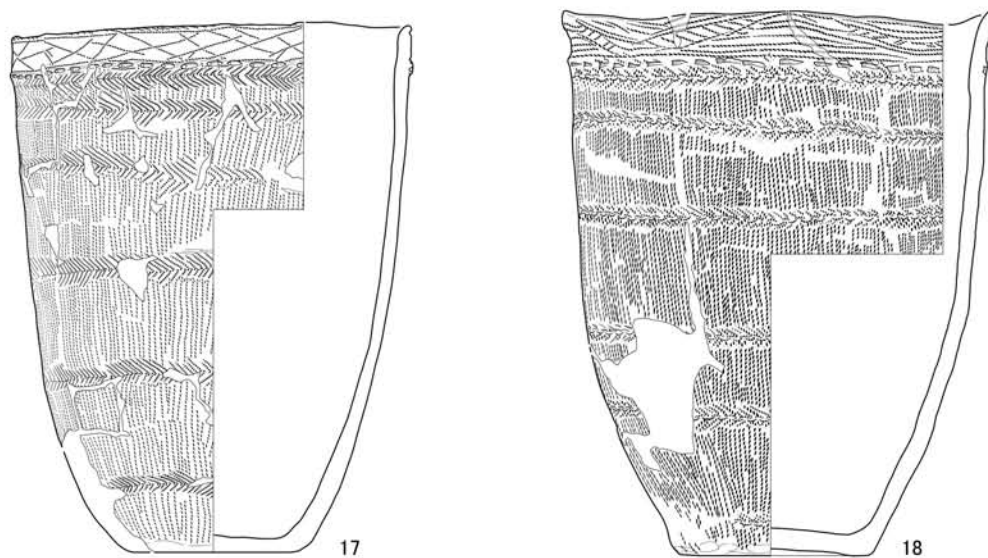
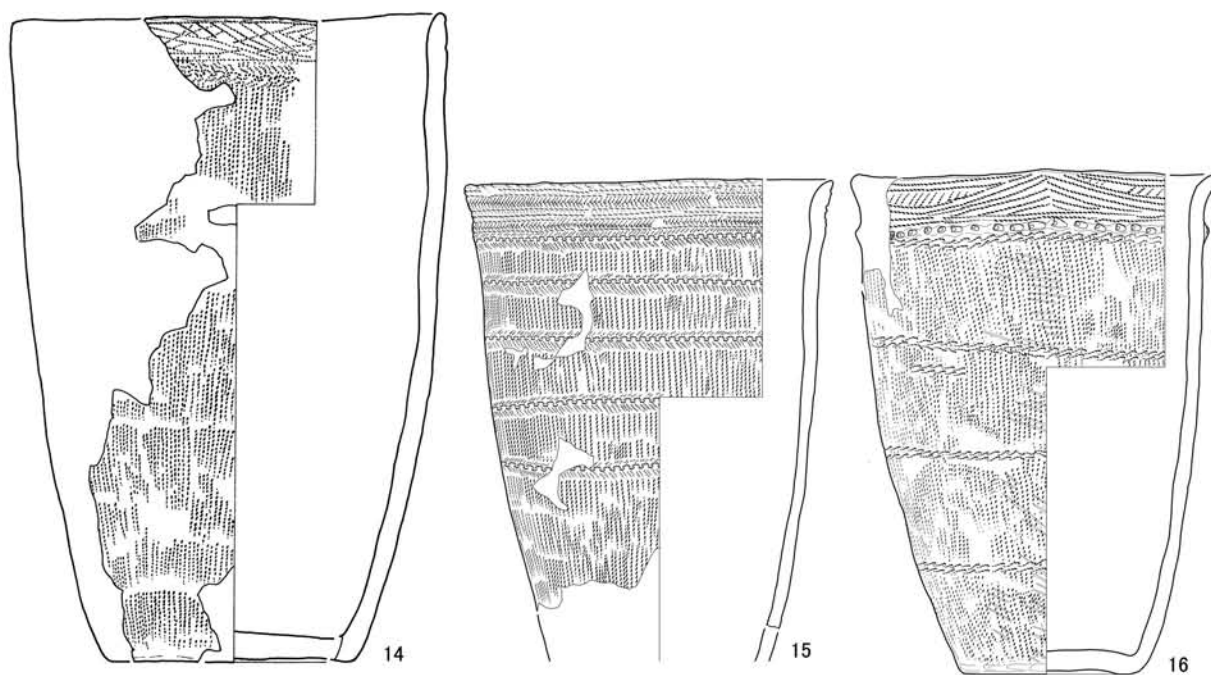
覆土4層の復原土器を見る限りⅡ群B-4群土器・Ⅱ群B-5群土器が得られていない。体部縄文として直前段反撚による縄文が覆土5~7層に比べさらに多用される傾向が指摘できる。また、文様



図IV-170 H-30 土器 (1) 覆土1~3層

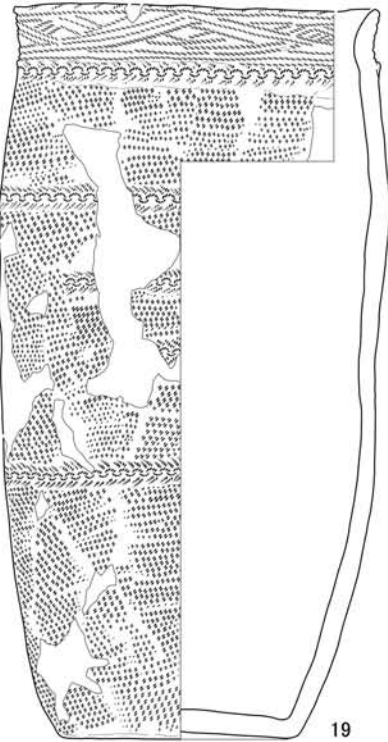


图IV-171 H-30 土器 (2) 覆土1~3層

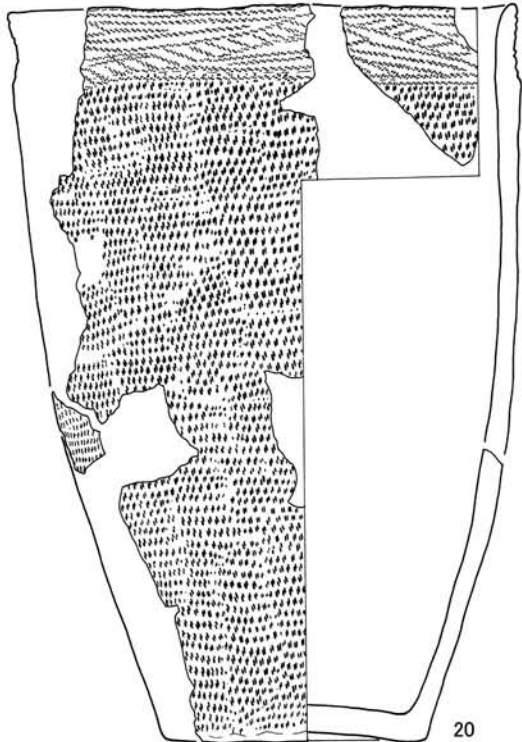


0 10cm

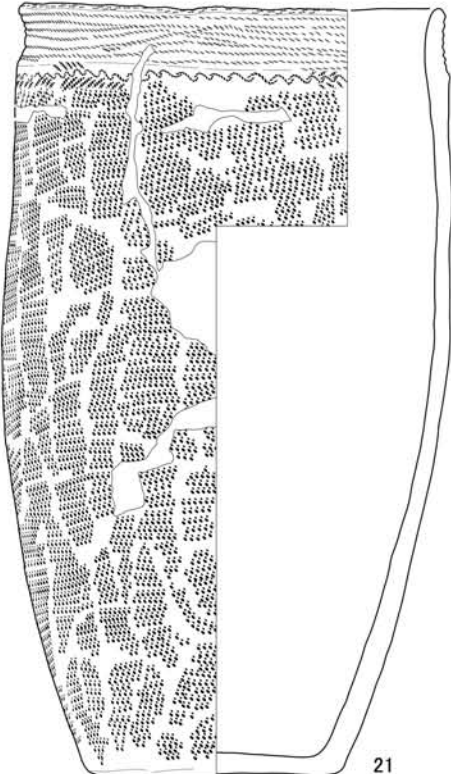
図IV-172 H-30 土器 (3) 覆土1~3層



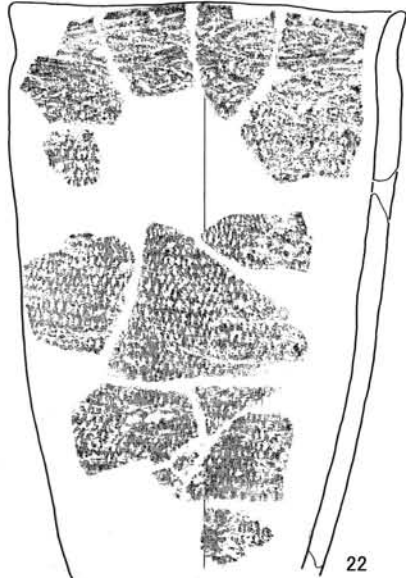
19



20



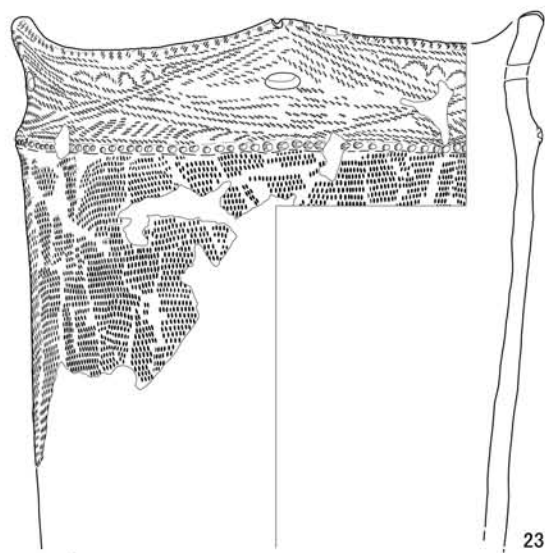
21



22

0 10cm

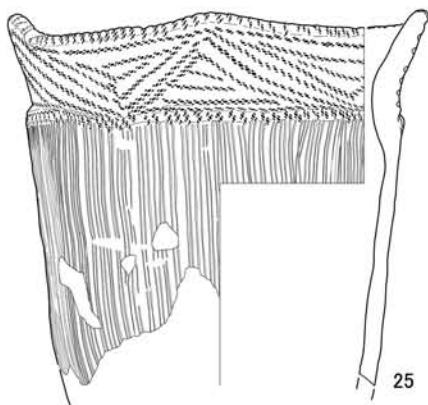
图IV-173 H-30 土器 (4) 覆土 1~3 層



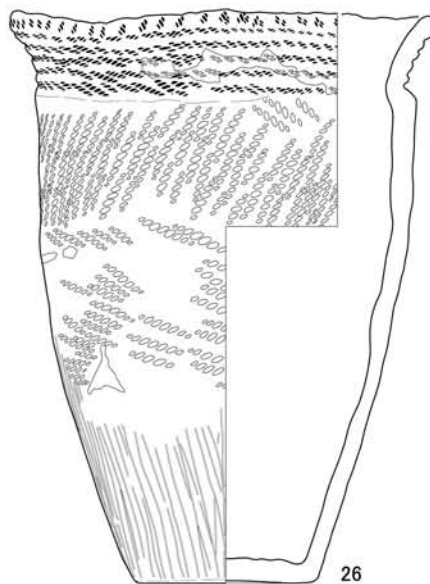
23



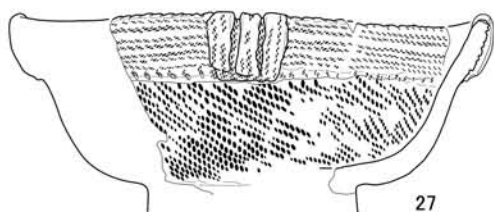
24



25



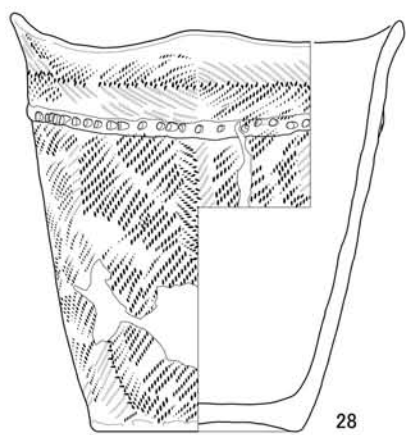
26



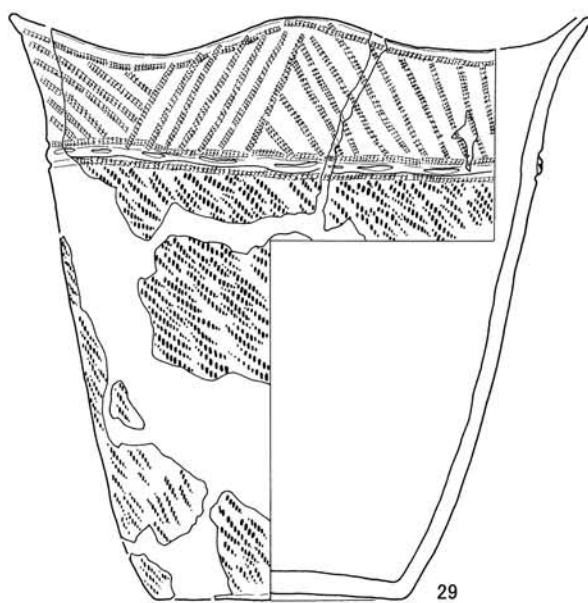
27

0 10cm

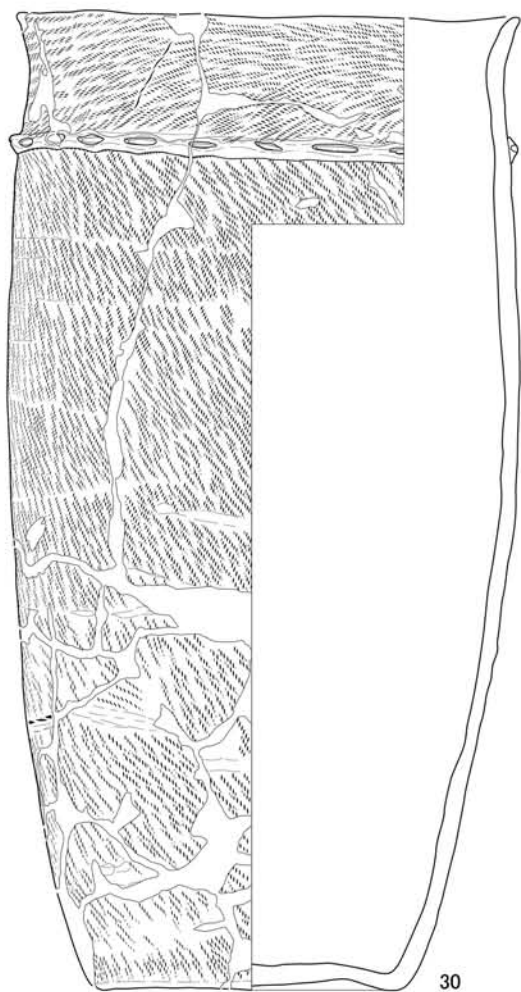
図IV-174 H-30 土器 (5) 覆土1~3層



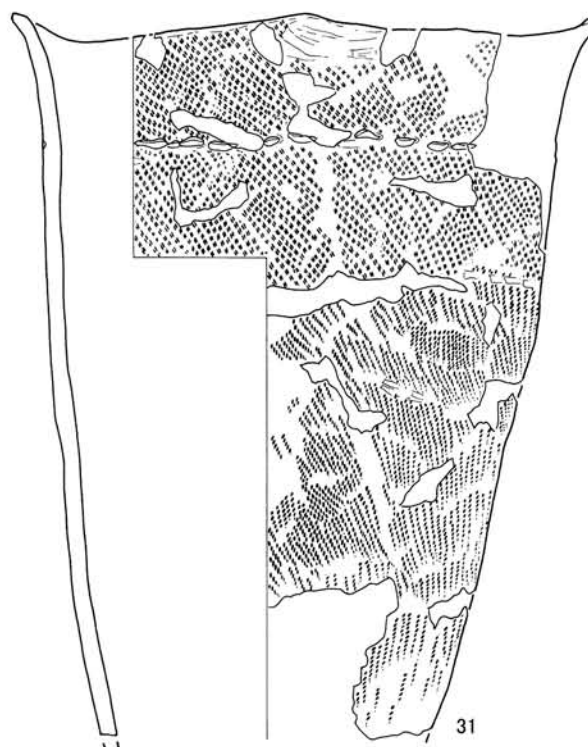
28



29



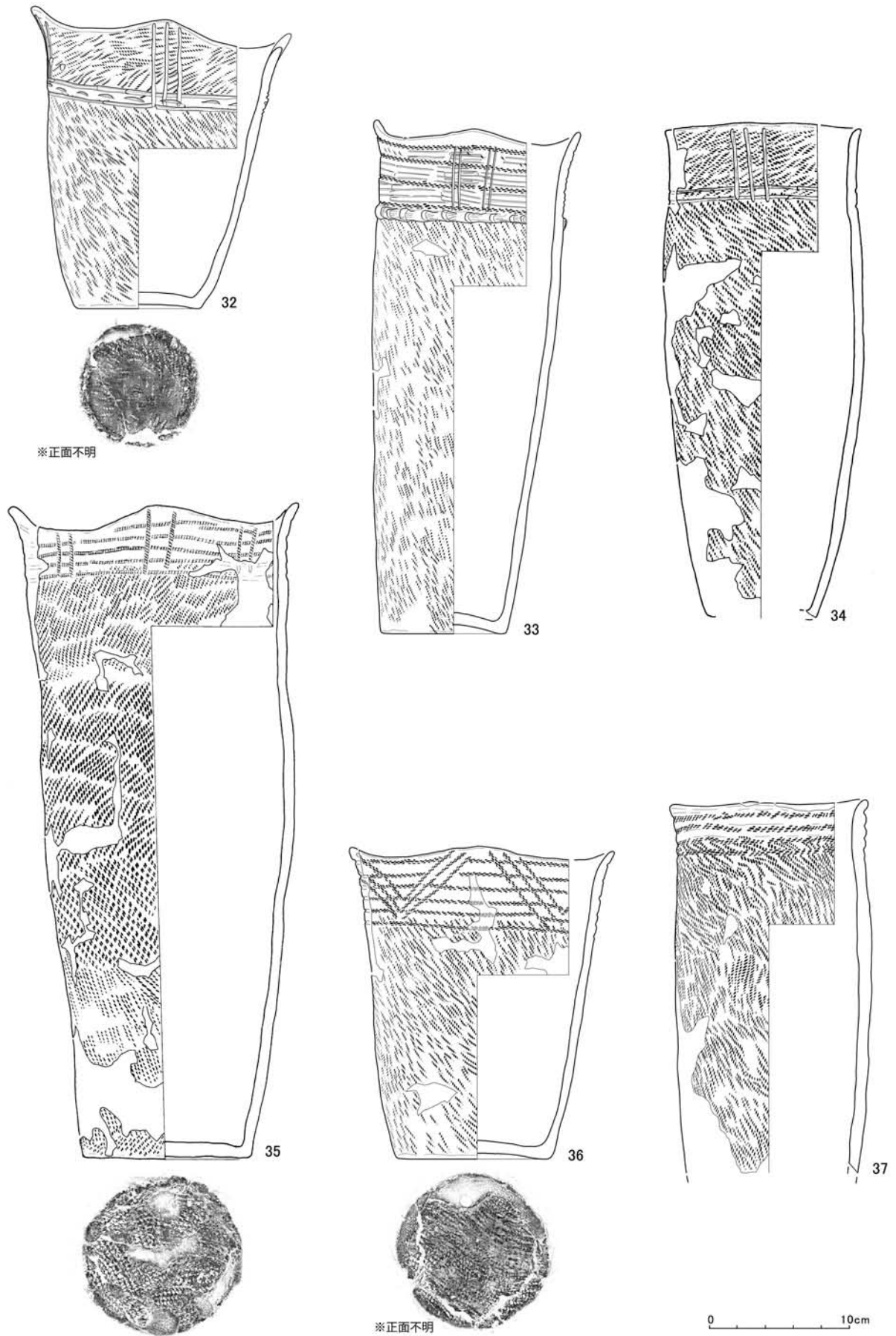
30



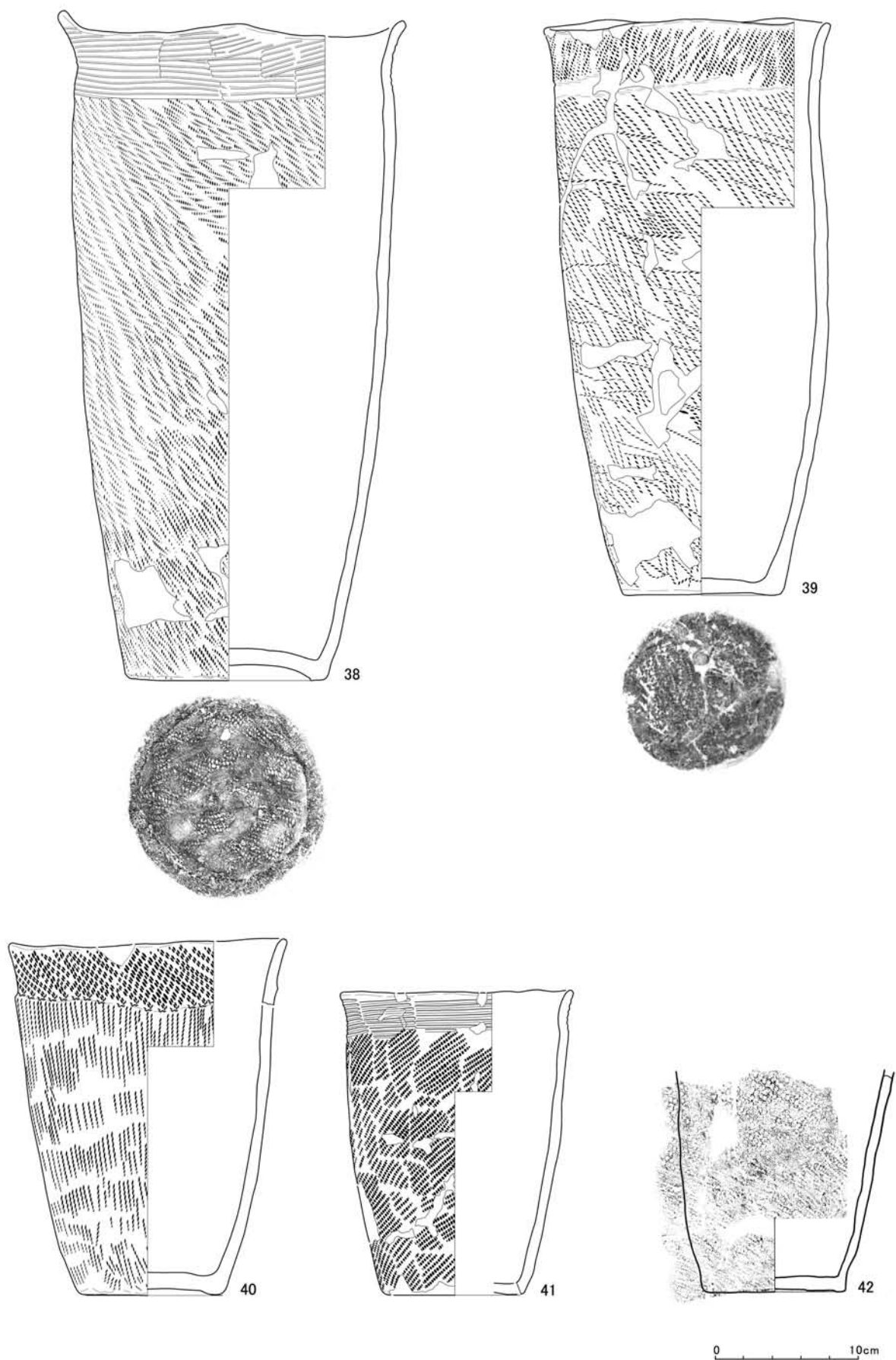
31

0 10cm

图IV-176 H-30 土器 (6) 覆土 4 層

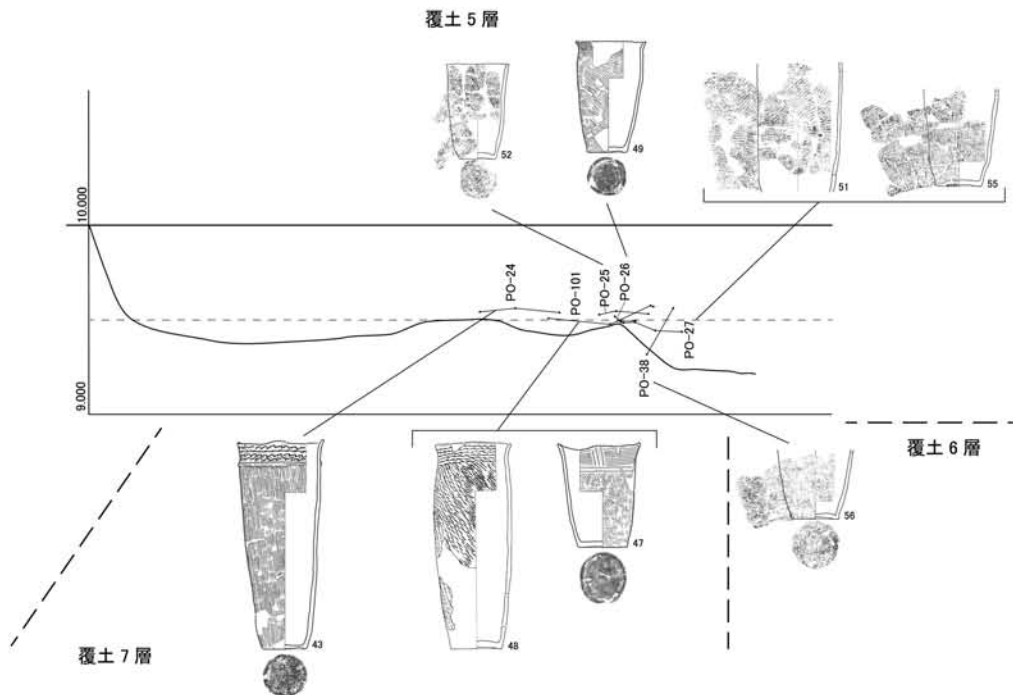
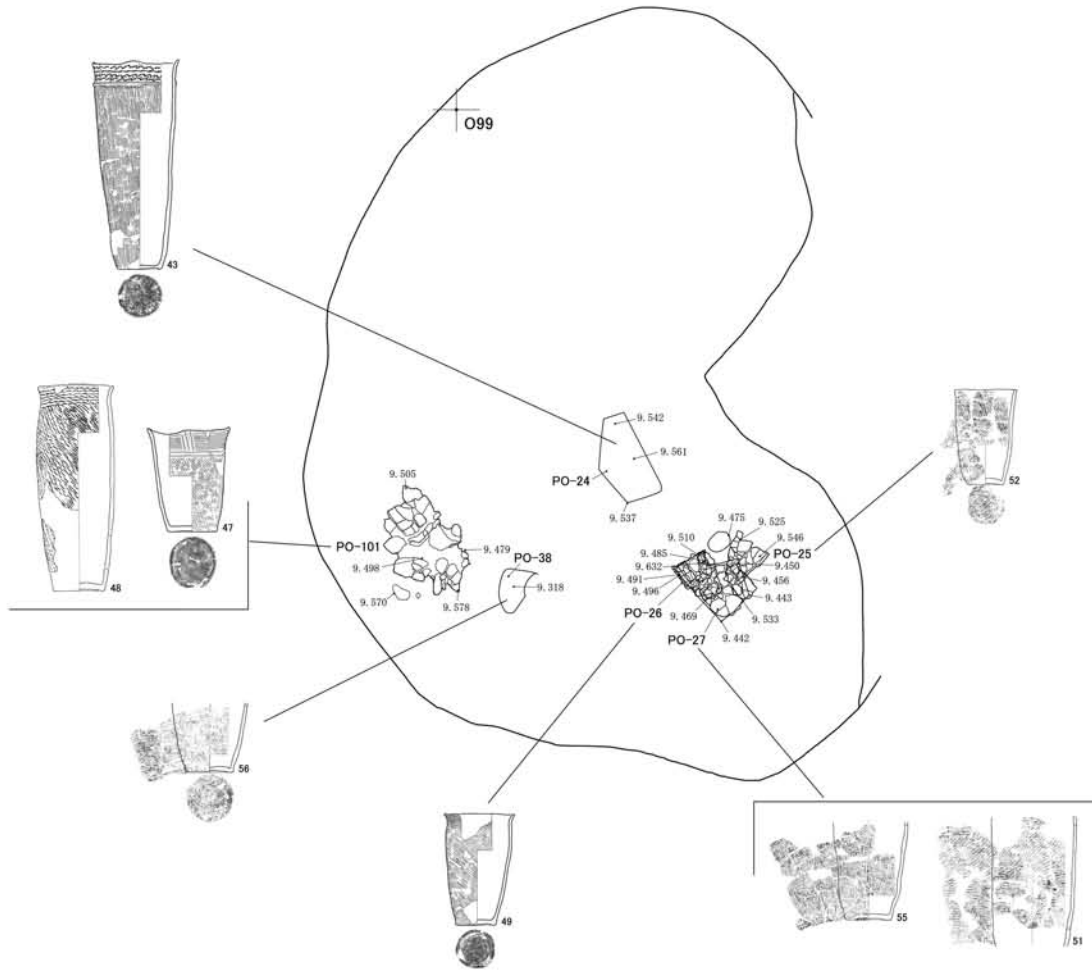


图IV-177 H-30 土器 (7) 覆土 4 層

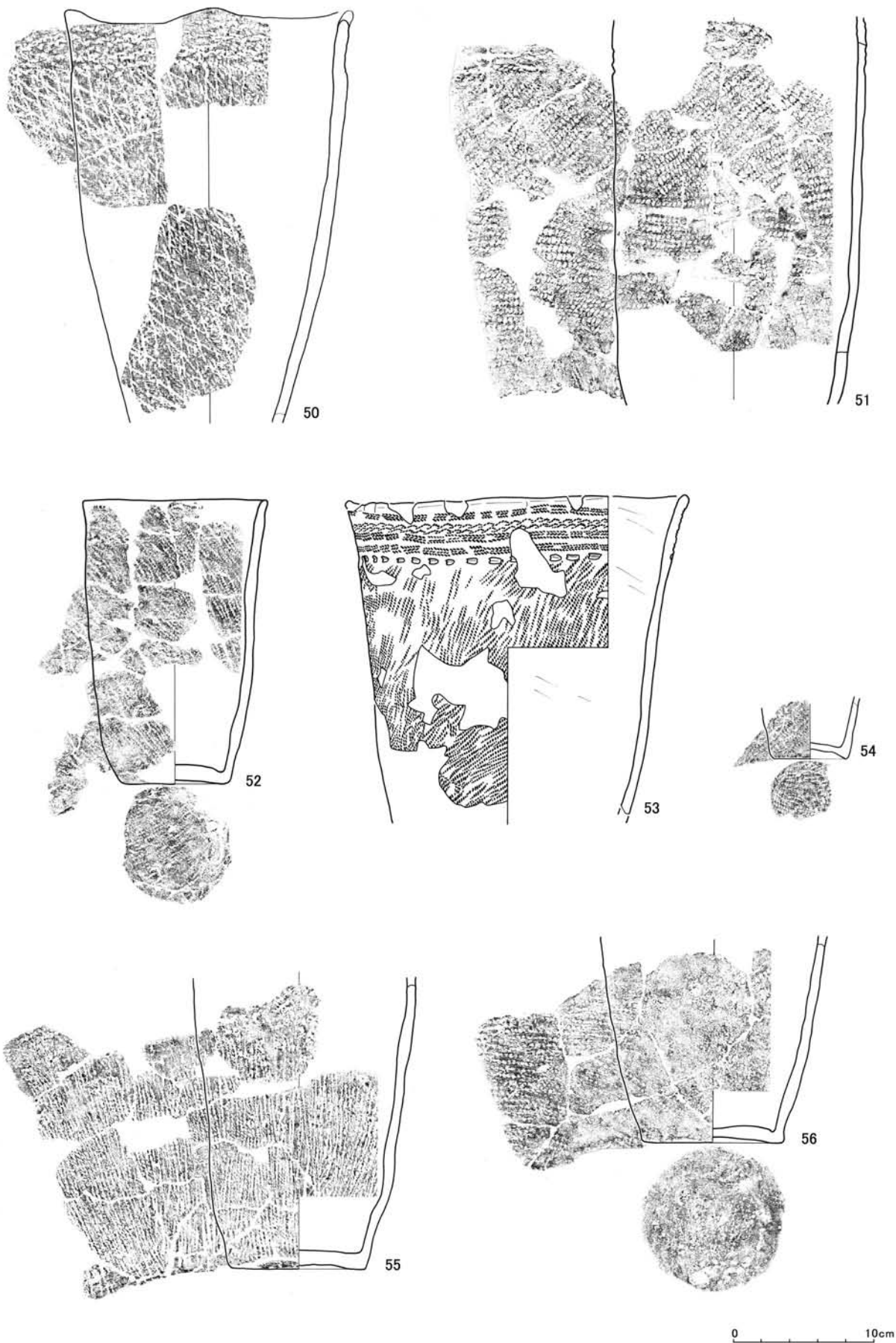


图IV-178 H-30 土器 (8) 覆土 4 層

覆土 5 ~ 7 層

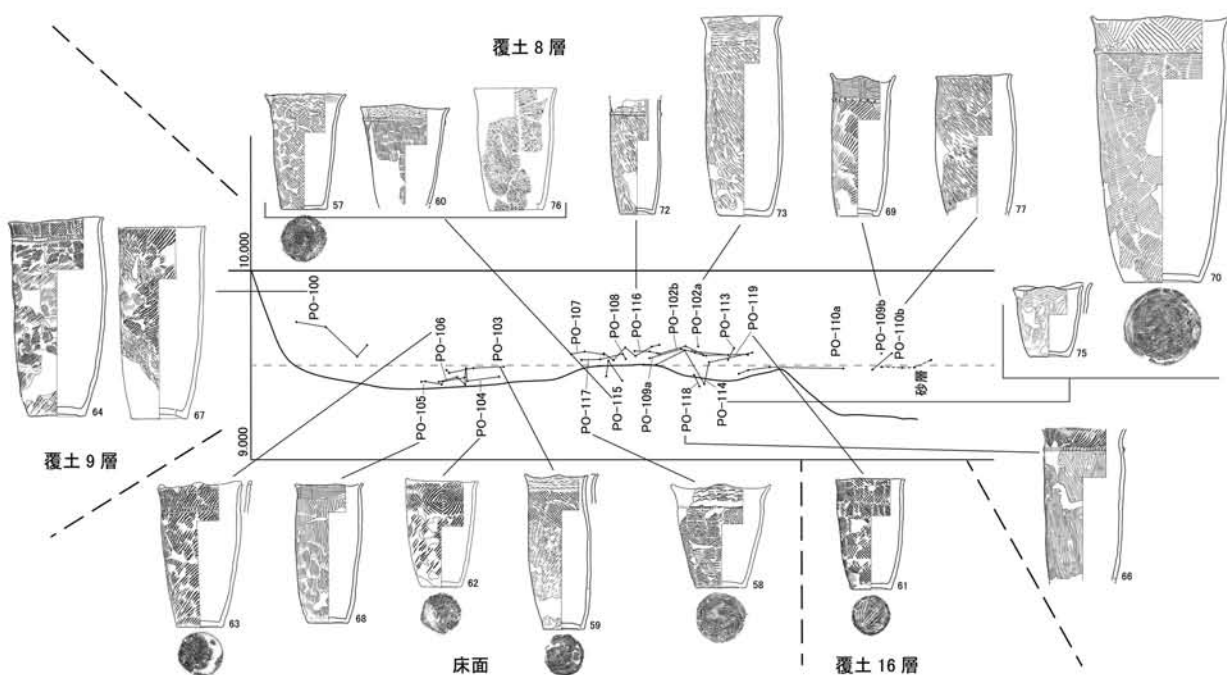
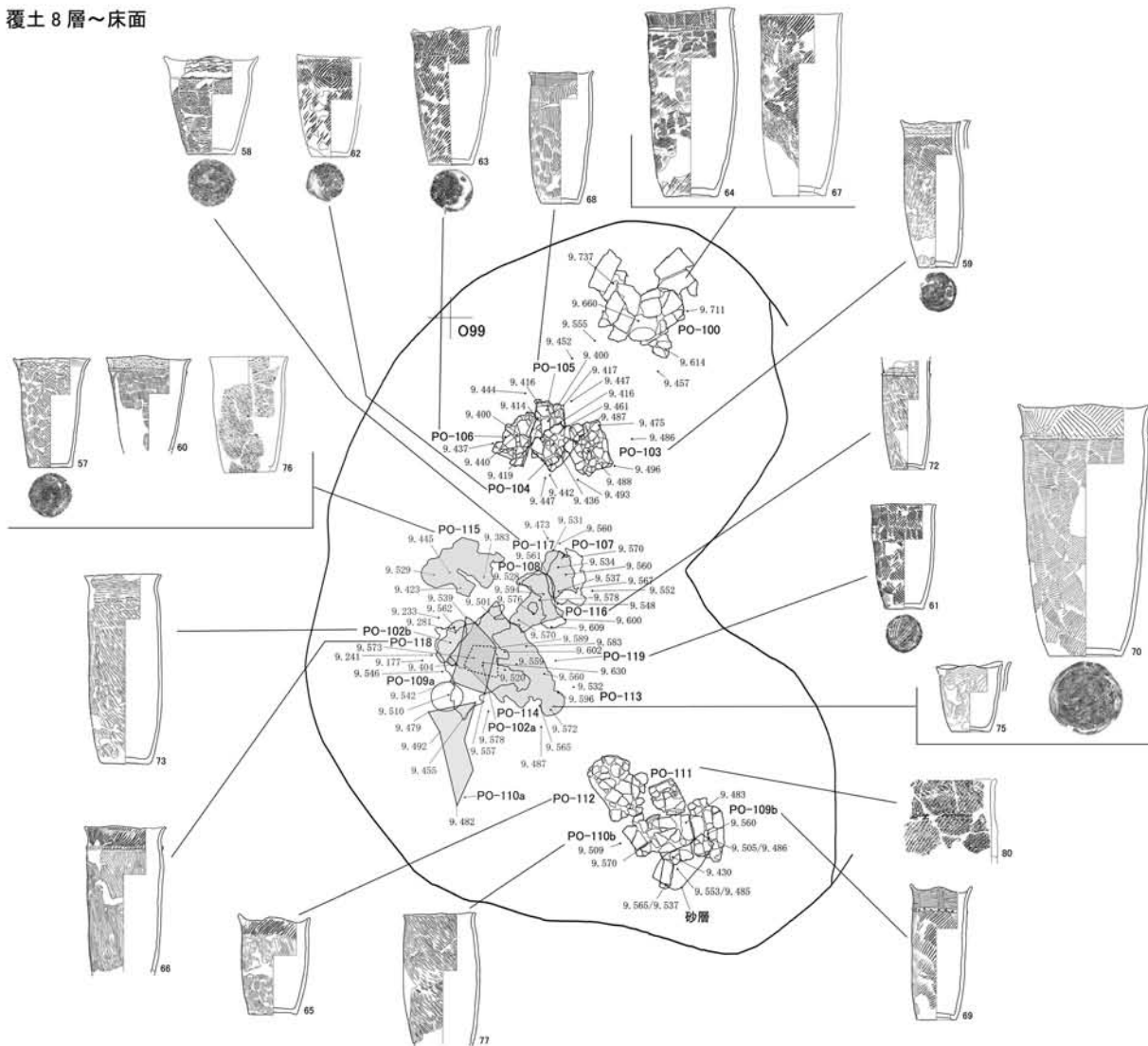


図IV-179 H-30 遺物出土状況図 覆土 5 ~ 7 層

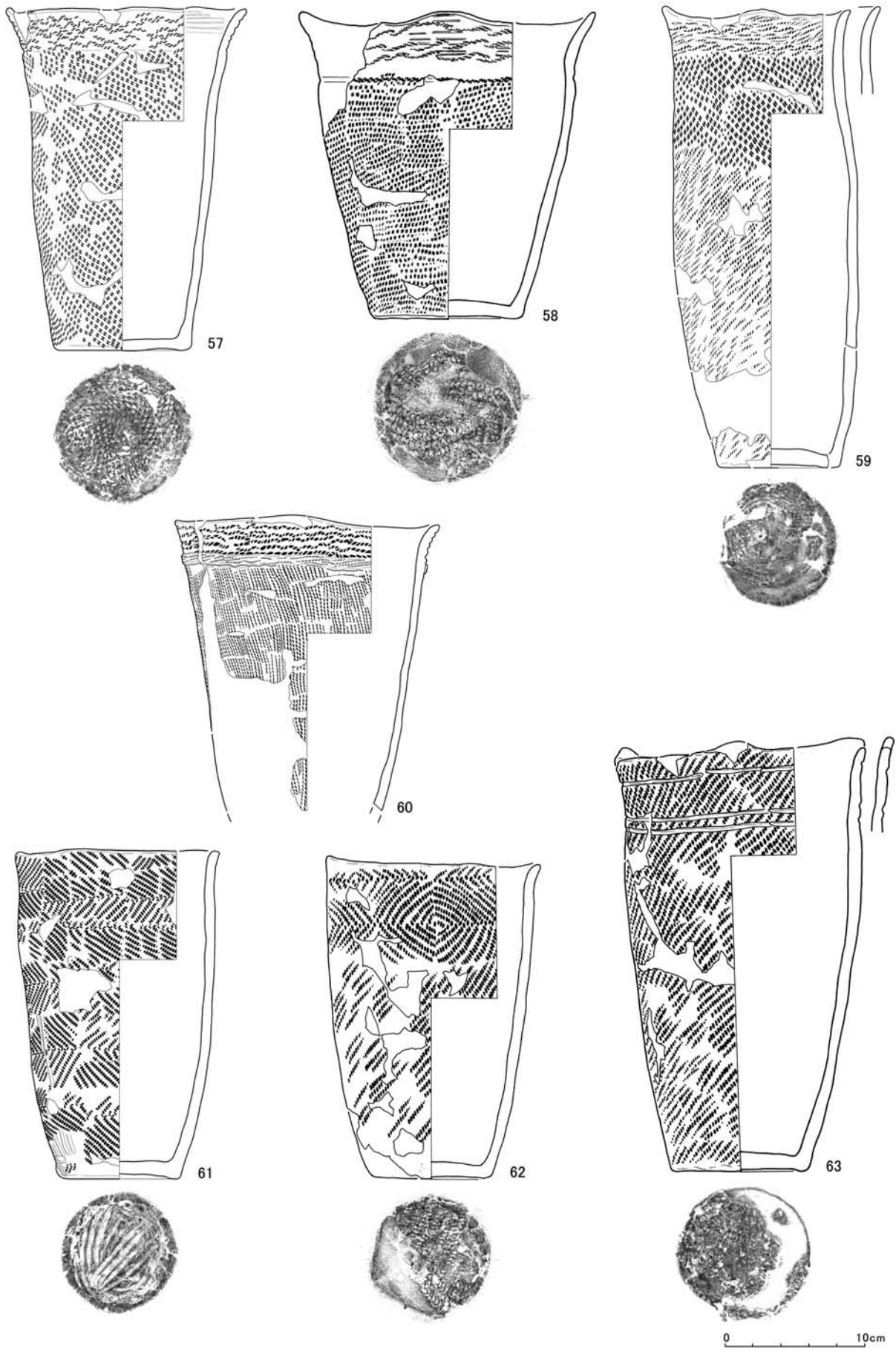


图IV-181 H-30 土器 (10) 覆土5~7層

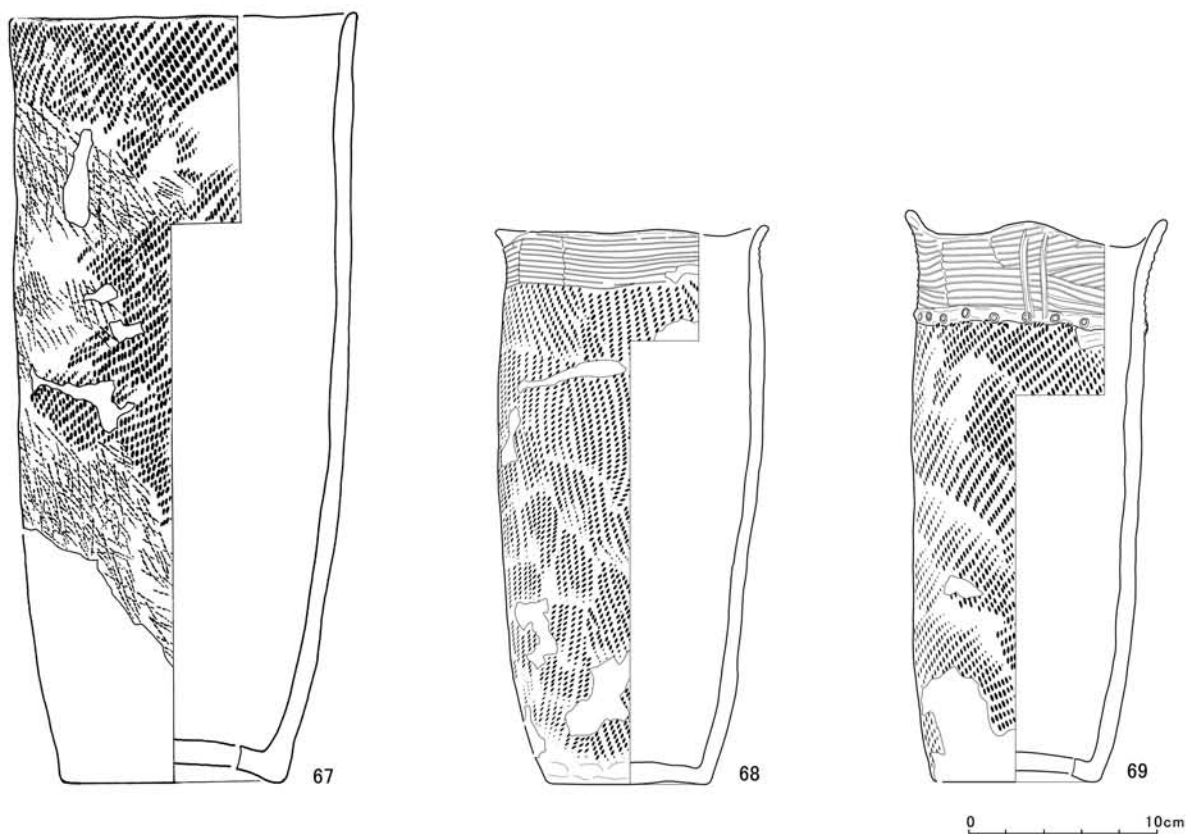
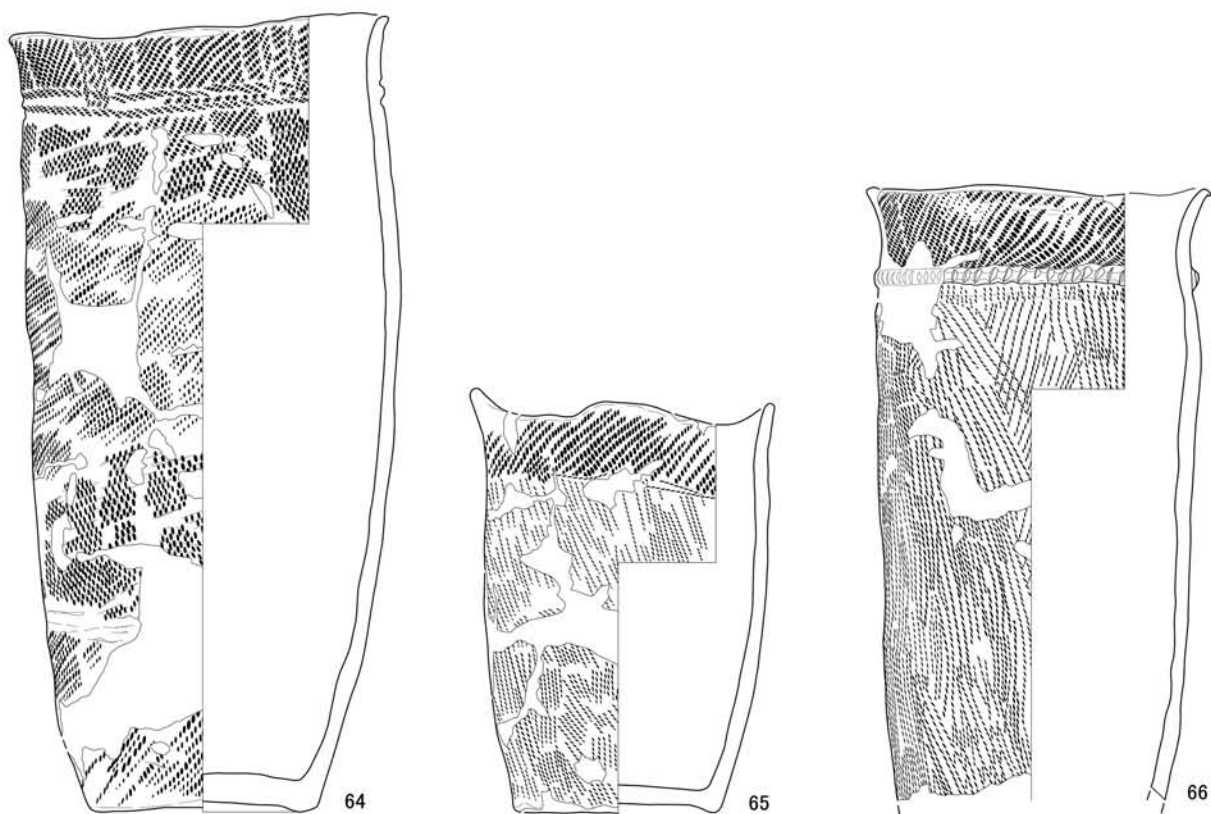
覆土 8 層~床面



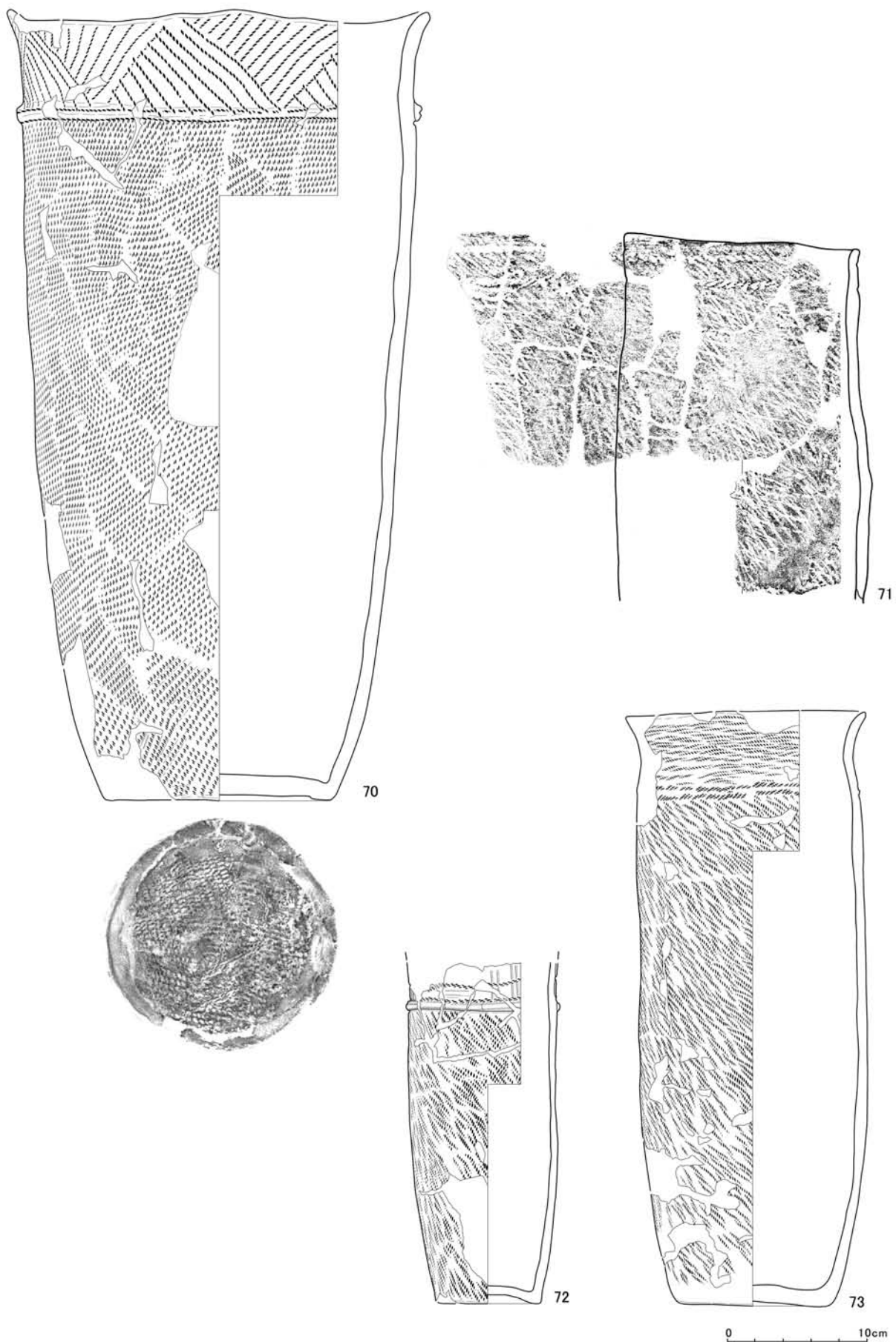
図IV-182 H-30 遺物出土状況図 覆土 8 層~床面



图IV-183 H-30 土器 (11) 覆土8層~床面



図IV-184 H-30 土器 (12) 覆土8層~床面



图IV-185 H-30 土器 (13) 覆土8層~床面



図IV-186 H-30 土器 (14) 覆土8層~床面

帯区画文としての刺突文や、貼付帯の多用が認められる。

覆土5～7層では口頸部文様として不整綾絡文、体部縄文として直前段反撚による縄文の増加、単軸絡条体第5種による縄文が認められ、覆土4層との違いが認められる。

覆土8層～床面から出土した復原土器をみると、上位の層に比べ体部が縄文のもの、口頸部文様帯の文様要素に不整綾絡文・貝殻条痕文・斜行縄文が施されたもの、菱目状の文様構成のものが増加し、縄線文が少ない傾向が窺える。口頸部文様帯の幅も比較的狭く、複雑な文様構成のものは少ない。

(石器) 95は床面、その他は覆土出土。81～83は石鏃。81・82は尖基で木葉形。83は尖基で菱形。すべて頁岩製。84・85は石槍。84は有茎凸基。両面調整のつまみ付ナイフの可能性もある。珪岩製。85は有茎で柳葉形のもの。頁岩製。86は石錐。石槍状の形状で両尖端部を欠失している。頁岩製。87～89はつまみ付ナイフ。87・88は縦型で下端部が切り出し状である。87は裏面右側縁を二次加工して刃部を作出している。頁岩製。88は刃部がかなり磨滅している。黒曜石製。89は縦長剝片につまみを作成し、右側縁片面加工のもの。頁岩製。90～94はスクレイパー。90は横長剝片の側縁に刃部を作出したもの。91・92は縦長剝片の周縁に刃部を作出したもの。91は楕円形、92は隅丸三角形をしている。93・94は縦長剝片の側縁に刃部を作出したもの。90・92・94には使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。95はすり石。扁平な楕円礫の側縁に幅の狭いすり面が作出されている。長軸両端に敲打痕がある。安山岩製。96は石錘。扁平礫の長軸側縁に打ち欠きによる挟りが2か所ある。凝灰岩製。97は軽石製石製品。溝状のすり痕がみられるもの。

H-32 (図IV-191～193、図版25・28・114)

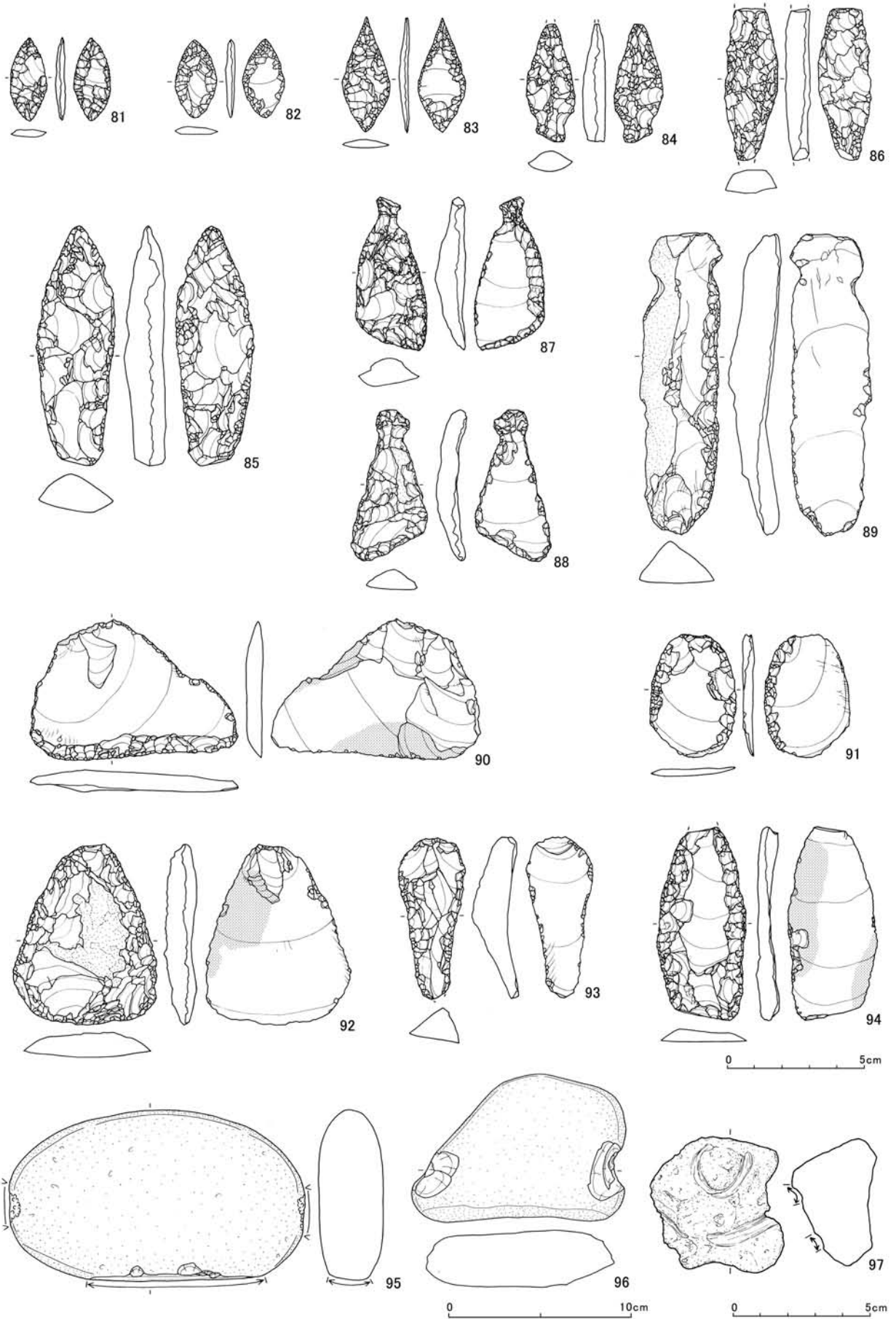
位置：K93～95区

規模：(5.94) / (3.87) × 3.03 / 1.64 × 0.95m

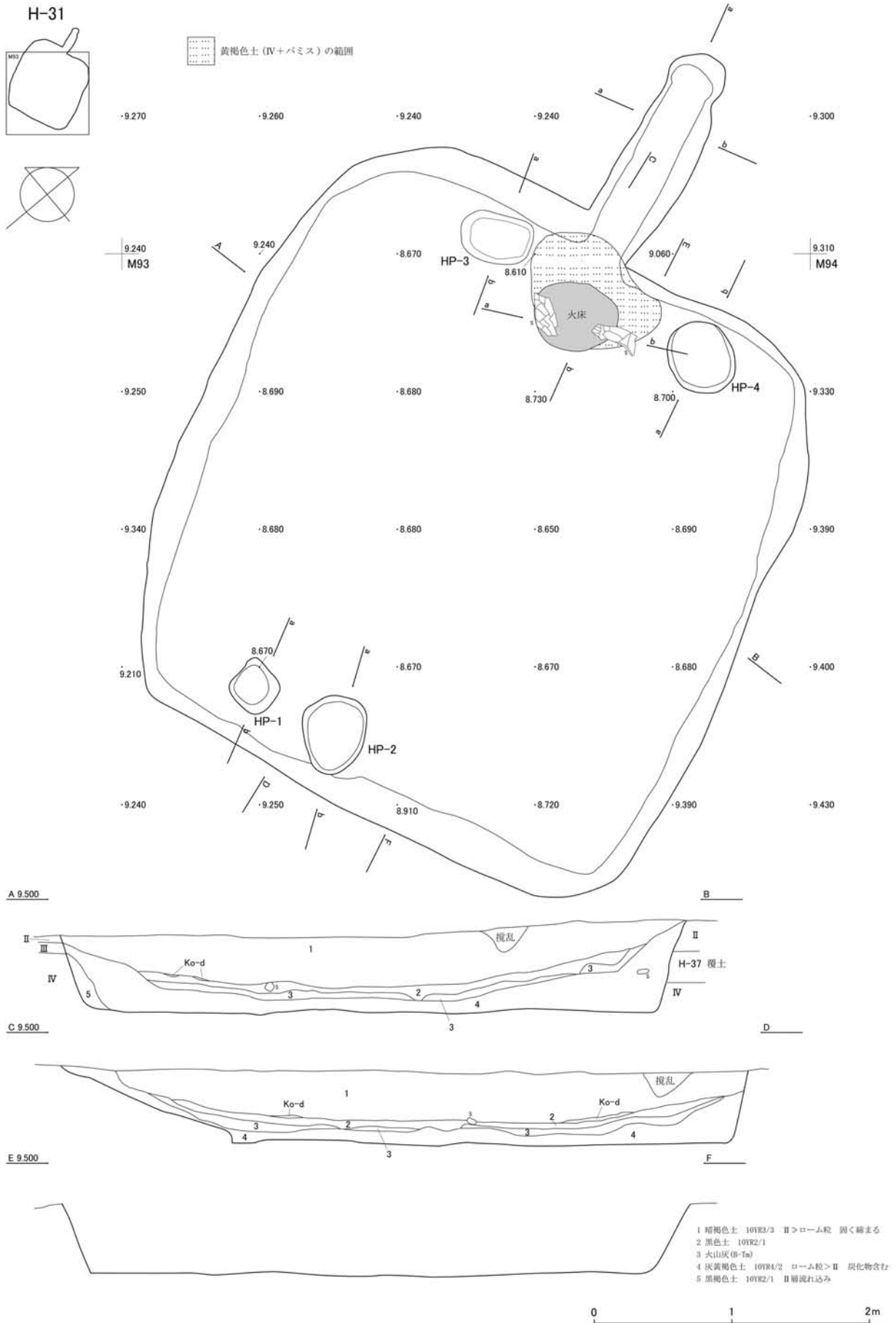
確認・調査：Ⅱ層中における標高9.70m前後の平坦面に立地する。K・L94～97区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みを確認した。複数の住居跡が切り合うことが予想されたため、概ねKラインに相当する調査範囲西壁とそれに直交する95ライン南側、96と97ラインの間にある水道管の攪乱を利用して計3本の土層観察用トレンチを設定し、掘り下げた。その結果、Ⅲ層上面から80～90cmの深さで床面とみられる平坦面と複数の壁の立ち上がりを確認できた。住居跡はK94・95、L94区とK96・97区に分けられることが判明した。K94・95、L94区のもの東西で切り合いがあり、古いK94区西側をH-32、新しいL94、K94区東側をH-33とした。水道管トレンチをベルトとして残し、覆土を掘り下げるとH-32は南北に分離できることが判明し、北側をH-35とした。西壁断面でH-35が古く、H-32が新しいことを確認した。H-32の床面にはⅣ層黄褐色粘土による貼床があり、その範囲がH-35のベンチ内側に相当することからH-35ベンチ内側と見なせるものはH-35の付属遺構として調査を行った。土層を記録し、ベルトを掘り下げ、床面・壁の検出後、床面の遺構調査を行った。なお、本遺構は約半分が調査区外に位置している。

覆土：遺構はⅡ中層中から掘り込まれている。覆土はほぼ単一の層(覆土1層)で、Ⅱ層を主体としてⅣ層が混じる比較的均質な層が厚く堆積している。北側に接するH-35の覆土はレンズ状に堆積しているのと対照的である。覆土1層は南側には坑底直上から堆積するが、H-35のベンチ内側とみられる範囲には覆土3層が分布する。覆土3層はⅣ層を主体とする褐色土の貼床で、H-35の埋没後、H-32掘り上げの際に床面を平坦にするために整地したものと思われる。

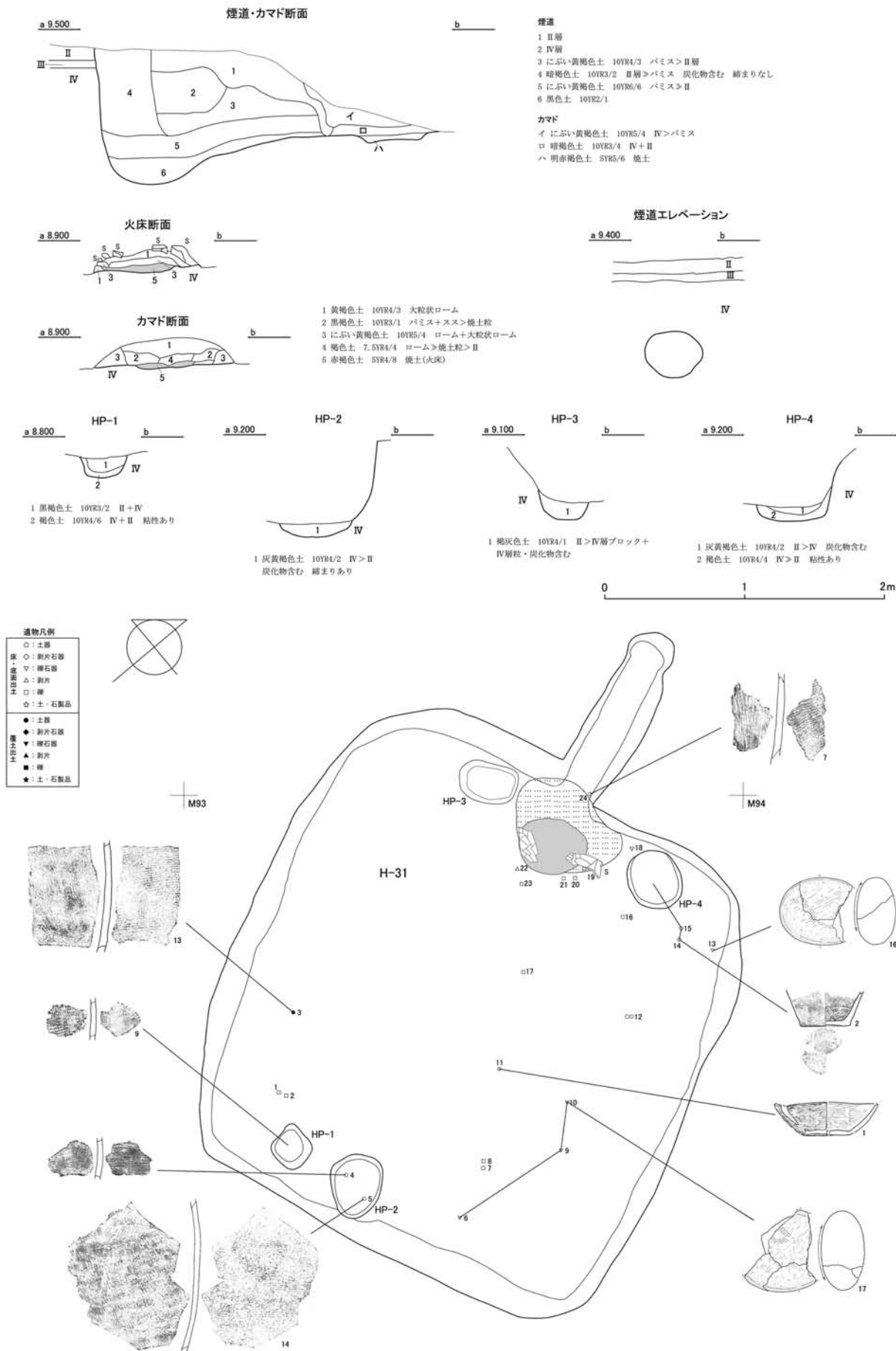
平面形：調査が半分のみで、H-35の切り合いもあり、全体形状は不明であるが、隅丸長方形または楕円形と推測される。深さは0.9m程で、内部には比高差20cm、奥行き0.8m程のベンチ構造がある。床面・ベンチ部は平坦で、ベンチ部・壁は急角度に立ち上がる。



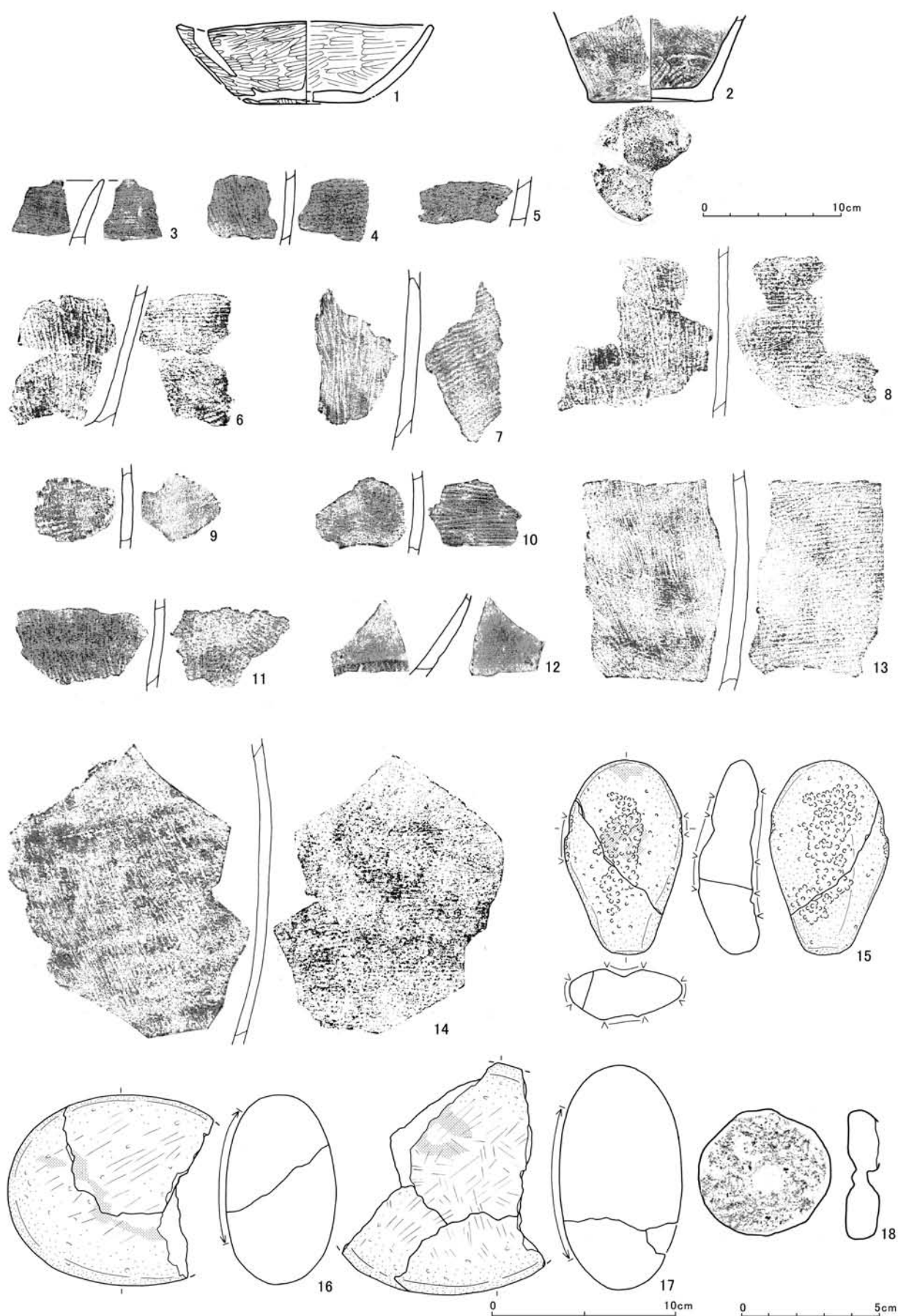
图IV-187 H-30 石器



図IV-188 H-31



図IV-189 H-31 遺物出土状況図



图IV-190 H-31 遺物

付属遺構：太い柱穴2基（HP-10・12）、細い柱穴3基（HP-4・6・11）、太くてやや浅い土坑1基（HP-2）、浅い中型の土坑4基（HP-1・5・7・9）、浅い小型の土坑1基（HP-3）、やや大型の土坑1基（HP-8）が検出された。浅い中型のものはベンチ内側に並ぶように位置し、大型の土坑は中央寄りに位置する。支柱穴は並んでいるが、複数の住居跡が切り合っているため、配列は不明である。

遺物出土状況：遺物は少ない。床面から石器等1点、HPからⅡ群B-5類土器等14点、石器等57点、覆土からⅡ群B-5類土器など414点、石器等438点が出土した。北海道式石冠がHP-6覆土中位から出土した。石製品は軽石製石製品が2点出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半である。（鈴木）

掲載遺物：（土器）5・6・8・10・12・13は柱穴状ピット（HP）出土、他は覆土出土である。2はⅡ群A類土器、10はⅡ群B-4類土器、1・3～8・11～13はⅡ群B-5類土器である。

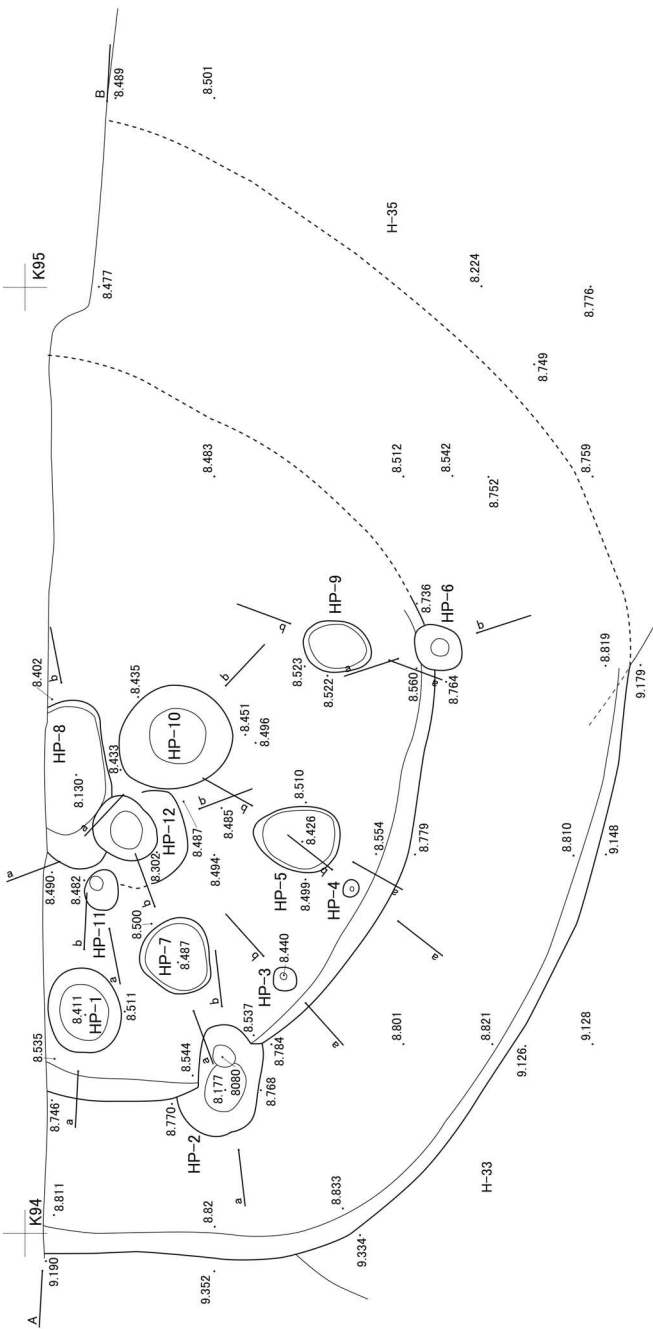
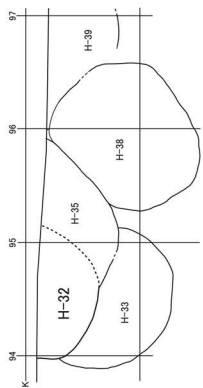
Ⅱ群A類土器（2）：2は口縁部破片。口唇外面に2条の押引文が施され、無文地の口頸部文様帯にも同様な施文具で斜位の押引文が加えられている。

Ⅱ群B-4類土器（10）：10は体部破片。単軸絡条体の回転文である。

Ⅱ群B-5類土器（1・3～9・11～13）：1は大型の口縁部破片。口唇に縄文が施され、口唇の断面形は角形である。器面には斜行縄文が施されている。3は口頸部破片。口唇に縄の圧痕が加えられ、口頸部文様帯下端は半截竹管状工具内面による刺突で区画されている。無文地の文様帯に2本一組の縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。4は肥厚する口縁部。口唇と肥厚帯下端に縄の圧痕文が加えられている。無文地の肥厚帯に横位の縄線を施した後、縦位の縄線文が加えられている。また、肥厚帯直下にも縄線が1条加えられ、体部は多軸絡条体の回転文である。5は口頸部破片。口唇に縄の圧痕、口頸部文様帯に2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面による刺突文が加えられている。11は頸部破片。5と同一個体の可能性がある。口頸部文様帯下端は肥厚し、半截竹管状工具内面による刺突が加えられる。文様帯には2本一組の縄線文が加えられ、体部は多軸絡条体の回転文である。6は口唇直下に刺突文、文様帯に2本一組の縄線文が加えられている。7は口唇に縄の圧痕が加えられ、文様帯に2本一組の縄線文と斜行縄文が施されている。8は文様帯に2本一組の縄線文が加えられている。9は口頸部にくびれを持つもの。器面に横走気味の縄文が施されている。12・13は同一個体で、斜行縄文が施された体部破片。

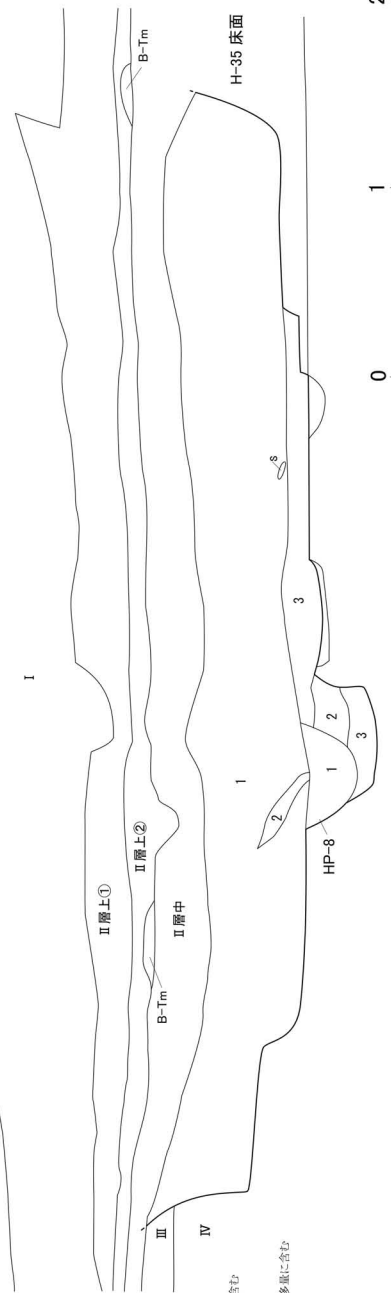
（石器等）15は床面、14・21・22は覆土、20はHP-6覆土、16はHP-7覆土、17～19はHP-8覆土出土。14はつまみ付ナイフ。両面加工で石槍状の形状をしている。先端部が非常に細く加工されており、石錐としての利用も考えられる。15は石斧。短冊形で両刃の直刃。刃部には約17°の傾きがある。全面を研磨で調整している。緑色泥岩製。16はたたき石。棒状礫の両端部に敲打痕がある。凝灰岩製。17～19はすり石。17は扁平な楕円礫の側縁に幅の狭いすり面を作出している。砂岩製。18は断面三角形の棒状礫の辺に幅の狭いすり面が作出している。安山岩製。19・20は北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は長軸・短軸ともに外彎し、19はやや短軸方向に傾いている。いずれも安山岩製。21・22は軽石製石製品。21は北海道式石冠を模したもの。すり面に使用された痕跡はない。22は凹み石を模したもの。断面三角形の礫の平坦面に断面円錐状の凹みが両面にある。23は有孔土製円板で、斜行縄文と2本の縄線文が施されたⅡ群B-5類土器の破片を素材とするものである。

H-32



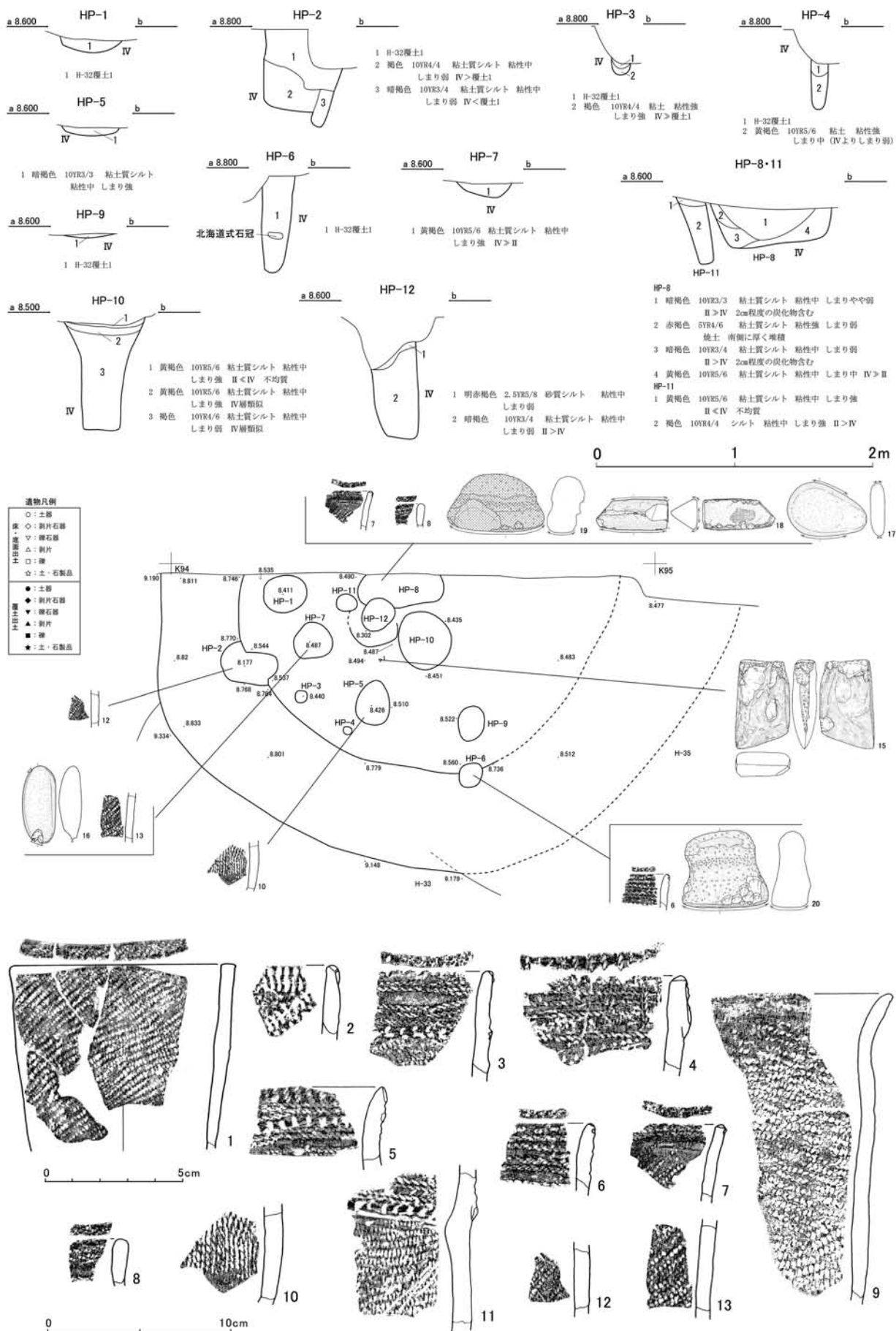
A 10.200

B

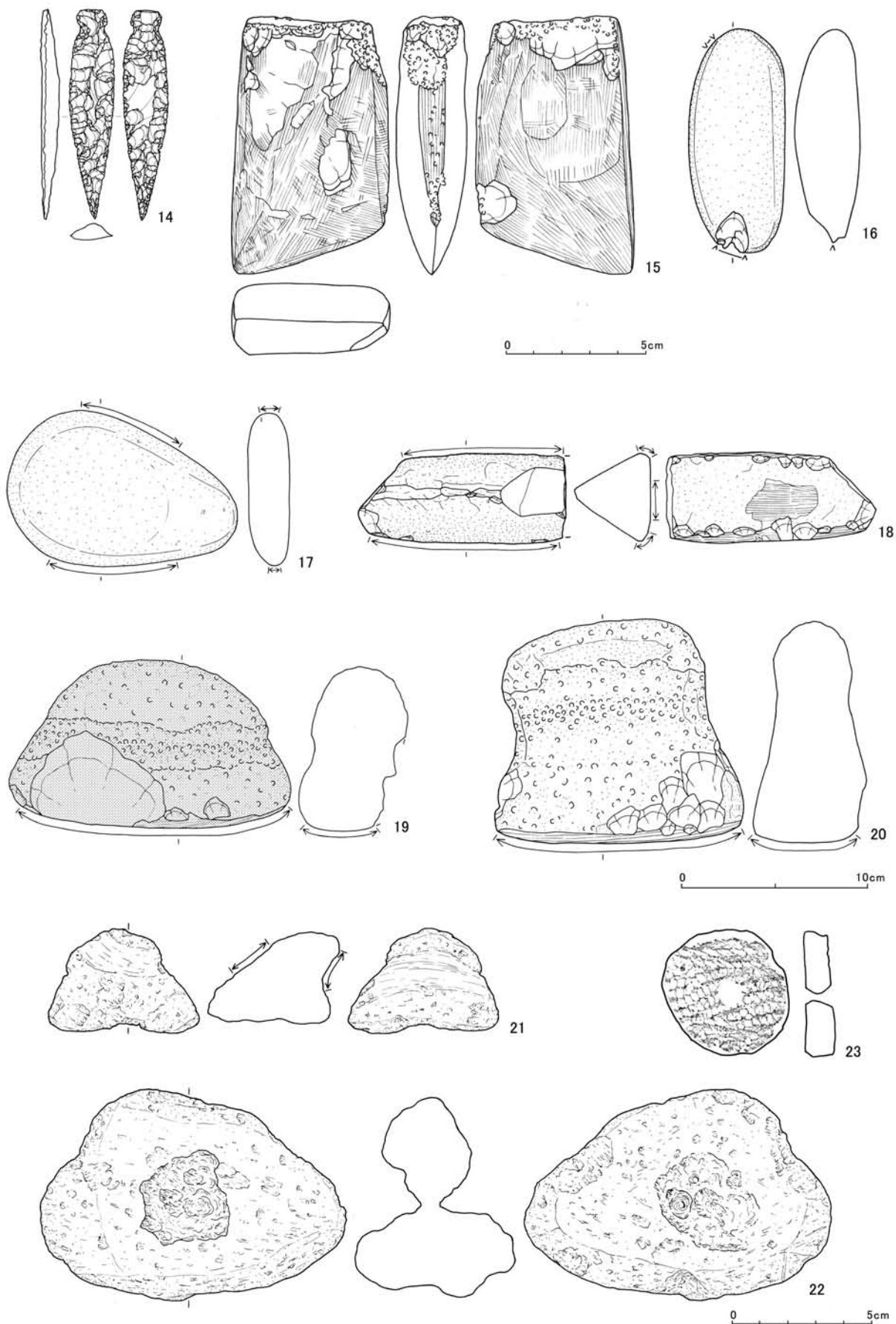


図IV-191 H-32

- | | | | | | | |
|-------|-----|---------|--------|-----|--------|---------------------|
| I. 表土 | 盛り | 砂利 | 層乱 | 水道管 | | |
| II上① | 暗褐色 | 10VR2/2 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまり中 | 1mm程度炭褐色粒含む |
| II上② | 黒褐色 | 10VR2/2 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまり中 | B-10階層に含まれる |
| II中 | 黒色 | 10VR2/1 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまり中 | 混入物少ない |
| III | 暗褐色 | 10VR2/3 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまり中 | II > IV 層少量ブロック状を含む |
| I | 暗褐色 | 10VR3/4 | シルト | 粘性中 | しまり中 | II > IV 炭化物含む |
| 2 | 褐色 | 10VR3/4 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | IV 層少量ブロック状を含む |
| 3 | 暗褐色 | 10VR3/4 | シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | IV 層少量ブロック状に多量を含む |
| HP-8 | 暗褐色 | 10VR3/4 | シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | II < IV 炭化物含む |
| 1 | 暗褐色 | 10VR3/4 | シルト | 粘性中 | しまりやや弱 | II > IV 砂少量含む |
| 2 | 暗褐色 | 10VR3/6 | 粘土質シルト | 粘性中 | しまり弱 | II < IV |
| 3 | 黄褐色 | | | | | |



図IV-192 H-32 セクション図 遺物出土状況図 土器



图IV-193 H-32 石器

H-33 (図IV-194～196、図版28・115)**位置**：K93～95、L94・95区**規模**：6.50 / 6.30×3.30 / 3.20×0.40m

確認・調査：Ⅲ層上面における標高9.40m前後の平坦面に立地する。H-32で記述したように、K94区周辺のⅢ層上面で黒色土の落ち込みを検出し、トレンチ調査によりK94・95、L94区とK96・97区の遺構に分けた。K94・95、L94区は、K94区西側をH-32、L94、K94区東側をH-33とした。西側に接する切り合いの新しいH-32・35の調査終了後、調査を開始した。水道管の攪乱を利用したトレンチであるC-Dラインに直交する土層観察用ベルトA-Bを設定し、覆土の掘り下げを行った。土層を記録し、ベルトを掘り下げ、床面・壁の検出後、床面の遺構調査を行った。北東部ではP-40が確認でき、本遺構が新しい。

覆土：遺構はⅡ層中から掘り込まれたとみられる。覆土はほぼ単一の層（覆土1層）が広く分布し、Ⅱ層を主体としてⅣ層が混じる比較的均質な層である。西側にはⅣ層主体の覆土2層が堆積している。覆土の厚さは20～30cmで、北東側が厚く、南西側が薄い。

平面形：北西側半分がH-32・35に切られ、全体形状は不明であるが、円形と推測される。床面は中央が低く、軽い皿状で、壁は斜めに立ち上がる。

付属遺構：太い柱穴3基（HP-1～3）、細い柱穴2基（HP-4・6）、浅い小型の土坑2基（HP-5・7）が検出された。太い柱穴は支柱穴とみられ、HP-1下部は2本の柱穴が隣接し、HP-2・3は近接し、それぞれ移設された可能性がある。HP-1はこれらの上部に椀状にⅡ層主体の覆土が堆積している。これら2か所の柱穴以外はH-32・35の範囲に支柱穴があった可能性があるが、配置は不明である。その他の遺構については配置に規則性は見られない。

遺物出土状況：北東部床面から10～15cmの棒状礫とたたき石（13）が出土した。床面直上から石器等3点、HPからⅡ群B-3類土器など16点、石器等7点、焼成粘土塊1点、覆土からⅡ群B類土器・Ⅱ群B-3類土器など225点、石器等1,400点、焼成粘土塊2点出土した。

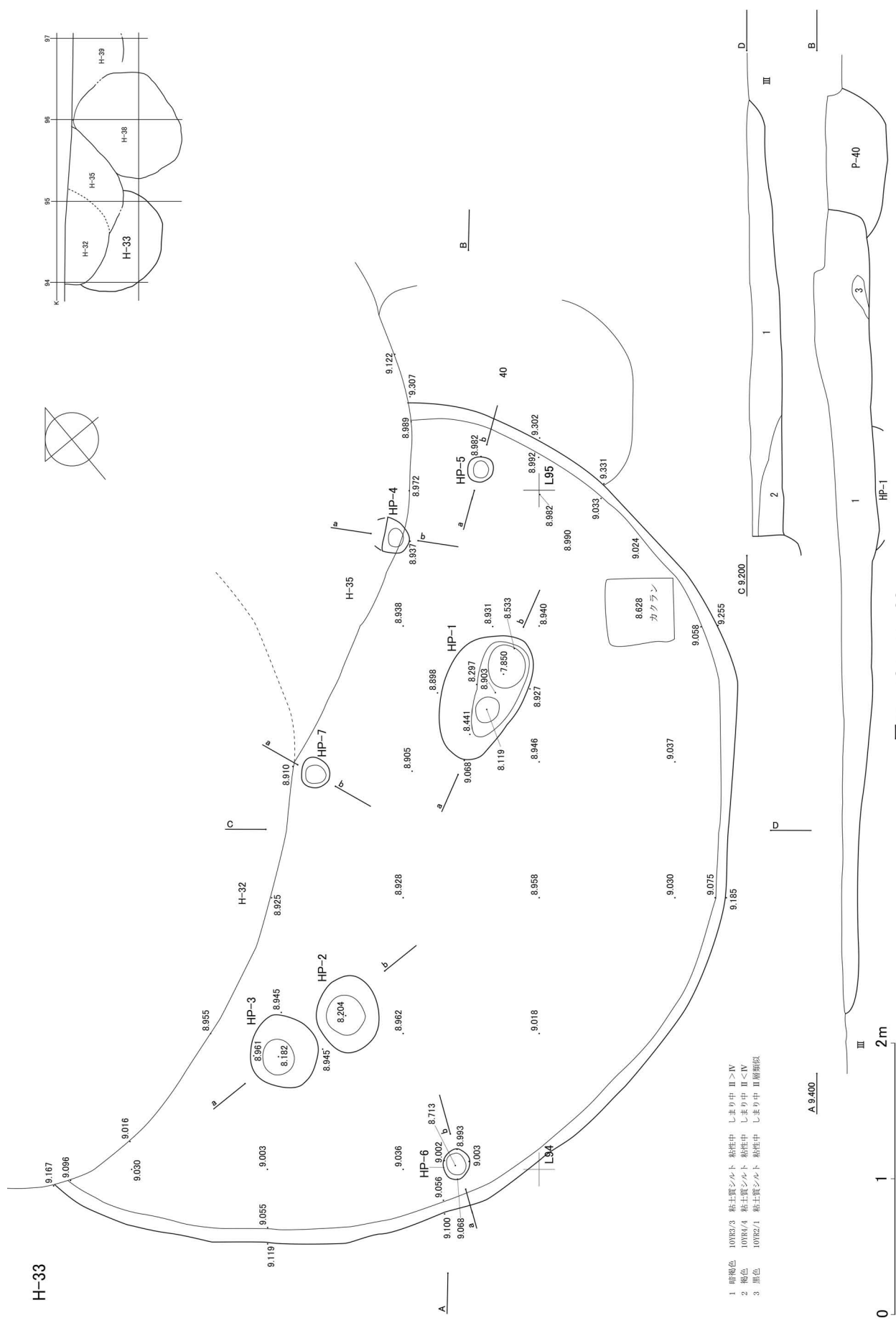
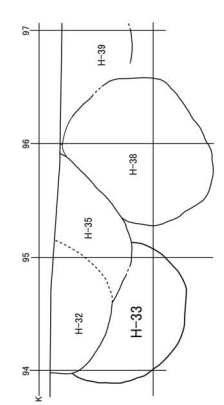
時期：H-32・35に切られるため、縄文時代前期後半以前である。周辺の住居跡とは対照的に浅く、ベンチ構造が無いことからやや古い時期と考えられる。（鈴木）

掲載遺物：(土器) 4～8は柱穴状ピット（HP）、1～3・9は覆土出土。1・2はⅡ群A類土器。1・2はループ文が施されたもので、1は口縁部、2は体部破片。3～9はⅡ群B-3類土器。3は口頸部破片。縄線で文様帯を区画し、文様帯内には単軸絡条体第6類の回転による網目状の撚糸文が施されている。4～8は体部破片。4は複節の斜行縄文、5・6は斜行縄文、7は単軸絡条体の回転文、8は長めの多軸絡条体の回転文が施されている。9は底部破片。貝殻条痕上に直前段反撚の縄文が施されている。

(石器)12・13は床面直上、11・14・15は覆土出土。10は石鏃。無茎凹基。頁岩製。11はつまみ付ナイフ。縦型で剝片側縁に片面加工で刃部を作出している。頁岩製。12はスクレイパー。縦長剝片の左側縁から下端部まで刃部が作出されている。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。13・14はたたき石。13は扁平な棒状礫の平坦面と側縁の一部に敲打痕がある。14は扁平な隅丸方形礫の頂部に敲打痕のあるもの。いずれも砂岩製。15は石錘。扁平な楕円礫の長軸両端部に打ち欠きによる挟りがあるもの。平坦面にすり痕とみられるものが確認できる。安山岩製。

H-34 (図IV-197～199、図版27・115)**位置**：M91区**規模**：5.60 / 4.72×3.60 / 2.80×0.27m

H-33



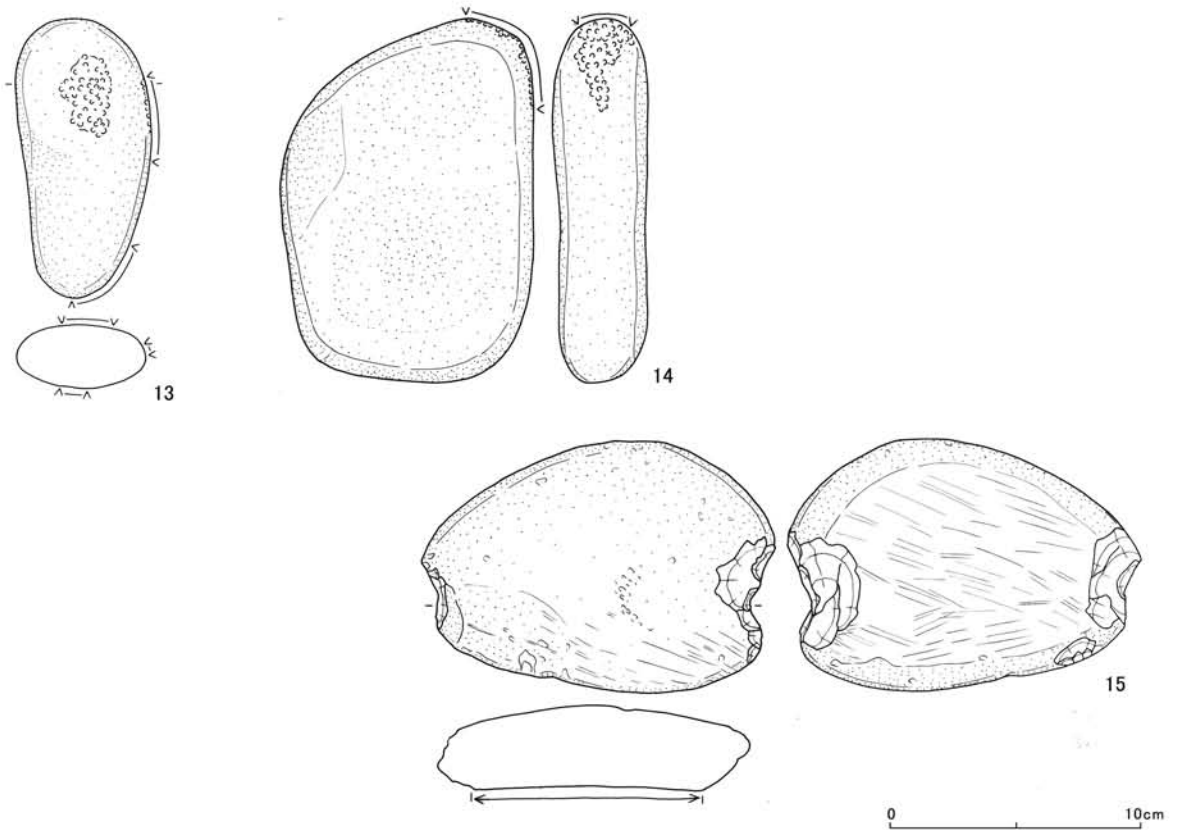
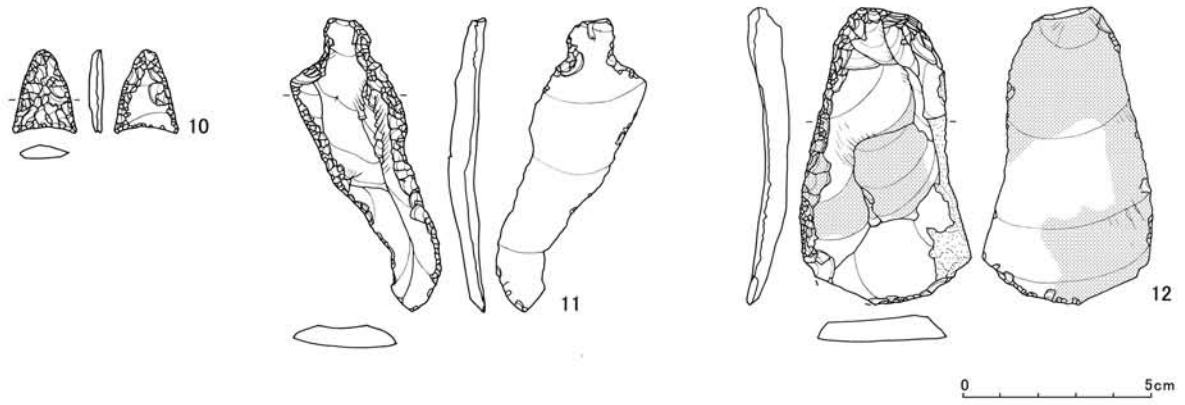
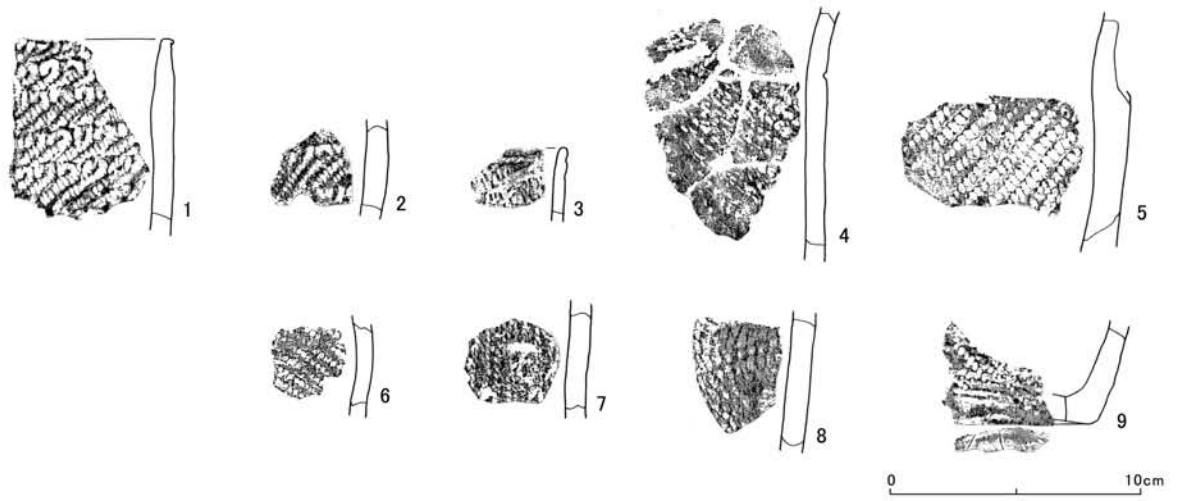
- 1 暗緑色 100E3/3 粘土質シルト 粘液中 しまり中 Ⅱ>Ⅳ
- 2 褐色 100R4/4 粘土質シルト 粘液中 しまり中 Ⅱ<Ⅳ
- 3 黒色 100B2/1 粘土質シルト 粘液中 しまり中 Ⅱ層類似



IV-194 H-33

A 9.400

C 9.200



图IV-196 H-33 遗物

確認・調査：H-17床面が褐色土と黒色土の斑状になっていたこと、HP調査で壁面から床面が検出されたことからベルトを設定し、覆土を掘り下げた。堅く締まった平坦な床面やベンチ構造、急角度に立ち上がる壁面を検出した。H-34はH-17①（HP-11・20・43・44・53・56）と長軸方向が重なるので、同一遺構の可能性はある。

覆土：覆土は6層に分けた。埋戻されている。H-17の床面として固く締められている。

平面形：平面形は隅丸長方形、床面はやや胴の張った長方形である。長軸方向はN-34°-Eである。床面は平坦でベンチ構造がある。小土坑7基、小柱穴20基、焼土2か所を検出した。

付属遺構：HP-24は長軸北西側にある土坑。平面形は長径0.84mの楕円形で深さ0.31m、坑底から多数の遺物が出土した。HP-1～6は深さ0.4～0.6mの主柱穴。HP-7～15・23・93・94は深さ0.1～0.2mの浅い小土坑。HP-16～22・25は深さ0.2～0.3mの壁柱穴。HF-1・2は床面中央に浅く掘り込んだ不整長方形の凹みに作られている。HF-1は地床炉で非常によく焼けている。HF-2は砂を含む炭化材が検出された。

遺物出土状況：HP-10直上とHF-2脇から大型の石皿が出土した。HP-24坑底から剝片・礫・礫石器19点などがまとまって出土した。床面からⅡ群B-5類土器など8点、石器等32点、HPからⅡ群B-5類土器3点、石器等3点、覆土からⅡ群B-5類土器など19点、石器等99点が出土した。

時期：床面出土遺物やH-17・21から考えて、縄文時代前期後半と考えられる。（酒井）

掲載遺物：（土器）4・6は床面、1・5は柱穴状ピット（HP）、2・3は覆土出土。2はⅡ群B-3類土器。単軸絡条体の回転文が施された体部破片。1・3～6はⅡ群B-5類土器。1は波頂部分の口縁部破片。貼り付けが施され、2本一組の縄線文が加えられている。3～6は多軸絡条体の回転文が施されているもの。3～5は体部破片、6は底部破片。

（石器）8・9・11～13は床面、7は床面直上、10は覆土出土。7～10はたたき石。7・8は扁平な棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。7は凝灰岩製、8は砂岩製。9は扁平な亜角礫の頂部に敲打痕のあるもの。頁岩製。10は棒状の亜角礫の端部と側縁の一部、平坦面に敲打痕のあるもの。側縁には打ち欠きによる加工の痕跡がある。片岩製。11は北海道式石冠。左半分を折損している。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は長軸・短軸ともに弱く外彎し、短軸方向に傾いている。安山岩製。12・13は石皿。12は扁平礫の平坦面に平滑なすり面があるもの。13は断面が三角形の亜角礫の平坦面に平滑なすり面のあるもの。断面円錐状の凹みがみられる。いずれも安山岩製。

H-35（図IV-200～203、図版28・116）

位置：K94・95区

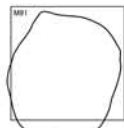
規模：3.17 / 2.26×2.60 / 1.80×0.58m

確認・調査：Ⅱ中層中における標高9.70m前後の平坦面に立地する。H-32で記述したように、K94区周辺のⅢ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。トレンチ調査によりK94・95、L94区とK96・97区の遺構に分け、K94・95・L94区のはK94区西側をH-32、L94・K94区東側をH-33とした。H-32の東西ベルト（A-B）を残し、覆土を掘り下げると2軒に分離できることが判明したため北側をH-35とした。床面から10cm程上位では笹状の茎状炭化物を検出し、精査したところ1.5×1.2mの範囲に広がりを確認した（図IV-202）。茎状炭化物は単独ではなく、並べて敷き詰めたような状態で概ね北東-南西方向に揃っていた。また、それらは層状の構造をなしており、葉状の炭化物の上位に重なっていた。さらにその下位に焼土が形成されており、屋根材が焼失したものと推測される。図化後、床面まで掘り下げを行ったが、北側の壁際とベンチ構造内部に張り出す緩やかなスロープが検出された。土層の記録後、ベルトを掘り下げ、床面の遺構の調査を行った。本遺構はH-32・33・

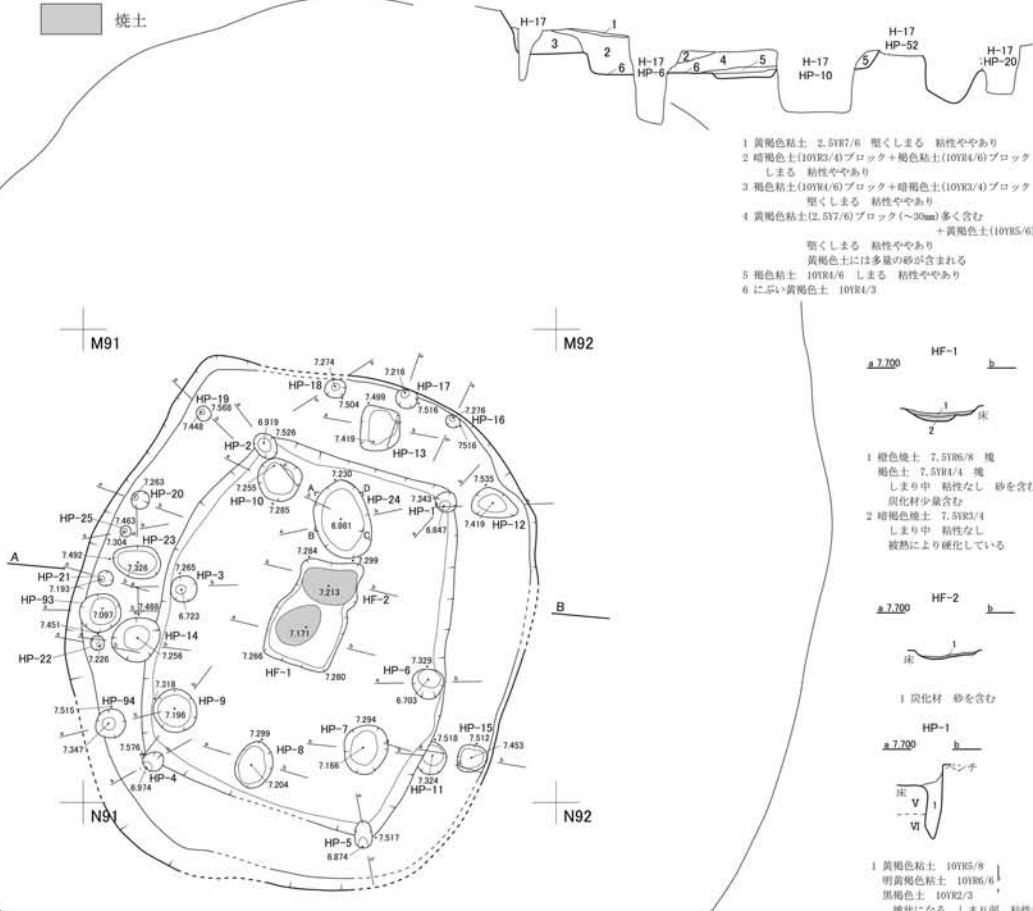
H-34

A 6.200

B



焼土



- 1 黄褐色粘土 2.5YR7/6 堅くしまる 粘性ややあり
- 2 暗褐色土(10YR3/4)ブロック+褐色粘土(10YR4/6)ブロック
しまる 粘性ややあり
- 3 褐色粘土(10YR4/6)ブロック+暗褐色土(10YR3/4)ブロック
堅くしまる 粘性ややあり
- 4 黄褐色粘土(2.5Y7/6)ブロック(〜30mm)多く含む
+黄褐色土(10YR5/6)
堅くしまる 粘性ややあり
黄褐色土には多量の砂が含まれる
- 5 褐色粘土 10YR4/6 しまる 粘性ややあり
- 6 にぶい黄褐色土 10YR4/3

a 7.700 HP-1 b



- 1 棕色焼土 7.5YR5/8 塊
褐色土 7.5YR4/4 塊
しまり中 粘性なし 砂を含む
炭化材少量含む
- 2 暗褐色土 7.5YR3/4
しまり中 粘性なし
被熱により硬化している

a 7.700 HP-2 b



- 1 炭化材 砂を含む

a 7.700 HP-3 b



- 1 黄褐色粘土 10YR5/8
明黄褐色粘土 10YR6/6
黒褐色土 10YR2/3
塊状になる しまり弱 粘性中

- a 7.700 HP-2 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
黄褐色土 10YR3/2 塊含む
黒褐色土 10YR2/3
しまり弱 粘性中
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり弱 粘性中
にぶい黄粘土 2.5YR6/4 含む

- a 7.700 HP-3 b
- 1 黒褐色土 10YR2/3 しまり中
粘性中 褐色粘土 10YR4/6 含む
 - 2 褐色粘土 10YR4/6 しまり中
粘性中 VI層砂含む
 - 3 褐色粘土 10YR4/6 しまり強
粘性中 VI層砂含む

- a 7.700 HP-4 b
- 1 黒褐色土 10YR2/2
しまり弱 粘性中
明黄褐色粘土 10YR6/6
塊少量含む
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中

- a 7.700 HP-5 b
- 1 黒褐色土 10YR2/3
明黄褐色粘土 10YR6/6
塊含む しまり弱 粘性中
2 明黄褐色粘土 10YR6/6
しまる 粘性中

- a 7.700 HP-6 b
- 1 黄褐色土 10YR5/6
しまり弱 粘性弱
 - 2 黒褐色土 10YR2/2
しまり強 粘性中
 - 3 褐色粘土 10YR4/6
しまり弱 粘性中
 - 4 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中

- a 7.700 HP-7 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
明黄褐色粘土 塊少量含む

- a 7.700 HP-8 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり中 粘性中
にぶい黄褐色粘土 10YR5/4
塊含む

- a 7.700 HP-9 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
黒褐色土 10YR2/2
明黄褐色粘土 10YR6/6
塊状になる しまり中
粘性中

- a 7.700 HP-10 b
- 1 黒褐色土 10YR2/2
しまり弱 粘性中
密石が直上にある

- a 7.700 HP-11 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
明黄褐色粘土 10YR6/6
塊少量含む

- a 7.700 HP-12 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり中 粘性中
明黄褐色粘土 10YR6/6
塊状に入る

- a 7.700 HP-13 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
明黄褐色粘土 10YR6/6
しまり強 粘性中

- a 7.700 HP-14 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり中 粘性中
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり中 粘性中

- a 7.700 HP-15 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
V層塊を少量含む

- a 7.700 HP-16 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
V層塊含む
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり弱 粘性中
V層塊含む

- a 7.700 HP-17 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中 V層塊含む
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり弱 粘性中 V層塊含む

- a 7.700 HP-18 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
にぶい黄粘土 2.5YR6/4
塊含む
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり弱 粘性中
にぶい黄粘土 2.5YR6/4
塊含む

- a 7.700 HP-19 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
にぶい黄粘土 2.5YR6/4 塊含む
 - 2 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり弱 粘性中
にぶい黄粘土 2.5YR6/4 塊含む

- a 7.700 HP-20 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
にぶい黄 2.5Y6/4 塊含む

- a 7.700 HP-21 b
- 1 黄褐色粘土 10YR5/6
しまり中 粘性中
 - 2 黄褐色土 10YR5/6
しまり弱 粘性中
黒褐色土 10YR2/2 塊含む

- a 7.700 HP-22 b
- 1 黄褐色土 10YR5/6
しまり弱 粘性中

- a 7.700 HP-23 b
- 1 褐色粘土 7.5YR4/6
しまり強 粘性中
にぶい黄 2.5Y6/4 塊含む

- a 7.700 HP-24 b
- 1 暗褐色土 10YR3/4
ややしまる 粘性中
黄褐色粘土 10YR5/6 塊含む
 - 2 黄褐色粘土 2.5Y7/6
しまる 粘性中
塊状に入る
 - 3 暗褐色土 10YR3/4
しまる 粘性中
砂を多く含む

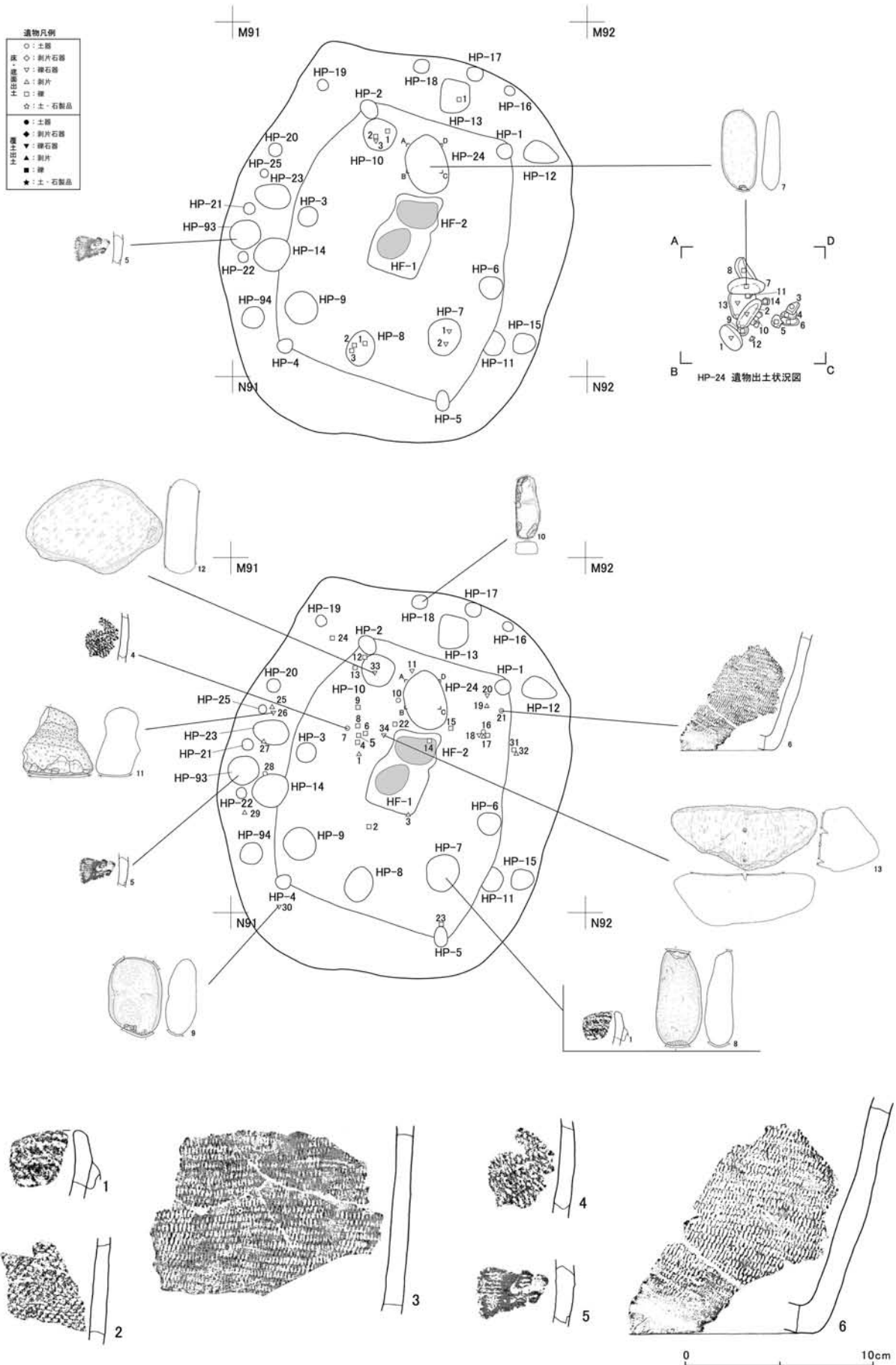
- a 7.700 HP-25 b
- 1 黒褐色土 10YR2/3
しまり強 粘性中
 - 2 褐色粘土 10YR4/6
しまり中 粘性中

- a 8.100 HP-93 b
- 1 褐色粘土 10YR4/6
しまり強 粘性中
 - 2 黒褐色土 10YR2/2
しまり中 粘性中
 - 3 褐色粘土 10YR4/6
しまり中 粘性中

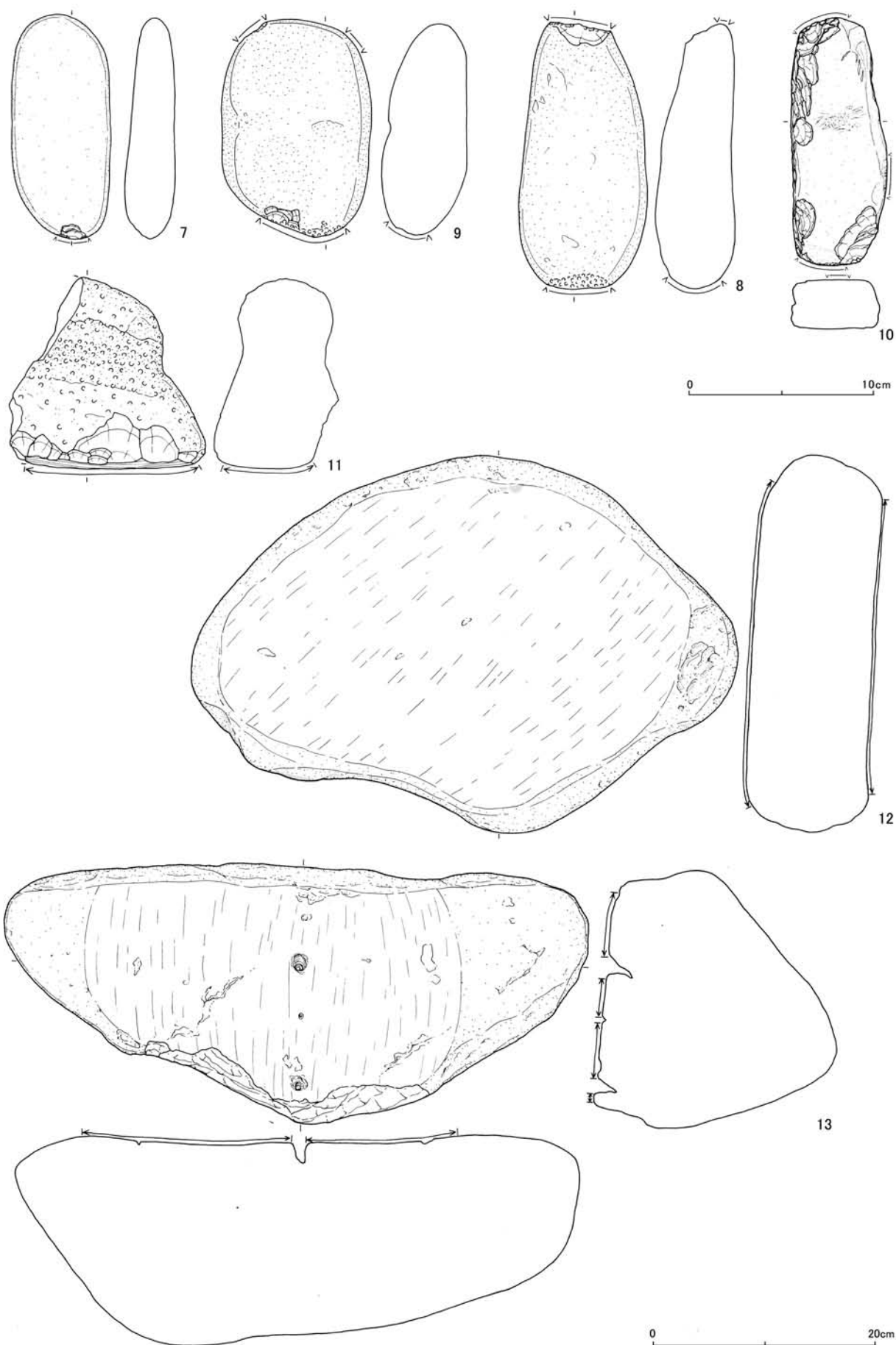
- a 7.800 HP-94 b
- 1 浅黄色粘土 2.5YR7/3
しまり強 粘性強
層界は明赤褐色の
鉄さび色になっている

0 1 2m

図IV-197 H-34



図IV-198 H-34 遺物出土状況図 土器



图IV-199 H-34 石器

38、P-40より新しい。

覆土:遺構はⅡ中層中から掘り込まれたとみられる。最下部にⅣ層をブロック状に含む層（覆土12層）が壁に向かって厚く堆積し、その上位の遺構中央部には炭化した屋根材とみられる層（覆土11層）があり、さらにその上位にⅡ層とⅣ層の混入率の異なる厚さ10cm程度の層（覆土1～9・11層）が互層となってレンズ状に堆積している。

平面形:調査が半分のみで、H-32の切り合いもあり、全体形状は不明であるが、隅丸長方形と推測される。深さは1.2mで、内部には比高差20cm、奥行き1m程のベンチ構造がある。床面・ベンチ部は平坦で、ベンチ部・壁は急角度に立ち上がる。

付属遺構:太い柱穴1基（HP-24）、細い柱穴12基（HP-8・9・12・14～21・23）、太くてやや浅い土坑4基（HP-1～4）、浅い中型の土坑3基（HP-10・11・25）、浅い小型の土坑3基（HP-6・7・13）、溝状の土坑1基（HP-22）、大型の土坑1基（HP-5）が検出された。主柱穴（HP-24）はベンチ内部の角に位置し、4ないし6本柱の可能性がある。北東の辺の壁際・ベンチ内部には北東隅近くに入口構造とみられるスロープがあり、その北西側の1mの範囲には杭（小柱穴）列が約20cmおきに壁（HP-8・9・20・21・23）とベンチ（HP-14～17・19）に沿って配置され、壁際にはそれらをつなぐ溝状の掘り込み（HP-22）がある。大型の土坑（HP-5）はフラスコ状ピットの坑底部の可能性はあるが、本住居との関連は不明である。

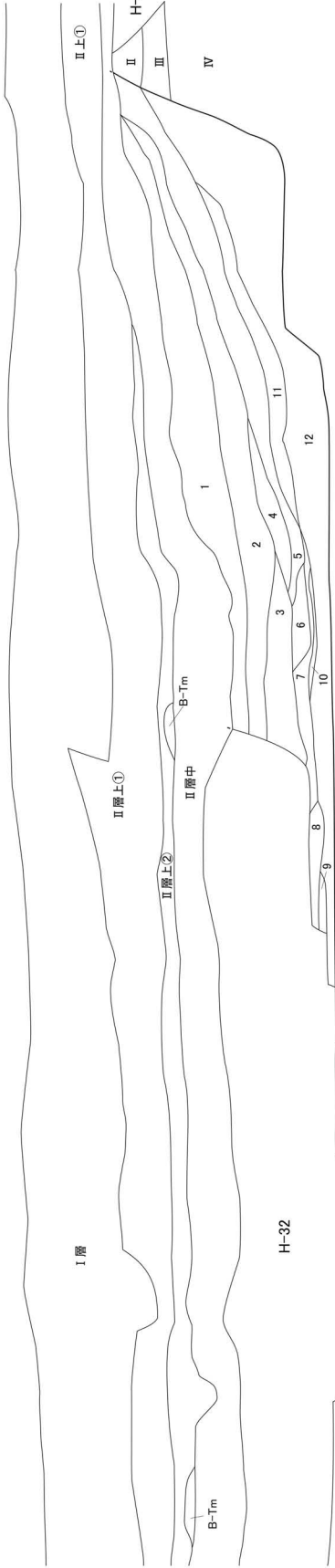
遺物出土状況:床面からⅡ群B-5類土器など14点、石器等11点、HPから土器18点、覆土からⅡ群B類土器など833点、石器等627点が出土している。有孔土製円板2点、石製品は軽石製石製品が1点出土している。

時期:出土遺物から縄文時代前期後半である。 (鈴木)

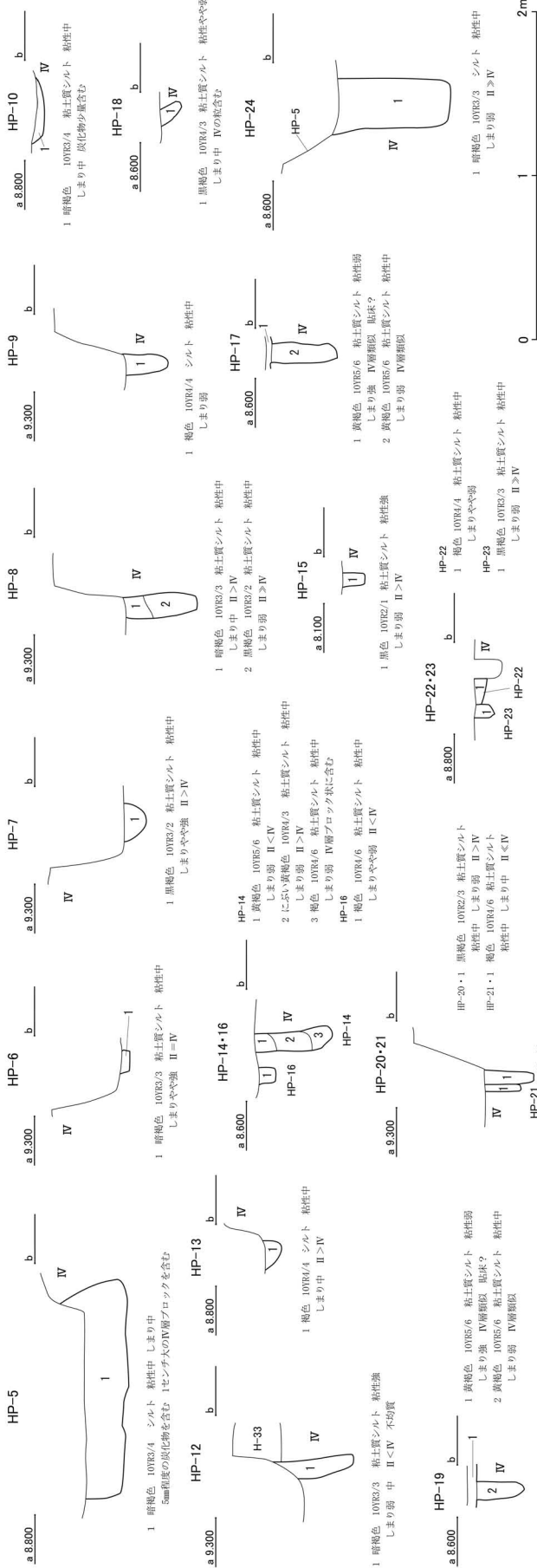
掲載遺物:(土器) 7はHF-1、9・10・14・16は床面出土、8・11～13・15は柱穴状ピット（HP）、1・2は覆土3層、17は覆土1層出土である。2はⅠ群B-4類土器。羽状に捺糸文が施されている。薄手で、胎土はきめが細かい。1・3～6はⅡ群A類土器。1は底部破片。底面・器面に半截竹管状工具外面の刺突列が加えられている。3・4は押引文が施されたもの。3は口縁部。口唇直下に2列の押引文が加えられ、下位に円形の沈線が認められる。包含層からコンパス文が施されたものが出土している。5は幅の狭いループ状の縄端の回転文が施されたもの。6はナデ調整が加えられ詳細は不明だが、羽状縄文と考えられる。胎土に砂粒を含み、厚手であることからⅡ群A類土器とした。7・8はⅡ群B-3類土器。7は口頸部破片。文様帯に斜行縄文を施した後、文様帯上端を区画する1条の縄線が加えられている。8は直前段反燃による縄文が施されている。9～16はⅡ群B-5類土器。9・10は肥厚気味の口縁部破片。口唇に縄の圧痕文が加えられたもの。9は肥厚帯下端に半截竹管状工具内面の刺突が加えられ、無文地の文様帯には2本一組の縄線文、体部には多軸絡条体の回転文が施されている。10は無文地の文様帯に縄線文が施され、肥厚帯直下に3本の綾絡文が加えられている。11は口頸部文様帯下端部分。頸部は無文地で、2本の縄線が加えられている。体部には斜行縄文が施される。12～16は多軸絡条体の回転文である。15は結節羽状縄文が加えられている。17はⅣ群A類土器。17は無文地に細い沈線が施された体部破片。

(石器) 22は床面、19～21・23・25は覆土、24はHP-5覆土、26はHP-11覆土出土。18・19は石鏃。18は有茎凸基。19は尖基で木葉形。いずれも頁岩製。20・21はスクレイパー。20は剥片の周縁部を加工して、円弧状の刃部を作出したもの。21は縦長剥片の側縁を加工して円弧状の刃部を作出したもの。いずれも頁岩製。22はRフレイク。剥片の側縁を粗く打ち欠いている。頁岩製。23はたたき石。扁平な棒状礫の両端部に敲打痕のあるもの。面状の敲打面を作り出している。被熱痕があり、炭化物

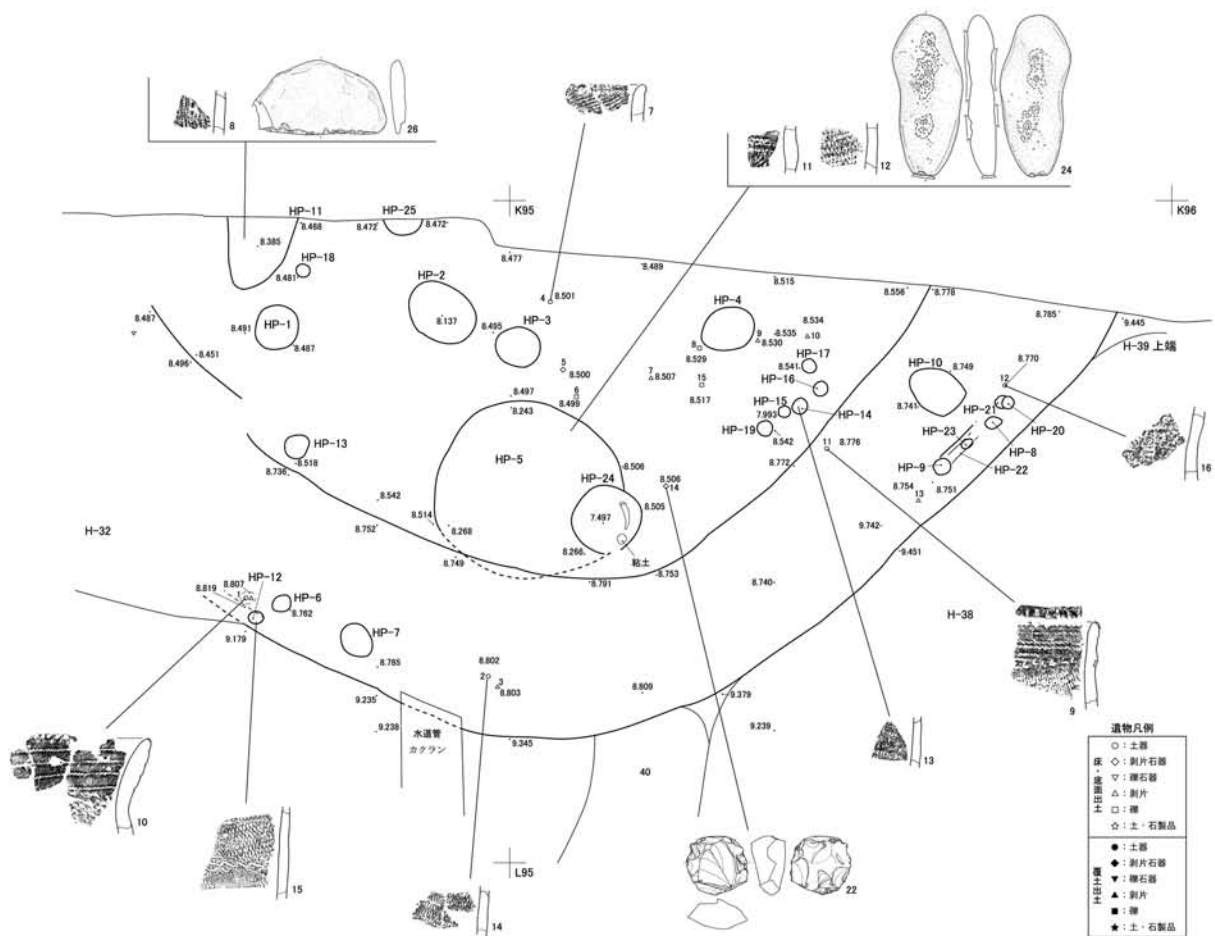
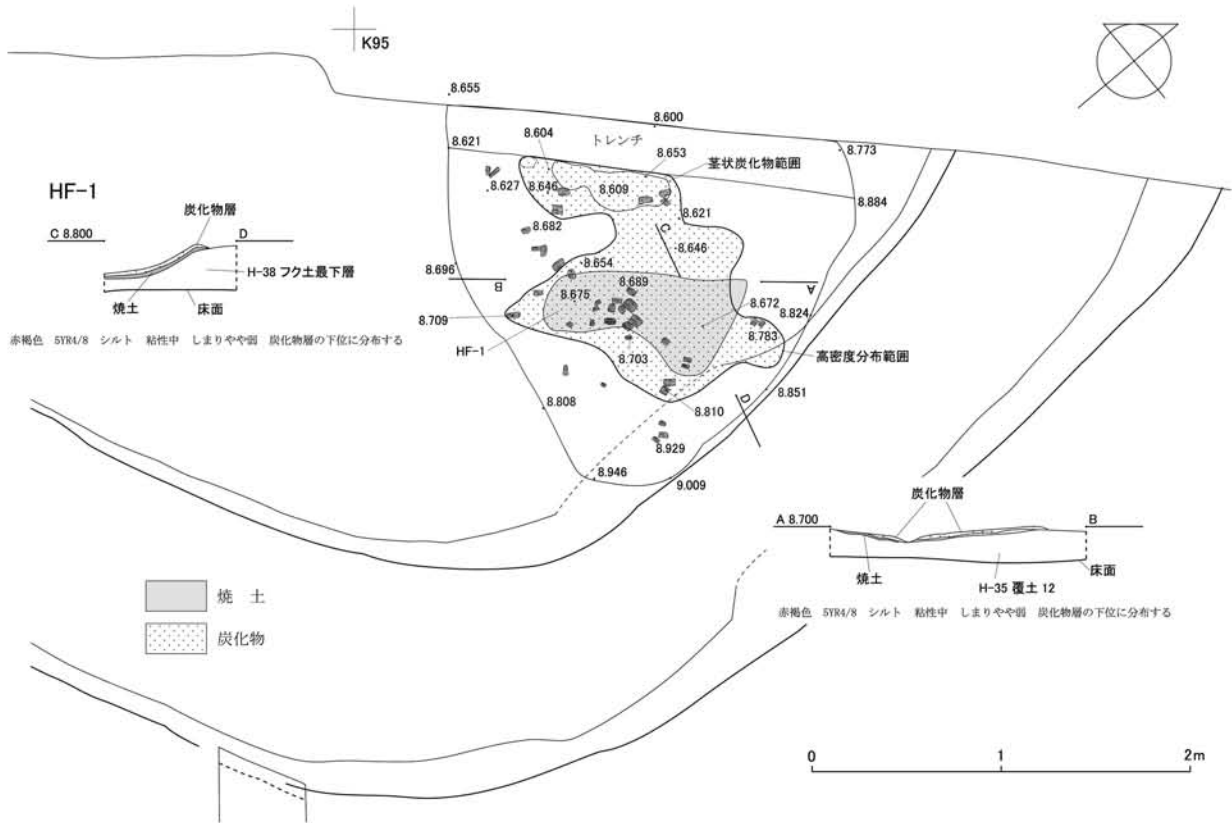
B _____



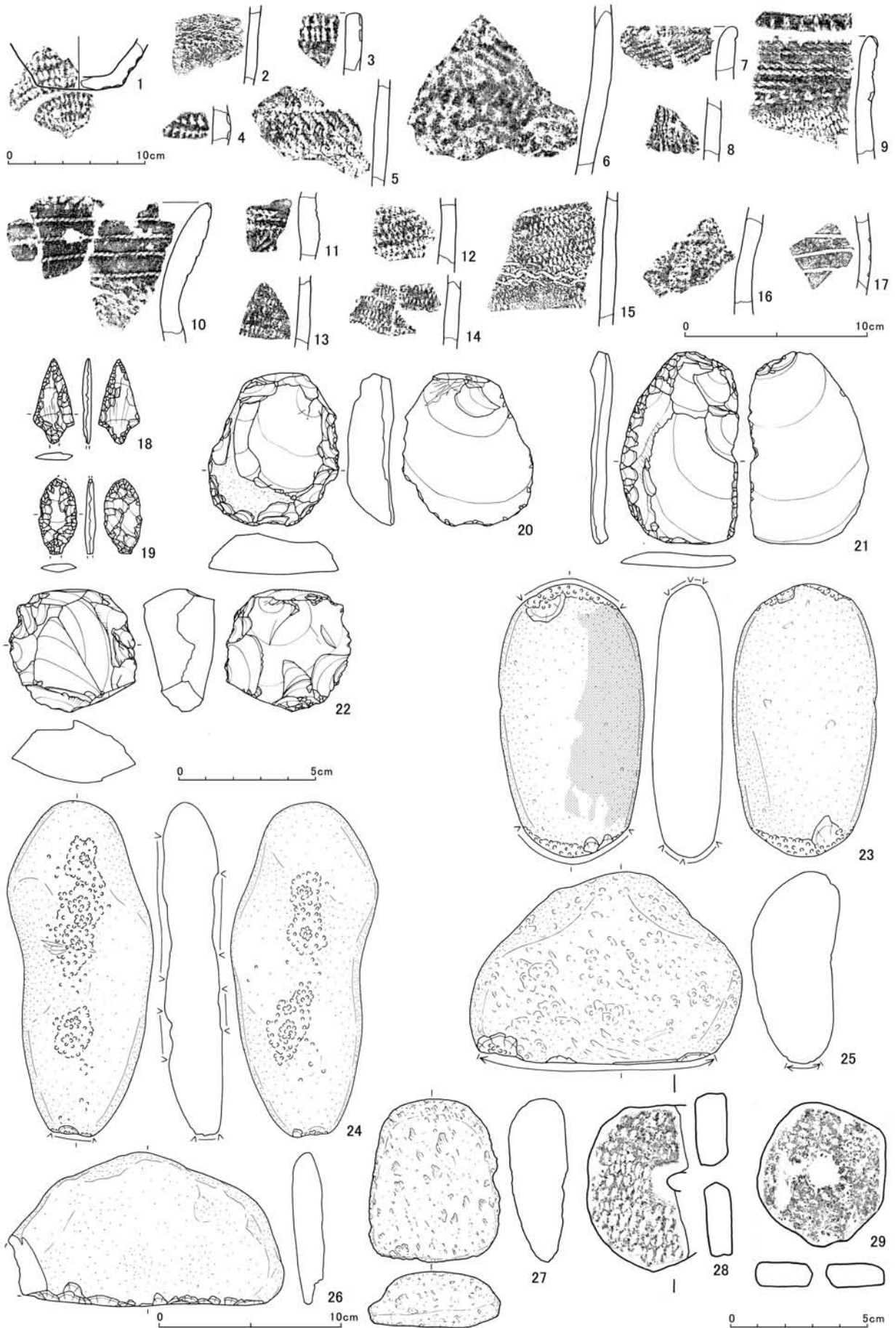
- I 層 盛土 砂利 雜亂 水遺管
- II 上① 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト 粘性中 しまり中 1mm程度黄褐色粒を含む
- II 上② 暗褐色 10YR2/2 粘土質シルト 粘性中 しまり中 B-Tm散逸に含む
- II 中 黒色 10YR2/1 粘土質シルト 粘性中 しまり中 混入物少ない
- III 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト 粘性中 しまり中
- IV 暗褐色 10YR3/4 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む
- 暗褐色 10YR3/3 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む
- 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト 粘性中 しまり強 IV層類似
- 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 粘性中 しまり中 炭化物 (炭様材) ?
- 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む II>IV
- 黒褐色 10YR2/3 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む II>IV
- 褐色 10YR4/6 シルト 粘性中 しまり中 炭化物を含む II<IV



図IV-201 H-35 セクション図



図IV-202 H-35 炭化物分布図 遺物出土状況図



图IV-203 H-35 遺物

の付着がみられる。安山岩製。24は凹み石。扁平な棒状礫の平坦面に断面半円状・円錐状の凹みと浅い凹みがあるもの。下端には敲打痕がある。凝灰岩製。25・26はすり石。25は扁平礫の側縁に幅の狭いすり面を作出され、全面に敲打痕がある。凝灰岩製。26は扁平打製石器。扁平礫の側縁を直線状に打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に非常に幅の狭い機能部を作出している。安山岩製。27は軽石製石製品。短冊形の石斧を模した、軽石製模造品と考えられる。28・29は多軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-5類土器の土器片を素材として用いられている。

H-36・P-33 (H-36: 図IV-204～211、図版29・117～120 P-33: 図IV-204～206・209、図版148)

H-36

位置: N 1 区

規模: 3.17 / 2.26×2.60 / 1.80×0.58m

平面形: 不整円形

付属遺構: 覆土7層上面でF-69の落ち込み、覆土9層にHF-1を確認する。

P-33

位置: N 0・1 区

規模: 1.70 / 1.00×(1.63) / 1.15×0.50m

平面形: 楕円形

H-36・P-33の確認・調査: H-23の北側に位置する。Ⅲ層の調査中に大小2か所の褐色～黒褐色土の落ち込みと焼土を確認する。北側の大きい落ち込みをH-36、南側の落ち込みをP-33、焼土をF-69と呼称し、各遺構の新旧関係がわかるように3本の土層観察用のベルトを設定し、住居跡・土坑の中央部から掘り下げを開始した。覆土から多量の土器が出土、図化を並行しつつ掘り下げ、床面・坑底を確認した。H-36の床面は不整形で中央部がやや落ち込む。P-33の坑底は平坦で、H-36の南側の壁を壊し、H-36の床面より5cmほど高い位置に構築されている。H-33の壁は緩やかに立ち上がる。P-33の壁はほぼ垂直に立ち上がる。POの封土・HF-2焼土等の土壌サンプルを採取してフローテーションを行った。PO-11の封土からはクリ片・ニワトコ、PO-12の封土からマタビ、PO-21の封土からキハダ片等が検出され、また、覆土最下層(ホ層: 覆土11層相当)の炭化物層からヒエ1粒、覆土10・11層からヒエ4粒、マタビ等の炭化種子も検出されている。

H-36・P-33の覆土: 覆土1～5層・覆土8～11層は盛土遺構の落ち込み。覆土6・7層・覆土12・13層は自然堆積である。当初、切り合い関係を想定したが、覆土の坑底付近の堆積状況や遺物出土状況から明確に分離することができなかった。同様の堆積状況が本遺構の5mほど東側から検出されたP-37・38でも認められ、同様に覆土・床面から多量の土器がまとまって出土している。

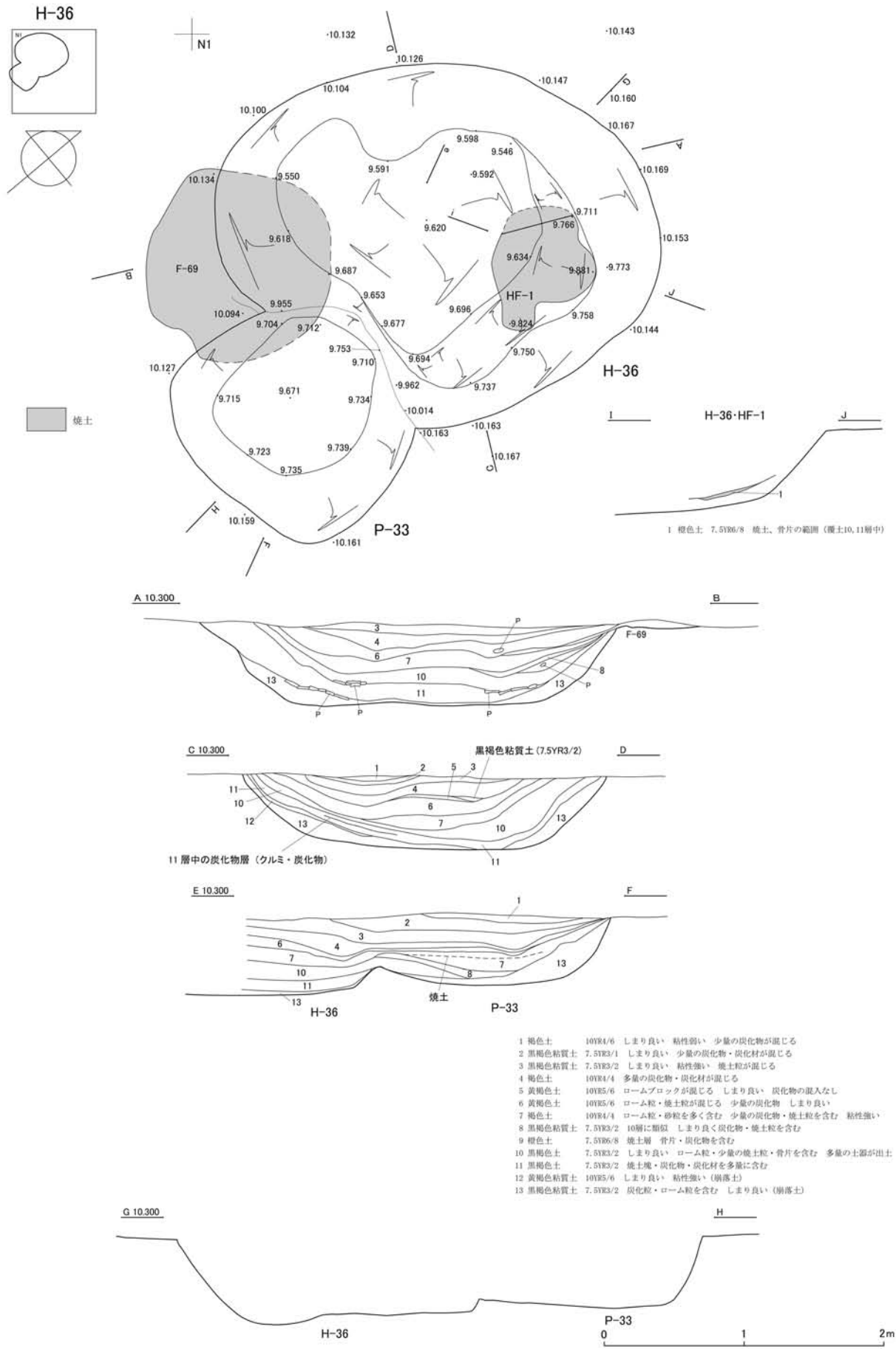
遺物出土状況: 遺物は、覆土1～4層と覆土11層～床面から多く出土した。なお、床面としたものには覆土11～12層が薄層のため区分できず床面としたものもある。

(H-36) 床面・床面直上からⅡ群B-3類土器など1,422点、石器等25点、HFから土器38点、石器等18点、覆土などからⅡ群B-3類土器など4,759点、石器等2,217点が出土している。

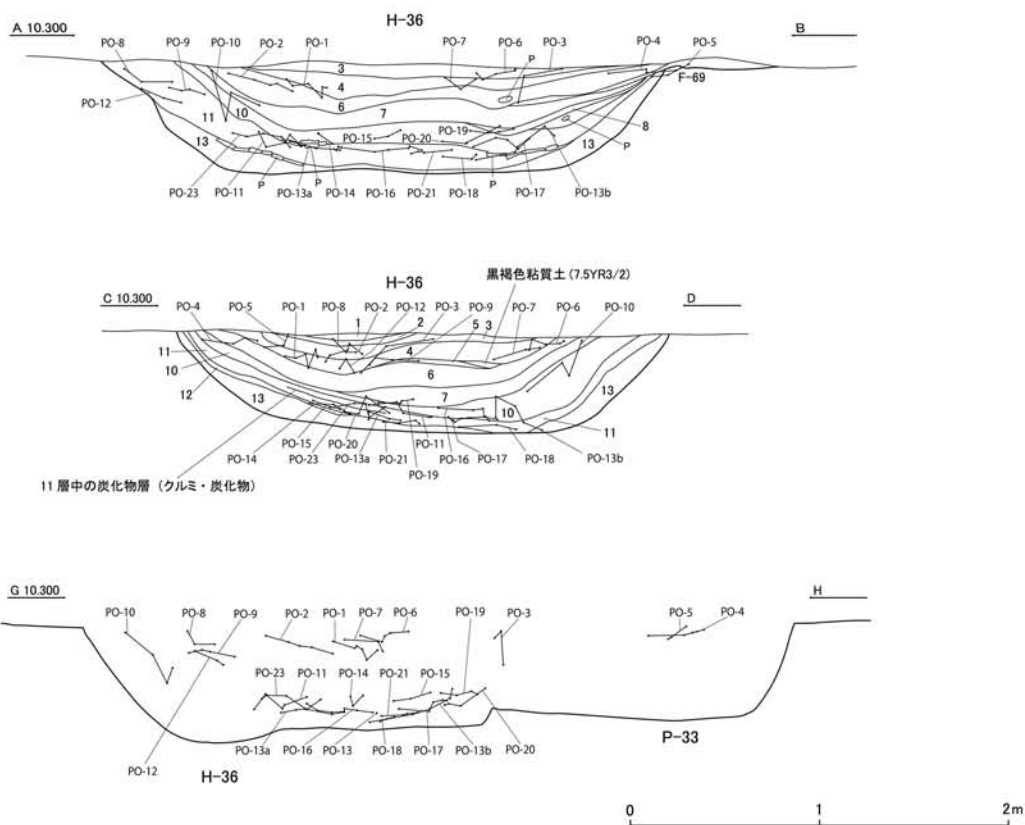
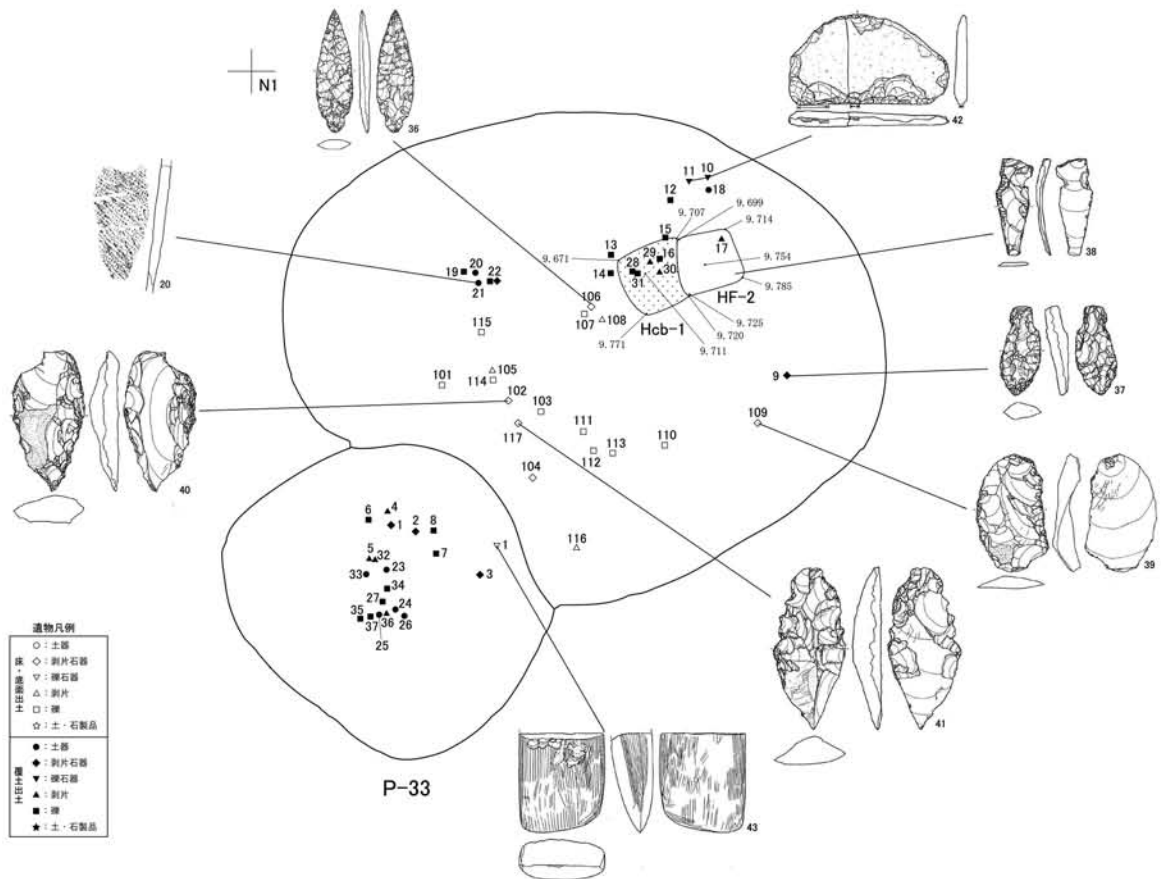
(P-33) 坑底から石器等1点、覆土からⅡ群B-3類土器など1,019点、石器等175点が出土した。

時期: 床面出土のⅡ群B-3類土器から縄文時代前期後半である。H-36覆土10層から採取した炭化材の年代測定を行い、 $4,740 \pm 30$ yrBPとの測定結果が得られている。

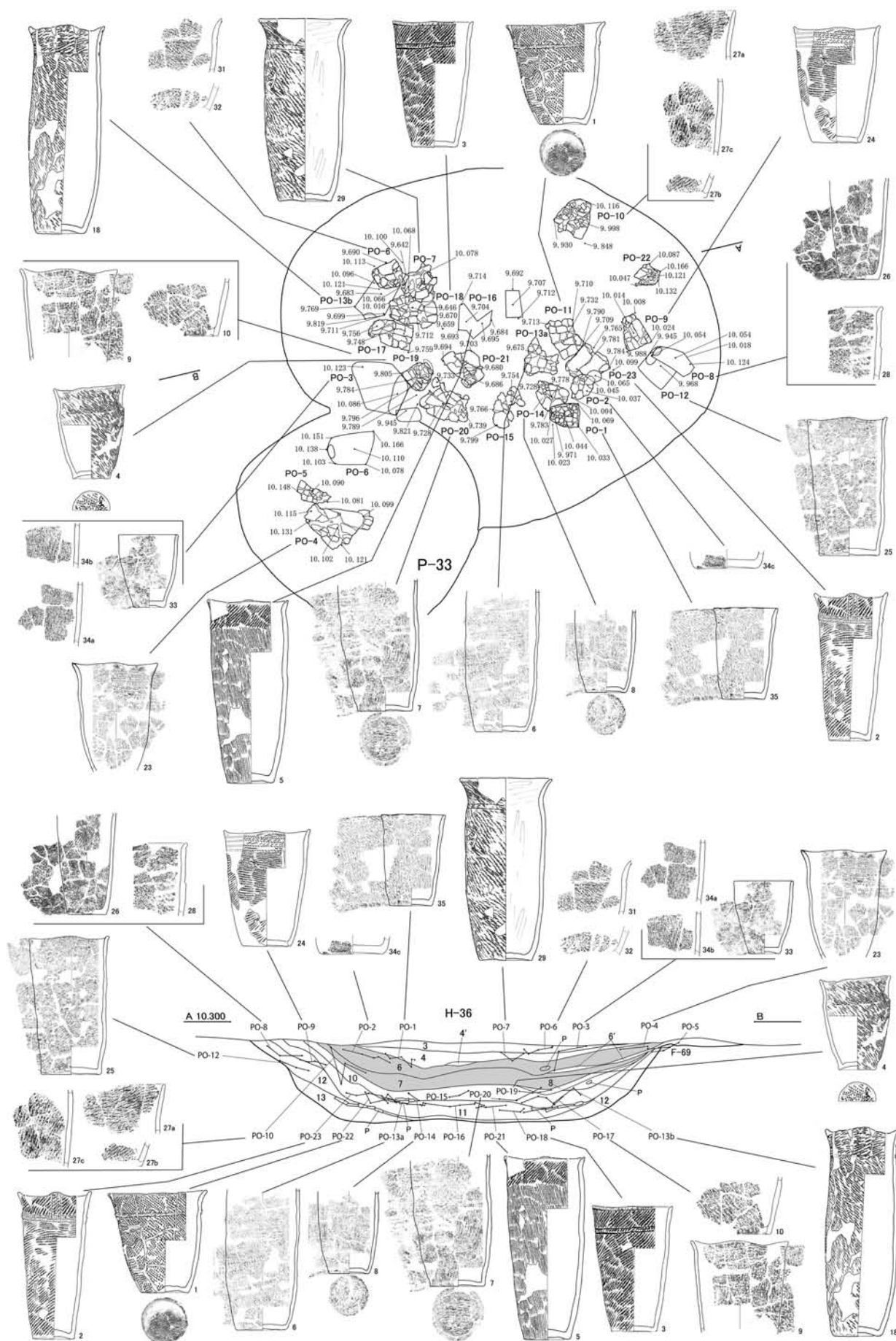
掲載遺物: (土器) 覆土の堆積状況からH-36・P-33を分離せず報告する。1～11は床面、12～14は覆土12層、15・16は覆土11層、17は覆土10層、18～20は覆土5層、21～23は覆土4層、24～28



図IV-204 H-36



図IV-205 H-36 遺物出土状況図



图IV-206 H-36 遺物出土狀況图 PO土器

は覆土3層、29～34覆土1層、35は覆土出土である。

床面（1～11）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（1～11）：1～3は体部に斜行縄文が施されたもの。1は口頸部にくびれをもち、下端に貼付帯が施されている。器面は複節の斜行縄文である。2は波状口縁である。口頸部は斜位、体部は横走気味に縄文が施されている。口頸部文様帯下端は2本一組の縄線文で区画され、波頂部から垂下する3本一組の縄線が加えられている。3は平縁で、器面に斜行縄文が施され、口頸部文様帯の上下を縄線文で区画している。5～8は体部に単軸絡条体の回転文が施されているもの。5は筒形で、緩やかな波状口縁である。口頸部に斜行縄文が施される。6は口頸部を欠失する。体部は単軸絡条体第5類の回転文が施されている。7は体部に貝殻条痕と単軸絡条体の回転文が施されている。8は上半部を欠失する。単軸絡条体の回転文が施されている。4・9～11は体部に直前段反撚による縄文が施されているもの。4は平縁で、体部上半には直前段反撚による縄文が、体部下半には複節の斜行縄文が施されている。口頸部文様帯の下端に貼付帯が加えられて一段（肩）を作出している。9の口頸部文様は不明。10は底部破片。11は体部破片。

覆土12層（12～14）

Ⅱ群A類土器（12）：12は縄端のループ文が認められる体部破片。

Ⅱ群B-3類土器（13・14）：13・14は口縁破片。13は貝殻条痕上に縄線文が加えられている。14は無文地上に縄線文が加えられたもの。

覆土11層（15・16）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（15・16）：15は波状口縁である。口頸部下端は2本一組の沈線で区画されている。口頸部は横走気味に、体部は斜行に直前段反撚による縄文が施されている。波頂部下位の口頸部に3～4本一組の沈線が加えられている。16は太い単軸絡条体の回転文が施されているもの。16a・16bは体部、16c・16dは底部破片。

覆土10層（17）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（17）：17は大型破片。平縁で、口頸部下端は2本一組の縄線で区画されている。口頸部に横走気味、体部に縦位の直前段反撚による縄文が施され、口頸部には2本一組の縄線が加えられている。

覆土5層（18～20）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（18～20）：18は筒形、波状口縁である。口頸部下端は縄線で区画され、口頸部・体部に直前段反撚による縄文が方向を変えて施文されている。波頂部から垂下する2列一組の円形刺突文が加えられている。19は器面に多軸絡条体の回転文が施された底部。20は直前段反撚による縄文が施された体部破片。なお、18については取り上げの際に覆土として取り上げられたものがほとんどで、垂直分布を見る限り本来は覆土10層に含まれるべきものと考えられる。

覆土4層（21～23）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（21～23）：21は緩やかな波状口縁である。口頸部文様帯下端は刺突と結束羽状縄文で区画され、文様帯に結束羽状縄文と波頂部から垂下する2本一組の組紐状の縄線文が加えられている。体部には単軸絡条体第1類を原体とする縄文が施される。22は直前段反撚による縄文が施された底部。23は緩やかな波状口縁である。口頸部文様帯下端は縄線で区画され、文様帯には結束羽状縄文、体部には自縄自巻の縄文が施される。

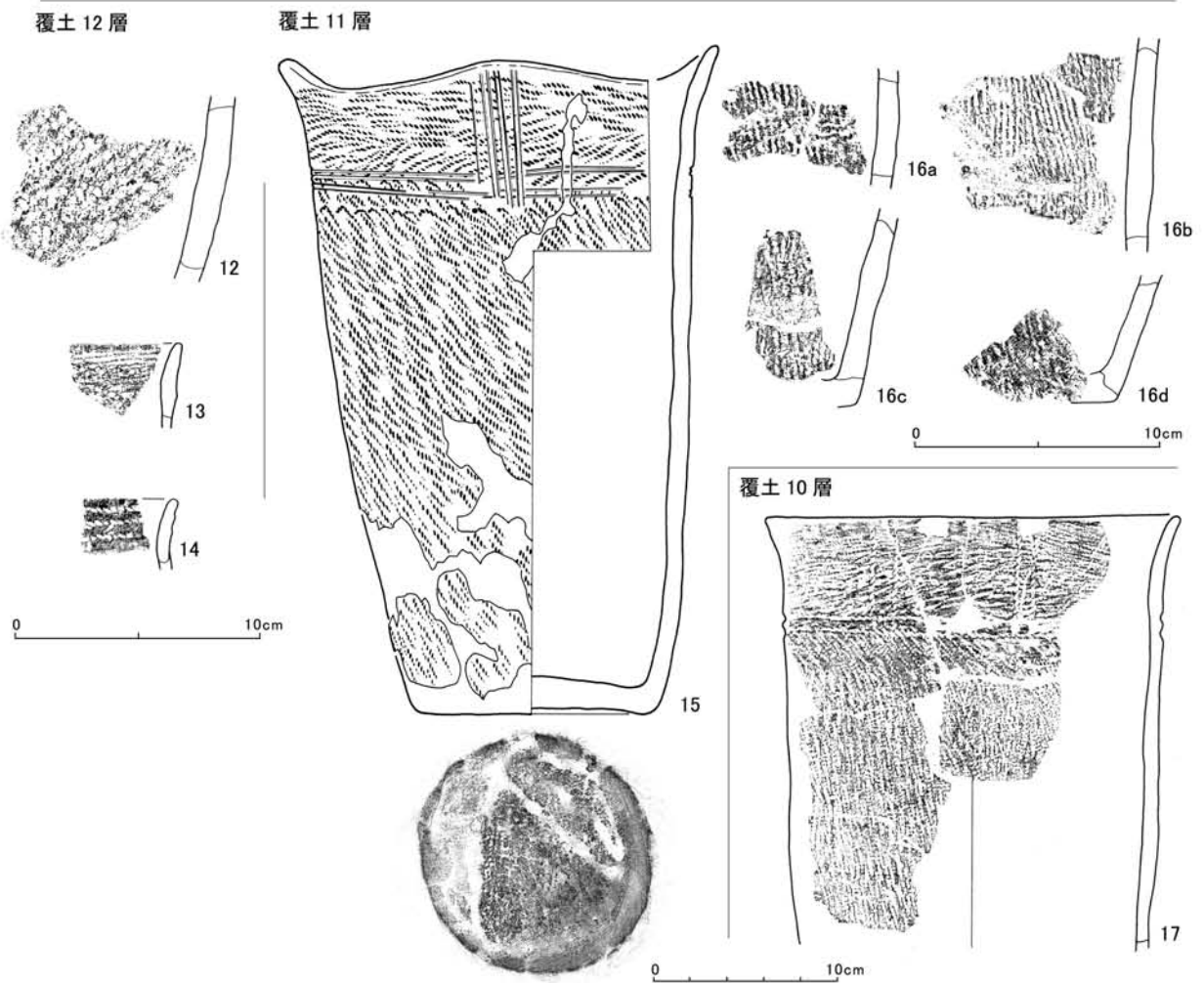
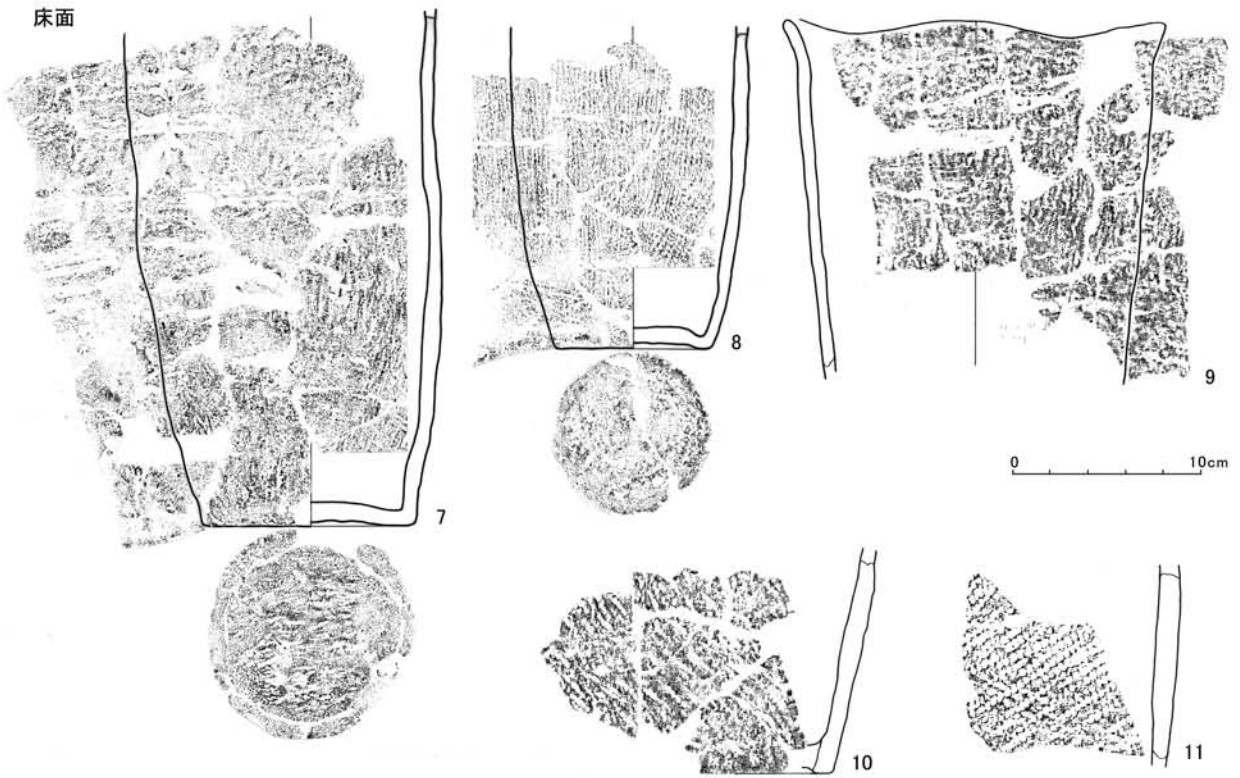
覆土3層（24～28）

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器（24～28）：24は波状口縁である。器面に横走気味の縄文を施文

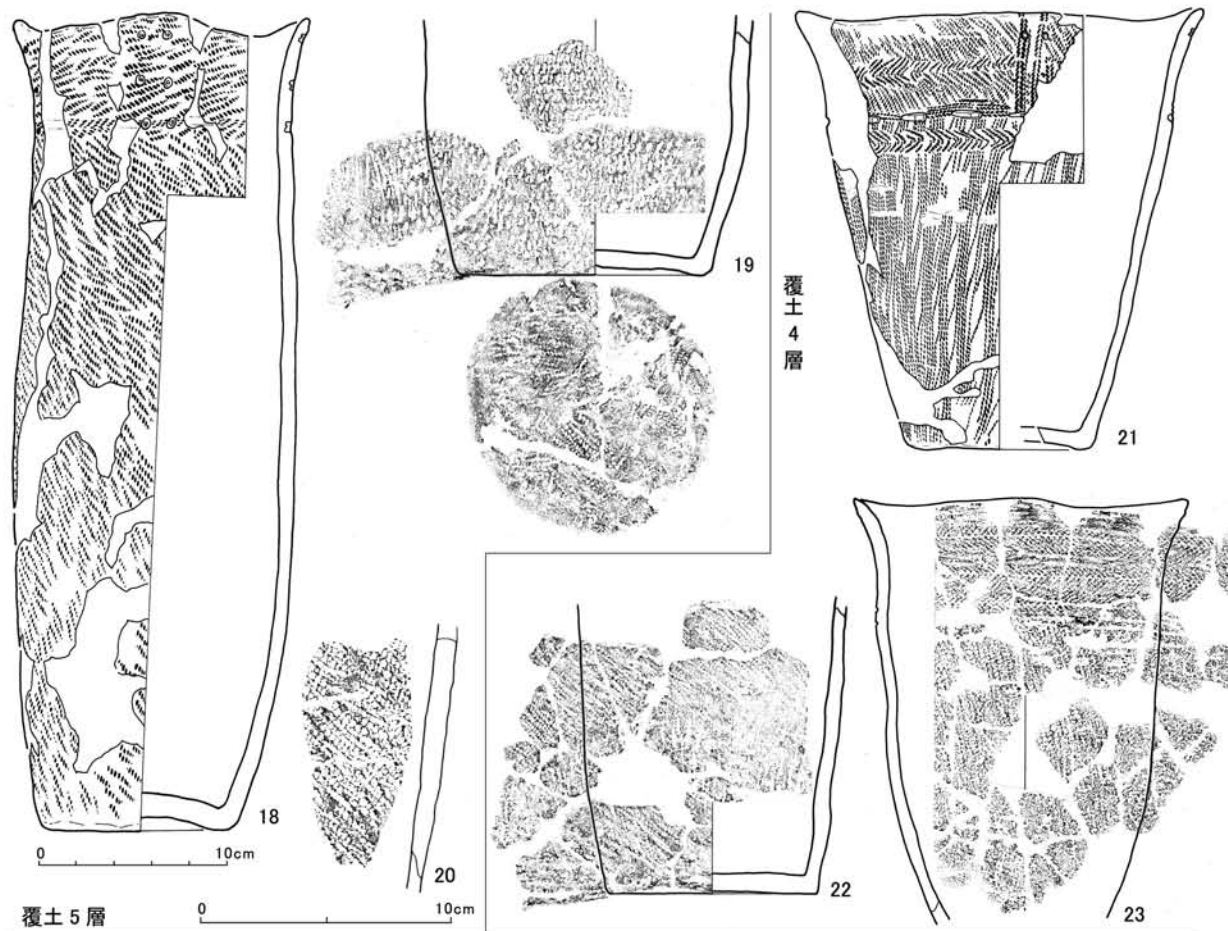
床面



图IV-207 H-36 土器 (1)

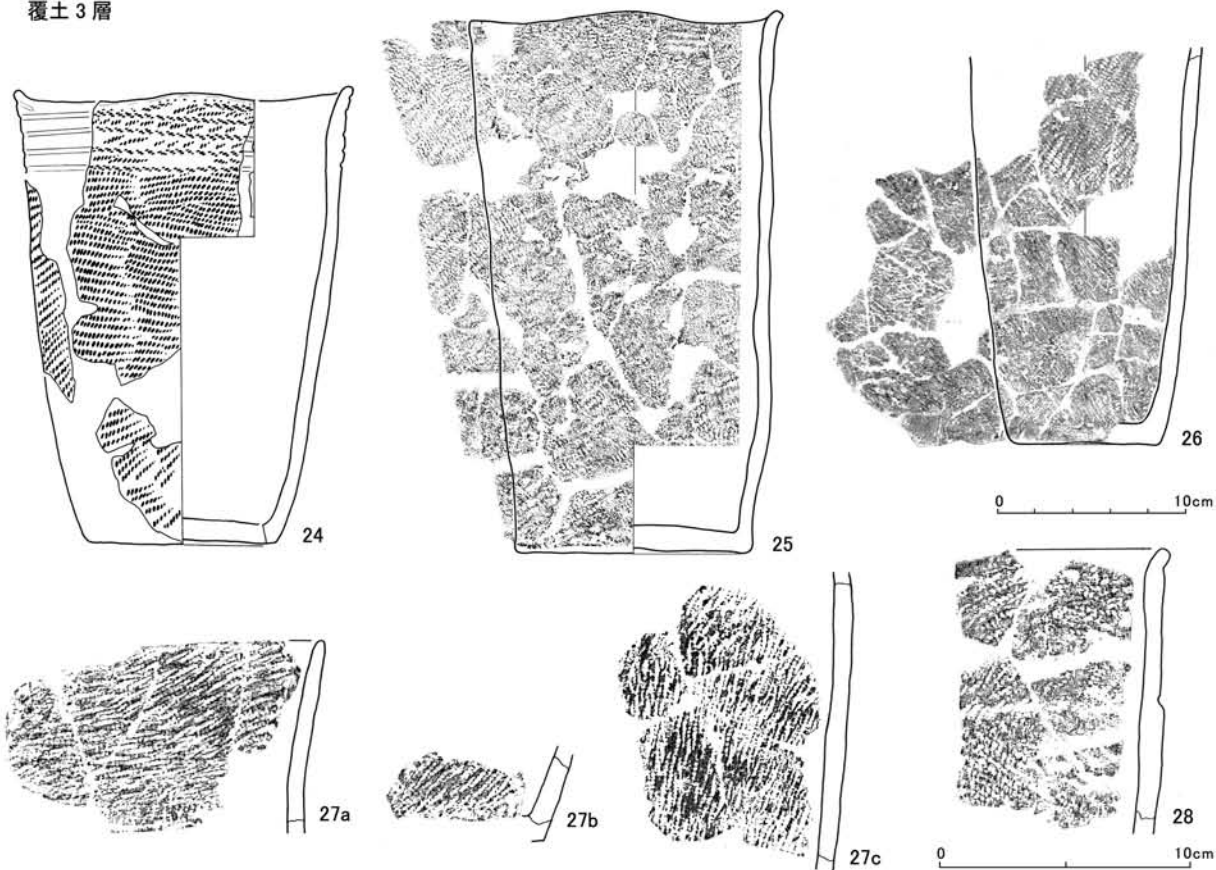


图IV-208 H-36 土器 (2)



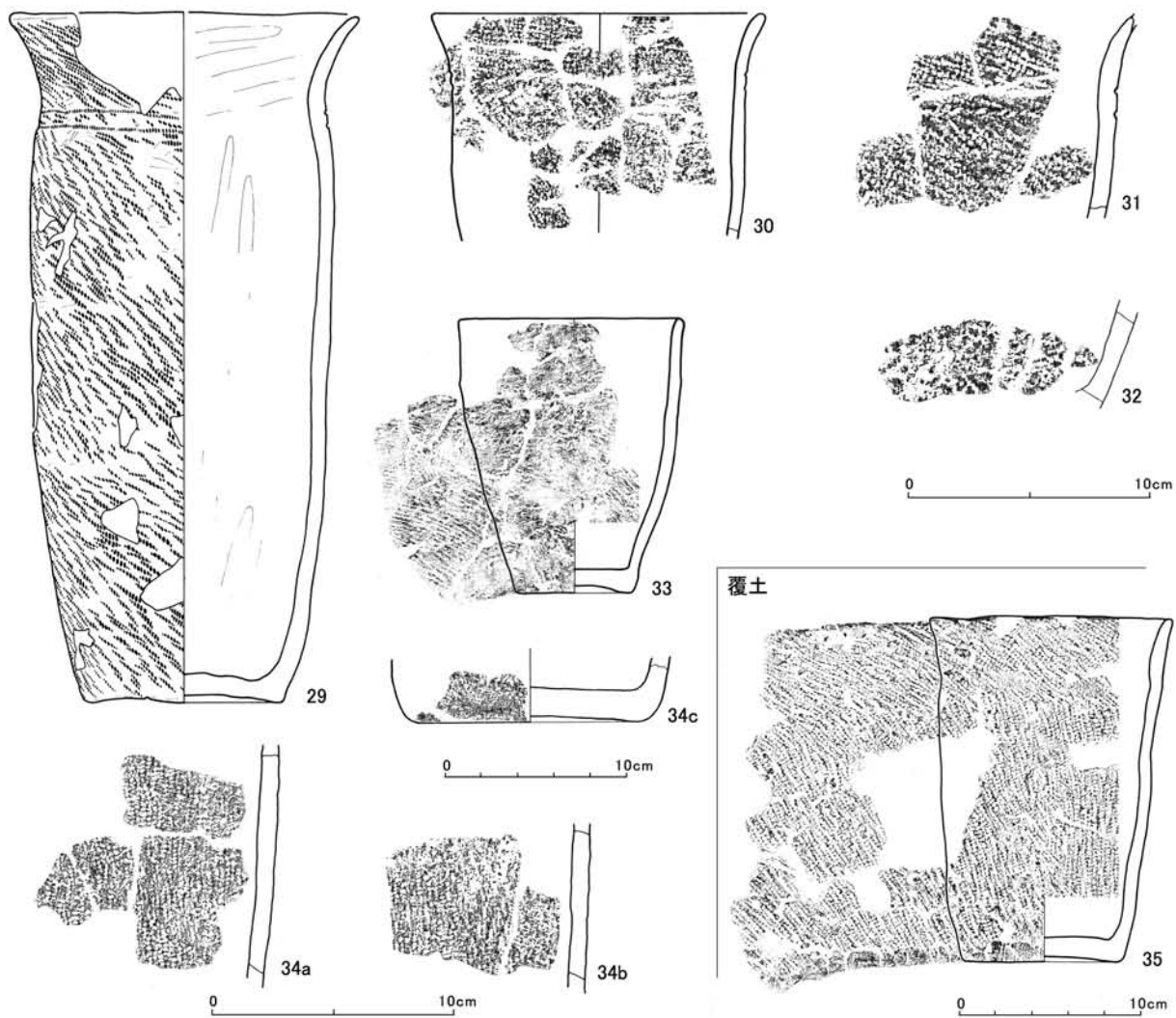
覆土 5 層

覆土 3 層

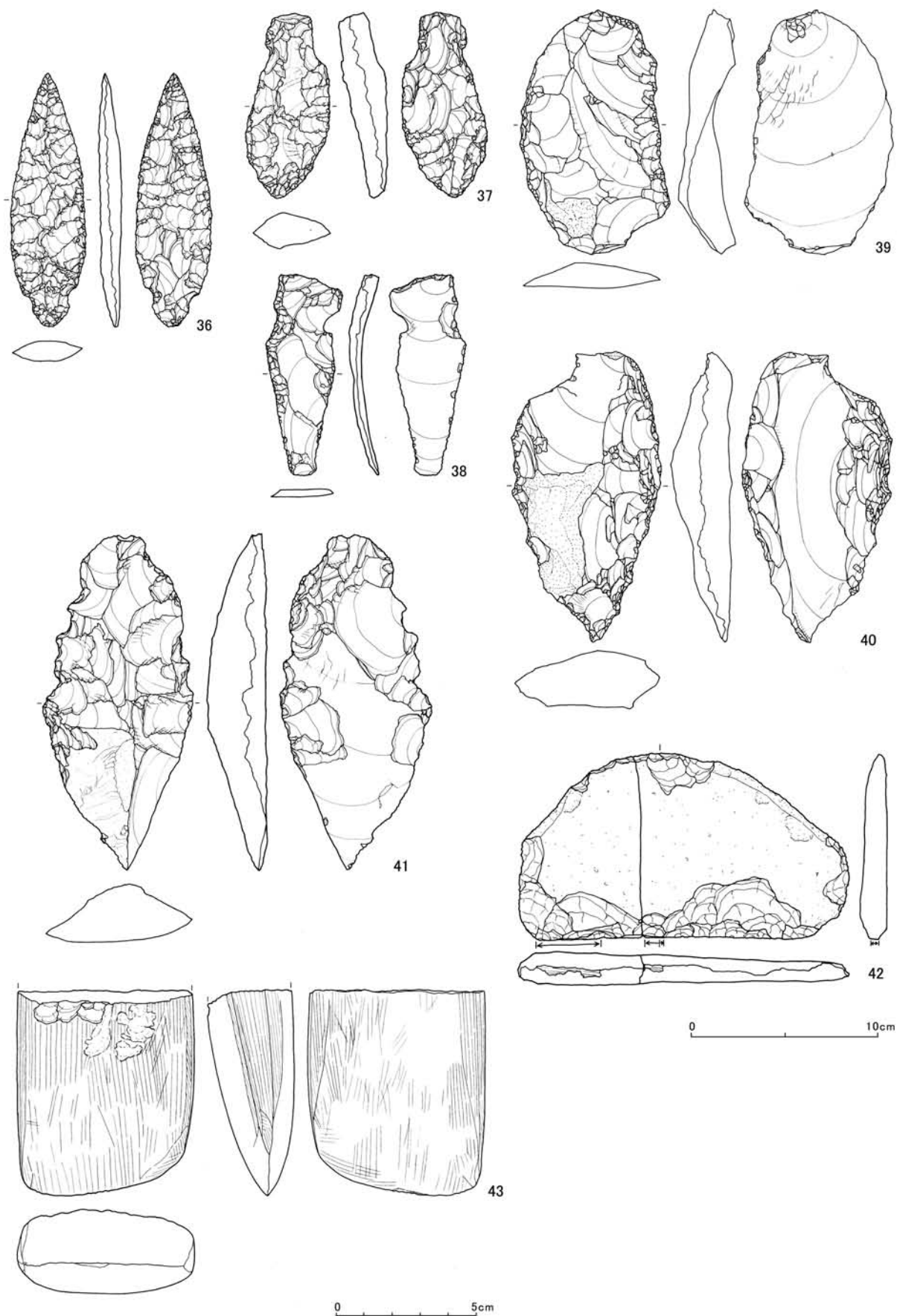


図IV-209 H-36 土器 (3)

覆土 1 層



図IV-210 H-36 土器 (4)



图IV-211 H-36 石器

した後、口頸部文様帯に縄線が加えられている。25は器面に多軸絡条体の回転文が施されたもの。26～28は体部に直前段反撚の縄文が施されたもの。26は斜行縄文と組み合わせて施文している。27は施文方向を変え、口頸部は横走気味に、体部は縦走気味に施文されている。28は波状口縁である。直前段反撚の縄文を施文方向を変えて器面に施文した後、口頸部下端に縄線文が加えられている。

覆土1層 (29～34)

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器 (29～34)：29～32は体部に直前段反撚による縄文が施されたもの。29は口頸部文様帯を区画する2本一組の縄線文が加えられている。30・31は同一個体である。幅の狭い口頸部の下端に縄線文が加えられる。33は体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの。口頸部には貝殻条痕文が施されている。34は自縄自巻の縦走する縄文が施されたもの。

覆土 (35)

Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-3類土器 (35)：35は直前段反撚による縄文が、口頸部は斜位に、体部は縦位に施文される。

(小括) 体部の縄文は覆土10層～床面では、斜行縄文・太目の単軸絡条体回転文・直前段反撚の縄文が出土、覆土5層～覆土1層では直前段反撚の縄文・多軸絡条体の回転文・自縄自巻の縄文が認められる。直前段反撚の縄文は上下層から出土し、復原土器を見る限り斜行縄文・太目の単軸絡条体の回転文は、上層では認められなくなり、それに替わる自縄自巻の縄文の出現が看取できる。なお、直前段反撚が施されたものについては、上層、下層の違いが認められない。

(石器) 36・39～41はH-36床面、37・38・42はH-36覆土出土。36は石槍。有茎の柳葉形で基部につまみ状の抉りがある。37・38はつまみ付ナイフ。37は縦型で両面全面加工のもの。暗赤色チャート製。38は縦型で片面側縁加工のもの。頁岩製。39～41はスクレイパー。39は縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。頁岩製。40・41は縦長剥片の側縁の一部に鋸歯状の刃部があるもの。頁岩製。42は扁平打製石器。板状礫を打ち欠いて半円形に整形し、弦の部分に非常に狭い機能部を作出している。安山岩製。43はP-33底面出土の石斧。基部を欠損している。短冊形の両刃で直刃である。両側縁を擦り切った後、全面を研磨して整形している。刃部は使用により約9°の傾きがある。緑色泥岩製。

H-37 (図IV-212～217、図版30・120・121)

位置：N10区

規模：2.60 / 1.83 × (1.80) / (1.80) × 0.42m

確認・調査：I層を除去した段階で、褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。炉跡の土壌を採取してフローテーションを行った。炉跡から採取した炭化材の年代測定を行った。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

平面形：平面形は五角形である。床は中央部が低くなり、やや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。南側の壁の一部はH-31構築時に壊されている。主柱穴と重複あるいは隣接して柱穴がみられることから、建て替えや修復された可能性が高い。覆土・HF-1の炭化物層・焼土層の土壌についてフローテーションを行った。炭化物層・焼土層からはヒエ3粒、イヌダテなど多量の炭化種子・炭化種実が、覆土からはゴボウなどが検出された。

付属遺構：主柱穴は4本検出された (HP-3・8・13・17)。溝は西と東側の壁際の床面で確認された。炉跡は床面中央部で検出された (HF-1)。五角形の掘り込みをもつ。砂が充填された小ピットが2基検出された (HP-14・19)。炉跡内と炉跡から東へ0.8mのところにある。位置からみて炉の火力調整に使用されたと推定される。

遺物出土状況：床面・床面直上からⅡ群B-3類土器など38点、石器等26点、HPから土器34点、石器等42点、周溝から石器等3点、焼土中（HF-1）からⅡ群B類土器5点、覆土からⅡ群B-4類土器など3,120点、石器等1,887点が出土した。石製品は軽石製石製品1点、線刻礫1点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。HF-1から検出した炭化材を用いて年代測定を行い、 $4,700 \pm 30 \text{yrBP}$ の測定結果を得た。（佐藤）

掲載遺物：（土器）13・16～19は床面直上、6・7・12・14・15は柱穴状ピット（HP）、その他は覆土出土。

Ⅱ群A類土器（7・8）：7・8は口縁部破片。いずれも押引文が施されたもの。

Ⅱ群B-3類土器（9・12～14・16～19）：9は口縁部破片、磨滅が著しいが、わずかに貝殻条痕が認められる。12～14は体部破片。単軸絡条体第5類の回転文が施されている。16～19は直前段反撚の縄文が施されている。

Ⅱ群B-4類土器（1～6・10・11）：1・2は口頸部文様帯下端が結束羽状縄文で区画されているもの。1・2は無文地の文様帯に縄線文が施され、体部に自縄自巻的な原体による縄文と結束羽状縄文を組み合わせて施文している。4・11は口頸部文様帯下端が綾絡文・羽状縄文で区画されているもの。4はやや幅広の文様帯に菱目状の縄線文、体部に単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されている。11は文様帯に2本一組の山形の縄線と縄線間を埋める斜位の短い縄線文が施されている。体部には軸跡が明瞭に残る多軸絡条体の回転文が施されている。3は区画帯をもたないもの。文様帯に組紐状の縄線の圧痕が加えられ、体部に自縄自巻の縦走する縄文が施されている。5・6・10は器面に単軸絡条体の回転文が施されているもの。5・6は体部下半、10は体部破片。5には結節羽状縄文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器（15）：15は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。

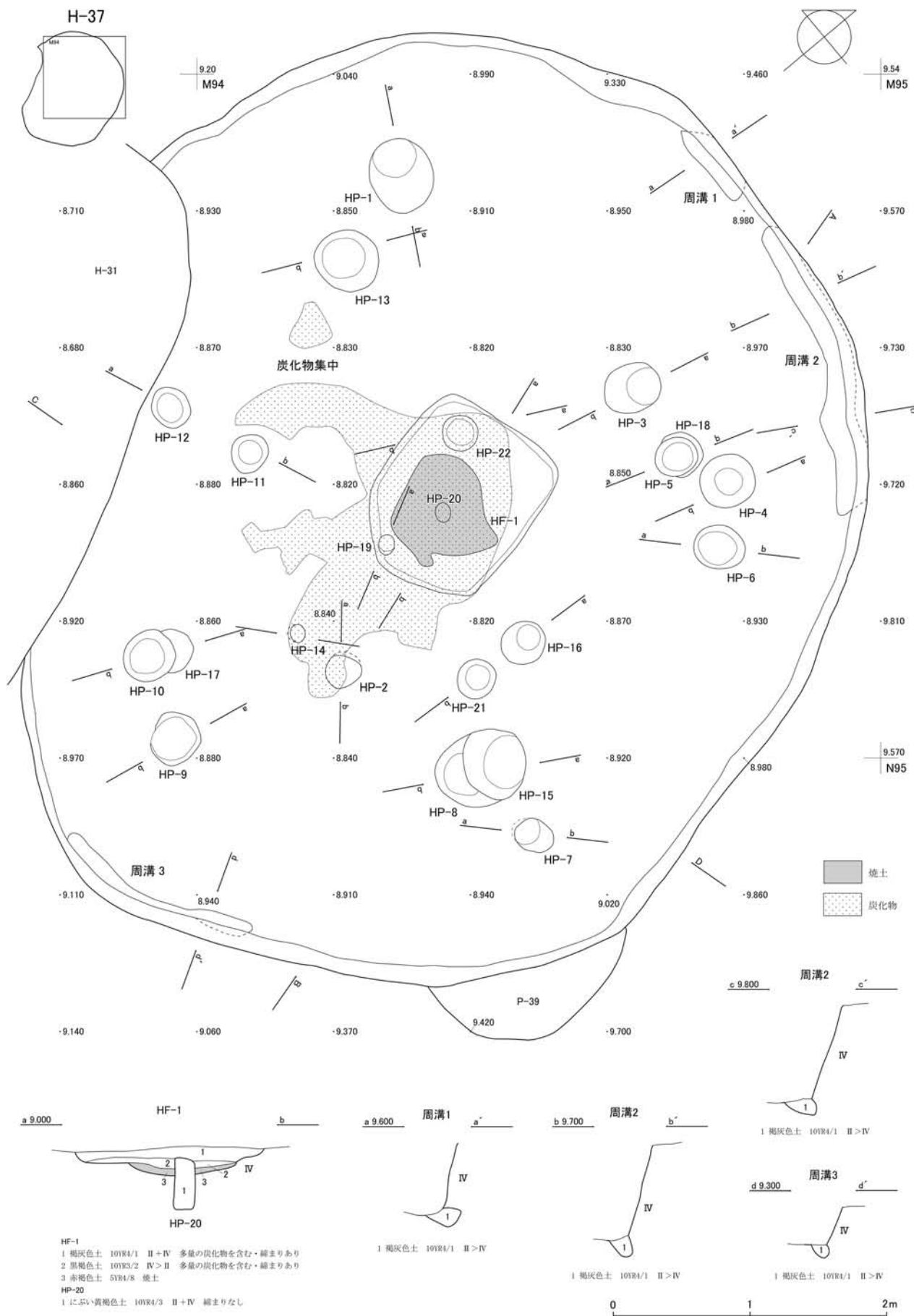
（石器）20・21・26・27は床面、22・25・28は床面直上、23はHF-1、24・29・30は覆土出土。20・21はスクレイパー。縦長剥片の側縁から下端に刃部を作出したもの。21は剥片の一部に刃部が作出されたもの。いずれも頁岩製。22は石斧片。下半部は欠損しており、基部のみである。全面を研磨によって調整されている。安山岩製。23は石斧未成品。ところどころに研磨による調整痕がみられる。刃部は打ち欠いたのち微細な剥離を行っている。泥岩製。24・25はすり切り残片。断面U字形で溝状の擦り切り痕がある。緑色泥岩製。26はたたき石。扁平な隅丸三角形礫の頂部に敲打痕のあるもの。砂岩製。27はすり石で扁平打製石器。板状礫を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出している。左半部は欠失している。安山岩製。28は礫器または石核。半円形で断面が三角形のもの。頁岩製。29・30は石製品。29は軽石製石製品。扁平な楕円形に整形し、中央に径1cmほどの未貫通の穿孔痕がある。30は線刻礫。棒状礫に非常に細い線刻がされている。泥岩製。

H-38（図IV-218～233、図版31・122）

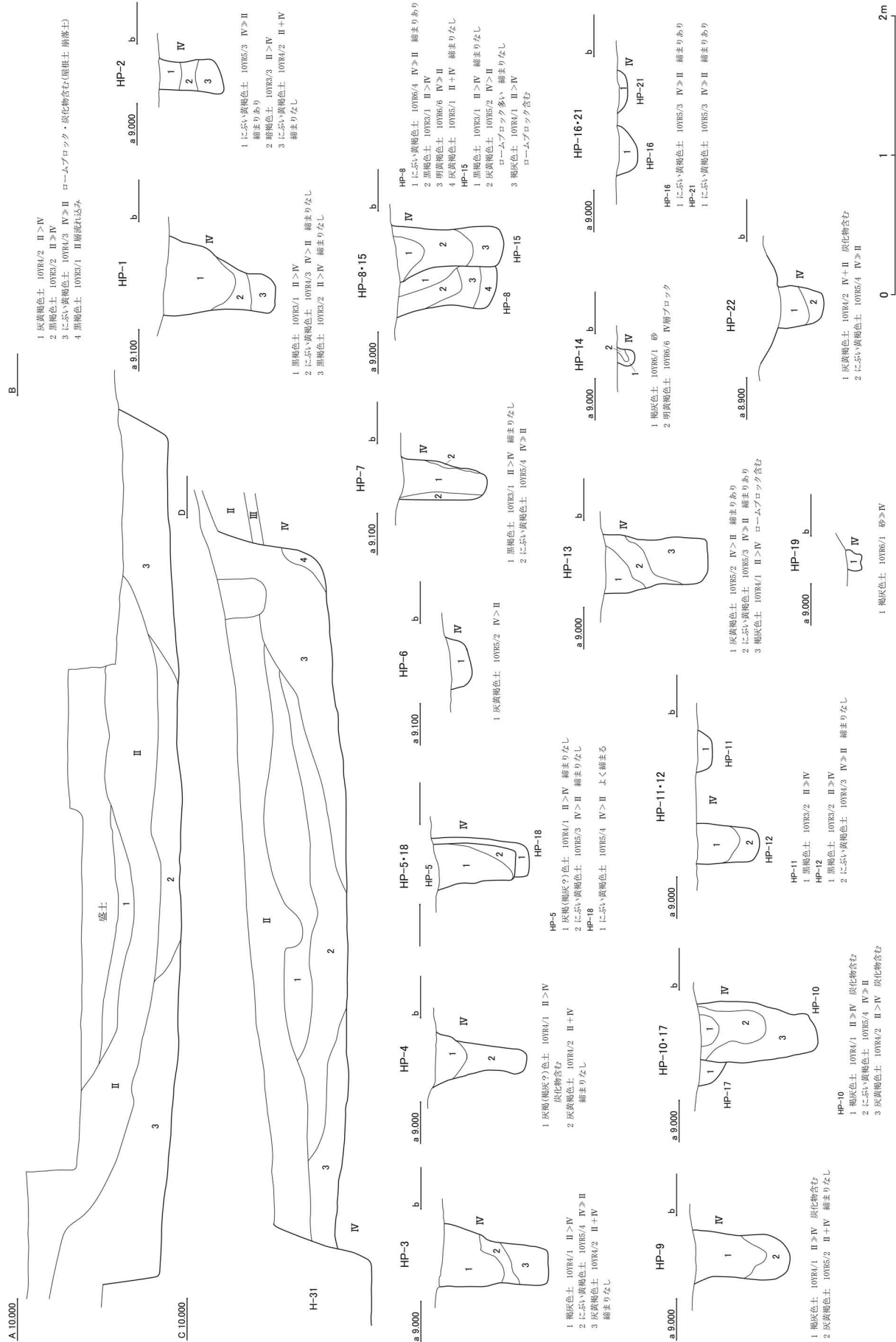
位置：K・L95・96区

規模：6.50 / 4.75 × (5.32) / 3.95 × 0.77m

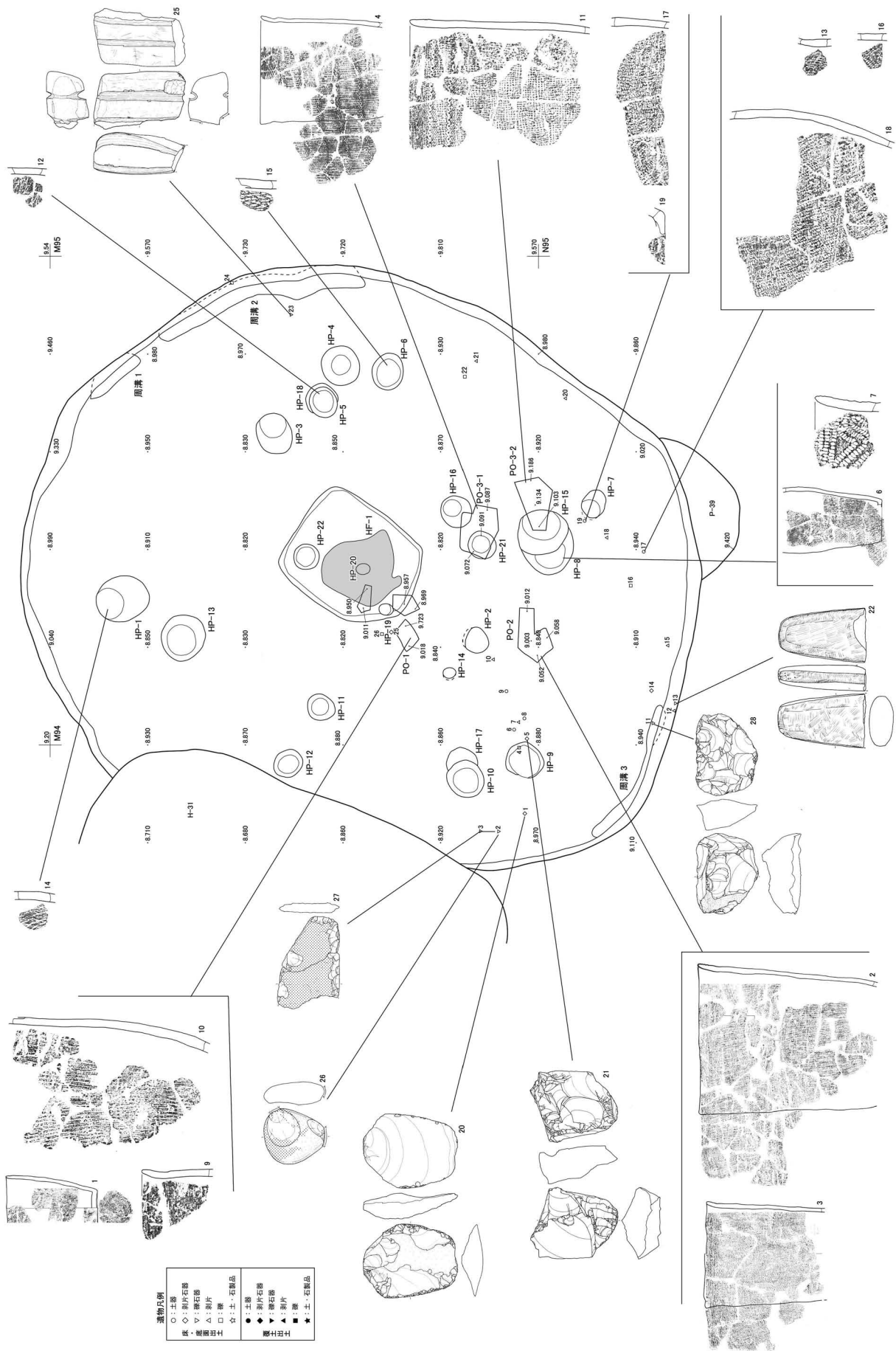
確認・調査：Ⅱ中層中における標高10.00m前後の平坦面に立地する。K・L95・96区周辺でⅡ層・盛土を掘り下げたところ、Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。北・西側はそれぞれH-39、H-35と切り合っていたが、南東側は切り合いがなく、輪郭が明瞭で、隅丸方形の形状が推定されたためその中央を長軸上に直交するように土層観察用ベルトを設定した。北・西側にも延長し、同時にH-35・39との切り合い関係を確認した。H-35より古く、H-39より新しいことが確認できたため、H-35の調査後、H-39の調査前に覆土の掘り下げを行った。覆土8層直上、床面上位10cmのほぼ中



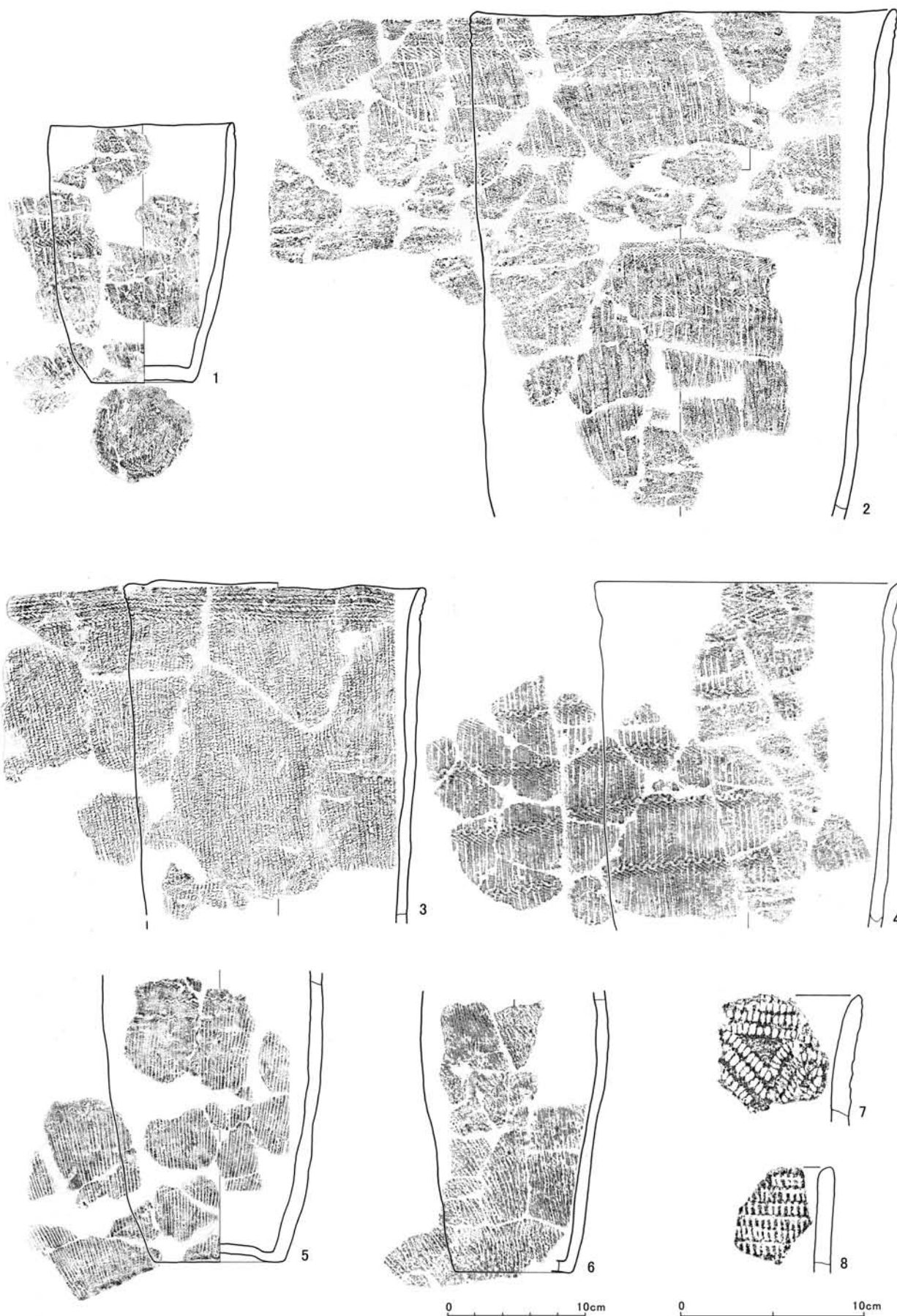
図IV-212 H-37



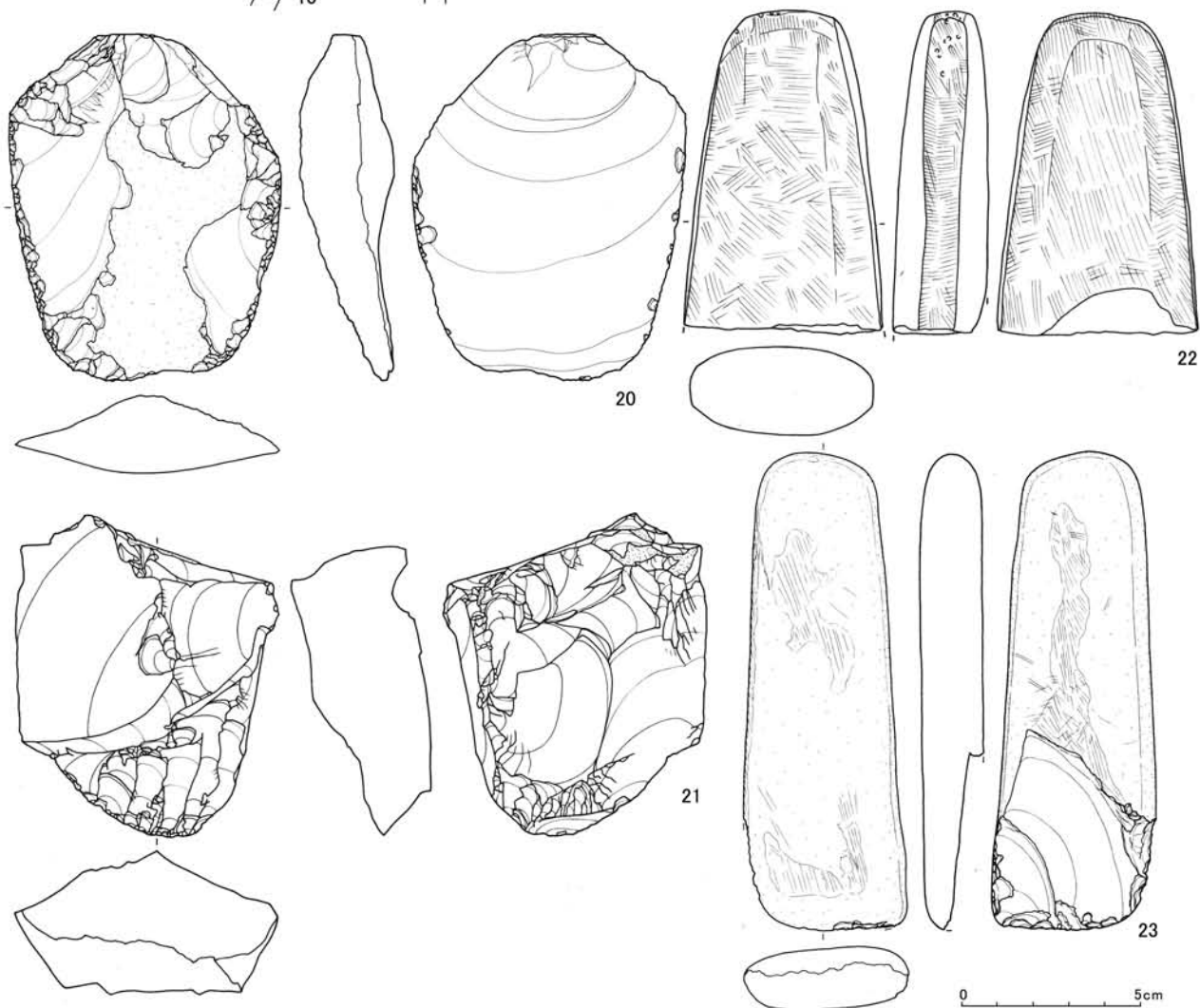
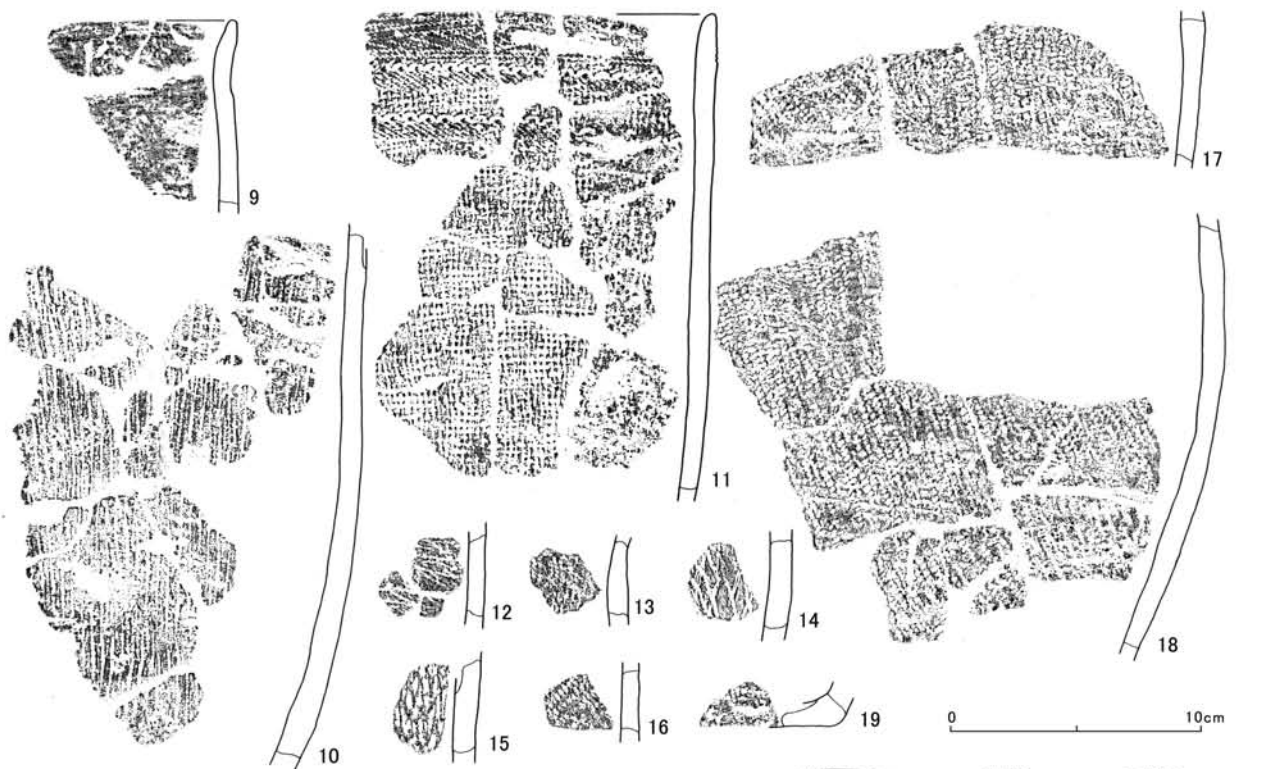
図IV-213 H-37 セクション図



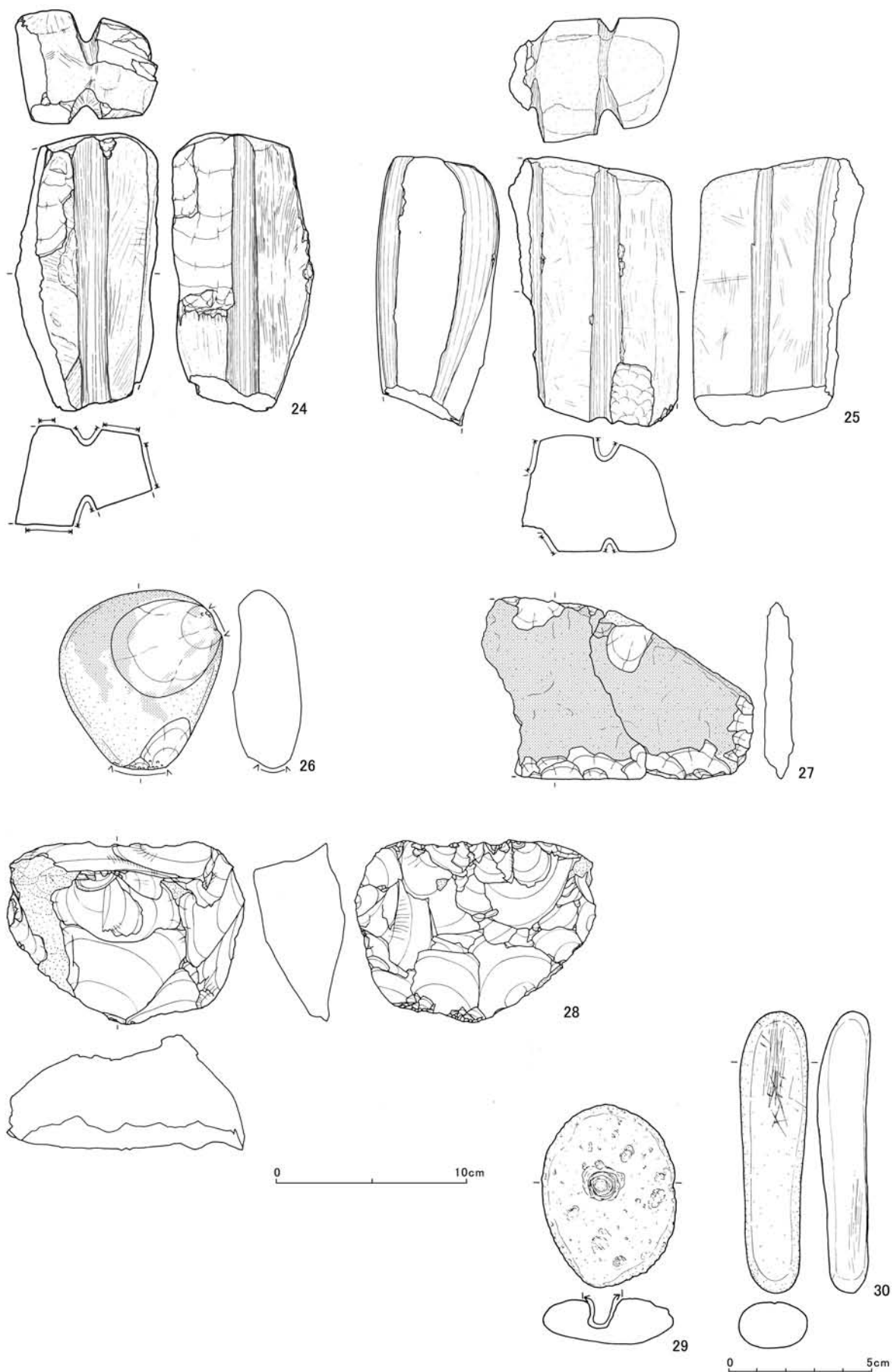
図IV-214 H-37 遺物出土状況図



圖IV-215 H-37 土器 (1)



图IV-216 H-37 土器 (2) 石器 (1)



图IV-217 H-37 石器 (2)

中央からは直径最大5cm大の炭化物の広がりが見出され、焼失した屋根材の可能性はある。床面のH-39の範囲には黄褐色土の貼床が見出された。土層の記録後、ベルトを掘り下げ、床面・壁を見出し、最後に床面の遺構の調査を行った。本遺構はH-39、P-36より新しく、H-35より古い。また、水道管攪乱部セクションの観察からH-43、盛土下層（黄褐色土）より新しい。

覆土:最下層にはIV層を不均質に含む覆土8層がやや厚く（20cm程）堆積し、その直上に炭化物層（覆土7層）がある。その上位にはII層主体の黒褐色土（覆土5層）がやや厚く（20cm程）堆積し、その上位にはIV層主体の黄褐色土がやや厚く（20cm程）堆積する。H-39の範囲には周りのベンチと同レベルでIV層と同様の黄褐色土の貼床がある。水道管攪乱部セクションでは、H-43の覆土に連続する覆土5・6層や盛土下層（黄褐色土）を本遺構が切っており、これらより後に形成されている。

平面形:平面形は隅丸長方形で、深さは0.75m、内部には比高差15cm、奥行き0.7m程のベンチ構造がある。床面・ベンチ部は平坦で、ベンチ部・壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構:太い柱穴6基（HP-1～4、8・14）、細い柱穴6基（HP-6・9～13）、太くてやや浅い土坑2基（HP-5・15）、浅い中型の土坑1基（HP-7）が見出された。主柱穴（HP-1～4、8・14）はベンチ内部の角に位置し、4本柱である。HP-4・8は切り合い、古いHP-8にIV層起源の覆土があることから移設され、埋められたと思われる。HP-3・14も同様で、HP-14からHP-3に移設されたと考えられる。中央には上部が開くHP-5があり、その下部には5mm程の炭化物が多量に含まれる。それに隣接して、細い柱穴（HP-6）・浅い土坑（HP-7）がある。東壁の内側には1.8mの範囲に20～50cmおきに細い柱穴列（HP-9～13）がある。

遺物出土状況:床面・床面直上からII群B-5類土器など31点、石器等12点、HPからII群B-5類土器など6点、焼成粘土塊1点、土製品2点、石器等34点、覆土からII群B-5類土器など1,349点、有孔土製円板3点、石器等2,841点が出土した。石製品は軽石製石製品が1点出た。

時期:出土遺物から縄文時代前期後半である。また、HP-5覆土から採取された炭化物を試料として放射性炭素年代測定を行った結果、 $4,660 \pm 30$ yrBPの測定結果が得られている。（鈴木）

掲載遺物:（土器）1・21は床面直上、他は覆土3層・覆土1層・覆土出土である。

I群B-4類土器（2）：2は羽状の撚糸文が施された体部破片。

II群A類土器（3～8）：3～8は体部破片。3・4は縄端のループ文が施されたもの。5・6は同一個体で、押引文と斜行縄文が施されたもの。7・8は刺突文が施されたもの。

II群B-3類土器（18～20）：18～20は体部破片。太目の単軸絡条体の回転文が施されているもの。

II群B-4類土器（21）：21は単軸絡条体の回転文が施されている体部破片。摩滅が著しいが、結束羽状縄文らしい痕跡が認められる。

II群B-5類土器（1・9～17・22～25）：1は床面直上出土の大型破片。波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部は強くくびれ、無文地の口頸部文様帯には2本一組の縄線文が口縁に沿って施され、波頂部下位には穿孔が加えられている。体部は斜行縄文である。9～15は口縁部破片。9の口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の口頸部文様帯には縄線文と「X」字・「V」字状に巻かれた単軸絡条体第5類の原体の圧痕が施されている。10～14は口頸部が肥厚するもの。10は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚帯下端に半截竹管状工具内面よる刺突が加えられ、波頂部から肥厚帯中ほどまで垂下する刺突文が加えられた貼り付けが施される。無文地の肥厚帯には2本一組の縄線文が加えられる。11は波状口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられる。肥厚帯の下端には棒状工具よる刺突文が加えられる。波頂部下位には波頂部から垂下する刺突が加えられた貼り付けが施され、無文地の文様帯内には2本一組の縄線文と刺突文が加えられる。体部は単軸絡条体

の回転文である。12～14は同一個体。口縁部肥厚帯と肥厚帯下位に複数の文様帯をもつものである。12は波頂部破片。肥厚帯は、上端を縄の圧痕文、下端を縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されている。波頂部下位にボタン状貼り付けが加えられ、組紐状の縄線が波頂部に沿って施されている。肥厚帯直下にも組紐状の縄線が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。13は口頸部破片。14は波頂部下位のボタン状貼り付け部分で、多軸絡条体の回転文が加えられている。15はくびれの強い口頸部破片。器面に条痕文が施されている。16・17は体部に多軸絡条体の回転文が施された頸部破片。16は口頸部下端を刺突文が加えられた貼り付けで区画し、無文地の頸部に縄線が加えられている。17の口頸部下端は貼り付けによって作出された肩部分によって区画され、肩部分には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯には単軸絡条体第1類と「X」状の単軸絡条体第5類の2種類の原体による圧痕文が加えられている。体部上端には2条の無節の綾絡文が加えられ、体部は多軸絡条体の回転文である。22～25は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。26は上げ底の底部破片。器面にはナデ調整が施されている。

(石器等) 30・31・33～36は床面直上、27～29は覆土、37はHP-3覆土出土。27は石錐。剥片石器の破片を再加工して端部に機能部を作出したもの。頁岩製。28はスクレイパー。剥片の側縁に刃部を作出したもの。頁岩製。29は両面調整石器。紡錘形のもの。尖頭部を欠損している。頁岩製。30～35はたたき石。30・31は棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。32は垂角礫の両端部に敲打面があるもの。33は扁平礫の両端部を打ち欠いて幅の狭い敲打面のあるもの。扁平打製石器の機能部や礫器の刃部と似ている。側縁にも敲打痕がある。34・35は扁平な楕円礫の両端部と側縁の一部に敲打痕のあるもの。30・34は安山岩製、31・32は珪岩製、33は頁岩製、34・35は砂岩製。36は砥石。板状礫の平坦面に内彎するすり面と溝状のすり面がある。砂岩製。37は台石。扁平な楕円礫の平坦面と両端部・側縁に敲打痕のあるもの。安山岩製。38～40は有孔土製円板。38・39はII群B-4類土器、40はII群B-5類土器の土器片を素材とするもの。

H-39 (図IV-224～227、図版32・123)

位置：K96・97区

規模：8.78 / 6.15×3.00 / 2.75×0.70m

確認・調査：II中層中における標高9.90m前後の平坦面に立地する。H-32で記述したように、K96区周辺のIII層上面で黒色土の落ち込みを検出し、トレンチ調査によりK94・95、L94区とK96・97区の遺構に分け、K96・97区のをH-39とした。切り合うH-38の調査の際に土層観察用ベルトでH-38がH-39より新しいことが確認できたため、H-38の完掘を待って着手した。調査範囲に沿ったトレンチに直交するようにほぼ中央に土層観察用ベルトA-Bを残し、覆土の掘り下げを行った。床面から20cm程上位の覆土14層直上の中央やや東寄りでは炭化物の集中が検出された。床面と壁の検出、土層の記録後、ベルトを掘り下げ、最後に床面を調査した。壁はほぼ垂直に立ち上がり、肩の部分で開き、そこに遺構内側に傾斜する柱穴列が検出されたため柱穴列の調査を行った。H-38からH-39にまたがる断面には断層のような土層のずれ(土層①～⑥と⑦～⑩の間)が認められたため、当初住居跡と判断し、H-40として調査を進めたが、住居の壁の立ち上がりとしては不自然であることから最終的にH-39の覆土と修正し、H-40を欠番とした。本遺構はH-38・P-36より古い。覆土の土壌についてフローテーションを行ったが検出されなかった。

覆土：最下層にはIV層を不均質に含む覆土14層が厚く(中央で20cm、壁際で60cm)堆積し、その上位に炭化物を含む暗褐色土(覆土11層)がある。その上位にはII層主体の暗褐色土(覆土8層)が厚く(30cm程)堆積し、黒褐色～褐色土(覆土2～4層)を挟んで、II層主体の暗褐色土(覆土1層)が厚く

(30cm程) 堆積する。

平面形：調査が1/3～半分程度であるため全体形状は不明であるが、隅丸長方形と推測される。深さは1.1mで、内部には南東部のみ比高差10cm、奥行き1.5m程の台状のベンチ構造がある。床面・ベンチ部は平坦で、ベンチ部・壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所(HF-1)、集石2か所(HS-1・2)、太い柱穴4基(HP-1・2・5・6)、太くてやや浅い土坑1基(HP-11)、浅い中型の土坑1基(HP-4)、浅い小型の土坑4基(HP-3・7～9)、溝状の土坑1基(HP-10)、やや細い側柱穴13基(HP-12～24)が検出された。HF-1は30×26cmで、中央東寄りに位置する。HS-1・2は東壁際で、浅い掘り込みの中に3～7cmの扁平礫が充填される。主柱穴はHP-1・2とHP-2・5・6がそれぞれ直交する軸上に位置するが、HP-5・6の間隔が狭く、移設された可能性があり、4ないし6本柱とみられる。HP-2・11には掘り方が認められる。溝状の掘り込みはベンチ内側に平行に形成される。掘り込み面が残存する東側の壁上部の堅穴肩は斜めに削られ、遺構中央部に向かって傾斜する側柱穴列(HP-12～24)が並ぶ。先端部はやや尖り、打ち込みとみられる。

遺物出土状況：床面には壁際に土器・石器・礫が散漫に分布する。床面からⅡ群B-4類土器1点、石器等19点、HSから礫9点、HPからⅡ群B-4類土器など20点、石器等88点、覆土からⅡ群B-4類土器など2,406点、石器等2,671点が出土した。有孔土製円板2点、玦状耳飾りが2点出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半である。(鈴木)

掲載遺物：(土器) 16は床面、8・12・13・15・17・18は柱穴状ピット(HP)、他は覆土出土。

Ⅰ群B-4類土器(3)：3は半截竹管状工具による刺突・押引文・綾絡文が施された体部破片。

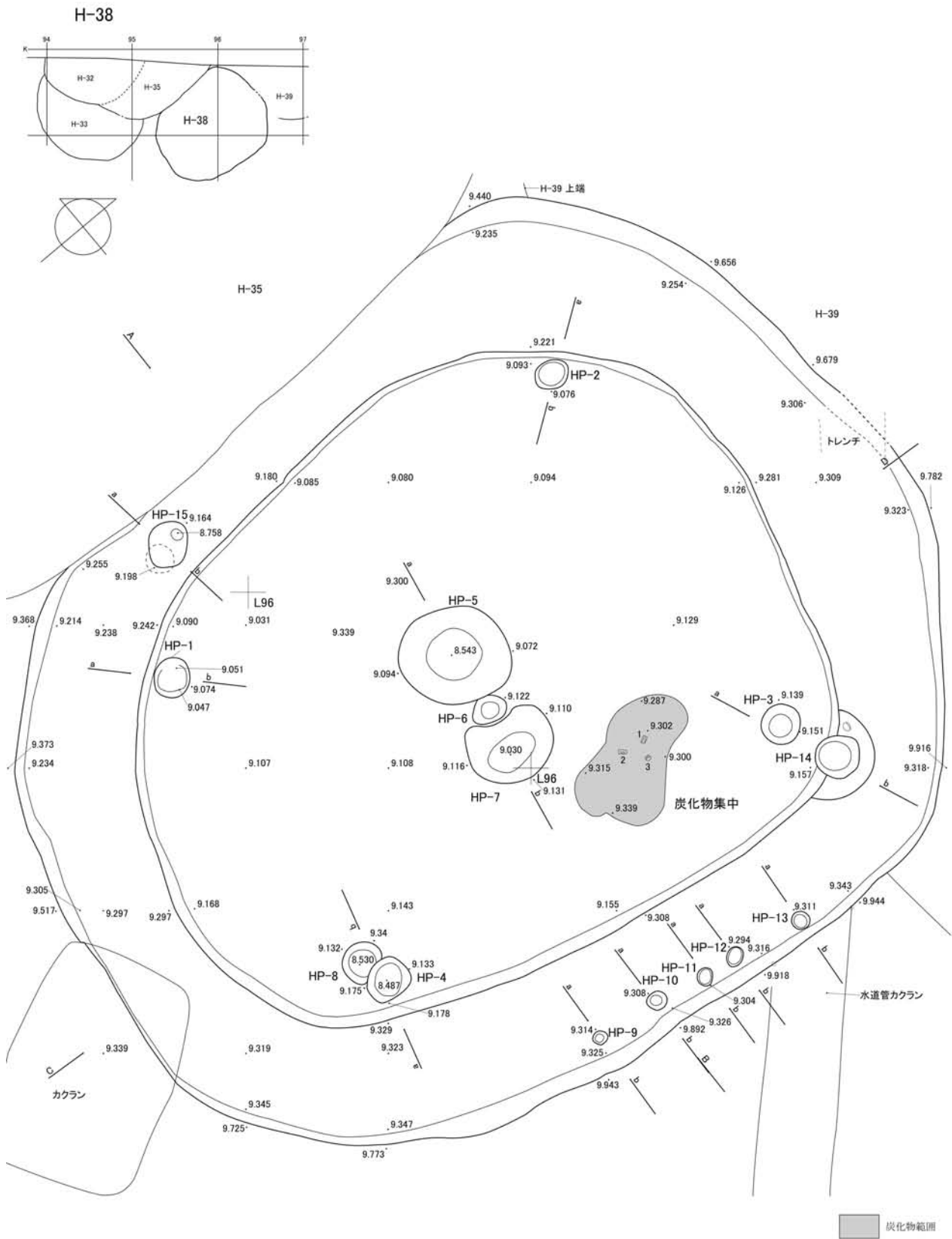
Ⅱ群A類土器(4～7)：4～7は体部破片。3～6は押引文、6は無文地に細い施文具で「錨」状の押引文が描かれている。7は縄端のループ文が施されたもの。

Ⅱ群B-3類土器(8・12)：8は口頸部破片。口頸部文様帯に貝殻条痕文が加えられている。12は口頸部文様帯上端が縄線で区画され、文様帯には縄文が施されている。

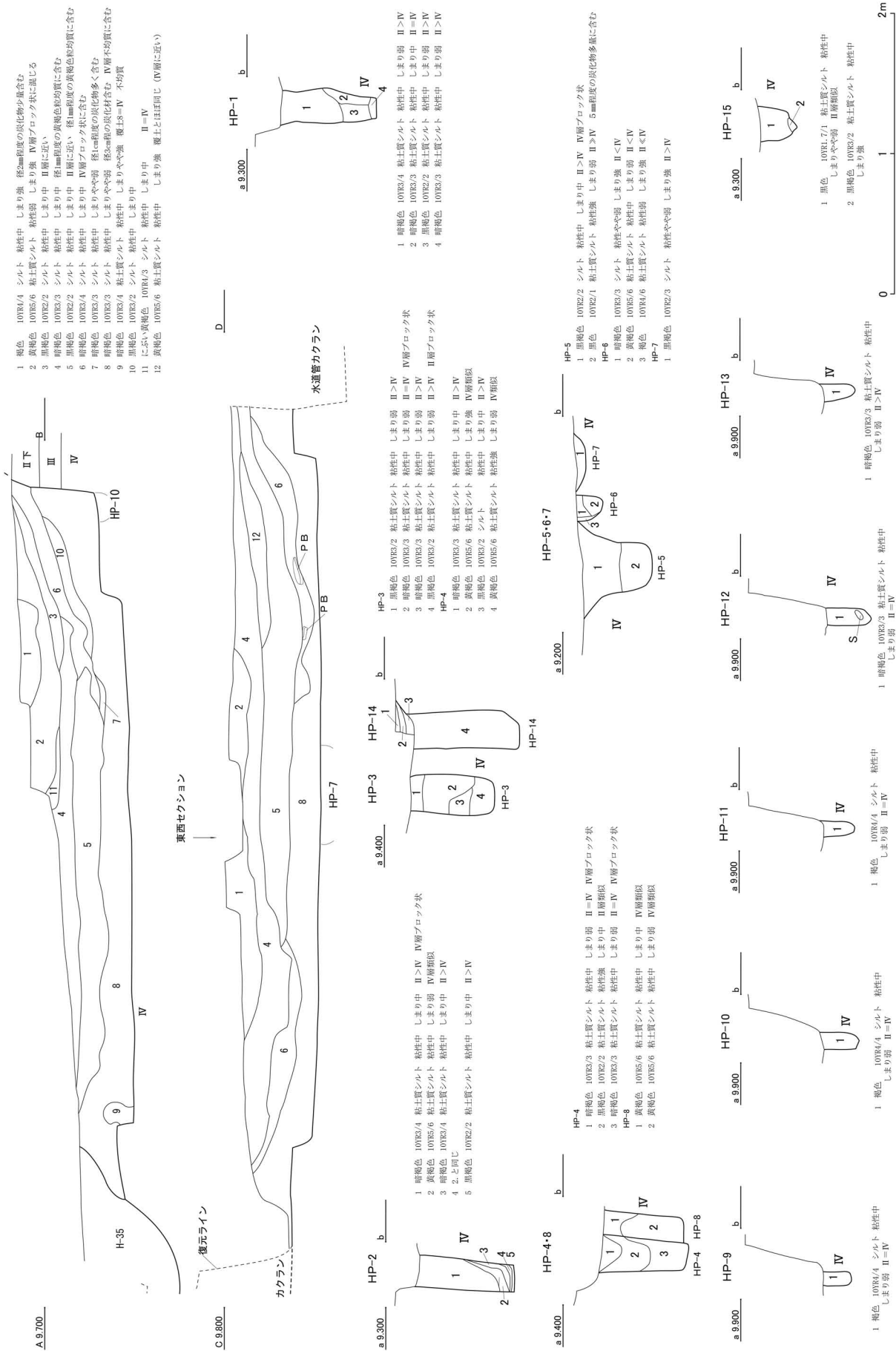
Ⅱ群B-4類土器(1・2・9～11・13・15～18)：1・10は口頸部文様帯下端が結節羽状縄文で区画され、体部に多軸絡条体の回転文が施されているもの。1は無文地のやや幅広の文様帯に2本一組の縄線文と矢羽状の縄線文が加えられている。10は文様帯に横環する縄線文が施されている。13は文様帯に縄線文が施された口頸部破片で、10と同一個体である。9・11は幅の狭い口縁部文様帯に縄線文が加えられているもの。9は体部に多条の斜行縄文、11は多軸絡条体の回転文が施されている。2は体部下半。単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されている。15～18は体部破片。15は頸部に貝殻条痕文、体部に多軸絡条体の回転文、16・17は単軸絡条体の回転文、18は多軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(14)：14は口唇・文様帯下端に半截竹管状工具内面の刺突が加えられ、無文地の文様帯には単軸絡条体の圧痕文が施されている。体部文様は不明である。

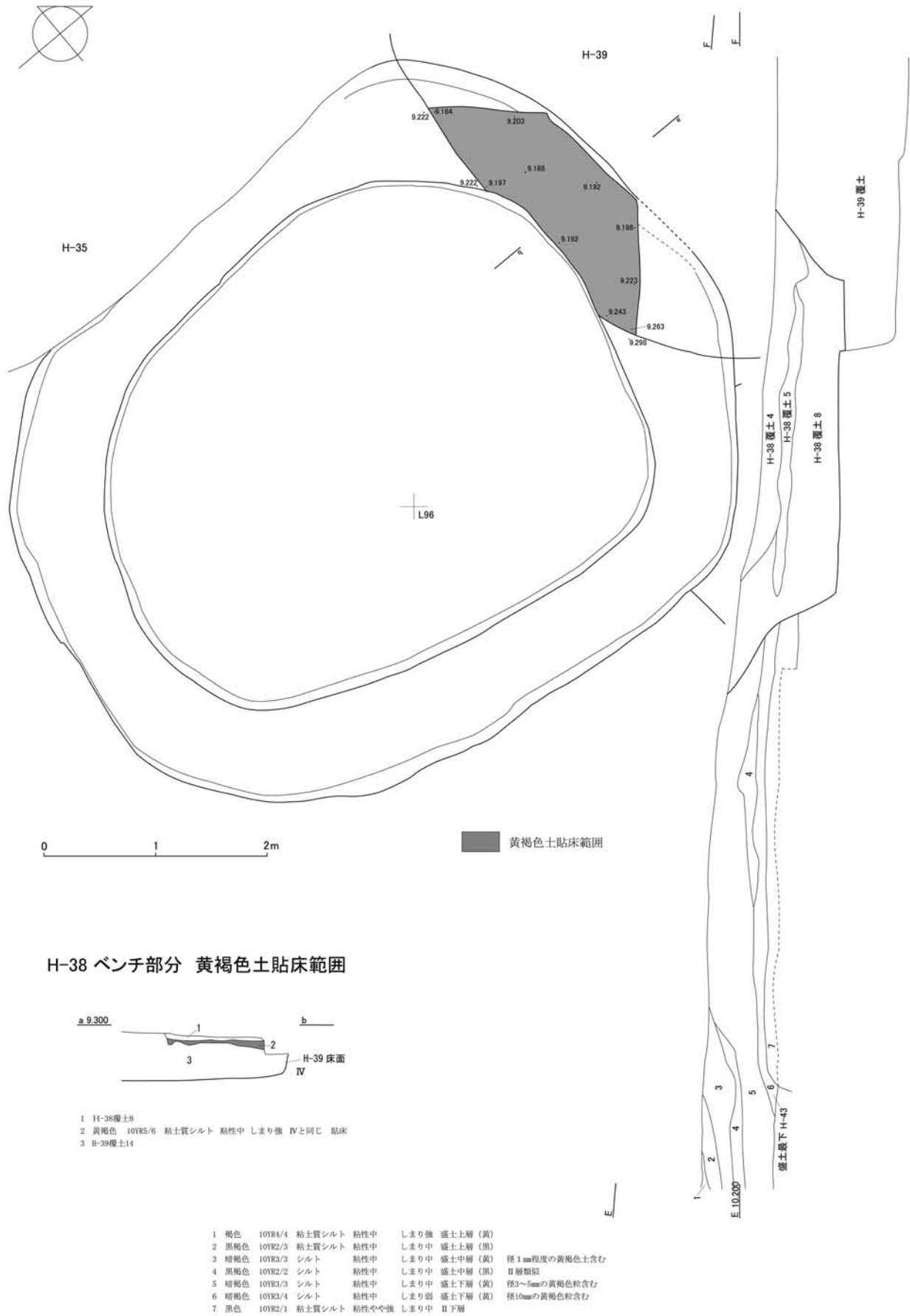
(石器) 23は床面、26は床面直上、19～22・24・25・27・28は覆土出土。19は石鏃。無茎平基。尖頭部を欠損している。黒曜石製。原産地分析の結果、赤井川産であることが報告されている(分析結果報告は「大平遺跡(3)」に掲載)。20はつまみ付ナイフ。縦型で片面全面加工。下端は切り出し状になっている。メノウ製。21～24はスクレイパー。縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。22・23は使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。25は石斧。短冊形で両刃。刃部は欠けている。打ち欠き整形後、全面を研磨によって調整している。緑色泥岩製。26はたたき石片。扁平礫の周縁に敲打痕がある。珪岩製。27は礫器。小型の楕円礫を打ち欠いて刃部を作出している。頁岩製。28は石



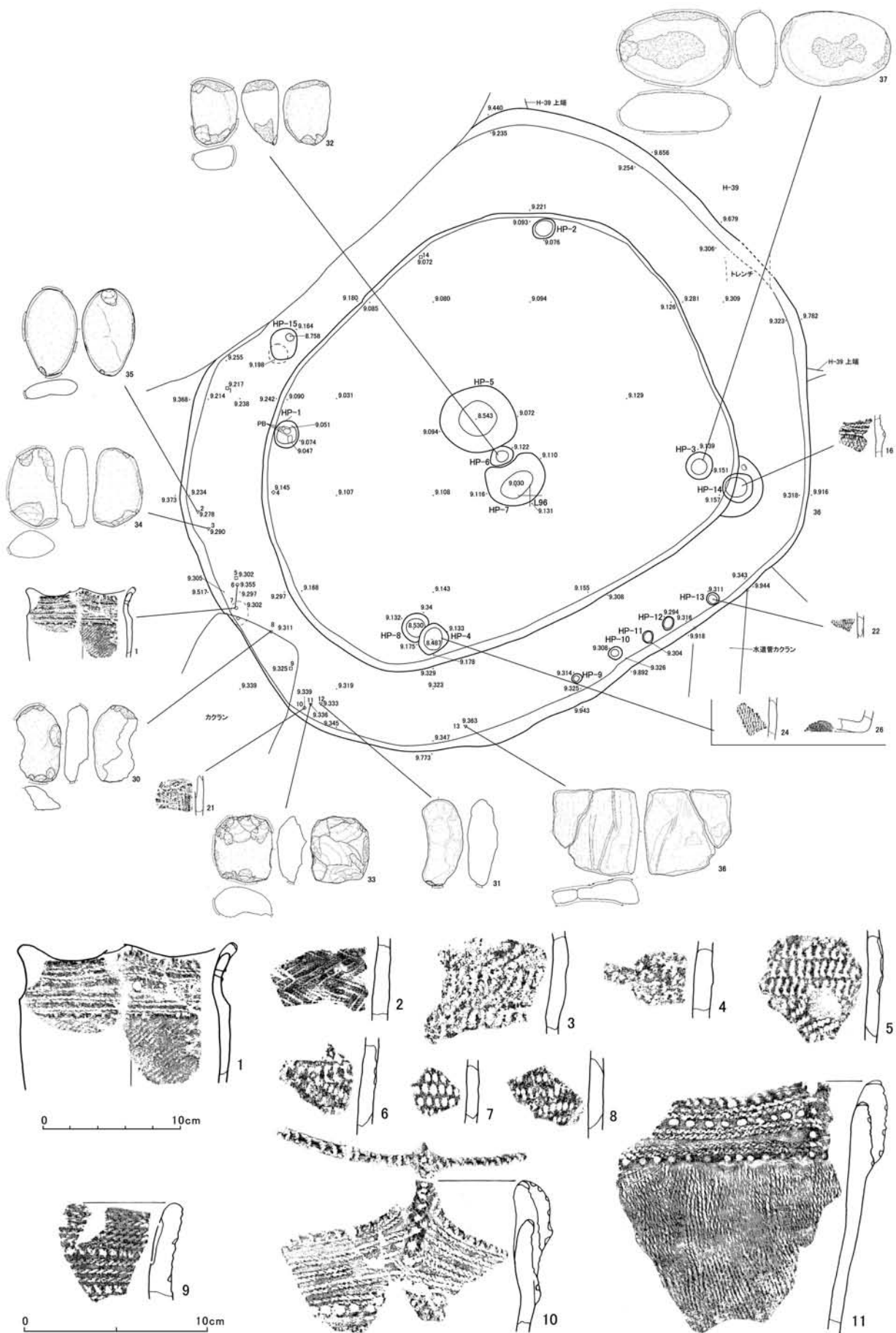
図IV-218 H-38



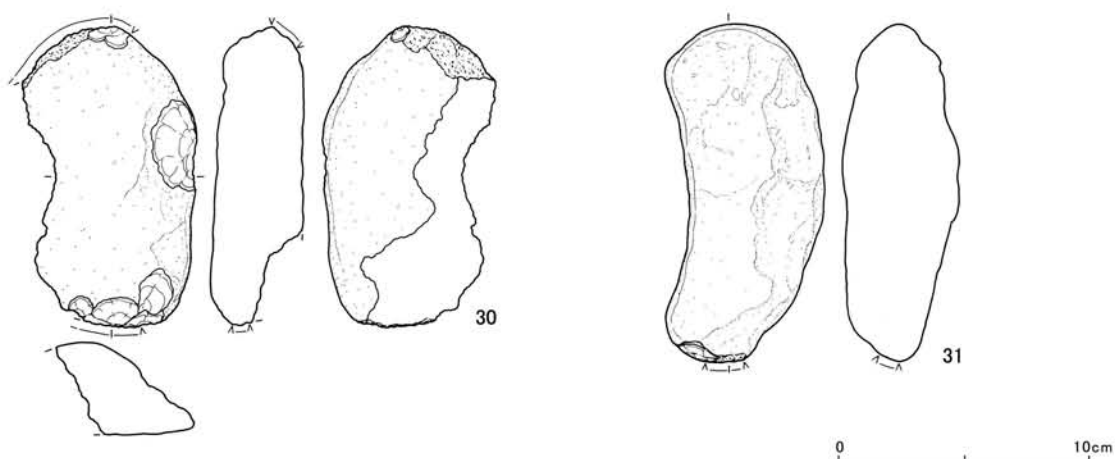
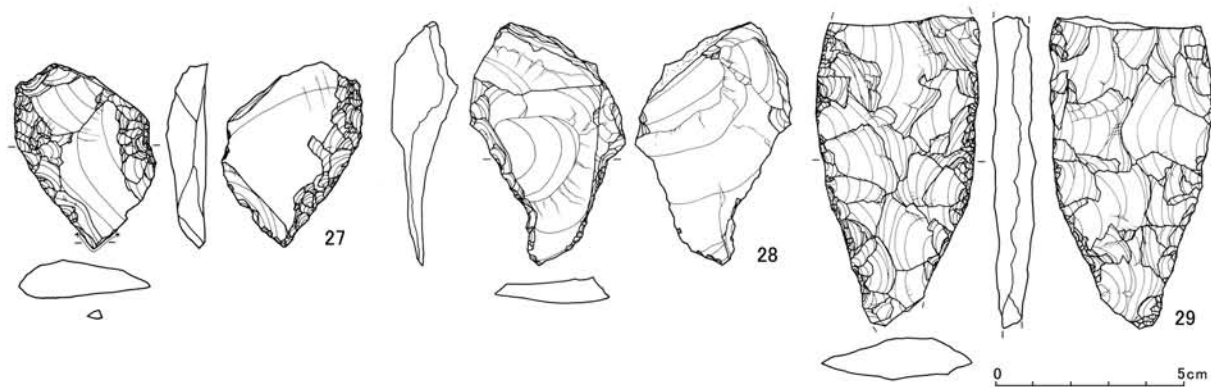
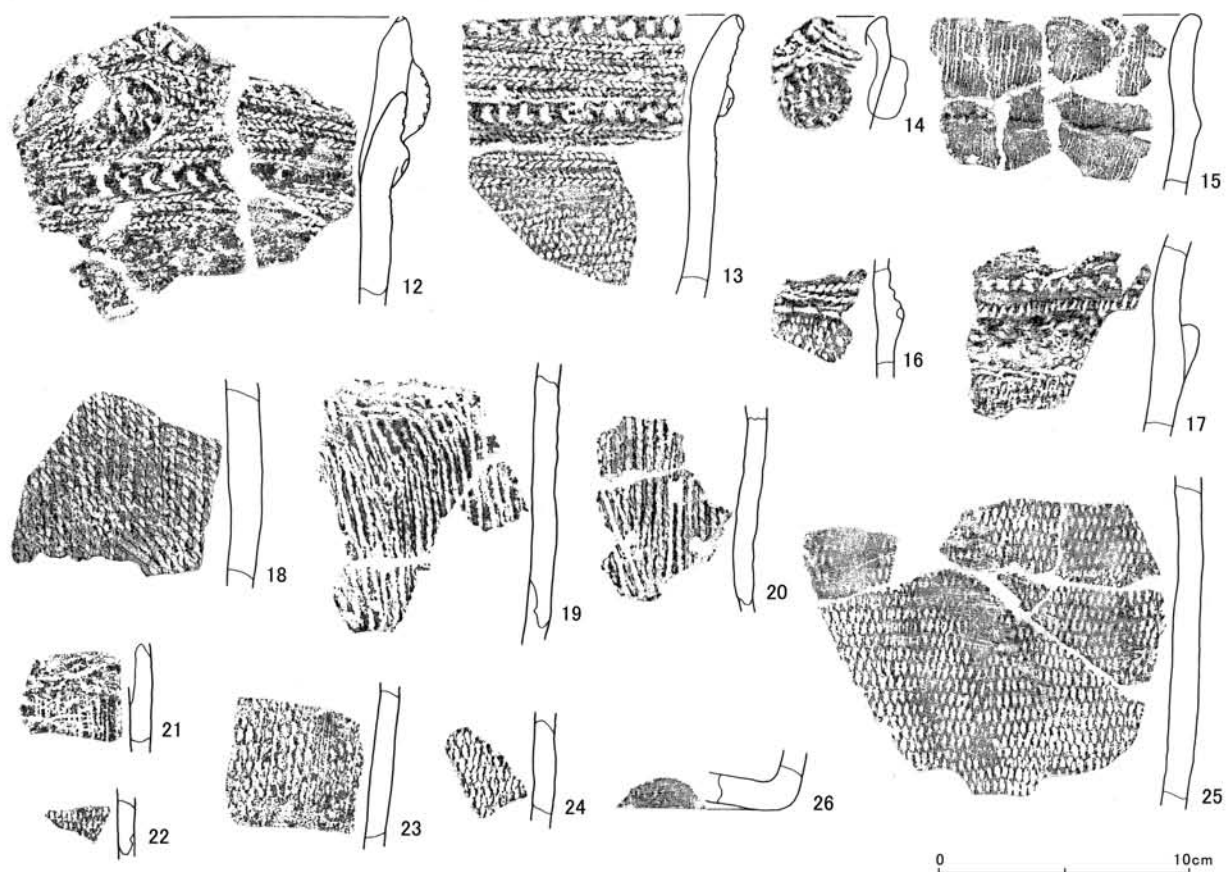
図IV-219 H-38 セクシヨン図



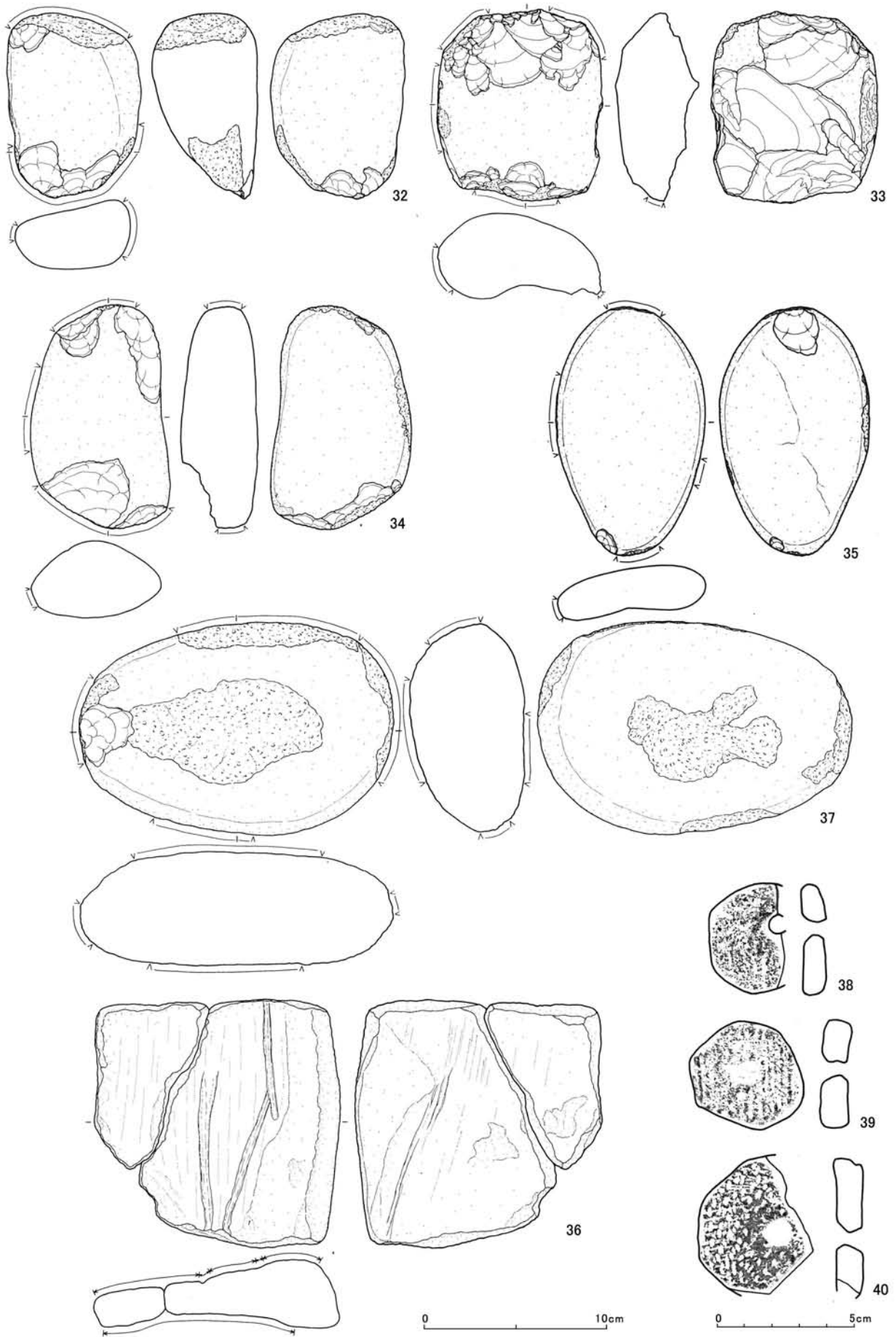
図IV-220 H-38 黄褐色土貼床範囲



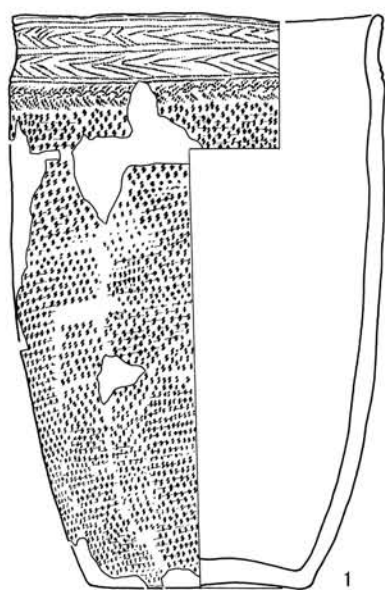
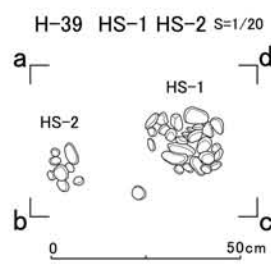
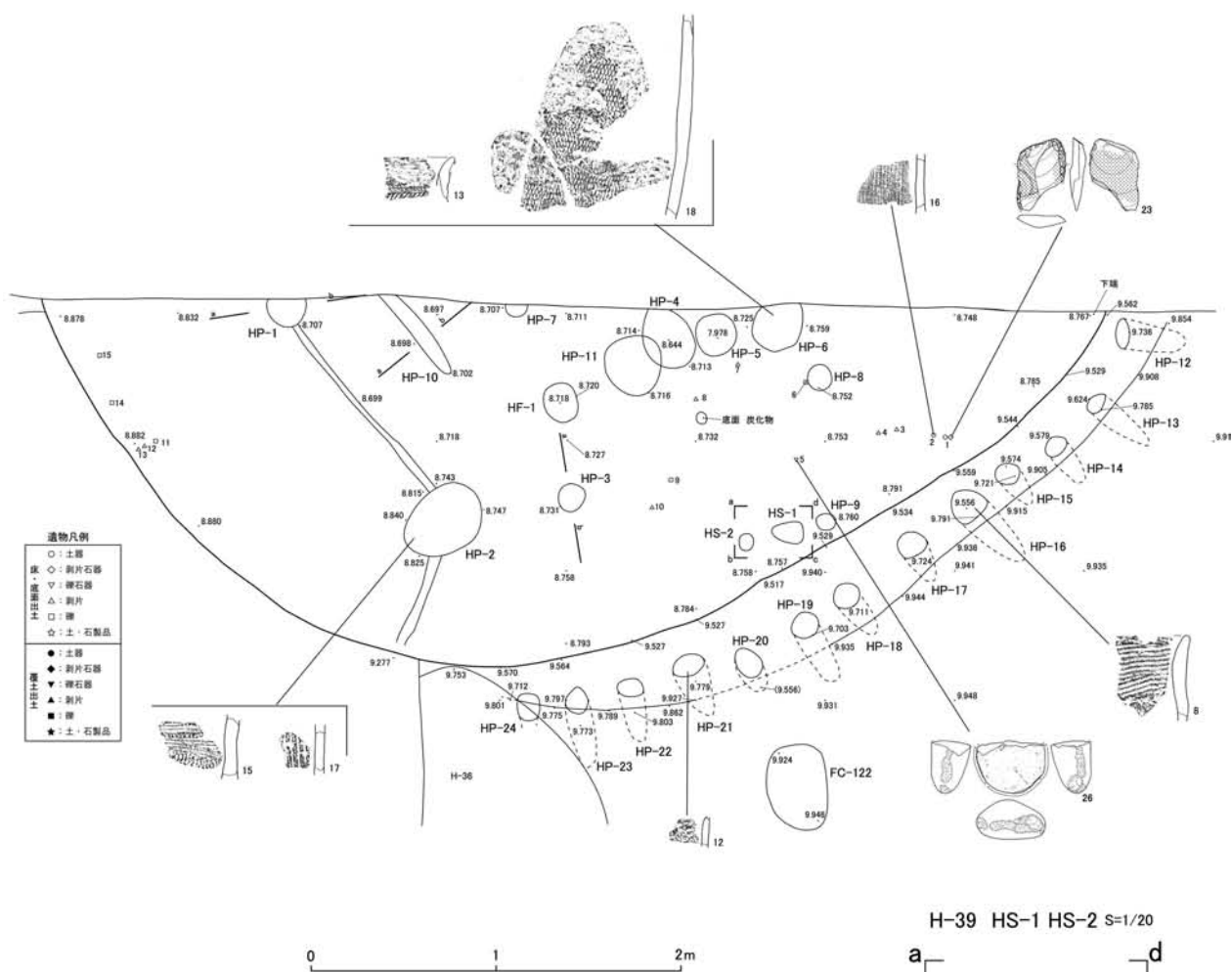
図IV-221 H-38 遺物出土状況図 土器 (1)



図IV-222 H-38 土器 (2)・石器 (1)

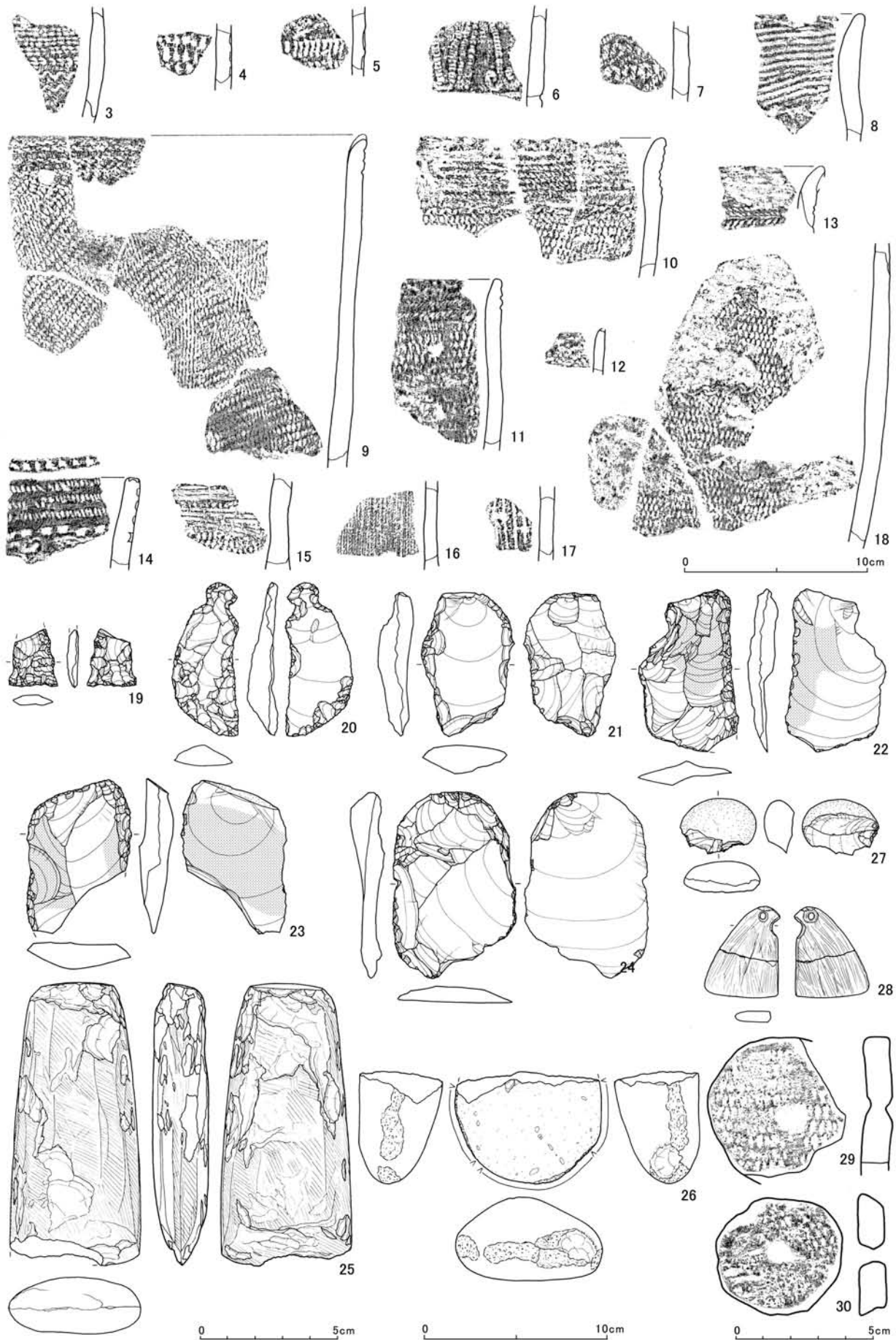


图IV-223 H-38 石器 (2) · 土製品



0 10cm

图IV-226 H-39 遺物出土狀況图 土器 (1)



图IV-227 H-39 土器 (2) 石器·土製品

製品。玦状耳飾りの破損品に穿孔して垂飾に再加工したもの。面の調整は粗く、筋状の研磨痕が多く残る。滑石製。岩石学的分析の結果、松前産であることが報告されている（分析結果報告は「大平遺跡（3）」に掲載）。29・30は有孔土製円板で、多軸絡条体の回転文が施されたⅡ群B-5類土器の土器片を素材として用いている。29は未成品。

H-41（図Ⅳ-228～237、図版33・41・124～127）

位置：N 1・2、O 2区

規模：5.60 / 5.25×3.84 / 3.66×0.49m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高10.0～10.4m前後の南から西へ傾斜する緩斜面に立地する。N・O 1～3区でⅡ・Ⅲ層を掘り下げたところ、Ⅳ層上面で広範囲にわたり大きな2か所の黒色土の落ち込みが接する状態で確認された。複数の遺構が切りあうことが予想されたため、西側N 1・2、O 2区の落ち込み、東側N・O 2・3区の落ち込みのそれぞれの長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、Ⅳ層上面から0.5m程の深さで床面と思われる平坦面と壁の立ち上がりを確認した。遺構は東側と西側に分けられ、西側は3軒の住居跡が切りあい、東側は1軒の住居跡である。土層断面より、新しいものから順にH-53>H-51>H-41>H-49となる。本住居跡はすべての住居跡と切りあっている。

覆土：住居跡はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土上位は盛土が主体で、炭化物、焼土が混じる。下位はⅡ層が主体で、Ⅳ層ローム粒が混じる。いずれも流れ込みによる自然堆積である。

平面形：隅丸の長方形を呈する。深さは、南側で0.20m程、北側で0.50m程である。床面は平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。住居跡の西側でH-49と切りあう。

付属遺構：土坑1基（HP-16）と柱穴15基を確認した。土坑は住居跡のほぼ中央に位置する。坑底は平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がり住居跡床面から10cmほど下がった位置から外反する。15基の柱穴は、太くて深いもの（HP-4・5・7～10）、太くて浅いもの（HP-1・2・14・15）、細くて深いもの（HP-6・13）、細くて浅いもの（HP-11・12）である。このうち支柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から、6本柱の住居と考えられる。ただし、北東隅からは柱穴は検出されなかった。また、HP-7～9を結ぶように周溝が確認された。周溝の深さは5cm程で、断面はU字型を呈する。HP-1の調査で、覆土下位に炭化物が混じること、坑底面に被熱がみられることから炉の可能性はある。

遺物出土状況：床面からⅡ群B-5類土器など27点、石器等36点、HFからⅡ群B類土器2点、HPからⅡ群B-5類土器176点、焼成粘土塊1点、石器等61点、覆土からⅡ群B-5類土器など4,133点、石器等2,317点が出土している。石製品は異形石器2点、軽石製石製品3点、玦状耳飾り1点が出土した。

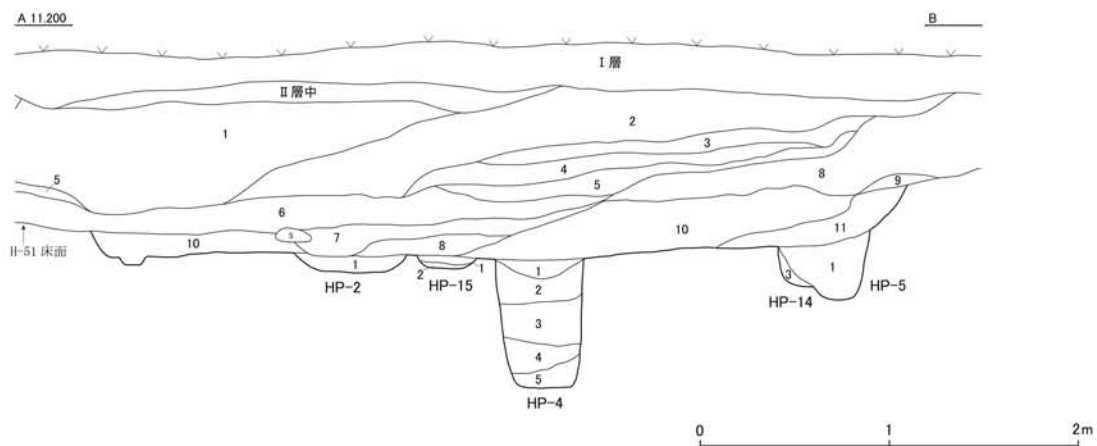
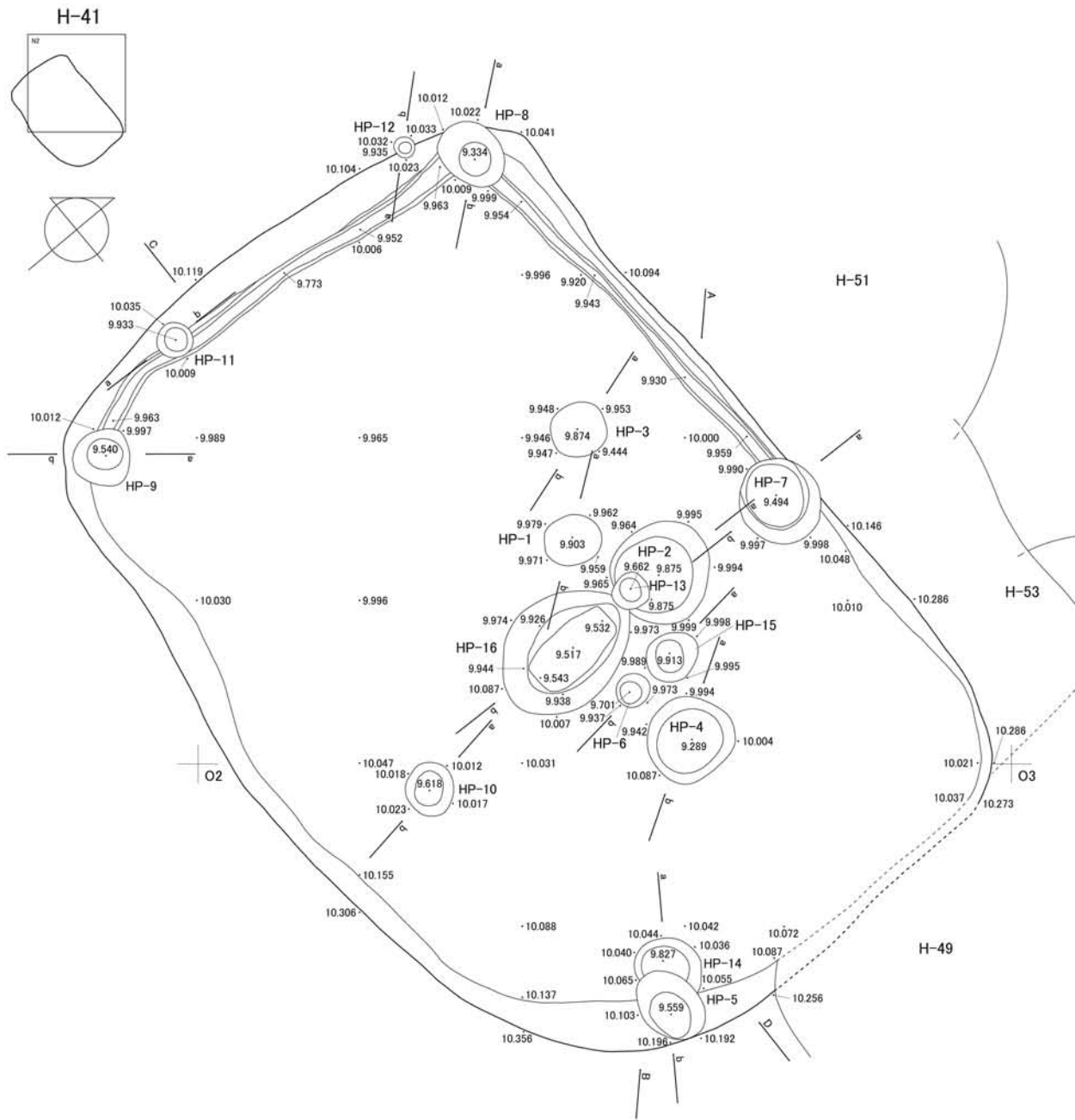
時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。（立川）

掲載遺物：（土器）13・23・29・35・38は床面、16～18・26・30・32・36・37は柱穴状ピット（HP）、他は覆土出土。覆土は大きく覆土下位と覆土中位・覆土に分けられ取り上げられている。

Ⅱ群A類土器（12）：12は縄端回転のループ状の文様が施された体部破片。

Ⅱ群B-3類土器（6～9・13～18）：6～9は底部。6・7は器面に単軸絡条体の回転文、9は斜行縄文が施されたもの。8・13・15は同一個体。13は複節の斜行縄文が施された口縁部破片。口頸部に縄線文が加えられている。15は体部破片、8は底部破片。14・16・17は直前段反燃による縄文が施されたもの。14は口頸部破片。文様帯下端は半截竹管状工具内面による刺突文で区画されている。16・17は体部破片。18は自縄自巻の原体ないし単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

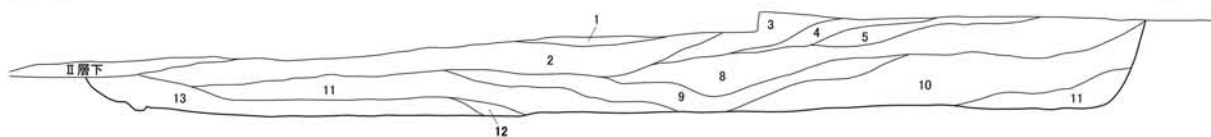
Ⅱ群B-4類土器（19）：19は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文を組み合わせで施文された体部



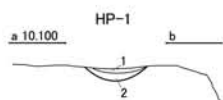
図IV-228 H-41

C 10.600

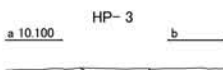
D



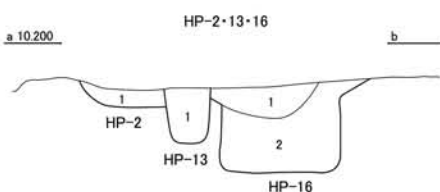
- 1 明褐色土 7.5YR5/6 粘性強 堅密度堅 IV層と同質 他遺構の覆り上げ土
- 2 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒20% φ5~10mm炭化物1%未満混じる
流れ込んだと思われる焼土が1%混じる
- 3 暗褐色土 7.5YR3/4 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒30% φ5~10mm炭化物2%混じる
焼土粒2%混じる
- 4 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20%混じる
- 5 暗褐色土 7.5YR3/4 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20% φ5mm炭化物2%混じる
- 6 褐色土 7.5YR4/6 粘性中 堅密度中
5YR4/6 赤褐色土(焼土)が40%混じる 地床がではない
- 7 黒色土 7.5YR1.7/1 粘性強 堅密度堅 II層に類似
φ1mmローム粒1%混じる
- 8 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒30% φ5~10mm炭化物1%混じる
流れ込んだと思われる焼土粒2%混じる
- 9 暗褐色土 7.5YR3/4 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒30% φ5~10mm炭化物2%混じる
- 10 暗褐色土 7.5YR3/4 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒30% φ5~10mm炭化物2%混じる
IV層に類似するが焼土粒はみられない
- 11 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20% φ20mmローム粒1%混じる
- 12 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度堅
- 13 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20% φ10mmローム粒1%未満
φ5mm炭化物1%混じる



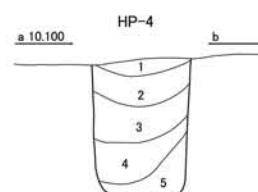
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
H-41覆土10層ないし13層に相当
 - 2 黒色土 7.5YR1.7/1 粘性中 堅密度中
φ2~5mm炭化物2%混じる
- ※P11底面は被熱して、2.5YR4/6 赤褐色を呈している。
本来、HP-1は浅い掘り込みをもつ地床の可能性がある。



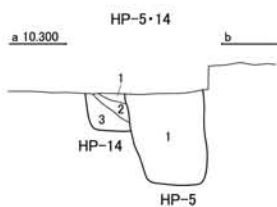
- 1 明褐色土 7.5YR5/8 粘性強 堅密度堅



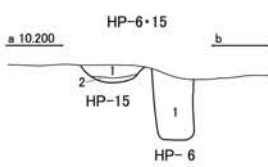
- HP-2
1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒10%
- HP-13
1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性強 堅密度中
- HP-1
φ1~2mmローム粒20%混じる
- 1 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度中
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度軟
φ10~20mmローム粒5%混じる



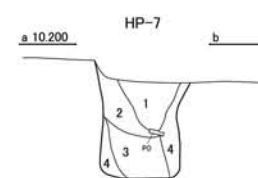
- 1 黒褐色土 7.5YR2/1 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20%
φ5~10mm炭化物1%未満混じる
- 2 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度中
φ10mmローム粒30%混じる
- 3 暗褐色土 7.5YR3/4 粘性中 堅密度軟
φ10~20mmローム粒10%混じる
- 4 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度軟
φ10~20mmローム粒20%混じる
- 5 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性強 堅密度中
I層に類似



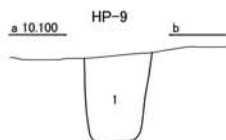
- HP-14
1 明褐色土 7.5YR5/8 粘性強 堅密度堅
IV層に類似
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度軟
HP-5:1層と同質
- 3 明褐色土 7.5YR5/8 粘性強 堅密度堅
IV層>1層
- HP-5
1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度軟
φ1~2mmローム粒10%
φ5mmローム粒1%未満
φ5mm炭化物1%未満混じる



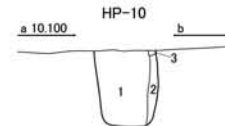
- HP-6
1 明褐色土 7.5YR5/8 (IV層ローム) φ20mm+I層
IV層主体 粘性中 しまり軟(ボロボロ)
- HP-15
1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 しまり中
φ1~2mmローム粒10% φ5mm炭化物1%未満
- 2 黒色土 7.5YR1.7/1 粘性中 しまり中
粉末炭化物とIIの混じった層



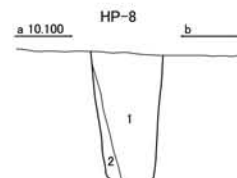
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 堅密度中
φ1mmローム粒20%混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ1mmローム粒10%混じる
1層と2層の層度(2層上部)にφ5mm炭化物1%未満混じる
- 3 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 堅密度中
φ1mmローム粒20%混じる I層に類似
- 4 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度軟



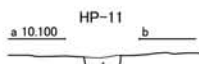
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 堅密度中
1~2mmローム粒20%混じる



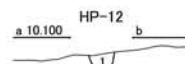
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度軟
φ1mmローム粒10%
上部にφ5mm炭化物1%未満混じる
- 2 黒色土 7.5YR1.7/1 粘性強 堅密度中 II層と同質
- 3 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度軟



- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性中 堅密度軟
- 2 黒色土 7.5YR1.7/1 II層と同様 粘性中 堅密度軟
I層に類似



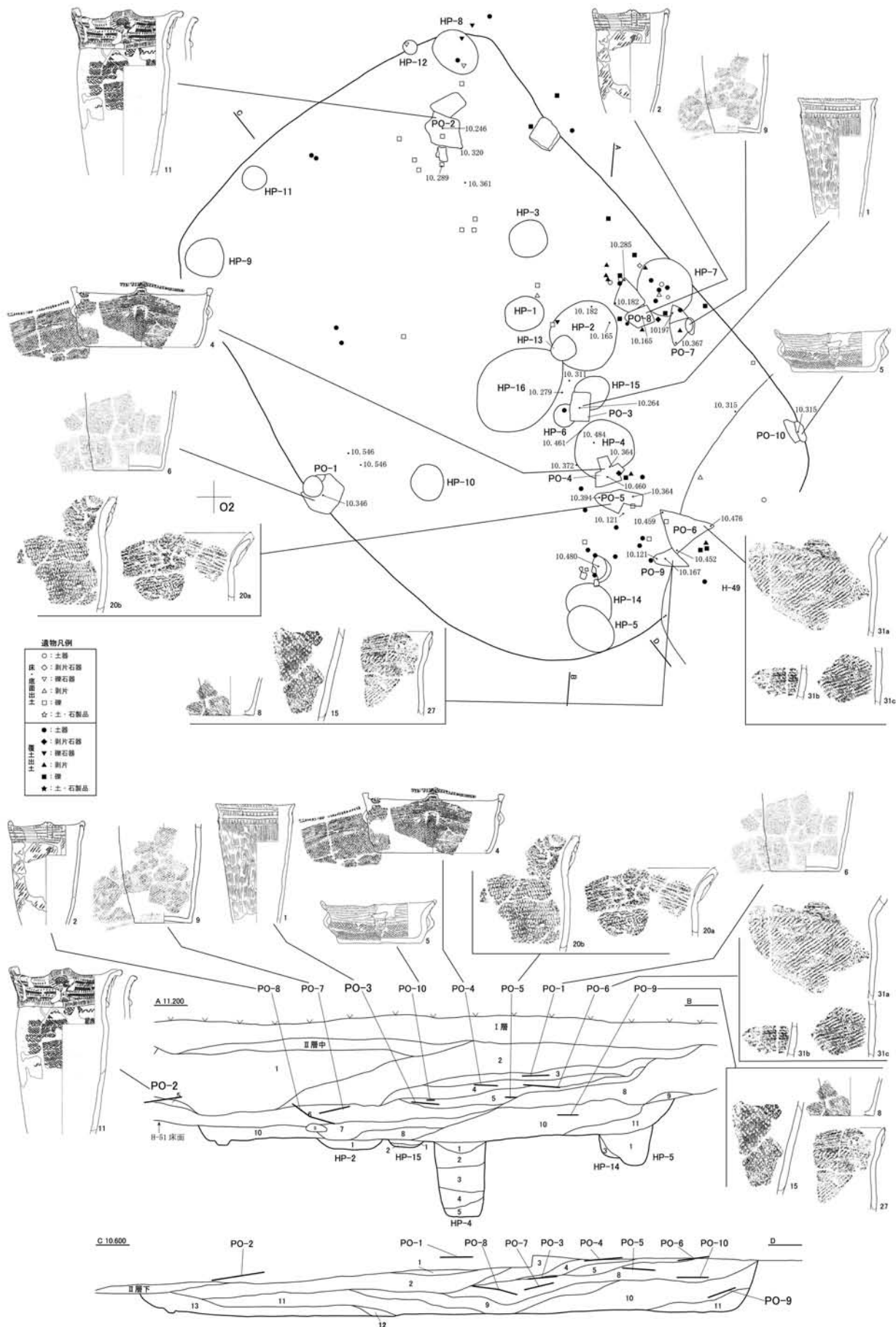
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性強 堅密度堅(木根?)



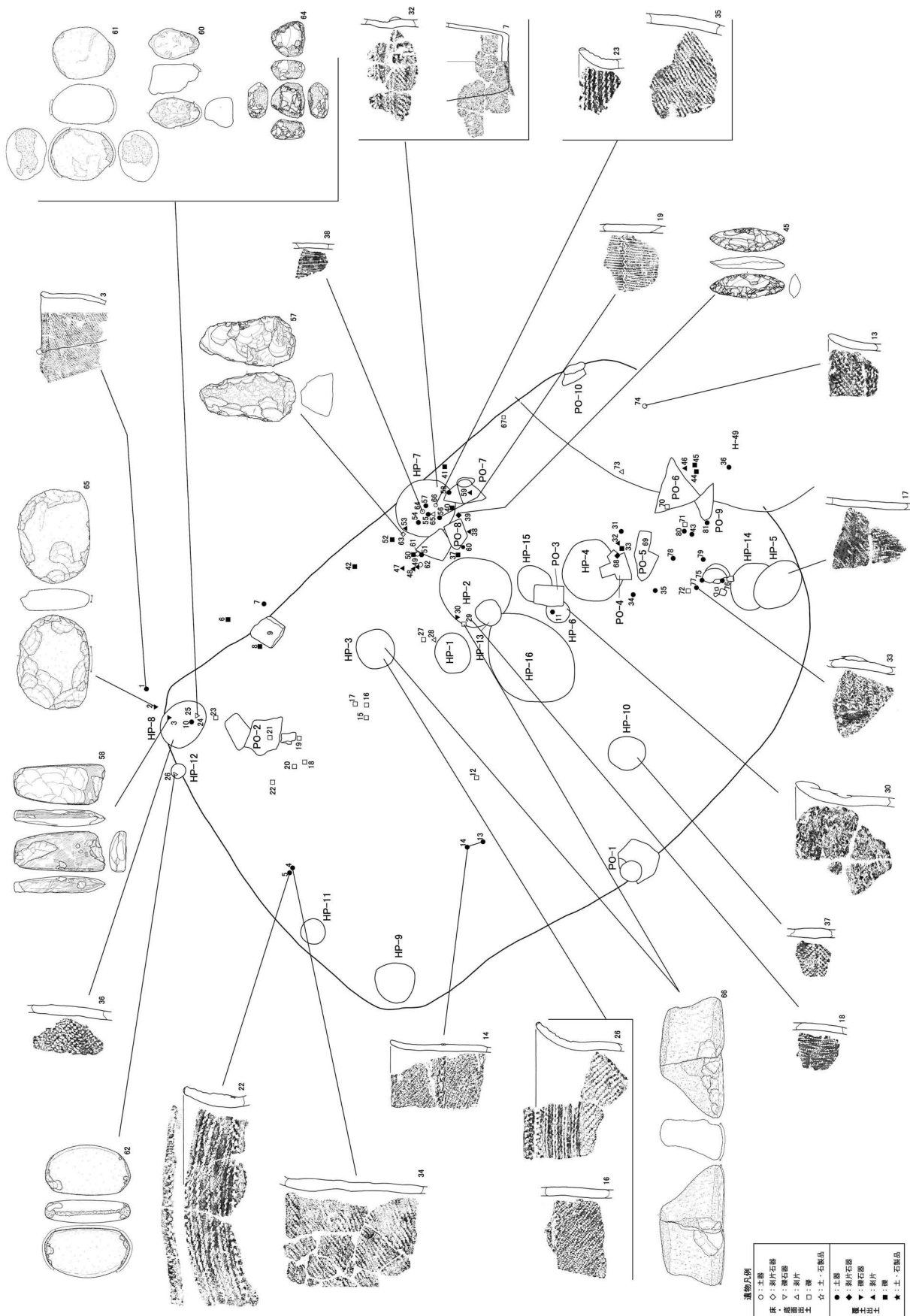
- 1 極暗褐色土 7.5YR2/3 粘性強 堅密度中



図IV-229 H-41 セクション図



图IV-230 H-41 遺物出土狀況图 (1)



図IV-231 H-41 遺物出土状況図 (2)

破片。

Ⅱ群B-5類土器（1～5・10・20～38）：1の体部は単軸絡条体の回転文である。平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は半截竹管状工具内面の刺突文が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯に縄線文と半截竹管状工具内面の刺突列が加えられている。2は口縁部が肥厚し、口縁部肥厚帯と肥厚帯直下に複数の文様帯をもつもの。底部を欠失する。波頂部に押捺が加えられた小さな突起をもつ口縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。肥厚帯及び肥厚帯直下には縄線文が施され、波頂部から垂下する縦位の縄線が加えられている。体部は斜行縄文である。3は小型土器。口唇に1か所の突起が作出されている。4・5は浅鉢形のもの。4の口縁は小突起をもつ波状口縁で、口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯に縄線文が施され、波頂部下位の文様帯中位から肩部分にかけて橋状の把手が加えられている。体部は斜行縄文である。5は口縁に2個一対の小突起をもつ波状口縁である。口唇に単軸絡条体の圧痕が加えられている。口頸部文様帯に単軸絡条体による圧痕文が山形ないし菱目状に施されている。波頂部下位の文様帯中位から肩部分にかけて橋状の把手が施されている。体部には結束の羽状縄文が施されている。10は台付土器の台部分。器面に斜行縄文が施されている。20～30は口縁部破片。20の口縁部は肥厚気味である。口縁部に波頂部をもち、波頂部下位には「U」字状と橋状の貼り付けが施されている。文様帯下端は綾絡文で区画され、文様帯に縄線文、体部に多軸絡条体の回転文が施されている。21～23は口頸部文様帯に縄線文、口唇に縄の圧痕が加えられたもの。21は2個一対の小突起からなる波頂部をもつ波状口縁である。口頸部文様帯下端は肩状の器形になる。文様帯に波頂部下位の口頸部文様帯中位に「十」字に縄の圧痕が加えられた長さ4cmほどの貼り付けが施された後、12条の縄線文が加えられている。体部は羽状縄文である。22は口頸部破片。口頸部文様帯下端は半截竹管状工具の刺突文で区画されている。23は無文地に縄線文が施された口縁部破片。24・25は口頸部文様帯・口唇に単軸絡条体の圧痕が加えられたもの。24は片流れの波頂部から文様帯中位にかけて単軸絡条体の圧痕が加えられた長さ5cmほどの貼り付けが加えられている。体部の縄文は菱目状を構成するものと考えられる。25の口頸部文様帯には刺突文と組み合わせられて施文されている。26～29は無文地の口頸部文様帯に2本一組の縄線文ないし組紐状の縄線文が施される。26は文様区画帯をもたないもの。体部は複節の斜行縄文である。27～29は口縁部が肥厚ないし張り出すもの。27の波頂部下位には2個一対の貼り瘤が加えられている。28は肥厚帯に2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面による刺突文が施され、肥厚帯直下には半截竹管状工具内面による刺突文と縄端によるループ文が認められる。29は2本一組の縄線文が3列施されている。30は口縁部が肥厚するもので、磨滅が著しく文様構成は不明である。31～33は頸部破片。31は口縁部が肥厚し、肥厚帯には縄線文が施され、肥厚帯直下にナデ調整が加えられている。体部は斜行縄文で縦位に綾絡文が加えられている。32の口頸部文様帯下端は肩状で、肩部分には貼瘤が加えられ、文様帯に組紐状の縄線文が施されている。33の文様帯には縦位の貼り付け文が施され、組紐状の縄線文と単軸絡条体の圧痕が交互に加えられている。34～36は体部破片。34・35は斜行縄文、36・37は羽状縄文が施されたもの。37の体部上半には複節の斜行縄文、下位は単節の斜行縄文が施されている。38は櫛歯状工具による条痕文が施されたもの。

Ⅲ群A類土器（11・39～41）：11は波状口縁で、波頂部は台形状である。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画され、波頂部直下に縄の圧痕が加えられたボタン状の貼り付けと口縁と文様区画帯を結ぶ貼付帯が施されている。無文地の文様帯に3本一組の縄線と刺突文が交互に施文され、体部に結節羽状縄文の斜行縄文が施されている。39・40は同一個体の波頂部分。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は縄の圧痕が加えられ

た貼付帯で区画され、波頂部から区画帯にかけて橋状の貼り付けが施されている。無文地の文様帯の上下を3本一組の縄線で縁取り、中に波状の縄線文が加えられている。41は平縁で、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯は上下を縄線文が加えられた波状の貼付帯によって区画され、垂下する2連の環状の貼付帯が施されている。無文地の文様帯に3本一組の縄線文が加えられ、体部に結束羽状縄文が施されている。

(小括) 床面・HP及び覆土下位からⅡ群B-3類土器～Ⅱ群B-5類土器、覆土中位からはⅡ群B-5類土器～Ⅲ群A類土器が出土している。Ⅲ群A類土器は古段階のもの(39～41)と新段階のもの(11)が出土している。

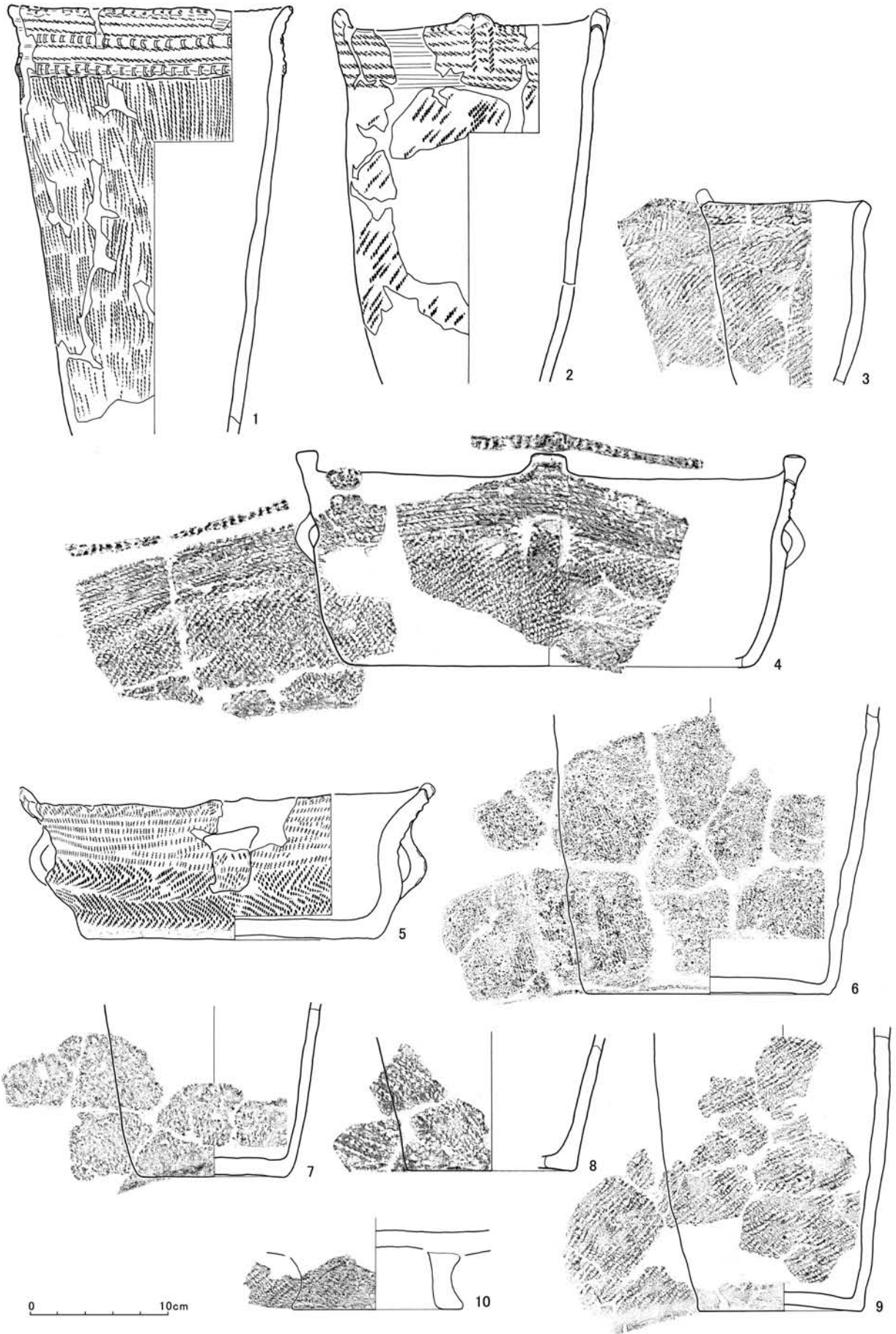
(石器) 57・60～62・64は床面、48・50・51・55・56・58・65・67～70は覆土中層、45・52・53・66aは覆土下層、42～44・46・47は覆土、54・63・66bはHP-3覆土、59はHP-8覆土、49はHP-11覆土出土。42～44は石鏃。42・43は有茎凸基。頁岩製。44は尖基で菱形。黒曜石製。原産地分析で赤井川産であることが報告されている(分析結果報告は「大平遺跡(3)」に掲載)。45・46は石槍・ナイフ類。有茎で柳葉形、両面加工である。頁岩製。47は石錐。剝片の一部に機能部を作出したもので、つまみ部がある。頁岩製。48はつまみ付ナイフ。縦型で片面周縁加工。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。49～55はスクレイパー。49・50はへら状石器。両面加工で下端部に急角度の刃部を作出している。51・52は縦長剝片の側縁から下端まで刃部を作出しているもの。53・54は縦長剝片の側縁に刃部を作出したもの。55は横長剝片の側縁に刃部を作出したもの。52～55には使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。56・57は両面調整石器。いずれも頁岩製。58は石斧。短冊形で両刃、刃部は欠けている。全面を研磨で調整している。被熱がみられる。緑色泥岩製。59～64はたたき石。59は棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。珪岩製。60は亜角礫の端部に敲打痕のあるもの。珪岩製。61は亜円礫の両端部に広い面状の敲打痕のあるもの。珪岩製。62は扁平な楕円礫の両端部に面状の敲打痕と側縁に敲打痕のあるもの。すり石の未成品の可能性もある。砂岩製。63は扁平な隅丸長方形礫の平坦面と側縁の一部に敲打痕があるもの。裏側平坦面に非常に細かい線刻がみられ、被熱痕が確認できる。凝灰岩製。64は打ち欠いて亜円形に整形した扁平礫の周縁に面状の敲打痕があるもの。頁岩製。65・66はすり石。65は扁平打製石器。扁平な楕円礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出したもの。砂岩製。66は北海道式石冠。aとbが接合する。aは再加工して使用されている。もとのものは全面を敲打によって整形し、握部を作出している。握部の上端は平坦である。66bが折損した状況のものとみられる。66bによると破損前のすり面は平坦である。破損後、66aは破損面を打ち欠きや敲打により再加工して、北海道式石冠として利用している。すり面は短軸方向に外彎し、傾いている。砂岩製。67～70は石製品。67・68は異形石器。67は左右対称でつまみ状の突起部があり、下半が二又になっているもの。黒曜石製。原産地分析で赤井川産であるとの結果が報告されている(分析結果報告は「大平遺跡(3)」に掲載)。68は左右対称で縦長剝片の側縁に抉りがあるもの。頁岩製。69は玦状耳飾りの破片。すり切り痕が残る。面の調整が粗く、筋状の研磨痕が多数みられる。滑石製。岩石学的分析で松前産であると報告されている(分析結果報告は「大平遺跡(3)」に掲載)。70は軽石製石製品。すり石とみられ、平坦で平滑なすり面が作出されている。71は有孔土製円板。Ⅱ群B-5類土器片を素材としている。

H-42 (図IV-238、図版34・127)

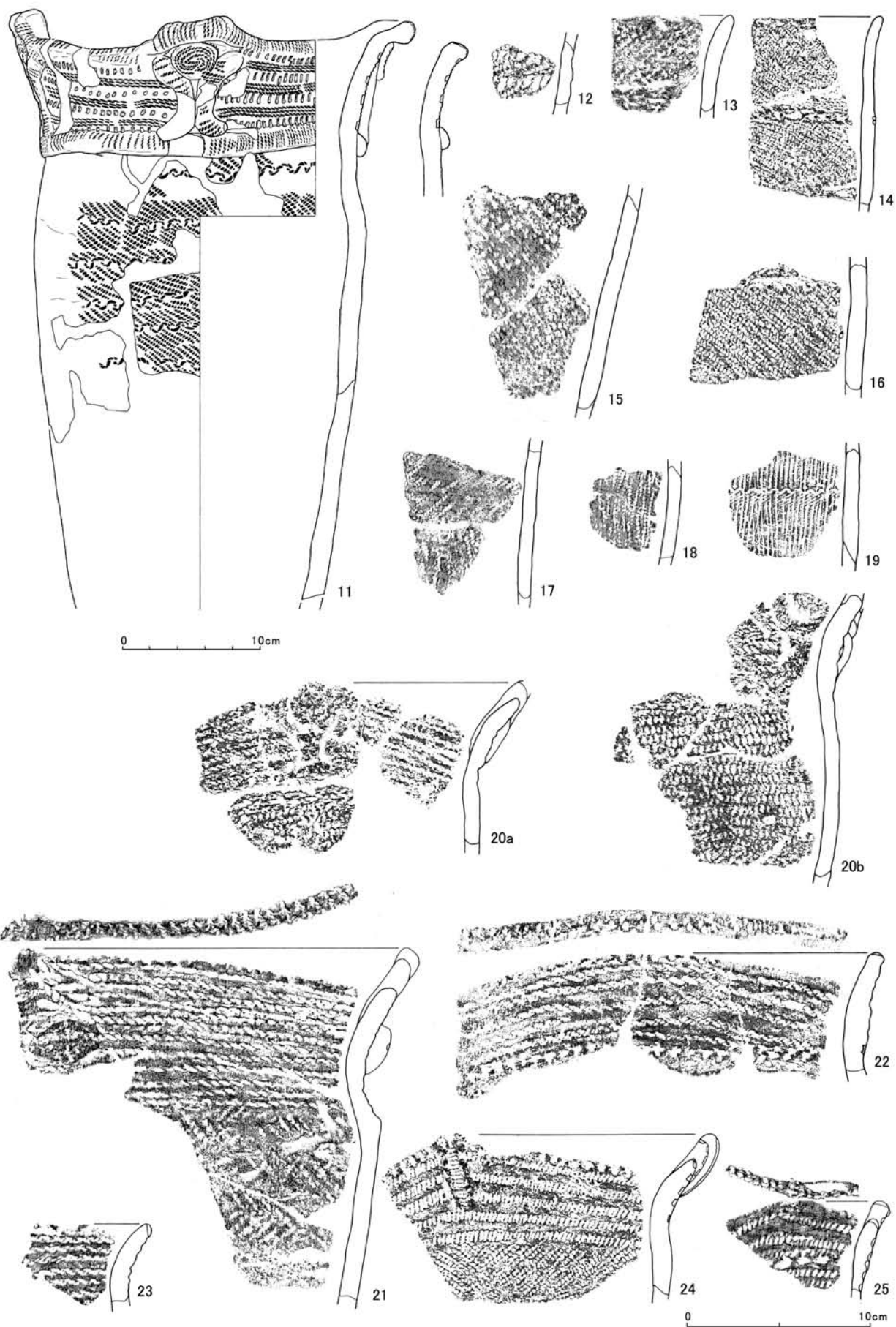
位置：K92・93区

規模：3.92 / 1.09×3.77 / (0.97) ×0.21m

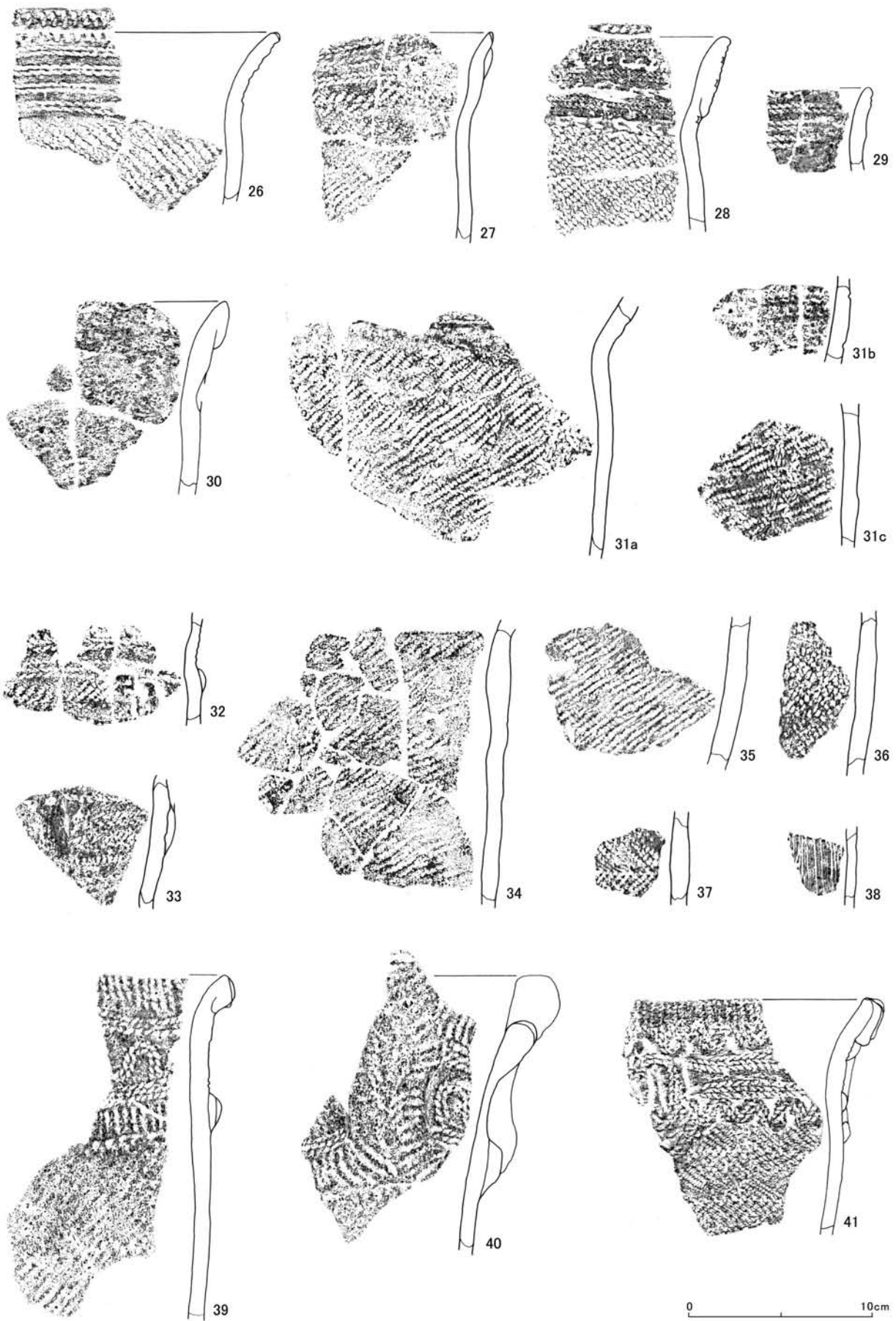
確認・調査：H-22の覆土を掘り下げた段階で、灰黄褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心か



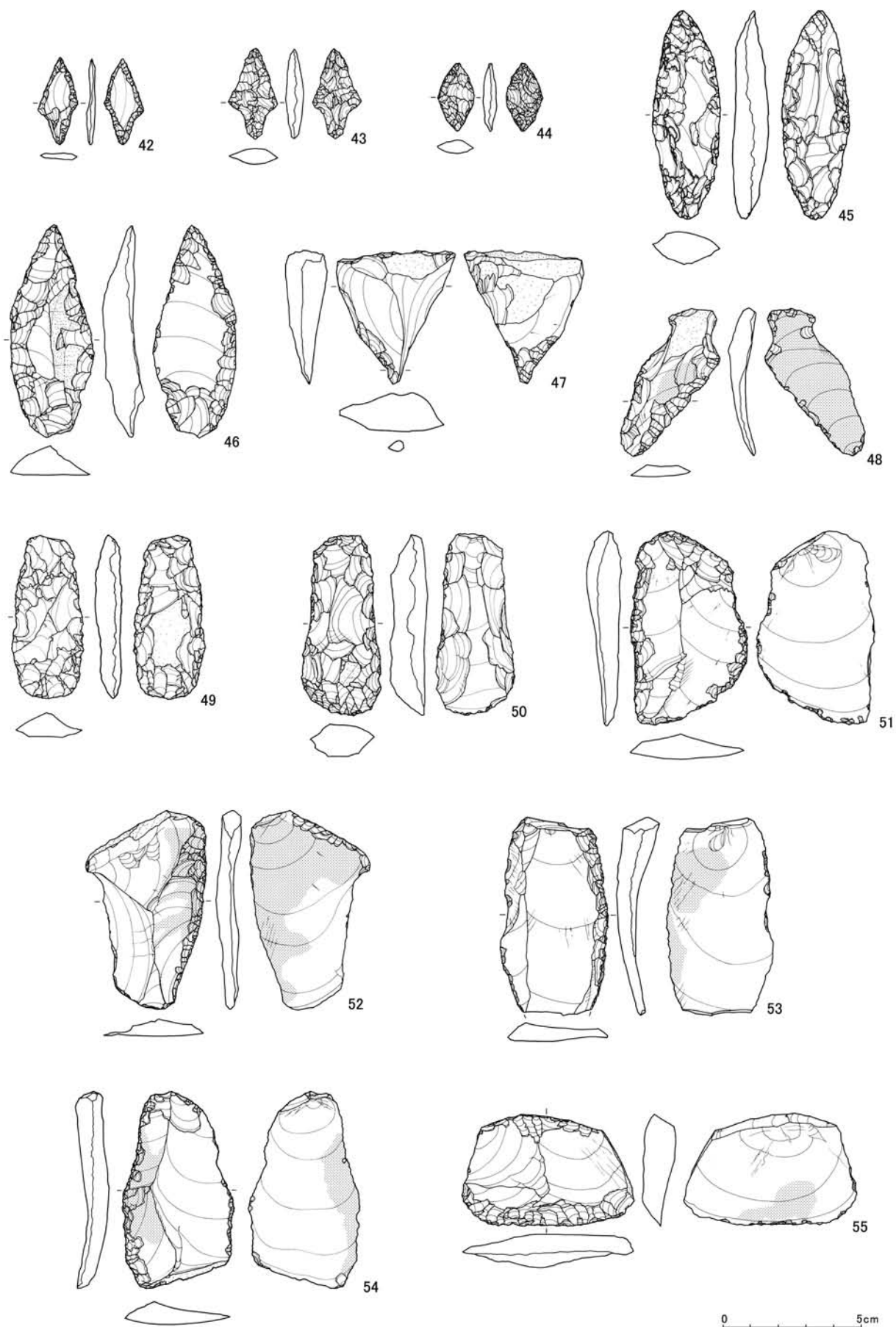
图IV-232 H-41 土器 (1)



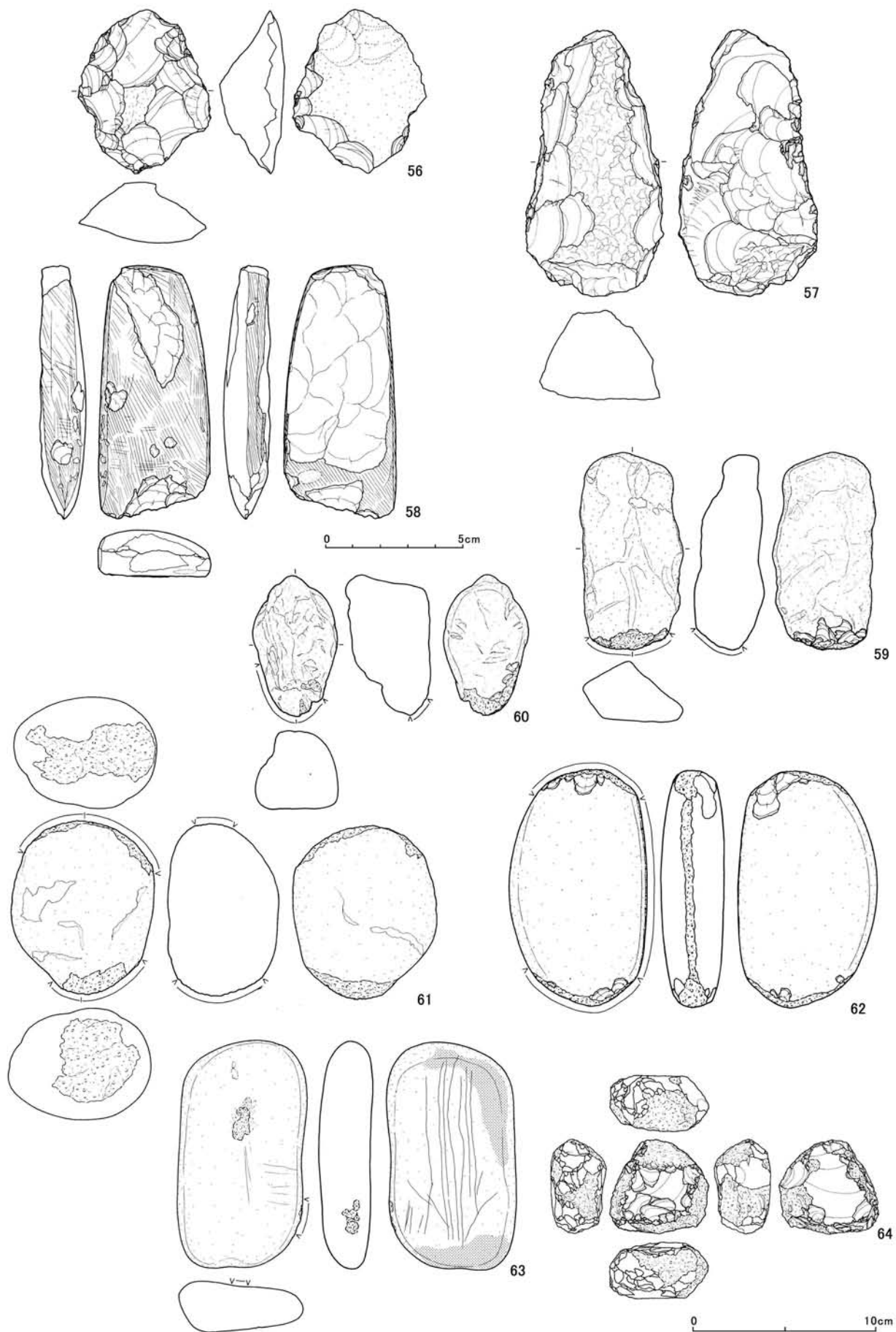
图IV-233 H-41 土器 (2)



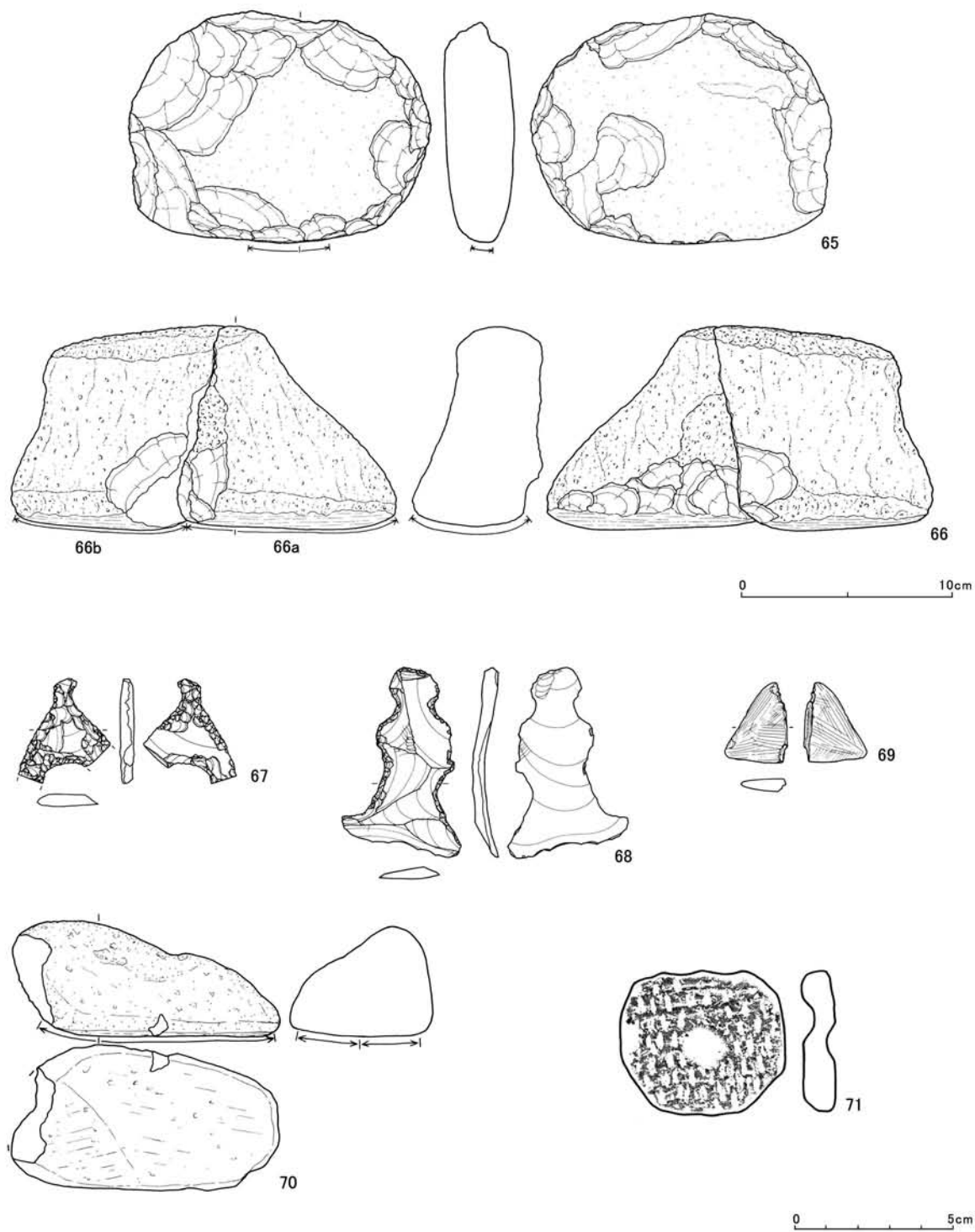
图IV-234 H-41 土器 (3)



图IV-235 H-41 石器 (1)



图IV-236 H-41 石器 (2)



图IV-237 H-41 石器(3)·土製品

ら直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

平面形：全体の約四分の三が調査区外にあるため、平面形は不明である。床はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。壁はH-22構築時に、南西側の床はP-31構築時に壊されている。

付属遺構：東側と西側の壁際で2基の柱穴が確認された（HP-1・4）。

遺物出土状況：HPから土器2点、石器等5点、覆土からⅡ群B類土器など28点、石器等97点が出土している。石製品は軽石製石製品が1点出土している。

時期：周辺の遺構の時期や出土したⅡ群B類土器から、縄文時代前期後半と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：（土器）いずれも覆土出土。3はⅡ群B-3類土器。単軸絡条体の回転文が施された体部破片。1・2・4はⅡ群B-5類土器。1は小型土器で、器面には2本一組の縄線文と竹管状工具による円形刺突文が施されている。橋状把手の可能性もある。2は肥厚する口頸部破片。無文地の文様帯に縄線文、肥厚帯下端に縄端の押捺が加えられ、体部に多軸絡条体の回転文が施されている。4は底部破片。上げ底で、器面には斜行縄文が施されている。胎土には砂粒を多量含み、脆弱である。

（石器）5～7は覆土出土。5は石錐。T字状のもの。右側にも短い棒状の機能部がある。左側が欠損しており、X字状の異形石器の破片の可能性もある。頁岩製。6はたたき石。棒状礫の両端部に敲打面のあるもの。珪岩製。7は軽石製石製品。北海道式石冠を模した軽石製模造品。つまみ状の握部を作出し、沈線で表現している。すり面は平坦で平滑にされている。

H-43（図IV-239～268、図版35・36・127～137）

位置：L・M95・96区

規模：5.62 / 4.88×5.25 / 4.64×0.62m

確認・調査：I層を除去した段階で、褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。覆土下位・炉跡の土壌を採取してフローテーションを行った。その結果、クリ炭化果実が多量に検出された。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

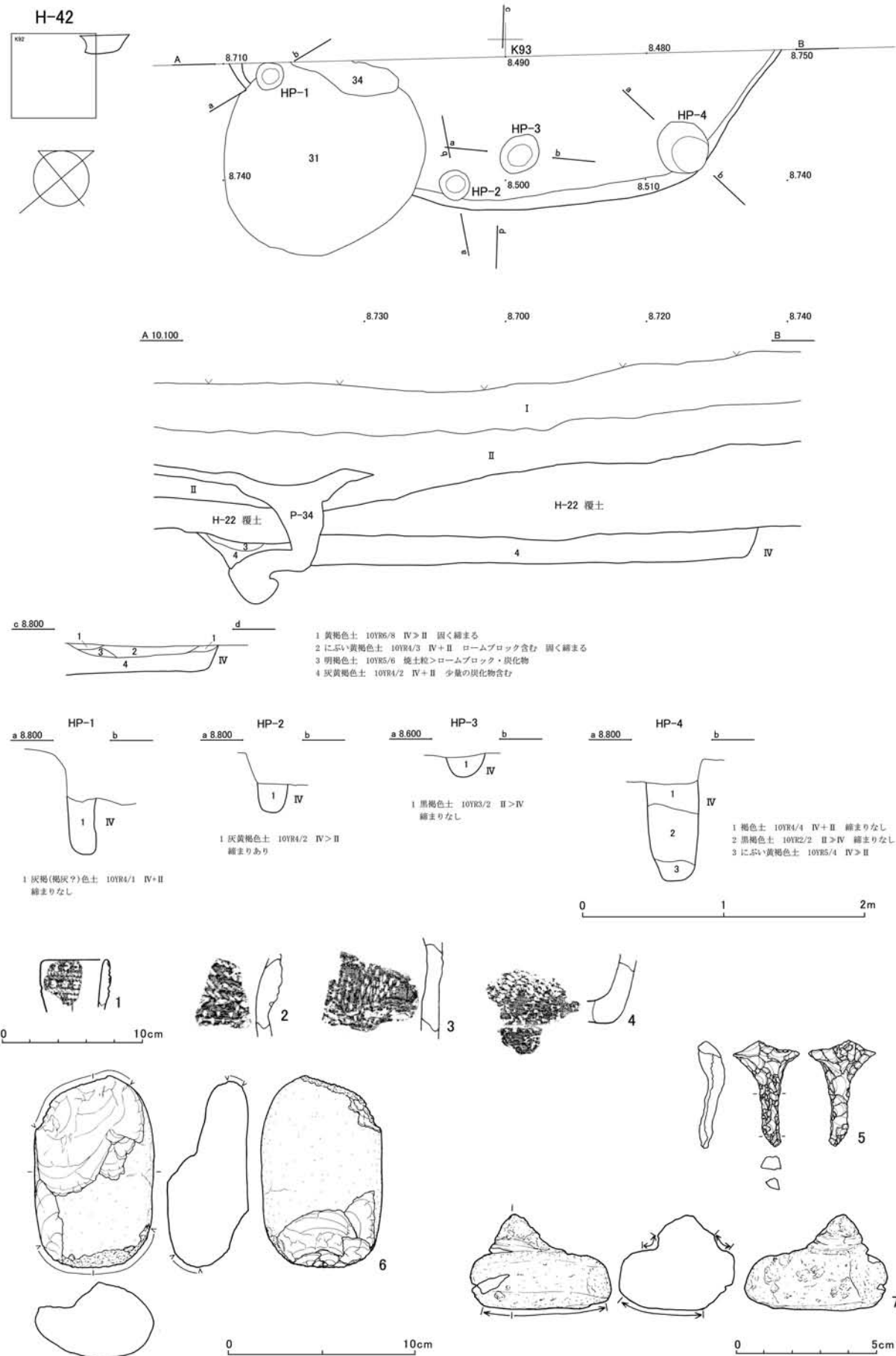
平面形：五角形に近い円形で、床はやや凹凸がある。南側の一部はベンチ状に張り出す。壁は急角度で立ち上がる。主柱穴と重複あるいは隣接して柱穴がみられることから、建て替えや修復された可能性が高い。

付属遺構：主柱穴は4本検出された（HP-4・5・6・7）。竪穴の外で6本の柱穴が検出され、いずれも竪穴の中央部に向かい傾斜している。この他に、P-35の西側壁面にも、2本の柱穴（HP-21・22）が確認された。溝は西と東側の壁際の床面で確認された。炉跡は床面中央部からやや南側で検出された。ほぼ長方形の浅い掘り込みを持ち、中央部が窪む。検出面から多量の炭化物が検出された。砂が充填された小ピットが、炉跡内の西側で2基（HP-18・19）並んで確認された。

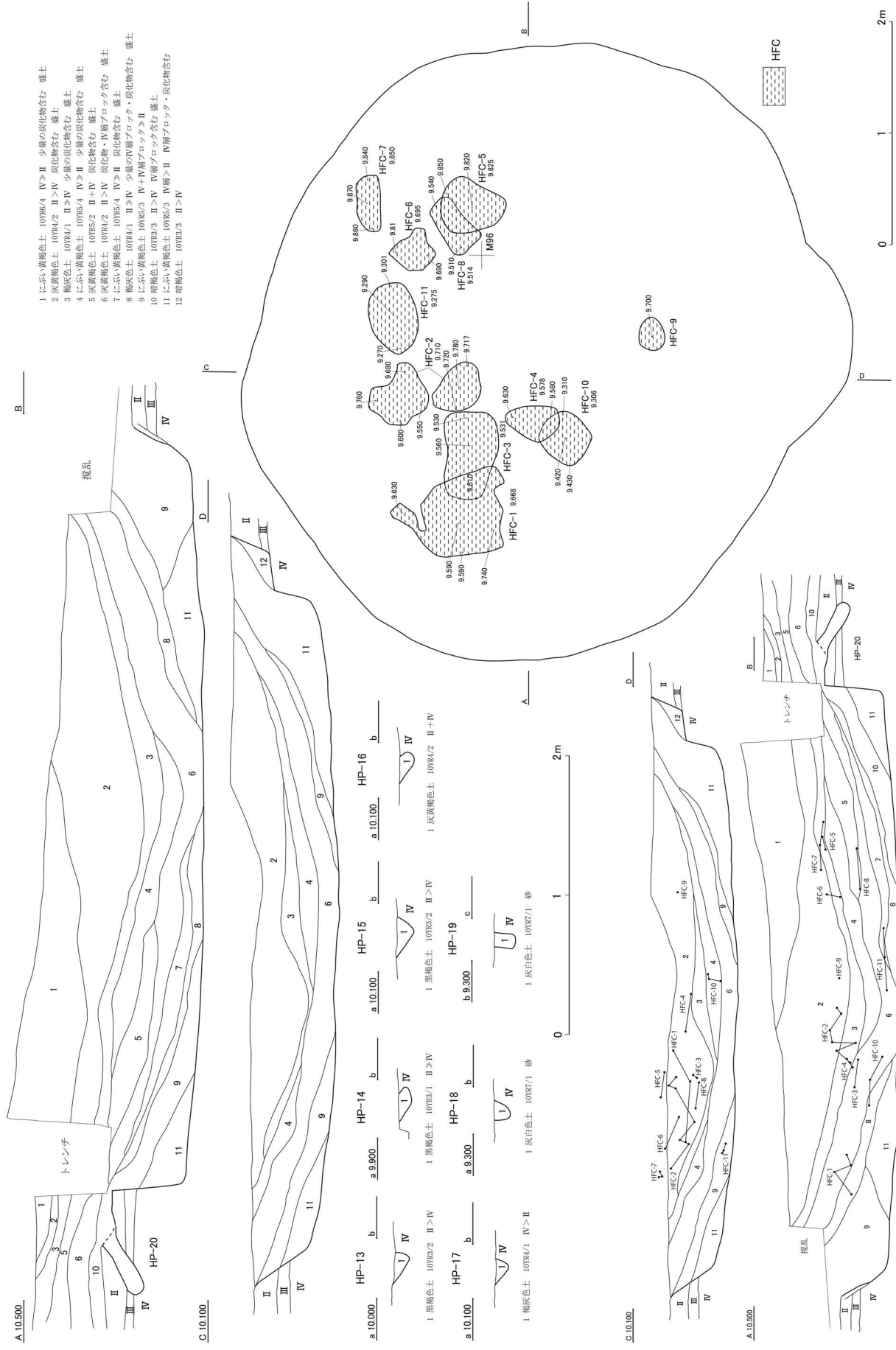
遺物出土状況：中央部より南側の床面直上から覆土にかけて、土器が潰れた状態で出土した。個体数は61個体になる。剥片集中（HFC）が11か所、北側の床面（HFC-1・2・6）・覆土（HFC-3～5・7～11）から検出し、多数の接合資料が得られた。床面からⅡ群B-2類土器6点、石器等69点、HFCから土器37点、石器等55,274点、HPから土器13点、石器等57点、覆土からⅡ群B-3類土器など19,797点、石器等3,140点が出土した。石製品は線刻礫1点、その他1点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。（佐藤）

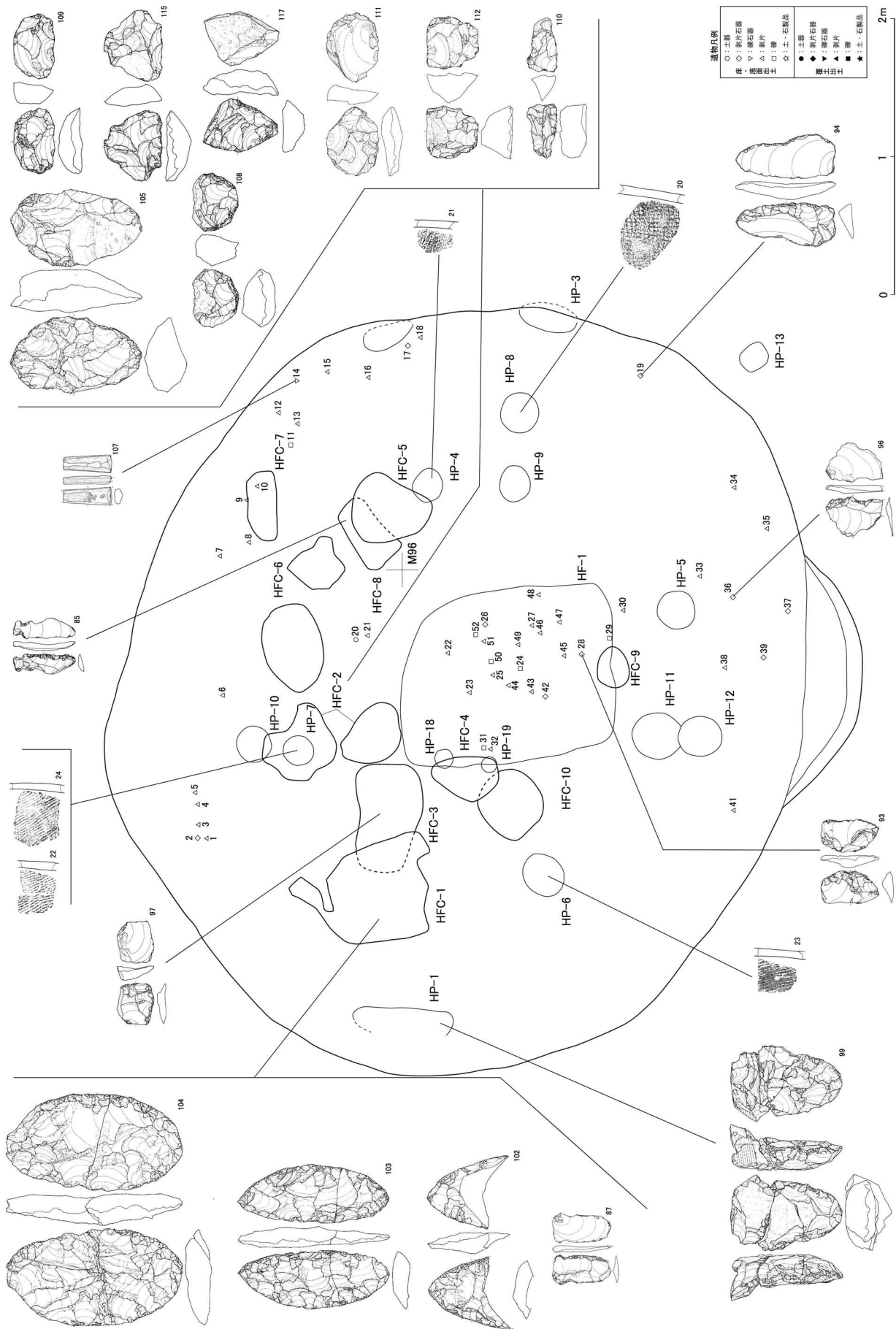
掲載遺物：（土器）H-43の調査中に検出面から器形・文様構成の判る土器が出土層位を異にして折重なるような出土状況を示すことが判った。現地でその出土状況から、大きく盛土層と覆土に大別、



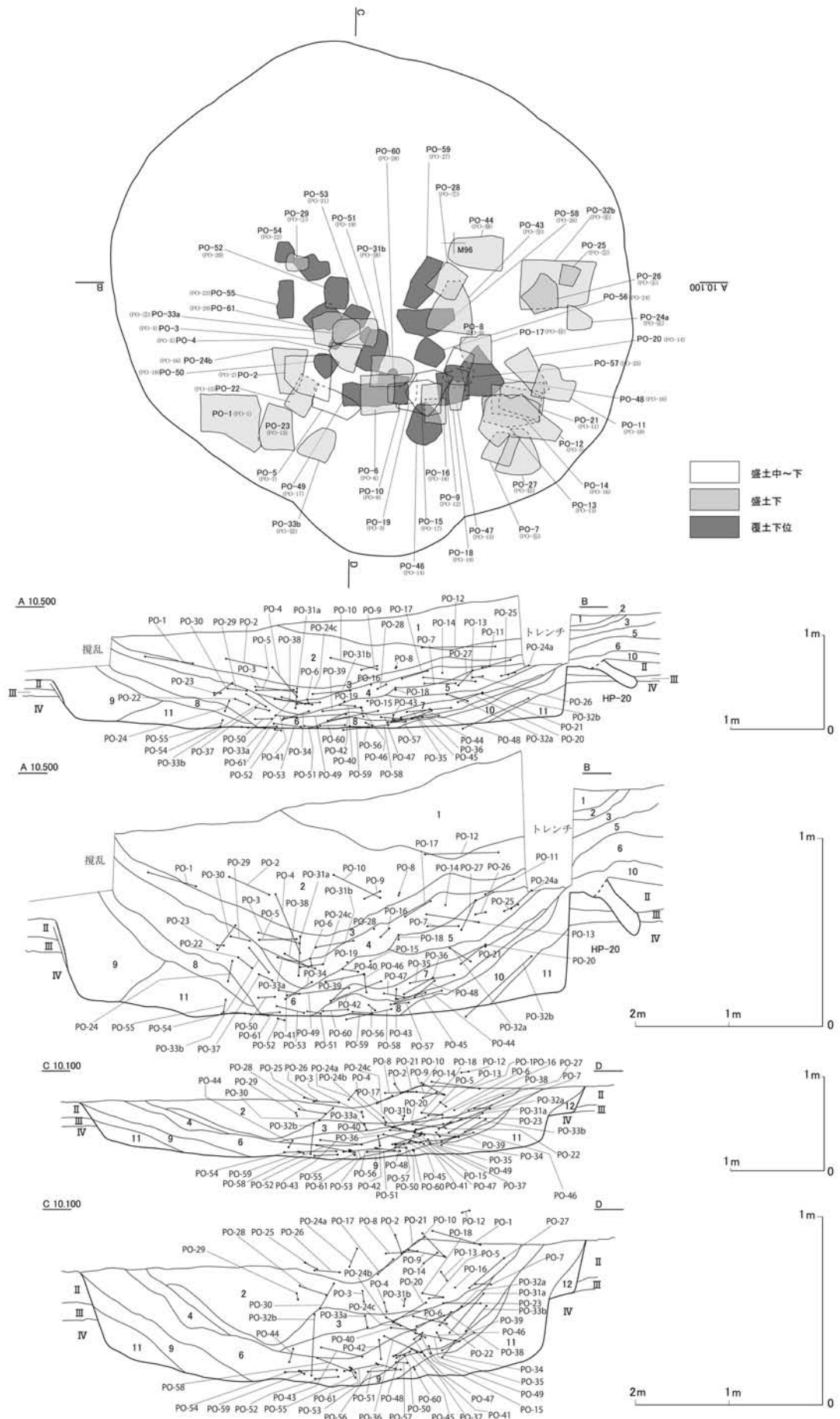
図IV-238 H-42



図IV-240 H-43 セクション図



图IV-241 H-43 遺物出土状况图



図IV-242 H-43 PO全層と垂直分布図

盛土層を盛土中～下位と盛土下に、覆土を覆土と覆土下位～床面直上に分けて取り上げを行った。二次整理の結果、多くの復原土器を得ることができた。このことから報告に際してもこの出土状況が表現できるように各層位毎に記載することとした。

覆土最下層出土（1～24）

Ⅱ群A類土器（16）：16は縄の閉端の回転によるループ文が施された体部破片。

Ⅱ群B-2類土器（2・8・11・18・19）：2は体部に斜行縄文が施されたもの。口頸部下端は円形刺突文で区画され、文様帯は不整綾絡文である。8・11・18は体部に直前段反撚の縄文が施されたもの。8の幅広の口頸部文様帯下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯に縄線文が加えられている。体部上半は直前段反撚による縄文、下半に複節の斜行縄文である。11は波状口縁になるものと思われる。文様帯下端は細い貼付帯で区画され、文様帯に不整綾絡文が施されている。18は口頸部破片。文様帯は不整綾絡文である。19は体部の縄文が不明のもの。口頸部破片。縄の圧痕が加えられた貼付帯で口頸部文様帯下端を区画し、無文地の文様帯に縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-3類土器（1・3～7・9・10・12～15・17・20～24）：1・3～6・12は体部に斜行縄文ないし羽状縄文が施されたもの。1は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施されている。3は無文地の口頸部に縄線文が施され、体部上半に羽状縄文、下半に複節の斜行縄文が施されている。4は体部上半にくびれをもち、器面に複節の斜行縄文が施されている。5は底部を欠失する。無文地の口頸部に縄線文が施され、体部上部に羽状縄文、下半に複節の斜行縄文が施されている。6は幅広の口頸部文様帯に貝殻条痕文が施され、体部に付加縄文ないし斜行縄文が施されている。7は口頸部文様帯下端を貼付帯によって区画され、無文地の文様帯に縄線文が加えられている。体部上半に斜行縄文、下半に単軸絡条体第5類の回転文が施されている。12は文様区画帯をもたず、文様帯に貝殻条痕文が施されている。9・10は体部に直前段反撚による縄文が施されたもの。9は緩やかな波状口縁で、口頸部文様帯の上下は縄線文で区画され、横走気味の直前段反撚による縄文が施されている。10は文様区画帯をもたず、文様帯に不整綾絡文が施されている。13は体部に単軸絡条体第5類の回転文が施されたもの。口頸部文様・区画帯は不明である。14は体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの。文様区画帯をもたず、文様帯に単軸絡条体第5類の回転文が施されている。15は器面に直前段反撚による縄文が施された底部。17は口頸部文様帯下端を縄線で区画され、文様帯に複節の斜行縄文、体部に縦位の複節の縄文が施されている。20は縦位の複節の縄文が施された体部破片。21は直前段反撚による縄文が施された体部破片。22～24は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

覆土出土（25～53）

Ⅱ群A類土器（42～47）：いずれも破片資料。42・43は同一個体。42は角形気味の口唇断面で、口唇部外面に圧痕が加えられ、器面は羽状縄文である。44～47は縄の閉端によるループ文が施される。

Ⅱ群B-3類土器（25～38・48～52）：25～28は体部に斜行縄文が施されたもの。25・26は波状口縁で、斜行縄文を地文とし、口頸部文様帯に縄線文が加えられている。25は横環する縄線文が加えられている。26は文様帯の上下を縄線文で区画し、波頂部下位に2～3本一組の「V」字状の縄線文が加えられている。27は口縁部～体部上半に合撚による縄文が羽状に、下半に斜行縄文が施されている。28は口縁部の破片資料。波状口縁で、口頸部文様帯に単軸絡条体第6類の回転文が施されている。29～34は体部に直前段反撚による縄文が施されたもの。29の口頸部文様帯下端は指頭の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯に縄線文で入れ子の鋸歯状の文様構成を作出している。30は体部と口頸部に施文方向が異なる縄文が施され、口頸部文様帯に2本一組の単軸絡条体の圧痕文が加えられている。31の文様帯には不整綾絡文が施されている。32は直前段反撚による縄文が施された

口頸部文様帯で、文様帯の上端を1条、下端を2条の縄線文で区画している。33は体部と口頸部文様帯に施文方向が異なる縄文が施されている。幅広の文様帯の上下を2本一組の組紐状の縄線文で区画し、同様の縄線文が文様帯中央部と口縁部から垂下する縄線文が加えられている。垂下する縄線文と横環する縄線の交点に円形刺突文が加えられている。34は幅の狭い口縁部文様帯に組紐状の縄線文が施されている。35は体部に自縄自巻の縄文が施されているもの。文様帯の上下を2本一組の組紐状の縄線文で区画し、横環する縄線文と縦位の縄線文が加えられている。36は緩やかな波状口縁で、体部に単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されたもの。口縁部文様帯の上下は2本一組の縄線文で区画し、波頂部から垂下する縄線文が施され、交点に円形刺突文が加えられている。37・38は体部に自縄自巻の縄文が施されたもの。口縁部文様帯は結束羽状縄文を地文とし、文様帯に組紐状の縄線文が2本加えられている。体部は自縄自巻の縄文と結束羽状縄文を組み合わせて施文される。38は口縁部文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯には直前段反撚による縄文を地文とし、3条の組紐状の縄線文と円形刺突文が部分的に加えられている。48は口頸部文様帯に多条の斜行縄文が施され、3条の縄線文が加えられている。体部には複節の縄文が縦位に施されている。49は波状口縁で、口頸部文様帯に不整撚糸文、体部に直前段反撚による縄文が施されている。50は外反気味の口縁部破片。口頸部文様帯下端は縄線で区画され、文様帯に横位の単軸絡条体圧痕文が施され、縦位の単軸絡条体圧痕文が加えられている。51は斜行縄文が施された口頸部破片。口唇直下に口頸部文様帯上端を区画する縄線が加えられている。52は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

Ⅱ群B-4類土器(39・40): 39・40は体部に単軸絡条体の回転文が施されたもの。39は口縁部文様帯下端を結束羽状縄文で区画し、文様帯に組紐状の縄線文が3条加えられている。Ⅱ群B-3類土器に類似した文様構成をもつ。体部が単軸絡条体の回転文であることから本類に含めた。40は文様区画帯をもち、文様帯には縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器(41・53): 41は平縁で、口頸部文様帯下端は肩状の器形、口頸部文様帯に貝殻条痕上に複節の縄線文が加えられている。体部は複節の斜行縄文である。53は口頸部文様帯を圧痕が加えられた貼付帯で区画し、文様帯内には2本一組の縄線文が4列施され、さらに部分的に横位に押捺された貼付帯も加えられている。体部は多軸絡条体回転文である。

盛土下 (54～72)

Ⅱ群B-3類土器(54～67・72): 54・55は体部に縄文が施されているもの。54は平縁と思われる。口頸部文様帯に直前段反撚による縄文が施され、文様帯は縄線で区画され、2本一組の連弧文が加えられている。55は筒形で、体部上部から口頸部にかけて緩やかにくびれをもつ。口縁部に施文方向が異なる縄文が施され、口頸部文様帯は2本一組の組紐状の縄線で上下を区画し、文様帯内には組紐状の縄線文が加えられている。56～66は体部に直前段反撚による縄文が施されたもの。56・57は口頸部文様帯の区画文をもたないもの。56は口頸部文様帯に貝殻条痕文が施されている。57は口頸部下端が大きく内湾し、肩状の器形が作出され、口頸部文様帯に横走気味の直前段反撚による縄文が施されている。58～60は口頸部文様帯下端に区画帯として貼付帯が加えられている。58は口頸部下端が大きく内湾し、肩状の器形が作出され、肩部分に爪形文が加えられた貼付帯、口頸部文様帯には横走気味の直前段反撚による縄文が施されている。59は波状口縁。刺突文が加えられた貼付帯で区画された口頸部文様帯に斜行縄文、体部に横走気味の直前段反撚による縄文が施されている。60は波状口縁。口頸部文様帯下端は上下に縄線文が施された貼付帯で区画され、文様帯に横走気味の直前段反撚による縄文が施され、波頂部から2本一組の縄線が加えられている。61は底部を欠失する。波状口縁である。口頸部文様帯下端を2本一組の縄線で区画し、口頸部文様帯には斜行縄文が施され、波頂部から

垂下する5本一組の縄線と波頂部に2本一組の縄線で「X」字状の文様構成を作出している。体部上半は直前段反撚による縄文、下半は縦走する縄文が施されている。62・63・65・66は口頸部文様帯の上下が区画文で区画されているもの。62は3か所の波頂部をもつもので、器面に直前段反撚による縄文が施され、区画文には単軸絡条体の圧痕文が用いられている。63は口頸部文様帯と体部に施文方向が異なる直前段反撚による縄文が施されている。文様帯は下端3本一組、上端2本一組の縄線で区画され、口頸部文様帯中央に横環する2本一組の縄線文が加えられている。65は口頸部文様帯の上下を組紐状の縄線で区画し、下端に結束羽状縄文が加えられている。文様帯には組紐状の縄線で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出し、文様帯中央に横環する縄線と交点に円形刺突文が加えられている。66は頸部文様帯の上下を2本一組の縄線で区画し、下端に結束羽状縄文、文様帯には垂下する縄線が加えられている。67は波状口縁。無文地の口頸部文様帯は2本一組の組紐状の縄線で区画され、体部には自縄自巻による縦位の縄文が施されている。72は無文地の口頸部文様帯を2本一組の縄線で区画し、縦位の縄線文が加えられ、体部には自縄自巻の縄文が縦位に施されている。64は直前段反撚による縄文が施された体部下半資料。

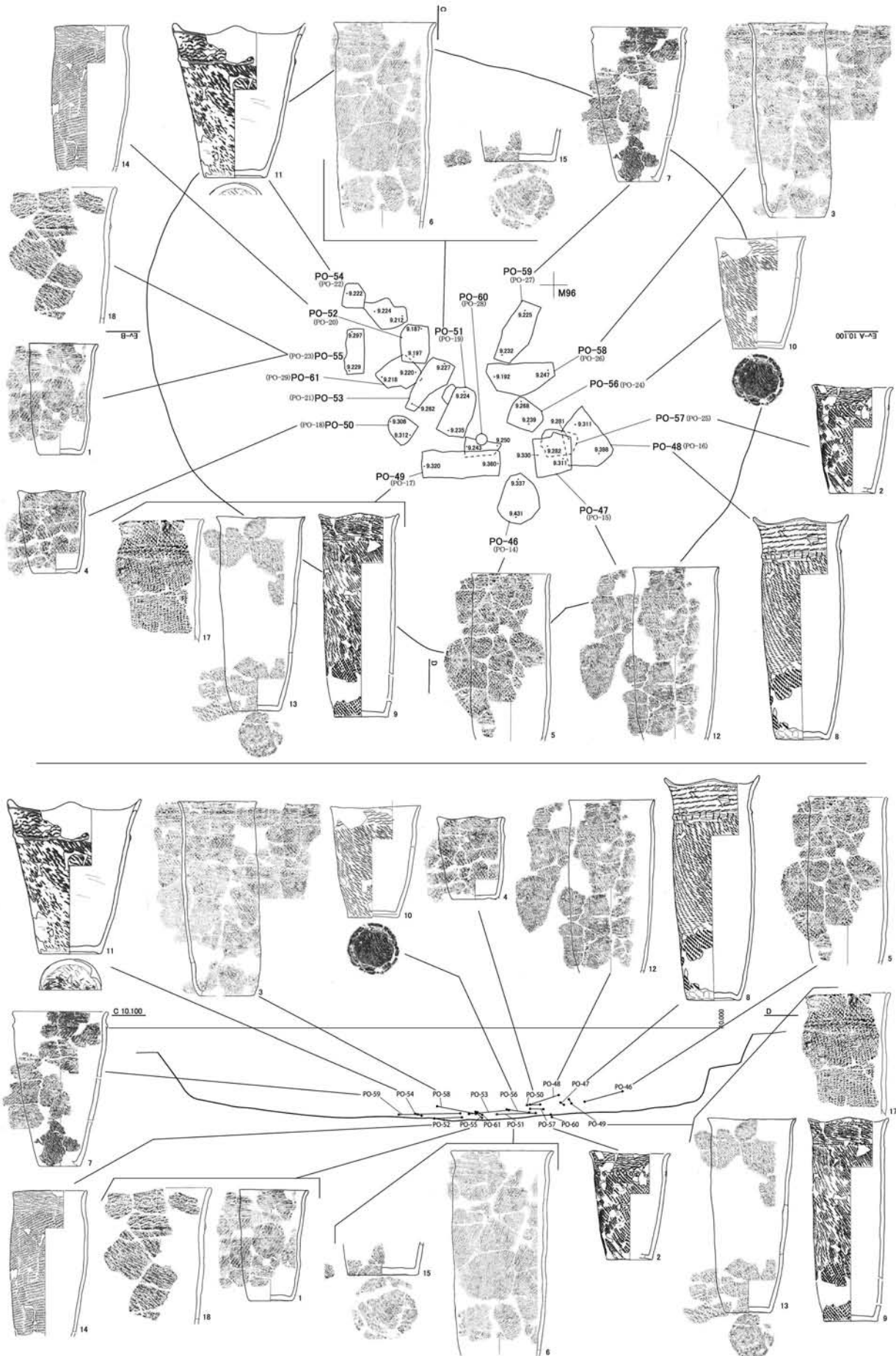
Ⅱ群B-4類土器(68～71)：68～70は幅の狭い口縁部文様帯の下端が結束羽状縄文で区画され、文様帯内に縄線が加えられているもの。68・70は体部に自縄自巻による縦位の縄文と結束羽状縄文が組み合わされて施文されているもの。69の体部は自縄自巻による縦位の縄文である。71は口縁部に結束羽状縄文のみが施されたもので、縄線文が加え、体部には自縄自巻の縦位の縄文と結束羽状縄文が施文されている。

盛土中～下位(73～78)

Ⅱ群B-4類土器(73・74)：73は底部を欠失する。文様区画帯をもたない。無文地の幅の狭い口縁部文様帯に縄線文が施され、体部は単軸絡条体の回転文である。74は波状口縁である。幅の狭い口縁部文様帯は結束羽状縄文で区画され、無文地の文様帯に波状口縁に沿って、組紐状の縄線の圧痕文が山形に施されている。体部には単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文を組み合わせで施文されている。

Ⅱ群B-5類(75～78)：75・76・78は口縁部に肥厚する文様帯をもつもの。75は波状口縁で、口唇・肥厚帯下端に縄の圧痕が加えられている。無文地の肥厚帯に波状口縁に沿って2本一組の縄線文が施されている。体部上半に単軸絡条体第1A類の回転文、下半に多軸絡条体の回転文が施されている。76は平縁で、口縁部は大きく内側に折れる形状で、文様区画帯をもたない。無文地の文様帯に横環する縄線文と3本一組の縦位の縄線文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文である。78は底部を欠失する。波状口縁で、波頂部は2個一組の小突起からなる。口唇には縄の圧痕が加えられている。口頸部文様帯下端は2列の綾絡文で区画され、無文地の文様帯に2本一組の縄線文が加えられている、体部は多軸絡条体の回転文である。77は3か所の波頂部をもつ波状口縁である。くびれをもつ幅広の口頸部文様帯は単軸絡条体の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯には単軸絡条体の圧痕が菱目状に施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。

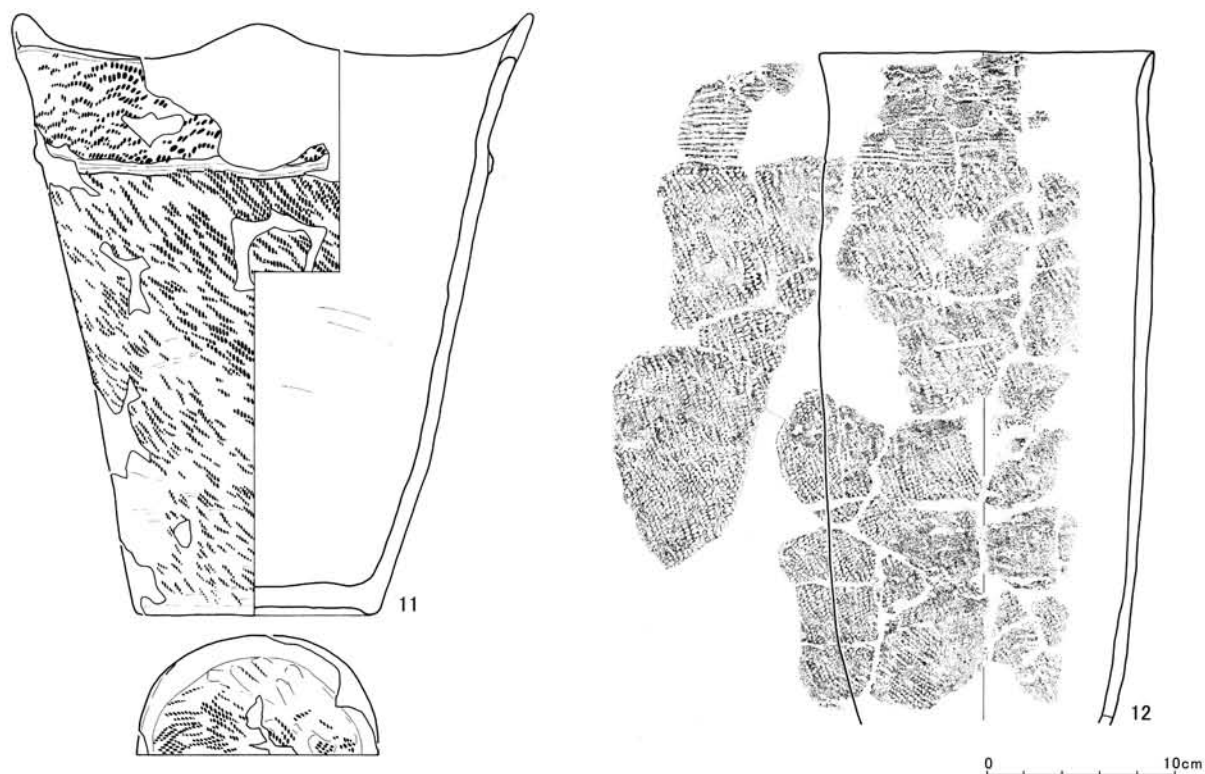
(石器)79～82は石鏃。79は無茎凹基。80は尖基で柳葉形。81・82は尖基で木葉形。すべて頁岩製。83・84は石錐。83は棒状のもの。両面加工で棒状に整形し、尖頭部に機能部を作出している。84は剝片の一部を加工して機能部を作出したもの。いずれも頁岩製。85～87はつまみ付ナイフ。縦型で片面周縁加工のもの。87は使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。88～98はスクレイパー。88はへら状石器。両面加工で下端部に急角度の刃部が作出されている。89～92は縦長剝片の側縁に刃部を作出したもの。89・90は直線状の刃部、91・92は円弧状の刃部を作出している。93・94は縦長剝片の側縁から下端に刃部を作出しているもの。95・96は抉りのあるもの。97・98は横長剝片の側縁



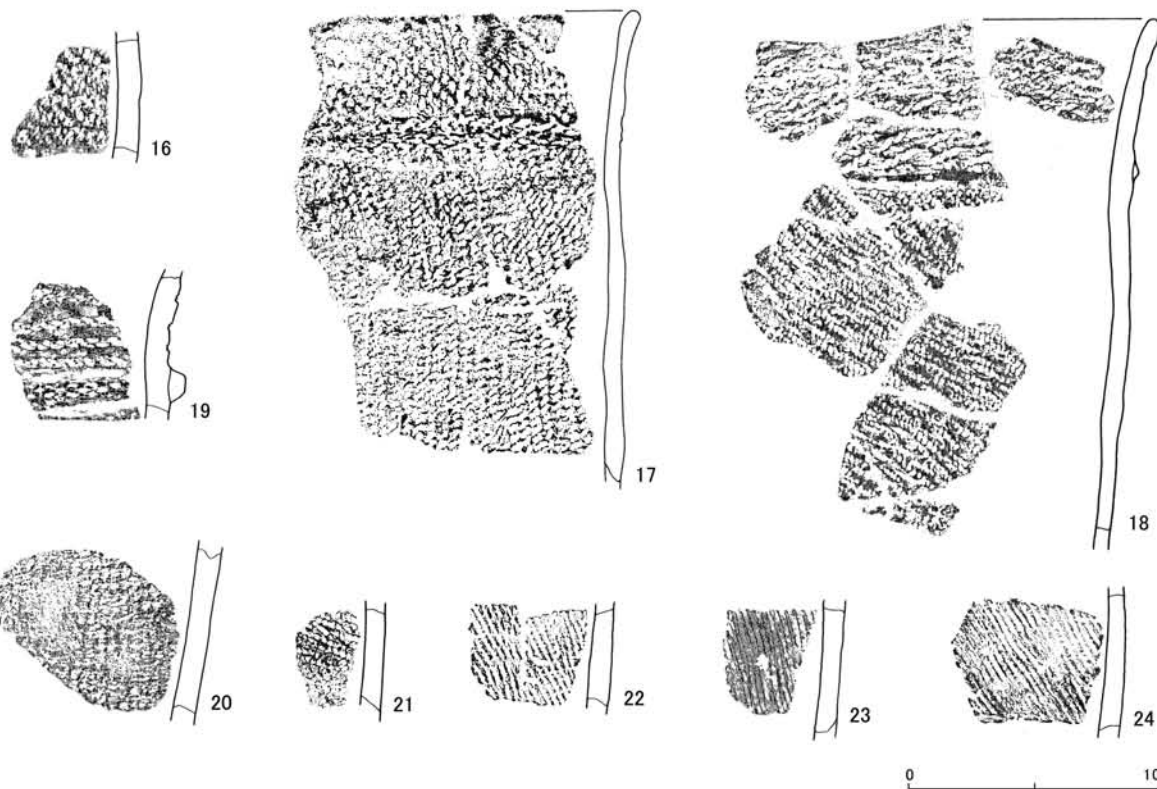
図IV-243 H-43 遺物出土状況図 垂直分布図 覆土下位~床直上



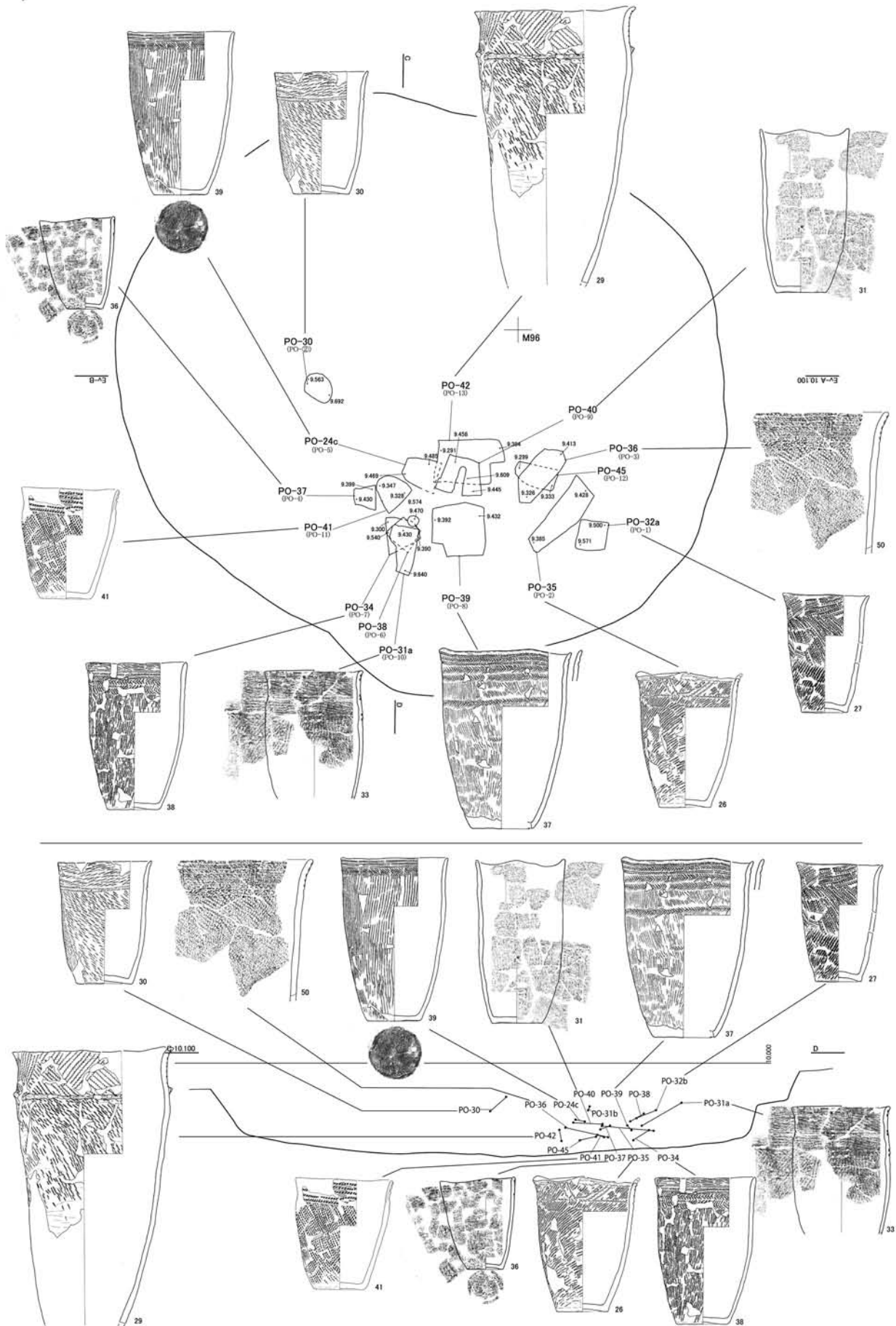
图IV-244 H-43 土器 (1)



图IV-245 H-43 土器 (2)



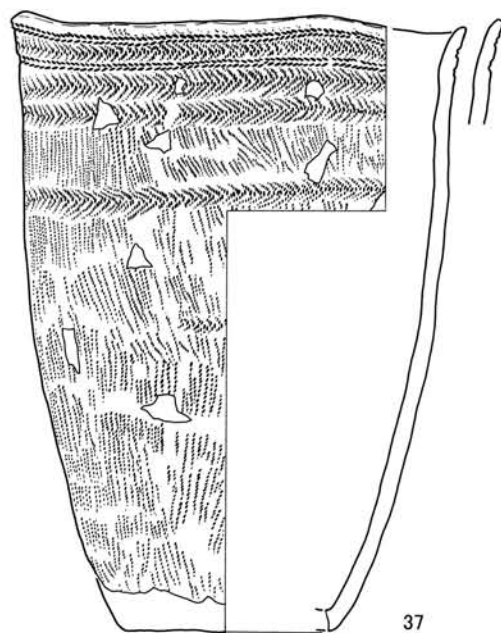
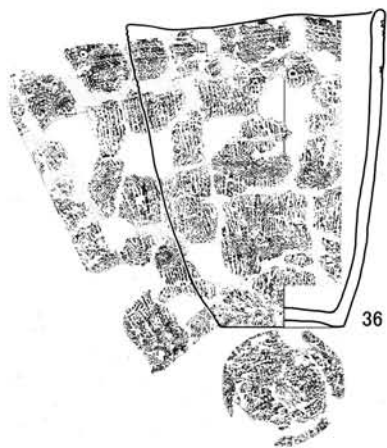
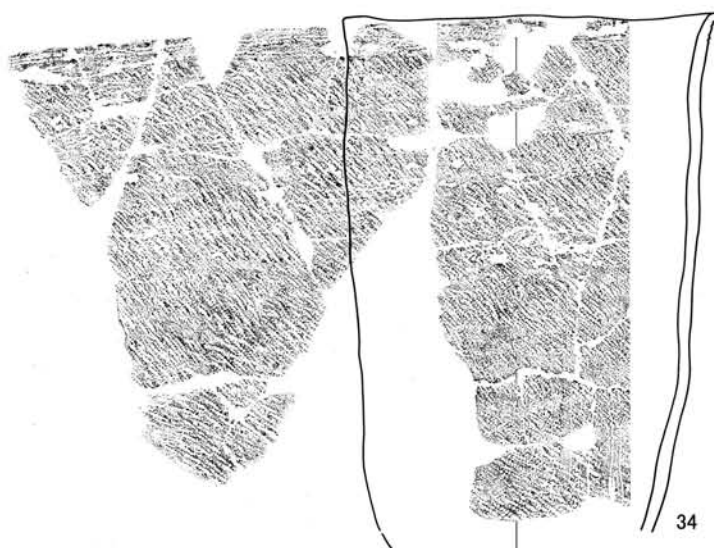
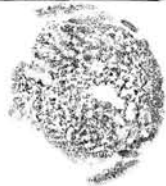
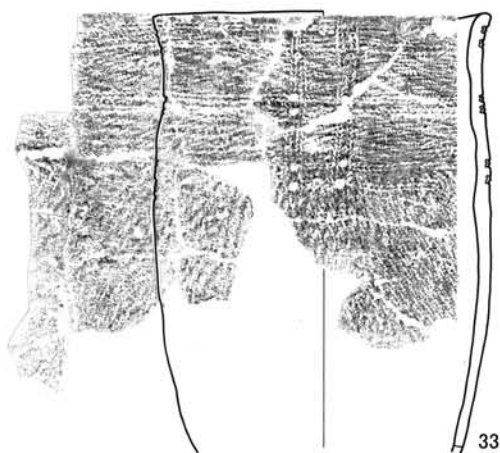
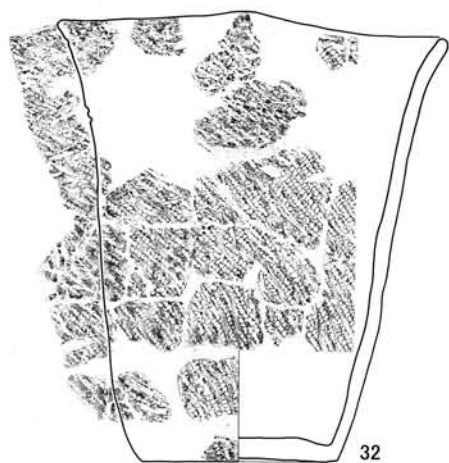
图IV-246 H-43 土器 (3)



图IV-247 H-43 遺物出土狀況図 垂直分布図 覆土

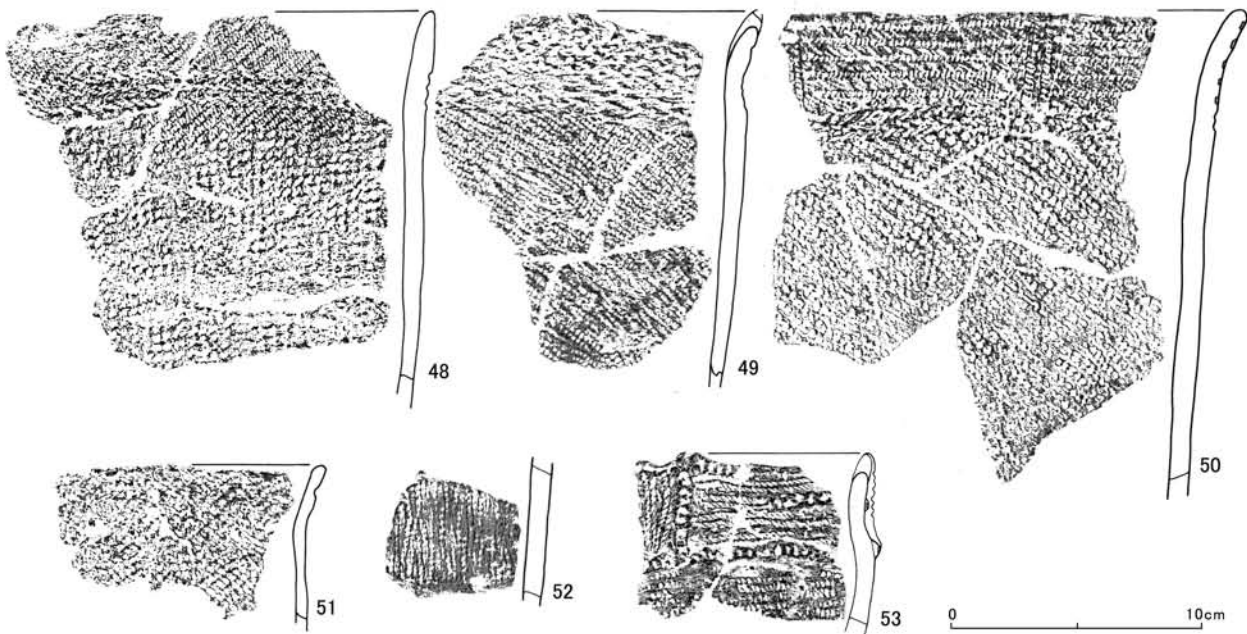
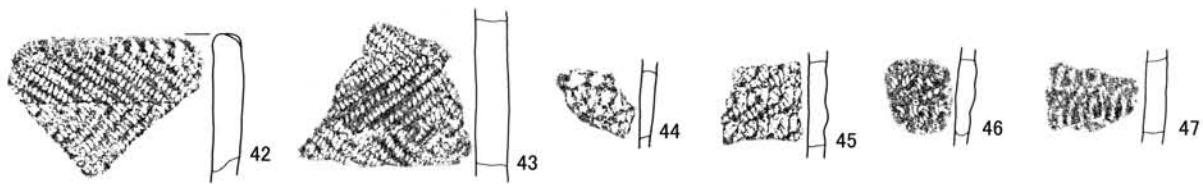
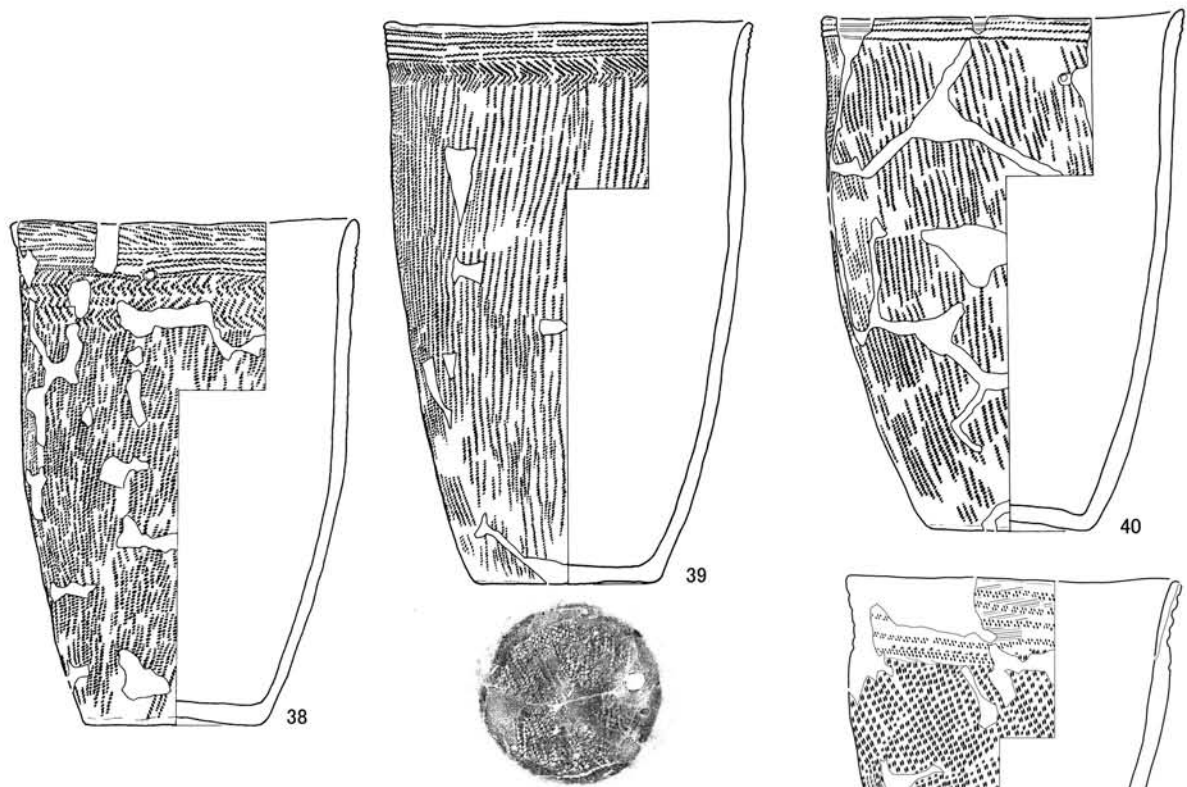


图IV-248 H-43 土器 (4)

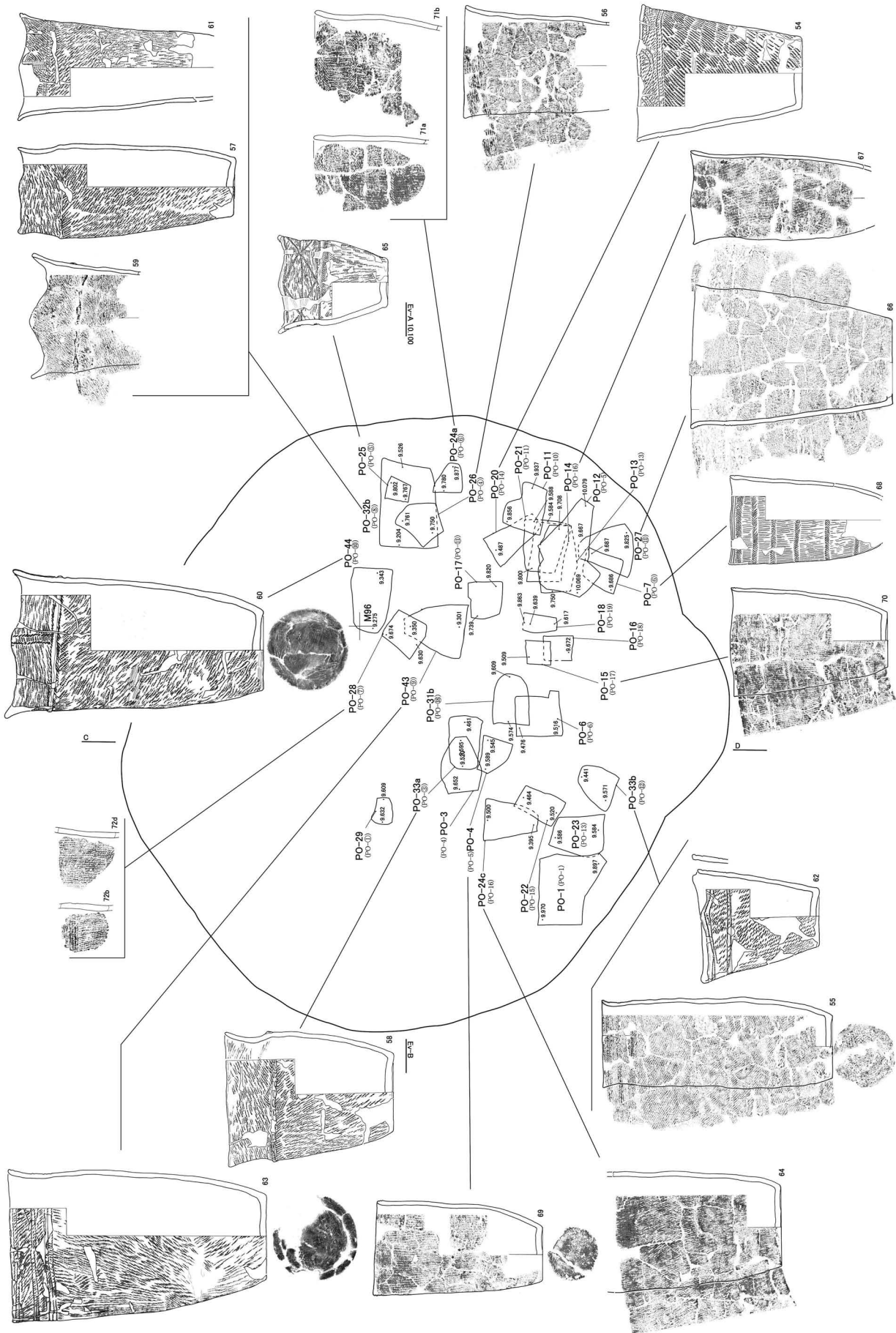


0 10cm

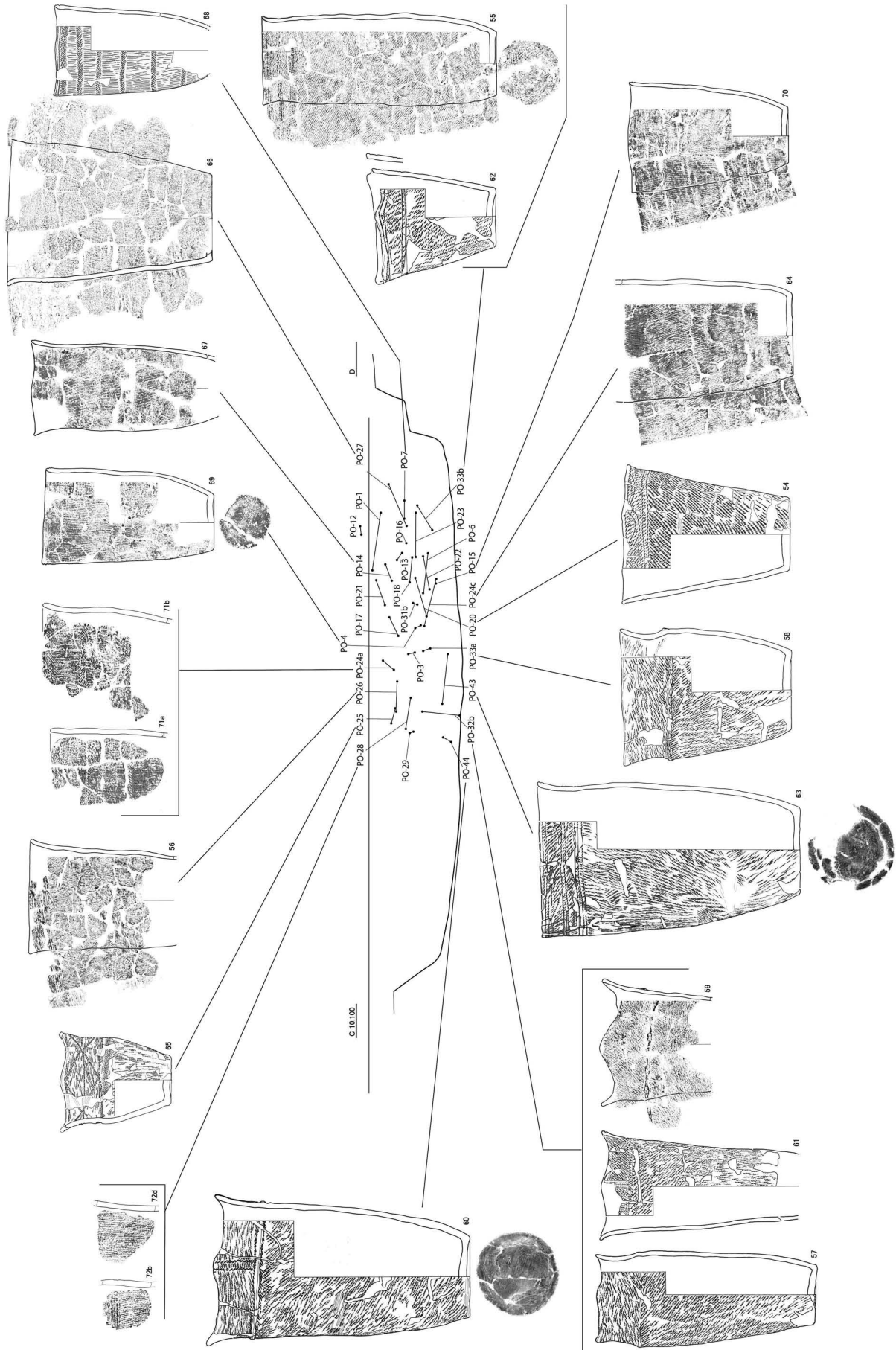
图IV-249 H-43 土器 (5)



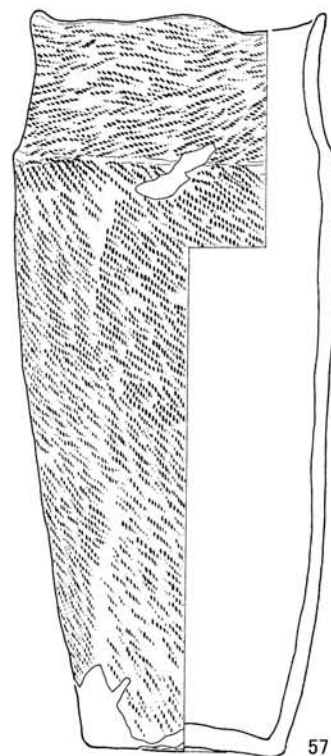
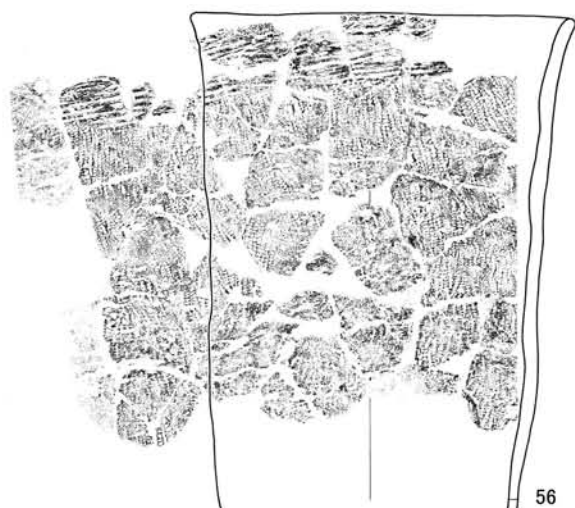
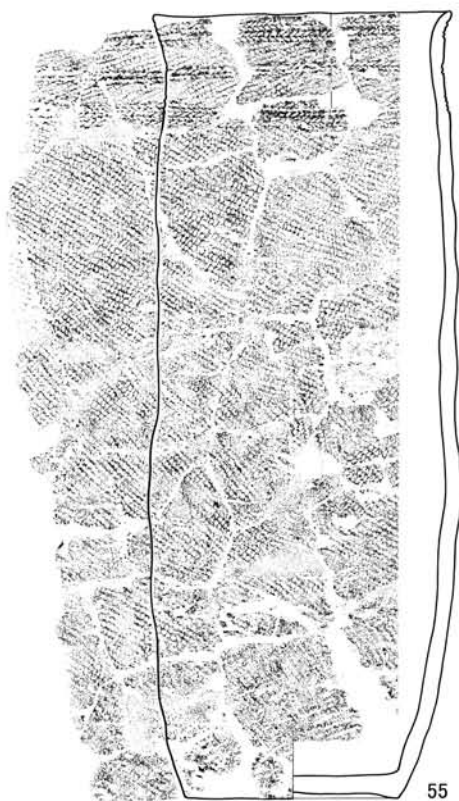
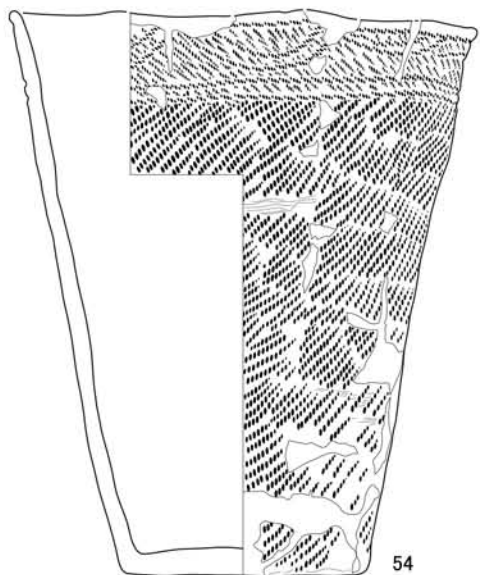
图IV-250 H-43 土器 (6)



图IV-251 H-43 遺物出土狀況图 盛土下

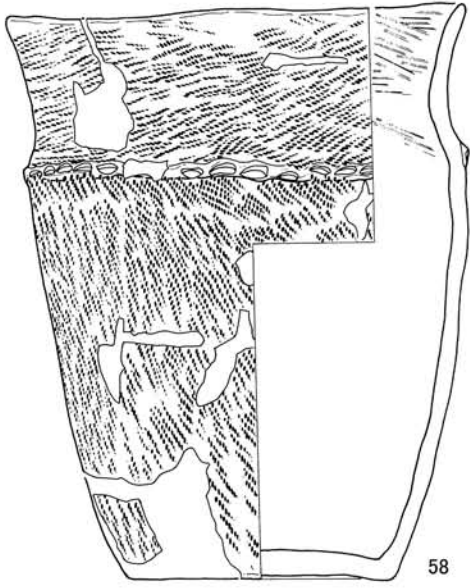


图IV-252 H-43 遗物出土状况图 垂直分布图 盛土下

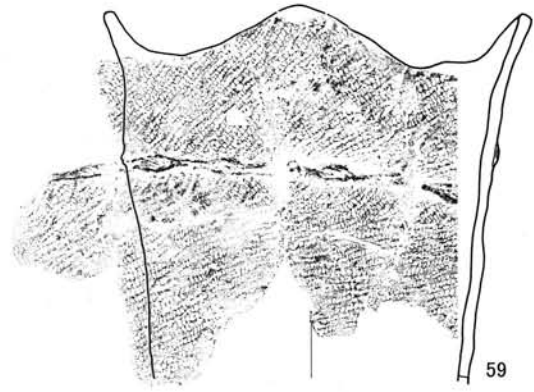


0 10cm

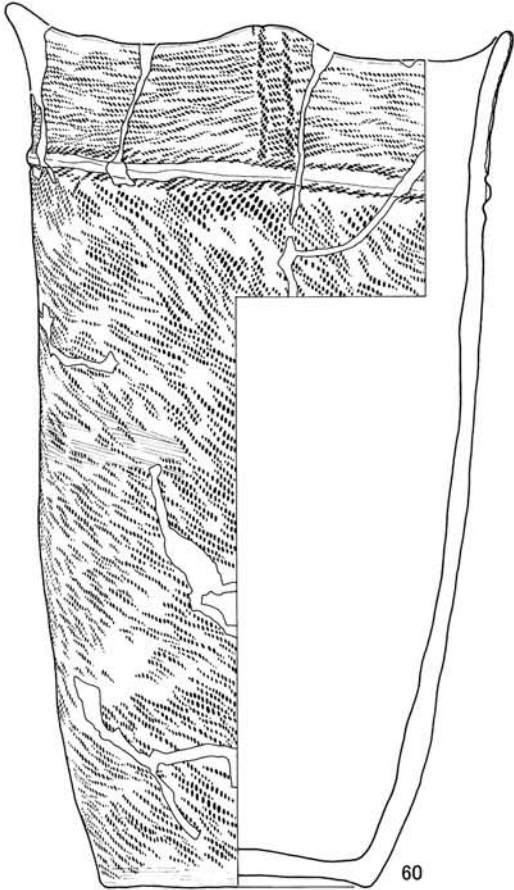
图IV-253 H-43 土器 (7)



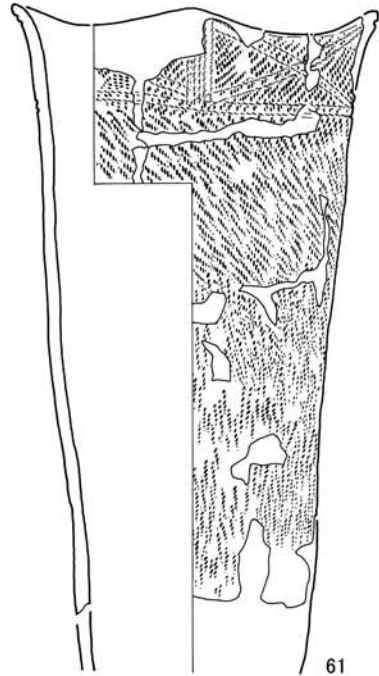
58



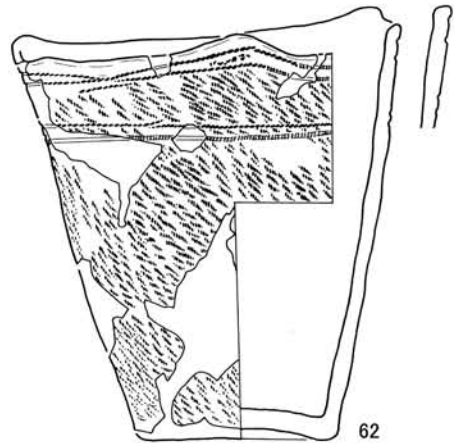
59



60



61

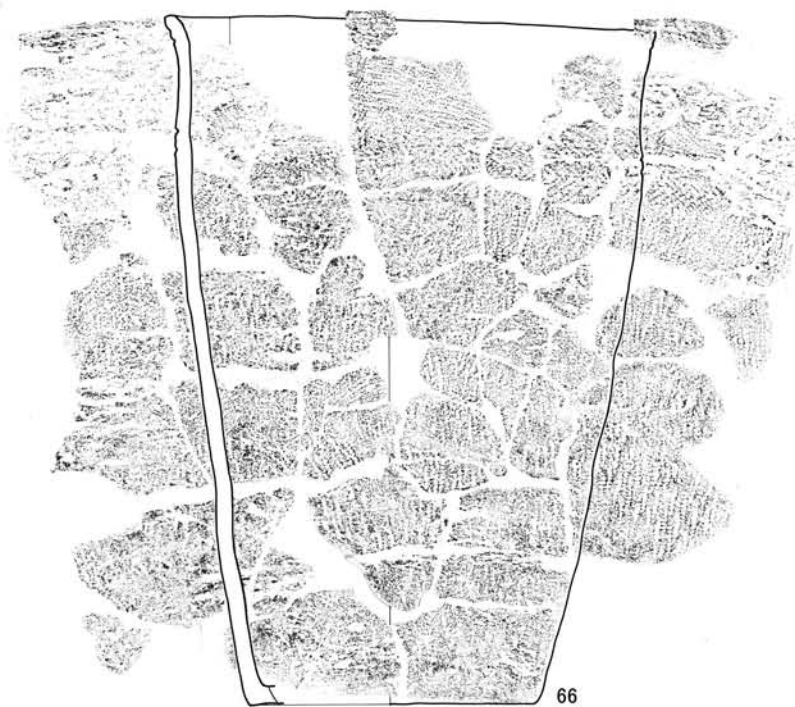
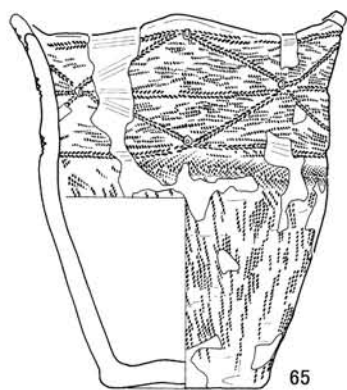
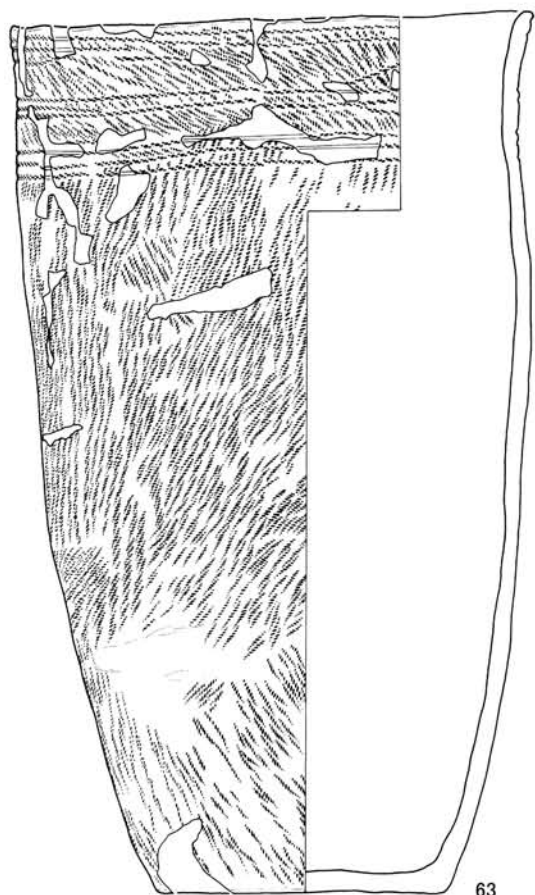


62



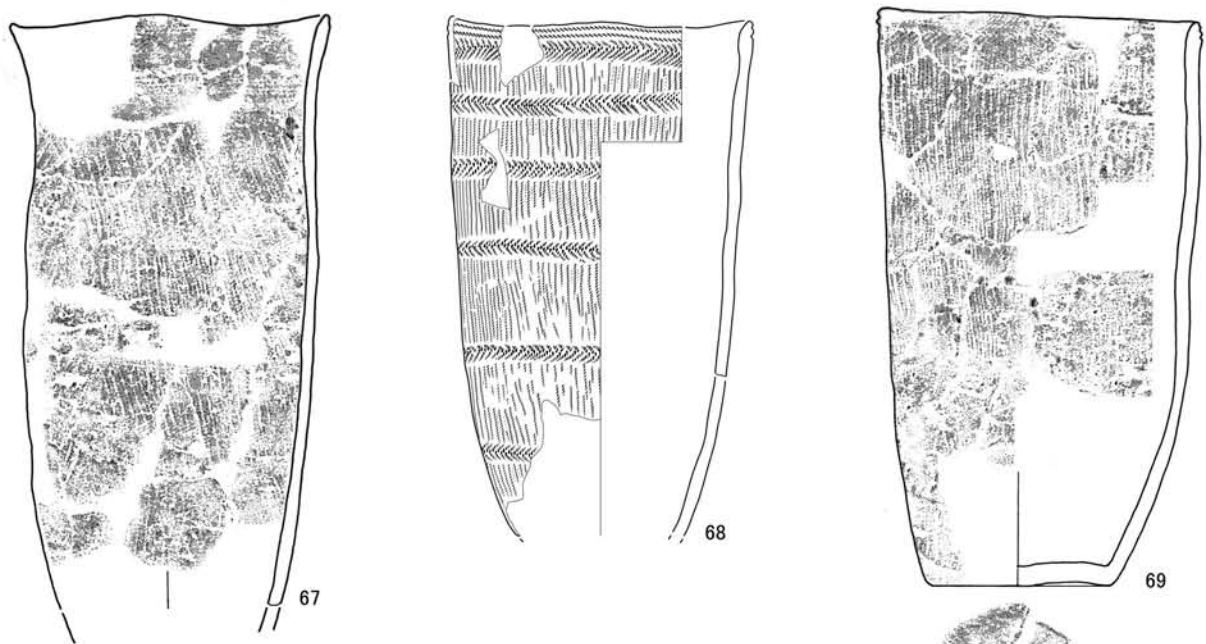
0 10cm

图IV-254 H-43 土器 (8)

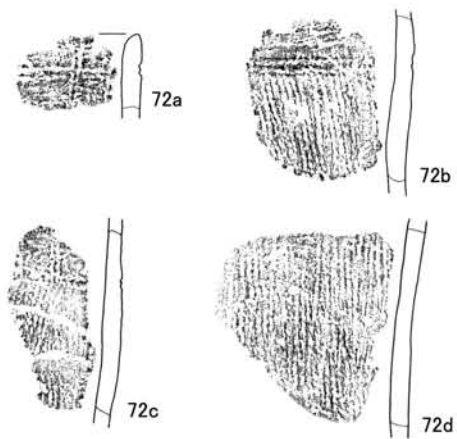
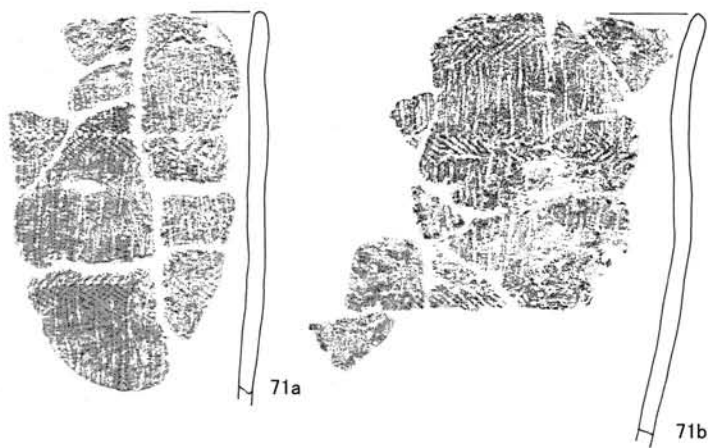


0 10cm

图IV-255 H-43 土器 (9)

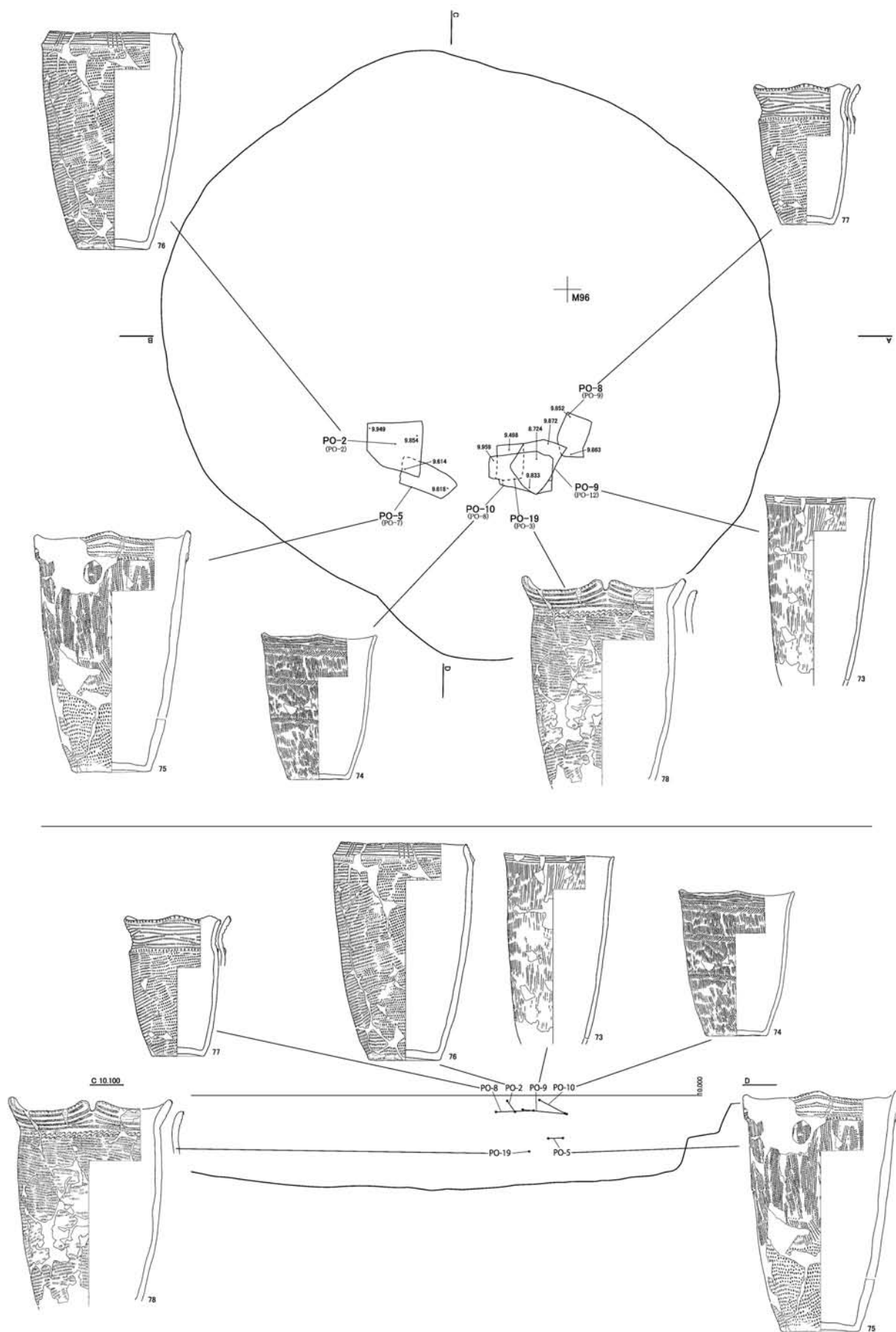


0 10cm



0 10cm

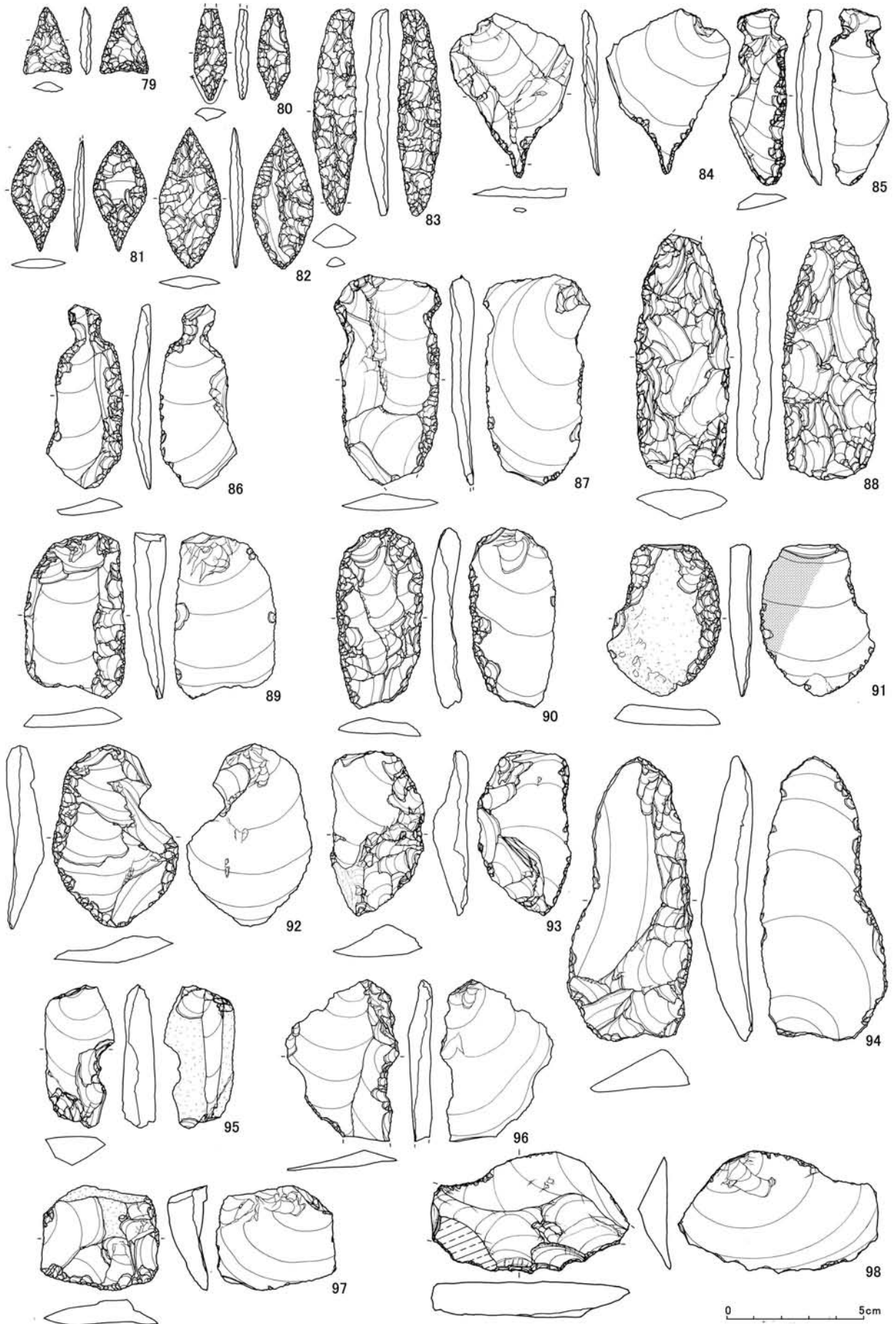
图IV-256 H-43 土器 (10)



图IV-257 H-43 遺物出土状況图 垂直分布图 盛土中~盛土下

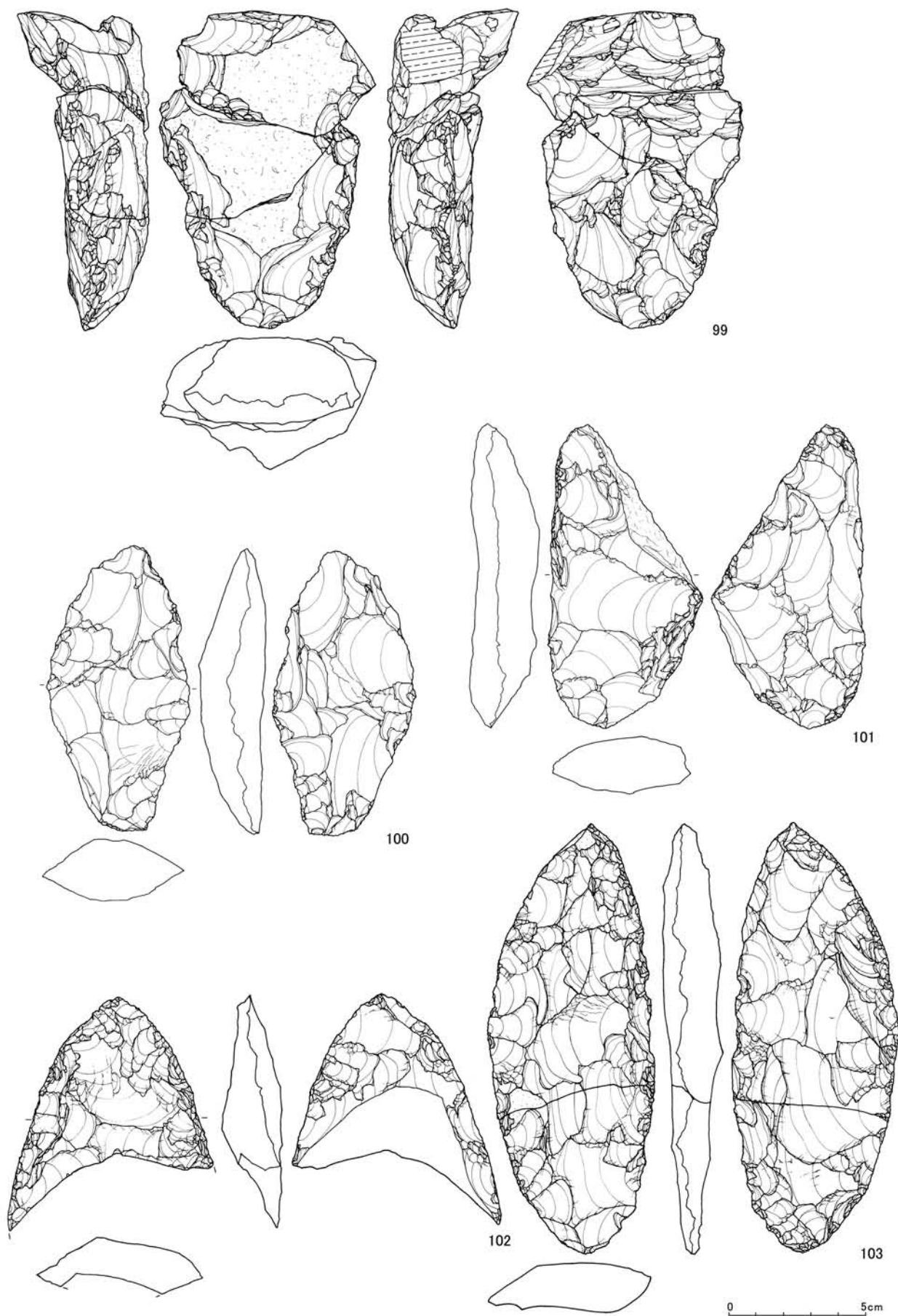


图IV-258 H-43 土器

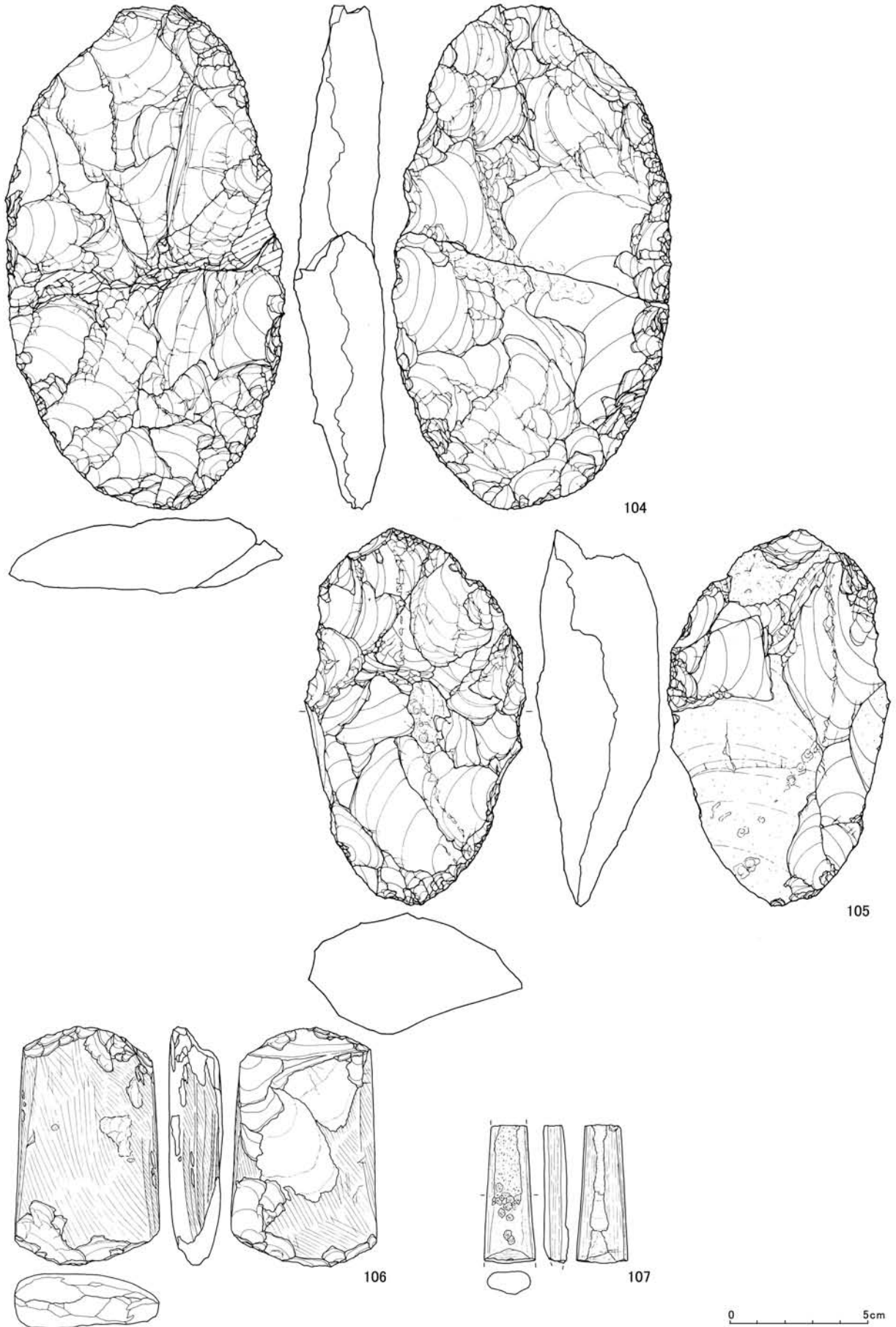


图IV-259 H-43 石器 (1)

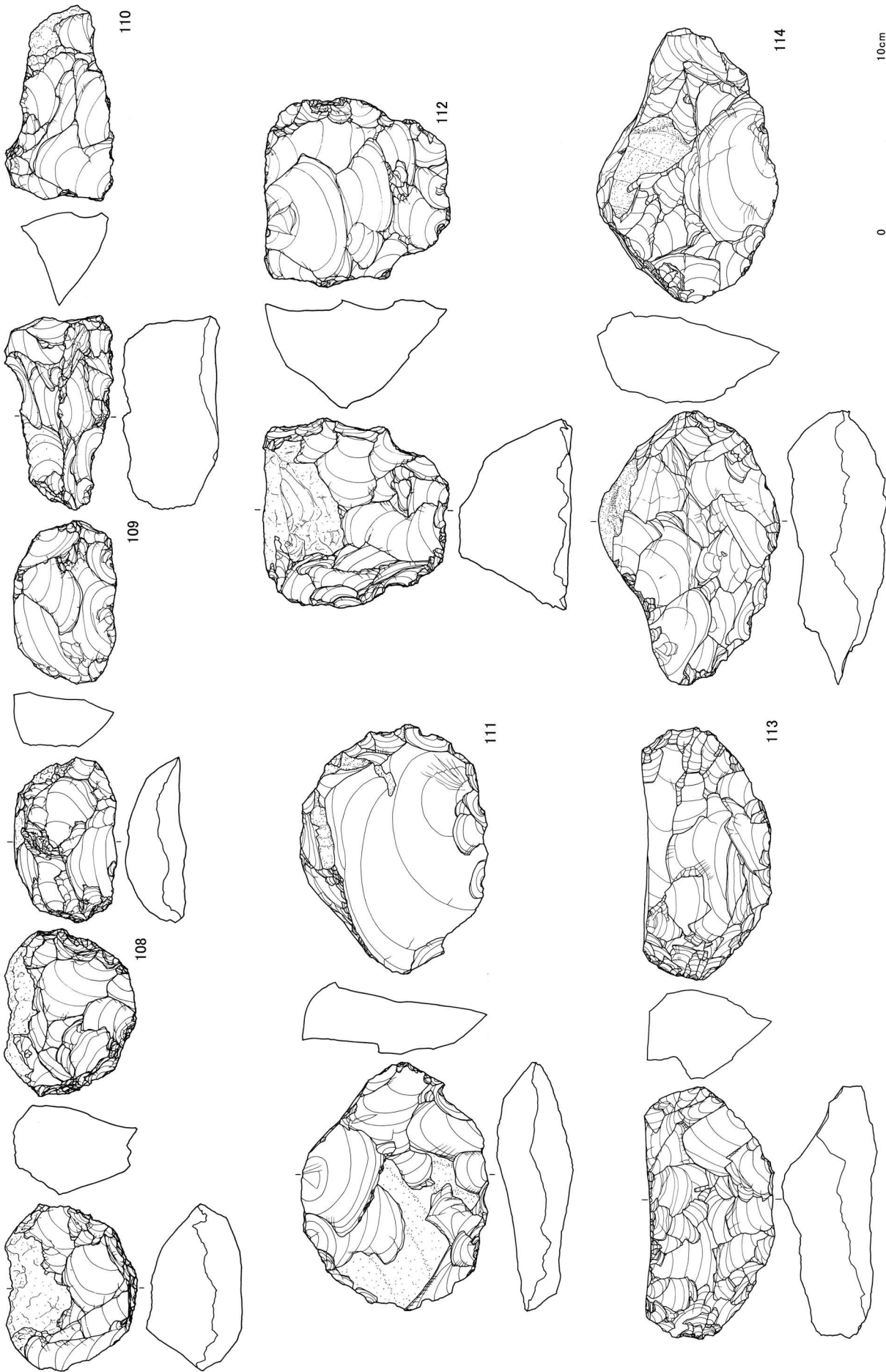
に刃部を作出したもの。98は刃部が鋸歯状になっている。すべて頁岩製。99～105は両面調整石器。99は4点接合している。楕円形状に整形する途中で破損したと思われる。破損後に周縁を加工しているものがある。100～103は紡錘形、104・105は楕円形に整形されたもの。100・102～105は剥片集中から出土した剥片と接合している。100は覆土出土。接合作業によって、HFC-4出土の剥片2点、覆土出土の剥片58点と接合する（接合資料1）。101は覆土出土。中央付近で節理面から折損したもの。最終整形途中で折損したと考えられる。102はHFC-1出土。上部で節理面から折損したもの。最終整形途中で折損したため剥片とともに廃棄されたと考えられる。下半部は接合作業で確認できなかったため、利用されたと推測される。接合作業によって、HFC-1出土の剥片1点、HFC-1・2出土の剥片133点と接合する（接合資料2）。103はHFC-1出土のものと覆土出土のものが接合している。最終整形途中で折損したため剥片とともに廃棄されたと考えられる。接合作業によって、HFC-2出土の剥片85点と接合する（接合資料3）。104はHFC-1出土で楕円形のもの。整形途中で節理面で半折し、剥片類と廃棄されたと考えられる。接合作業によって、床面出土のRフレイク1点、覆土出土の剥片43点と接合し、重量は763gである。接合資料の図化は行っていない。周縁を整形した際の剥片が接合している。接合した剥片には節理面が多くみられる。同一母岩とみられる剥片がほかに覆土から21点確認されている。105は床面出土で楕円形のもの。周縁下部の一部に微細な剥離痕があることから利用されていたと考えられる。接合作業によって、HFC-4覆土出土の剥片2点、覆土出土の剥片58点と接合する（接合資料4）。すべて頁岩製。106は石斧。短冊形で刃部と基部は破損している。全面を研磨調整している。破損後に打ち欠き調整を行っている。緑色泥岩製。107は石のみ。刃部は折損している。両平面に擦り切り痕がみられ、薄く擦り切ったものに刃部を作出している。凝灰岩製。108～118は礫器または石核。108～116は礫を打ち欠いて断面が三角形状になり、側縁から下端が刃部状になっているもの。117・118は縦長礫の周縁を打ち欠いているもの。108～110・112・115・117は剥片集中（HFC）から出土したものと接合している。108はHFC-2出土で、礫の両面を打ち欠いて側縁から下端が円弧状の刃部になっているもの。接合作業によって、HFC-1出土の剥片11点、覆土出土の剥片1点と接合し、重量は394.43gである。接合資料の図化は行っていない。素材はこぶし大の円礫で、下半の表皮部分を除去した剥離面を打面として、表・裏面を数回剥離してV字状の刃部状に整形している。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-1から10点確認されている。109はHFC-2出土。礫の両面を打ち欠いて側縁から下端が刃部状になっているもの。接合作業によって、HFC-2出土の剥片26点と接合する（接合資料5）。110はHFC-2出土。三角柱の石核状になっている。接合作業によって、HFC-1・2出土の剥片15点、覆土出土の剥片1点と接合する（接合資料6）。111は覆土出土。大型剥片の両面周縁を粗く打ち欠いて円弧状の刃部を作出したもの。112はHFC-2出土。礫を打ち欠いて側縁から下端が円弧状の刃部になっているもの。接合作業によって、HFC-2出土の剥片26点、覆土出土の剥片2点と接合する（接合資料7）。113・114・116は覆土出土で、大型剥片の両面を粗く打ち欠き、円弧状の刃部を作出したもの。115はHFC-2出土で、大型剥片の下側縁の片面を粗く打ち欠き刃部を作出したもの。側縁に抉りが3か所確認でき、石錘の可能性もある。接合作業によって、HFC-2出土の剥片3点、覆土出土の剥片1点と接合し、重量は280gである。接合資料の図化は行っていない。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-2から13点確認された。117はHFC-2出土で、大型剥片の片面周縁を粗く打ち欠いたもの。接合作業によって、覆土出土の剥片11点と接合し、重量は331.15gである。接合資料の図化は行っていない。同一母岩とみられる剥片がほかに覆土から19点確認された。118は覆土出土で、扁平礫の両面側縁から下端を粗く打ち欠いて刃部を作出したもの。一部微細な剥離もみられ、スクレイパーのように使われていた可能



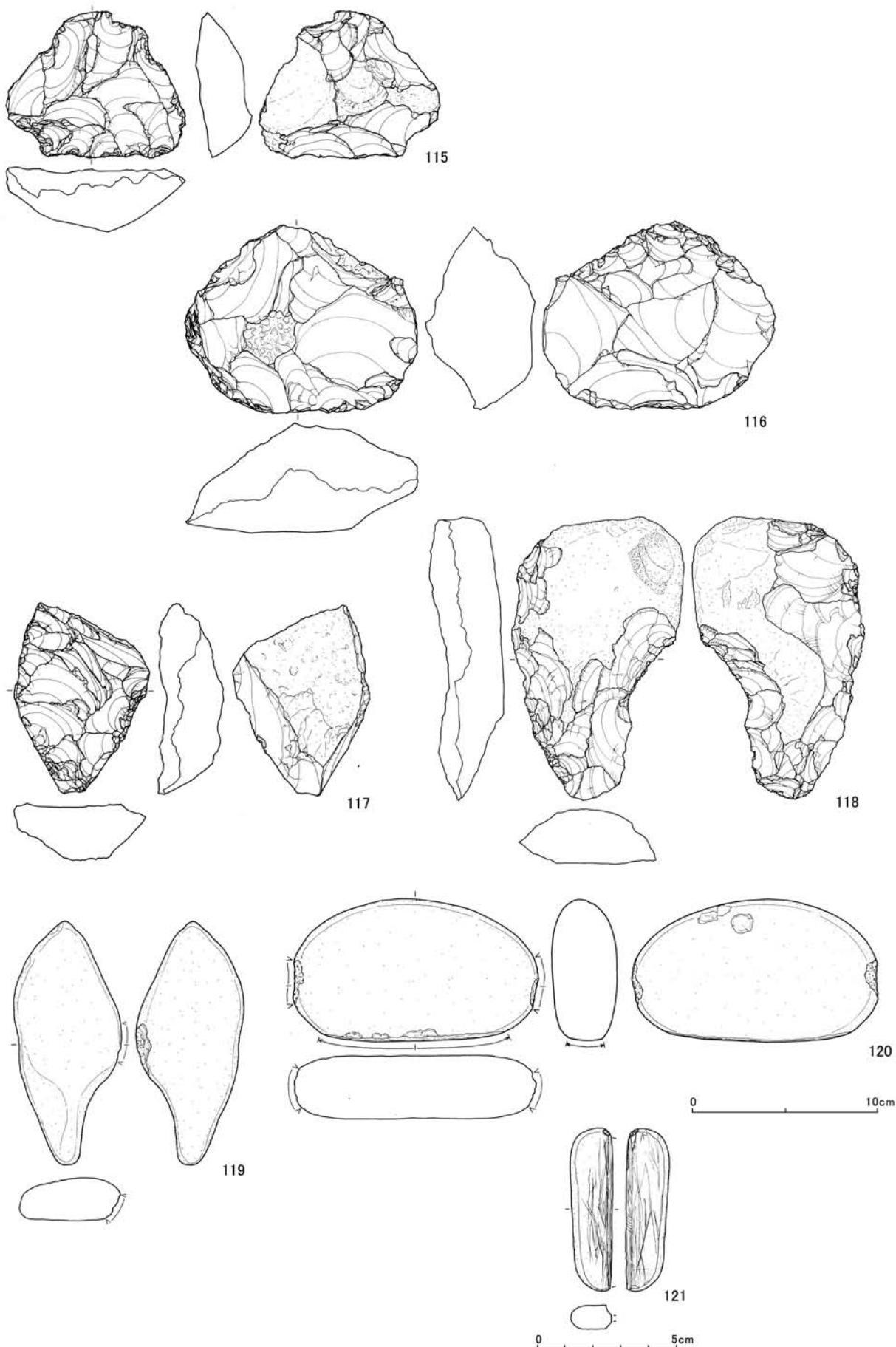
图IV-260 H-43 石器 (2)



图IV-261 H-43 石器 (3)



图IV-262 H-43 石器 (4)



图IV-263 H-43 石器 (5)

性がある。すべて頁岩製。119はたたき石。扁平礫の側縁の一部に敲打痕のあるもの。凝灰岩製。120はすり石。扁平な楕円礫の側縁に幅の狭いすり面を作出している。長軸両端に敲打痕がみられる。安山岩製。121は石製品。線刻礫。擦り切り残片に非常に細い線刻がされている。特別な規則性はみられない。凝灰岩製。

床面・覆土より剥片集中11か所が検出され、石器等55,274点が出土した。同一母岩とみられる剥片などが多数確認できたことから接合作業を行った。その結果、多数の接合資料が得られたので11点について掲載する。

接合資料1は接合作業によって、100とHFC-4出土の剥片2点、覆土出土の剥片58点が接合し、重量は391.5gである。素材は手平大の亜角礫を用いている。剥離作業は半割した素材礫の剥離面を打面として、表皮部分を打ち欠いて除去することから始まる。この際にできた剥離面を打面として数回の剥離を行って周縁を整え、さらにこの剥離面をまた打面として数回の剥離を行うことを4～5回繰り返して整形している。同一母岩とみられる剥片がほかに覆土から52点確認されている。接合資料2は接合作業によって、102とHFC-1出土の剥片1点、HFC-1・2出土の剥片133点が接合し、重量は756gである。接合資料から推測すると、素材は手平大の亜角礫を用いており、最終的に長さ15cm程の紡錘形の両面調整石器を作出しようとしている。剥離作業は表皮部分を打ち欠いて除去することから始まる。この際にできた剥離面を打面として数回の剥離を行って周縁を整え、この剥離面をまた打面として数回の剥離を行うことを2～3回繰り返して整形している。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-1から2点、HFC-1・2から139点確認されている。接合資料3は接合作業によって、103とHFC-2出土の剥片85点が接合し、重量は677gである。素材は手平大の亜角礫を用いている。剥離作業は素材礫を半割するところから始まる。a・b2つの半割礫それぞれから、aから103が、bからは接合資料の空洞から長さ13cmほどの両面調整石器が作出されたと推測される。aの剥離作業は半割面の剥離から始まる。この剥離作業の剥離面を打面として、反対の面の表皮部分の除去を行い、続けて数回の剥離を行って整形している。bの剥離作業は表皮部分と半割面を打ち欠いて除去することから始まる。この際にできた剥離面を打面として数回の剥離を行って周縁を整えて整形している。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-2から90点、覆土から11点確認されている。接合資料4は接合作業によって、105とHFC-4覆土出土の剥片2点、覆土出土の剥片58点が接合し、重量は578.5gである。素材は手平大の亜角礫を用いている。剥離作業は上部の表皮部分の剥離から始まる。この剥離面を打面として数回の剥離を行い、下端からの剥離、さらに上端の表皮部分を剥離して剥離面を打面として数回の剥離を行っている。さらに側縁から表皮部分の剥離を行った所で大きな整形作業は終了している。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-1・2から21点確認されている。接合資料5は接合作業によって、109とHFC-2出土の剥片26点と接合し、重量は277.6gである。素材はこぶし大の亜円礫で、半割後に表皮部分を除去し、その剥離面を打面として剥離を行っている。同一母岩とみられる剥片がほかにHFC-2から78点確認されている。接合資料6は接合作業によって、110とHFC-1・2出土の剥片15点、覆土出土の剥片1点が接合し、重量は845.5gである。素材はこぶし大の亜角礫である。剥離作業は表皮部分の除去から始まり、その剥離面を打面として剥離が行われている。同一母岩とみられる接合資料3点、剥片がHFC-1・2から27点確認されている。接合資料7は接合作業によって、112とHFC-2出土の剥片26点、覆土出土の剥片2点が接合し、重量は738gである。素材は人頭大の角礫と推測される。刃部は1・7～10で表皮部分の除去し、その剥離面を打面にして剥離を行って整形している。同一母岩とみられる剥片がHFC-2から28点確認されている。接合資料8はHFC-1出土の石核1点と剥片24点、覆土出土の剥片5点が接合しており、重量は

484.12gである。素材はこぶし大の扁平な亜角礫と考えられる。剥離作業は上端部の表皮部分の剥離から始められ、その剥離面を打面にして正面の表皮部分の剥離を行っている。次に表皮部分から側縁を剥離している。同一母岩とみられる剥片5点が確認されている。接合資料9は覆土出土の剥片30点が接合しており、重量は234.1gである。素材はこぶし大の亜円礫と考えられる。剥離作業は素材を半割するところから始められる。その剥離面や表皮を打面にして剥離を行い、表皮部分を除去している。さらにその剥離面を打面にして剥離を行い、長さ10cm程の両面調整石器のようなものを作り出したと推定される。同一母岩とみられる接合資料1点、剥片12点が確認されている。接合資料10はHFC-4出土の剥片67点、覆土出土の剥片27点が接合し、重量は1,590gである。素材は人頭大の亜角礫と考えられる。剥離作業は表皮部分の剥離から始まっている。その剥離面を打面として数回の剥離を行い、その剥離面を打面として剥離を行うことを各面で繰り返している。最終的には不定形の石核が残ったと推定される。同一母岩とみられる剥片105点が確認されている。接合資料11はHFC-5出土の剥片282点、HFC-6出土の剥片1点、HFC-7出土の剥片2点、覆土出土の剥片13点が接合し、重量は1,608gである。素材は扁平な人頭大の亜円礫である。剥離作業は節理面でa・bの2点に分割するところから始まる。a・bともに側縁の節理面側から剥離をはじめ、剥離面を打面にして数回の剥離を行うことを繰り返して周縁部の表皮を剥離している。さらに同様にして周縁の剥離を繰り返して、整形を行っている。空洞部分から推測すると、最終的には長さ20cm・幅10cm程の紡錘形状の両面調整石器を取り出したと思われる。同一母岩とみられる接合資料12点、剥片9,362点が確認されている。

H-44 (図IV-269～272、図版37・137・138)

位置：K 3・4、L・M 3～5区

規模：11.02 / 8.00×7.24 / 4.70×0.78m

平面形：楕円形

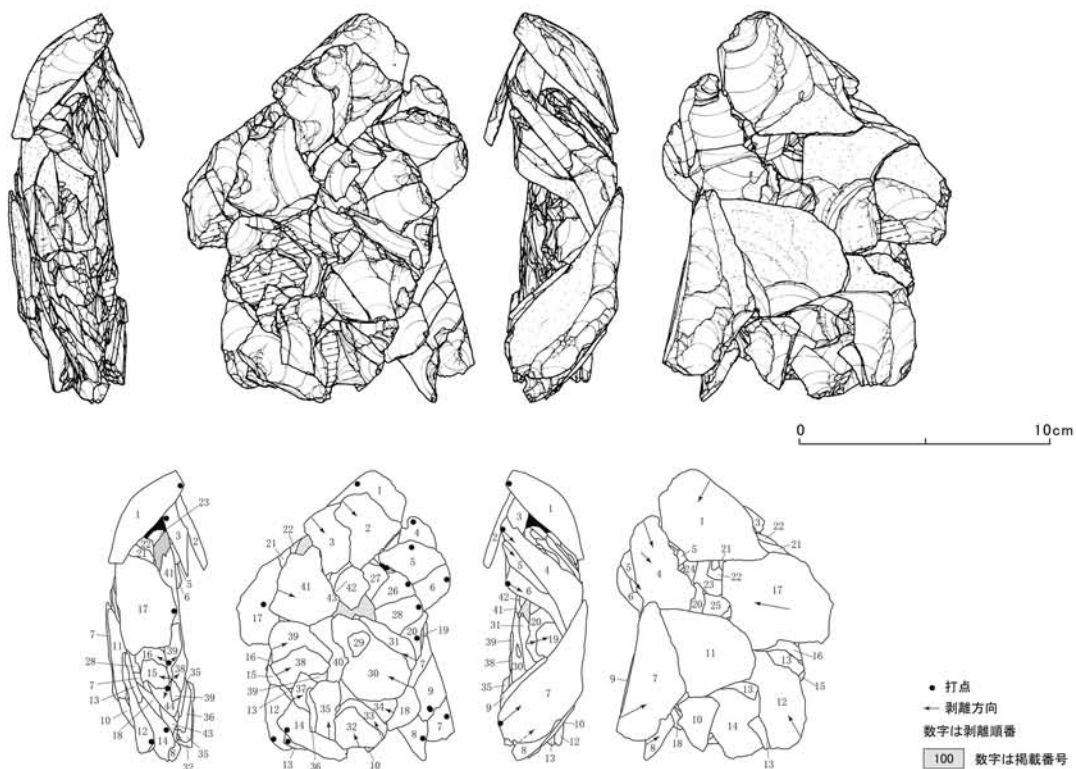
確認・調査：Ⅱ層上面の調査中にB-TmやKo-dの大きな落ち込み確認した。落ち込みの範囲を確認するためにB-TmやKo-dを含む層を鍵層として上面の検出に努めた。その結果、東西に長軸をもつ落ち込みであることが確認された。東西・南北にベルトを設定、ベルトに沿ってトレンチ調査を開始した。トレンチ調査の結果、ベンチ状の構造をもつ住居跡であること、フラスコ状ピットを壊して構築されていることが確認された。トレンチ調査をもとに覆土の掘り下げを開始した。周縁にベンチ状構造をもつ大型の住居跡を検出した。フラスコ状ピット8基、土坑1基を壊して構築されていた。CB-1の炭化物を採取しフローテーションを行い、イシカワデ（イヌダテ属）の炭化果実を検出した。

覆土：覆土には盛土の流入は認められない。盛土は住居跡外の南側3m付近に盛土の縁辺が認められ、盛土範囲が及んでいなかったことが確認できた。覆土は自然堆積で、上屋の葺土構造による崩落土などは認められない。覆土1層にはB-TmやKo-dを含む。覆土2・3層は基本層のⅡ層中層に相当する。覆土4～11層は流れ込み・崩落土と考えられる。周辺には掘り上げ土は認められなかった。

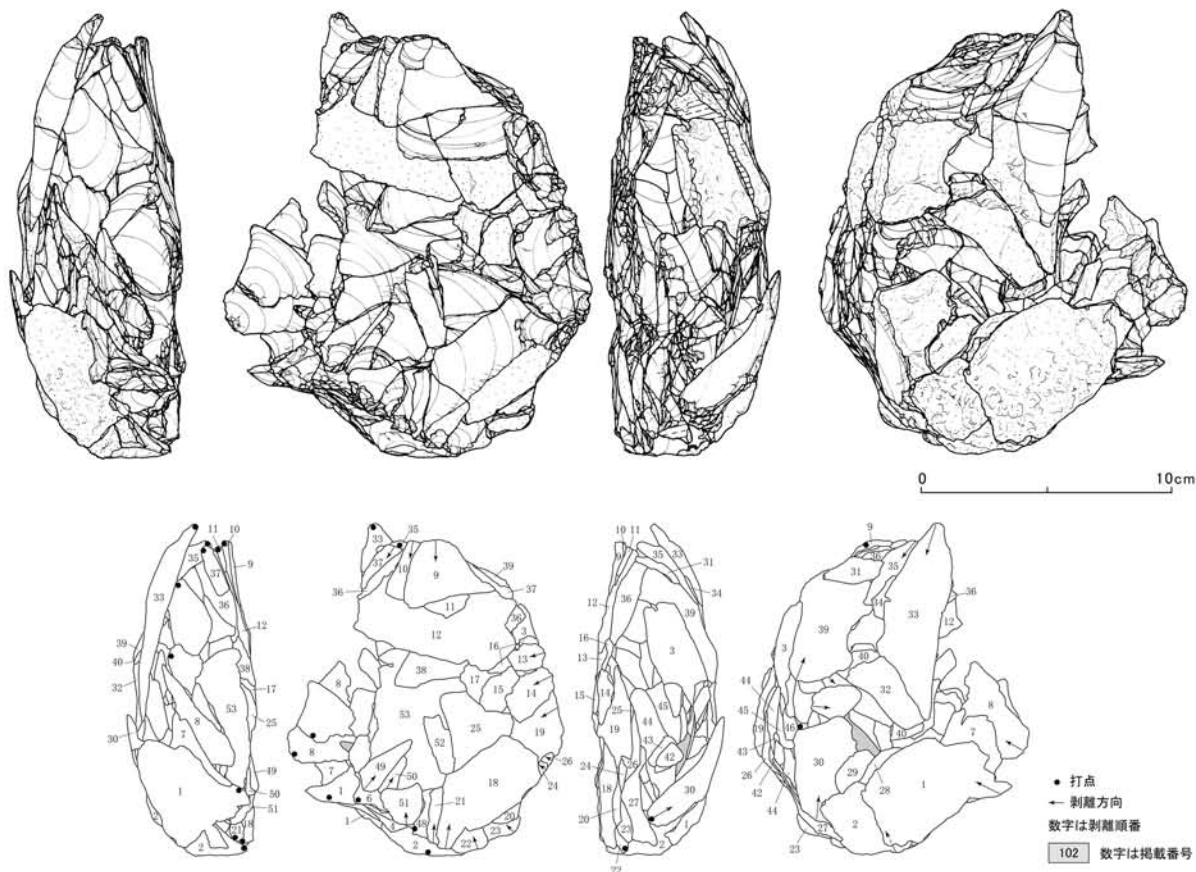
付属遺構：幅0.5～1.6mのベンチ状の構造が壁周縁を廻る。焼土は9か所検出され、HF-7は西側に土手状の土盛りが施された炉跡である。HF-1・9は住居跡中央部、HF-3は床面部分、HF-2・4・5～8はベンチ部分から検出された。柱穴状ピットは95か所検出された。主柱穴は6本で、HP-3・7・8・14・40・41・43・44・51が相当すると考えられる。西側の壁部分には小さな土留め跡と思われる小ピットが廻る。

遺物出土状況：床面・床面直上からⅡ群B-5類土器・Ⅲ群A類土器など59点、石器等180点、HFからⅡ群B-5類土器3点、石器等6点、HPからⅡ群B-5類土器5点、石器等26点、覆土からⅢ群A類土器など543点、石器等456点が出土した。石製品は1点出土した。

接合資料 1

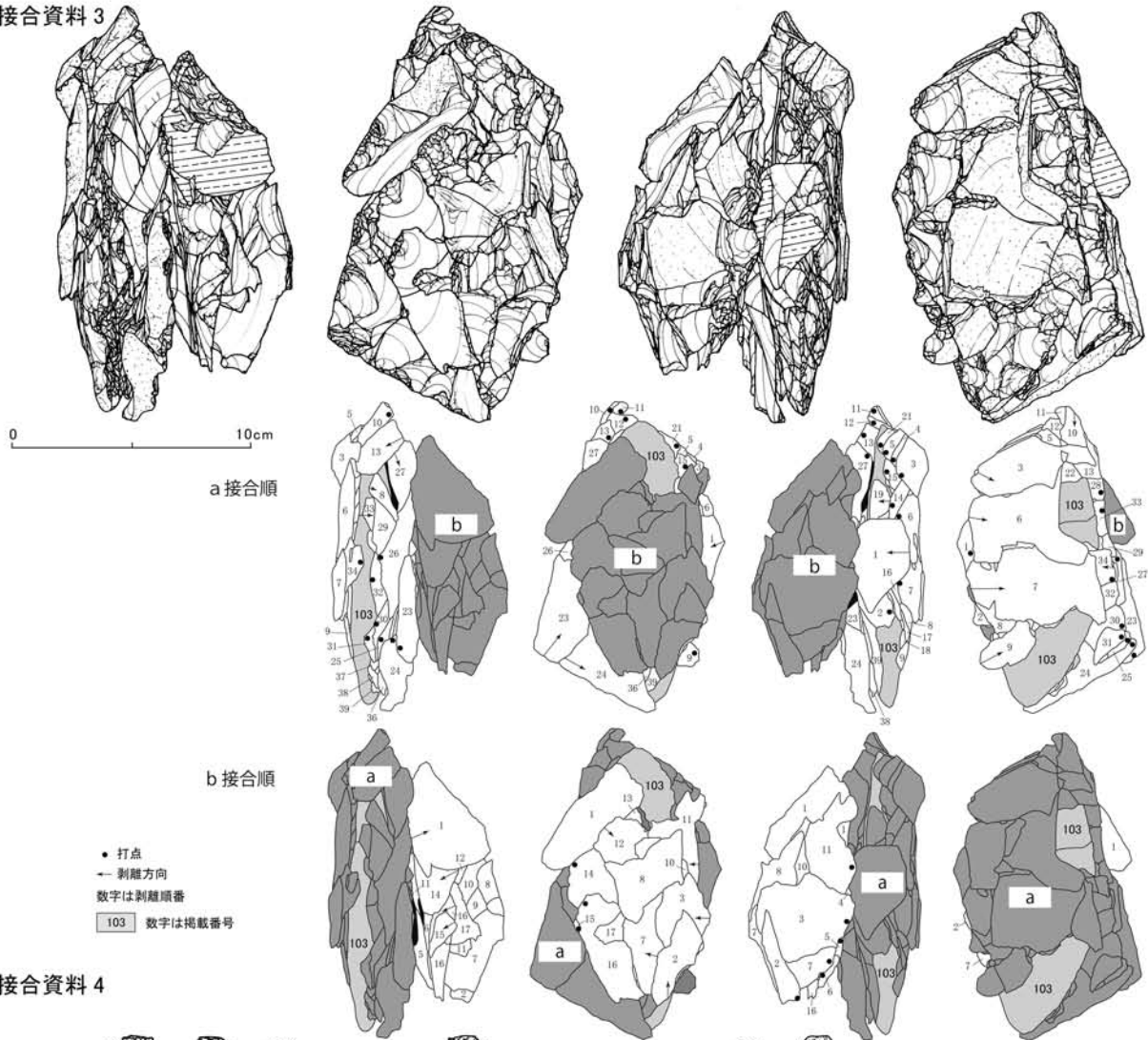


接合資料 2

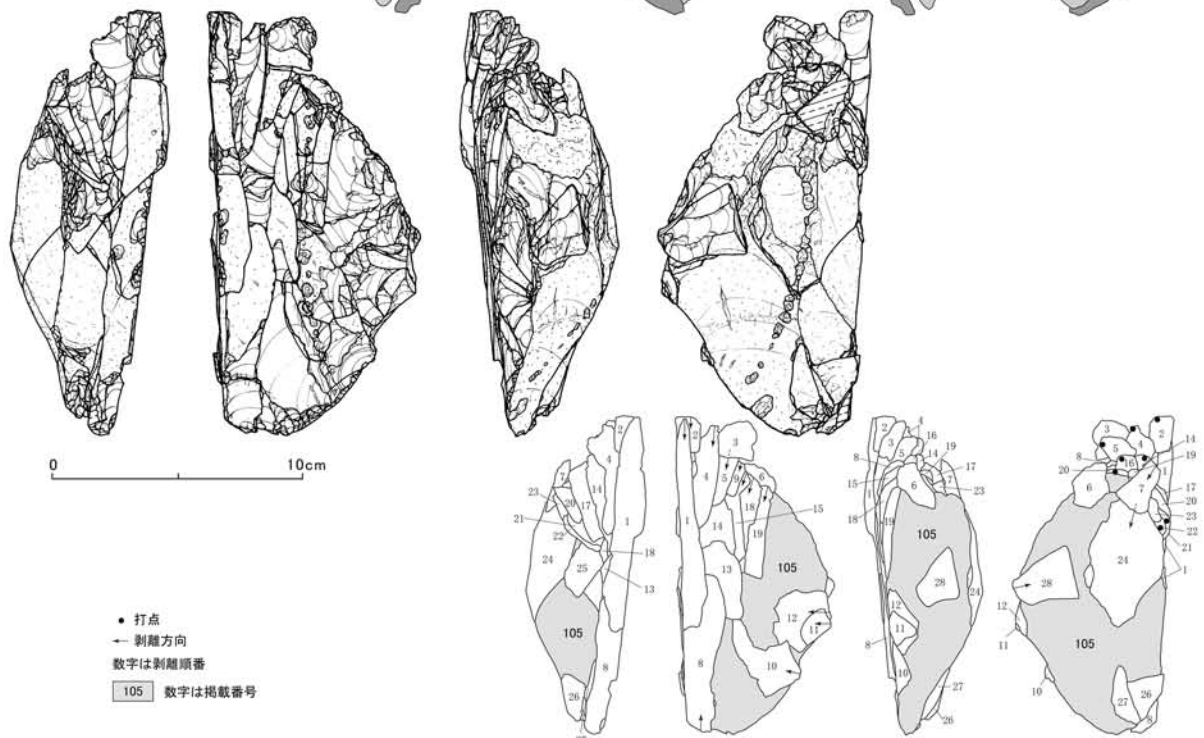


図IV-264 H-43 石器接合資料 (1)

接合資料 3

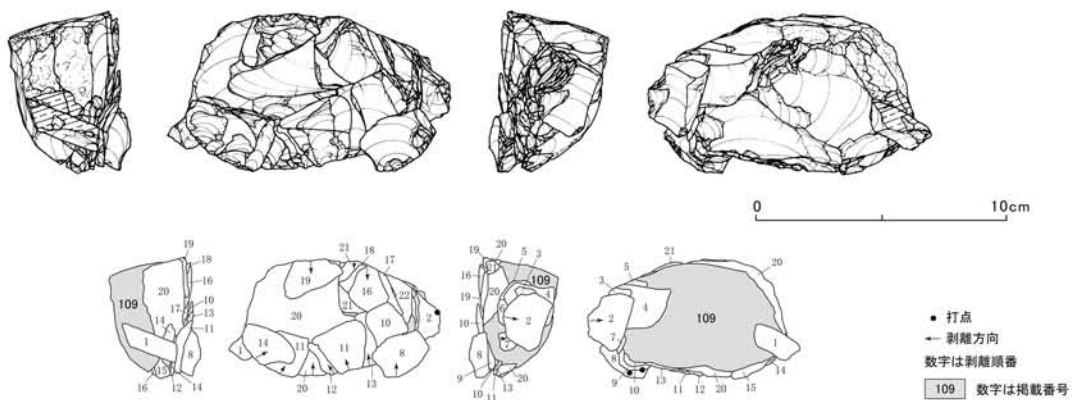


接合資料 4

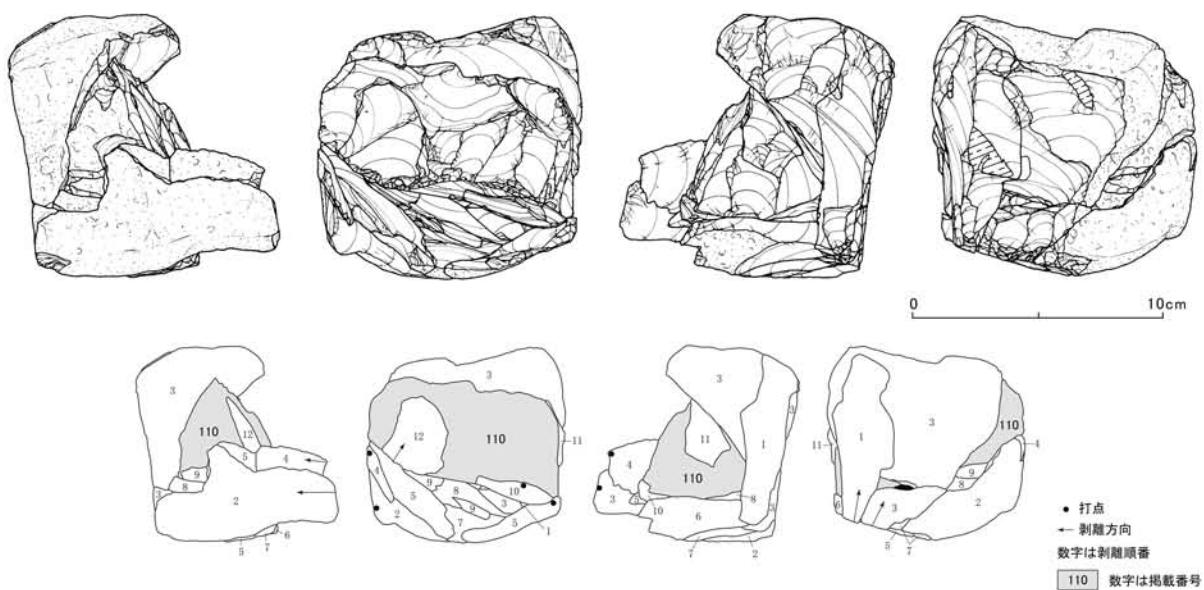


図IV-265 H-43 石器接合資料 (2)

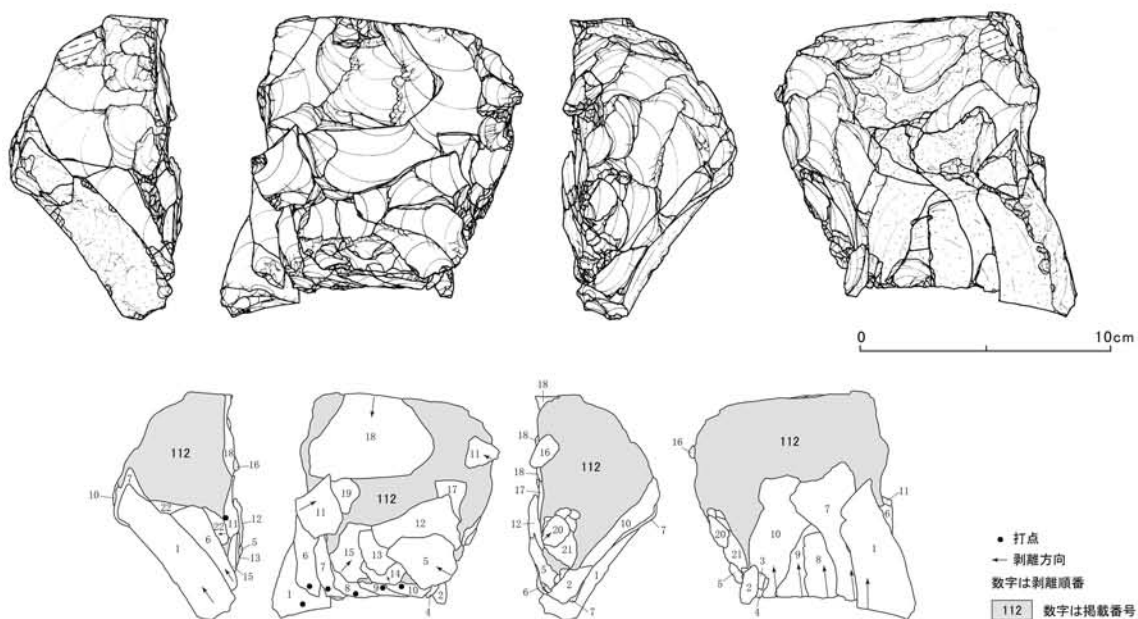
接合資料 5



接合資料 6

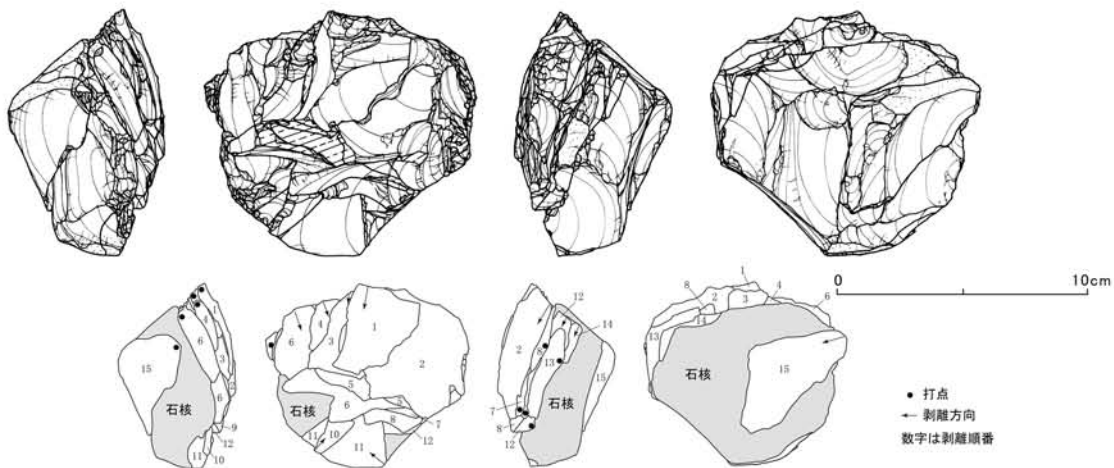


接合資料 7

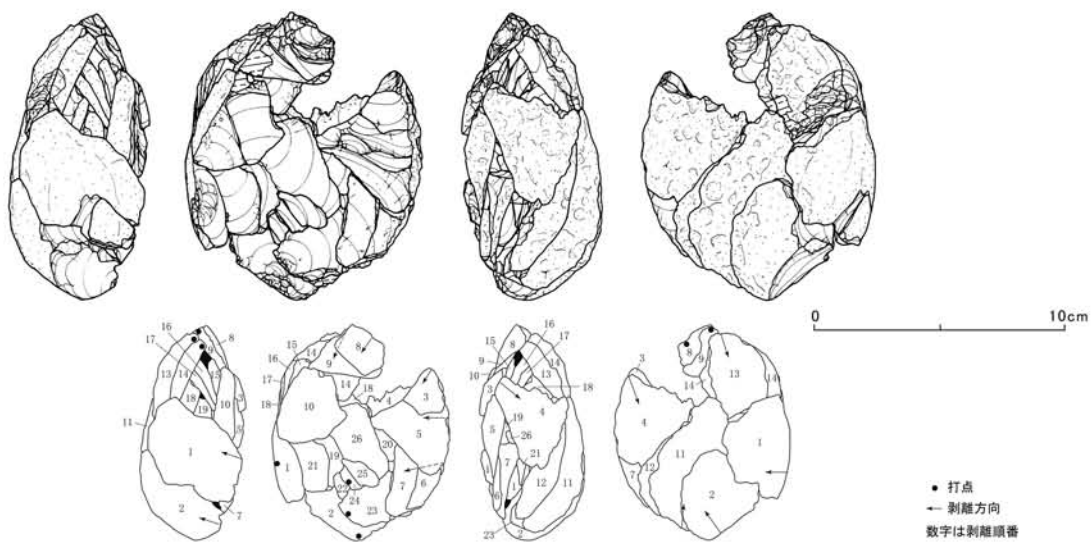


図IV-266 H-43 石器接合資料 (3)

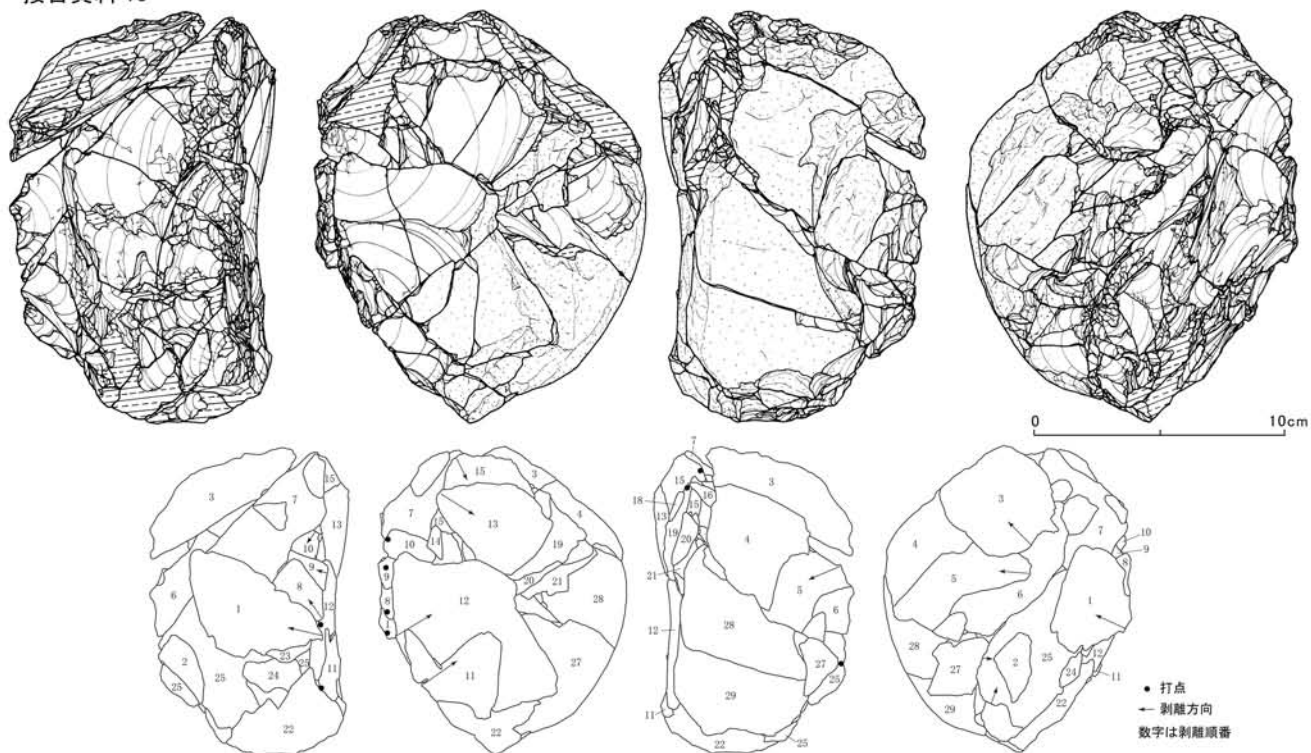
接合資料 8



接合資料 9

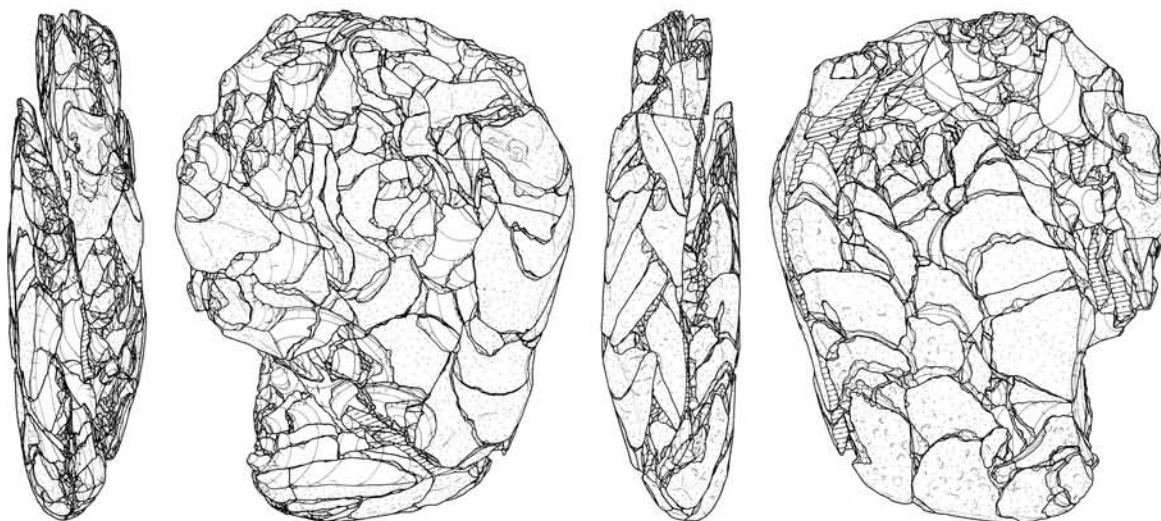


接合資料 10



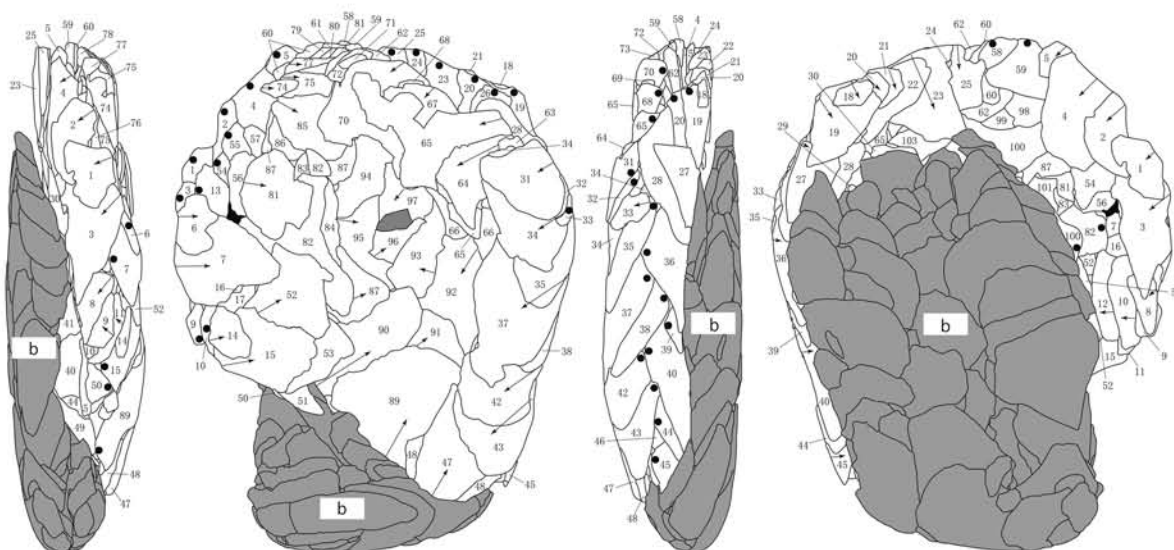
図IV-267 H-43 石器接合資料 (4)

接合資料 11



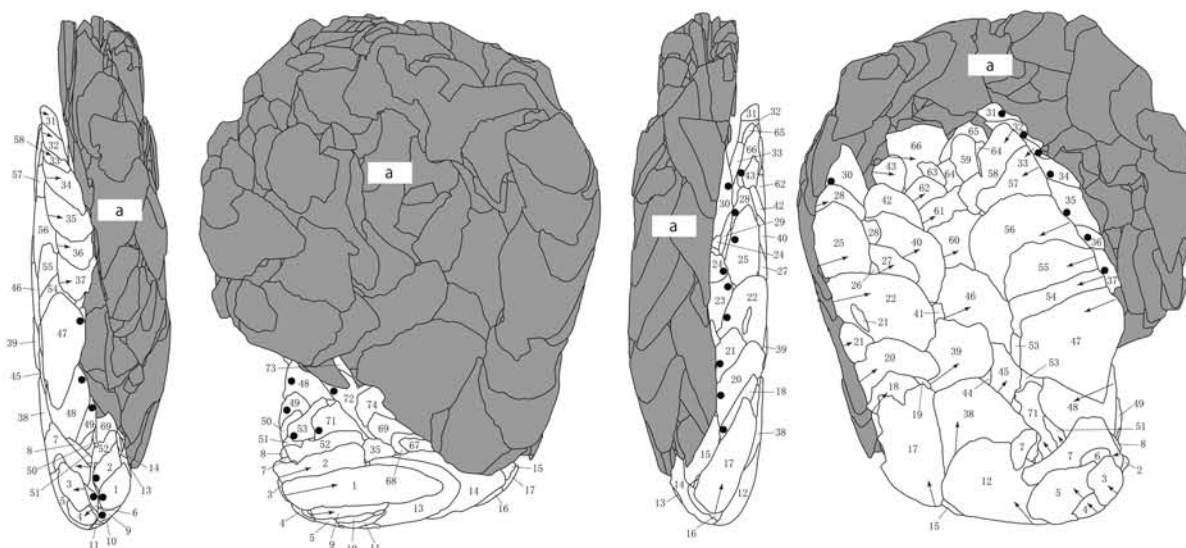
a 接合順

0 10cm



● 打点
 → 剥離方向
 数字は剥離順序

b 接合順



図IV-268 H-43 石器接合資料 (5)

時期：床面出土遺物から縄文時代前期末葉のと考えられる。床面から検出された炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行い、4,450±30yrBPの測定結果を得た。(熊谷)

掲載遺物：(土器) 14は床面、6・11・12・20は柱穴状ピット(HP)、5・7は焼土(HF)、2・8～10・13・15～19は床面直上、1・3・4は覆土出土である。

Ⅱ群B-4類土器(9)：9は単軸絡条体の回転文と結節羽状縄文が施された体部破片。

Ⅱ群B-5類土器(1・5～8・10～20)：1は斜行縄文が施された体部下半。5～7・14は口縁部破片。5は口縁部が肥厚するもの。口唇・肥厚帯下端に縄の圧痕が加えられて、無文地の肥厚帯に縄線文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。6は口唇に縄の圧痕文が加えられ、無文地の口頸部文様帯には単軸絡条体の圧痕文が施されている。7は口縁部に縄線と半截竹管状工具の刺突文が施されている。14は波頂部分で、円柱状の粘土の貼り付けによって波頂部が作出され、頂部に刺突文、側面に2本一組の縄線が2列加えられている。貼付帯下位に縄線・刻み目が加えられた貼付帯が施されている。文様帯には縄線文が加えられている。Ⅲ群A類土器の可能性もある。8は口頸部下端の肩部分。肩部分に複節の斜行縄文が施されている。文様帯内の文様構成は不明である。10は条痕文が施されたもの。11は多軸絡条体の回転文が施されたもの。12は複節の斜行縄文が施されたもの。13は判然としないが多軸絡条体の回転文が施されたものと思われる。15～17・19は斜行縄文が施されたもの。18・20は結束羽状縄文が施されたもの。

Ⅲ群A類土器(2)：2は体部下半を欠失する。口縁は波状口縁で、頂部が2個一組の突起からなる。口唇には縄の圧痕文が加えられている。口縁部文様帯下端は縄の圧痕文が加えられた貼付帯で区画されている。文様帯は無文地で、波頂部直下にドーナツ状の貼り付けと垂下する貼り付けが施されている。貼付帯には縄の圧痕文、文様帯には波状口縁に沿って4本一組の縄の圧痕文と縄端による馬蹄形圧痕文が加えられている。体部は結束斜行縄文である。

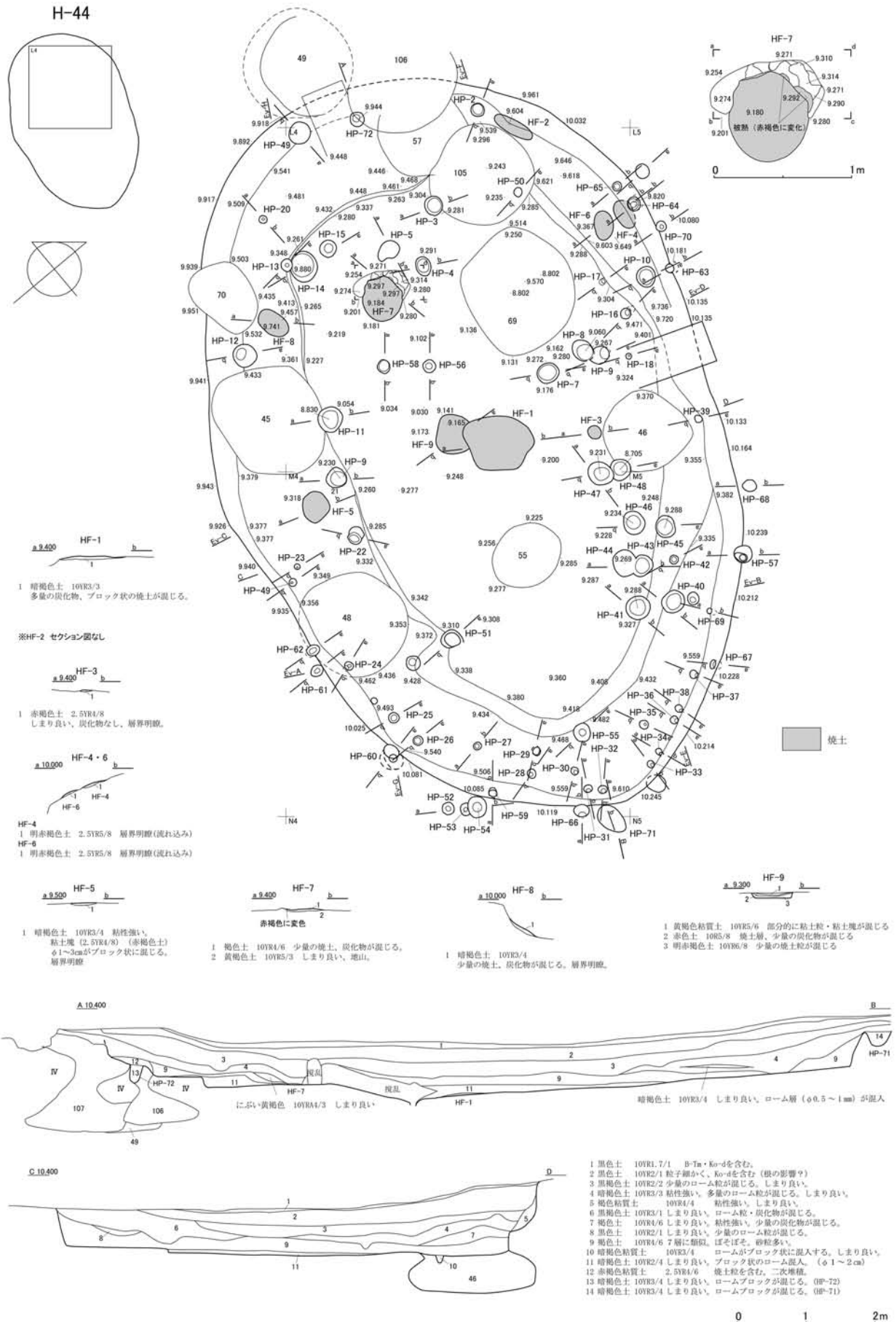
Ⅳ群A類土器(3)：3は体部下半の資料である。体部下半の地文上に横環する2本の貼付帯が施され、貼付帯間を結ぶ斜位の貼り付けが加えられている。

Ⅴ群C類土器(4)：4は体部上半。浅鉢と思われる。口縁部断面形は体部下半からストレートに立ち上がる器形で、口唇先端はやや尖り、切り出し状気味である。口唇の内面に幅広(6mm)の沈線がめぐり、口縁部外面には鋭い沈線が6条加えられ、上から3段目の沈線上に、2個一組のB字状突起が5cmほどの間隔で貼り付けられ「工字文」を作出している。

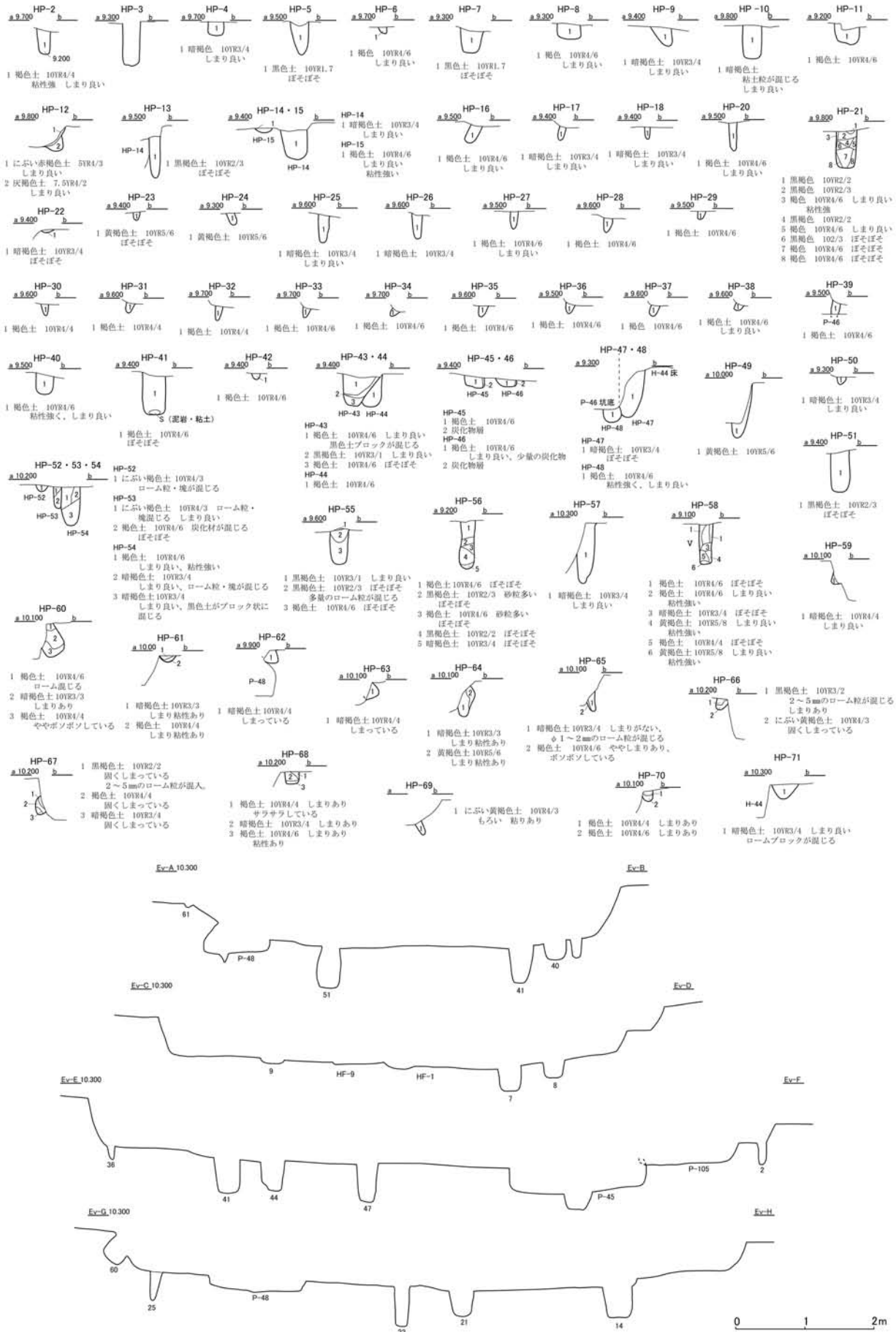
(石器)22・31は床面、26は床面直上、21・23～25・27～30・32は覆土出土。21は石槍。有茎で柳葉形。頁岩製。22は石錐。つまみ部があり、剝片の一部に機能部を作出したもの。頁岩製。23～26はスクレイパー。23～25は縦長剝片の側縁に刃部を作出したもの。23・24は使用痕とみられる光沢が確認できる。25は刃部が磨滅している。26は横長剝片の側縁に刃部を作出したもの。すべて頁岩製。27はたたき石。壱円礫の頂部に敲打痕のあるもの。珪岩製。28は凹み石。扁平な楕円礫の平坦面に浅い凹みがあるもの。端部に敲打痕がみられる。安山岩製。29～31はすり石。29・30は扁平な楕円礫を半割し、割れ面をすり面としたもの。30はすり面周縁を打ち欠いて調整している。29は砂岩製、30は凝灰岩製。31は北海道式石冠の未成品。平坦面が研磨された扁平礫を半割し、握部を敲打で表現している。すり面は周縁を打ち欠き一部敲打しているが、すり痕はみられない。砂岩製。32は石製品。扁平な楕円礫の周縁に断面がV字状のすり面がみられる。平坦面の一部に敲打痕がある。石鋸のようなものかと思われるが、用途不明のため石製品とした。安山岩製。

H-45 (図IV-273・274、図版38・39・138)

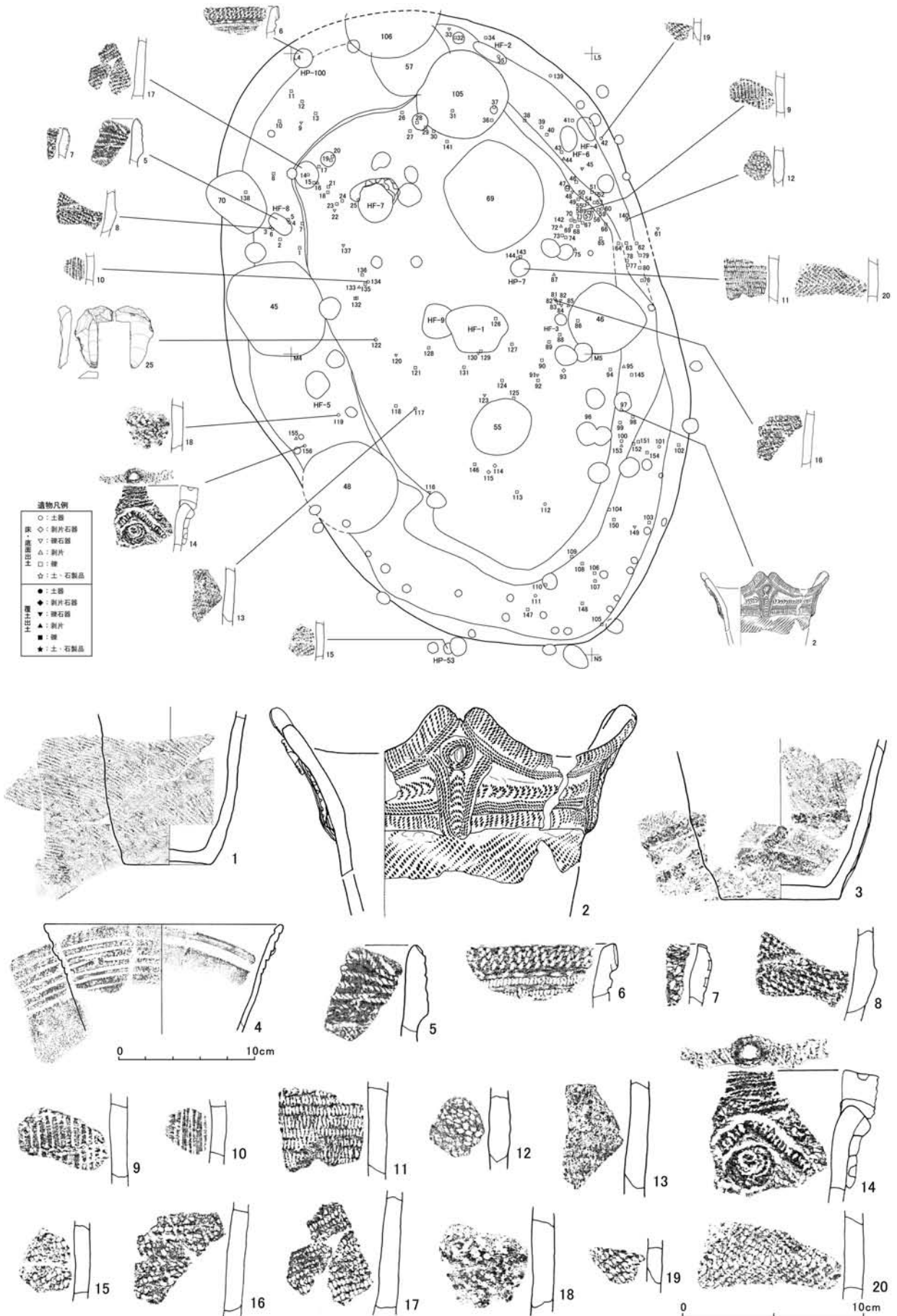
位置：N10区



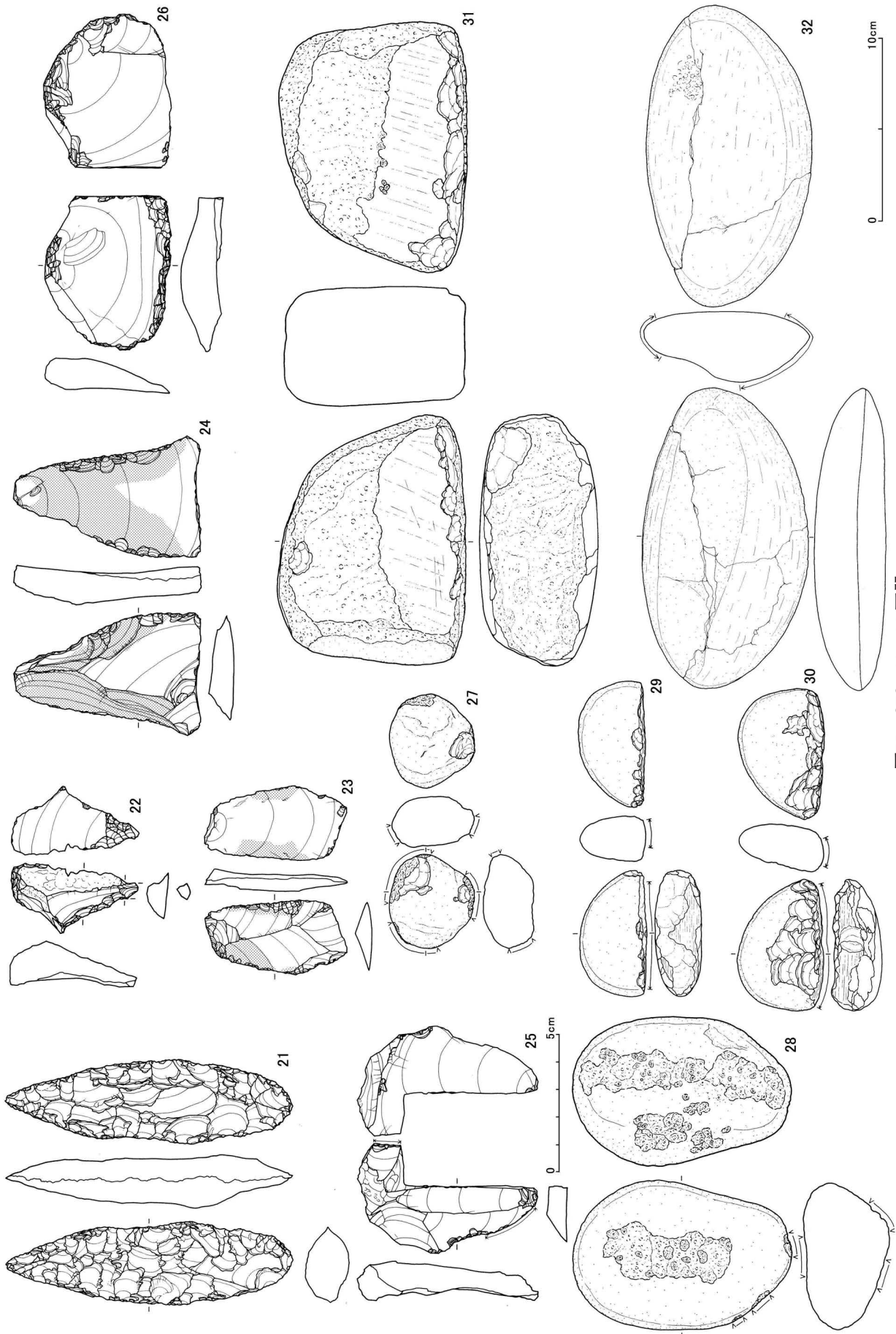
図IV-269 H-44



図IV-270 H-44 セクション図



图IV-271 H-44 遺物出土狀況圖 土器



图IV-272 H-44 石器

規模：2.60 / 1.83 × (1.80) / (1.80) × 0.42m

確認・調査：I層を除去した段階で、褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

平面形：全体の約四分の三が調査区外にあるため、平面形は不明である。床はやや凹凸がある。中央部はP-52構築時に壊されている。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構：支柱穴と思われるものが1基確認された（HP-3）。

遺物出土状況：床面からⅢ群A類土器2点、礫・礫片5点、覆土からⅡ群B-5類土器など278点、石器等141点が出土した。

時期：周辺の遺構からみて、縄文時代前期後半Ⅱ群B-5類土器の時期と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：(土器)6は床面、3はⅡ層中、その他は覆土出土である。

Ⅱ群B-3類土器（1・3）：1は単軸絡条体の回転文が施された体部下半。3は緩やかな波状口縁の口頸部破片。口唇に縄の圧痕文が加えられている。文様帯下端は縄線と綾絡文で区画され、無文地の文様帯には波頂部を頂点とする入れ子の山形と波頂部から垂下する撚糸圧痕文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。

Ⅱ群B-5類土器（4～8・11）：4は刺突が加えられた肥厚帯で口頸部文様帯が区画され、無文地の口頸部には2本一組の縄線文が施されている。5・8は口縁部破片。口唇には縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯に2本一組の縄線文が加えられている。6は口唇に撚糸の圧痕文が加えられ、文様帯に2本一組の縄線文と半截竹管状工具内面の刺突文が交互に施文されている。体部は多軸絡条体の回転文である。7は2個一組の口縁部突起と思われる。口唇に縄の圧痕が加えられ、無文地の文様帯に2本一組の縄線文が加えられている。11は不規則な斜行縄文が施された体部破片。

Ⅲ群A類土器（2・9・10）：2は縄文が施された底部破片。9は口唇に撚糸の圧痕が加えられ、無文地の口頸部に組紐状の圧痕文が施されている。10は口唇に縄の圧痕が加えられ、無文地の口頸部に3本一組の縄線文と馬蹄形圧痕文が加えられた口頸部破片。

(石器)12・16は覆土下層、13～15は覆土出土。12はつまみ付ナイフ。両面加工でへら状のもの。頁岩製。13～15はスクレイパー。縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。14は使用痕とみられる光沢が確認できる。すべて頁岩製。16は石斧片。短冊形で両刃。刃部は欠けている。全面を研磨調整しており、側縁にはすり切り痕が残存している。基部は折損しており、破損面周縁に軽い打ち欠きがみられる。緑色泥岩製。

H-46 (図IV-275、図版38)

位置：M 5区

規模：(0.97) / (0.95) × (0.83) / (0.64) × 0.56

確認・調査：H-45の覆土を掘り下げた段階で、褐色の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘り上げ土とみられる。

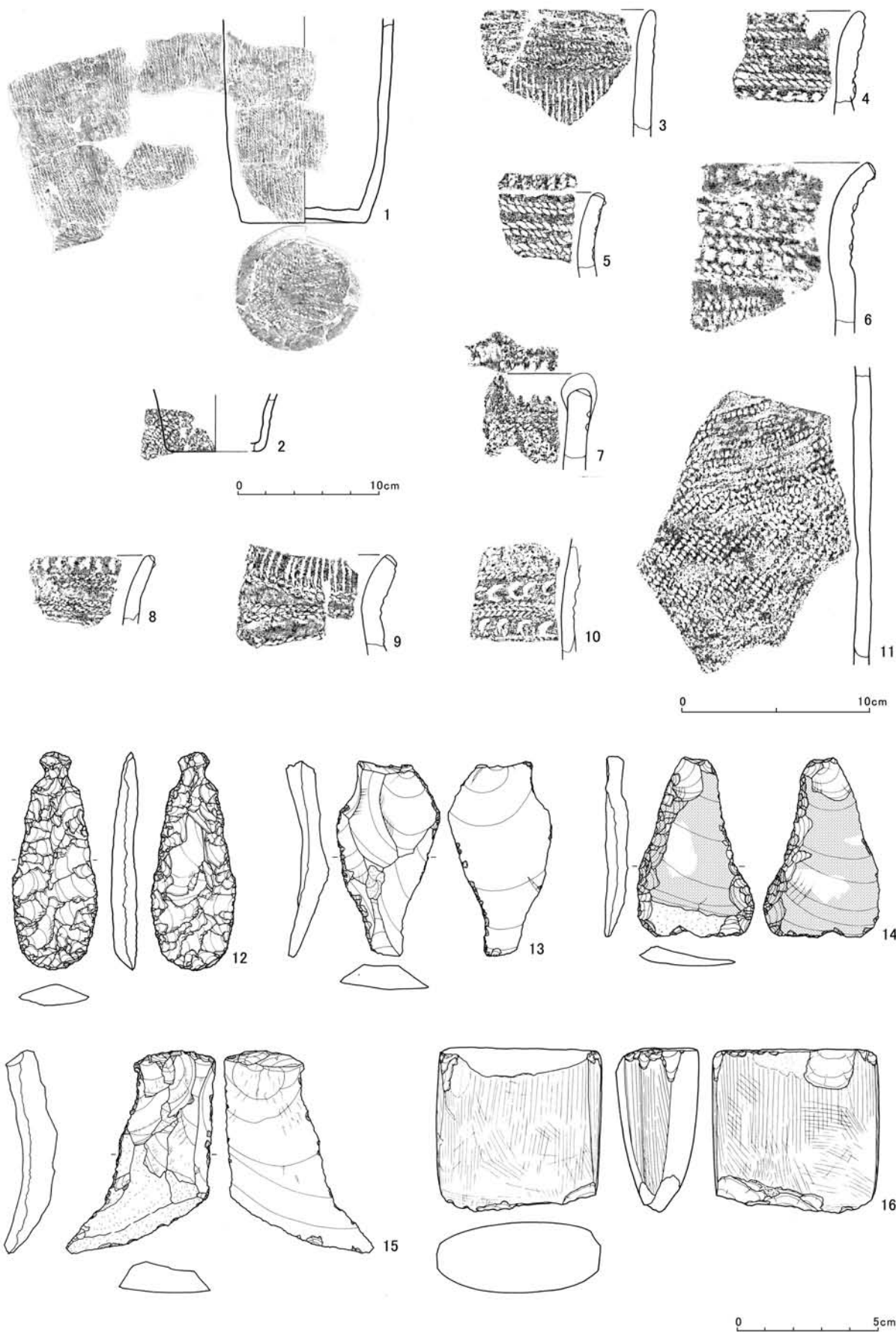
平面形：平面形は不明。床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構：検出されていない。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-5類土器など125点、石器等74点が出土した。

時期：周辺の遺構からみて、縄文時代前期後半Ⅱ群B-5類土器の時期と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：(土器)いずれも覆土出土である。1はⅡ群B-4類土器、2～10はⅡ群B-5類土器である。



图IV-274 H-45 遺物

Ⅱ群B-4類土器(1): 1は口頸部破片。無文地の口頸部に2本一組の縄線文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(2~10): 2・3は斜行縄文が施された体部破片。4は口縁部破片。口頸部文様帯に縦位の短縄線と3本一組の縄線文が施されている。5は頸部破片。3本一組の縄線文が施されている。6は頸部下端~体部の破片。口頸部文様帯は3~4本一組の縄線と綾絡文で区画され、文様帯に縦位の短縄線が加えられている。体部は単節の斜行縄文である。区画帯部分に剥離が認められ、縦位の貼付帯が施されていたと思われる。7は結束羽状縄文が施された体部破片。上端に縄線文が認められる。8・9は斜行縄文が施された体部破片。10は器面に結束羽状縄文が施された底部破片。Ⅲ群A類土器の可能性がある。

(石器)11は覆土出土のすり石。扁平な楕円礫を半割し、割れ面をすり面としたもの。被熱している。安山岩製。

H-47・48 (H-47: 図IV-276、図版39・139 H-48: 図IV-277~279、図版39・139)

調査区外への遺構の拡大を確認するために北側のトレンチ調査を実施した。その際、深さ20cm、長さ5mほどで、中央部が幅3mほど、深さ30cmほど窪みをもつ、にぶい褐色土と褐色土の落ち込みを確認した。当初、ベンチをもつ住居跡を想定し、調査境界の壁面にほぼ直交したベルトを設定し掘り下げた。その結果、周縁のベンチ部分と一段低い平坦な床面を検出した。中央部の落ち込みの床面東側はP-62のフラスコ状ピットによって壊されていた。調査区境界のセクションベルトを清掃・精査した際、ベンチ状遺構とほぼ同様のレベルの覆土2層下位から焼土層を確認した。また、検出された焼土と同レベルに遺物が集中して出土したことから、新旧2つの住居跡の重複であることが確認された。中央部の落ち込みをH-47、H-47の上部を壊して構築した大きな落ち込みをH-48と呼称した。

H-47

位置: L3区

規模: (6.30) / (6.16) × (2.60) / (2.40) × 0.26m

平面形: 楕円形

確認・調査: 東側の壁周辺はP-62によって、上部はH-48によって壊されている。床面は、H-48床面のIV層中を30cmほど掘り込んで平坦に構築されている。壁は南側がほぼ垂直に、西側は緩やかに立ち上がる。北側は調査区外に伸びているため平面形は不明であるが東西に長軸をもつ楕円形になるものと考えられる。

覆土: 覆土は自然堆積である。

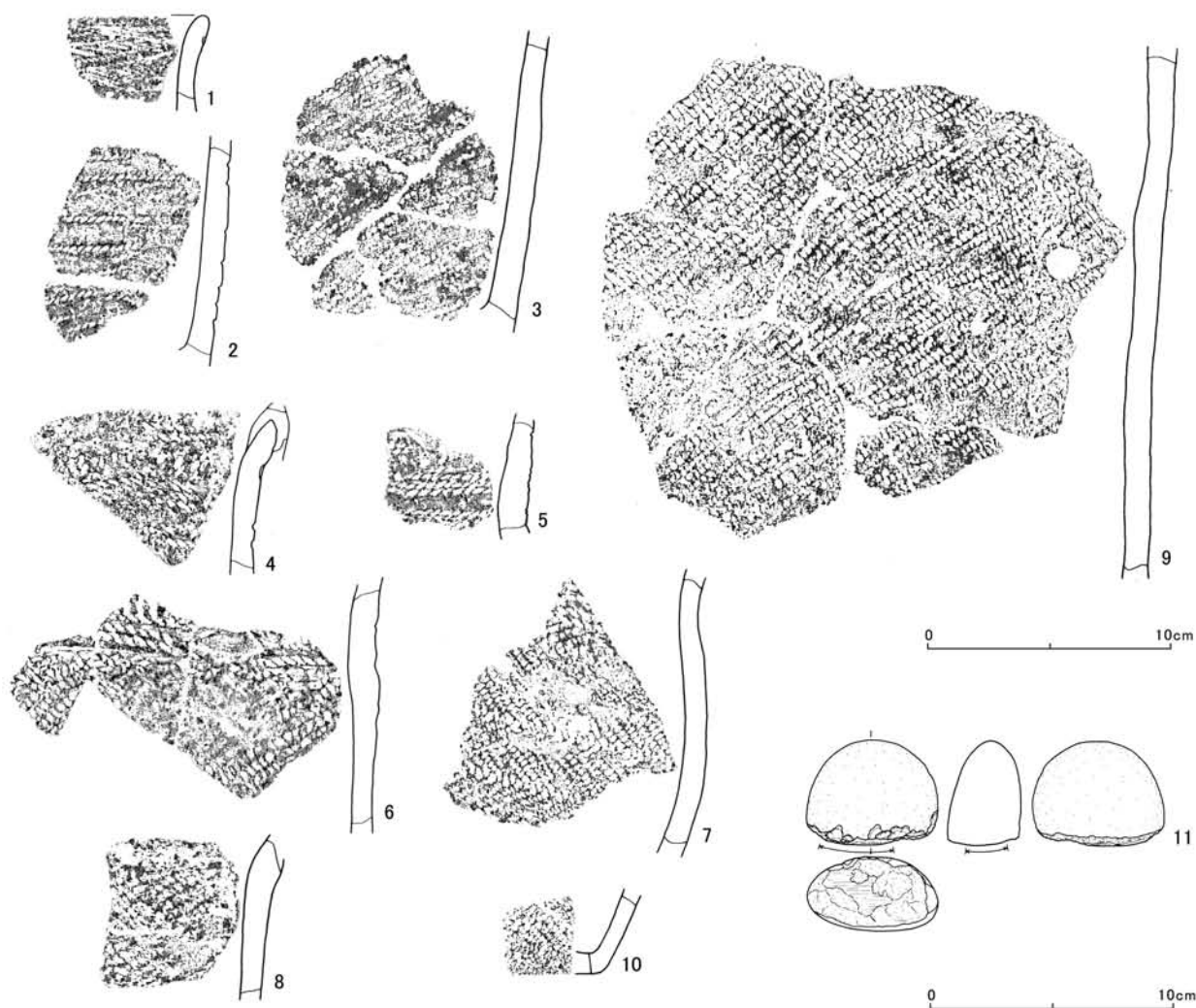
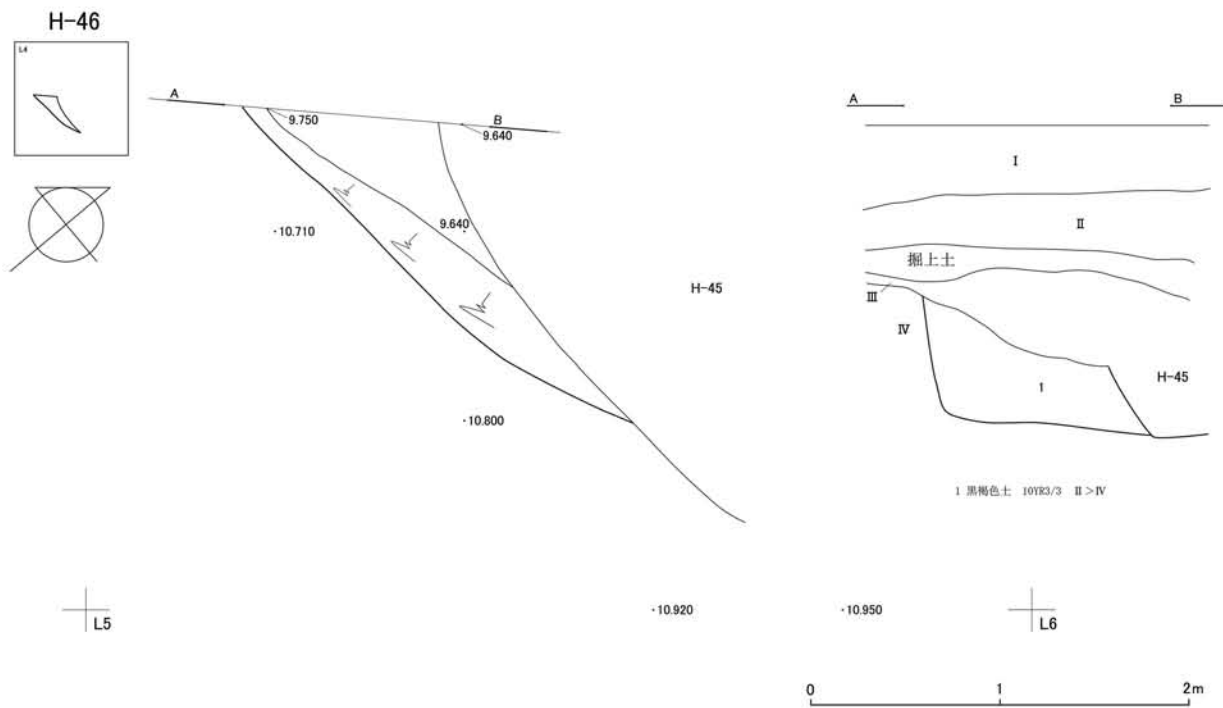
付属遺構: P-62によって東側半分が壊されているが、床面から周辺を土手状の土盛りが環状に施された炉跡(HF-1)が検出された。明瞭な焼土は検出されなかったが、被熱によって固く締まり、周辺から少量の炭化物が出土している。同様な炉跡はH-44・54から検出されている。柱穴状ピットは9基検出され、壁際に3基検出された。

遺物出土状況: 床面からⅡ群B-5類土器1点、石器等4点、HPからⅡ群B類土器3点、石器等3点、覆土からⅡ群B-5類土器など25点、石器等19点が出土している。

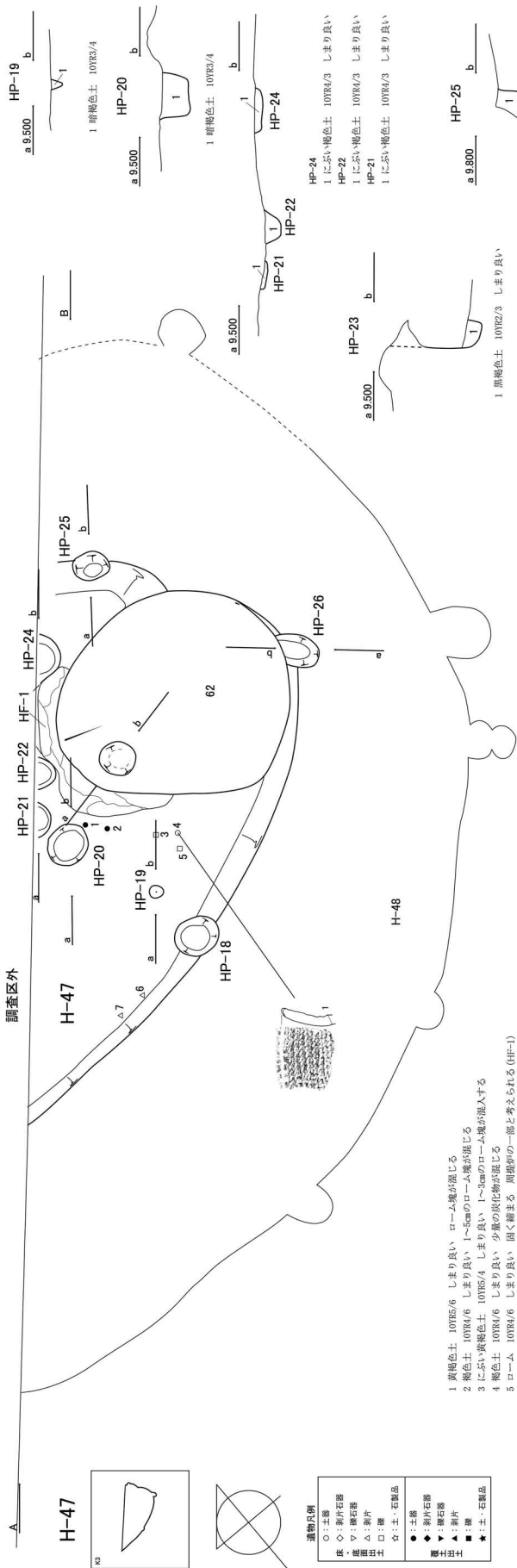
時期: 出土遺物から、縄文時代前期末葉と思われる。

掲載遺物: (土器) 1は床面、その他は覆土出土である。

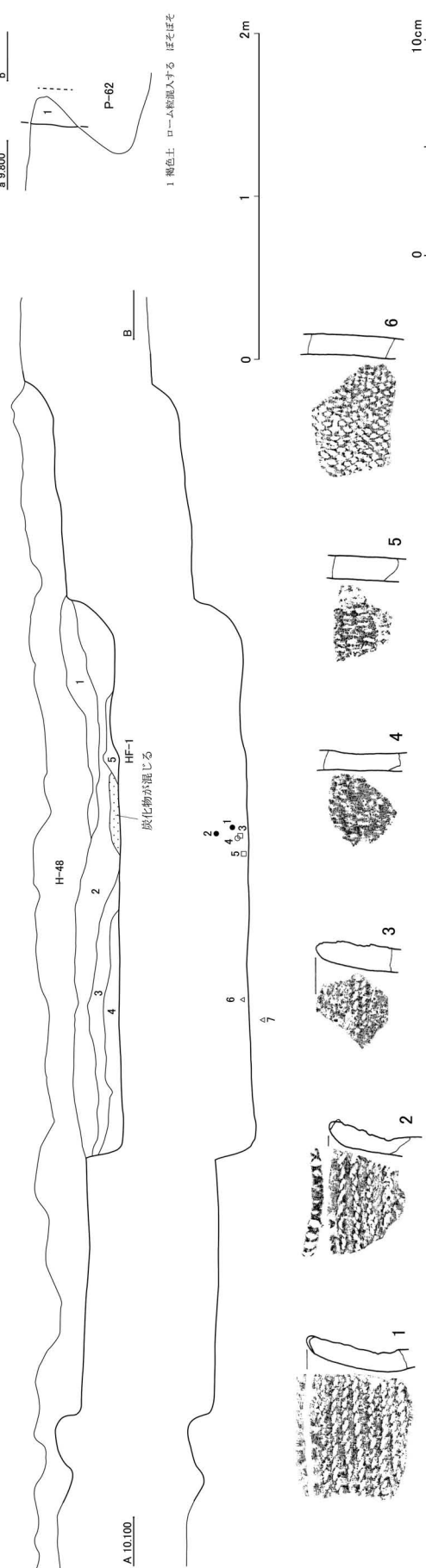
Ⅱ群B類土器、Ⅱ群B-5類土器(1~6): 1・2は口頸部破片。口唇に縄の圧痕が加えられている。無文地の文様帯に縄線文が施文されている。3は無文地の文様帯に2本一組の縄線文が施されたもの。4~6は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。



図IV-275 H-46



A 10.500



図IV-276 H-47

H-48**位置**：K 2～4区**規模**：(3.38) / (3.16) × (1.52) / (1.40) × 0.50m**平面形**：楕円形？

確認・調査：北側が調査区外に広がり、全体の半分ほどを検出した。平面形は東西に長軸をもつ楕円形になるものと思われる。中央部はH-47の上部を壊して床面を構築している。床面はIV層上部を25cmほど平坦に掘り込まれている。東側はP-62によって壊されている。壁は緩やかに立ち上がる。

覆土：覆土は自然堆積である。

付属遺構：焼土が2か所から検出された。HF-1は南側壁側のHP-21の上部から、HF-2はトレンチ調査の際、南側を喪失しセクション面で確認した。住居跡のほぼ中央部に位置したものと考えられる。柱穴は24基検出された。住居跡外から壁にかけて、多くの柱穴が廻る。

遺物出土状況：南側の壁際から大小2か所から集石が検出された。これらの礫は極めて脆く、粘土質のもので石器の素材として考えられないものである。これらは粒子が細かく均一であり、敲打によって粉碎でき、土器の素材としての用途が想定できる。これらは、茂辺地～札苅地区の河口周辺を除く海岸線に分布する礫の主体をなすもので、なんらかの目的で搬入されたものと考えられる。床面からII群B類土器・III群A類土器など27点、石器等56点、HPからII群B-5類土器など9点、石器等16点、覆土からII群B-4類土器など97点、石器等69点が出土している。

時期：出土遺物から、II群B-5類土器～III群A類土器の時期、前期末葉～中期初頭と考えられる。

掲載遺物：(土器) 2・3・5・6・7・9は床面、その他は覆土出土である。1・2はII群B-3類土器、3はII群B-4類土器、4～8 II群B-5類土器、9はIII群A類土器である。

II群B-3類土器(1・2)：1は直前段反撚の原体による縄文が施された体部破片。2は口頸部破片。口頸部に斜行縄文、体部は多軸絡条体の回転文である。

II群B-4類土器(3)：3は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

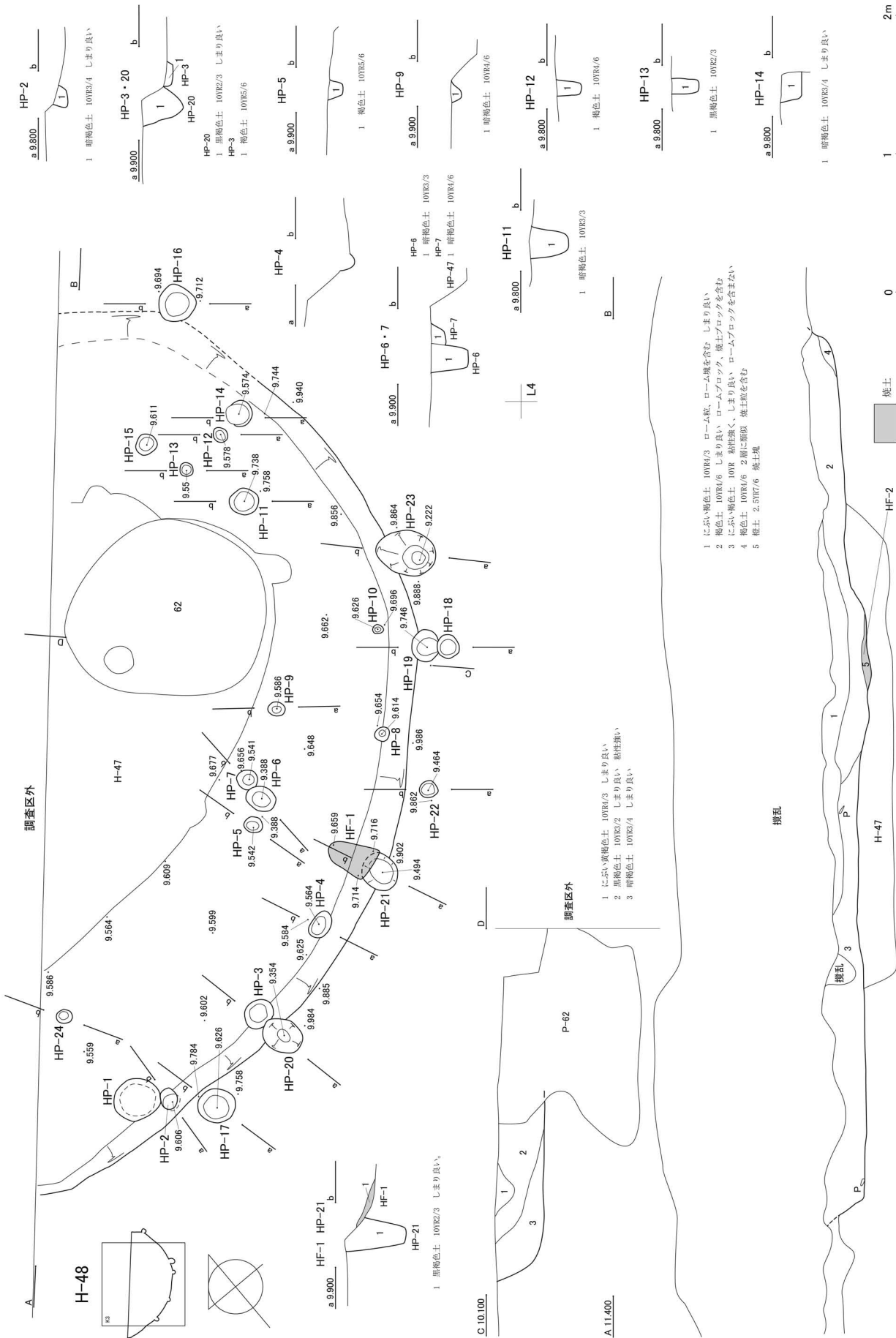
II群B-5類土器(4～8)：4～7は口頸部破片。4～6は口唇に縄の圧痕が加えられてもの。4は無文地の文様帯に組紐状の縄線文、5は2本一組の縄線文、6は縄線文が施されている。7aは口縁部の突起部分。器面には絡条体圧痕文が施されている。7b～7dは体部破片。横走気味の縄文が施され、7bの上端には絡条体圧痕文が認められる。8は多軸絡条体の回転文である。

III群A類土器(9)：9は体部破片。口頸部文様帯下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、文様帯内に2本一組の縄線文が、体部に結束斜行縄文が施されている。

(石器)10・11は床面出土。10は石斧。短冊形で両刃の円刃。基部を折損している。打ち欠き整形後、全面を研磨調整している。刃部は25°ほど傾いている。緑色泥岩製。11はすり石で扁平打製石器。板状礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の狭い機能部を作出したもの。安山岩製。

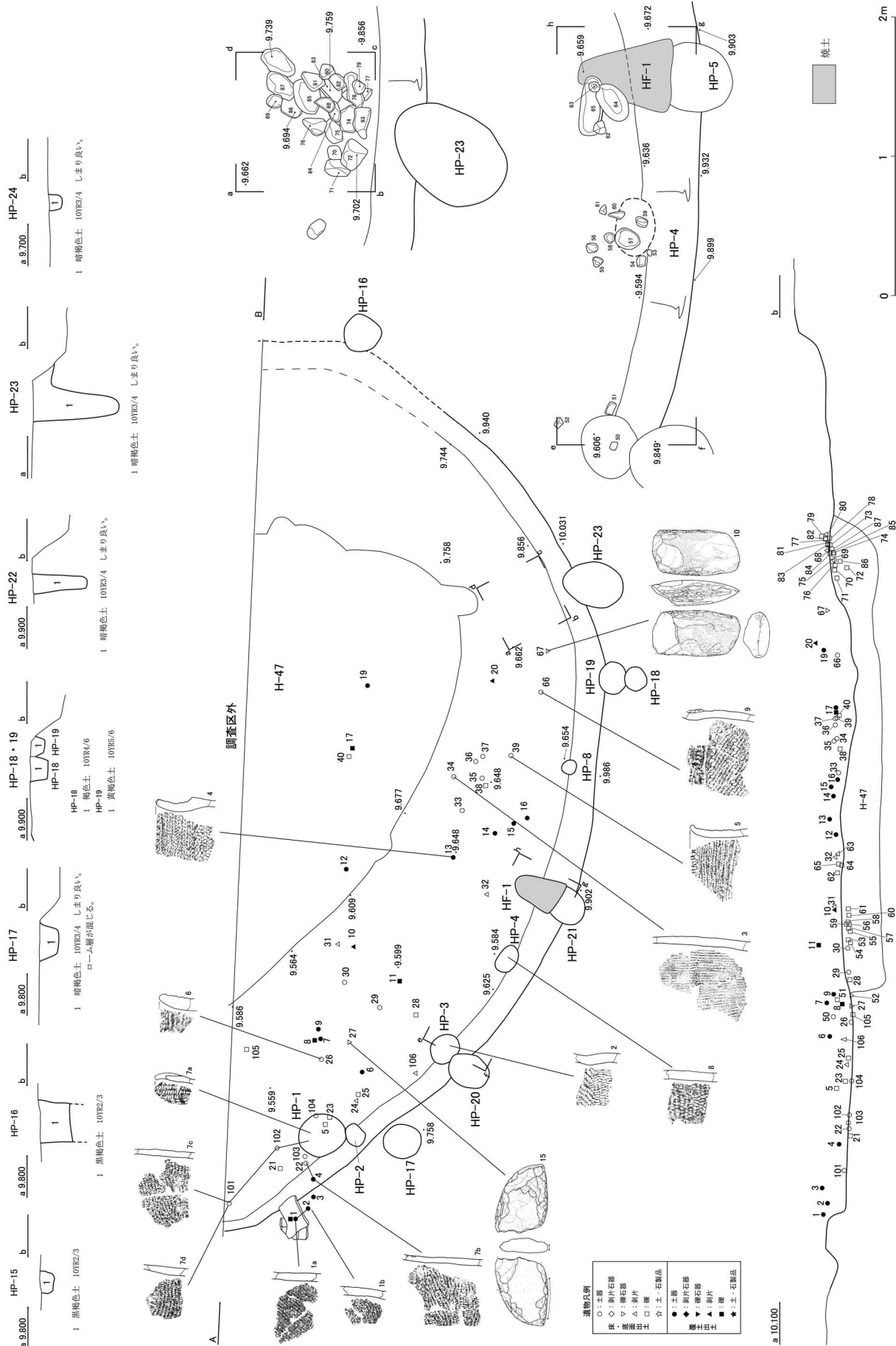
H-49 (図IV-280～284、図版40・139・140)**位置**：N・O 2・3区**規模**：4.37 / 4.21 × (3.96) / 3.59 × 0.73m

確認・調査：IV層上面における標高10.40m程の平坦部に立地する。N・O 1～3区でII・III層を掘り下げたところ、IV層上面で広範囲にわたり大きな2か所の黒色土の落ち込みが接する状態で確認された。東側N・O 2・3区の落ち込みの長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、IV層上面から0.70m程の深さで床面と思われる平坦面と壁の立ち上がりを確認した。調査の結果、西側でH-41・53と切り合うものの、1軒の住居跡であった。土層断面より、新しいものか

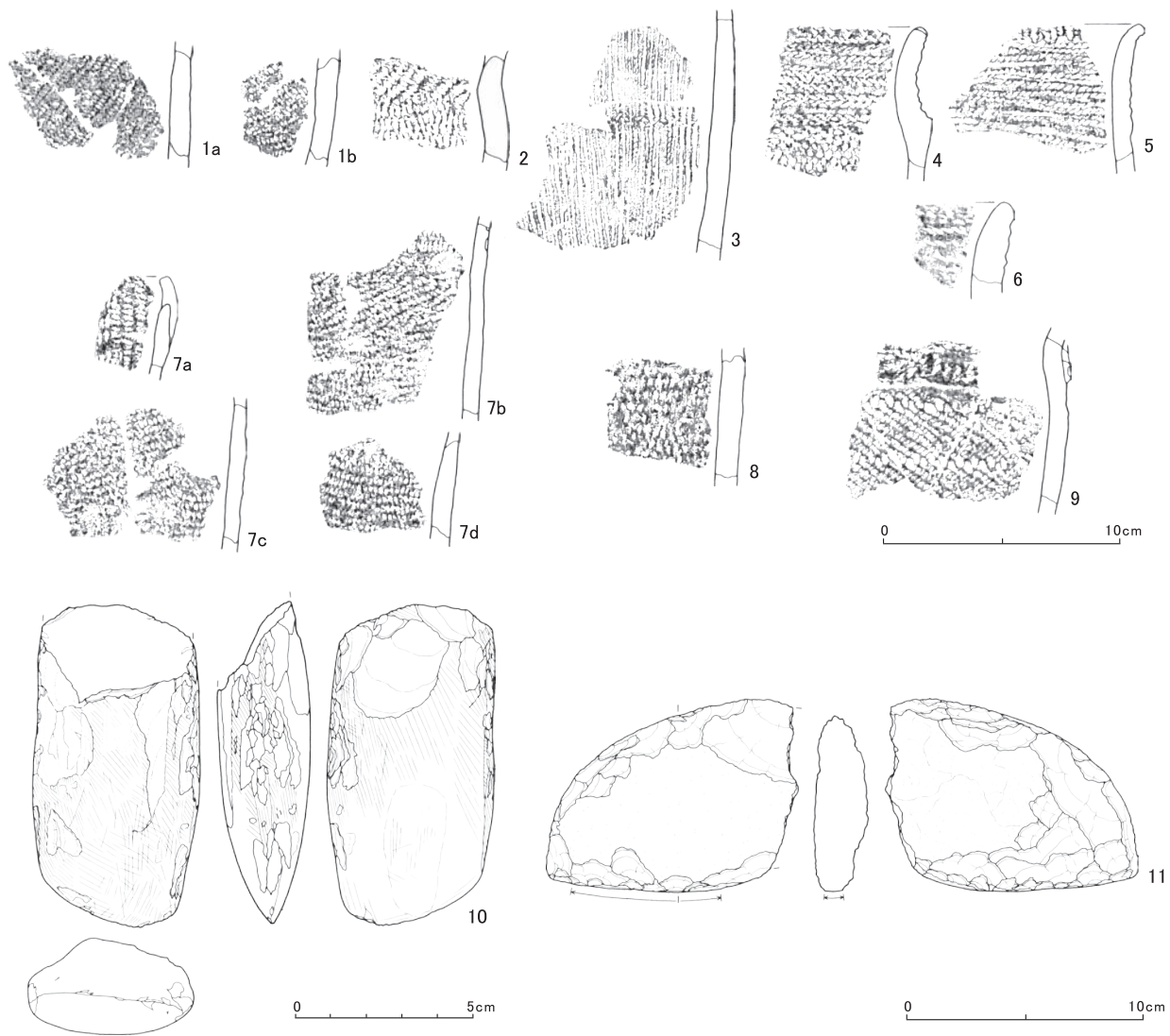


- 1 にぶい褐色土 101R3/3 ローム殻、ローム塊を含む、しまり良い
- 2 褐色土 101R4/6 しまり良い、ロームブロック、礎土ブロックを含む
- 3 にぶい褐色土 101R 粘性強く、しまり良い、ロームブロックを含む
- 4 褐色土 101R4/6 2層に類似 礎土殻を含む
- 5 礎土 2.51R7/6 礎土塊

図IV-277 H-48



図IV-278 H-48 セクション図 遺物出土状況図



图IV-279 H-48 遺物

ら順にH-53>H-51>H-41>H-49である。

覆土：住居跡はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土上位は盛土が主体で、炭化物が混じる。下位はⅡ層が主体で、Ⅳ層ローム粒が混じる。いずれも流れ込みによる自然堆積である。

平面形：平面形は、卵形を呈する。深さは、0.70m程である。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居跡の西側～南西側でH-41・53と切り合う。

付属遺構：10基の柱穴を確認した。柱穴は、太くて深いもの（HP-2～4）、太くて浅いもの（HP-5・6・8）、細くて浅いもの（HP-1・7・9）である。このうち主柱穴になり得る太くて深い柱穴の配列から、4本柱の住居と考えられる。ただし、北西隅から柱穴は検出されなかった。炉は検出されなかった。

遺物出土状況：床面からⅡ群B-3土器など24点、石器等5点、HPからⅡ群B-3類土器など6点、石器等9点、HFCからⅡ群B-3類土器3点、石器等4,740点、覆土からⅡ群B-3土器など2,794点、石器等7,728点が出土している。石製品は有孔石1点が出土している。

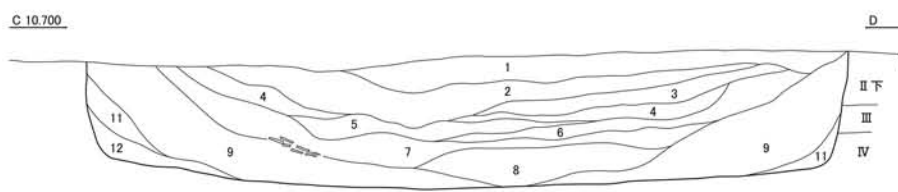
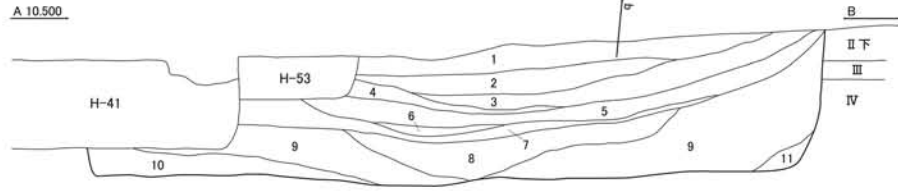
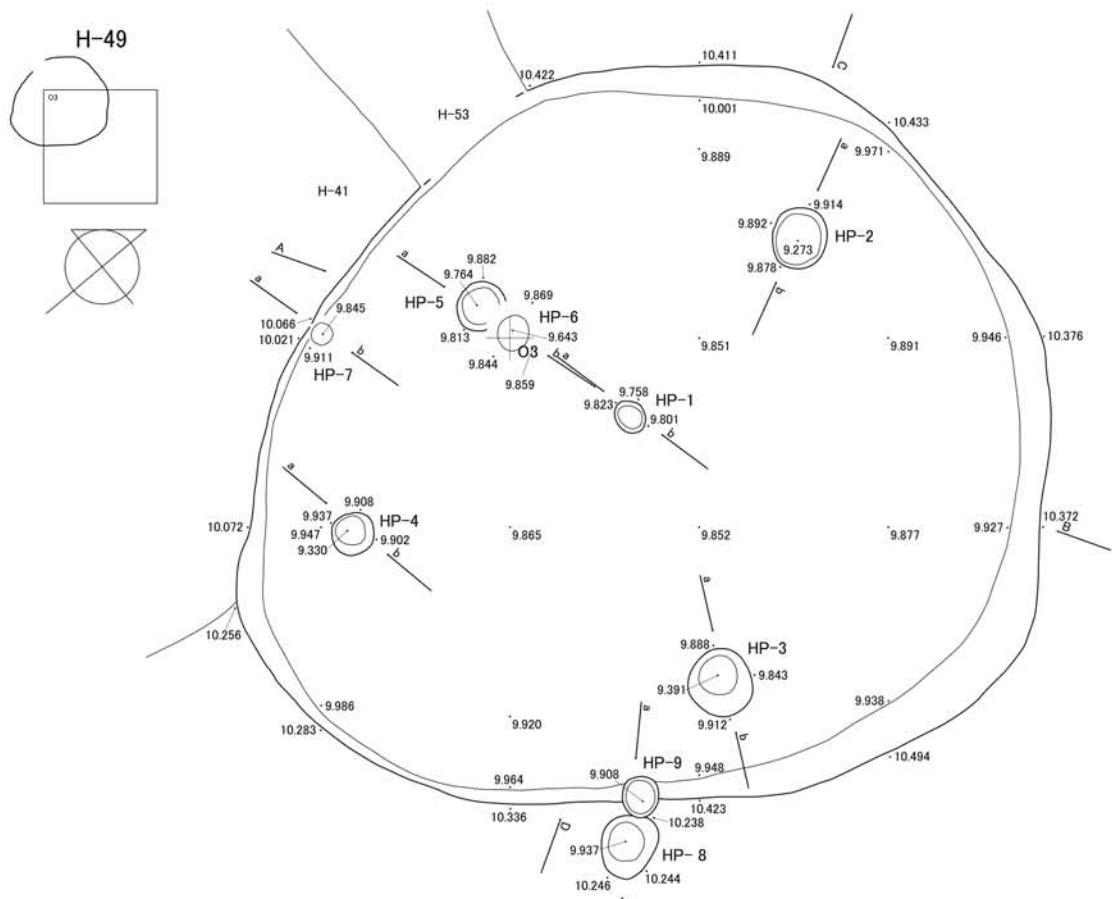
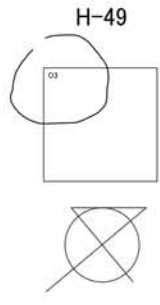
時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。（立川）

掲載遺物：（土器）15・17・18は床面出土、16はHP-5出土である。他は覆土出土である。いずれもⅡ群B類土器で、1～11・13～18はⅡ群B-3類土器、12はⅡ群B-4類土器である。

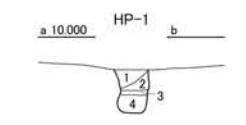
Ⅱ群B-3類土器（1～11・13～18）：7は体部に横走気味の縄文が施されたもの。幅広の口頸部文様帯の下端を2本一組の縄線で区画され、文様帯に貝殻条痕と斜行縄文が施されている。1～6・8・9・11は体部に直前段反撚による縄文が施されたもの。1・2は波状口縁で、口頸部文様帯の上下を2本一組の縄線で区画している。文様帯は直前段反撚による縄文を地文とし、波頂部から垂下する3条の縄線文が加えられている。3・5は平縁で、口頸部文様帯の上下は1～2本一組の縄線で区画され、文様帯には横走気味の直前段反撚による縄文が施されている。3の文様帯中央部には2本一組の縄線文が加えられている。4は波状口縁である。口頸部文様帯下端を単軸絡条体の圧痕文で区画され、体部上半に直前段反撚による縄文、下半に単軸絡条体の回転文が施されている。6は体部上半に結束羽状縄文、下半に直前段反撚による縄文が施され、口頸部（体部上半）に2本一組の組紐状の縄線文が3段加えられている。8は体部上半に結束羽状縄文、下半に直前段反撚による縄文が施されたもの。9は平縁で、器面に直前段反撚による縄文が施されている。11は直前段反撚による縄文が施された体部破片。10は結束羽状縄文で作出された菱目状の縄文が施された口頸部破片。下端に文様区画帯の縄線文が認められる。13は口頸部上端を区画する2本一組の縄線文が施された口縁部破片。14～17は体部破片。14は複節の斜行縄文、15・16は縄文、17は単軸絡条体の回転文が施されたもの。18は直前段反撚による縄文が施された底部破片。

Ⅱ群B-4類土器（12）：12は口縁部文様帯上下を2本一組の縄線で区画され、縄線間と下端に綾絡文が加えられている。体部に2本一組の単軸絡条体の回転文と結節斜行縄文を組み合わせで施されている。

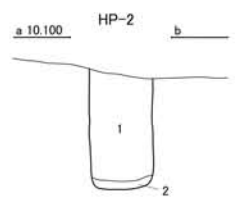
（石器）22は床面、24は覆土中層、25は覆土下層、19～21・23は覆土出土。19・20はスクレイパー。19は剥片の側縁に刃部を作出したもの。使用痕とみられる光沢が確認できる。20は縦長剥片の側縁に内彎する刃部を作出したもの。いずれも頁岩製。21は両面調整石器片。紡錘形のもの基部とみられる。整形中に節理面で折損したと思われる。22はたたき石。扁平礫の平坦面と側縁の一部に敲打痕のあるもの。23は凹み石。扁平な楕円礫の両平坦面と側縁に断面円錐状の凹みが多数みられる。最も深いもので7mmほどの凹みになる。凝灰岩製。24はすり石で北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。上半部は欠失している。すり面は敲打による整形痕が残って凸凹しており、一



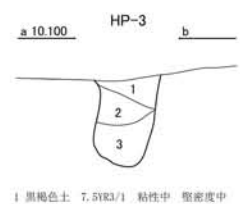
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒30%混じる
部分的にローム粒の混入量が多い
- 2 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度堅
φ1~2mmローム粒20%、φ2mm炭化物1%未満混じる
- 3 黒色土 7.5YR2/1 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒1%未満混じる
2層との層境にφ5mm炭化物が混じる
- 4 暗褐色土 7.5YR4/4 粘性中 堅密度堅
- 5 黒色土 7.5YR2/1 粘性中 堅密度中
3層に類似するが炭化物含有量が3層より多い
- 6 褐色土 7.5YR4/4 粘性強 堅密度中 IV層主体の土層
- 7 黒褐色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度堅
2層に類似するが炭化物含有量が2層より多い
- 8 明褐色土 7.5YR5/6 粘性強 堅密度堅 IV層
- 9 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ10~30mmローム粒30%混入
- 10 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
- 11 黒色土 7.5YR1/1 粘性中 堅密度中 II層の流れ込み
- 12 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中 10層に類似



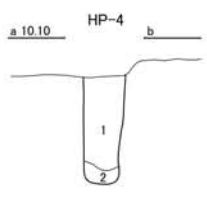
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性強 堅密度中
φ10mmローム粒2%、φ5mm炭化物1%未満混じる
- 2 明褐色土 7.5YR5/6 粘性強 堅密度堅
IV層ロームのブロック状堆積
- 3 黒色土 7.5YR2/2 粘性中 堅密度軟
- 4 明褐色土 7.5YR5/6 粘性強 堅密度堅
IV層ローム



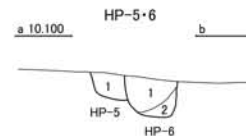
- 1 褐色土 7.5YR4/6 粘性中 堅密度中
ブロック状にIV層ロームが混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度軟
1層より黒色土(II層)の含有量が多い



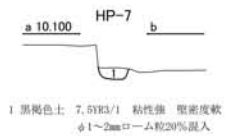
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒20%混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
1層+φ5~10mmローム粒20%混入
- 3 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
1層と同質



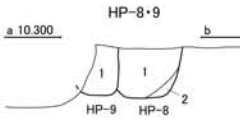
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
- 2 褐色土 7.5YR4/6 粘性強 堅密度軟
IV層主体の堆積



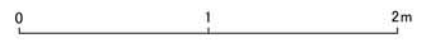
- HP-5
1 褐色土 7.5YR4/6 粘性強 堅密度中
φ5~10mmローム粒20%混じる
- HP-6
1 褐色土 7.5YR4/6 粘性強 堅密度中
φ5~10mmローム粒50%混じる
- 2 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ1~2mmローム粒5%混じる



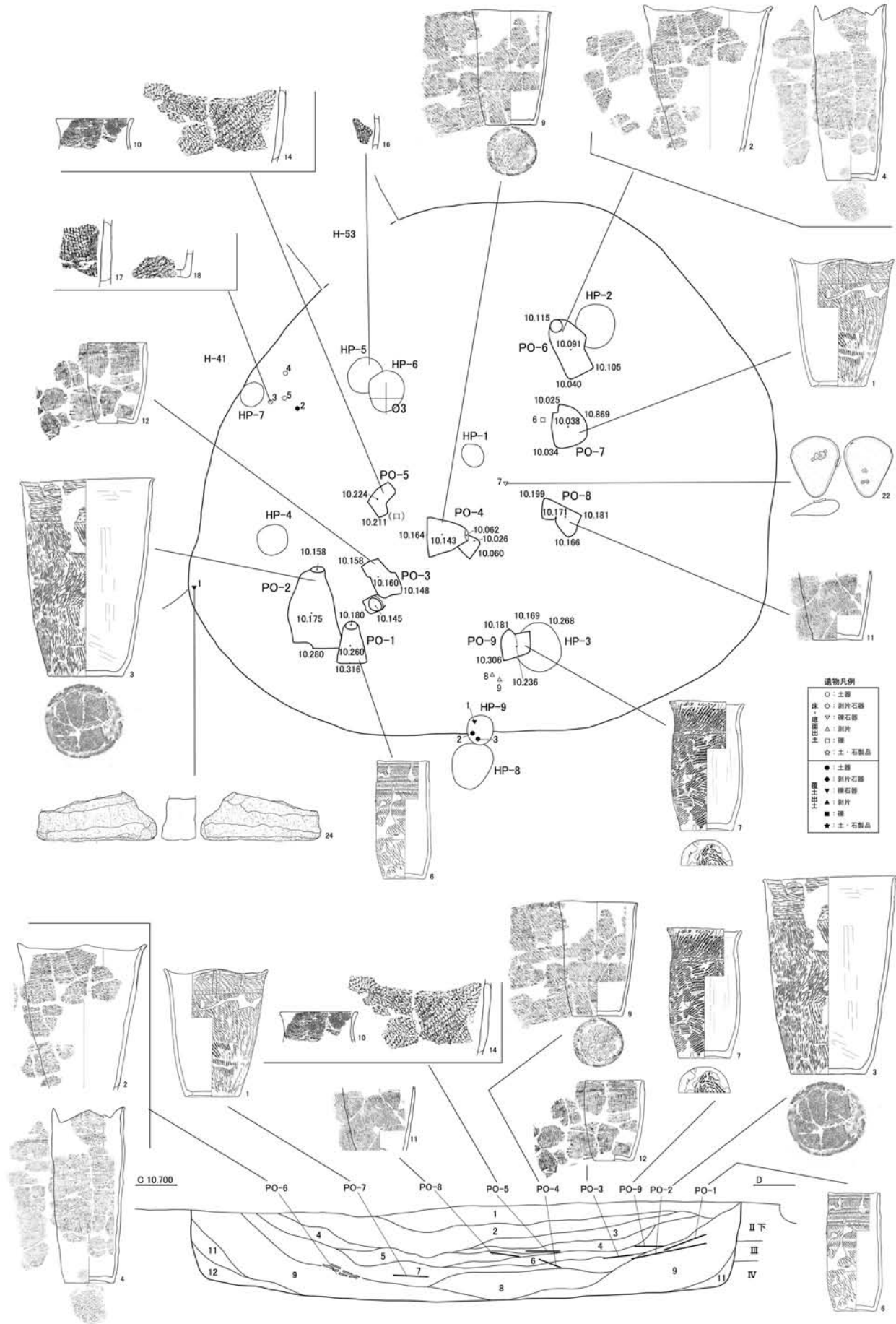
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性強 堅密度軟
φ1~2mmローム粒20%混入



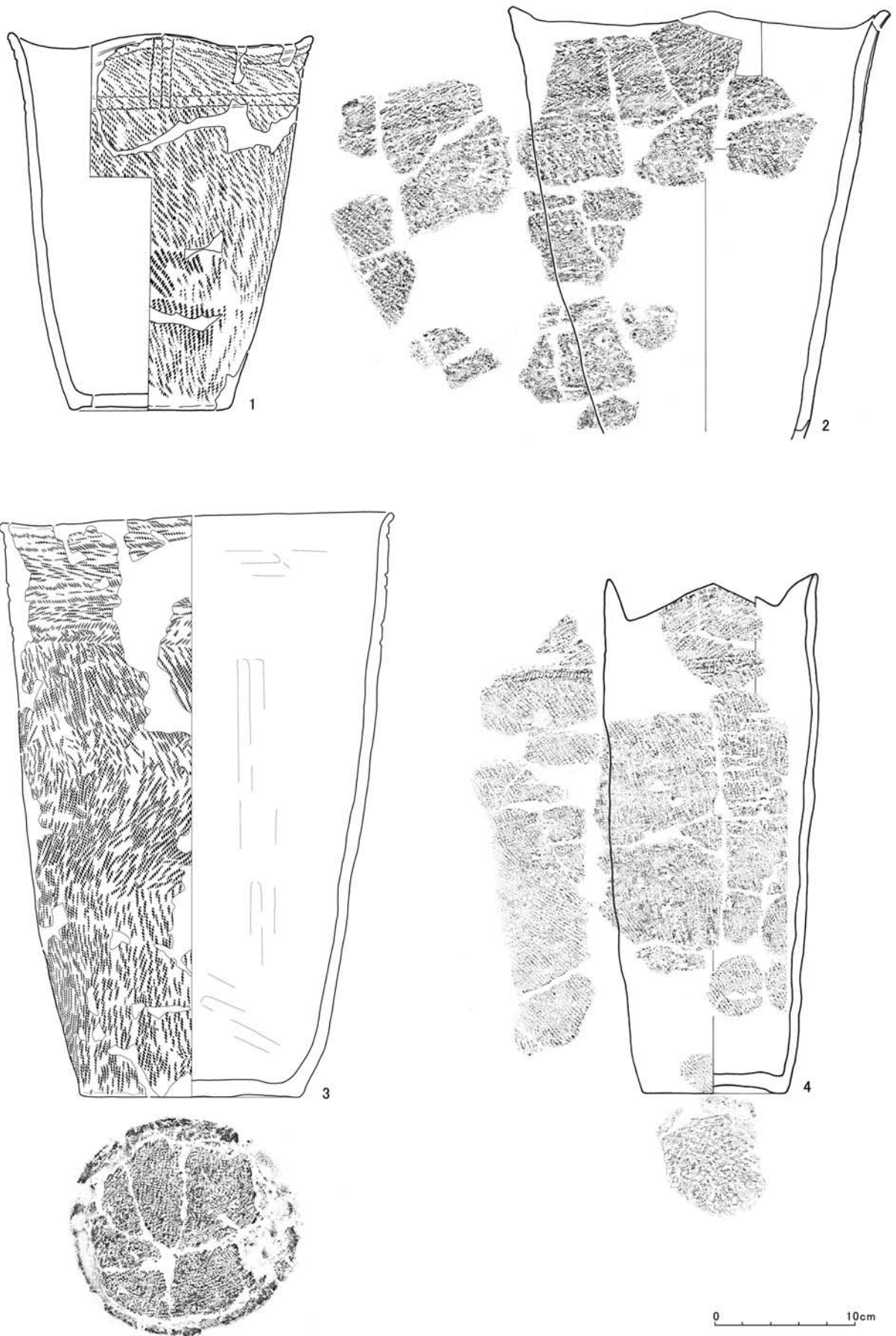
- HP-8
1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性強 堅密度中
φ20~30mmロームブロック状に混じる
- HP-9
1 黒褐色土 7.5YR3/1 粘性中 堅密度中
φ2~3mmローム粒2%混じる



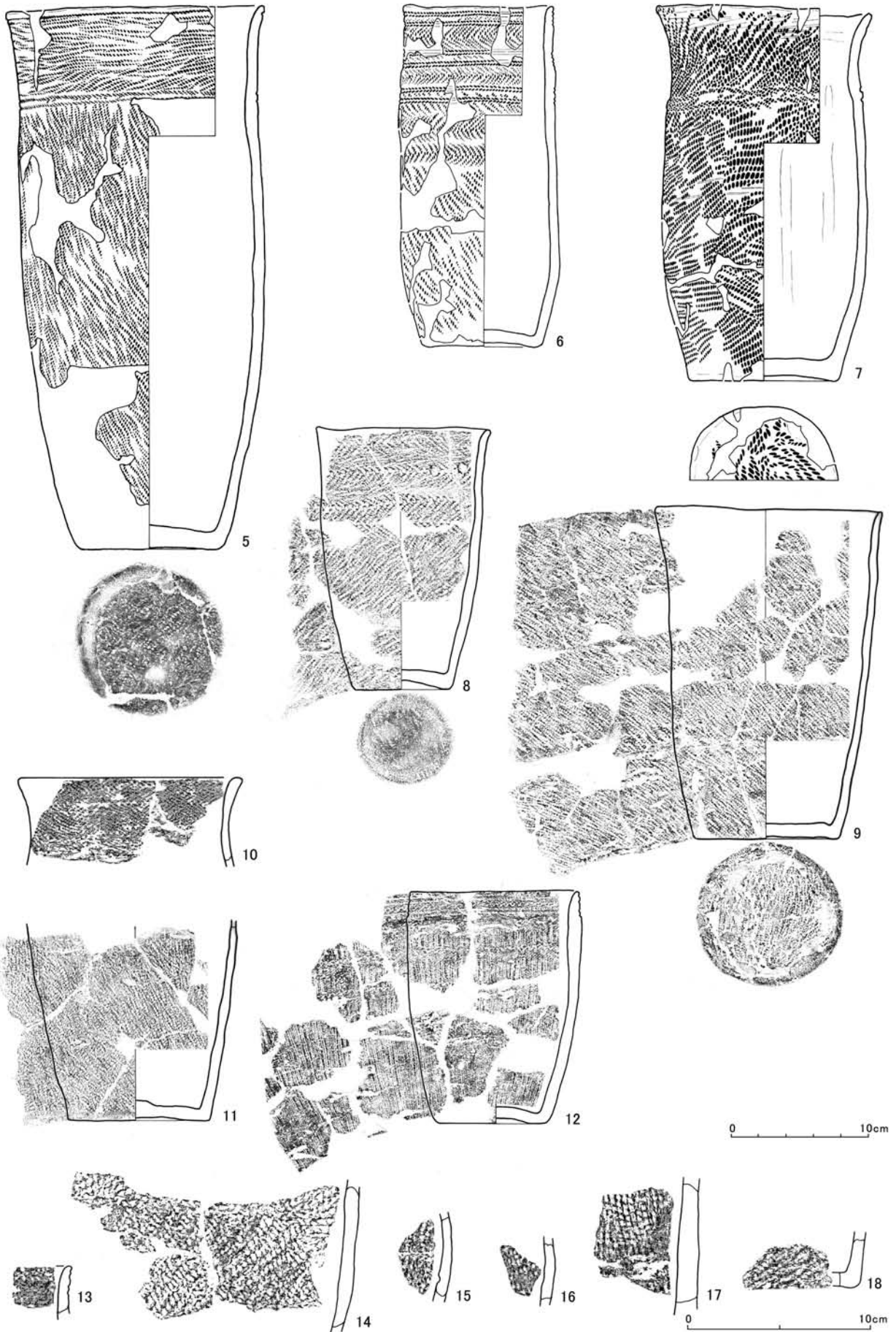
図IV-280 H-49



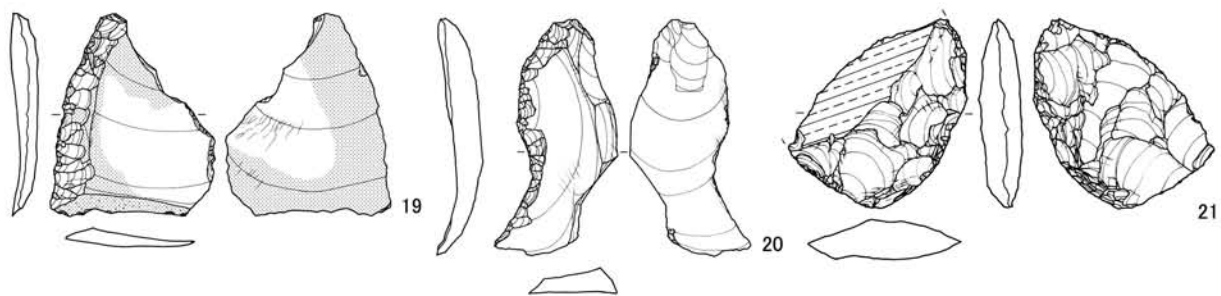
図IV-281 H-49 セクション図 遺物出土状況図



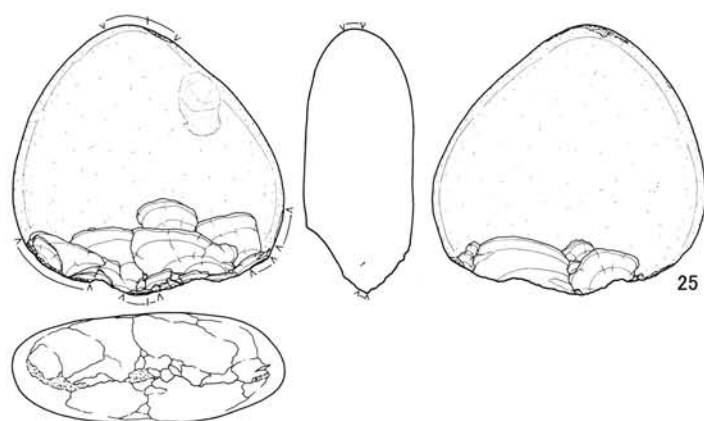
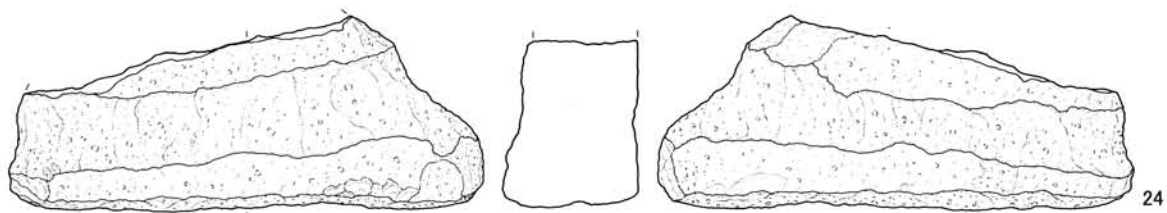
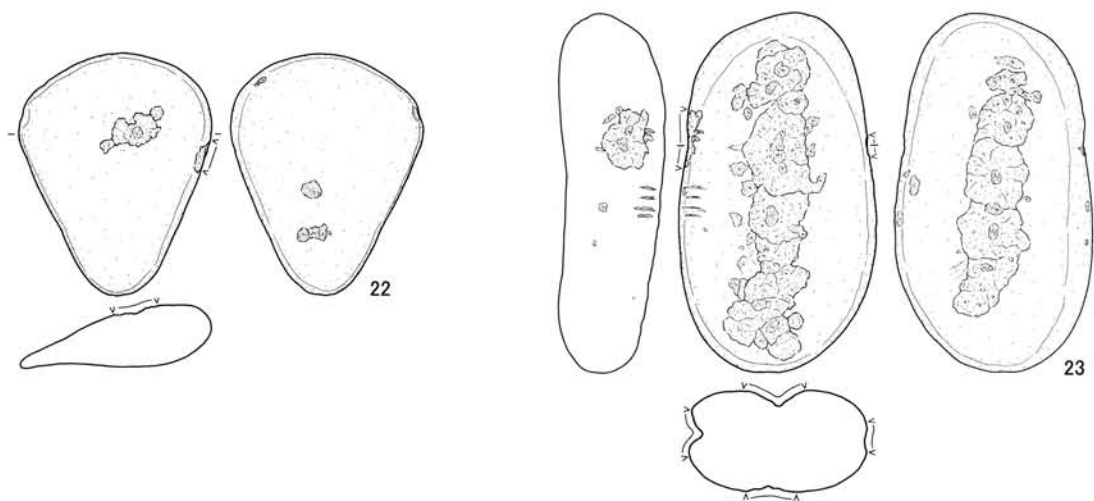
图IV-282 H-49 土器 (1)



圖IV-283 H-49 土器 (2)



0 5cm



0 10cm

图IV-284 H-49 石器

部にすり痕がみられる。安山岩製。25は礫器。扁平礫の側縁を打ち欠いて刃部を作出し、周縁の一部に敲打痕がみられる。頁岩製。

H-51 (図IV-285・286、図版41・141)

位置：N 2区

規模：-/-×-/-×0.26m

確認・調査：IV層上面における標高10.40m程の平坦部に立地する。N・O 1～3区でⅡ・Ⅲ層を掘り下げたところ、IV層上面で広範囲にわたり大きな2か所の黒色土の落ち込みが接する状態で確認された。西側N 1・2、O 2区で確認された黒色土の落ち込みに、長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、IV層上面から0.20m程で床面と思われる平坦面と壁の立ち上がりを確認した。土層断面より、新しい順からH-53>H-51>H-41>H-49である。本住居跡はH-41・53と切り合う。

覆土：住居跡はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は単一の層で、盛土が主体で焼土が混じる。流れ込みによる自然堆積である。

平面形：切り合いにより北側の一部分が存在するだけであるため、形状を特定するには至らなかった。深さは土層断面から0.26m程、床面はほぼ平坦である。壁は比較的急角度で立ち上がる。住居跡の南側でH-41、東側でH-53と切り合う。

付属遺構：焼土1か所と柱穴2基を確認した。焼土(HF-1)は下位に被熱層がみられることから、炉と考えられる。柱穴は、太くて浅いもの(HP-1)、細くて浅いもの(HP-2)である。どちらの柱穴も支柱穴になり得るものではないと考えられる。

遺物出土状況：床面から土器1点、石器等3点、HPからⅡ群B-4類土器など13点、石器等6点、覆土からⅡ群B-5類土器など485点、石器等342点が出土している。石製品は石剣? 1点が出土した。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。

(立川)

掲載遺物：(土器) 1～3はHP-1出土、他は覆土出土である。

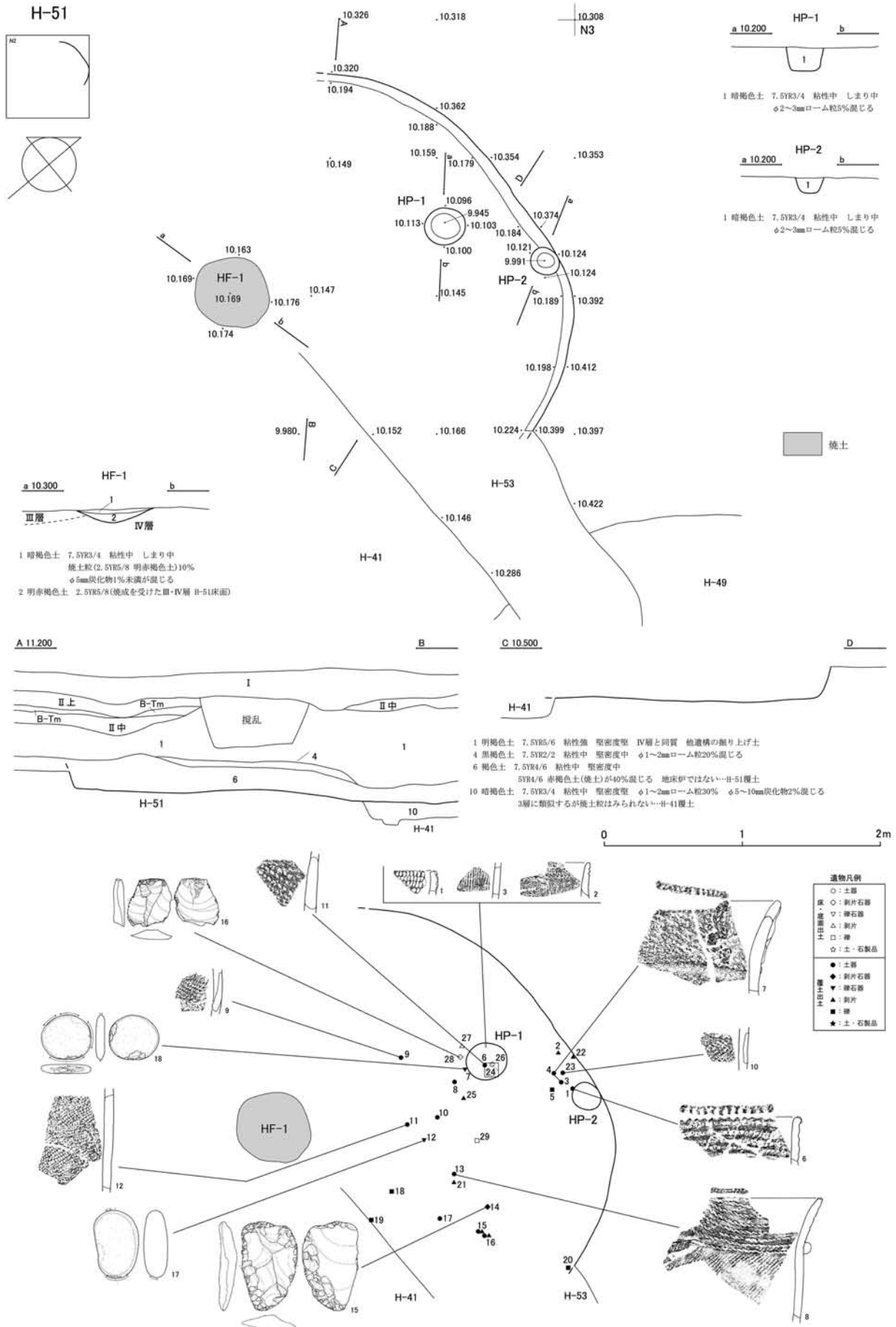
Ⅱ群A類土器(1)：1は押引文が施された口縁部破片。

Ⅱ群B-4類土器(2・3)：2は口縁部破片。文様帯下端は結束羽状縄文で区画され、文様帯には縄線が加えられている。体部は自縄自巻の縄文である。3は体部破片。単軸絡条体の回転文である。

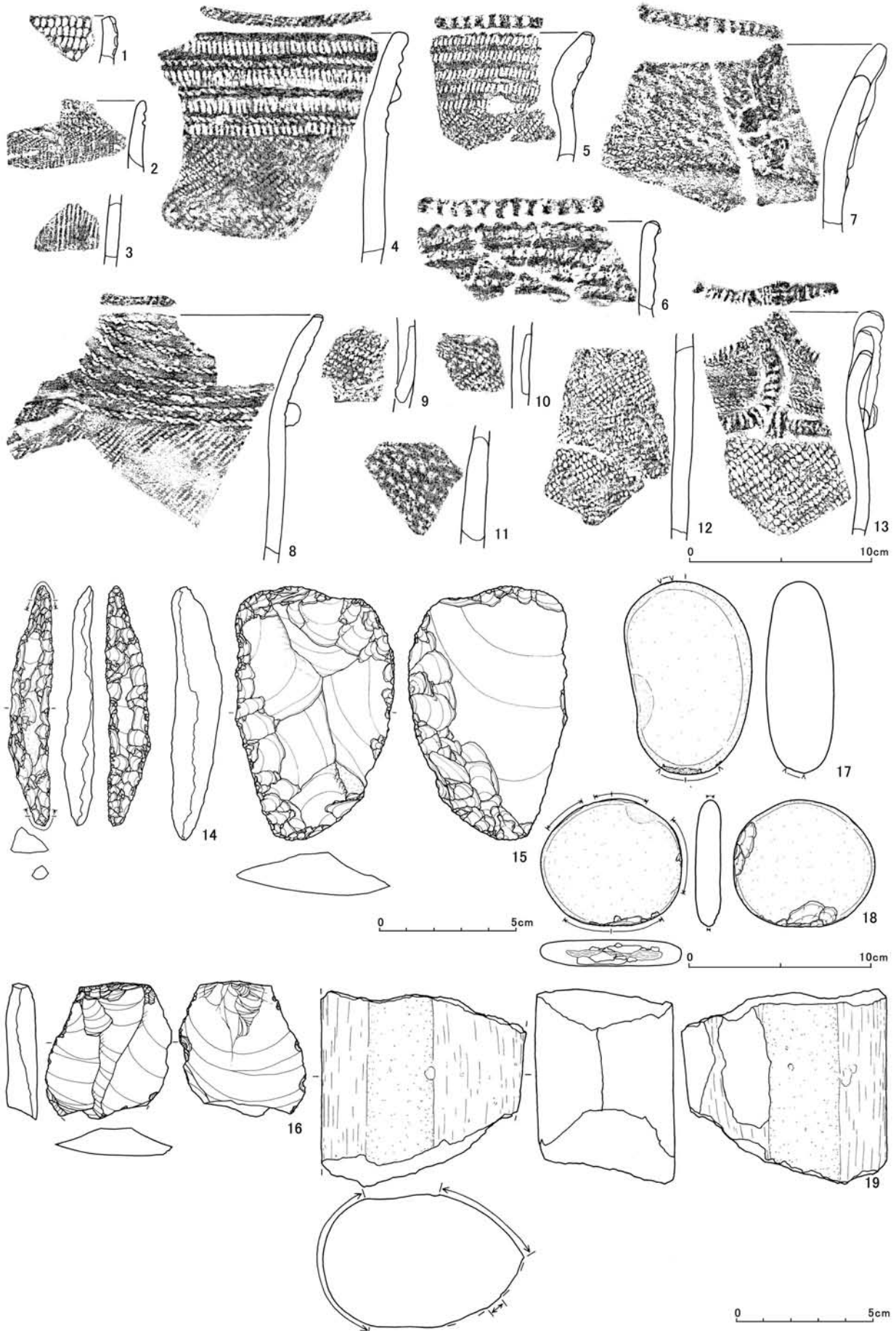
Ⅱ群B-5類土器(4～12)：4～8は口縁部破片。4は平縁で、口唇に縄文が施されている。口頸部文様帯下端は縄線が加えられた貼付帯で区画され、文様帯と貼付帯下位に単軸絡条体と縄の圧痕文が施されている。体部は結束斜行縄文である。5は平縁。口唇・口頸部文様帯に単軸絡条体の圧痕文、体部に不規則な斜行縄文が施されている。6は平縁。口唇に縄の圧痕文が加えられ、口頸部文様帯に縄線文が施されている。7・11は同一個体。口唇には小突起が作出され、縄の圧痕文が加えられている。口頸部文様帯下端は貼り付けによって区画され、突起から縄線文が加えられた「S」字状の貼り付け文が垂下し、文様帯には複節の縄線文が斜位に加えられている。8は波頂部を欠失するが波頂部分と思われる。波頂部下位に長さ3cm程の縄文が加えられた横位の貼り付けが施され、無文地の文様帯に波頂部を頂点とする7本の弧状の縄線文が施文されている。体部は斜行縄文である。9・10・12は斜行縄文が施された体部破片。

Ⅲ群A類土器(13)：13は波頂部である。口頸部文様帯を区画する貼付帯、波頂部から垂下する貼付帯には撚糸の圧痕文が加えられている。無文地の文様帯に3本一組の撚糸の圧痕文が加えられている。体部は斜行縄文である。

(石器) 16は床面、7・18は覆土中層、15は覆土下層、14・19は覆土出土。14は石錐。棒状に加工



図IV-285 H-51



图IV-286 H-51 遺物

された両端に機能部が作出されている。使用による磨滅痕がみられる。頁岩製。15はスクレイパー。縦長剥片の側縁から下端に錯行剥離で刃部を作出したもの。頁岩製。16はUフレイク。剥片の側縁に使用痕とみられる微細剥離がみられる。頁岩製。17はたたき石。扁平な棒状礫の端部に敲打痕のあるもの。頁岩製。18は扁平な円礫の周縁に敲打によって非常に幅の狭いすり面を搾取るしたもの。砂岩製。19は石製品。石剣の身の一部と考えられる。棒状礫を研磨して刃部と背を作出している。安山岩製。

H-52 (図IV-287、図版141)

位置：N 5、M 4・5区

規模：不明

確認・調査：上部はIV層上位まで削平されており、地床炉と推測される焼土(HF-1)と柱穴(HP-1~8)のみを確認した。HF-1の焼土を採取してフローテーションを行った。その結果、少量のオニグルミの炭化核が得られた。

覆土：残存していない。

平面形：床面の大部分と壁が失われているため、平面形や掘り込みの深さなどの形状は不明である。HF-1の周辺は硬くしまっており、この形成面が本来の床面の高さで推測される。HF-1を床面の中心と仮定すると、西側および南側に存在していたと考えられる柱穴は確認されなかった。

付属遺構：HF-1は上部が削平されているため、形成面(焼成面)は失われている。このため灰や炭化材などは確認されなかった。平面形は不整楕円形。断面はレンズ状で、強く焼けている。被熱層の下部に焼土粒を含む腐植土層があることから、火床面は浅く掘りくぼめられていた可能性がある。HP-1~8は柱穴と考えられる。いずれも平面形は円形~楕円形で、掘り込みはほぼ垂直である。覆土は腐植土、ローム、これらの混合土が互層になっている。HP-1~4・7は掘り込みが40~80cmと深く、支柱穴であったと推測される。HP-5・6は20~30cmと比較的浅く、壁柱穴であった可能性がある。HP-5は上部が皿状に掘り込まれ、周縁が堤状に掘り残されていた。HP-8は上半部が攪乱により失われている。掘り込みがHF-1側へ傾斜しており、坑底東側がオーバーハンクする。

遺物出土状況：HP-5覆土中よりII群B類土器が1点出土した。石器等33点、覆土からII群B-5類土器など8点、石器等24点が出土している。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。(芝田)

掲載遺物：(土器)1は覆土出土のII群B類土器、II群B-5類土器である。口頸部破片で、肥厚部に多軸絡条体の回転文が施されている。

(石器)2はHP-5覆土出土のたたき石。楕円礫の端部に面状の敲打痕と側縁に敲打痕のあるもの。下部は打ち欠いて礫器の刃部のようにになっている。頁岩製。

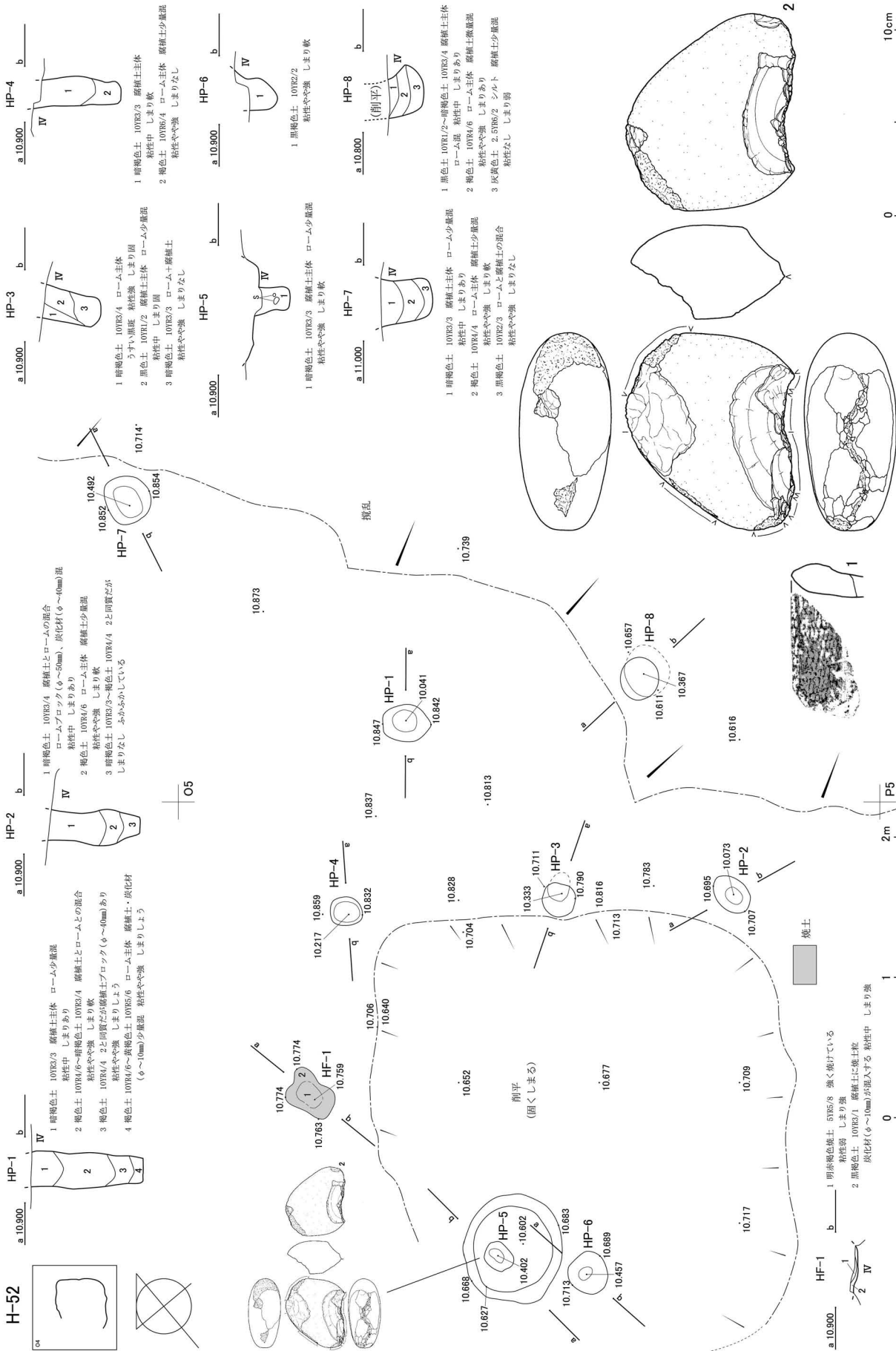
H-53 (図IV-288、図版41・141)

位置：N・O 2・3区

規模：-/-x-/-x0.20m

確認・調査：IV層上面における標高10.40m程の平坦部に立地する。N・O 1~3区でII・III層を掘り下げたところ、IV層上面で広範囲にわたり大きな2か所の黒色土の落ち込みが接する状態で確認された。西側N 1・2、O 2区で確認された黒色土の落ち込みに、長軸方向と短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、IV層上面から0.20m程で床面と思われる平坦面と壁の立ち上がりを確認した。土層断面より、新しい順からH-53>H-51>H-41>H-49である。本住居跡はH-41・51と切り合っている。

覆土：住居跡はII下層中から掘りこまれている。覆土は単一の層でII層主体のもので、IV層ローム粒



IV-287 H-52

が混じる。流れ込みによる自然堆積である。

平面形：切り合いに北側の一部分が存在するだけであるため、形状を特定するには至らなかった。深さは土層断面から0.2m程、床面はほぼ平坦である。壁は比較的急角度で立ち上がる。住居跡の南側でH-41、西側でH-51、東側でH-49と切り合う。

付属遺構：焼土1か所（HF-1）を確認した。焼土下位に被熱層がみられることから炉と考えられる。柱穴は検出されなかった。

遺物出土状況：床面からⅡ群B類土器5点、石器等8点、覆土からⅡ群B-3類土器など51点、石器等105点が出土している。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と思われる。（立川）

掲載遺物：（土器）3は床面出土、他は覆土出土である。

Ⅱ群B-3類土器（1・3～7）：1は口頸部破片。口頸部文様帯に斜行縄文が施され、上端が縄線で区画されている。3～6は体部破片。3・4は単軸絡条体の回転文が施されたもの。5は複節の縄文が縦位に施されたもの。6は自縄自巻の縄文が施されたもの。7は単軸絡条体の回転文が施された底部破片。3・4・7はⅡ群B-4類土器の可能性はある。

Ⅱ群B-5類土器（2）：2は縄線が加えられた口縁部破片。口唇に縄の圧痕が加えられている。

（石器）8は床面出土のスクレイパー。縦長剥片の側縁に刃部を作出したもの。使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。

H-54（図IV-289、図版42）

位置：O 5・6区

規模：不明

確認・調査：上部はⅣ層中位まで削平されており、南側は重機によりさらに深い攪乱を受ける。壁面の立ち上がりの一部と地床炉と推測される焼土（HF-1）と柱穴（HP-1）が確認された。

覆土：残存していない。

平面形：床面と壁の大部分が失われているため、平面形や掘り込みの深さなどの形状は不明である。HF-1の周辺は硬くしまっており、検出面より少し上位が本来の床面の高さとして推測される。

付属遺構：HF-1は被熱層のみが残存しており、形成面（焼成面）は失われている。このため灰や炭化材などは確認されなかった。平面形は楕円形。断面はレンズ状と推測される。柱穴と考えられる小土坑（HP-1）が1基検出された。床面が削平されているため、上部は失われている。平面形は円形で、掘り込みはほぼ垂直である。覆土はロームを主体とする。壁面の立ち上がりの内側にあることから、支柱穴であったと推測される。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周辺の遺構の出土遺物などから、縄文時代前期後半～中期前半の可能性はある。（芝田）

掲載遺物：掲載遺物なし

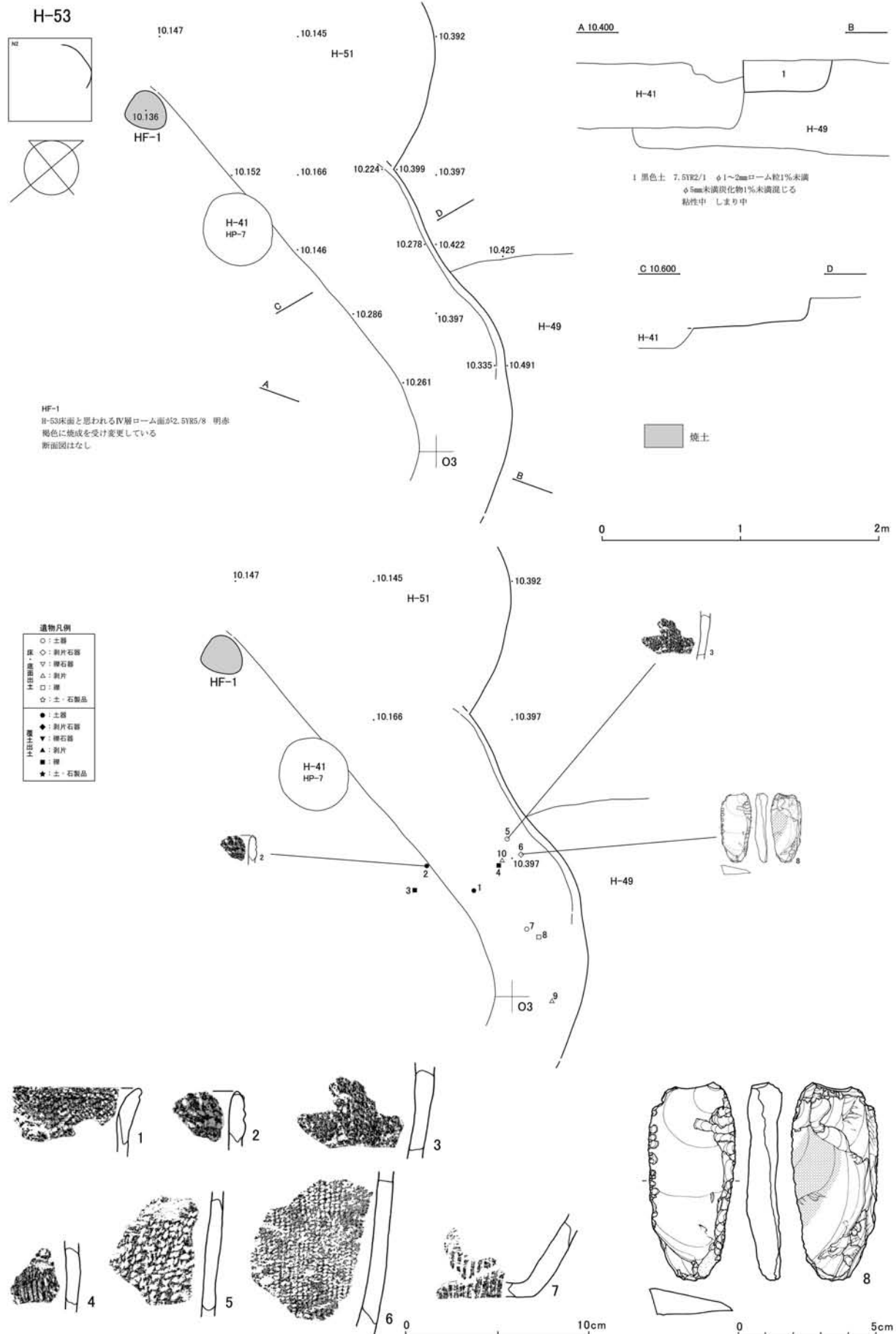
H-55（図IV-290～292、図版43・142）

位置：K 4・5、L 5・6、M 4～6、N 4～6区

規模：不明

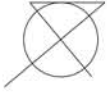
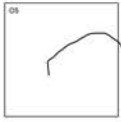
確認・調査：上部は現代の攪乱が著しく、他の堅穴住居跡やフラスコ状ピットと重複するため、Ⅱ層中で落ち込みを検出することができなかった。Ⅳ層上面～上位で地床炉と推測される焼土（HF-1）と柱穴（HP-1～82）を確認した。

覆土：M 6杭付近で覆土の堆積を確認した。覆土1層がⅡ層の落ち込みで腐植土、覆土2層が壁際

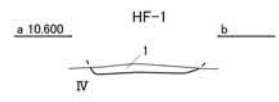


図IV-288 H-53

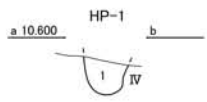
H-54



06

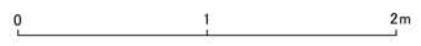


1 灰褐色土 5YR コームが被熱したもの 炭化材微量混
粘性弱 しまりあり

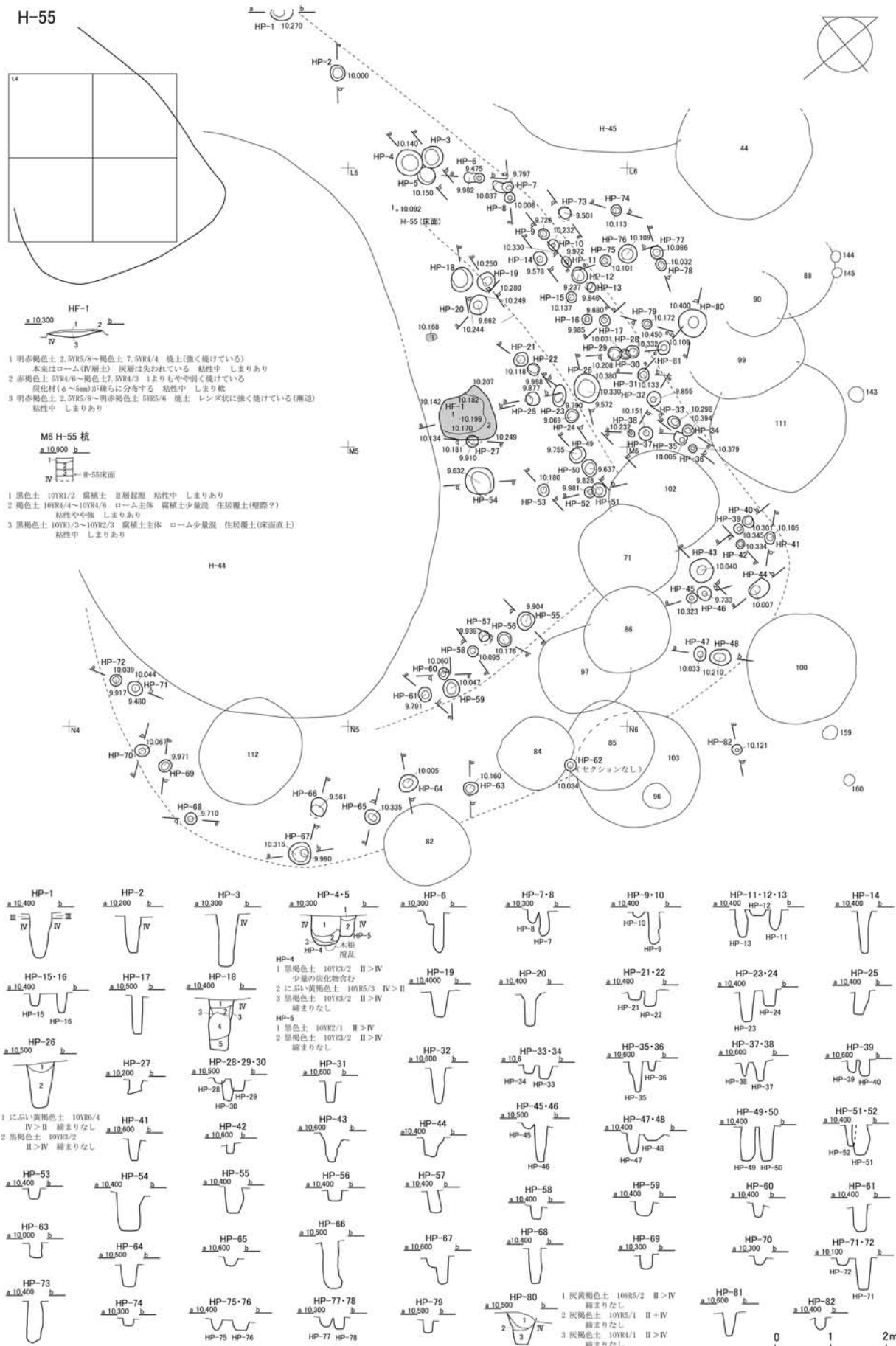


1 褐色土 10YR4/6~暗褐色土 10YR3/4 コーム主体 黒斑が見られる
炭化材(φ~5mm)少量混 粘性や冷強 しまり軟

焼土



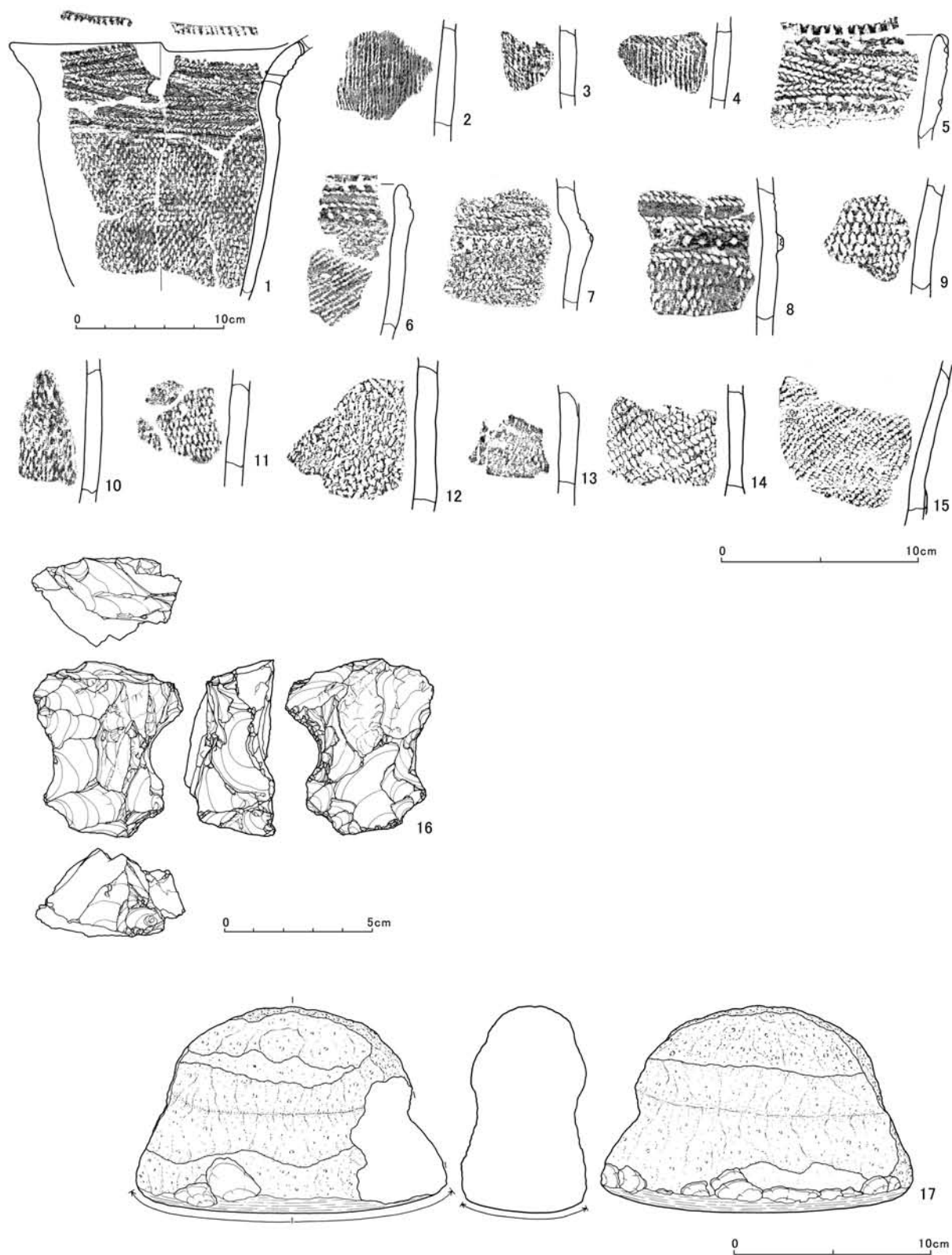
図IV-289 H-54



図IV-290 H-55



図IV-291 H-55 遺物出土状況図



图IV-292 H-55 遺物

の崩落または掘り上げ土の流れ込みと推測されるローム、覆土3層が床面直上の腐植土である。

平面形：床面の大部分と壁が失われているため、平面形や掘り込みの深さなどの形状は不明である。HF-1をおおよそその中心として、柱穴群が環状に取り囲み、その外側にも疎らに柱穴が分布している。南～西側の約1/3をH-44に壊されている。また、東側でもP-71・82・84・85・86・97・100・102・103・112と重複するが、新旧は不明である。

付属遺構：HF-1はIV層上位で検出した。上部に灰層などは確認されなかった。平面形は不整楕円形。断面はレンズ状で、強く焼けている。東側へ約1m離れた位置に小規模な廃棄焼土を検出しており、関連するものと推測される。柱穴と考えられる小土坑が82基（HP-1～82）検出された。いずれも平面形は円形～楕円形で、掘り込みはほぼ垂直である。覆土は腐植土を主体とするものが大半である。HF-1を中心として、概ね内外二重の柱穴列がめぐる。外帯に属するものはHP-1～17、28～48、62～72、内帯に属するものはHP-18～26、49～53、55～61である。このほか外帯のさらに外側にHP-73～82が疎らに分布する。外帯のものは壁際に掘り込まれた「壁柱穴」、内帯のものは床面の「支柱穴」もしくはベンチ状構造などに関連する柱穴、外帯の外側のものは「外柱穴」と推測される。ただし、周辺で検出された同時期の竪穴住居跡ではベンチ状構造に柱穴が並ぶ例は見られないことから、H-44も含めて3軒以上の住居が入れ子状に重複している可能性がある。HP-27はHF-1と重複し、H-44の掘り込みに近接していることから、H-44の外柱穴である可能性がある。

遺物出土状況：床面から石器等1点、HPからII群B-5類土器など105点、石器等36点が出土している。

時期：重複するH-44が縄文時代中期前半の遺構であることから、前期後半と考えられる。（芝田）

掲載遺物：（土器）いずれも柱穴状ピット（HP）出土である。

II群B-4類土器（2～4）：2～4は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。4には結束羽状縄文が加えられている。

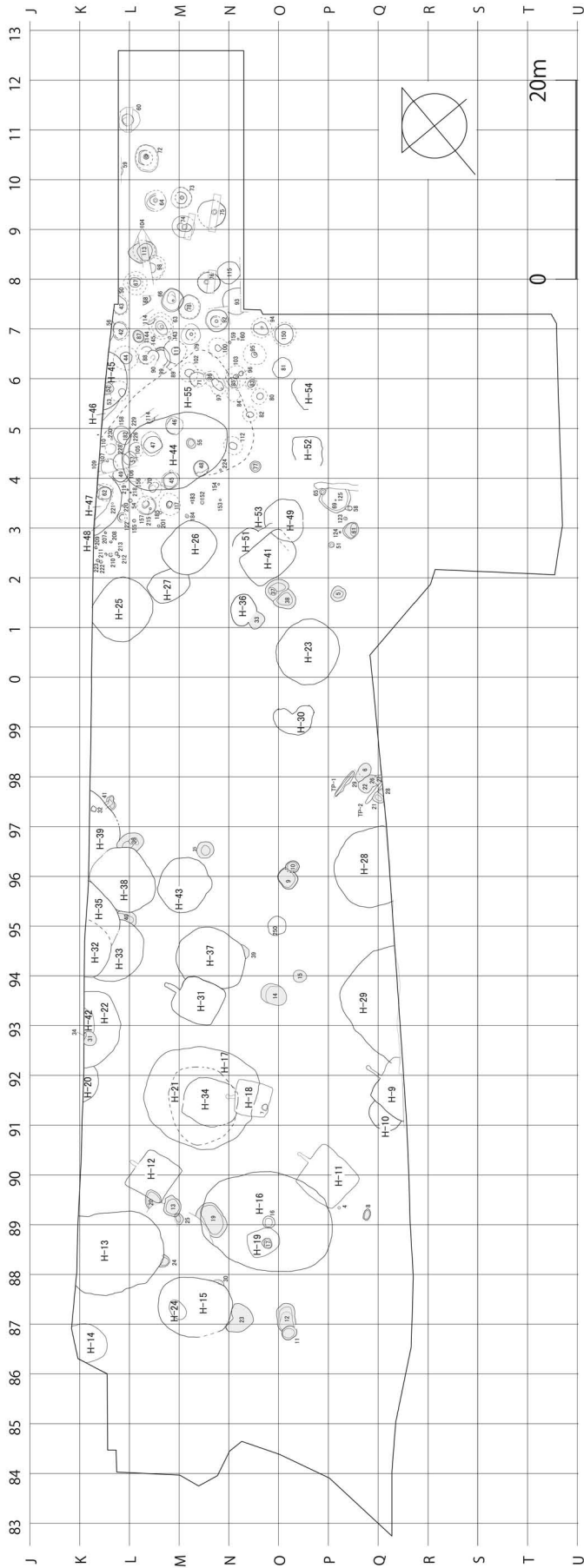
II群B-5類土器（1・5～15）：1・5・6は口縁部破片。1は波状口縁である。口頸部はくびれ、口頸部文様帯には組紐状の縄線文で波頂部を頂点とする菱目状の文様構成を作出し、菱目文の中央に穿孔が加えられている。5は肥厚する口縁部。口唇に刻目が加えられている。文様帯上下を横位の刺突文で区画し、文様帯内には組紐状の縄線文と刺突が加えられている。肥厚帯下端には縄の圧痕、直下には綾絡文が施されている。6は口縁部文様帯の上下を棒状工具による刺突文で区画し、幅の狭い文様帯には縄線文、体部に斜行縄文が施されている。7・8は体部に多軸絡条体の回転文が施されている口頸部破片。7は口頸部文様帯下端の肩部分には縄の圧痕文が加えられ、無文地の文様帯に2本一組の縄線文が施されている。8の口頸部文様帯下端は円形刺突文が加えられた貼付帯で区画されている。無文地の文様帯に2本一組の縄線文が施され、貼付帯直下にも縄線文が加えられている。9～13は多軸絡条体の回転文が施されている体部破片。14・15は斜行縄文が施された体部破片。

（石器）16はHP-66覆土、17はHP-50覆土出土。16は石錘。石核の側縁に挟りを入れたもの。頁岩製。17はすり石で北海道式石冠。全面を敲打によって整形し、握部を作出している。すり面は長軸・短軸ともに外彎し、短軸方向にやや傾いている。閃緑岩製。

2 土坑・フラスコ状ピット・Tピット・柱穴状ピットの調査

(1) 概要

土坑・フラスコ状ピット・Tピット・柱穴状ピットは152基検出された。いずれも縄文時代のものである。内訳は土坑50基・フラスコ状ピット63基・Tピット2基・柱穴状ピット36基である。この順序で個別に記載する。



図IV-293 土坑位置図

(2) 土坑の調査

1. 概要

土坑は、フラスコ状ピット・Tピット・柱穴状ピットを除く、土坑を一括したものである。

土坑は50基検出された。規模は径0.5～3.5mのものがあり、平面形は円形・楕円形・不整円形等がある。断面形は皿状のもの、やや深めのもが含まれ、多様な形態をもつ。分布は、集中する地点は認めらず、3ラインより東側に散在的に検出された。盛土遺構の海側の縁辺部に分布する傾向がみられる。フラスコ状ピットが検出された調査区北東側からは検出されていない。(熊谷)

2. 土坑

P-4 (図IV-294)

位置：P89区

平面形：円形

規模：0.48 / 0.41×0.46 / 0.36×0.20m

確認・調査：H-16の掘り上げ土・Ⅲ層を掘り下げている段階で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は掘り上げ土の埋戻しである。

遺物出土状況：覆土中にV群C類土器94点が埋設されていた。

時期：出土したV群C類土器からみて縄文時代晩期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1は覆土出土のV群C類土器。壺形土器の底部破片。器面には丁寧な調整が加えられ、無文で、器面全体に弾けが認められる。

P-5 (図IV-294)

位置：P 1 区

平面形：三角形

規模：1.51 / 0.76×1.50 / 1.00×0.48m

確認・調査：Ⅲ層上面で、盛土層の褐色土の落ち込みを確認した。南北にセクションを設定し、西側を掘り下げた。平面形は隅丸の三角形である。坑底は平坦で、Ⅳ層中に構築されていた。壁は丸味をもちながらほぼ垂直に立ち上がる。覆土は壁際に黒色土の三角堆積が認められる。

遺物出土状況：覆土上部の盛土層と考えられる1～3層から多くの遺物が出土した。坑底から口頸部に縄線文が加えられ、体部に縦位の撚糸文が施されたⅡ群B-3類土器が1個体出土した。坑底からⅡ群B-3類土器など63点、石器等1点、覆土からⅡ群B類土器123点など、石器等80点が出土した。

時期：坑底からⅡ群B-3類土器が出土したことから縄文時代前期末葉と考えられる。(熊谷)

掲載遺物：(土器) 1は坑底出土のⅡ群B類土器で、Ⅱ群B-3類土器である。平縁で、口頸部文様帯下端は肥厚し、肩部をもつ。無文地の文様帯に横位および縦位の縄線文が加えられている。体部には単軸絡条体の回転文が施されている。

(石器) 2は覆土出土のスクレイパー。縦型剥片の側縁に刃部を作出したもの。頁岩製。

P-7 (図IV-295)

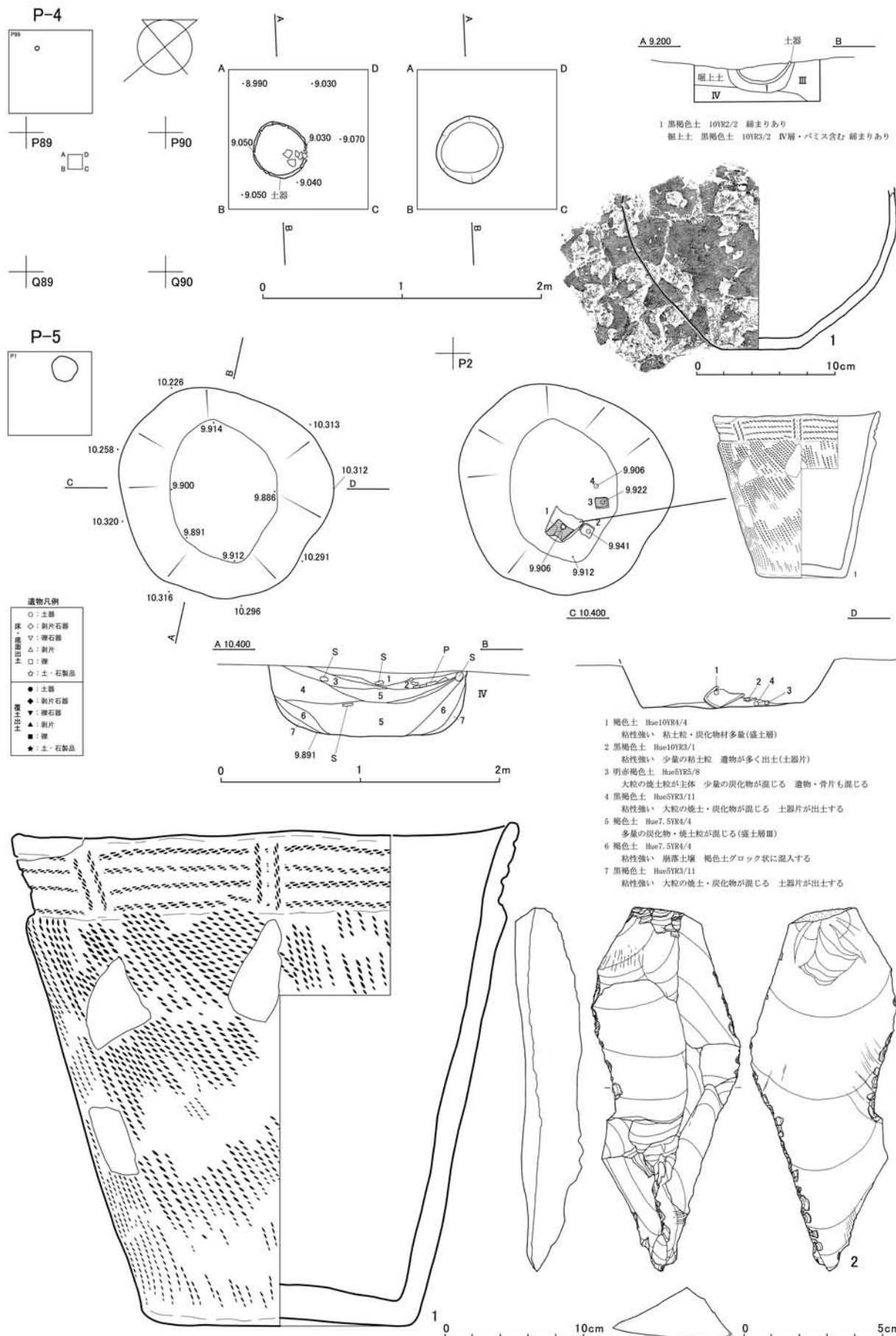
位置：N91区

平面形：円形

規模：0.65 / 0.54×0.55 / 0.46×0.21m

確認・調査：H-18の調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は埋戻しである。壁の上部はH-18の構築時に壊されている。

遺物出土状況：覆土上位からⅦ群土器が7点、剥片3点が出土した。



図IV-294 P-4・5

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期前葉と考えられる。

(佐藤)

掲載遺物：掲載遺物なし

P-6・29 (図IV-295)

P-6

位置：P・Q97・98区

平面形：楕円形

規模：(1.41) / 0.99×1.25 / 0.75×0.23m

確認・調査：IV層上面における標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97・98区周辺でII層を掘り下げたところ、III層上位で黒色土と盛土の広がりを確認した。南北方向と東西方向の二方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、6基の土坑が重複して存在することが確認された。P-6は北東側に位置し、P-29と切り合う。また、南側でP-22・26とも切り合う。土層断面から、新しい順にP-6>P-22>P-29の順で、P-26についての新旧関係は特定できなかった。遺構はII下層中から掘りこまれている。覆土は3層に分層した。いずれもII層を主体とした自然堆積層であり、IV層ローム粒が混じる土である。坑底は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：坑底からII群B-3類土器など51点、覆土から土器など474点、石器等65点が出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。

(立川)

掲載遺物：(土器) 4は坑底、1～3・5は覆土出土である。1・2・4はII群B-3類土器。1・2は体部に直前段反撚の原体による縄文が施されている。4は自縄自巻の原体による縄文が縦位に施され、口縁部には組紐状の縄線文が加えられている。縄線間やや幅が広く、II群B-3類土器の新しい頃のものと考えられる。3・5はII群B-5類土器。3は多軸絡条体回転文が施された底部破片。5は体部に多軸絡条体回転文が施されている。口唇部やくびれを持つ無文地の口頸部文様帯に単軸絡条体の圧痕文が施されている。

(石器) 6～8は覆土出土。6はつまみ付ナイフ。縦型剥片の片面周縁部を調整したもの。暗赤褐色のチャート製。7はたたき石。扁平礫の側縁に敲打痕があるもの。泥岩製。8は有孔土製円板。

P-29

位置：P・Q97・98区

平面形：不整形

規模：(0.72) / (0.62)×0.94 / 0.70×0.14m

確認・調査：IV層上面における標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97・98区周辺でII層を掘り下げたところ、III層上位で黒色土と盛土の広がりを確認した。南北方向と東西方向の二方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、6基の土坑が重複して存在することが確認された。P-29は黒色土と盛土の広がり北側に位置し、P-6と切り合う。土層断面からP-6に切られる。南側でP-26と切り合うが、新旧関係は特定できなかった。遺構はII下層中から掘りこまれている。覆土は2層に分層した。いずれも自然堆積で、最上位の覆土1層は盛土の流れ込み、2層はII層と同質の土である。坑底はほぼ平坦、壁は比較的急角度で立ち上がる。

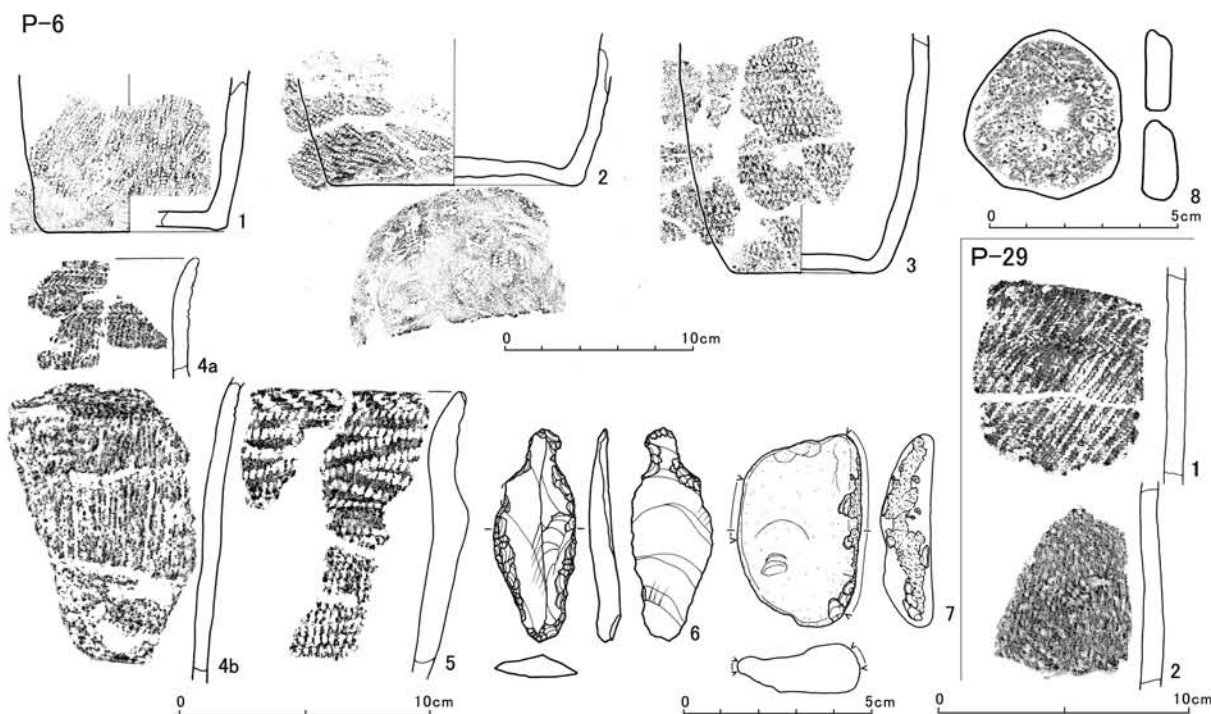
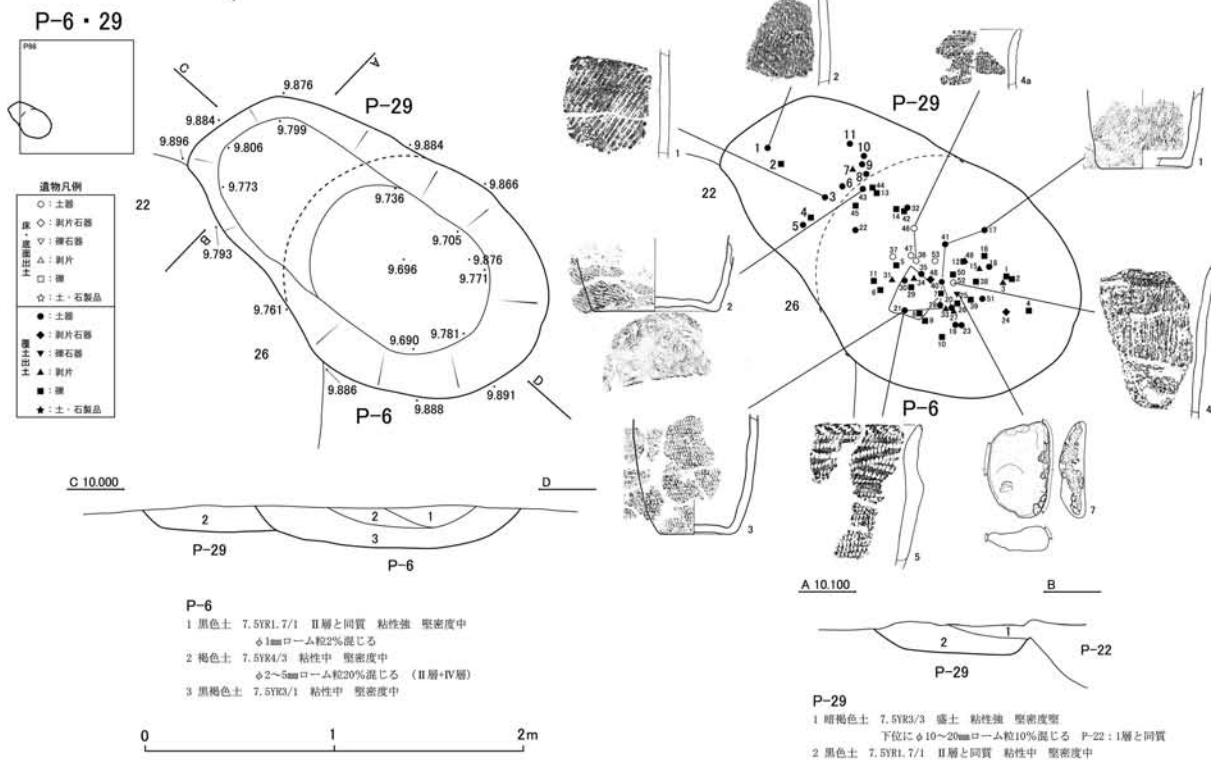
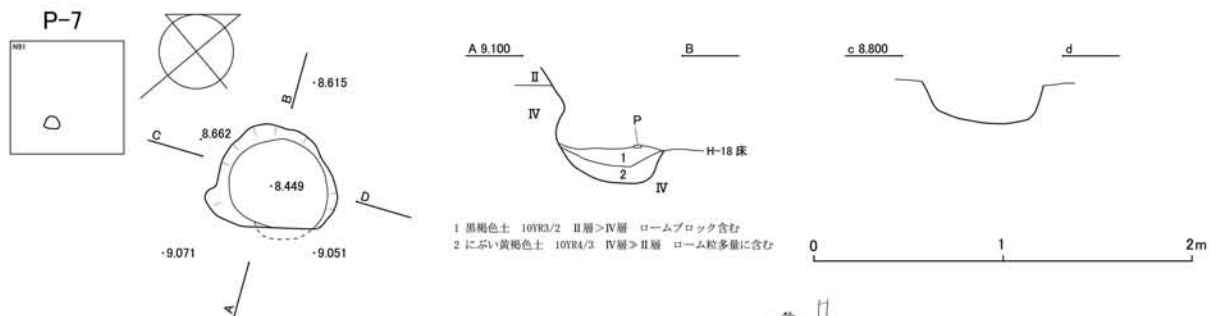
遺物出土状況：覆土からII群B類土器など24点、石器等3点が出土している。

時期：検出された層位と周辺の出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。

(立川)

掲載遺物：(土器) 1・2は覆土出土のII群B-3類土器である。1は自縄自巻の原体による縄文が施された体部破片。結束羽状縄文が加えられている。2は複節の斜行縄文が施されているもの。

P-8 (図IV-296)



図IV-295 P-6・7・29

位置：P89区

平面形：楕円形

規模：1.15 / 0.87×0.67 / 0.47×0.14m

確認・調査：IV層で灰褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はIV層主体の埋戻しである。坑底は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からV群C類土器17点、石器等3点が出土した。

時期：出土したV群C類土器からみて縄文時代晩期後葉と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1～3は覆土出土のV群C類土器。いずれも鉢である。1・2は口縁部破片。口縁部断面形は角形で、1は1条、2は3条の沈線がめぐる。3は胴部破片。縦位の縄文が施されている。

P-11 (図IV-296)

位置：O86・87区

平面形：楕円形

規模：1.53 / 1.20×1.29 / 0.93×0.39m

確認・調査：調査区の南側斜面に立地する。II層を掘り下げ中に褐色土の落ち込みを確認した。P-12覆土を掘り込んで構築されている。覆土はH-16の掘り上げ土の流れ込みである。坑底はほぼ平坦。壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：覆土から土器はII群B-5類土器など530点・有孔土製円板1点・焼成粘土塊1点、石器は礫に混ざり両面調整石器・スクレイパー・つまみ付きナイフ・台石など112点が出土した。

時期：出土したII群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1～8は覆土出土。1はII群A類土器。2～8はII群B類土器。

II群A類土器(1)：1は結束羽状縄文が施された口縁部破片。口唇端部に棒状工具による押圧が加えられている。

II群B-3類土器(2)：2は複節の斜行縄文が施されたもの。

II群B-5類土器(3～8)：3～5は口縁部破片。3・4はくびれをもち外反する形状で、無文地の口頸部に2本一組の縄線文が施され、口唇外面に縄の圧痕文が加えられている。3は肩部分に縄の圧痕文も加えられている。5は口縁部が肥厚する。口縁部に斜位の縄線文、肥厚帯下端に縄の押圧、直下に綾絡文が施されている。4～7は体部破片。6は単軸絡条体第1A類の撚糸文、7は多軸絡条体の回転文が施されている。8は底部破片。多軸絡条体の回転文が施されている。

(石器等) 9～11は覆土出土。9はスクレイパー。縦型の剥片の側縁を加工して円弧状の刃部を作出している。頁岩製。10は両面調整石器。剥片の周縁部を調整して紡錘形に加工している。頁岩製。11は有孔土製円板、II群B類土器の土器片を素材とするもの。

P-9・10 (図IV-297・298)

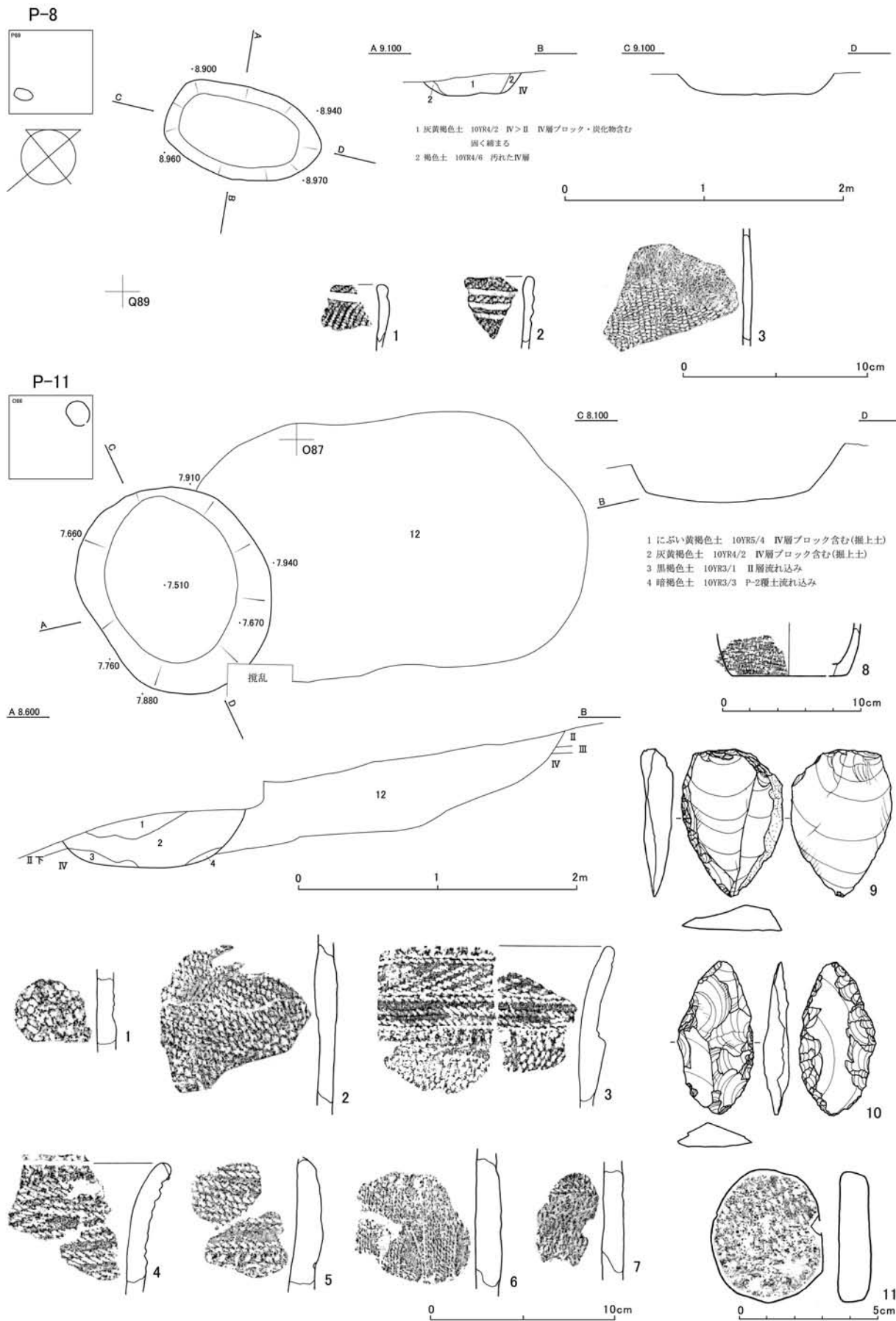
P-9

位置：N95、O95・96区

平面形：隅丸方形

規模：2.02 / 1.96×1.77 / 1.48×0.20m

確認・調査：IV層上面における標高9.7m前後の平坦面に立地する。N95、O95・96区周辺でII層を掘り下げたところ、III層上位で盛土と黒色土の広がりを検出した。東西方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた結果、2基の土坑が重複していることが確認された。西側をP-9、東側をP-10として調査を続けた。遺構はII下層中から掘りこまれている。覆土は4層に分層した。いずれも自然堆



図IV-296 P-8・11

積で、覆土1層は盛土の流れ込みである。土層断面からP-10がP-9を切っていることが判明した。坑底は西側から東側にわずかに傾斜するがほぼ平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-5類土器など711点、石器等44点が出土した。鋸歯状の基部をもつ異形石槍が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。 (立川)

掲載遺物：(土器) 1～16は覆土出土のⅡ群B類土器。3～6はⅡ群B-2類土器、7はⅡ群B-3類土器、8～10・16はⅡ群B-4類土器、1・2・11～15はⅡ群B-5類土器である。

Ⅱ群B-2類土器(3～6)：3は口頸部破片。口頸部文様帯下端は縄線文が加えられた貼付帯で区画され、無文地の文様帯に縄線文が加えられている。体部は多軸絡条体の回転文と綾絡文が施されている。4は口頸部破片。口頸部文様帯の下端は2本一組の縄線文によって区画され、貝殻条痕が認められる文様帯には4条の綾絡文が加えられている。5・6は口頸部に縄線文が施されたもので、多量の繊維を含むため、剥離が著しい。同一個体の可能性がある。

Ⅱ群B-3類土器(7)：7は頸部破片。口頸部文様帯の上下は、細かな結束羽状縄文で区画され、文様帯に直前段反撚の原体で縄文が施されている。体部も直前段反撚の縄文である。

Ⅱ群B-4類土器(8～10・16)：8は幅の狭い口縁部文様帯をもつもの。口縁部に組紐状の縄線文が2条施され、体部は自縄自巻の原体による縄文である。9・16は単軸絡条体の回転文が施されたもの。9は体部破片、16は底部破片でⅡ群B-3類土器の可能性がある。10は肩部分。口頸部文様帯下端は縄の圧痕が加えられ、口頸部に斜行縄文、体部に単軸絡条体の回転文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(1・2・11～15)：11～13は肥厚する口縁部をもつもの。11はやや片流れ状の突起が施され、口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部下端を内面から押し出し、肥厚状の口頸部文様帯を作り出している。無文地の口頸部文様帯に波頂部から垂下する貼付帯、2本一組の縄線文が3条施され、肥厚帯直下にも綾絡文が加えられている。12・13は肥厚帯に縄線文、体部に多軸絡条体の回転文が施されている。12は先端が欠失する波頂部で、口唇に刻目が加えられている。13は肥厚帯に2本一組の縄線文が施され、肥厚帯直下に縄線文が加えられている。14は先端が欠失する波頂部で、口唇に縄の圧痕が施されている。波頂部下位に弧状に貼り付けが加えられ、肥厚帯上に単軸絡条体の圧痕文が施されている。肥厚帯直下に穿孔が加えられ、体部に斜行縄文が施されている。15は体部破片。複節の斜行縄文を施した後、2条の綾絡文が縦位に加えられている。1・2は多軸絡条体の回転文が施された底部。

(石器) 17は覆土出土の石製品。異形石槍といわれるもの。尖頭部を欠損している。茎部は鋸歯状に整形され、左右対称に片側4枚で合計8枚が施されている。頁岩製。異形石槍は縄文前期後半に青森県津軽半島で主に出土している。茎部だけで8.0cmを測り、全長はおそらく16cmほどであったと推測される。齋藤(2010)によると異形石槍は全長11cm前後、茎部長5.5cm程のものが多いとのことなので、17は異形石槍の中でもかなりの大型のものであったと考えられる。

P-10

位置：O95・96区

平面形：楕円形

規模：1.98 / 0.98×1.17 / 0.86×0.24m

確認・調査：標高9.7m前後の平坦面に立地する。N95、O95・96区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で盛土と黒色土の広がりを検出した。東西方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、2基の土坑が重複していることが確認された。西側の土坑をP-9、東側の土坑をP-10

として調査を続けた。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は3層に分層した。いずれも自然堆積で、覆土1層は盛土の流れ込みである。土層断面からP-10がP-9を切っていることが判明した。坑底は平坦で、壁は西側が緩やかに、東側が比較的急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：坑底からⅡ群B-2類土器1点、覆土から土器183点、石器等47点が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)

掲載遺物：(土器) 6は坑底、1～5・7は覆土出土。1～7はⅡ群B類土器。

6はⅡ群B-2類土器。口頸部下端の粘土紐の貼り付けが認められるが文様構成は不明である。1～4・7はⅡ群B-3類土器で、1～3・7は底部破片。1は撚糸文、2・3・7は斜行縄文が施されている。4は口縁部破片。幅広の口頸部文様帯に組紐状の圧痕文が認められる。5はⅡ群B-4類土器の口縁部破片。幅の狭い口頸部文様帯に4条の撚糸の圧痕文と結束羽状縄文が施されている。

P-12 (図IV-299)

位置：N・O86・87区

平面形：不明

規模：(2.35) / (1.96) × 1.85 / 1.39 × 0.51m

確認・調査：調査区の南側斜面に立地する。Ⅱ層を掘り下げ中に褐色土の落ち込みを確認した。P-11と重複する。覆土はH-16の掘り上げ土の流れ込みである。坑底は凹凸があり、南側に向かい傾斜している。壁は緩く立ち上がる。南側はP-11構築時に壊されている。

遺物出土状況：覆土からⅡ群A類土器1点、Ⅱ群B類土器が782点、石器等205点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1～5は覆土出土のⅡ群B-5類土器の口縁部破片。1・2は口縁部が肥厚するもの。1は無文地の肥厚帯上に縄線文が施され、波頂部下位に指頭の押圧、下端に縄の圧痕文、直下に綾絡文が加えられている。体部には単軸絡条体第1A類の撚糸文が施されている。2は肥厚帯に縄線文、上端に縄の圧痕文が施されている。3の口頸部文様帯下端は刺突が加えられた貼り付けによって区画され、無文地の口頸部と口唇部に絡条体圧痕文が施されている。体部は多軸絡条体の回転文である。4・5はくびれをもち大きく外反する口縁部破片。4は無文地の口頸部に単軸絡条体の圧痕文が施されている。5は2個一組の波頂部から刺突文が加えられた縦位の貼り付けが施され、貼り付け間と口頸部に絡条体圧痕文が加えられている。

(石器) 6・7は覆土出土のたたき石。6は乳棒状礫の両端部に広い敲打痕のあるもの。砂岩製。7は扁平礫の両端部に敲打痕のあるもの。被熱している。安山岩製。

P-13 (図IV-299)

位置：L・M89区

平面形：不整形

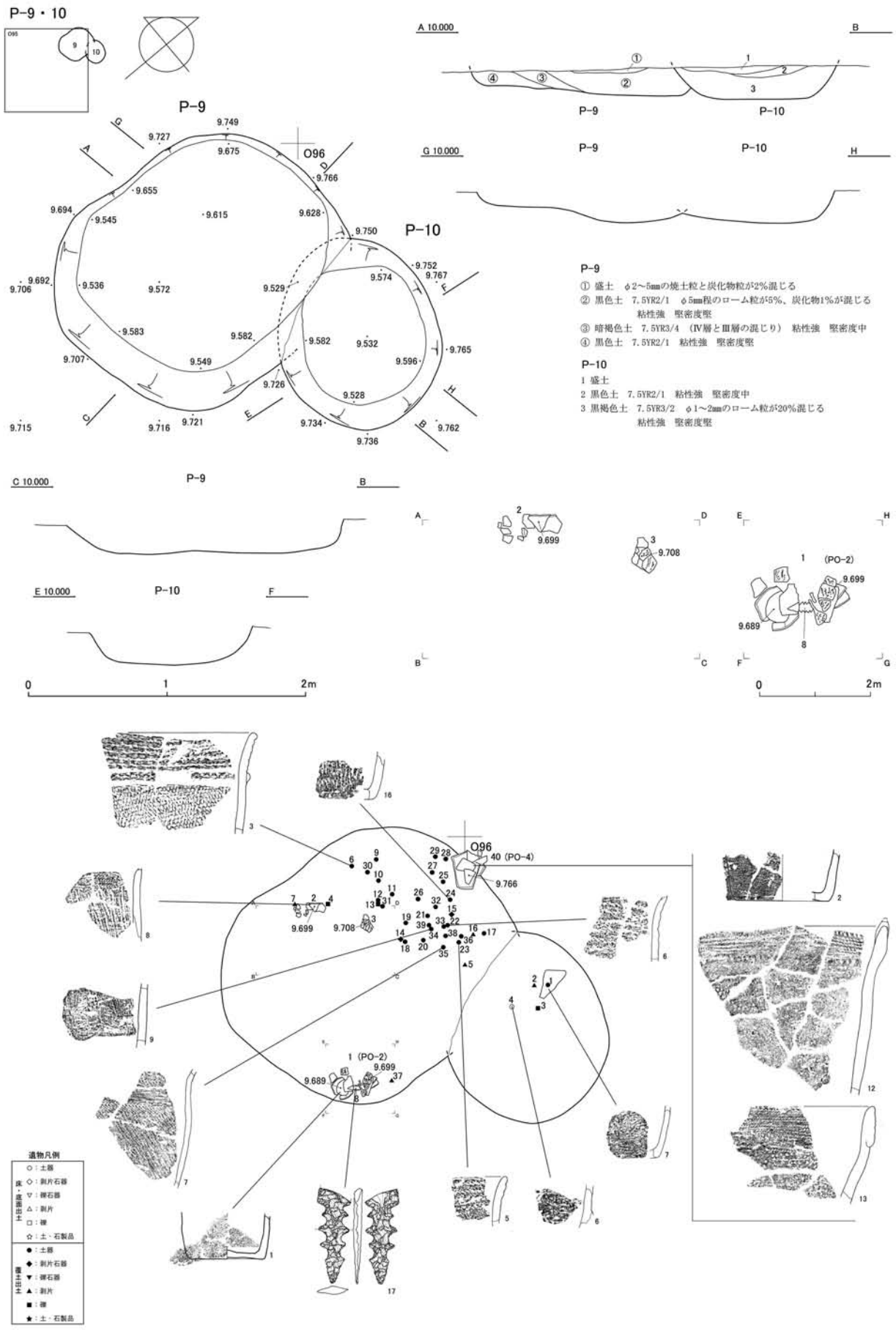
規模：2.13 / 1.43 × 1.81 / 1.33 × 0.38m

確認・調査：H-13の周辺を調査中、Ⅱ層下位で明褐色土のブロックが多量に混入する円形の落ち込みを確認した。半截して調査したところ、平坦な底面と壁の立ち上がりを確認した。平面形は不定円形である。覆土は埋戻しと考えられる。P-19とP-25を切って構築されている。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B類土器など101点、石器等40点が出土した。Ⅰ群B-4類土器が14点出土している。

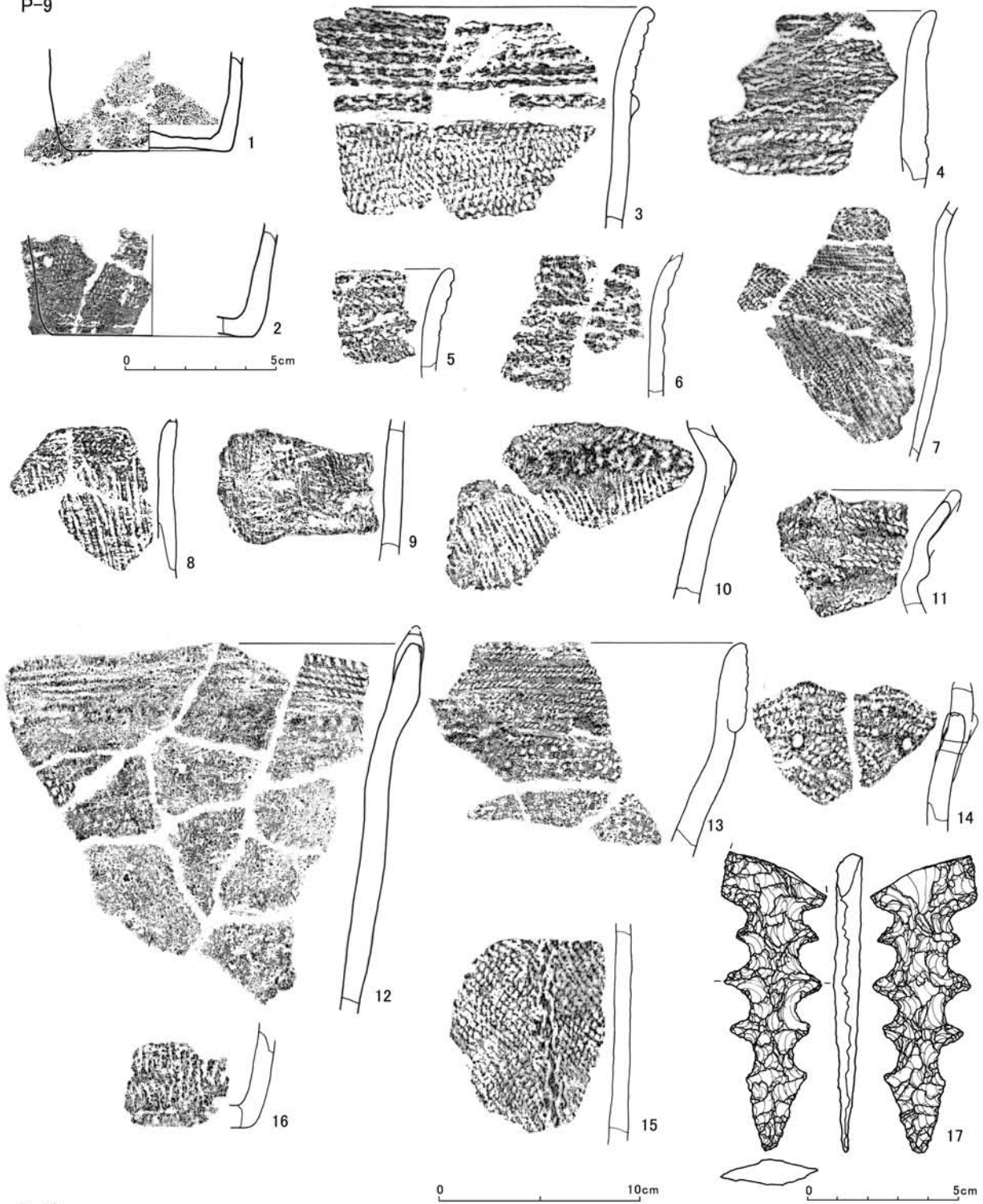
時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土。3はⅠ群B-4類土器で圧痕文と綾絡文が施されている。1・

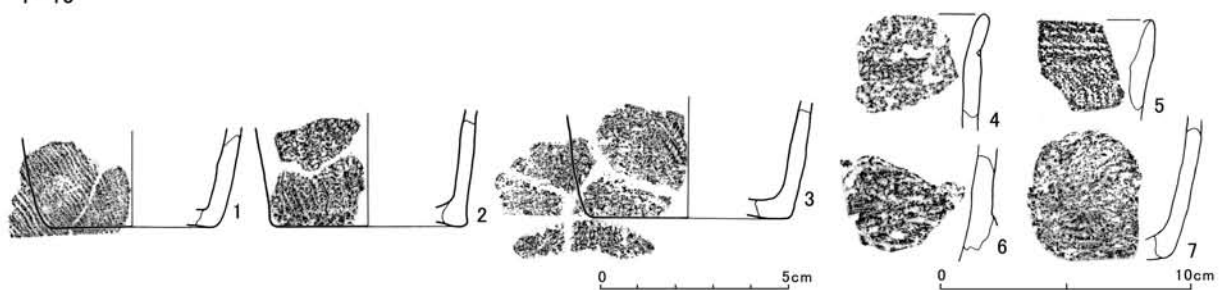


図IV-297 P-9・10

P-9



P-10



图IV-298 P-9·10 遺物

2・4・5はⅡ群B類土器。1・2はⅡ群B-4類土器の単軸絡条体の回転文が施された底部破片。2には結束羽状縄文が加えられている。4・5はⅡ群B-5類土器の体部破片。いずれも多軸絡条体の回転文が施されたもの。3は貝殻条痕上加えられている。

P-14 (図IV-300)

位置：N・O93区

平面形：楕円形

規模：2.66 / 1.86×2.01 / 1.17×0.46m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高9.3～9.6m前後の北東から南西へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。N・O93区周辺でⅡ層、Ⅲ層を掘り下げたところ、Ⅳ層上位で暗褐色土の落ち込みを確認した。短軸方向に土層観察用の土手を設定し掘り下げた。その結果、ほぼ平坦な坑底と壁の立ち上がりが確認された。北東側の壁が、壁中位で段がつく。崩落によると思われる。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は4層に分層し、覆土1～3層はⅡ層主体でローム粒が混じる。覆土4層はⅣ層（ローム層）の土で、壁の崩落土と考えられる。いずれも自然堆積である。坑底は北東から南西へわずかに傾斜するがほぼ平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：坑底からⅡ群B-5類土器2点、礫・礫片4点、覆土からⅡ群B-5類土器など83点、石器等119点が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。 (立川)

掲載遺物：(土器) 6は坑底、1～5は覆土出土である。いずれもⅡ群B類土器。

1はⅡ群B-4類土器の体部破片。単軸絡条体の回転文が施されている。2～6はⅡ群B-5類土器。2は断面が角形で、口頸部に単軸絡条体の圧痕文が施されたもの。3は頸部に2本一組の縄線文が施され、体部に斜行縄文が施されたもの。4・5は多軸絡条体の回転文が施されたもの。5は底部破片。6は底面部分。

(石器) 7は覆土出土のつまみ付ナイフ。縦型剥片の片面周縁部を加工したもの。頁岩製。

P-15 (図IV-300)

位置：O93・94区

平面形：円形

規模：1.33 / 0.78×1.23 / 0.71×0.18m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高9.4～9.7m前後の東から西へ緩やかに傾斜する斜面に立地する。N・O93区周辺でⅡ層、Ⅲ層を掘り下げたところ、Ⅳ層上位で褐色土の落ち込みを確認した。短軸方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、ほぼ平坦な坑底と壁の立ち上がりを確認した。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は径1mmほどのローム粒が混じるⅢ層主体の土で、自然堆積である。坑底は南西側にわずかに傾斜するがほぼ平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-4類土器9点、石器等43点が出土した。

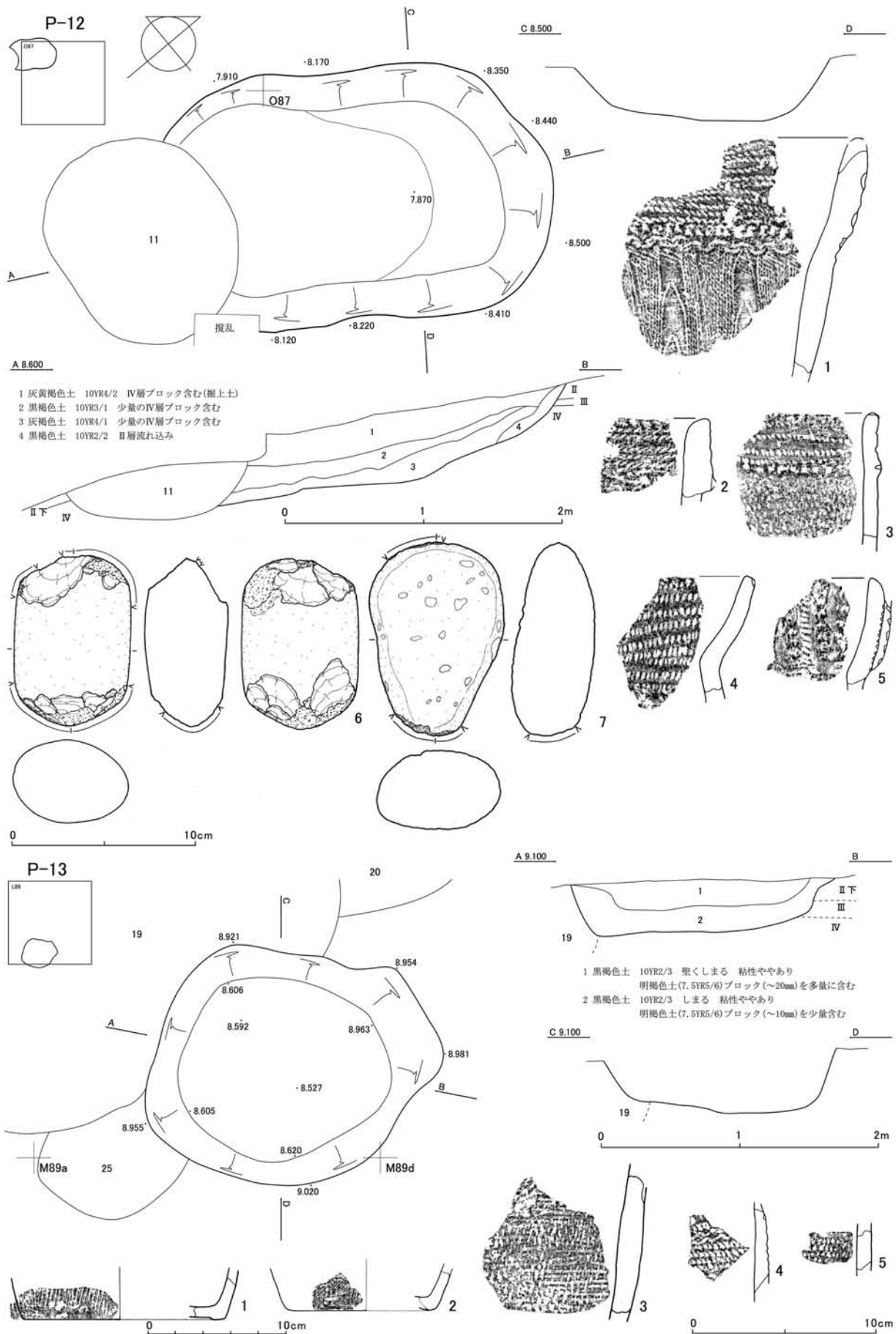
時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。 (立川)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土のⅡ群B類土器、Ⅱ群B-4類土器である。1は口頸部破片。無文地の頸部に縄線文が加えられ、肩部分に細い棒状工具による刺突文と綾絡文が加えられている。2は自縄自巻の原体による縄文が施されている。

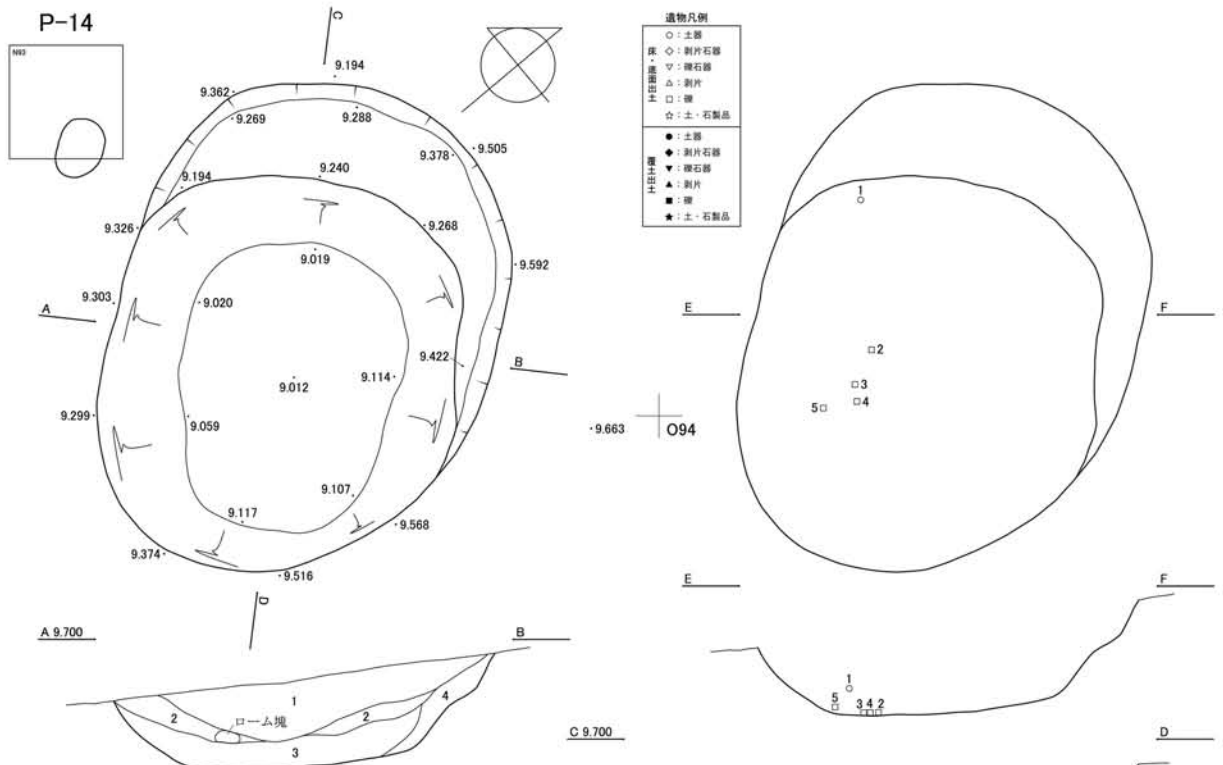
P-17 (図IV-301)

位置：N88区

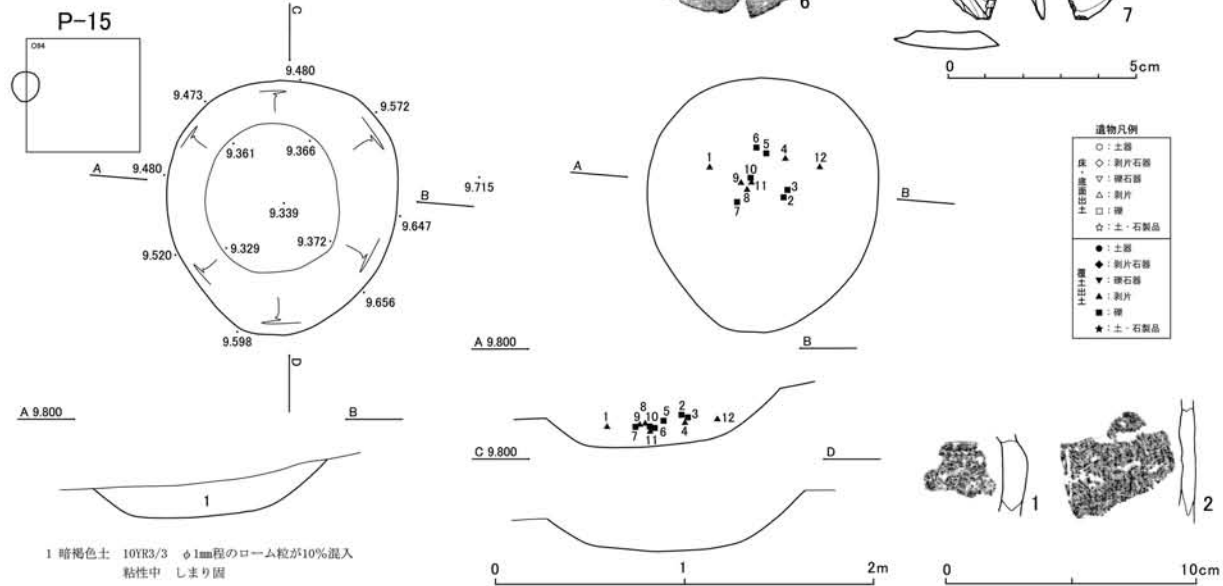
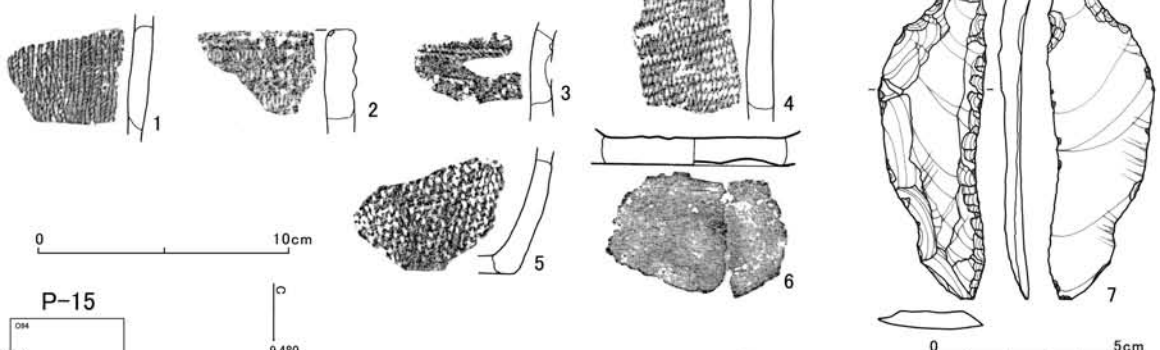
平面形：円形



図IV-299 P-12・13

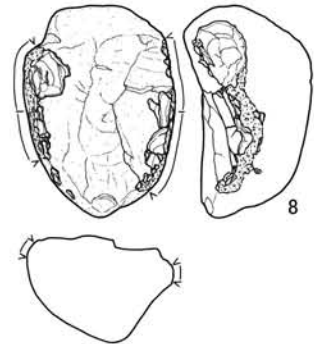
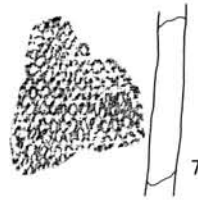
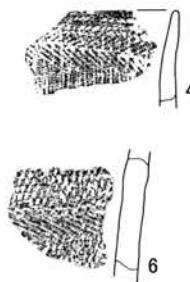
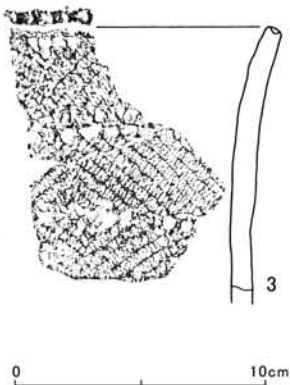
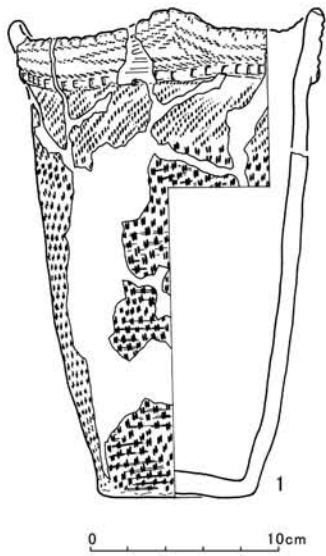
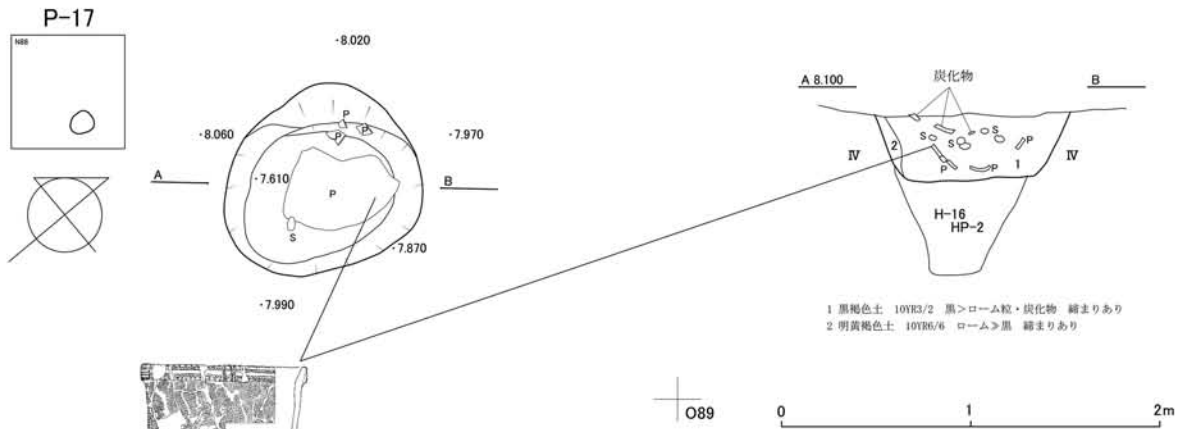


- 1 暗褐色土 10YR3/3 φ1mm程のローム粒が25~30%混じる
2mm程の炭化物粒が1%未満混じる 粘性弱 しまり固
- 2 褐色土 7.5YR4/6 II層+IV層 φ10mm程のローム粒が10%混じる
西側からの流れ込みにφ10mm程の角の丸いローム塊が混じる
粘性強 しまり固
- 3 暗褐色土 10YR3/3 1層に似るがローム粒の混じりが10%程と少ない
粘性強 しまり中
- 4 明黄褐色土 10YR6/6 IV層ローム 崩落土



- 1 暗褐色土 10YR3/3 φ1mm程のローム粒が10%混入
粘性中 しまり固

図IV-300 P-14・15



図IV-301 P-17

規模：1.06 / 0.78×1.01 / 0.75×0.35m

確認・調査：H-16のHP-2の調査中に確認した。HP-2の上部に作られている。半截し、調査を行った。覆土は埋戻しである。坑底はやや凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。覆土の炭化物を採取しフローテーションを行い、キハダの炭化果実片を検出した。

遺物出土状況：覆土中にⅡ群B類土器の破片が敷き詰めた状態で出土している。覆土からⅡ群B-5類土器など374点、石器等30点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。（佐藤）

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土である。3はⅡ群A類土器、1・2・4～7はⅡ群B類土器。

Ⅱ群A類土器(3)：3は口縁部破片。断面形が角形の口唇に刺突が加えられ、体部には結束羽状縄文が菱目状に施されている。

Ⅱ群B-4類土器(4～6)：4は口縁部。縄線文と結束羽状縄文が施されている。5は肩をもつ口頸部破片。無文地の頸部には縄線文が、肩部分には縄の圧痕文と綾絡文が施されている。6は体部破片。自縄自巻の原体による縄文、結束羽状縄文、多軸絡条体の回転文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(1・2・7)：1・2は口縁部が肥厚するもの。1は上げ底の底部から開き気味に立ち上がる器形である。4か所の波頂部をもつ波状口縁で、口唇に縄の圧痕が施されている。無文地の口頸部文様帯に波状口縁に沿って山形に縄線文が施され、下端に半截竹管状工具による押引文が加えられている。体部上半に斜行縄文、下半に多軸絡条体の回転文が施されている。2は底部から開き気味に立ち上がる筒形の器形である。平縁で、口唇に縄の圧痕が施されている。無文地の口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施され、垂下する縄線文が加えられている。下端に円形刺突文が加えられている。体部に多軸絡条体の回転文が施されている。7は多軸絡条体の回転文が施された体部破片。

(石器) 8は覆土出土のたたき石。亜円礫の側縁に敲打痕のあるもの。頁岩製。

P-19 (図IV-302)

位置：L88・89区

平面形：不定円形

規模：3.66 / (2.10) ×3.04 / 1.74×0.56m

確認・調査：H-13の周辺を調査中、Ⅱ層下位で明黄褐色土のブロックが多量に混入する楕円形の落ち込みを確認した。半截して調査したところ、平坦な底面と壁の立ち上がりを確認した。覆土は埋戻しと考えられる。H-13とP-13に切られ、P-25を切って構築されている。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-3類土器など149点、石器等196点が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。（酒井）

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土のⅡ群B類土器である。

Ⅱ群B-3類土器(1～4)：1・2は口縁部破片。1は斜行縄文が施されたもの。口縁部は斜位に、体部は縦位気味に施されている。2は口頸部に貝殻条痕文が施されたもの。3・4は体部に単軸絡条体第5類の原体で菱目状の撚糸文が施されたもの。

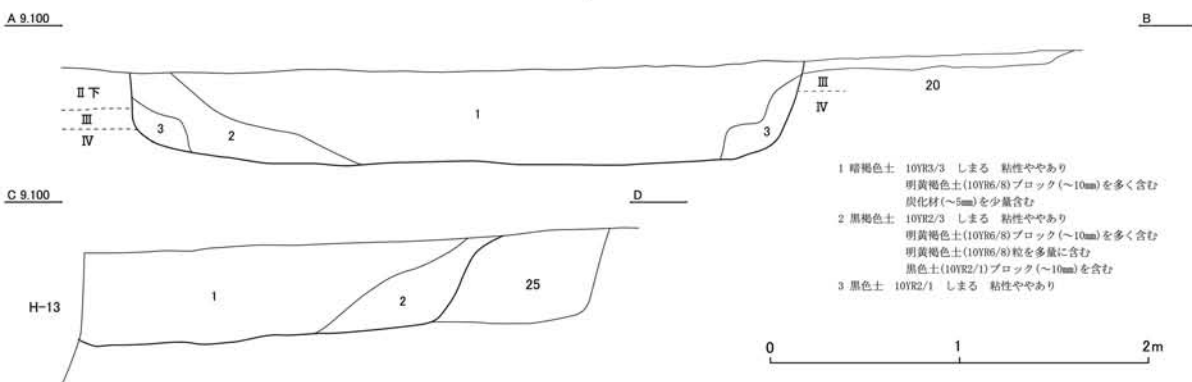
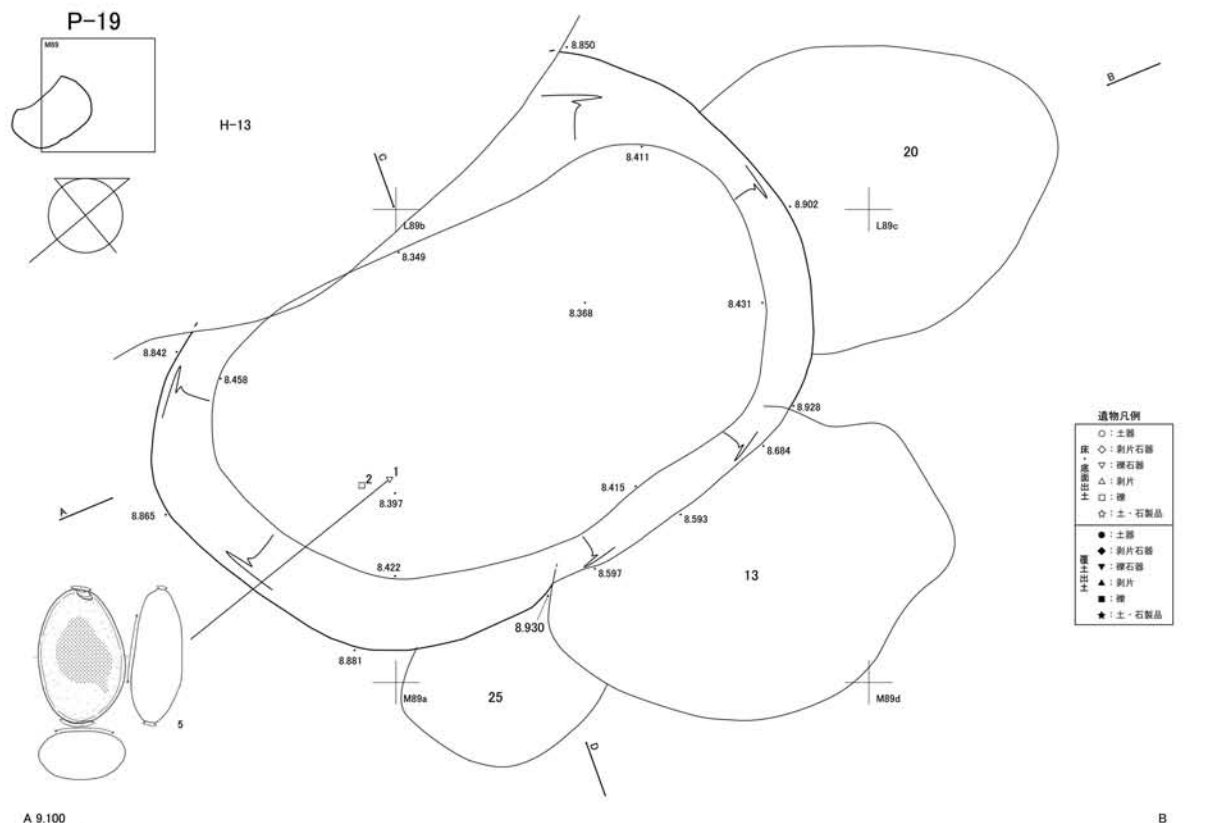
(石器) 5はたたき石。扁平な楕円礫の両端部に敲打痕がある。背面の平坦面に擦り痕とみられる光沢が確認できることから、すり石のような使い方もされていたと考えられる。砂岩製。

P-20 (図IV-303)

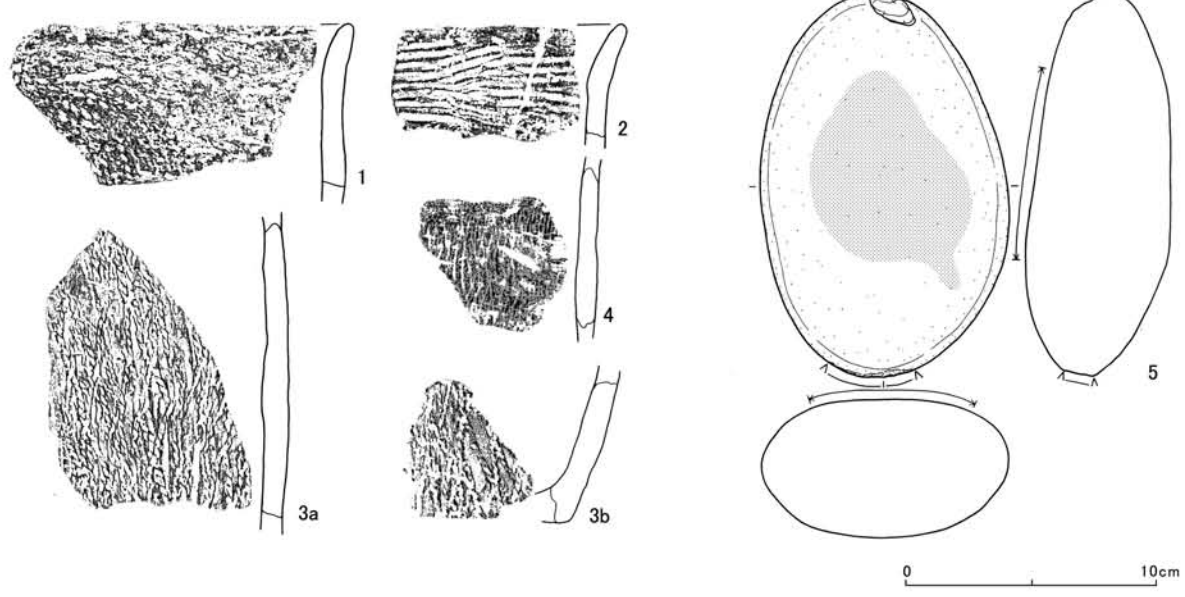
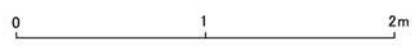
位置：L89区

平面形：不定円形

規模：(1.46) / 1.64×1.26 / 1.36×0.12m



- 1 暗褐色土 10YR3/3 しまる 粘性ややあり
明黄褐色土(10YR6/8)ブロック(~10mm)を多く含む
炭化材(~5mm)を少量含む
- 2 黒褐色土 10YR2/3 しまる 粘性ややあり
明黄褐色土(10YR6/8)ブロック(~10mm)を多く含む
明黄褐色土(10YR6/8)粒を多量に含む
黒色土(10YR2/1)ブロック(~10mm)を含む
- 3 黒色土 10YR2/1 しまる 粘性ややあり



図IV-302 P-19

確認・調査：H-13の周辺を調査中、Ⅱ層下位で明黄褐色土のブロックが多量に混入する円形の落ち込みを確認した。半截して調査したところ、平坦な底面と緩やかな壁の立ち上がりを確認した。覆土は埋戻しと考えられる。P-19の覆土1層と同じものと考えられ、同時に埋められた可能性がある。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B類土器761点、石器等298点が出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土のⅡ群B類土器。4はⅡ群B-2類土器、1・3・5～12はⅡ群B-3類土器、2・13・14はⅡ群B-4類土器、15～17はⅡ群B-5類土器である。

Ⅱ群B-2類土器(4)：4は口頸部破片。文様帯下端は刺突が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には不整綾絡文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(1・3・5～12)：1は直前段反撚の縄文が施された底部破片。3は複節の斜行縄文が施された底部。5～7は口頸部破片。5は貝殻条痕文、6は3本一組の撚糸文が加えられたもの。7は結束羽状縄文が口頸部文様帯に施されたもの。8～10は口頸部文様下端の区画文が認められるもの。8・9は縄線文、10は絡条体の圧痕文で文様帯の下端を区画している。11・12は体部破片。11は単節と複節の斜行縄文が組み合わさって、12は複節の斜行縄文が施されている。

Ⅱ群B-4類土器(2・13・14)：2は単軸絡条体の回転文が施された底部。13は幅の狭い口縁部文様帯に細い3本一組の撚糸の圧痕文が2条加えたのち、斜行縄文が施されている。14は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(15～17)：15・17は同一個体。口唇に縄の圧痕が加えられている。口頸部下端を内面から押し出して肩状の区画帯を作り出し、そこに刺突文が加えられている。無文地の口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されている。区画帯直下に2条の綾絡文が加えられ、体部に多軸絡条体の回転文が施されている。16は口唇に縄の圧痕が加えられ、無文地の口頸部文様帯に2本一組の縄線文が施されている。

(石器) 18はスクレイパー。剝片の下端部に直線状の刃部を設けている。刃部両面には使用痕とみられる光沢が確認できる。頁岩製。

P-21 (図IV-303)

位置：P・Q97区

平面形：楕円形

規模：(1.18) / 0.77 × (0.91) / 0.46 × 0.22m

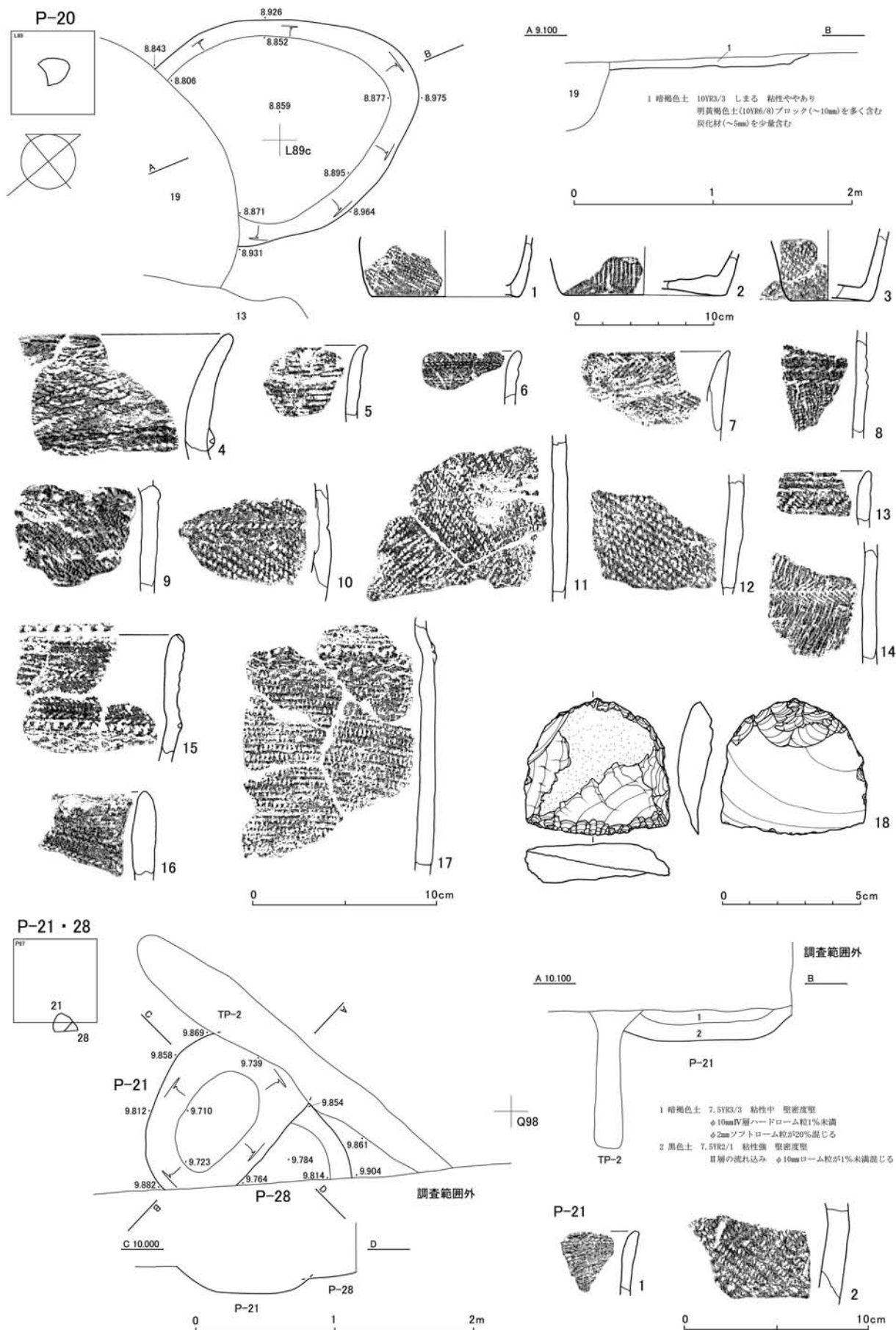
確認・調査：Ⅳ層上面における標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で調査区東側境界に接した状態で暗褐色土の広がりを確認した。南北方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、2基の土坑が重複していることが確認された。調査を進めていったところ、さらに1基の土坑が重複しているのが確認された。土層断面から、新しい順にTP-1 > P-21の順で、P-28についての新旧関係は特定できなかった。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は2層に分層し、いずれもⅡ層主体でローム粒が混じる。自然堆積である。

遺物出土状況：覆土からⅡ群A類土器1点、Ⅱ群B類土器24点、石器等9点が出土した。

時期：検出された層位や出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土である。1はⅡ群B-3類土器の口縁部破片。横走気味の直前段反撚の原体による縄文を地文に、組紐状の縄線文が加えられている。2はⅡ群A類土器の体部破片。多条の結束羽状縄文が施されている。

P-28 (図IV-303)



図IV-303 P-20・21・28

位置：P・Q97区

平面形：不明

規模：(0.63) / (0.48) × (0.59) / (0.47) × 0.07m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で調査区東側境界に接した状態で暗褐色土の広がりを確認した。南北方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、3基の土坑が重複していることが確認された。本土坑はP-21と切り合うが、新旧関係は特定できなかった。また、土坑南東側は調査区外に存在する。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。

遺物出土状況：遺物は出土していない。

時期：検出された層位と周辺の出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)

掲載遺物：遺物の掲載なし。

P-22・26・27 (図Ⅳ-304・305)

P-22

位置：P97・98区

平面形：不整形

規模：(1.49) / 1.17 × (1.07) / 0.80 × 0.43m

確認・調査：Ⅳ層上面における標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97・98区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で黒色土と盛土の広がりを確認した。南北方向と東西方向の二方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、6基の土坑が重複していることが確認された。P-22は黒色土と盛土の広がり中央部、重複のうちの西側に位置する土坑である。北側でP-29に切られるが、東側で切り合うP-26との新旧関係は特定できなかった。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。覆土は4層に分層した。いずれも自然堆積で、覆土1層は盛土の流れ込み、覆土2～4層はいずれもⅡ層主体である。坑底は中央部がわずかにくぼむ皿状、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：坑底からⅡ群B-3類土器など6点、石器等1点、覆土から土器807点、石器等80点が出土している。Ⅱ群A類土器7点、Ⅱ群B類土器800点のうちⅡ群B-5類土器が640点を占める。

時期：検出された層位と周辺の出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)

掲載遺物：(土器)いずれも覆土出土である。4～9はⅡ群A類土器。1～3・10～18はⅡ群B類土器で、10～16はⅡ群B-3類土器、17・18はⅡ群B-4類土器、1～3はⅡ群B-5類土器である。

Ⅱ群A類土器(4～9)：4は口縁部破片。器面外面に刺突列が加えられている。5～9は同一個体。口唇には刻目が加えられ、体部に多条の結束羽状縄文が菱目状に施されている。

Ⅱ群B-3類土器(10～16)：10・11は斜行縄文が施された口縁部破片。12は口頸部には斜行縄文、体部に複節の斜行縄文を施した後、2条一組の縄線文で口頸部の上下が区画されたもの。13～16は体部破片。13は直前段反撚の原体による縄文、14～16は複節の斜行縄文が施されたものである。

Ⅱ群B-4類土器(17・18)：17・18は幅の狭い口頸部文様帯を持つもの。17は文様帯に結束羽状縄文と組紐状の縄線文が施されている。18は無文地の文様帯に縄線文が加えられている。

Ⅱ群B-5類土器(1～3)：1は綾絡文が加えられた肩部分で口頸部文様帯下端を区画し、やや幅広の無文地の口頸部に組紐状の縄線文が施されている。口唇には縄の圧痕文が加えられている。Ⅱ群B-4類土器の可能性もある。2・3は底部。いずれも体部は多軸絡条体の回転文である。

(石器) 19は覆土出土のつまみ付ナイフ。縦型で下端部を欠損している。頁岩製。

P-26**位置**：P・Q97・98区**平面形**：楕円形**規模**：—／—×1.23／0.70×(0.31) m

確認・調査：標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97・98区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で黒色土と盛土の広がりを確認した。南北と東西の二方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、6基の土坑が重複していることが確認された。P-26は黒色土と盛土の広がり中央部、重複のうちの中央部に位置する土坑である。北側でP-6・29と切り合い、西側でP-22、東側でP-27と切り合う。西側でP-22と、東側でP-27と切り合うが新旧関係は特定できなかった。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。残存個所から坑底はほぼ平坦、壁は穏やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-4類土器5点が出土した。**時期**：検出された層位や出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)**掲載遺物**：(土器) いずれも覆土出土。1～3はⅡ群B-4類土器。1・2は単軸絡条体の回転文、3は斜行縄文が施されている。**P-27****位置**：P・Q97・98区**平面形**：楕円形**規模**：—／(0.69)×(0.96)／0.57×(0.28) m

確認・調査：標高9.9m前後の平坦面に立地する。P・Q97・98区周辺でⅡ層を掘り下げたところ、Ⅲ層上位で黒色土と盛土の広がりを確認した。南北と東西の二方向に土層観察用のベルトを設定し掘り下げた。その結果、6基の土坑が重複していることが確認された。P-27は黒色土と盛土の広がり中央部、重複のうちの東側に位置する土坑である。西側でP-26と切り合うが新旧関係は特定できなかった。また、土坑南東側は調査区外に存在する。遺構はⅡ下層中から掘りこまれている。残存個所から坑底はほぼ平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-4類土器など7点、Ⅲ群A類土器3点、石器等5点が出土した。**時期**：検出された層位や出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(立川)**掲載遺物**：(土器) いずれも覆土出土である。1～3はⅡ群B類土器、4はⅢ群A類土器。

Ⅱ群B-4類土器(2・3)：2・3は単軸絡条体の回転文が施された体部破片。

Ⅱ群B-5類土器(1)：1は口縁部破片。肥厚する口縁部に3条の縄線文、肥厚帯下端に半截竹管状工具による刺突文が加えられている。そして、肥厚帯直下にナデ調整が加えられ、下位に不規則な斜行縄文が施されている。

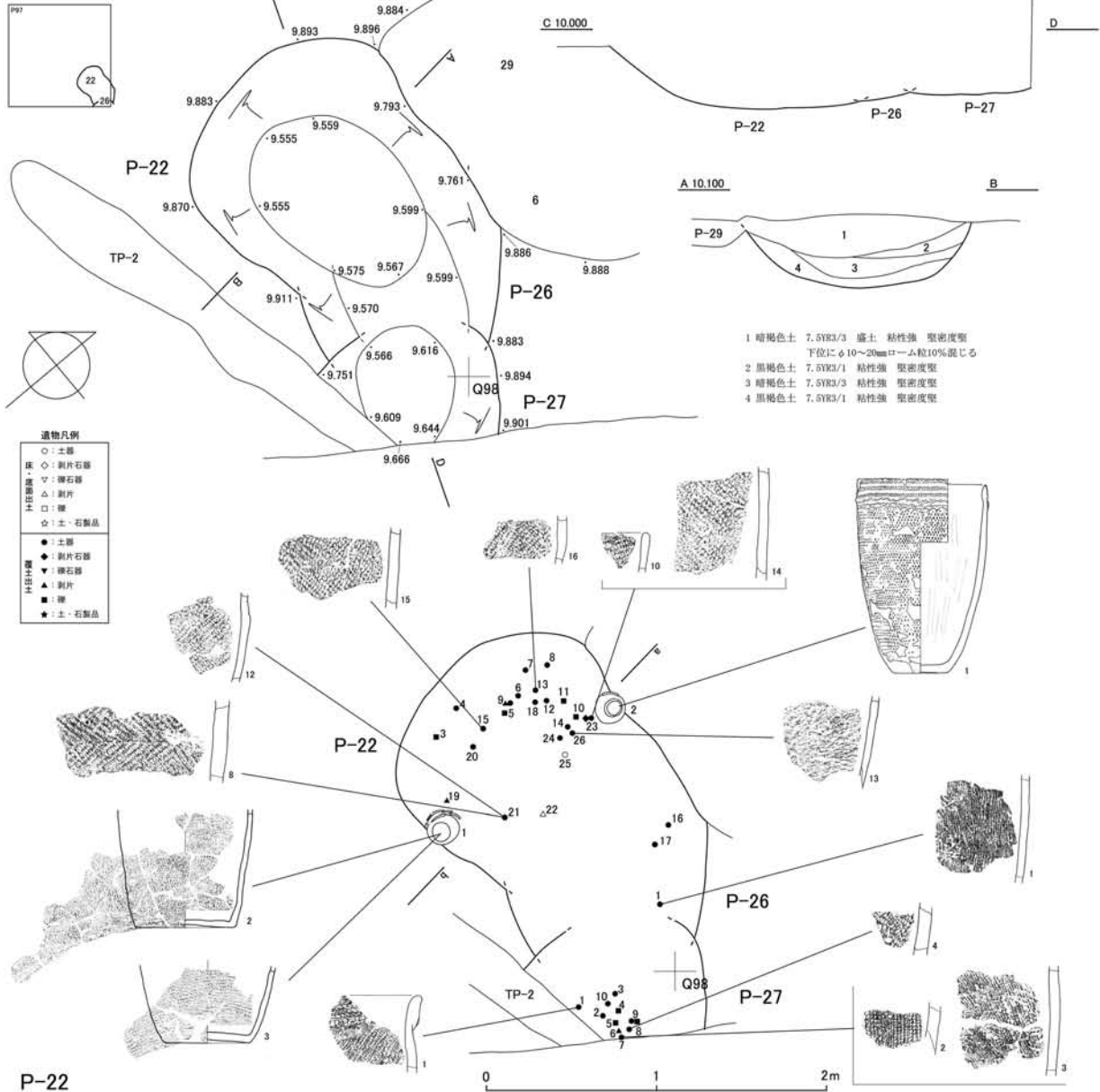
Ⅲ群A類土器(4)：4は斜行縄文が施されたもの。

P-23 (図IV-306)**位置**：M・N86・87区**平面形**：不定円形**規模**：3.02／2.94×2.55／2.45×0.34m

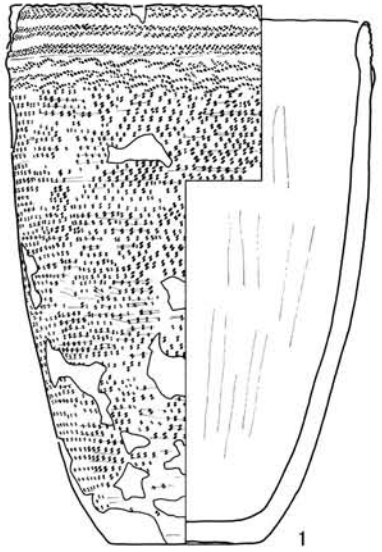
確認・調査：H-15の周辺を調査中、Ⅳ層上面で黄褐色粘土のブロックが少量混入する暗褐色土の落ち込みを確認した。半截して調査したところ、平坦な底面と緩やかな壁の立ち上がりを確認した。H-15に切られている。覆土は埋戻しと考えられる。

遺物出土状況：坑底からⅡ群B-3類土器など9点、石器等8点、覆土からⅡ群B-3類土器など538

P-22・26・27

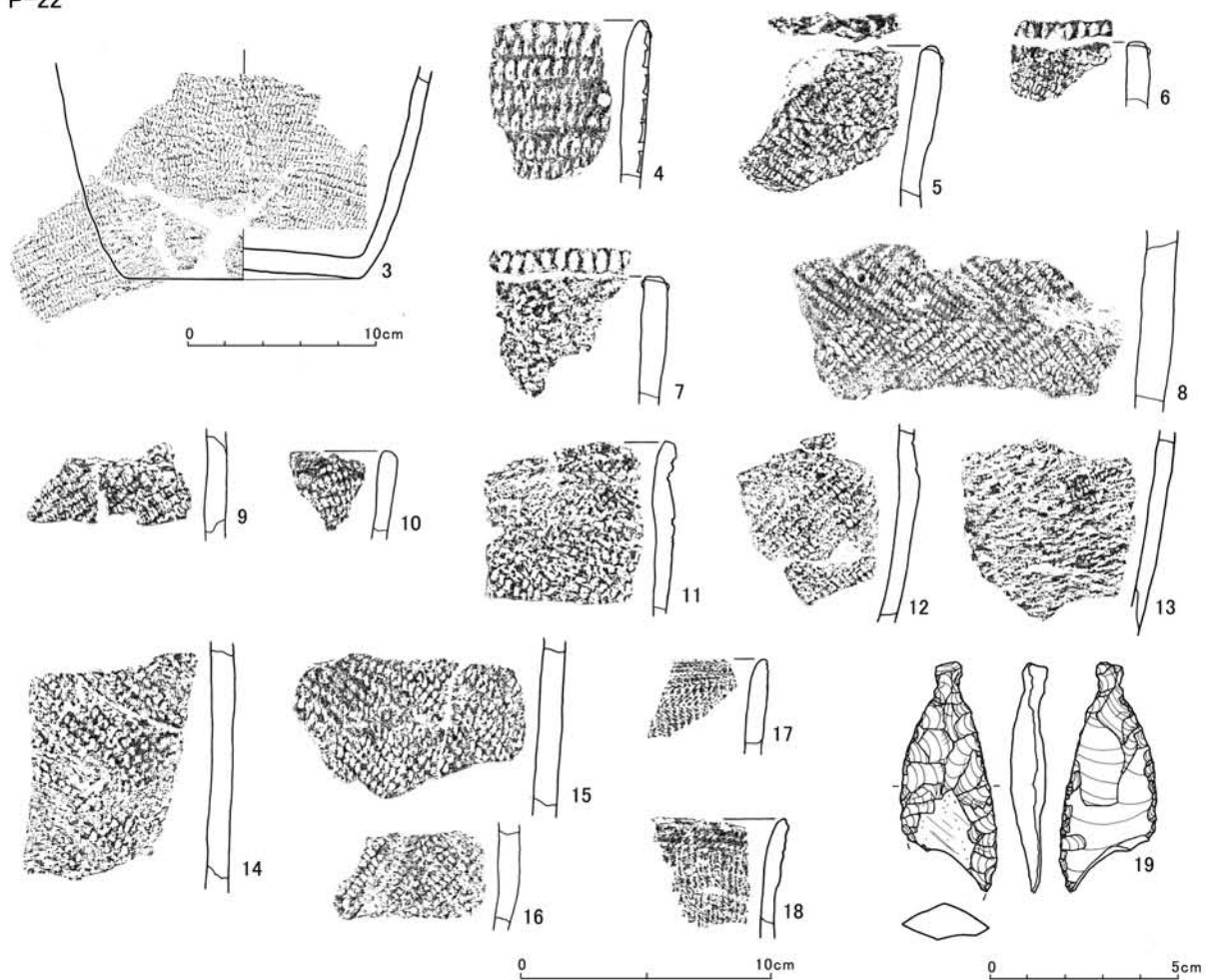


P-22

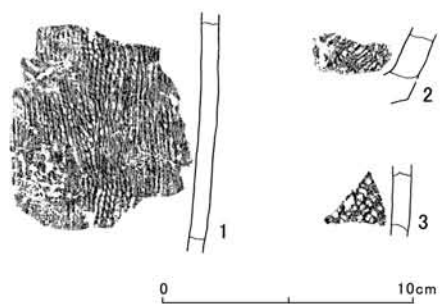


図IV-304 P-22・26・27

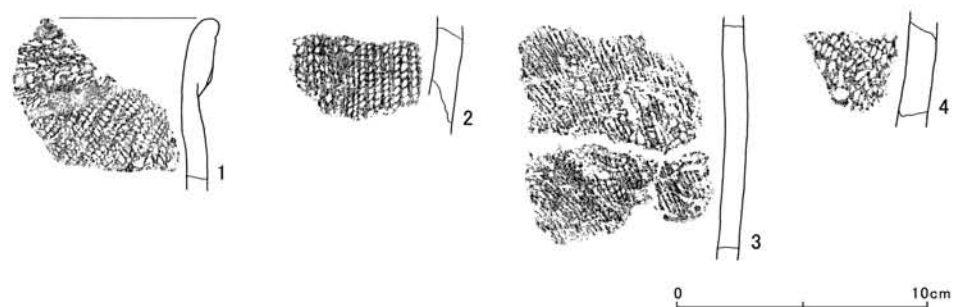
P-22



P-26



P-27



图IV-305 P-22·26·27 遺物

点、石器等164点が出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) 6・8は坑底、1～5・7は覆土出土である。いずれもⅡ群B類土器。

Ⅱ群B-2類土器(2)：2は口縁部破片。口頸部文様帯下端は剥離しているが僅かに沈線が認められる。口頸部には不整綾絡文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(1・3～8)：1は底部破片。体部に単軸絡条体の回転文を施文後、底部下端に2条の沈線が加えられている。底面にも撚糸文が認められる。3～6は口縁部破片。3は波状口縁である。器面に複節の斜行縄文を施文後、口頸部文様帯の上下端を縄線で区画し、波頂部から2本の縄線文が加えられている。4・5は口頸部文様帯が単軸絡条体圧痕文で区画されているもの。4の地文は直前段反撚の原体による縄文、5は単軸絡条体の回転による撚糸文である。6は直前段反撚の原体による縄文のみが施されたもの。7は頸部破片。口頸部文様帯下端に縄線文と半截竹管状工具内面による沈線が加えられている。8は羽状縄文縄文が施された体部破片。

(石器) 9～11は覆土1層出土。9はスクレイパー。縦型剥片の側縁に直線状の刃部を設けている。頁岩製。10はたたき石。垂角礫の両端部に敲打痕がみられるもの。泥岩製。11はすり石で扁平打製石器。短冊形の板状礫の長辺側縁を打ち欠いて幅の非常に狭い機能部を作出している。安山岩製。

P-30 (図IV-306)

位置：M87区

平面形：不明

規模：(1.14) / (0.44) × (0.44) / (0.08) × 0.52m

確認・調査：H-15の調査中、壁面に暗褐色土の断面を確認した。周辺を清掃したところ、H-15に切られた半円形の暗褐色土の落ち込みを検出した。半截して調査を行い、土坑と判断した。覆土は埋戻しで、壁面は急角度に立ち上がる。

遺物出土状況：覆土から剥片1点、礫2点が出土している。

時期：不明

掲載遺物：掲載遺物なし

P-24 (図IV-307)

位置：L88区

平面形：楕円形

規模：— / — × 1.23 / 0.70 × (0.31) m

確認・調査：H-13の壁面に土坑の断面を確認したことから、周辺を精査したところ、Ⅱ層下位で明黄褐色土のブロックが少量混入する黒褐色土の落ち込みを確認した。半截したところ、平坦な底面と緩やかな壁の立ち上がりを確認した。H-13に切られている。覆土は流れ込みと考えられる。

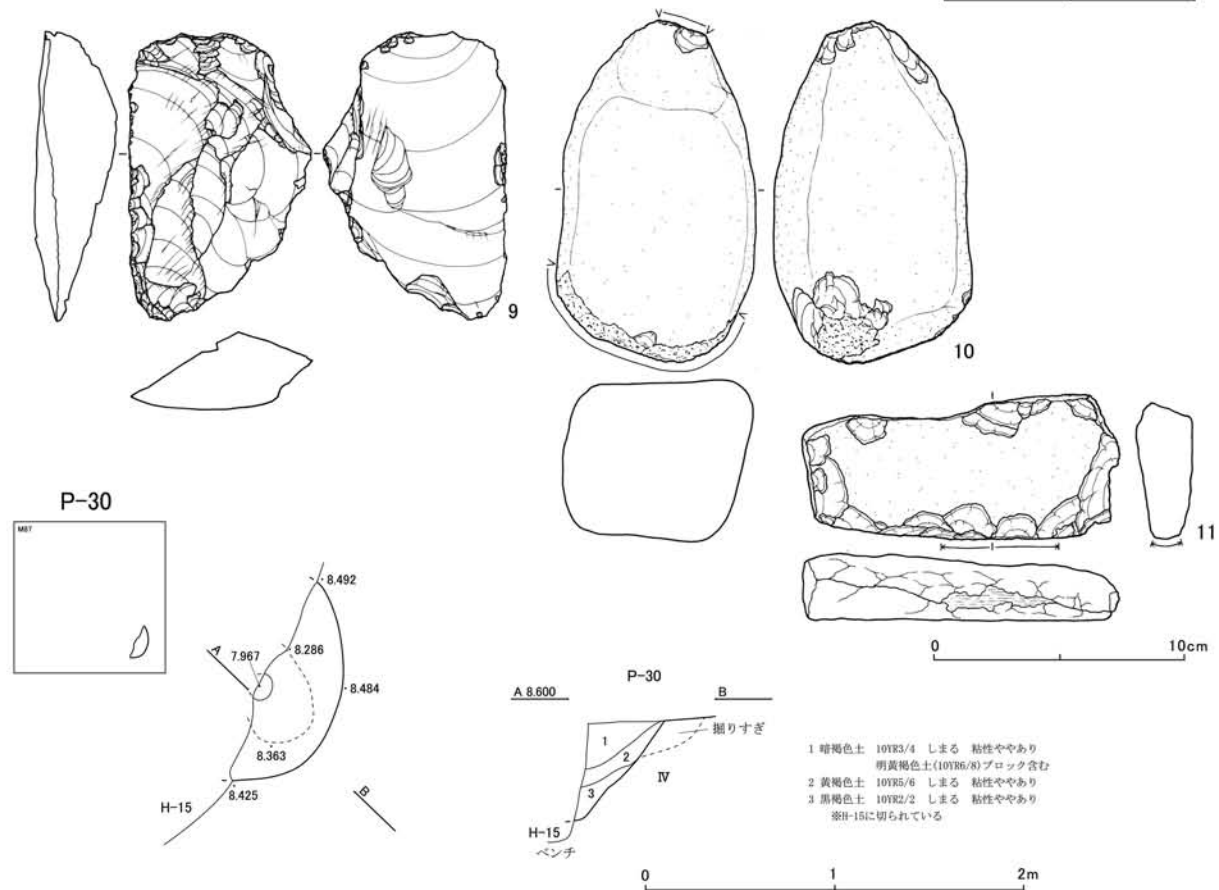
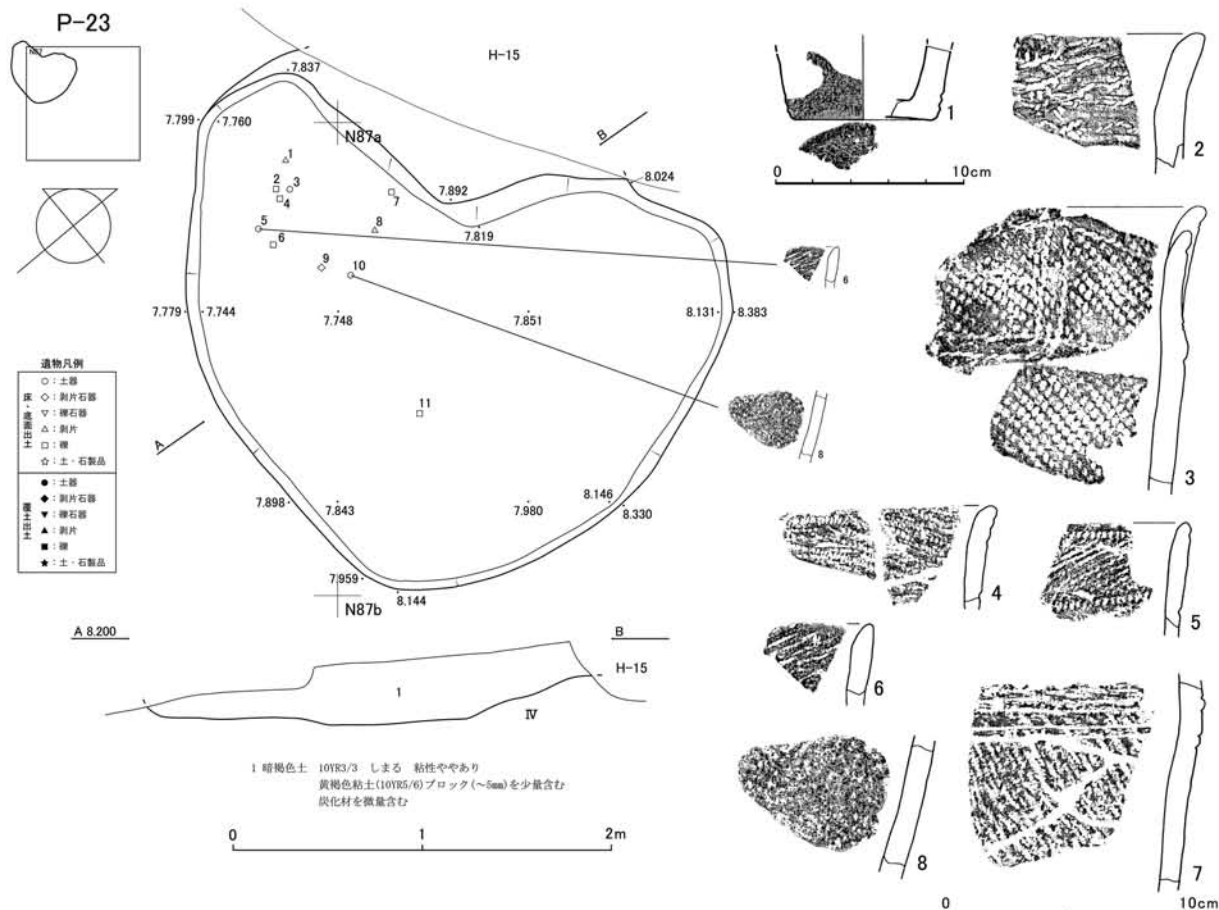
遺物出土状況：覆土からⅠ群B-3類土器3点、Ⅱ群B-2類土器など590点、石器等113点が出土した。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土。Ⅰ群B-3類土器(2)とⅡ群B類土器(1・3・4)である。

Ⅰ群B-3類土器(2)：2は胴部破片。縄文が加えられて、微隆起線文、結束羽状縄文、絡条体圧痕文が施されている。

Ⅱ群B-2類土器(1)：1は底部からやや開き気味に立ちあがる筒形の器形で、口縁部は波状である。口頸部文様帯下端は粘土紐の貼り付けによって区画され、無文地の口頸部には縄線文が施されている。体部には単軸絡条体の回転文が施されている。



図IV-306 P-23・30

Ⅱ群B-3類土器(3・4): 3は幅広の口頸部に直前段反燃の原体による縄文が施されている。
4は羽状縄文が施された体部破片。

P-25 (図IV-307)

位置: L88区

平面形: 楕円形

規模: -/-×1.23 / 0.70×(0.31) m

確認・調査: H-13の周辺を調査中、Ⅱ層下位で赤褐色土のブロックを少量含む黒色土が円形に落ち込んでいるのを確認した。半截したところ、平坦な底面と壁の立ち上がりを確認した。覆土は埋戻しで、覆土2層は焼土を廃棄したものと考えられる。P-13・19に切られて構築されている。

遺物出土状況: 覆土からⅡ群B類土器16点、石器等13点が出土した。

時期: 出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物: (石器) 1は覆土出土のスクレイパー。縦型剥片の周縁を加工して刃部を設けている。頁岩製。

P-31 (図IV-307)

位置: K92区

平面形: 円形

規模: 1.45 / 1.36×(1.39) / (1.33) ×0.25m

確認・調査: H-42の調査中に灰黄褐色土の落ち込みを確認した。H-42の壁を壊して構築されている。半截し、調査を行った。覆土はⅡ層とⅣ層の混入した埋戻しである。坑底はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況: 覆土からⅡ群B-4類土器など57点、石器等114点が出土した。土器はⅡ群B類土器55点、Ⅰ群B-4類土器1点、Ⅲ群A類土器1点である。

時期: 出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物: (土器) いずれも覆土出土。1はⅠ群B-4類土器。綾絡文が施されている。2~4はⅡ群B類土器。2・3はⅡ群B-4類土器の口縁部・口頸部破片。口縁部は無文で、縄線文が施されている。3の肩部分に綾絡文が加えられている。4はⅡ群B-5類土器。斜行縄文が施された体部破片。

P-32 (図IV-308)

位置: K97区

平面形: 隅丸方形

規模: 0.63 / 0.59×0.59 / 0.55×0.22m

確認・調査: H-39覆土上部における標高9.80m前後の平坦面に立地する。H-39の調査中に覆土上部で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はⅡ層に類似した黒色土が主体である。坑底は段差があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。H-39より新しい。

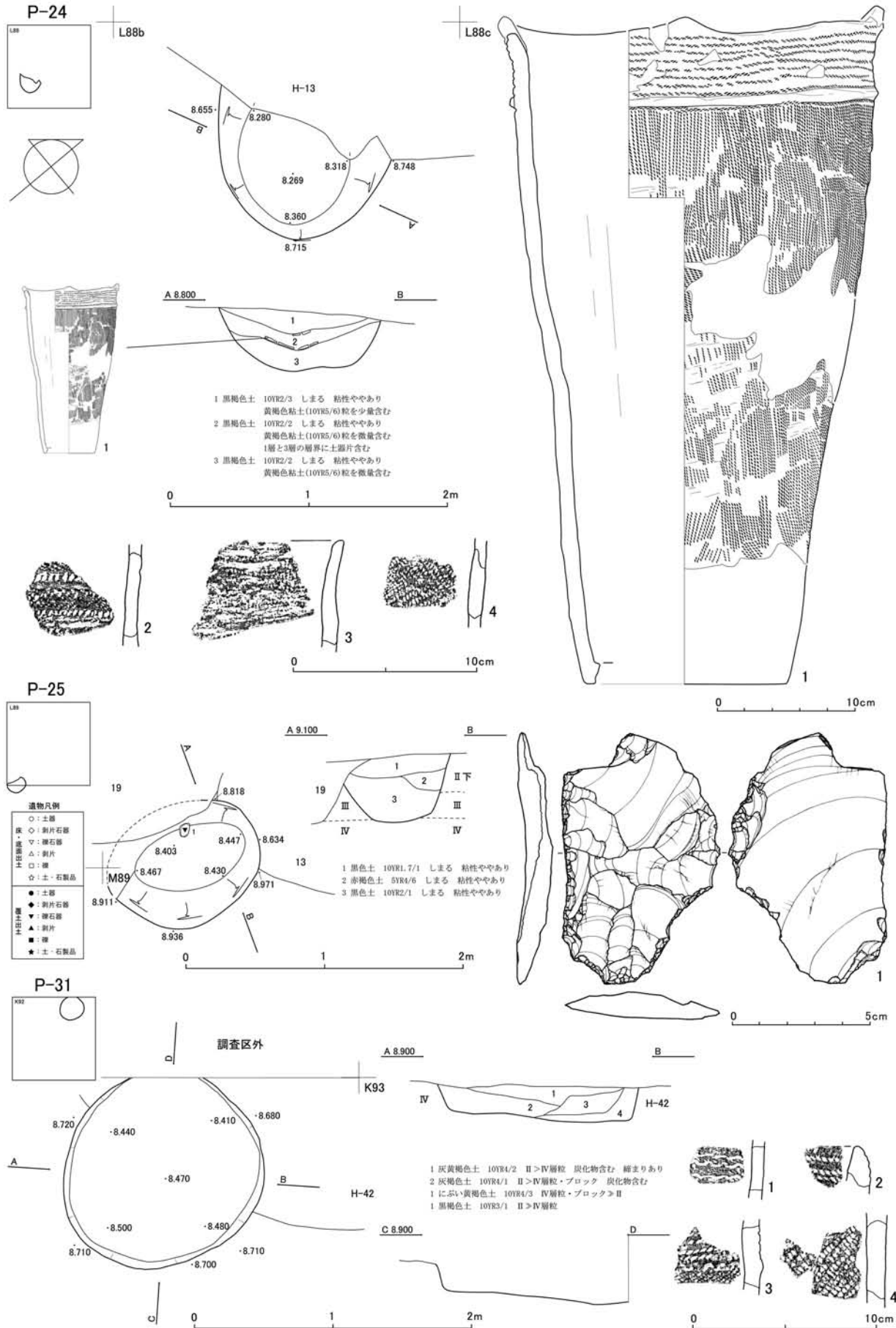
遺物出土状況: 覆土からⅡ群B類土器など48点、石器等24点が出土した。

時期: 周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代前期後半~中期前半と考えられる。(鈴木)

掲載遺物: (土器) 1・2は覆土出土のⅡ群B類土器。

Ⅱ群B-3類土器(1・2): 1・2は幅広の口頸部をもつ口縁部破片。1は口頸部に縄線文と刺突列が施されている。2は口頸部。貝殻条痕文上に自縄自巻による横走る縄文が加えられている。体部は同じ原体で縦走る縄文が施されている。

(石器) 3は覆土出土のスクレイパー。縦型剥片の側縁に直線的な刃部を作出している。頁岩製。



図IV-307 P-24・25・31

P-34 (図IV-308)

位置：K42区

平面形：不整形

規模：(0.38) / (0.28) × (0.29) / (0.20) × 0.95m

確認・調査：H-22・42の断面に土坑の落ち込みを確認した。H-22・42、P-31の壁・床を壊して構築されている。掘り込み面はⅡ層中位である。断面からみて、フラスコ状ピットを構築途中で放棄したものと思われる。覆土は掘り上げ土の流れ込みである。

遺物出土状況：出土していない。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代中期前葉と考えられる。

(佐藤)

掲載遺物：掲載遺物なし

P-35 (図IV-308)

位置：M96区

平面形：円形

規模：1.74 / 0.84 × 1.71 / 0.94 × 0.65m

確認・調査：盛土下部に掘り込まれた土坑。掘り込み面はⅡ層下位と推測される。掘り込みの傾斜は緩やかである。坑底面は平坦ではなく、東側がやや高い。覆土は大部分が盛土下位～最下層の落ち込みで、下位は腐植土と崩落土(Ⅱ～Ⅳ層)である。当初はフラスコ状ピットを想定していたため、坑底面にトレンチを設定してⅣ層を掘り削したが、下部に人為的な掘り込みは確認されなかった。西側の壁面の一部が、隣接するH-43の柱穴(HP-21・22)により壊されている。用途は不明である。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-3類土器92点、石器等256点が出土した。これらは盛土からの流れ込みと考えられ、遺構には伴わない。坑底部からは出土していない。

時期：盛土との新旧関係、周辺の包含層より春日町式土器が出土していることから、縄文時代前期前半の可能性はある。

(芝田)

掲載遺物：(土器) 1～5は覆土出土のⅡ群B類土器で、Ⅱ群B-3類土器である。1・2は同一個体。1は口頸部破片。無文地の文様帯に縄線文が加えられている。3～5は体部破片。3は単軸絡条体第5類の回転文が施されているもの。4・5は複節の斜行縄文が施されている。

(石器) 6は覆土出土の礫器。被熱した礫を使用して直線的な刃部を作出している。チャート製。

P-36 (図IV-309)

位置：K・L96区

平面形：楕円形

規模：(1.68) / (1.19) × 2.03 / 0.81 × 0.72m

確認・調査：標高9.90m前後の平坦面に立地する。Ⅱ層・盛土の掘り下げ後、Ⅲ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認した。切り合うH-38の調査後に、半截し、調査を行った。覆土は上部が暗褐色土で下部は黒褐色土である。黒褐色土の中位で焼土(PF-1)を検出し、その下位(覆土6層)から焼骨片が出土した。深さは70cm程、坑底は凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。H-38より古く、H-39より新しい。

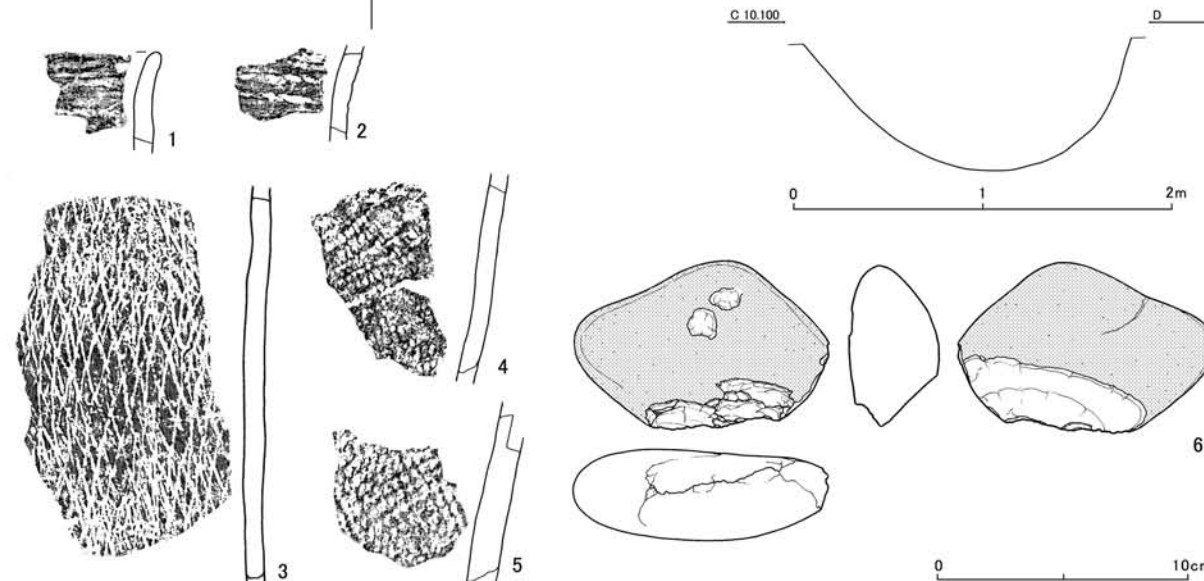
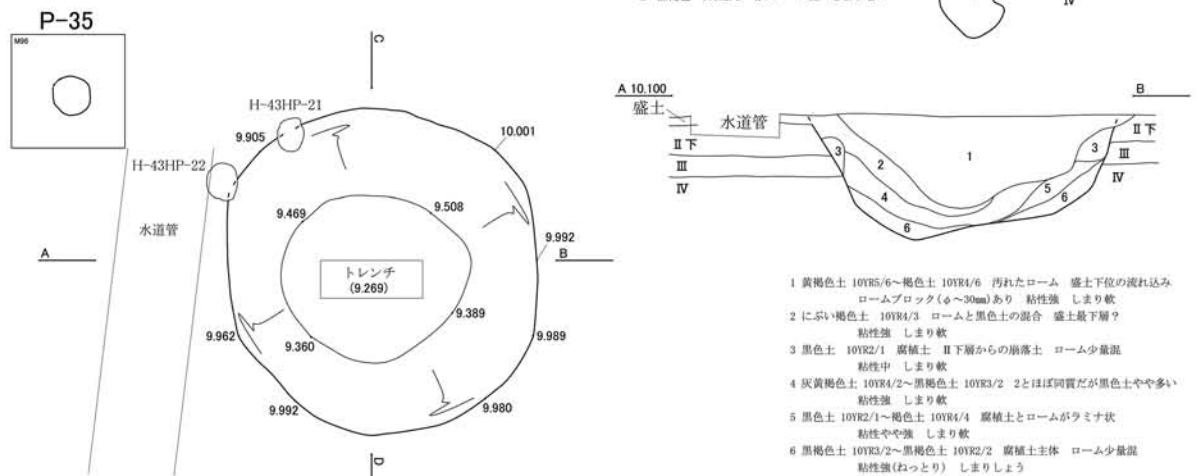
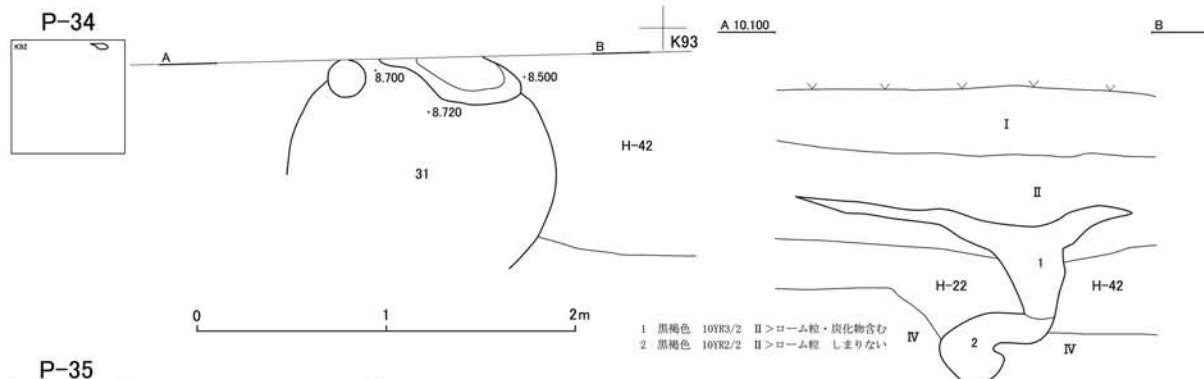
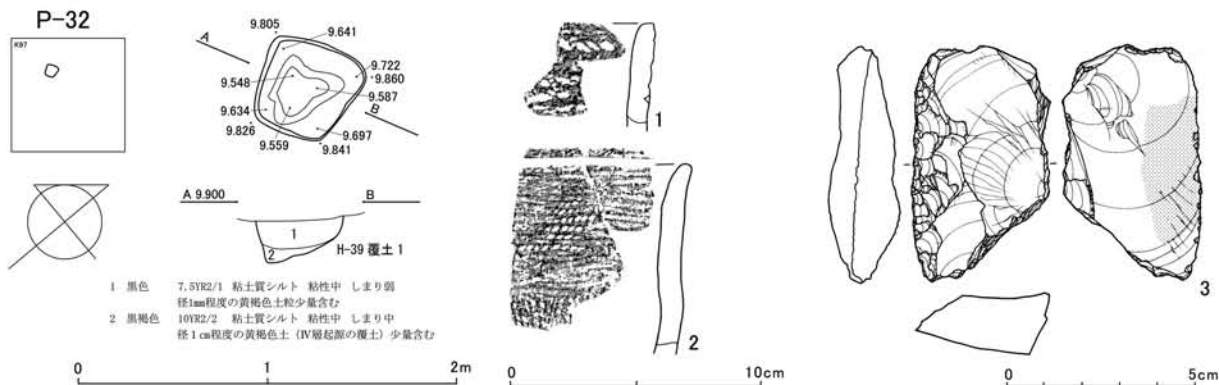
遺物出土状況：覆土からⅡ群A類土器、Ⅱ群B類土器など274点、石器等850点が出土している。

時期：周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代前期後半と考えられる。

(鈴木)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土。2～5はⅡ群A類土器、1・6～14はⅡ群B類土器。

Ⅱ群A類土器(2～5)：2～5は胴部破片。2は結束羽状縄文縄文が施されたもの。3～5はルー



図IV-308 P-32・34・35

ブ状の縄端の回転文が施されたもの。

Ⅱ群B-3類土器(1・6～14)：6～11は口縁部破片。6～8は口頸部に不整綾絡文が施されたもの。7の口頸部。上端1条、下端2条の縄線文によって区画され、体部には多軸絡条体の回転文が施されている。9は口頸部・体部に単軸絡条体第5類の回転文が施されたもの。10は口頸部に貝殻条痕が施されたもの。11は斜行縄文が施されたもの。12は口頸部下端の破片。口頸部に縄線と縄端の圧痕文(?)が施され、体部に単軸絡条体の回転文が施されている。13・14は体部破片。13は直前段反撚の回転文が施されている。14の外面は不明。内面に貝殻条痕文が認められる。1は底部破片。単軸絡条体の回転文が施されている。

(石器)15は覆土出土のたたき石。三角形扁平礫の頂部に敲打痕があるもの。砂岩製。

P-39 (図IV-309)

位置：N94区

平面形：楕円形

規模：(0.50) / (0.30) × 1.43 / 1.16 × 0.51m

確認・調査：H-37の覆土を掘り下げ中に黄褐色土の落ち込みを確認した。H-37構築時に土坑の約50%が壊されている。坑底と壁の境が不明瞭で、断面形は椀状である。覆土は盛土の流れ込みである。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B類土器が15点、石器等10点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：掲載遺物なし

P-37・38 (図IV-310～317)

P-37

位置：N・O1・2区

平面形：楕円形

規模：2.44 / 1.74 × (1.62) / (0.85) × 0.62m

P-38

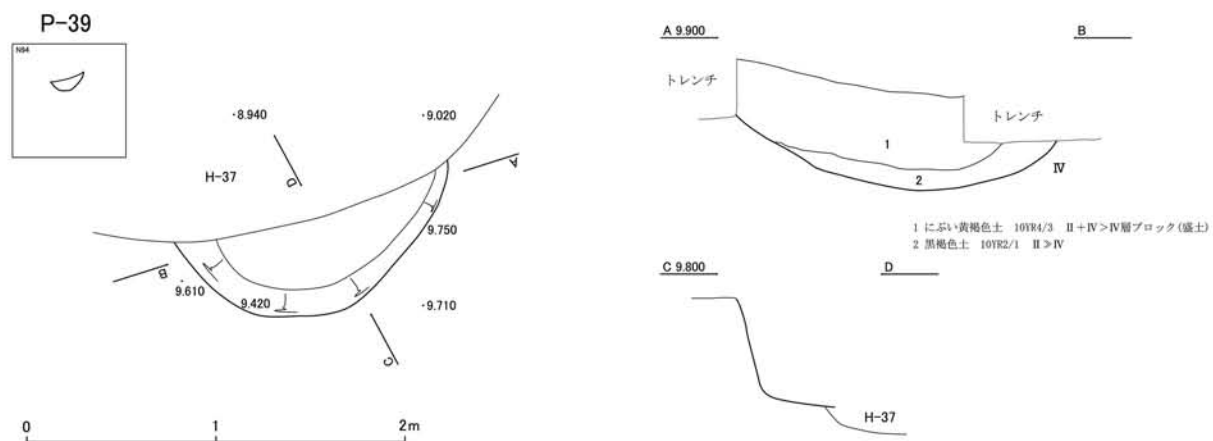
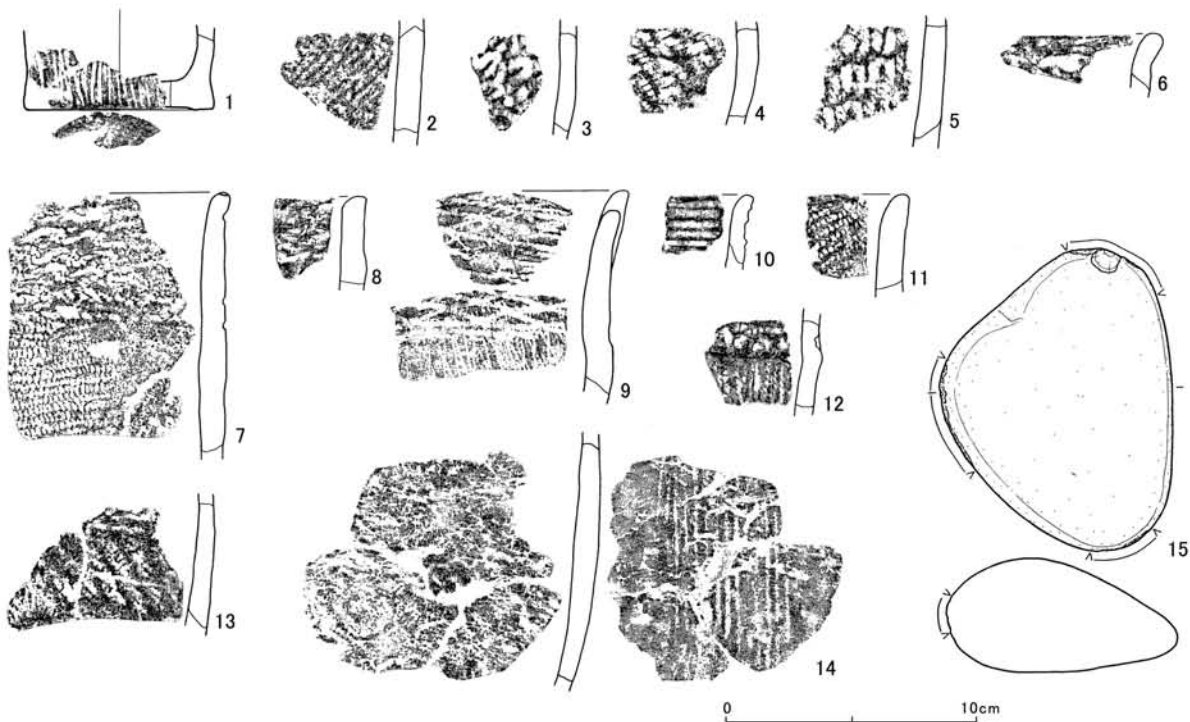
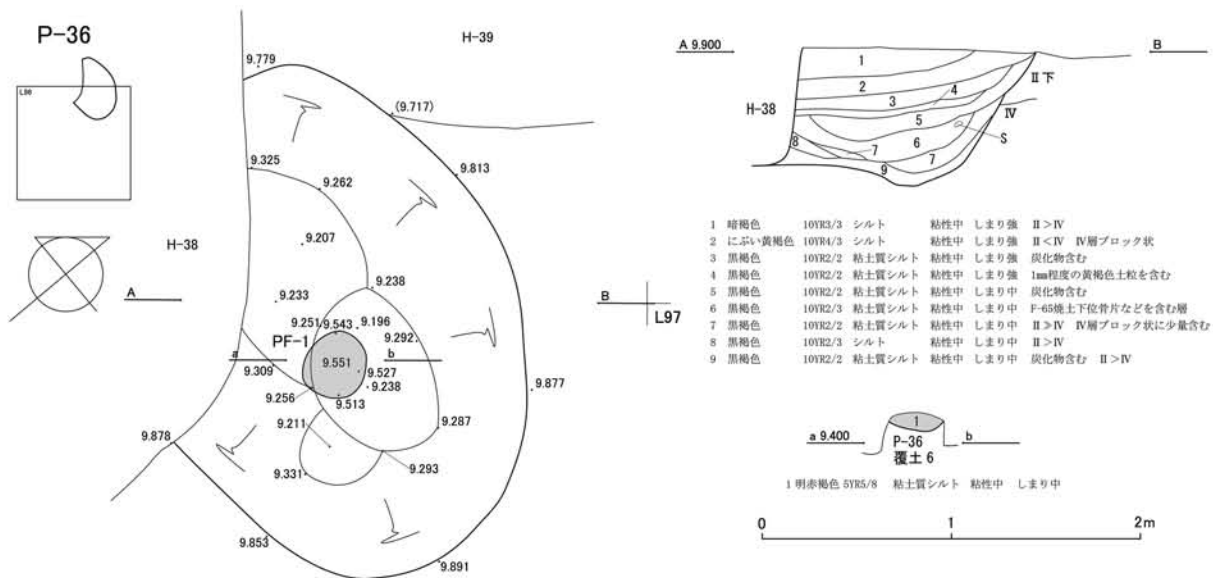
位置：O1区

平面形：三角形

規模：2.30 / 1.55 × 2.00 / 1.23 × 0.44m

確認・調査：包含層の調査中にⅡ下層で明暗褐色土の落ち込みと炭化物が混じる暗褐色土を確認した。検出面を精査したところ、2基の土坑が切り合うことが確認された。北側をP-37、南側をP-38と呼称し調査を開始した。調査はP-37・38の切り合い関係を知るための南北、P-37の長軸となる東西、P-38の長軸となる南東-北西のセクションベルトを残して掘り下げた。掘り下げ開始直後、P-37上面で炭化物集中(PBC-1・2)、一括土器3か所、P-38の南側縁部分で焼土の落ち込み、土器1か所を検出した。その後、覆土を掘り下げ、覆土・坑底に数個体の土器を確認した。坑底・坑底直上から剥片集中・焼土を検出した。坑底は高低差をもってⅣ層中に2か所確認された。P-37の坑底はわずかに凸凹があり、2か所のくぼみが認められる。P-38は皿状の坑底で、壁は緩やかに立ち上がる。土層観察の結果、当初切り合い関係を想定して調査を開始したが埋没状況・土器出土状況等から切り合い関係がないことが判明した。P-37・38の焼土・覆土7層から土壌サンプルを採取しフローテーションを行い、キハダ・ニワトコ・ウナギツカミが検出された。ウナギツカミは炭化果実34粒、炭化子葉217粒・炭化子葉片53片出土した。ウナギツカミについては馴染みのない炭化種実である。

遺物出土状況：上面をわずかに掘り下げた段階で、P-37上面で一括土器3か所、P-38上面で一括



図IV-309 P-36・39

土器1か所を検出した。土器は覆土3層と覆土7層からまとまって出土した。特に覆土7層は炭化物を含む薄層（覆土7'層）が介入し、覆土7層上・覆土7層下と表記して取り上げた。また、覆土9層及び坑底からは、土器と共に剥片集中（PFC-1）も検出されている。土器はⅡ群B-1類土器からⅡ群B-4類土器である。P-37は坑底からⅡ群B-3類土器など447点、石器等14点、覆土からⅡ群B-3類土器など4,546点、石器等3,138点が出土した。石製品は軽石製石製品1点、線刻礫1点が出土している。P-38は覆土からⅡ群B-3類土器など2,783点、石器等328点が出土した。

時期：坑底から出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。検出した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行った。覆土（覆土7層相当）出土のPO-6では $4,850 \pm 30\text{yrBP}$ 、床面直上（覆土9層）出土のPO-112では $4,690 \pm 30\text{yrBP}$ の測定結果を得た。

掲載遺物：報告にあたってはP-37・38出土資料を一括して記載した。

（土器）P-37・38の各層から押し潰された様な状況で出土した。土器は覆土3層、覆土7層、坑底直上、坑底、覆土7層は覆土7層下と覆土7層上に分層され、遺物の少ない覆土4～6層が間層として介入する。このような出土状況から土器の記載については出土層位毎に図版を作成し、各層の特徴が明確になるように努めた。原則的に出土状況・出土地点・出土レベルを図化して取り上げたが、覆土として一括して取り上げたものも多く、それらの遺物は一括して覆土として扱ったため、新旧のものが混在する。いずれもⅡ群B類土器である。

坑底（1・2）：1はⅡ群B-1類土器、2はⅡ群B-2類土器である。

Ⅱ群B-1類土器（1）：1は底部を欠失する。平縁で、やや開き気味に立ち上がるバケツ型の器形である。口頸部文様帯に不整綾絡文、体部にやや太めの単軸絡条体の回転文が施されている。

Ⅱ群B-2類土器（2）：2は筒形の器形で、3か所の波頂部をもつ波状口縁である。口頸部文様帯は縄線が加えられた貼付帯で区画され、文様帯には横位気味の直前段反撚による縄文が、体部は、斜位に直前段反撚による縄文が施されている。

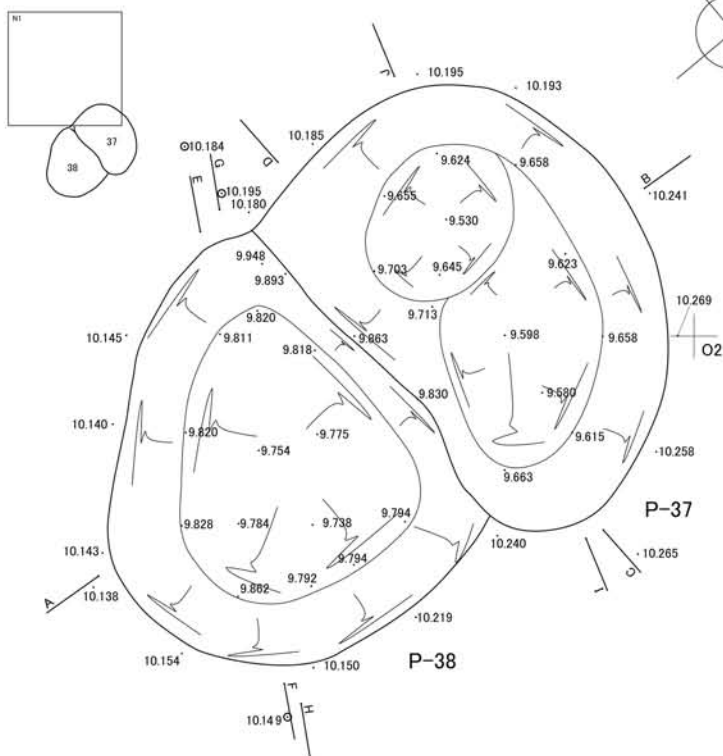
覆土9層（3）：3はⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-3類土器（3）：3は平縁、筒形の器形である。口頸部文様帯は上端1本、下端2本の縄線で区画され、文様帯に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作り出している。体部は斜行縄文である。

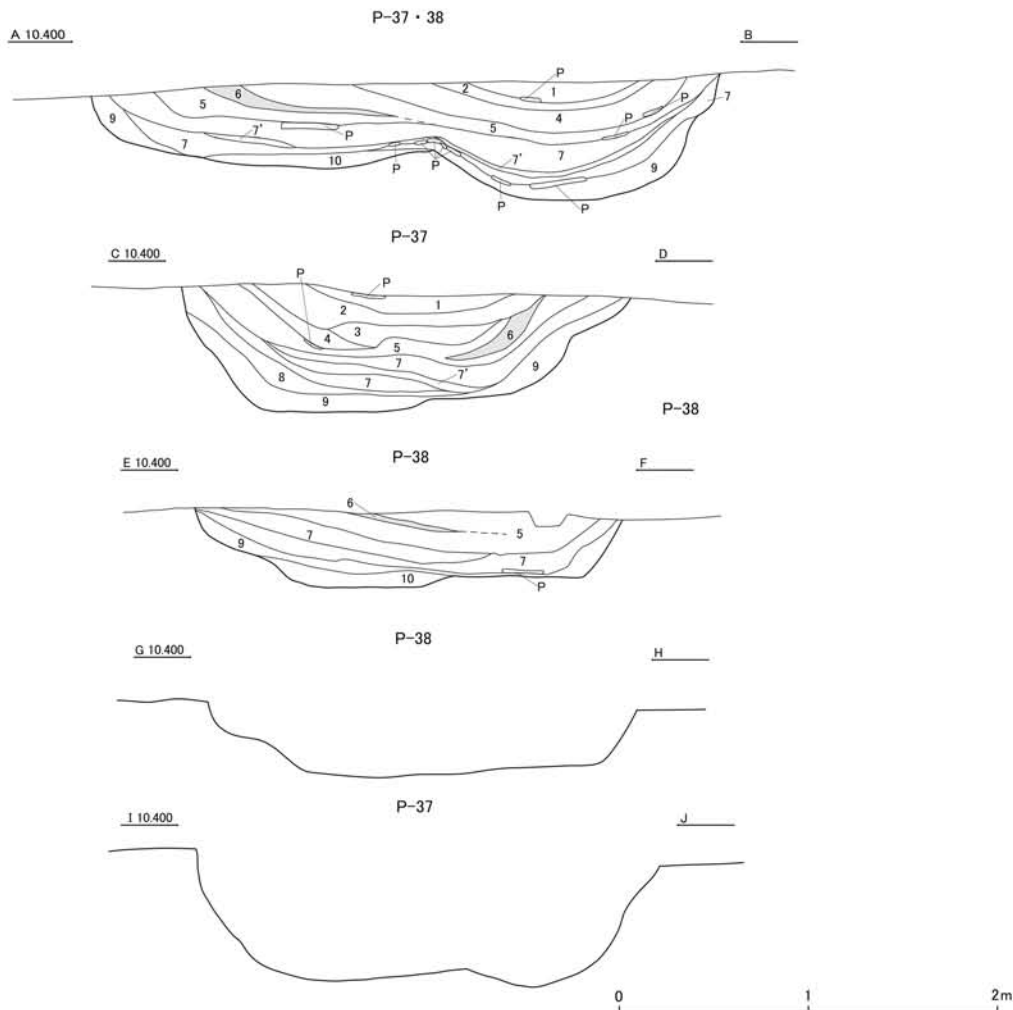
覆土7層下（4～10）：4～10はⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-3類土器（4～10）：4は平縁で、筒形の器形である。口頸部文様帯下端を1本の縄線で区画し、文様帯に斜行縄文、体部に複節の単軸絡条体の回転文を施している。5はやや開き気味に立ち上がる器形である。口頸部文様帯下端は1本の縄線文で区画され、文様帯には無節の結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作り出している。体部は下膨れ気味で、斜行縄文とやや太めの単軸絡条体の回転文が施されている。6は開き気味に立ち上がる器形で、3か所の波頂部をもつ波状口縁である。口頸部文様帯は区画されず、口頸部に横走気味の直前段反撚の原体による縄文、体部に直前段反撚の原体による縄文と自縄自巻の原体で施文したような縄文を施している。7は開き気味に立ち上がり、体部上半でくびれをもち、口縁部が大きく外反する器形である。4か所の波頂部をもつ波状口縁で、口頸部文様帯上下端は1本の縄線文で区画され、無文地の文様帯に横走する縄線と波頂部を頂点とする鋸歯状の縄線文を施している。体部は斜行縄文である。8は開き気味に立ち上がり、口縁部でわずかにくびれをもつ器形である。口頸部文様帯は区画されず、文様帯に貝殻条痕文が、体部には単軸絡条体の回転文が施される。9は小型土器で、体部下半を欠失する。5か所の波頂部をもつ波状口縁である。口頸部文様帯下端は1本の縄線で区画され、文様帯に斜行縄文、体部に単軸絡条体の回転文が施される。10は太い単軸絡条体の回転文が施された体部下半である。9の下半部の可能性がある。

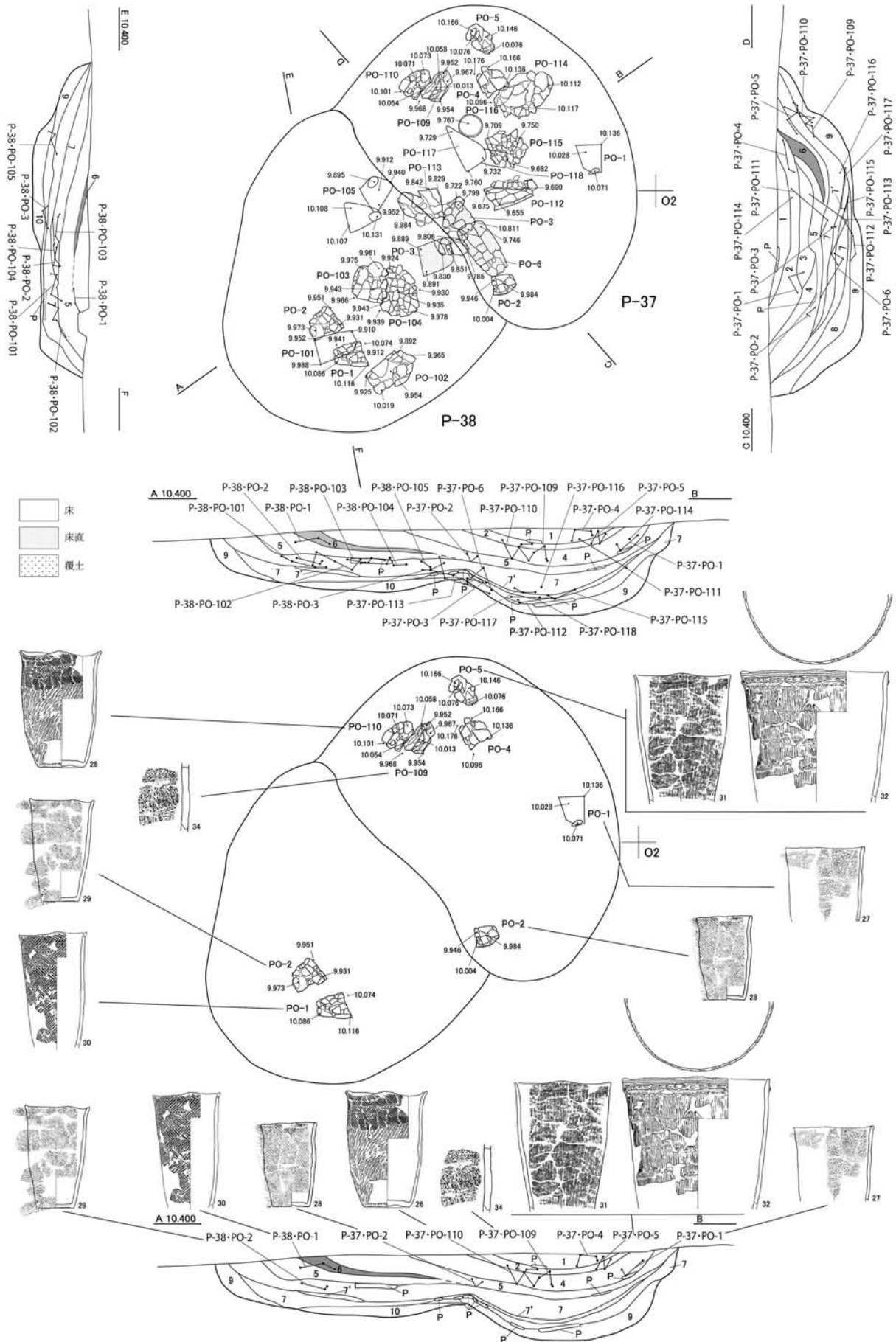
P-37・38



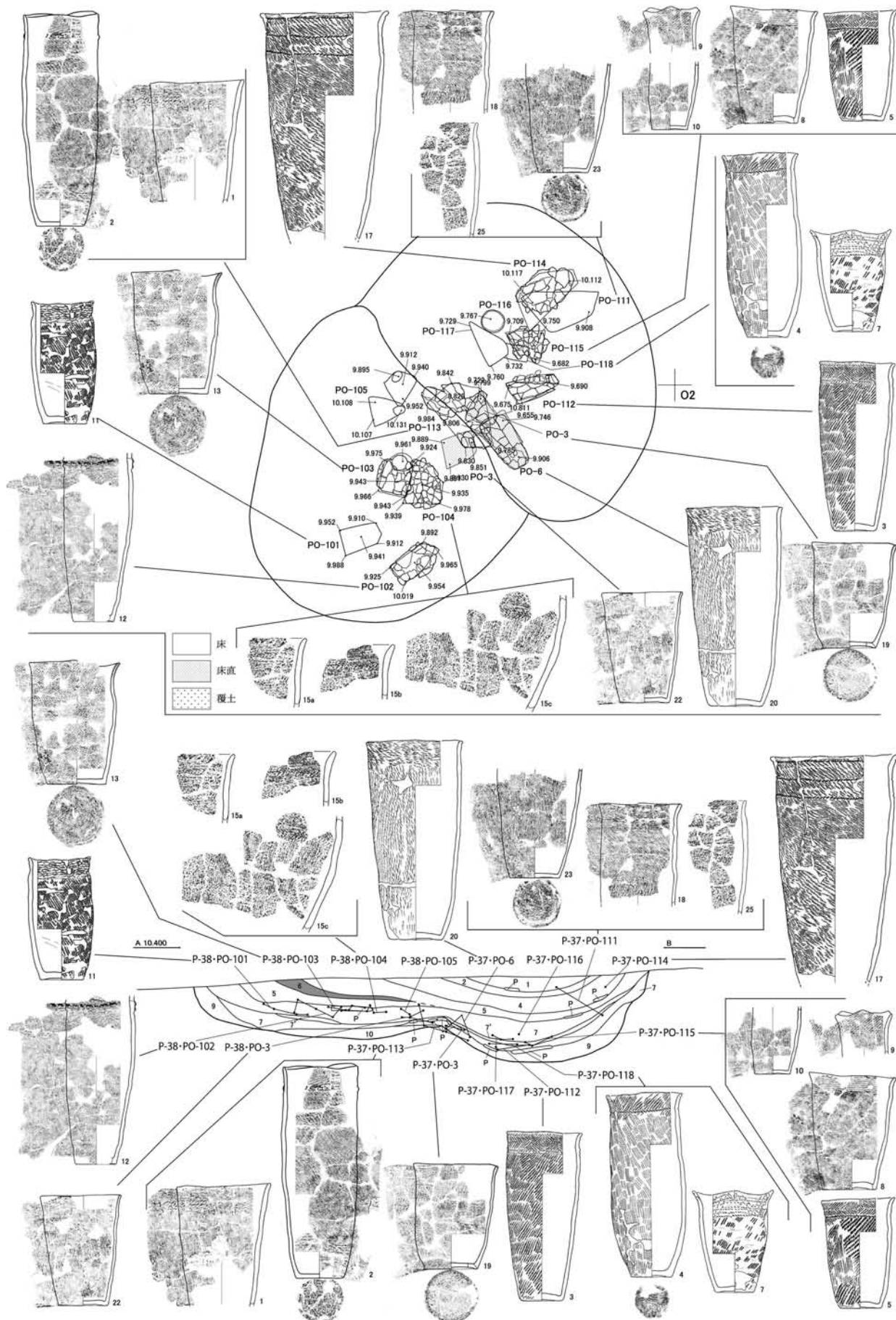
- 1 暗褐色土 10YR3/4 しまり良い。ローム粒、炭化物が多量に混じる。遺物がまぎって出土。
- 2 黒褐色土 10YR2/3 しまり良い。劉氏細かい。少量のローム粒、炭化物。
- 3 暗褐色土 10YR3/4 1層に類似。多量のローム粒、炭化物。ぼそぼそ。しまり良い。
- 4 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロック。炭化物が混じる。しまり良い。
- 5 暗褐色土 10YR3/4 砂粒が多く含む。ローム粒、炭化物が混じる。しまり良い。
- 6 明赤褐色土 5YR5/8 焼土層。焼土ブロックが落ち込んでいる。焼土、炭化物が混じる。
- 7 灰黄褐色土 10YR4/2 ぼそぼそ。砂粒が多い。炭化物、焼土が混じる。7'層を挟み、上下に分けられる。
- 7' 暗赤褐色土 5YR3/6 多量の炭化物・粘土が混じる。遺物多い。
- 8 黒褐色土 10YR1/3 しまり良く、粘性強い。ローム塊がブロック状に混入。少量炭化物。
- 9 黒褐色土 10YR2/3 8層に類似。ブロック状のローム塊の混入、粘性強い。炭化物、焼土混入なし。
- 10 褐色土 10YR4/6 ローム粒、黒色土がブロック状に混じる。粘性強く、しまり良い。



図IV-310 P-37・38



图IV-311 P-37·38 PO土器出土状况图 垂直分布图(1)



图IV-312 P-37·38 PO土器出土状况图 垂直分布图(2)

覆土7層上 (11～16)：11・12はⅡ群B-2類土器。13～16はⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-2類土器 (11・12)：11は筒形土器。口頸部文様帯に不整綾絡文、体部に複節の斜行縄文が施されている。12は口縁部を欠失する、筒形の器形である。口頸部下端は縄の圧痕が加えられた貼付帯で区画され、無文地の頸部に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文である。

Ⅱ群B-3類土器 (13～16)：13は体部上半でわずかにくびれをもつ器形である。器面には結束羽状縄文が施されている。14は体部が丸味をもち、上半がくびれる器形で、器面には付加条の斜行縄文が施されている。15は幅広の口頸部に自縄自巻の原体の回転で横走気味の縄文を施した後、結束羽状縄文が加えられている。16は口縁部破片。幅の狭い口縁部文様帯は斜行縄文で区画され、文様帯には5本の縄線文が加えられている。体部は太い単軸絡条体の回転文である。

覆土7層及び7層相当 (17～25)：17～25はⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-3類土器 (17～25)：17はやや幅広の筒形で、底部が欠失する。器面に直前段反撚の原体で縄文が施され、口頸部文様帯の上下を1本の縄線で区画し、文様帯の中位に縄線文が1条加えられている。18は体部下半を欠失する。やや幅広の筒形になるものと思われる。器面には直前段反撚による縄文が口頸部・体部上半・体部下半で施文方向を変えて施文されている。口頸部は直前段反撚による縄文を地文とし、上下を2条一組の縄線で文様帯を区画し、文様帯中位に2本一組の綾絡文が加えられている。19は平縁で、やや開き気味に立ち上がる深鉢形である。器面には直前段反撚による縄文が、体部上半と下半で施文方向を変えて施文している。20は筒形で、平縁である。口頸部文様帯は区画されず、直前段反撚の原体の施文方向を変えることで文様帯を表現し、体部は縦走気味、口頸部は横走気味に施文している。21は小型土器。器面には複節の斜行縄文が施されている。22は平縁である。文様帯下端が縄線と羽状縄文で区画され、文様帯には斜行縄文・縄線文・貝殻条痕文が施されている。23・24は底部破片。23は体部に直前段反撚による縄文と単軸絡条体の回転文が施文されている。24は体部に単軸絡条体の回転文が施されている。25は口縁部破片。口頸部は斜位に、体部は縦走気味に直前段反撚の原体で縄文が施文されている。口頸部文様帯の上下は、組紐状の原体による圧痕文で区画され、文様帯内に1条の圧痕文が加えられている。

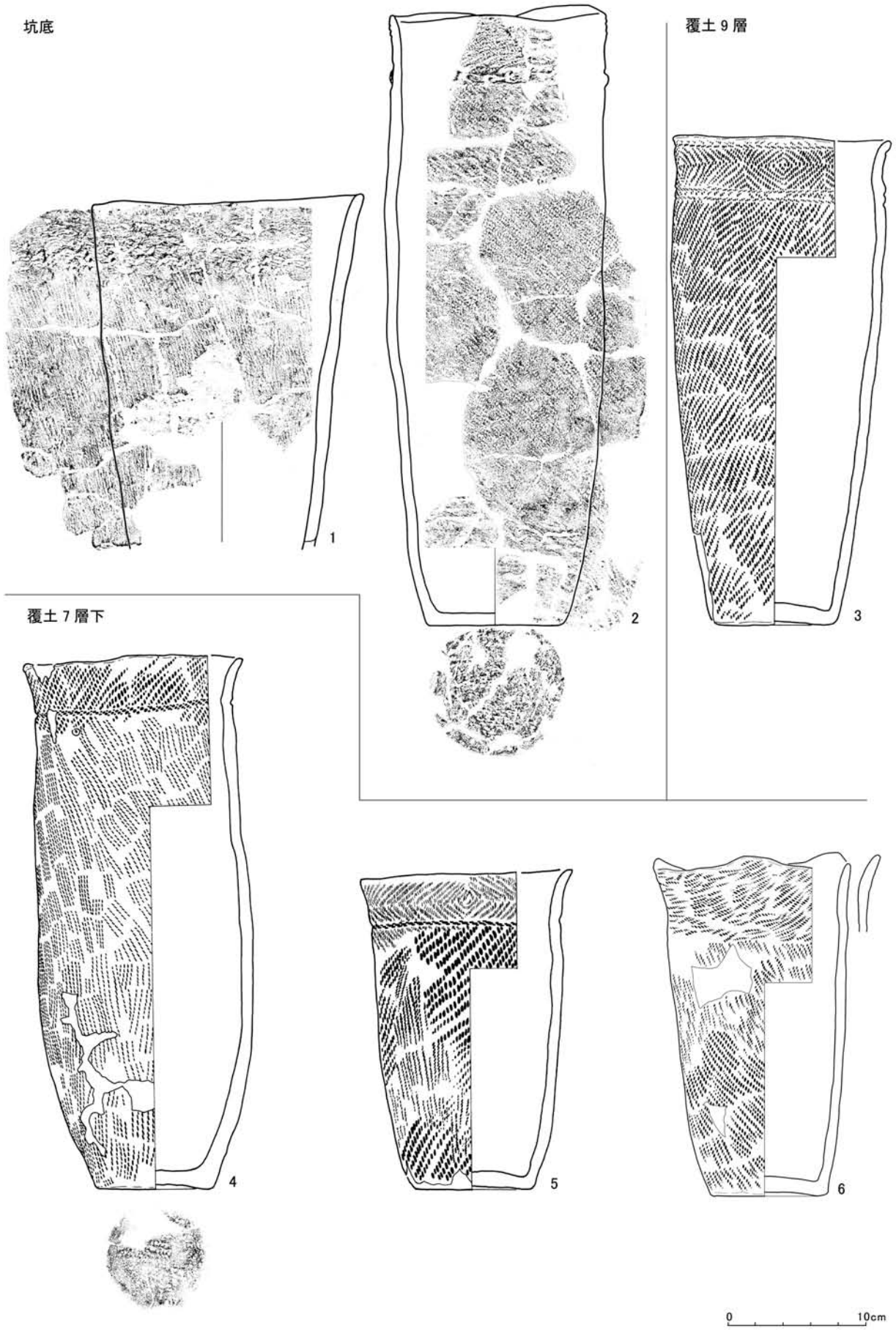
覆土5層 (26)：26はⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-3類土器 (26)：26は4か所の波頂部をもつ波状口縁。上半がくびれる器形である。口頸部は結束羽状縄文、体部は直前段反撚による縄文である。

覆土3・1層・覆土 (27～35)：35は覆土3層、33は覆土1層、他は覆土出土である。27～30・34・35はⅡ群B-3類土器、31～33はⅡ群B-4類土器。

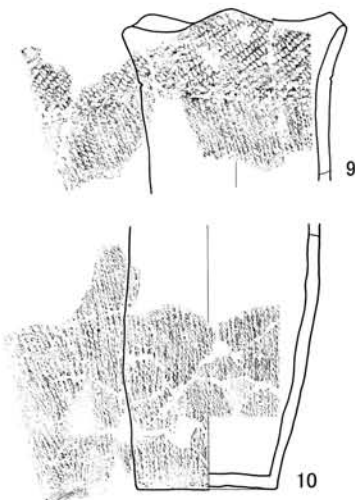
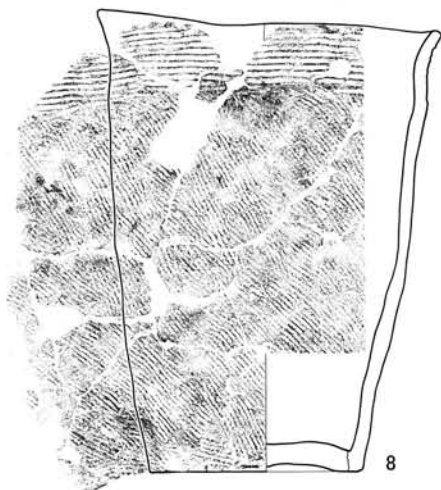
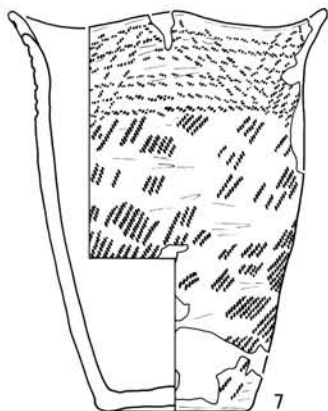
Ⅱ群B-3類土器 (27～30・34・35)：27は体部下半を欠失する。器面に直前段反撚による縄文が施されている。28は小型土器。器面に複節斜行縄文が施されている。29は波状口縁である。口頸部に結束羽状縄文で菱目状の文様構成を作出している。体部は複節の斜行縄文である。30は底部を欠失する。器面に結束羽状縄文が施されている。

Ⅱ群B-4類土器 (31～33)：31は底部を欠失する。緩やかな波状口縁で、口頸部文様帯は結束羽状縄文で区画され、幅の狭い文様帯に縄線文が加えられている。体部は自縄自巻の原体による縄文が施されている。32は体部下半を欠失する。平縁で、口唇に撚糸の圧痕文が施されている。口頸部文様帯下端は刺突文が加えられた貼付帯と結束羽状縄文で区画され、幅の狭い無文地の文様帯に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文と結束羽状縄文が施されている。33は緩やかな波状口縁。幅の狭い口頸部文様帯は綾絡文で区画され、文様帯に縄線文が加えられている。体部は単軸絡条体の回転文と2本一組の綾絡文が施されている。底面に撚糸文が認められる。34・35は体部破片。34は直

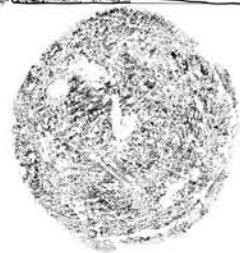
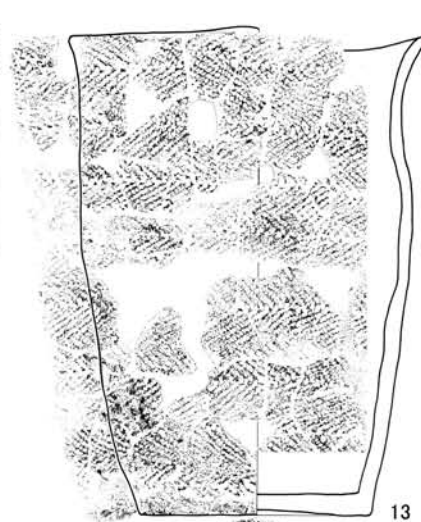
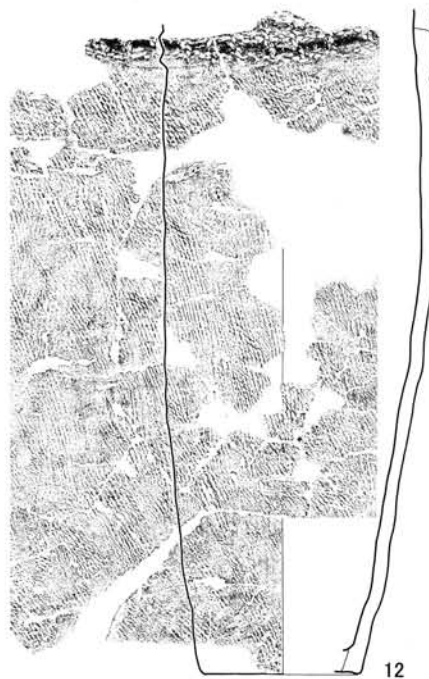
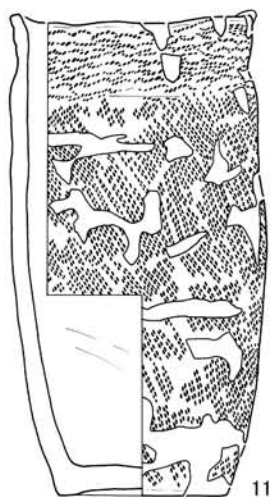


图IV-313 P-37·38 土器 (1)

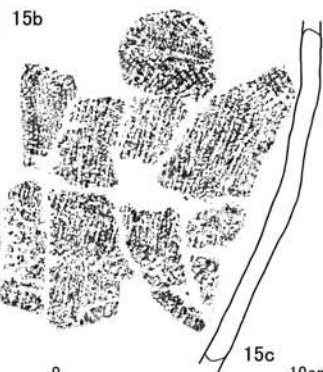
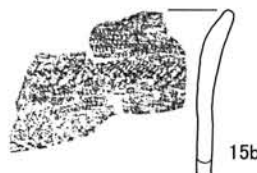
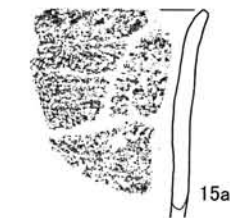
覆土 7 層下



覆土 7 層上



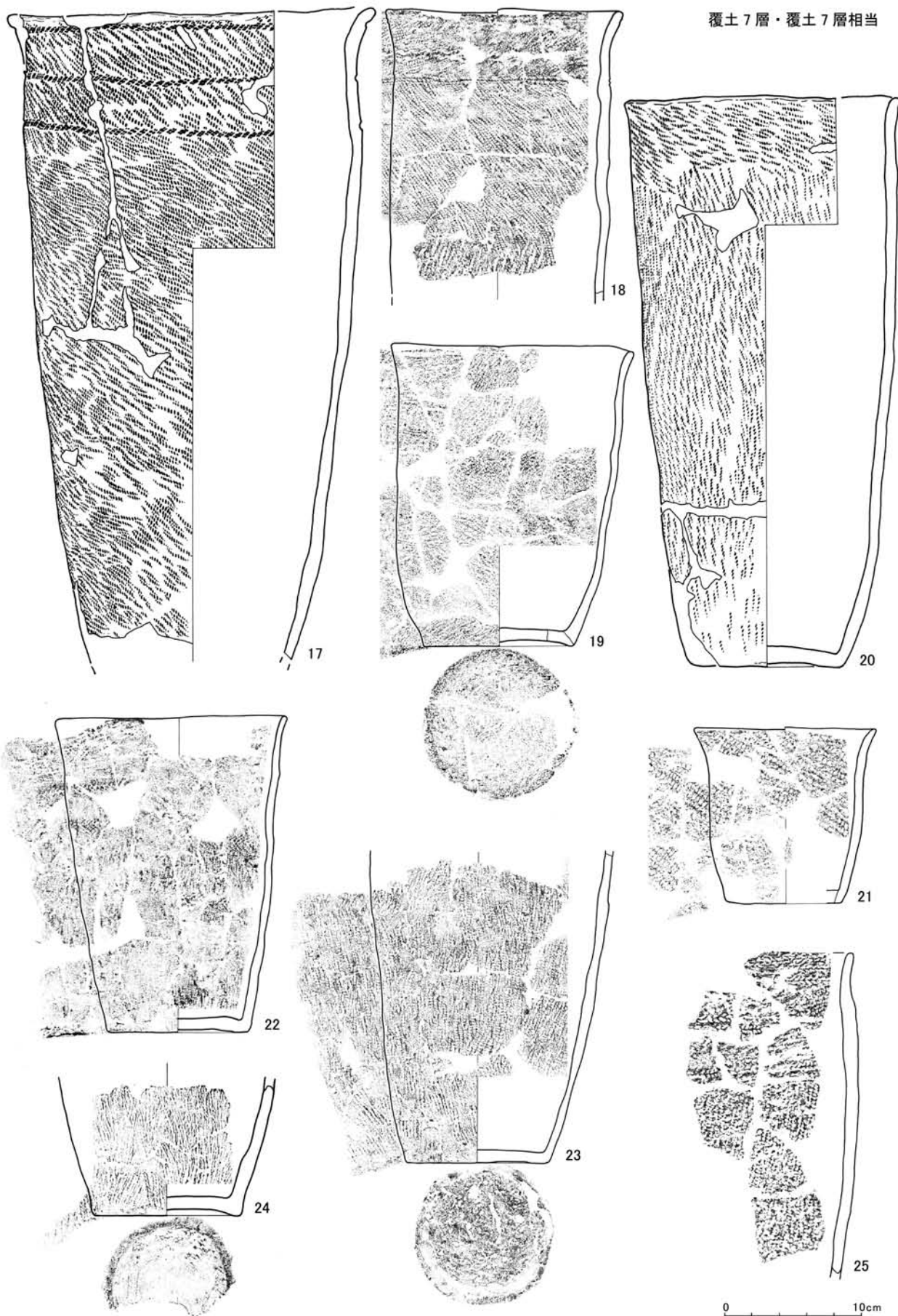
0 10cm



0 10cm

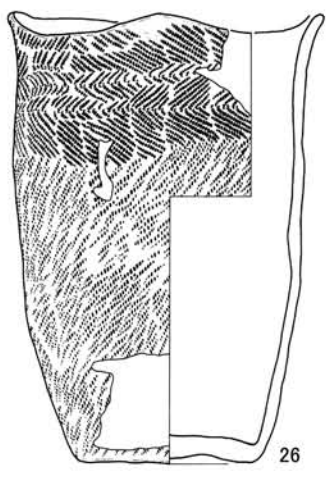
图IV-314 P-37·38 土器 (2)

覆土7層・覆土7層相当

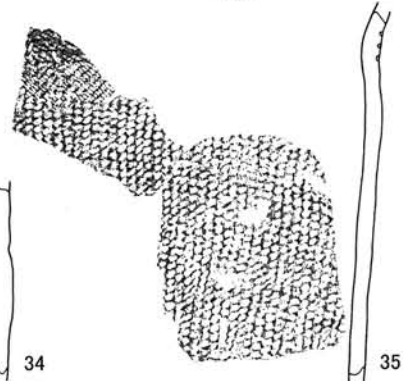
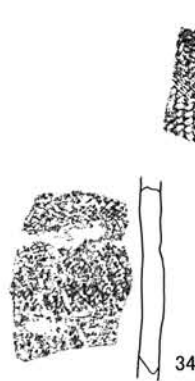
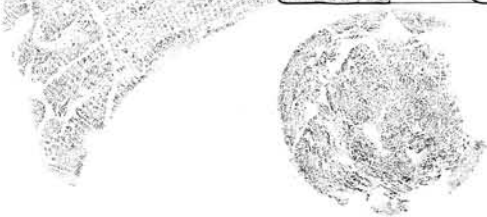
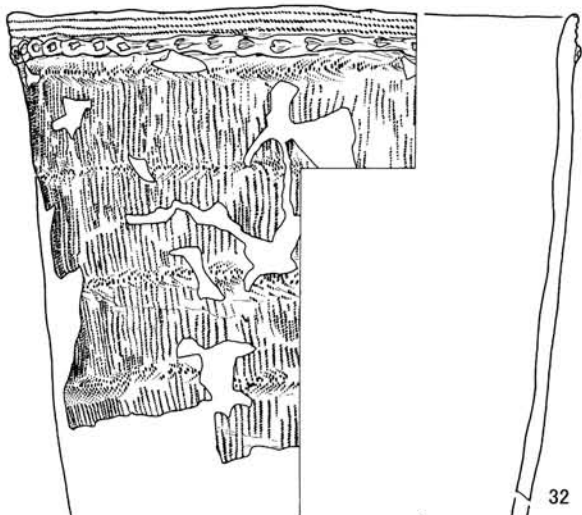
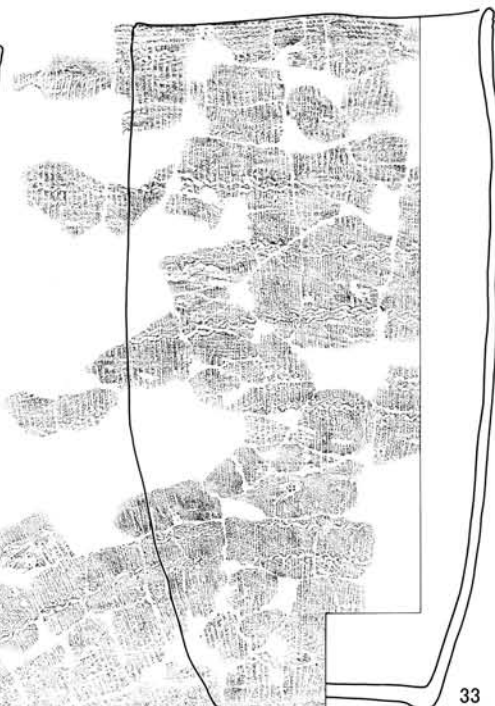
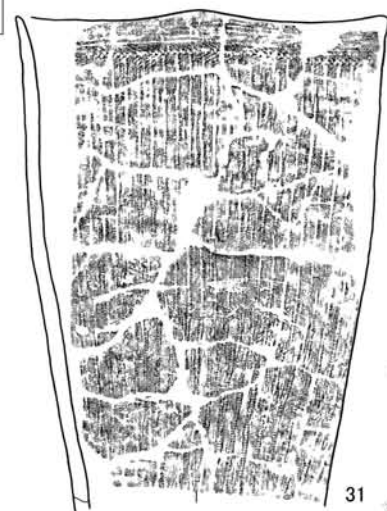
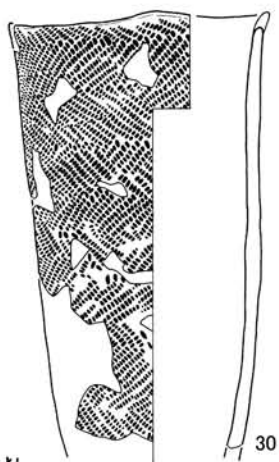
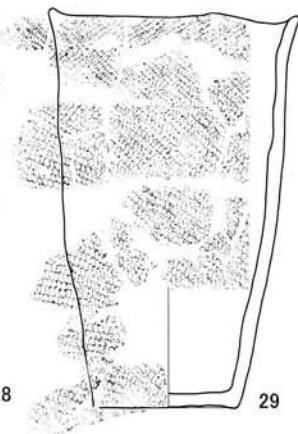


图IV-315 P-37·38 土器 (3)

覆土 5 層



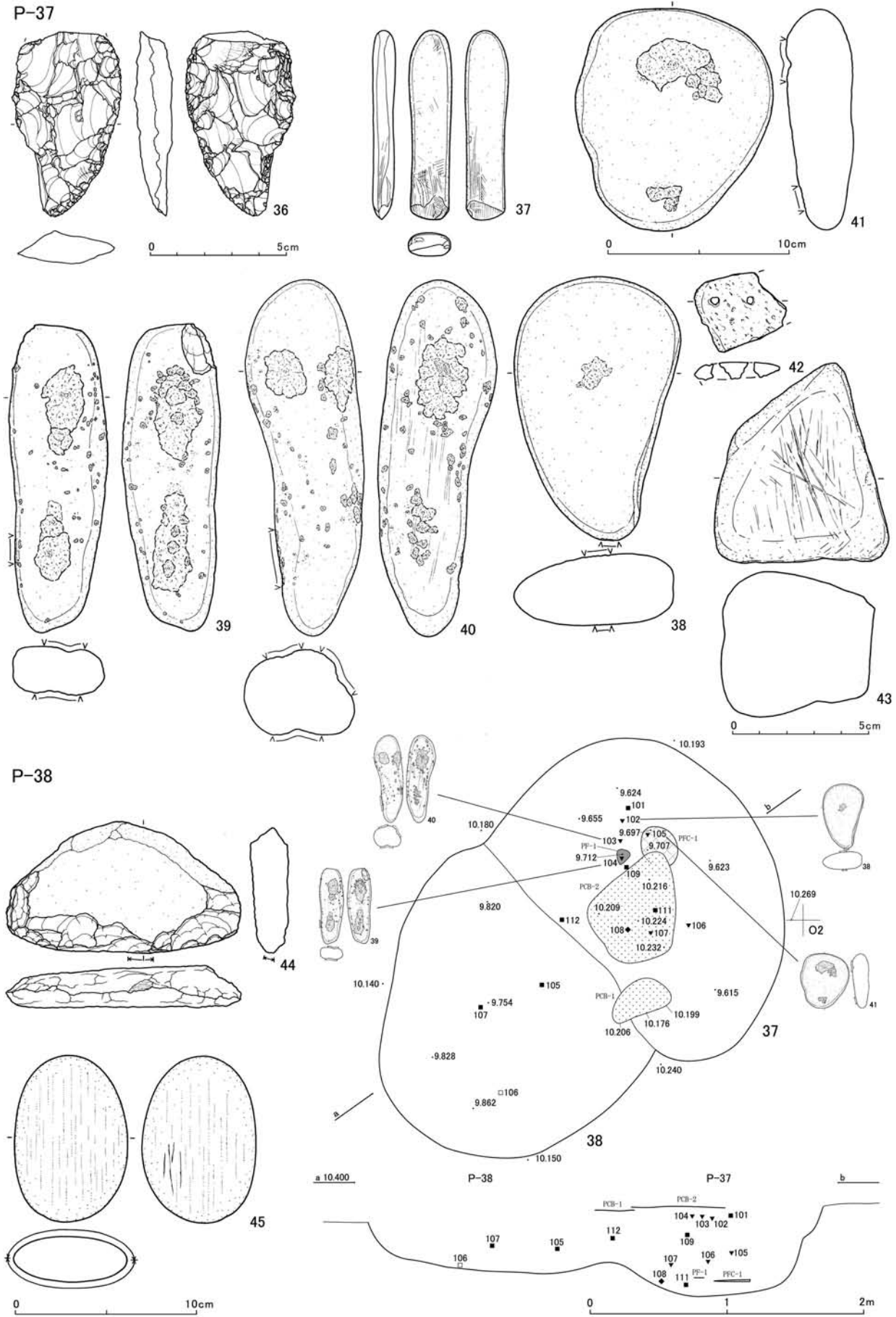
覆土 3·1 層、覆土



0 10cm

0 10cm

图IV-316 P-37·38 土器 (4)



图IV-317 P-37·38 石器出土状况图 石器

前段反撚による縄文に結節の羽状縄文が加えられている。35は無文地の口頸部に縄線文が施されている。体部は縦走の縄文である。

(石器) **P-37** : 36は覆土7層下出土の両面調整石器。紡錘形で先端部を欠損している。頁岩製。37は覆土4層出土の石のみ。扁平な棒状礫の先端部に両刃の刃部を作出したもの。泥岩製。38は覆土1層出土のたたき石。扁平礫の平坦面と下端部に敲打痕がある。砂岩製。39～41は凹み石。39は覆土4層出土。扁平礫の平坦面に不定形で断面円錐状の凹みがある。40・41は覆土1層出土。40は棒状礫に不定形で断面円錐状の凹みが腹背面各2か所ずつある。泥岩製。41は棒状礫に不定形で断面円錐状の凹みが上半部に3か所ある。泥岩製。42・43は石製品。42は覆土出土で軽石製の有孔石製品。右側と裏面は欠損している。残存部分は平らに整形されている。直径2mmほどの穿孔が2か所施されている。43は覆土7層出土の線刻礫。泥岩の亜角礫の平坦面に細い直線状の線刻が多数つけられている。

P-38 : 44は覆土7層出土のすり石で扁平打製石器。扁平礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出している。安山岩製。45は覆土出土のすり石。加工した痕跡はなく、扁平な楕円礫の両平坦面に使用痕とみられる弱い光沢が確認できる。砂岩製。

P-40 (図IV-318)

位置 : K・L95区

平面形 : 隅丸方形

規模 : 2.14 / 1.52 × (1.02) / (0.60) × 0.49m

確認・調査 : 標高9.40m前後の平坦面。Ⅱ層掘り上げ後、Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。隣接するH-33・38との切り合いを確認し、両者の調査後に半截し、調査を行った。覆土は黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積する。坑底は平坦で壁は斜めに立ち上がる。H-33・38より古い。

遺物出土状況 : 覆土からⅡ群B類土器8点、石器等23点が出土している。

時期 : 周辺の遺構・遺物からみて、縄文時代前期後半と考えられる。

(鈴木)

掲載遺物 : 小破片のため掲載できなかった。

P-41 (図IV-318)

位置 : K97区

平面形 : そら豆形

規模 : 1.40 / (0.74) × 1.16 / (0.50) × 0.28m

確認・調査 : H-39を調査中にトレンチを入れたところ、黒色土の落ち込みを検出した。周辺を精査したところ、Ⅲ層上面で黒色土が落ち込んでいるのを確認した。半截して調査を行い、平坦な底面と壁の立ち上がりを確認した。覆土は埋戻しで、覆土2層は焼土を廃棄したものと考えられる。H-39のHP-14に切られて構築されている。

遺物出土状況 : 遺物は出土していない。

時期 : 出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。

掲載遺物 : 掲載遺物なし

(酒井)

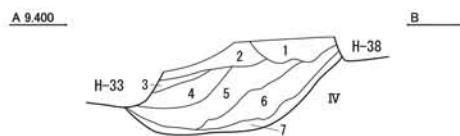
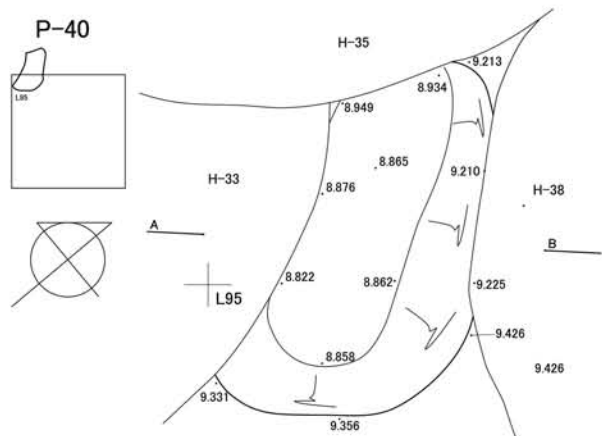
P-51 (図IV-318)

位置 : P 2 区

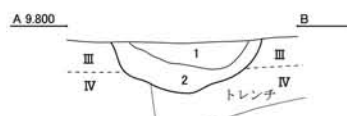
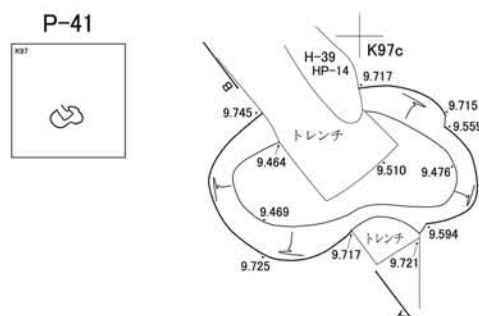
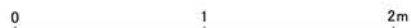
平面形 : 円形

規模 : 0.59 / 0.30 × 0.55 / 0.34 × 0.51m

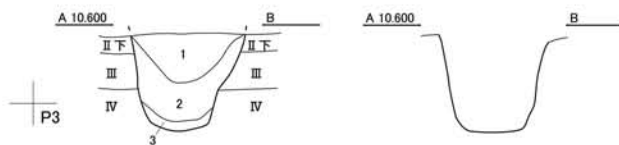
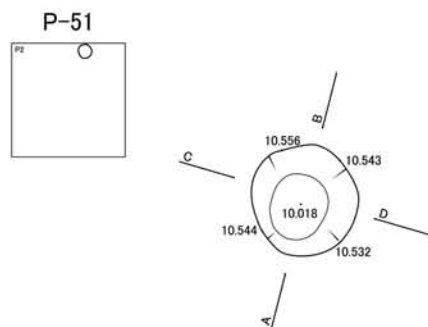
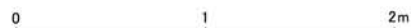
確認・調査 : Ⅱ下層上面で褐色土の落ち込みを検出した。掘り込み面は盛土中または上部と推測される。掘り込みの傾斜はやや急である。坑底面はほぼ平坦。覆土は上位が盛土下位の落ち込み、中位が



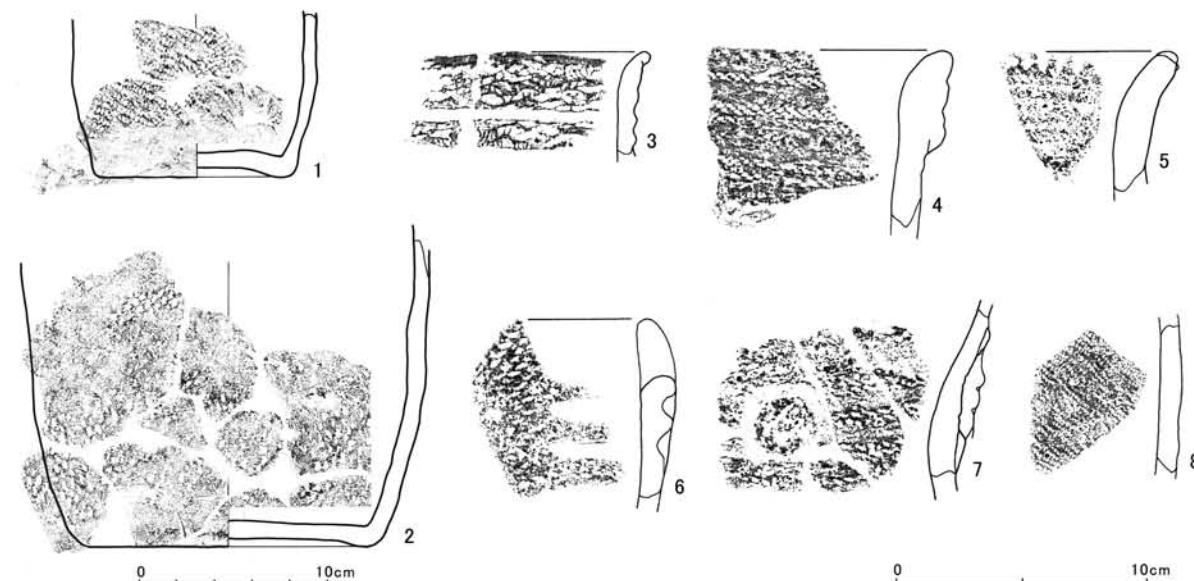
- 1 黒褐色 10YR2/2 シルト 粘性中 しまり中 II類似
- 2 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 粘性中 しまり中
- 3 暗褐色 10YR3/2 粘土質シルト 粘性中 しまり中 II>IV IVをブロック状に含む
- 4 黒褐色 10YR2/3 シルト 粘性中 しまり中
- 5 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 粘性中 しまり中
- 6 黒色 10YR2/1 粘土質シルト 粘性中 しまり中 II類似
- 7 暗褐色 10YR3/4 シルト 粘性中 しまり中 IV>II



- 1 黒色土 10YR2/1 しまる 粘性ややあり
II下層と同じ
- 2 黒褐色土 10YR2/3 しまる 粘性ややあり
黄褐色粘土(10YR5/8)ブロックを含む



- 1 褐色土 10YR4/4 ロームと黒色土の混合 盛土下位の土
炭化材、焼土粒(φ~10mm)多量混 粘性やや強 しまり軟
- 2 暗褐色土 10YR3/3~10YR3/4 ローム主体 黒色土少量混 埋め戻しか
粘性中 しまり軟
- 3 黒褐色土 10YR2/2 腐植土主体 ねっとりしている ローム微量混
粘性強 しまり軟



図IV-318 P-40・41・51

埋め戻しと考えられる暗褐色土、下位が粘性の強い腐植土である。P-58・65・123～125とL字状の配列を形成することから、上部に存在していた住居跡の柱穴であった可能性がある。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-5類土器など268点、石器等23点が出土している。

時期：盛土との新旧関係から、縄文時代前期後半～中期前半の可能性がある。(芝田)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土のⅡ群B類土器。

Ⅱ群B-2類土器(3)：3は口縁部破片。不整綾絡文と沈線文が施されている。

Ⅱ群B-3類土器(1)：1は上げ底の底部で、体部に直前段反撚による縄文が施されている。

Ⅱ群B-5類土器(2・4～8)：2は上げ底の底部で、多軸絡条体の回転文が施されている。4は口縁部が肥厚するもの。肥厚帯および肥厚帯直下に2条一組の縄線文、上端に縄の圧痕文が施されている。5は無文地の口頸部に2条一組の縄線文、口唇に縄の圧痕文が施されている。6は小突起が認められる口縁部。器面に複節の撚糸文が施され、2段の横位のくぼみが加えられている。7は頸部破片。口頸部文様帯下端には縄線文を加えられた貼り付けが加えられ、無文地の頸部にボタン状の貼り付けと2条一組の縄線文が3条施されている。8は体部破片。細かな斜行縄文が施されている。胎土に多量の砂粒を含む。Ⅱ群B-3類土器の可能性もある。

P-52 (図IV-319)

位置：K 5区

平面形：楕円形

規模：(0.85) / (0.67) × 1.16 / 0.79 × 0.68m

確認・調査：H-45調査中に黄褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は下位が黒色土主体の埋戻し。H-45の床を壊して造られ、坑底はやや凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：坑底からⅢ群A類土器が3点、石器等が10点出土した。

時期：出土したⅢ群A類土器からみて、縄文時代中期前半と考えられる。(佐藤)

掲載遺物：(土器) 1は坑底出土でⅢ群A類土器。口縁波頂部の破片。口唇には縄の圧痕が加えられ、無文地の口頸部に縄の圧痕が加えられた貼付帯と4本一組の縄線文が加えられている。

(石器) 2は底面出土の石皿片。扁平礫の両平坦面に平らなすり面が作られている。安山岩製。

P-55 (図IV-320)

位置：M 4区

平面形：楕円形

規模：1.15 / 0.67 × 0.78 / 0.62 × 0.25m

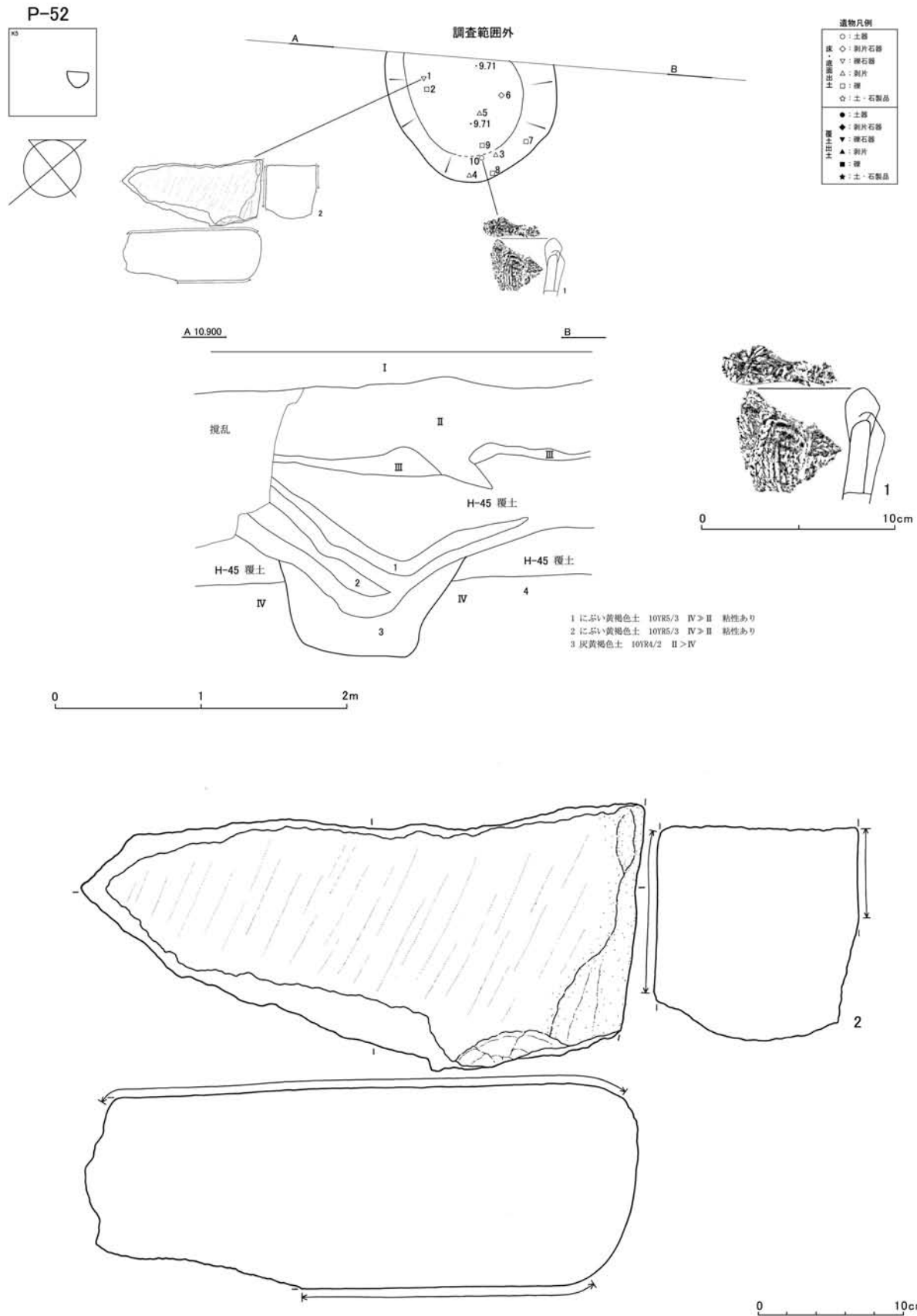
確認・調査：H-44のトレンチ調査・床面調査の際、南北セクション中にH-44覆土の落ち込みと褐色土の落ち込みを確認した。H-44によって上部が壊されている。坑底はⅣ層中に平坦に構築され、壁はやや開き気味に立ち上がる。

遺物出土状況：覆土の上～中位にかけてたたき石・すり石などがまとまって出土した。覆土からⅡ群B類土器1点、石器等11点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。(熊谷)

掲載遺物：(土器) 1はⅡ群B類土器の底部破片。覆土出土である。器面にナゲ調整が加えている。

(石器) 2・3は覆土出土。2はたたき石。扁平礫の平坦面に敲打痕があるもの。泥岩製。3はすり石で扁平打製石器。板状礫を打ち欠いて半円状に整形し、弦に幅の非常に狭い機能部を作出したものの。安山岩製。



図IV-319 P-52

P-58 (図IV-320)

位置：P 3 区

平面形：楕円形

規模：0.73 / 0.44×0.46 / 0.38×0.47m

確認・調査：P-69の調査中、IV層上面で暗褐色土の落ち込みを検出した。上部は削平されている。掘り込み面は盛土中～II下層と推測される。平面形は北側がやや窄まった楕円形。掘り込みの傾斜は、北側の坑口部が大きく開くが、下部はほぼ垂直である。坑底面は平坦で、東側が少しオーバーハングする。覆土は、上位がロームを少量含む腐植土、中位が腐植土とロームの互層、下位が粘性の強い腐植土である。北側でP-69の坑底部と重複している。P-51・65・123～125とL字状の配列を形成することから、上部に存在していた住居跡の柱穴であった可能性がある。

遺物出土状況：覆土からII群B-3類土器2点、礫2点が出土した。

時期：盛土との新旧関係から、縄文時代前期後半～中期前半の可能性ある。(芝田)

掲載遺物：(土器) 1は覆土出土のII群B類土器。II群B-3類土器の体部破片で、斜行縄文が施されている。胎土には多量の繊維を含んでいる。

P-59 (図IV-320)

位置：K10区

平面形：-

規模：1.06 / -×- / -× (0.28) m

特徴：IV層まで及ぶ道路敷設による攪乱層の除去中に、IV層中に焼土粒・炭化物を含む暗褐色土の落ち込みを確認した。南側の壁側の一部を検出したに過ぎず形状は不明である。

遺物出土状況：坑底から礫が出土しているがすべて自然礫である。

時期：不明

掲載遺物：掲載遺物なし

P-61 (図IV-320)

位置：P 2・3区

平面形：不整円形

規模：1.61 / 1.50×1.52 / 1.18×0.31m

確認・調査：III層上面で黒褐色土と褐色土が同心円状に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面は盛土中～II下層と推測される。平面形は北側が広がった不整円形。掘り込みの傾斜は、やや緩慢である。坑底面には段が見られ、南側が深くなっている。覆土は盛土を起源とする腐植土とロームの互層である。用途は不明である。

遺物出土状況：覆土1層より剥片などが集中して出土した。これらは上部の盛土よりの流れ込みと考えられる。覆土からII群B類土器2点、石器等161点が出土した。

時期：盛土との新旧関係から、縄文時代前期後半～中期前半の可能性ある。(芝田)

掲載遺物：掲載遺物なし

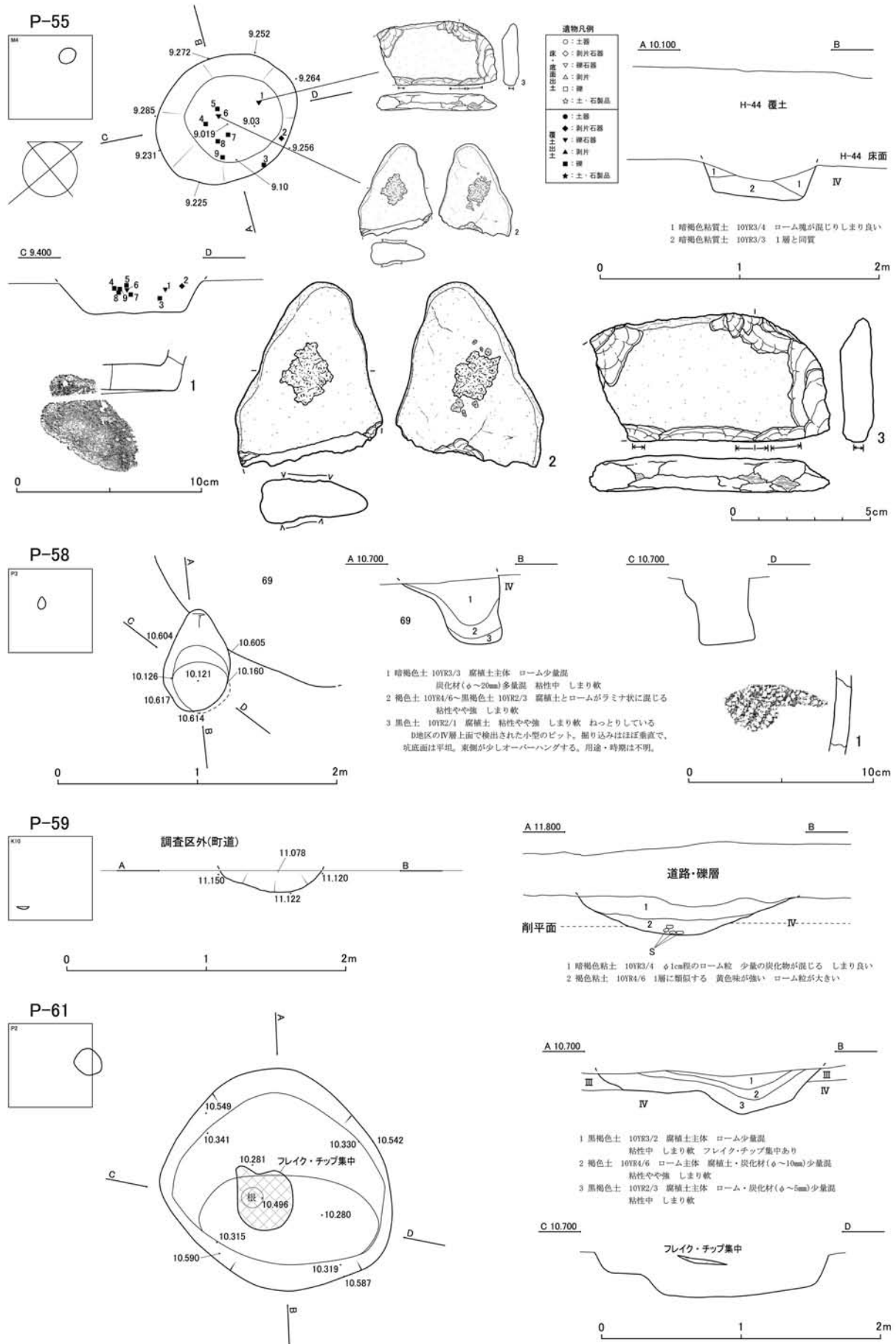
P-65 (図IV-321)

位置：O 3区

平面形：円形

規模：0.64 / 0.40×0.58 / 0.29×0.61m

確認・調査：P-69を調査中、III層上面で検出した小型の土坑。上部は削平されており、東側には重



図IV-320 P-55・58・59・61

機によるキャタピラ痕が残る。掘り込み面は盛土中～Ⅱ下層と推測される。掘り込みの傾斜はやや急である。断面は柱穴状で、東側へ傾いている。坑底面は平坦で、北側が少し高い。覆土は自然堆積で、盛土下位の土が流れ込んでいる。南側でP-69の坑底部と重複している。P-51・58・61・123～125とL字状の配列を形成することから、上部に存在していた住居跡の柱穴であった可能性がある。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B類土器4点、Ⅲ群A類土器7点、石器等7点が出土した。

時期：盛土との新旧関係から、縄文時代前期後半～中期前半の可能性がある。 (芝田)

掲載遺物：(土器) いずれも覆土出土である。1はⅡ群B類土器。Ⅱ群B-4類土器の口縁部破片。口唇に刺突文が加えられている。無文地の口頸部に縄線文が施されている。2はⅢ群A類土器の底部破片。斜行縄文と綾絡文が認められる。

P-68 (図IV-321)

位置：L 7区

平面形：不明

規模：(0.98) / (0.93) × (0.81) / (0.75) × 0.37m

確認・調査：トレンチ調査の時点で、坑底と壁を確認した。その際、掘り上げ土と誤認して坑底と壁の半分ほどを壊している。覆土はⅡ層とⅣ層を主体にした埋戻しである。坑底はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-4類土器が2点、石器等5点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器や、周辺の遺構・遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。 (佐藤)

掲載遺物：(土器) 1は覆土出土のⅡ群B-4類土器。体部の小破片で詳細は不明であるが単軸絡条体の回転文が施されている。

(石器) 2は覆土出土のたたき石。乳棒状礫の両端部に広い敲打痕のあるもの。珪岩製。

P-77 (図IV-321)

位置：N 4区

平面形：円形

規模：1.11 / 0.96 × 1.09 / 0.80 × 0.16m

確認・調査：Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。掘り込み面はⅡ下層と推測される。掘り込みの傾斜は緩やかである。断面は浅い皿状を呈する。坑底面はほぼ平坦であるが、南側が少し低い。覆土は自然堆積で、Ⅱ下層を起源とする腐植土が主体である。また、壁際にはⅡ・Ⅲ層からの崩落土が堆積している。用途は不明である。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B類土器5点、剥片17点が出土した。

時期：出土遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。 (芝田)

掲載遺物：掲載遺物なし

P-87 (図IV-321)

位置：L 6区

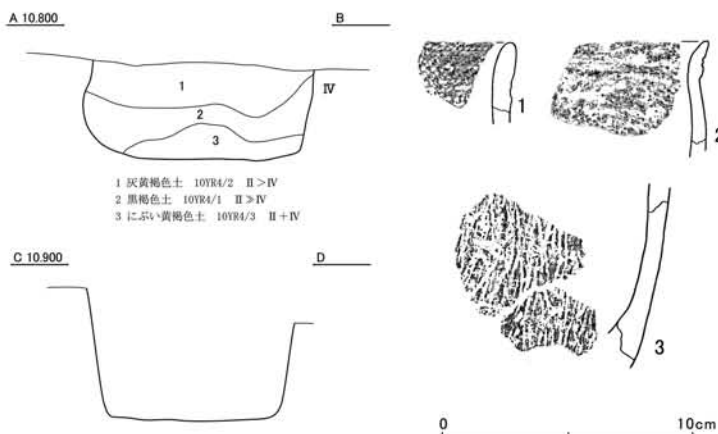
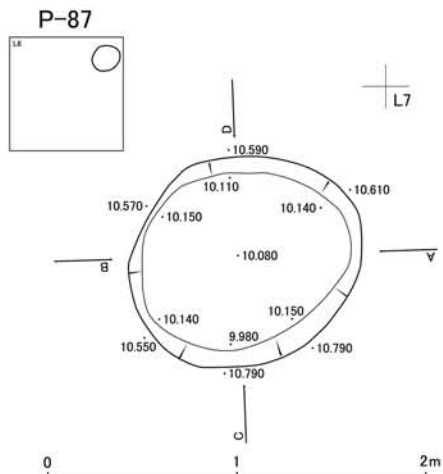
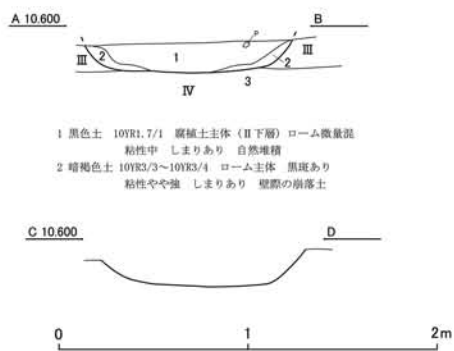
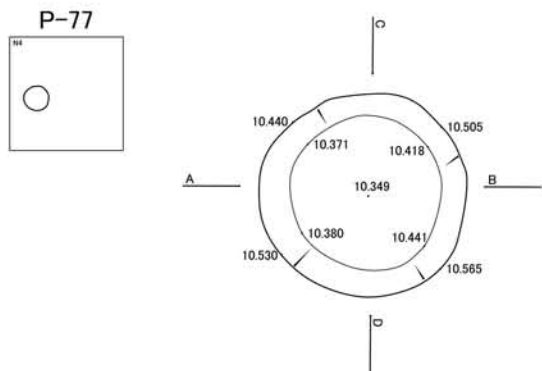
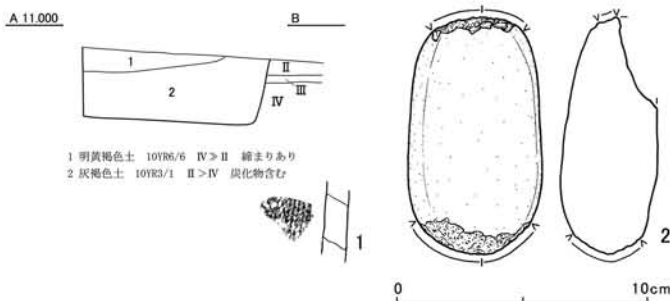
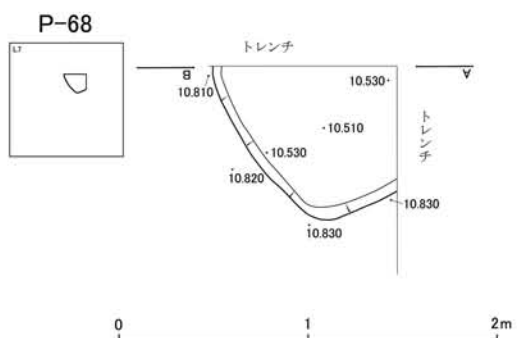
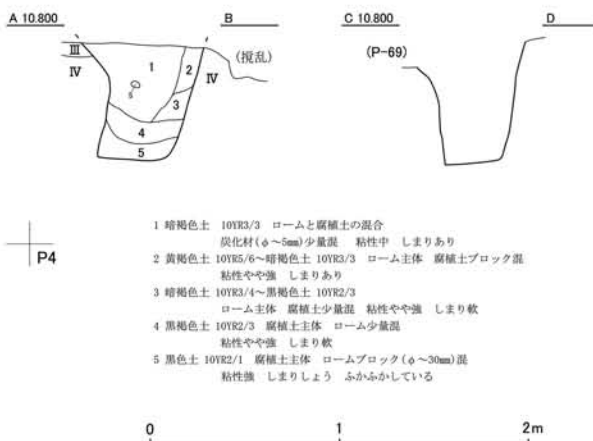
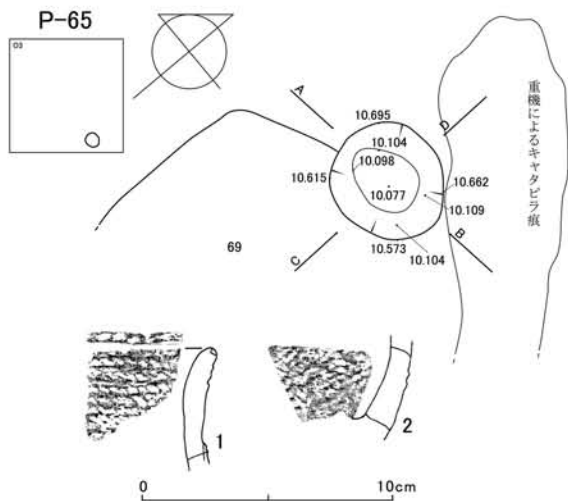
平面形：円形

規模：1.23 / 1.10 × 1.11 / 0.92 × 0.51m

確認・調査：Ⅳ層で灰黄褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はⅡ層とⅣ層の混入した埋戻しである。坑底はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況：覆土からⅡ群B-4類土器14点、石器7点が出土した。

時期：出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。 (佐藤)



図IV-321 P-65・68・77・87

掲載遺物:(土器) 1～3は覆土出土のⅡ群B-4類土器。1・2は口縁部破片。1は結束斜行縄文上に、2本一組の縄線文が2条加えられている。2は斜行縄文が施されている。3は底部破片。単軸絡条体の回転文が施されている。

P-96 (図IV-322)

位置: N 6 区

平面形: 楕円形

規模: 0.51 / 0.32×0.43 / (0.31) ×0.46m

確認・調査: 小型の土坑である。上部はⅣ層中位まで削平されている。本来は北から南へ降りる緩斜面上でⅡ層中より掘り込まれたと推測される。坑底面はほぼ平坦。覆土は自然堆積である。フラスコ状ピット (P-103) を壊している。形状が周辺のH-52・54・55の柱穴と類似することから、上部に住居跡が存在していた可能性がある。

遺物出土状況: 覆土からⅡ群B類土器8点、石器等22点が出土している。

時期: 出土遺物・周辺の遺構の出土遺物から、縄文時代前期後半～中期前半の可能性はある。

掲載遺物: 掲載遺物なし (芝田)

P-104 (図IV-322)

位置: K・L 8 区

平面形: 長円形

規模: 2.85 / 2.74×2.02 / 1.95×1.12m

確認・調査: Ⅳ層で重複する黄褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はⅡ層とⅣ層を主体にした埋戻しである。坑底はやや凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。西側の坑底と壁はP-98構築時に壊されている。

遺物出土状況: 覆土からⅡ群B類土器12点、石器等16点が出土した。

時期: 出土したⅡ群B類土器からみて、縄文時代前期後半と考えられる。 (佐藤)

掲載遺物:(土器) 1～4は覆土出土のⅡ群B土器である。1～3はⅡ群B-4類土器の体部破片。1は単軸絡条体の回転文、2は単軸絡条体第1A類の回転文、3は自縄自巻の回転文である。4はⅡ群B-5類土器の体部破片。多軸絡条体の回転文である。

(石器) 5は覆土出土のすり石。扁平な楕円礫の側縁に敲打によって幅の狭い面を作出し、すり面としている。安山岩製。

P-114 (図IV-322)

位置: L 5 区

平面形: 楕円形

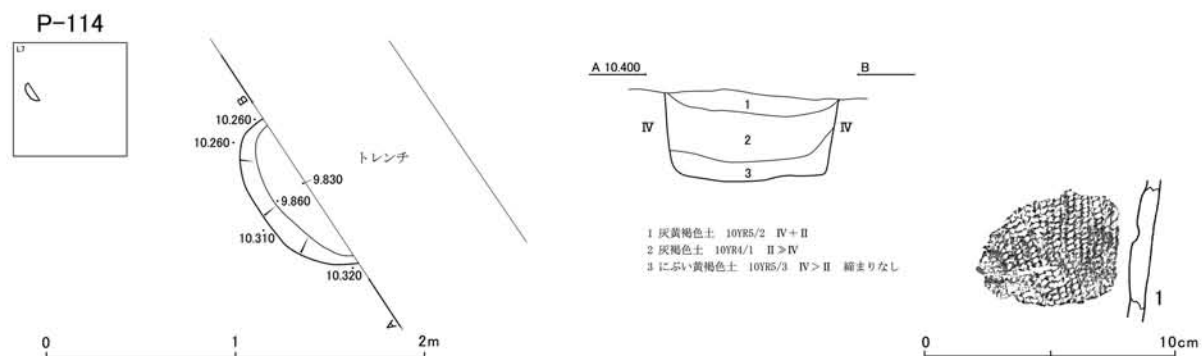
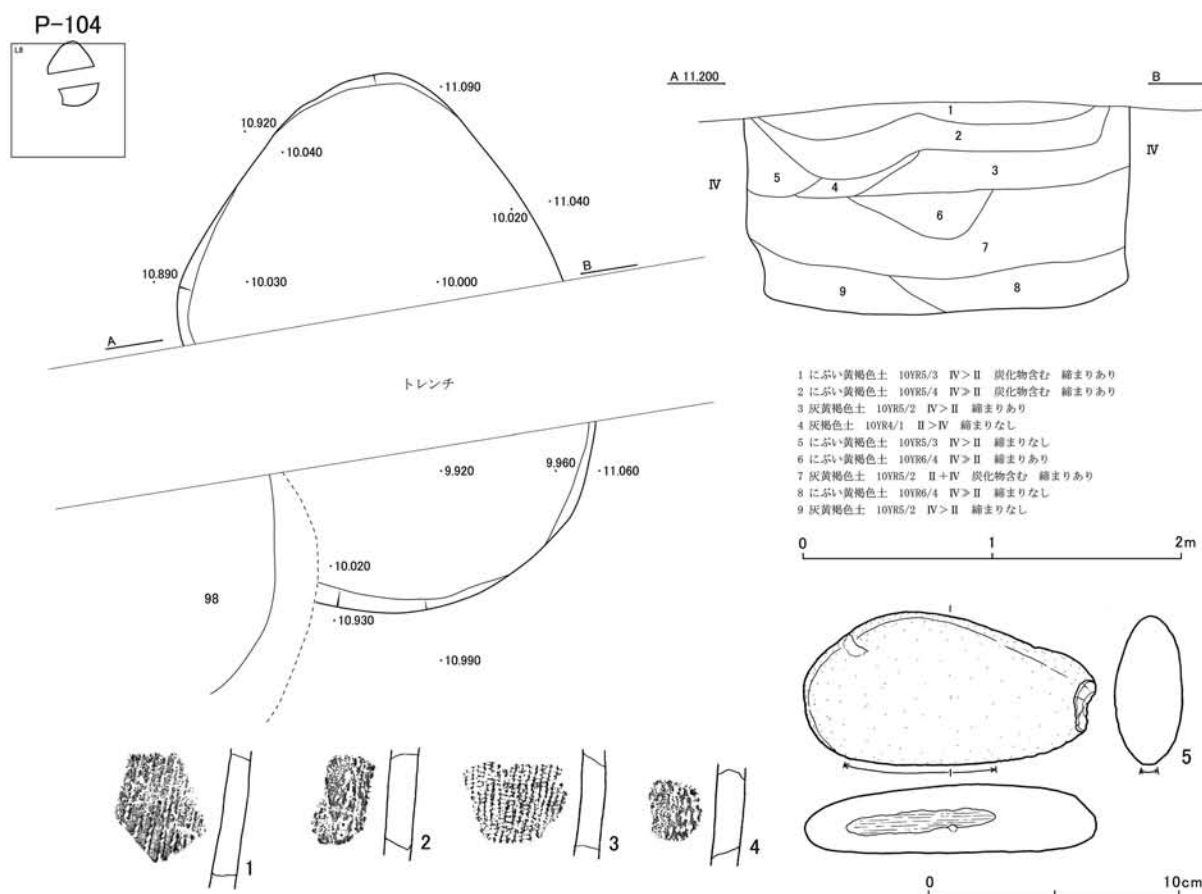
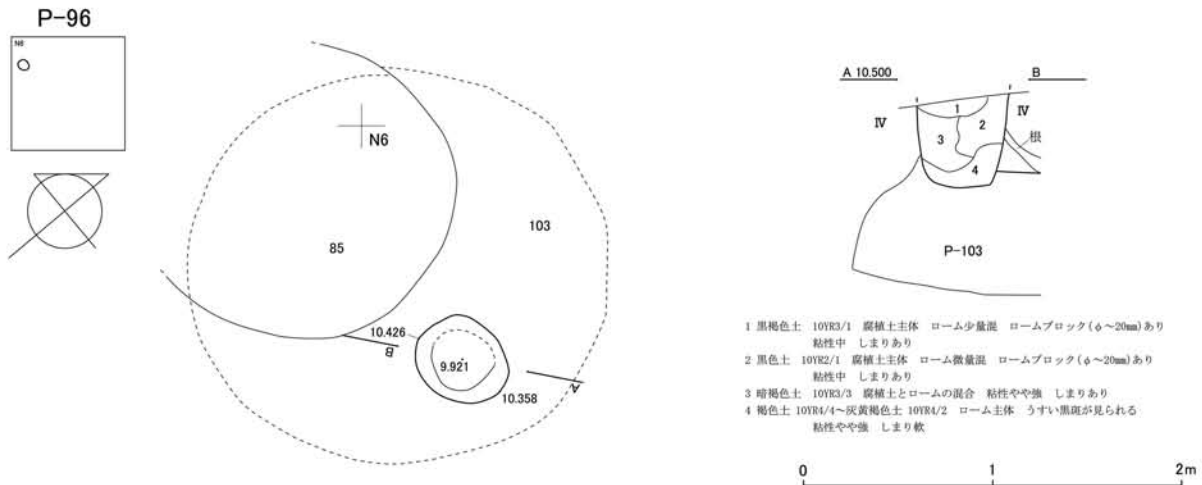
規模: 0.90 / 0.80×(0.26) / (0.14) ×0.49m

確認・調査: トレンチ調査の時点で、坑底と壁を確認した。その際、掘上土と誤認して坑底と壁の半分ほどを壊している。覆土はⅡ層とⅣ層を主体にした埋戻しである。坑底はやや凹凸があり、壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況: 覆土からⅡ群B-3類土器が1点、剥片1点が出土した。

時期: 出土したⅡ群B類土器や、周辺の遺構・遺物から、縄文時代前期後半と考えられる。 (佐藤)

掲載遺物:(土器) 1は覆土出土のⅡ群B-3類土器。縦走気味の縄文が施されたもの。胎土に多量の繊維を含み、器面調整は丁寧である。



図IV-322 P-96・104・114

P-250 (図IV-323)

位置：N・O94・95区

平面形：円形

規模：1.98 / 1.83×1.85 / 1.50×0.40m

確認・調査：Ⅲ層を調査中に、明黄褐色粘土のブロックを含む褐色土の半円形の落ち込みを確認した。Oラインで半截して調査したところ、平坦な底面と壁の立ち上がりを確認した。覆土は5～7層が自然に堆積したのち、4層が人為的に埋戻され、さらに1～3層が自然に堆積したと考えられる。まだ凹んでいたところに盛土遺構の最下層の堆積がなされたと考えられる。

遺物出土状況：覆土と盛土遺構最下層の層界から潰れた状態の土器や扁平打製石器などが出土した。遺物は覆土中からⅡ群B-3類土器など365点、石器等20点が出土している。

時期：出土遺物から縄文時代前期後半と考えられる。(酒井)

掲載遺物：(土器) 1～6は覆土出土のⅡ群B-3類土器である。

Ⅱ群B-3類土器(1～6)：1は上げ底の底部から開き気味に立ち上がり、上部でくびれをもち外反する器形である。器面に斜行縄文が施されている。2は口縁部を欠失する。上げ底の底部からほぼ直立気味に立ち上がる。器面に斜行縄文が施され、縦位の綾絡文が加えられている。底面に縄文が施されている。3は自縄自巻の原体による縄文が施された上げ底の底部。4は口縁部破片。口縁部に横位の単軸絡条体の回転による撚糸文が施されている。5は体部破片。単軸絡条体第6類の回転による撚糸文が施されている。6は口頸部破片。口唇直下と幅の狭い口頸部に縄線文が加えられている。体部に斜行縄文が施されている。2はⅡ群B-5類土器の可能性もある。

(石器) 7はすり石で扁平打製石器。扁平礫の周縁を打ち欠いて半円状に整形し、弦の部分に幅の非常に狭い機能部を作出したもの。

(3) フラスコ状ピットの調査

1. 概要 (図IV-324)

フラスコ状ピットは63基検出された。3ラインより北東側に分布が認められる。坑底径が2.5m前後の大型のもの26基、坑底径が2.0m前後の小型のもの35基、規模不明のもの2基が検出された。大型のものは調査区北東側、6ラインより北東側から多く検出されている。北東側に行くに従って上部は削平され、JR木古内き電区分所前周辺では上部の削平が著しく、坑底のみ検出されたものもある。坑底の小ピットをもつもの20基、坑底の小ピットをもたないもの6基である。小型のものは3～7ライン間のH-44・H-55内外及び周辺から多く検出されている。坑底の小ピットをもつもの13基、坑底の小ピットをもたないもの22基である。

2. フラスコ状ピット

P-16 (図IV-325)

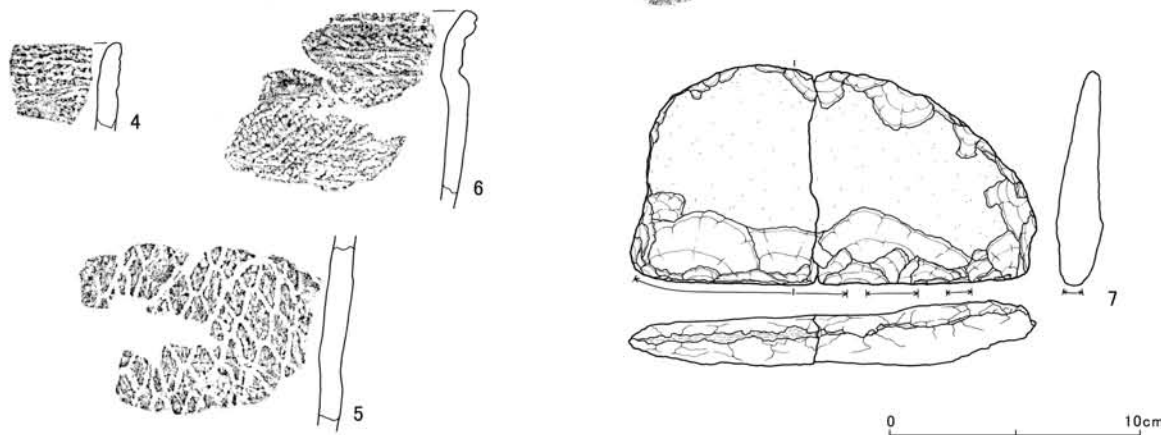
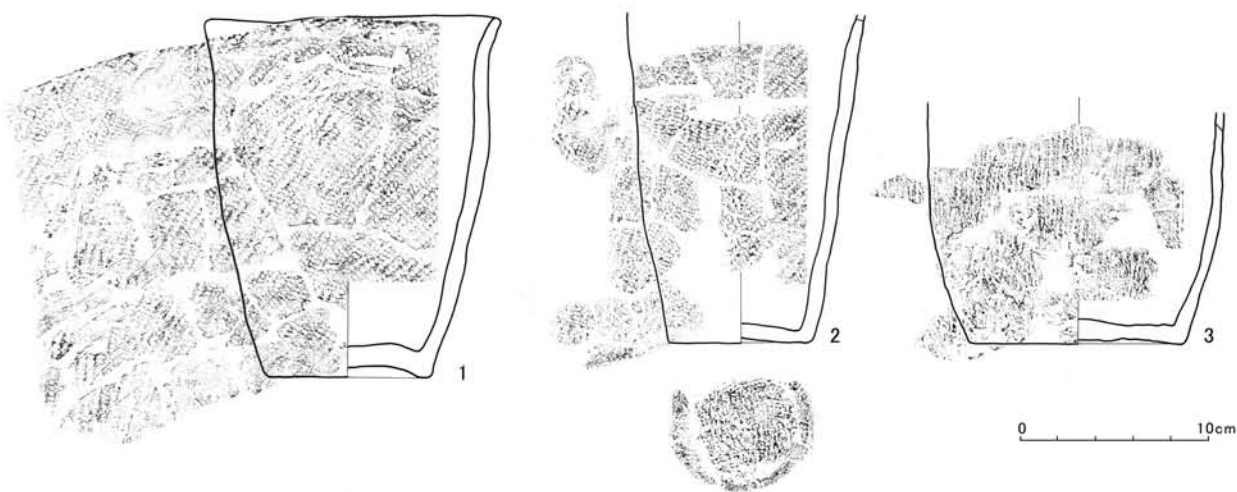
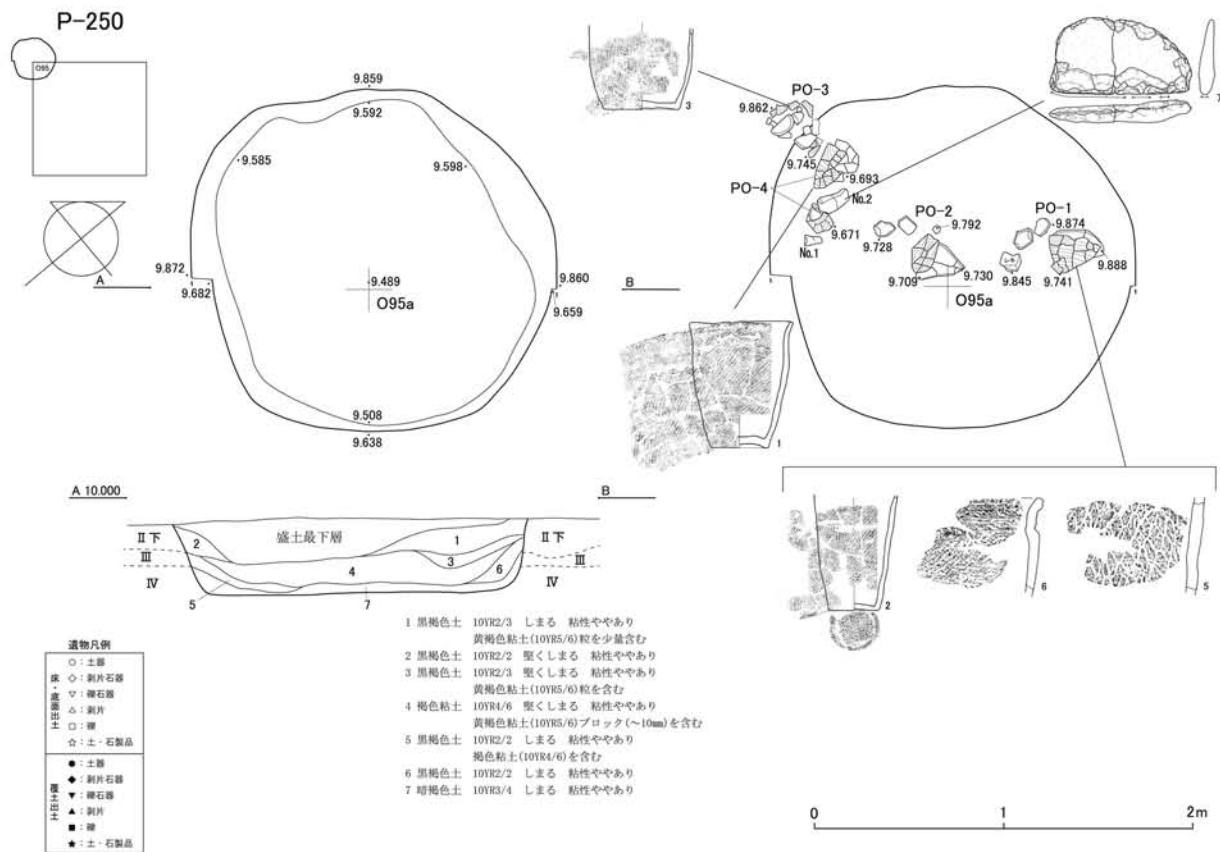
位置：N88・89区

坑底面形：楕円形

規模：- / 1.12×- / 0.91×0.88m

確認・調査：H-16の調査中に褐色土の落ち込みを確認した。住居の覆土中位から掘り込んでいる。半截して調査を行い、フラスコ状ピットであることを確認した。覆土は周辺の盛土の流れ込みである。

遺物出土状況：坑底から石皿など3点、覆土からⅡ群B類土器が7点、石器はスクレイパー・石錐・すり石など115点が出土した。その他、珧状耳飾り片が出土している。



図IV-323 P-250

報告書抄録

ふりがな	きこないちょう おおひらいせき(2) いこうへん							
書名	木古内町 大平遺跡(2) -遺構編-							
副書名	北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	なし							
シリーズ名	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第321集							
編著者名	中山昭大・鈴木宏行・芝田直人・酒井秀治・熊谷仁志・佐藤和雄・立川トマス							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 江別市西野幌685-1 TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238 E-mail mail@domaibun.or.jp ホームページ http://www.domaibun.or.jp							
発行機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
発行年月日	平成28(西暦2016)年3月25日							
ふりがな 収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおひらいせき 大平遺跡	かみいそぐんき こないちやう 上磯郡木古内町 あざおおひら 宇大平63	01334	B-05-07	MO杭 41度41分 26.55157秒	140度26分 52.06337秒	20100506 ～20101105 20110509 ～20111111	4,375㎡	北海道新幹線 建設に伴う 記録保存
				M90杭 41度41分 25.30961秒	140度26分 50.67402秒			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な報告遺構			主な遺物	
大平遺跡	集落跡	縄文時代 前期後半・後期前葉 擦文文化期		竪穴住居跡45軒、土坑50基、 フラスコ状ピット63基、Tピット2基、 柱穴状ピット36基			土器 石器等	
要約	<p>遺跡はJR木古内駅から南西へ約1.8km、木古内川と建宍川に挟まれた平坦な低位海岸段丘上に立地し、標高は15～20mである。</p> <p>遺跡の調査は平成21年度に続いて平成22・23年度に行われ、今回の報告が2冊目の報告書となる。本書では遺構編として竪穴住居跡45軒、土坑50基、フラスコ状土坑63基、Tピット2基、柱穴状ピット36基の報告を行っている。</p> <p>竪穴住居跡は擦文文化期6軒、縄文後期前葉1軒、中期初頭1軒、前期後半37軒である。擦文文化期は8世紀中葉5軒、9世紀中葉1軒である。5軒でカマドが検出されている。縄文後期前葉のものは石囲い炉が検出されている。前期後半は円筒土器下層d2式期が22軒と多い。特徴としてはベンチ構造のあるもの13軒、葺土構造が確認できるもの7軒、覆土中に多量の遺物が出土するもの10軒などがみられる。</p> <p>土坑は異形石槍が出土したものが1基検出されている。フラスコ状ピットは前期後半～中期初頭である。調査範囲北東側に集中して検出されている。底面径が1～2m程の小型のものと、2.5～3m程の大型のものがある。坑底に小ピットを伴うものが33基確認されている。Tピットは溝状のものが2基検出されている。</p> <p>報告遺構から出土した遺物は土器210,831点、石器等153,805点、合計364,636点である。土器はⅡ群B類土器が大半を占め、Ⅱ群B-3類土器が特に多い。石器等はスクレイパー、たたき石、すり石が多く出土している。土製品では有孔土製円板、焼成粘土塊が出土している。石製品では異形石器、異形石槍、垂飾、滑石製珠状耳飾り、線刻礫、軽石製石製品(北海道式石冠状、すり石状など)が出土している。</p>							

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登録番号、経緯度は世界測地系による。

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第321集

き こ ない ちょう おお ひら
木古内町 大平遺跡(2)

—遺構編—

—北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書—

第1分冊(本文編)

平成28(2016)年3月25日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
URL <http://www.domaibun.or.jp>
E-mail mail@domaibun.or.jp

印 刷 三浦印刷株式会社
〒064-0809 札幌市中央区南9条西6丁目
TEL (011) 511-6191 FAX (011) 512-6041

